

栃木県埋蔵文化財調査報告第 388 集

刈沼遺跡・刈沼向原遺跡

—宇都宮テクノポリスセンター地区開発に伴う埋蔵文化財発掘調査—

(第 1 分冊)

2017. 3

栃 木 県 教 育 委 員 会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

かりぬまいせき かりぬまむかいはらいせき
刈沼遺跡・刈沼向原遺跡

—宇都宮テクノポリスセンター地区開発に伴う埋蔵文化財発掘調査—

(第1分冊)

2017. 3

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団



序

刈沼遺跡・刈沼向原遺跡は、栃木県の県央部、宇都宮市東端部に位置しています。宇都宮市は県庁所在地であり、関東平野の中北部に位置しています。市内には鬼怒川、田川、姿川などの河川が南流しており、古くから豊富な水量を利用した農業が盛んに行われています。最近では市の東部に大規模な内陸型工業団地が開発され、昭和 59 年には関東地方では唯一「テクノポリス」に地域指定されるなど工業都市としての顔を持つようになり、国内でも有数の地域商工業都市として発展を遂げております。

この度、独立行政法人都市再生機構が実施する「宇都宮テクノポリスセンター地区」の土地区画整理事業に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

刈沼遺跡・刈沼向原遺跡の発掘調査では縄文時代後晩期の拠点的な集落跡や古墳時代の集落跡及び方形周溝墓などが確認され、特に縄文時代後期から晩期の良好な資料を得ることができました。

本報告書は、刈沼遺跡・刈沼向原遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました独立行政法人都市再生機構、宇都宮市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成 29 年 3 月

栃木県教育委員会

教育長 宇田 貞夫

例 言

- 1 本書は独立行政法人都市再生機構（旧都市基盤整備公団）による宇都宮テクノポリスセンター地区土地
区画整理事業に伴い、発掘調査が実施された刈沼遺跡・刈沼向原遺跡（宇都宮市刈沼町 234 番地他）の発
掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は独立行政法人都市再生機構から委託を受け、平成 9 年度～平成 22 年度については宇都宮市教
育委員会が実施した。また平成 23 年度～平成 28 年度の整理・報告書作成作業は同機構から委託を受け、
公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本書の編集は公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターの江原英が行った。編集に当たっ
ては、栃木県教育委員会、宇都宮市教育委員会の他、上野修一、大工原豊、長田友也の各氏にご指導をい
ただいた。また、石器実測の一部について、森嶋秀一氏、芹澤清八氏にご協力をいただいた。

- 4 刈沼遺跡・刈沼向原遺跡に関わる発掘調査及び整理報告書作成作業は以下の担当者により実施された。

発掘調査 宇都宮市教育委員会

平成 9 年度 大塚雅之・高野欣哉 平成 9 年 5 月 26 日～平成 9 年 9 月 30 日

平成 10 年度 大塚雅之・高野欣哉 平成 10 年 5 月 13 日～平成 11 年 3 月 19 日

平成 11 年度 大塚雅之・高野欣哉 平成 11 年 6 月 1 日～平成 11 年 10 月 31 日

平成 12 年度 大塚雅之・高野欣哉 平成 12 年 5 月 9 日～平成 13 年 3 月 15 日

平成 19 年度 須田浩太郎 平成 19 年 11 月 28 日～12 月 27 日、平成 20 年 2 月 21 日～3 月 12 日

平成 20 年度 須田浩太郎 平成 20 年 6 月 2 日～7 月 25 日、平成 21 年 2 月 10 日～2 月 24 日

平成 21 年度 今平利幸 平成 22 年 7 月 22 日～8 月 24 日、平成 23 年 2 月 1 日～2 月 28 日

整理作業 宇都宮市教育委員会

平成 13 年度～平成 22 年度に実施。

整理報告書作成作業 公益法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター

平成 23 年度～平成 28 年度 田代隆 江原英 初山孝行 藤田典夫

- 5 発掘調査から報告書作成に至るまで下記に委託業務を行った。

株式会社パスコ、株式会社フジテクノ、第一測工株式会社、関東インフォメーションマイクロ株式会社、
株式会社パレオ・ラボ、パリオ・サーヴェイ株式会社、小川忠博、下野印刷株式会社

- 6 発掘調査・整理作業の協力者は以下のとおりである。

(発掘調査)

阿久津宏、阿久津芳一、伊藤啓子、岩本クメ、宇田川美江、近江稔充、近江操、大塩晴美、梶山カヲル、
加藤誠吾、刈部ハキ、河上智晴、川田芳子、日下邊通子、小池徳治、小池幸子、小林久、小林真希子、
斉藤盛夫、酒井利典、坂本一好、坂本トシエ、坂本尹子、菅谷茂、鈴木貴、関明美、高田悦子、田崎洋子、
田中大亮、塚田浩平、直井邦夫、直井竣亮、直井マスエ、中村雅子、仲山正夫、長谷川智彦、半田弘、
檜山一雄、桧山ミイ、福島千代子、藤田信雄、藤原明美、古澤武男、古澤千代、古澤マツノ、増渕アイ子、
増渕勝二、増渕ノブ、増渕教朗、村上アイ、森島時枝、横堀きみ子、阿久津和宏、大宮司克己、菱沼朋伸、
渡辺雅也

(整理作業)

石川篤子, 上野とも子, 高橋恵子, 山形浩子, 赤羽直美, 鈴木まち代, 田中朱美, 佐々木啓子, 生出栄子, 浜野真知子, 松本れい子, 河上幸子, 黒須博子, 渡辺恵美子, 篠原かほ, 須藤公子, 酒井秀実, 池田ひとみ, 橋本麻美, 白井美智子, 赤羽根潤子, 石田静枝, 高久玲子, 田村範子, 坪山さわ香, 根本明美, 深沢恵, 和田恵美, 松本美紗子, 熊谷早苗, 武田智子, 生内千春, 佐久間京子, 長道子, 鈴木知子, 君島みどり

- 7 遺跡の概要は一部公表されているが、本書をもって正式報告とする。
- 8 本遺跡の出土遺物、実測図、図版等は宇都宮市教育委員会で保管している。
- 9 遺構の略号は竪穴住居跡：SI、土坑：SK、溝：SD、不明遺構：SXとした。本書では原則として発掘調査時に発番された遺構番号を踏襲した。
- 10 遺跡の測量は日本測地系で実施した。世界測地系での数値は表示していない。テクノポリスセンター地区の座標値は第3図地形と遺跡範囲に、刈沼遺跡・刈沼向原遺跡の座標値は第5図に示した。また、テクノポリスセンター地区では開発区全体にグリッドを設定した。このうち刈沼遺跡・刈沼向原遺跡に関わる部分では東西方向がア0～ウ3まで、南北方向がF3～K2まで、それぞれ10mのグリッドを設定した。遺構図や遺物一覧表等ではイ4J0などの表記がされているが、これは東西南北のグリッド番号を組み合わせた表記である。なお刈沼遺跡第1次調査の当初はグリッド表記が100mずれて付されており、本書中では訂正しているものの(イ4K0→イ4J0)、原図や遺物の注記は旧グリッドでの表記のままとなっている点、注意されたい。
なお刈沼遺跡の略号はUTK、刈沼向原遺跡の略号はUTKMである。
- 11 遺構の縮尺は1/60を基本とし、遺構・図面によって適宜1/40～1/160に使い分けている。
遺物の縮尺は、原則として土器破片1/3、復元個体1/3～1/6、石器は2/3～1/6で表示した。
- 12 遺物番号は掲載図番号で管理しているが、未掲載遺物をはじめ整理当初に付した仮番号のままの例や旧グリッド表記のまま収納している遺物も多い。
- 13 遺物の色調は「新版標準土色帖」(財)日本色彩研究所を参考として記述している。
- 14 遺構・遺物図版中のスクリーントーンは以下を示す。



第1分冊 目次

序

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	4
第3節 調査の方法	7
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 刈沼遺跡第1次調査区の遺構と遺物	13
第1節 刈沼遺跡第1次調査の概要	
第2節 住居跡	25
第3節 ピット群	205
第4節 土坑	243
第5節 溝	263
第6節 包含層出土土器	278
第7節 土製品	296
第8節 石器	319
第9節 石製品	389
第10節 縄紋時代以降の遺物及び補足分	406
(以下第2分冊)	
(別添DVD)	
遺物観察表	

挿図目次

第 1 図	宇都宮テクノポリスセンター地区の位置	1	第 56 図	SI02 出土土器 (18)[イ 6J1]	68
第 2 図	宇都宮テクノポリスセンター地区の開発区	2	第 57 図	SI02 出土土器 (19)[イ 6J1]	69
第 3 図	地形と遺跡範囲	3	第 58 図	SI02 出土土器 (20)[イ 6J1]	70
第 4 図	刈沼遺跡・刈沼向原遺跡 調査区の位置	5	第 59 図	SI02 出土土器 (21)[イ 6J1]	71
第 5 図	刈沼遺跡・刈沼向原遺跡 全体図	6	第 60 図	SI02 出土土器 (22)[イ 6J1]	72
第 6 図	栃木県地形図	8	第 61 図	SI03(1)	74
第 7 図	周辺の遺跡	10	第 62 図	SI03(2)	75
第 8 図	刈沼遺跡第 1 次・2 次全体図	15-16	第 63 図	SI03(3)	76
第 9 図	刈沼遺跡第 1 次調査区全体図	17-18	第 64 図	SI03(4)	77
第 10 図	第 1 次調査区基本土層 (1)	19	第 65 図	SI03 出土土器 (1)	78
第 11 図	第 1 次調査基本土層 (2)	20	第 66 図	SI03 出土土器 (2)	79
第 12 図	第 1 次調査基本土層 (3)	21	第 67 図	SI03 出土土器 (3)	80
第 13 図	第 1 次調査基本土層 (4)	22	第 68 図	SI03 出土土器 (4)	81
第 14 図	盛土遺構調査区位置図	23	第 69 図	SI03 出土土器 (5)	82
第 15 図	盛土遺構土層断面図	24	第 70 図	SI03 出土土器 (6)	83
第 16 図	SI01(1)	26	第 71 図	SI03 出土土器 (7)	84
第 17 図	SI01(2)	27	第 72 図	SI03 出土土器 (8)	85
第 18 図	SI01 出土土器 (1)	28	第 73 図	SI03 出土土器 (9)	86
第 19 図	SI01 出土土器 (2)	29	第 74 図	SI03 出土土器 (10)[イ 116・イ 117]	87
第 20 図	SI01 出土土器 (3)	30	第 75 図	SI03 出土土器 (11)[イ 116]	88
第 21 図	SI01 出土土器 (4)	31	第 76 図	SI03 出土土器 (12)[イ 116]	89
第 22 図	SI01 出土土器 (5)	32	第 77 図	SI03 出土土器 (13)[イ 116]	90
第 23 図	SI01 出土土器 (6)	33	第 78 図	SI03 出土土器 (14)[イ 116]	91
第 24 図	SI01 出土土器 (7)	34	第 79 図	SI03 出土土器 (15)[イ 117]	92
第 25 図	SI01 出土土器 (8)	35	第 80 図	SI03 出土土器 (16)[イ 117]	93
第 26 図	SI01 出土土器 (9)	36	第 81 図	SI04(1)	95
第 27 図	SI01 出土土器 (10)	37	第 82 図	SI04(2)	96
第 28 図	SI01 出土土器 (11)	38	第 83 図	SI04 出土土器 (1)	97
第 29 図	SI01 出土土器 (12)	39	第 84 図	SI04 出土土器 (2)[イ 014]	98
第 30 図	SI01 出土土器 (13)	40	第 85 図	SI04 出土土器 (3)[イ 014]	99
第 31 図	SI01 出土土器 (14)[イ 5I9]	41	第 86 図	SI05(1)	100
第 32 図	SI01 出土土器 (15)[イ 5I9]	42	第 87 図	SI05(2)	101
第 33 図	SI01 出土土器 (16)[イ 5I9]	43	第 88 図	SI05(3)	102
第 34 図	SI01 出土土器 (17)[イ 5I9]	44	第 89 図	SI05 出土土器 (1)	103
第 35 図	SI01 出土土器 (18)[イ 5I9]	45	第 90 図	SI05 出土土器 (2)	104
第 36 図	SI01 出土土器 (19)[イ 5I9]	46	第 91 図	SI05 出土土器 (3)	105
第 37 図	SI02(1)	48	第 92 図	SI05 出土土器 (4)[イ 9I7・イ 0I7]	106
第 38 図	SI02(2)	49	第 93 図	SI05 出土土器 (5)[イ 0I7]	107
第 39 図	SI01 出土土器 (1)	50	第 94 図	SI06(1)	108
第 40 図	SI01 出土土器 (2)	51	第 95 図	SI06(2)	109
第 41 図	SI01 出土土器 (3)	52	第 96 図	SI06(3)	110
第 42 図	SI01 出土土器 (4)	53	第 97 図	SI06 出土土器 (1)	112
第 43 図	SI01 出土土器 (5)	54	第 98 図	SI06 出土土器 (2)	113
第 44 図	SI01 出土土器 (6)	55	第 99 図	SI06 出土土器 (3)	114
第 45 図	SI02 出土土器 (7)[イ 6J1]	56	第 100 図	SI06 出土土器 (4)[イ 2I5]	115
第 46 図	SI02 出土土器 (8)[イ 6J1]	57	第 101 図	SI06 出土土器 (5)[イ 2I5・イ 3I5]	116
第 47 図	SI02 出土土器 (9)[イ 6J1]	58	第 102 図	SI06 出土土器 (6)[イ 3I5]	117
第 48 図	SI02 出土土器 (10)[イ 6J1]	60	第 103 図	SI06 出土土器 (7)[イ 3I5]	118
第 49 図	SI02 出土土器 (11)[イ 6J1]	61	第 104 図	SI06 出土土器 (8)[イ 2I6]	119
第 50 図	SI02 出土土器 (12)[イ 6J1]	62	第 105 図	SI06 出土土器 (9)[イ 3I6]	120
第 51 図	SI02 出土土器 (13)[イ 6J1]	63	第 106 図	SI07(1)	122
第 52 図	SI02 出土土器 (14)[イ 6J1]	64	第 107 図	SI07(2)	123
第 53 図	SI02 出土土器 (15)[イ 6J1]	65	第 108 図	SI07(3)	124
第 54 図	SI02 出土土器 (16)[イ 6J1]	66	第 109 図	SI07 出土土器 (1)	125
第 55 図	SI02 出土土器 (17)[イ 6J1]	67	第 110 図	SI07 出土土器 (2)[イ 4I5]	126

第 111 図	SI07 出土土器 (3)[イ 4I5]	127	第 170 図	SI14 出土土器 (24)[イ 6J0]	198
第 112 図	SI07 出土土器 (4) [イ 4I5]	128	第 171 図	SI14 出土土器 (25)[イ 6J0]	199
第 113 図	SI08(1)	130	第 172 図	SI14 出土土器 (26)[イ 6J0]	200
第 114 図	SI08(2)	131	第 173 図	SI14 出土土器 (27)[イ 6J0]	201
第 115 図	SI08 出土土器 (1)	132	第 174 図	SI14 出土土器 (28)[イ 6J0]	202
第 116 図	SI08 出土土器 (2)	133	第 175 図	SI15	204
第 117 図	SI08 出土土器 (3)[イ 5I6]	134	第 176 図	ピット群 1(1)	206
第 118 図	SI09	136	第 177 図	ピット群 1(2)	207
第 119 図	SI09 出土土器 (1)	137	第 178 図	ピット群 2	208
第 120 図	SI09 出土土器 (2)[イ 5I7]	138	第 179 図	ピット群 2・3 出土土器 [イ 4I8]	209
第 121 図	SI09 出土土器 (3)[イ 5I7]	139	第 180 図	ピット群 3	210
第 122 図	SI10(1)	140	第 181 図	ピット群 3 出土土器 [イ 5I8]	211
第 123 図	SI10(2)	141	第 182 図	ピット群 4(1)	212
第 124 図	SI10 出土土器 (1)[イ 2I7]	142	第 183 図	ピット群 4(2)	213
第 125 図	SI10 出土土器 (2)[イ 2I7]	143	第 184 図	ピット群 4 出土土器 (1)[イ 4J0]	215
第 126 図	SI10 出土土器 (3)[イ 3I7]	144	第 185 図	ピット群 4 出土土器 (2)[イ 4J0]	217
第 127 図	SI11(1)	146	第 186 図	ピット群 4 出土土器 (3) [イ 4J0]	219
第 128 図	SI11(2)	147	第 187 図	ピット群 4 出土土器 (4) [イ 4J0]	220
第 129 図	SI11 出土土器 (1)[イ 4I6・イ 4I7]	148	第 188 図	ピット群 4 出土土器 (5) [イ 4J1]	221
第 130 図	SI11 出土土器 (2)[イ 4I6]	149	第 189 図	ピット群 4 出土土器 (6) [イ 4J1]	222
第 131 図	SI11 出土土器 (3)[イ 4I7]	150	第 190 図	ピット群 4 出土土器 (7) [イ 4J1]	223
第 132 図	SI12	152	第 191 図	ピット群 4 出土土器 (8) [イ 4J1]	224
第 133 図	SI12 出土土器 (1)[イ 6I7]	153	第 192 図	ピット群 4 出土土器 (9) [イ 4J1]	225
第 134 図	SI12 出土土器 (2)[イ 6I7]	154	第 193 図	ピット群 4 出土土器 (10) [イ 4J1]	226
第 135 図	SI12 出土土器 (3)[イ 6I7]	155	第 194 図	ピット群 4 出土土器 (11) [イ 4J1]	227
第 136 図	SI12 出土土器 (4)[イ 6I7]	156	第 195 図	ピット群 4 出土土器 (12) [イ 4J1]	228
第 137 図	SI12 出土土器 (5)[イ 6I7]	157	第 196 図	ピット群 4 出土土器 (13) [イ 4J1]	229
第 138 図	SI12 出土土器 (6)[イ 6I7]	158	第 197 図	ピット群 4 出土土器 (14) [イ 4J1]	230
第 139 図	SI12 出土土器 (7)[イ 6I7]	159	第 198 図	ピット群 4・5 出土土器 [イ 5J1・イ 5J2]	231
第 140 図	SI12 出土土器 (8)[イ 6I7]	160	第 199 図	ピット群 5(1)	232
第 141 図	SI12 出土土器 (9)[イ 6I7]	161	第 200 図	ピット群 5(2)	233
第 142 図	SI12 出土土器 (10)[イ 6I7]	162	第 201 図	ピット群 6	235
第 143 図	SI12 出土土器 (11)[イ 6I7]	163	第 202 図	ピット群 6 出土土器 (1)[イ 4J2]	236
第 144 図	SI12 出土土器 (12)[イ 6I7]	164	第 203 図	ピット群 6 出土土器 (2)[イ 4J2]	237
第 145 図	SI14(1)	166	第 204 図	ピット群 6 出土土器 (3)[イ 4J2]	239
第 146 図	SI14(2)	167	第 205 図	ピット群 6 出土土器 (4)[イ 4J2・イ 4J3]	240
第 147 図	SI14 出土土器 (1)[イ 6I9]	169	第 206 図	ピット群 7	242
第 148 図	SI14 出土土器 (2)[イ 6I9]	171	第 207 図	刈沼遺跡第 1 次遺構区割り図 (1)	244
第 149 図	SI14 出土土器 (3)[イ 6I9]	173	第 208 図	刈沼遺跡第 1 次遺構区割り図 (2)	245
第 150 図	SI14 出土土器 (4)[イ 6I9]	174	第 209 図	SK01-06・35B	246
第 151 図	SI14 出土土器 (5)[イ 6I9]	175	第 210 図	SK32・62	246
第 152 図	SI14 出土土器 (6)[イ 6I9]	176	第 211 図	SK07・08・12・13a・13b	247
第 153 図	SI14 出土土器 (7)[イ 6I9]	177	第 212 図	SK09-11・19	249
第 154 図	SI14 出土土器 (8)[イ 6I9]	178	第 213 図	SK27-30	249
第 155 図	SI14 出土土器 (9)[イ 6I9]	179	第 214 図	SK14・18・33・34	250
第 156 図	SI14 出土土器 (10)[イ 6J0]	181	第 215 図	SK15・16	251
第 157 図	SI14 出土土器 (11)[イ 6J0]	183	第 216 図	SK59・60	251
第 158 図	SI14 出土土器 (12)[イ 6J0]	184	第 217 図	SK17・20-23	253
第 159 図	SI14 出土土器 (13)[イ 6J0]	185	第 218 図	SK24・25	254
第 160 図	SI14 出土土器 (14)[イ 6J0]	187	第 219 図	SK53・55・56	254
第 161 図	SI14 出土土器 (15)[イ 6J0]	188	第 220 図	SK26a・26b・26c	255
第 162 図	SI14 出土土器 (16)[イ 6J0]	189	第 221 図	SK35A・36B	257
第 163 図	SI14 出土土器 (17)[イ 6J0]	190	第 222 図	SK36A・37A	257
第 164 図	SI14 出土土器 (18)[イ 6J0]	191	第 223 図	SK46・47	258
第 165 図	SI14 出土土器 (19)[イ 6J0]	193	第 224 図	SK63・64	258
第 166 図	SI14 出土土器 (20)[イ 6J0]	194	第 225 図	SK51・52・58・61	259
第 167 図	SI14 出土土器 (21)[イ 6J0]	195	第 226 図	SK37B・38・43・48・49・50・54・57	260
第 168 図	SI14 出土土器 (22)[イ 6J0]	196	第 227 図	土坑出土土器 (1)	261
第 169 図	SI14 出土土器 (23)[イ 6J0]	197	第 228 図	土坑出土土器 (2)	262

第 229 図	SD01・05・14	264	第 287 図	石錘 (2)	332
第 230 図	SD01・03・04・06・07	265	第 288 図	石錘 (3)	333
第 231 図	SD01	266	第 289 図	石錘 (4)	334
第 232 図	SD02A・02B	267	第 290 図	石錘 (5)	335
第 233 図	SD07	267	第 291 図	石錘 (6)	336
第 234 図	SD04	268	第 292 図	石錘 (7)	337
第 235 図	SD04・15・16	269	第 293 図	打製石斧 (1)	339
第 236 図	SD04・14・15・16	270	第 294 図	打製石斧 (2)	340
第 237 図	SD08	271	第 295 図	打製石斧 (3)	341
第 238 図	SD02・09・14	272	第 296 図	打製石斧 (4)	342
第 239 図	SD09(1)	273	第 297 図	打製石斧 (5)	343
第 240 図	SD09(2)	274	第 298 図	打製石斧 (6)	344
第 241 図	SD11・12・17	275	第 299 図	打製石斧 (7)	345
第 242 図	SD13	276	第 300 図	打製石斧 (8)	346
第 243 図	SD18	277	第 301 図	打製石斧 (9)	347
第 244 図	中央窪地出土土器 (1)	279	第 302 図	打製石斧 (10)	348
第 245 図	住居跡群北側ブロック出土土器 (1)	280	第 303 図	打製石斧 (11)	349
第 246 図	住居跡群北側ブロック出土土器 (2)	281	第 304 図	打製石斧 (12)	350
第 247 図	住居跡群東側ブロック出土土器 (1) [イ 6I8]	282	第 305 図	打製石斧 (13)	351
第 248 図	住居跡群東側ブロック出土土器 (2) [イ 6I8]	283	第 306 図	磨製石斧 (1)	353
第 249 図	住居跡群東側ブロック出土土器 (3) [イ 5J0・イ 5J2・ イ 6J2・イ 6I9]	284	第 307 図	磨製石斧 (2)	354
第 250 図	集落外縁北側ゾーン出土土器 (1)	285	第 308 図	磨製石斧 (3)	355
第 251 図	集落外縁北側ゾーン出土土器 (2)	286	第 309 図	磨製石斧 (4)	356
第 252 図	集落外縁東ゾーン出土土器 (1)	287	第 310 図	磨製石斧 (5)	357
第 253 図	集落外縁東ゾーン出土土器 (2)	289	第 311 図	磨製石斧 (6)	358
第 254 図	各ブロック・グリッド出土土器 (1)	290	第 312 図	磨製石斧 (7)	359
第 255 図	各ブロック・グリッド出土土器 (2)	291	第 313 図	磨製石斧 (8)	360
第 256 図	製塩土器 (1)	293	第 314 図	磨製石斧 (9)	361
第 257 図	製塩土器 (2)	294	第 315 図	磨製石斧 (10)	362
第 258 図	製塩土器 (3)	295	第 316 図	磨製石斧 (11)	363
第 259 図	土偶 (1)	297	第 317 図	磨石 (1)	365
第 260 図	土偶 (2)	298	第 318 図	磨石 (2)	366
第 261 図	土偶 (3)	299	第 319 図	磨石 (3)	367
第 262 図	土偶 (4)	300	第 320 図	磨石 (4)	368
第 263 図	土版・岩版	301	第 321 図	磨石 (5)	369
第 264 図	耳飾り (1)	303	第 322 図	磨石 (6)	370
第 265 図	耳飾り (2)	304	第 323 図	磨石 (7)	371
第 266 図	耳飾り (3)	305	第 324 図	磨石 (8)	372
第 267 図	土製垂飾品	307	第 325 図	石皿 (1)	374
第 268 図	有孔土製円盤	308	第 326 図	石皿 (2)	375
第 269 図	土錘	309	第 327 図	石皿 (3)	376
第 270 図	土製円盤	311	第 328 図	石皿 (4)	377
第 271 図	小型土器 (1)	312	第 329 図	石皿 (5)	378
第 272 図	小型土器 (2)	313	第 330 図	石皿 (6)	379
第 273 図	小型土器 (3)	314	第 331 図	石皿 (7)	380
第 274 図	小型土器 (4)	315	第 332 図	石皿 (8)	381
第 275 図	小型土器 (5)	316	第 333 図	砥石 (1)	382
第 276 図	小型土器 (6)	317	第 334 図	砥石 (2)	383
第 277 図	小型土器 [ミニチュア土器] (7)	318	第 335 図	砥石 (3)	384
第 278 図	石鏃 (1)	321	第 336 図	線状痕のある石製品	385
第 279 図	石鏃 (2)	323	第 337 図	擦切具 (1)	386
第 280 図	石錐 (1)	324	第 338 図	擦切具 (2)	387
第 281 図	石錐 (2)	325	第 339 図	特殊敲打具・その他の石製品	388
第 282 図	異形石器	326	第 340 図	石製垂飾品	390
第 283 図	石匙	327	第 341 図	石剣・石棒類 (1)	392
第 284 図	スクレーパー類	329	第 342 図	石剣・石棒類 (2)	393
第 285 図	その他の石器	330	第 343 図	石剣・石棒類 (3)	394
第 286 図	石錘 (1)	331	第 344 図	石剣・石棒類 (4)	395
			第 345 図	石剣・石棒類 (5)	396

第 346 図	石剣・石棒類 (6)	397	第 352 図	独鈷石 (6)	404
第 347 図	独鈷石 (1)	399	第 353 図	石冠	405
第 348 図	独鈷石 (2)	400	第 354 図	手燭形土製品	407
第 349 図	独鈷石 (3)	401	第 355 図	土製品・石器補足分	408
第 350 図	独鈷石 (4)	402	第 356 図	土器補足分	409
第 351 図	独鈷石 (5)	403	第 357 図	弥生時代以降出土遺物	411

表目次

第 1 表	刈沼遺跡・刈沼向原遺跡周辺遺跡一覽表	11
第 2 表	刈沼遺跡第 1 次出土土器集計表	412
第 3 表	刈沼遺跡第 1 次遺構一覽表	416

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

宇都宮テクノポリスセンター地区土地区画整理事業は栃木県宇都宮市の東端部（第1図 宇都宮テクノポリスセンター地区の位置）、野高谷町、刈沼町を中心とする178ヘクタールの土地区画整理事業である。当該事業は清原工業団地や芳賀工業団地など周辺の工業団地との職住接近を目的とし（第2図 テクノポリスセンター地区の開発区）、良好な新市街地形成を目指して、住宅・都市整備公団（現 独立行政法人都市再生機構）が開発を実施した。開発地内には、ゆとりと質の高い生活空間を備えた住宅地、公園、道路などが一体的に整備され、さらに、「とちぎ産業創造プラザ」が設置され、各工業団地や大学などとの連携が計られるなど、「産・学・住・遊」など多彩な機能の充実が計られている。

同地区の埋蔵文化財発掘調査に至る経過を簡単に述べると、開発に先立って、平成2年7月11日付け、し22-13で住宅・都市整備公団（現 独立行政法人都市再生機構）首都圏都市開発本部長から栃木県教育委員会教育長あて、宇都宮テクノポリスセンター地区土地区画整理予定地における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会があった。

これを受けて、栃木県教育委員会は、平成2年7月30日文化373-1号で、現在周知の文化財包蔵地が3カ所あり、その他にも存在する可能性があるため、約10ヘクタールの範囲の確認調査が必要と回答した。

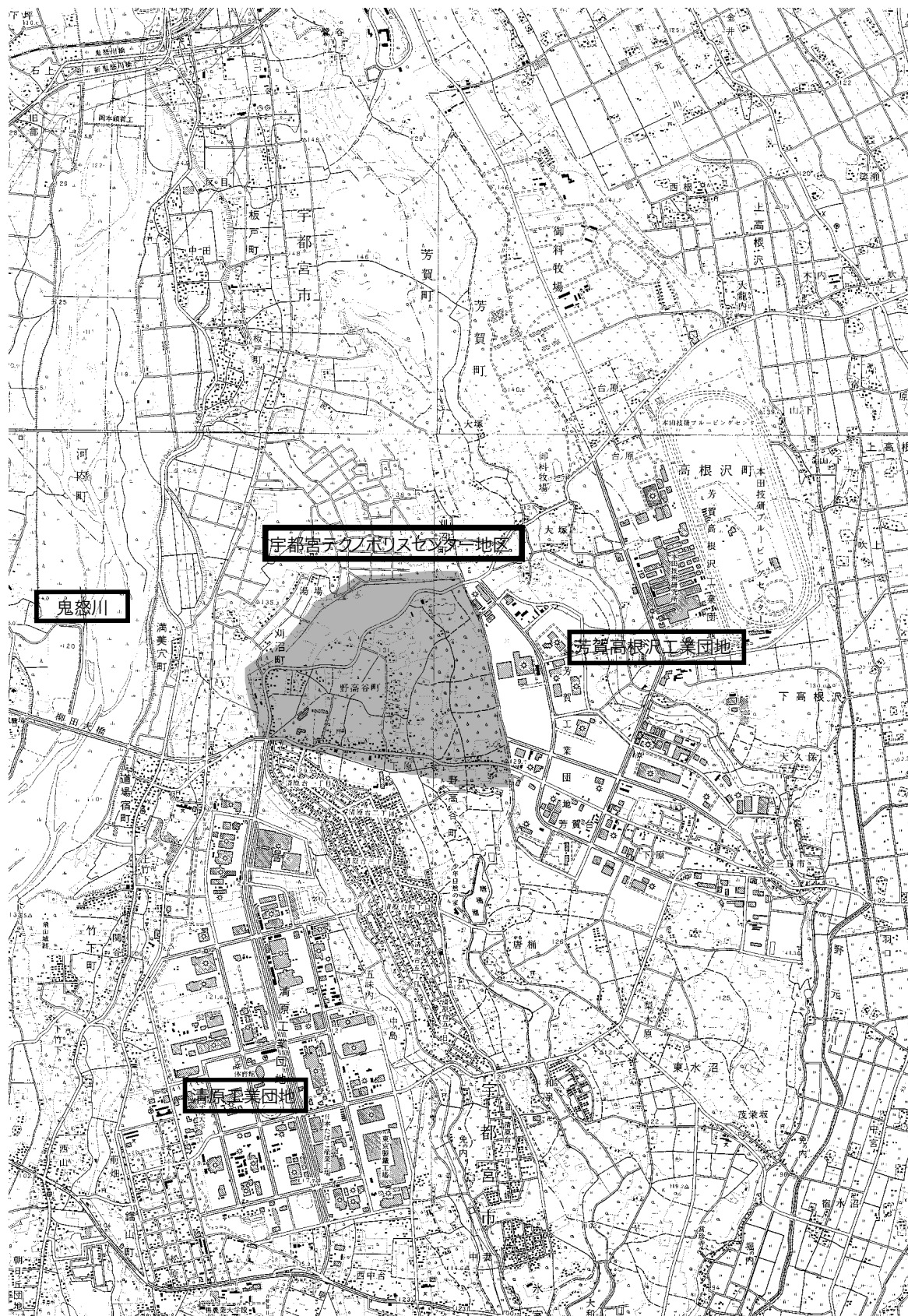
平成3年3月19日付けで、栃木県知事、宇都宮市長、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部長の3者による宇都宮テクノポリスセンター地区土地区画整理事業（仮称）に関する覚え書きが交わされた。開発総面積は178ヘクタールとされた。

平成6年8月にセンター地区についての分布調査が、県教育委員会、宇都宮市教育委員会、住宅・都市整備公団、（財）栃木県文化振興事業団（現（公財）とちぎ未来づくり財団）埋蔵文化財センターの4者により実施された。この結果、遺跡8カ所、面積267,000㎡、及び試掘が必要な地点7カ所、面積95,500㎡であることが判明した。

その後、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部長から、栃木県教育委員会教育長に当該地区の埋蔵文化財発掘調査実施の依頼があった。これを受けて、平成7年9月1日付けで、住宅・都市整備公団と（財）栃木県文化振興事業団が「宇

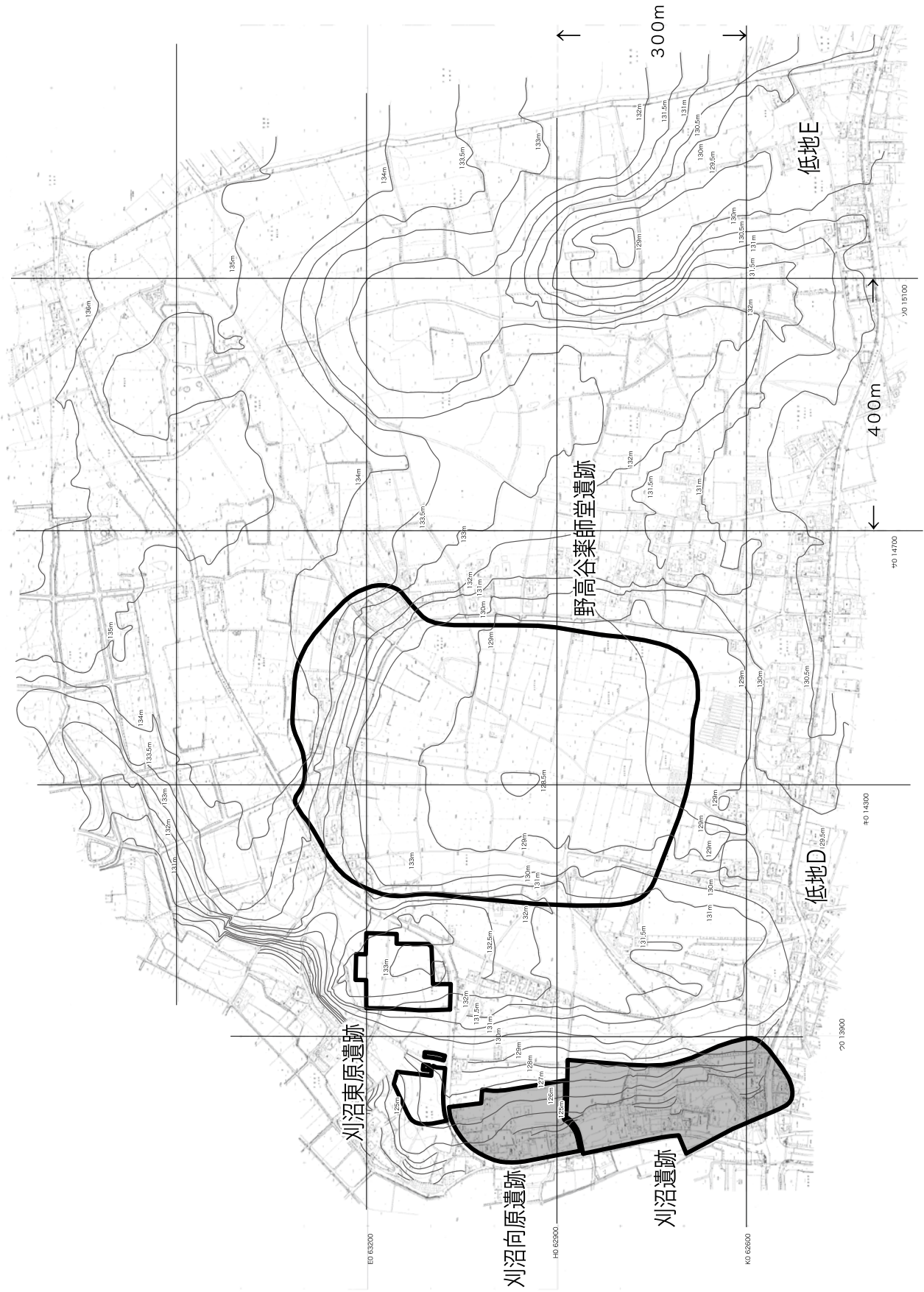


第1図 宇都宮テクノポリスセンター地区の位置



第2図 宇都宮テクノポリスセンター地区の開発区

(国土地理院 1/25000 宇都宮東部・祖母井・宝積寺・仁井田)



第3図 地形と遺跡範囲

第1章 調査の経緯

都宮テクノポリスセンター地区埋蔵文化財発掘調査」の委託契約を締結し、確認調査が開始されることとなった。確認調査は平成7年9月25日～平成8年3月15日の期間実施された。この確認調査の結果、刈沼東原遺跡、刈沼向原遺跡、刈沼遺跡、野高谷薬師堂遺跡の4遺跡が記録保存調査の対象とされることが決定された(第3図 地形と遺跡範囲)。さらに協議の結果、当該地区の発掘調査は宇都宮市教育委員会が担当することとなった。

第2節 調査の経過

当該地区の発掘調査は平成9年度以降順次実施された。刈沼遺跡、刈沼向原遺跡とも、工事の進捗にあわせ、断続的に行われている。刈沼遺跡は平成9・10年度・12年度までで第1次調査区及び第2次調査区とした広範囲の面的部分を調査し、平成19・20年度に第3次調査区とした、南西側のやや離れた場所の本調査が行われた。刈沼向原遺跡は平成11年度に第1次調査、20年度に第2次調査、22年度第3次調査を行っている。各年度毎の調査面積は下記の通りであるが、一部これまでの年報などと異なる部分がある。

刈沼遺跡

平成9年度(1次) 6,000 m²

平成10年度(1次) 9,400 m²

平成12年度(2次) 7,500 m²

平成19年度(3次) 450 m²

平成20年度(3次) 600 m²

計 23,950 m²

刈沼向原遺跡

平成11年度(1次) 5,000 m²

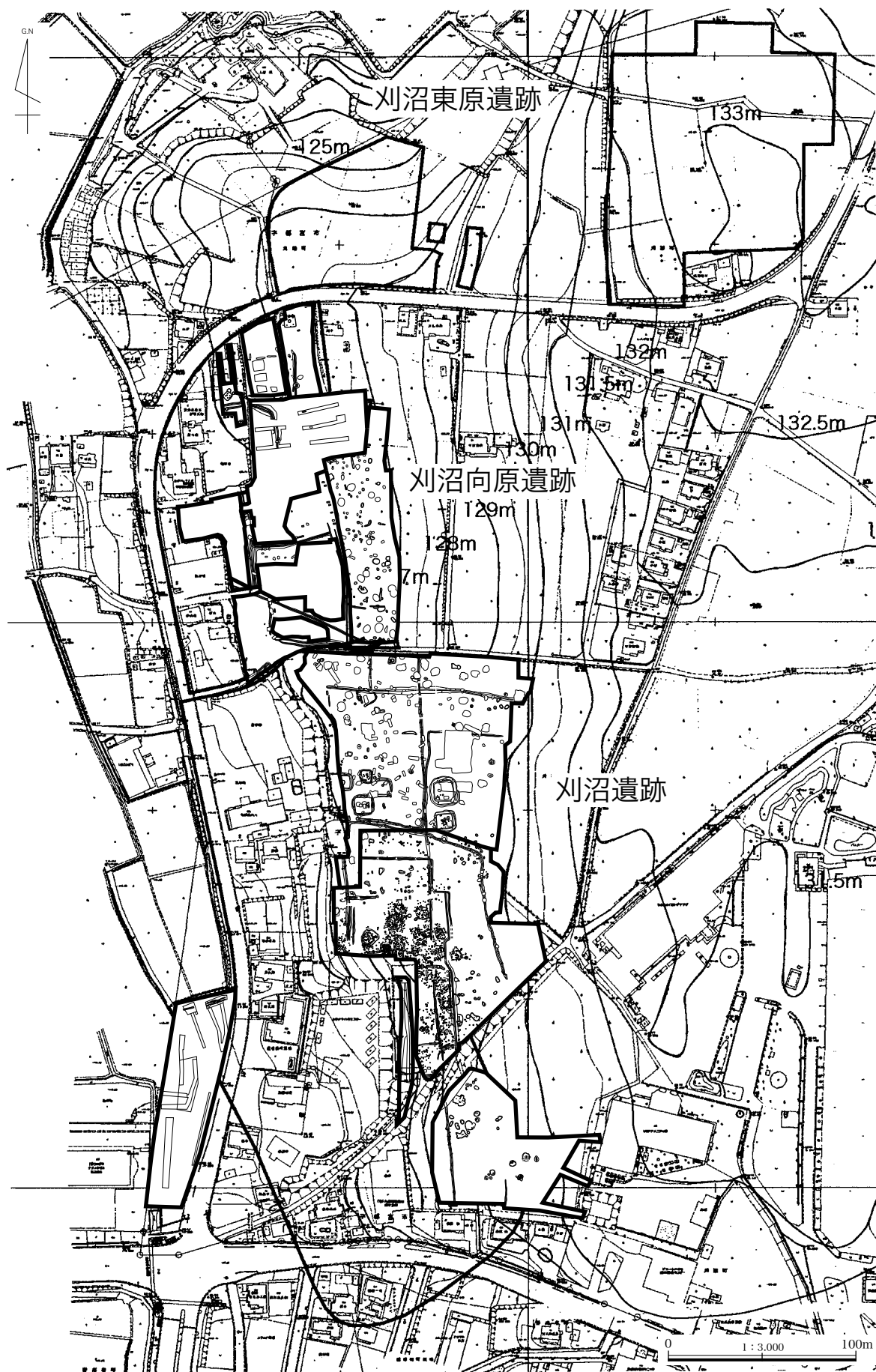
平成20年度(2次) 2,700 m²

平成22年度(3次) 2,300 m²

計 10,000 m² 2遺跡計 33,950 m²

刈沼東原遺跡の発掘調査報告書は宇都宮市教育委員会により作成された(宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第51集 刈沼東原遺跡 平成17年3月)。野高谷薬師堂遺跡、刈沼遺跡、刈沼向原遺跡については、平成10年度以降宇都宮市教育委員会により整理が進められたが、平成23年度以降は栃木県教育委員会と宇都宮市教育委員会との協議の結果(公財)とちぎ未来づくり財団が実施することとなり、同財団の埋蔵文化財センターで作業を行うこととなった。野高谷薬師堂遺跡については、平成26年度県教育委員会・公益財団法人とちぎ未来づくり財団により発掘調査報告書が作成された(栃木県埋蔵文化財調査報告書第375集 野高谷薬師堂遺跡 平成27年3月)。刈沼遺跡、刈沼向原遺跡について本報告書が作成されたことにより、独立行政法人都市再生機構による宇都宮テクノポリスセンター地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすべて終了したこととなる。

なお遺跡名について刈沼遺跡1・2次調査時点では、この調査区を刈沼・向原遺跡と呼称し、現地説明会や年報などでは、この旧名称で呼称・記録されており、多少の混乱が生じていることも付記しておく。



第4図 刈沼遺跡・刈沼向原遺跡 調査区の位置



第5図 刈沼遺跡・刈沼向原遺跡 全体図

第3節 調査の方法

開発区全体に10 m × 10 mのグリッドを設置した。東西方向は西端を起点に、ア0、ア1・・・ア9、イ0、イ1・・・の順にグリッド番号を発番し、南北方向は北端を起点に、A0、A1・・・A9、B0、B1の順に発番した。グリッド名は両者を組み合わせて、ア9G5、イ2H7のように表記した。第2表遺構一覧表や本文・挿図中のグリッド番号は、この表記によって遺構や遺物の出土位置を示している。XYの座標値は日本測地系の数字である。刈沼向原遺跡については北西端ア0F3～南東端イ4H4の範囲内に、刈沼遺跡1・2次調査区については、北西端ア7H1～南東端ウ4K2の範囲内、刈沼遺跡3次についてはア2I9～南東端ア7K1の範囲内にある。なお刈沼遺跡1・2次では、調査当初に付したグリッドが100 mずれて付されており、例えばイ4J1グリッドがイ4K1グリッドとして扱われている。これは各記録類及び遺物の注記すべてに及び、整理途上までこの旧グリッド名での整理が為されていた。最終的な本報告ではこれを改称したが、遺物の注記や遺構原図類では旧グリッドのままである点、明記しておく。

刈沼遺跡で確認された遺構は、住居跡15軒、土坑135基、溝22条、ピット群7基、方形周溝墓7基などである。刈沼向原遺跡で確認された遺構は住居跡5軒、土坑97基、溝22条などである。刈沼遺跡と刈沼向原遺跡は隣接しており、溝や土坑の分布など両遺跡にまたがるものもある。遺構分布の特徴を示すのが、刈沼遺跡第1次調査区における縄文時代の住居跡及びピット群で、中央の窪地を取り囲むように分布し、概ね重なる部分に厚い遺物包含層が形成されていた。1,400箱の遺物の大半はこの環状の範囲内からである。

もう一つの遺構集中は刈沼遺跡第2次調査区の南側で集中する古墳時代前期の方形周溝墓群である。これら以外の古墳時代の住居跡や土坑等はやや散漫な分布、または集中域を確認できない。以下本報告では、各調査区毎に遺構遺物の内容を示し、両遺跡全体に関わる土地利用の様相などは別途まとめることとしたい。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

栃木県は、関東平野の北端に位置し、北は福島県、東は茨城県、西は群馬県と接し、南は埼玉県とわずかに接している。県都宇都宮市は、県中央部のやや南寄りに位置している。宇都宮テクノポリスセンター地区は、この宇都宮市の北東部、清原地区の刈沼町と野高谷町にかけて所在する。当該地区は宇都宮市の中心部から東へ約9km、JR宇都宮線宇都宮駅から東へ約7kmに位置しており、東に約1kmで芳賀町に至る(第2図宇都宮テクノポリスセンター地区の開発区)。

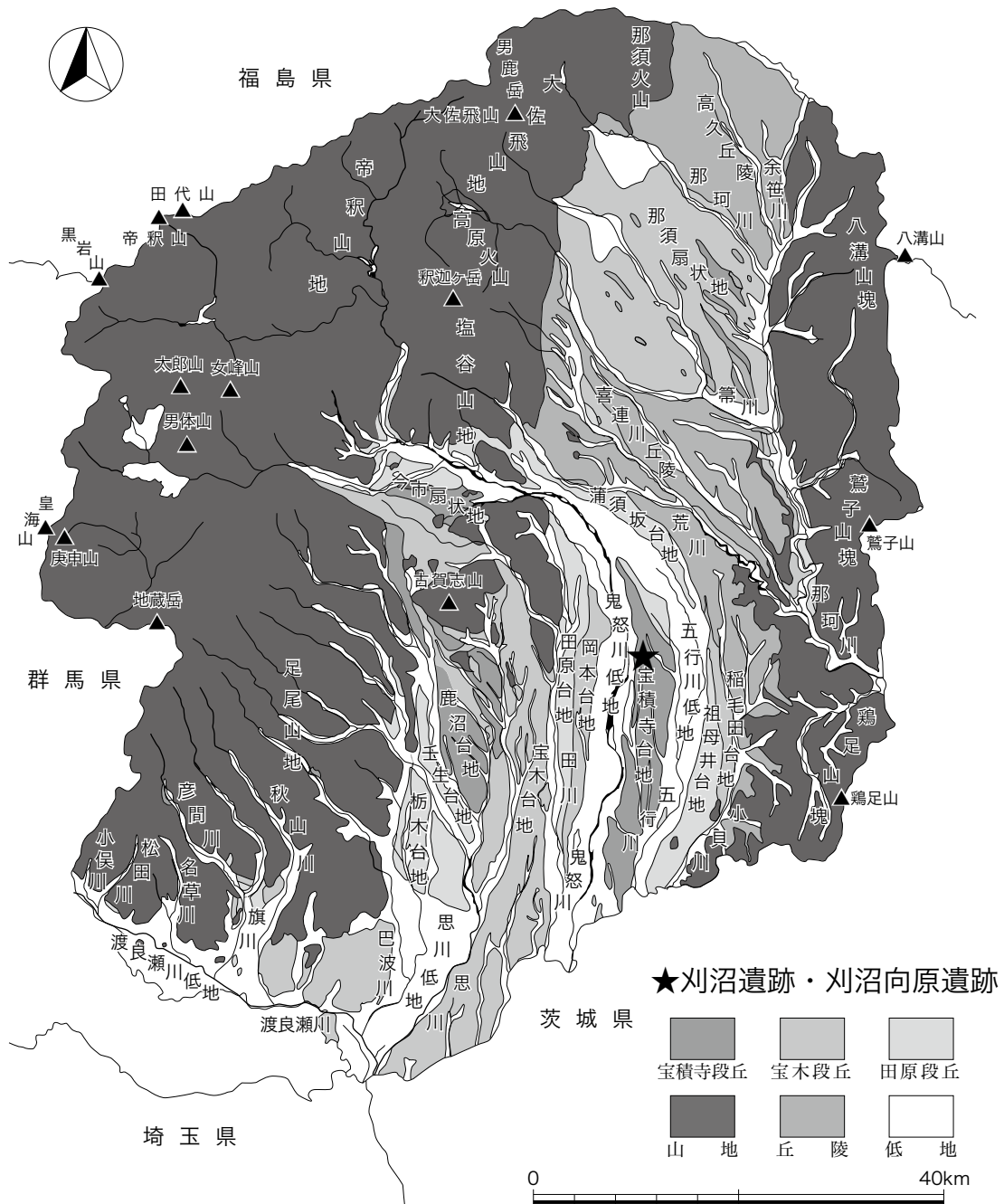
刈沼遺跡・刈沼向原遺跡は鬼怒川左岸の宝積寺台地西端部に立地する。(第6図栃木県地形図)。宝積寺台地は南北に延びる台地で、東を五行川、西を鬼怒川により画されている。刈沼遺跡・刈沼向原遺跡は、西側の谷に面する緩斜面部に立地している。調査開始時点では第1次調査区の西側は斜面がカットされた状態となっていたが、下野考古学研究会による調査時等では台地から延びる緩い斜面が続いていたようである。刈沼遺跡第1次調査区では全体に西側に向かって地形の傾斜で下がっているが、調査区の中央より東側においては概ね台地平坦面となっている。刈沼遺跡第2次調査区・刈沼向原遺跡の調査区は、概ね台地平坦面で、大きな地形の違いは認められない。一方刈沼遺跡第3次調査区は、一段下がった低地～低位段丘面上に位置

第2章 遺跡の環境

しており、調査開始時点では水田であった。この低地帯は五行川低地帯に連なる大きな開析谷で（野高谷葉師堂報告第9図）、これを超えた西側は鬼怒川に直に面する台地となる。この刈沼遺跡第3次調査区においても縄紋時代遺物が多量に出土したことは、遺跡の範囲、縄紋期における土地利用を考える上で注意される。

第2節 歴史的環境

本遺跡に関わる歴史的環境・周辺の遺跡については、同じテクノポリスセンター地区内の遺跡発掘調査報告である『刈沼東原遺跡』（宇都宮市教育委員会 2005）で触れられている。ここでは、この刈沼東原遺跡報



第6図 栃木県地形図

告書中の歴史的環境の項に一部加筆して転載した。とりわけ本遺跡の中心時期となる縄紋時代の集落跡関係については若干補足した。第1表の周辺の遺跡一覧表についても同書の表を基本とした。

第7図及び第1表からもわかるように、鬼怒川東方の宝積寺台地上には、多数の遺跡が存在する。以下、時代ごとに本遺跡周囲の遺跡について詳細に説明するべきであるが、本地域の歴史的・遺跡分布について触れている遺跡の報告書も比較的多いことから（『刈沼東原遺跡』、『野高谷薬師堂遺跡』、『大塚遺跡』など）、ここでは刈沼遺跡・刈沼向原遺跡に関わる時代におおよそ限って略述する。

縄紋時代

本遺跡周辺においては、鎮守林西遺跡、野高谷北台遺跡がある。刈沼向原遺跡の北側で隣接する刈沼東原遺跡で、中期阿玉台式、加曾利E式前半、後期前半堀之内式、後期後半瘤付系などが確認され、刈沼遺跡縄紋期の活動範囲をうかがう点で興味深い。

やや離れた周辺の遺跡で調査が行われている市内の遺跡として竹下遺跡と板戸不動山遺跡がある。竹下遺跡（36）は数次にわたる調査が行われ、これまでに住居跡35軒、土坑430基以上が確認されている。特に中期中葉～後葉の袋状土坑群や後期初頭の遺構・遺物が目立っているが、後期中葉の住居跡がまとまる地点もあることは注意される。板戸不動山遺跡では中期後半を主とする大規模な集落跡が確認されている。多数の住居群が環状に分布する「環状集落」となるようである。

やや本遺跡から離れるが、芳賀町免の内台遺跡では、中期前半～後半の集落跡に加え、後期中葉の遺物が一定数見られる。免の内台遺跡より更に南側では、宇都宮市下上遺跡や芳賀町上り戸遺跡で調査が行われ、様相が確認できる。この近辺では後期前半の集落跡が比較的密な分布を示す可能性がある。下上遺跡や上り戸遺跡では少数ながら後期後半の遺物も見られる点は注意される。

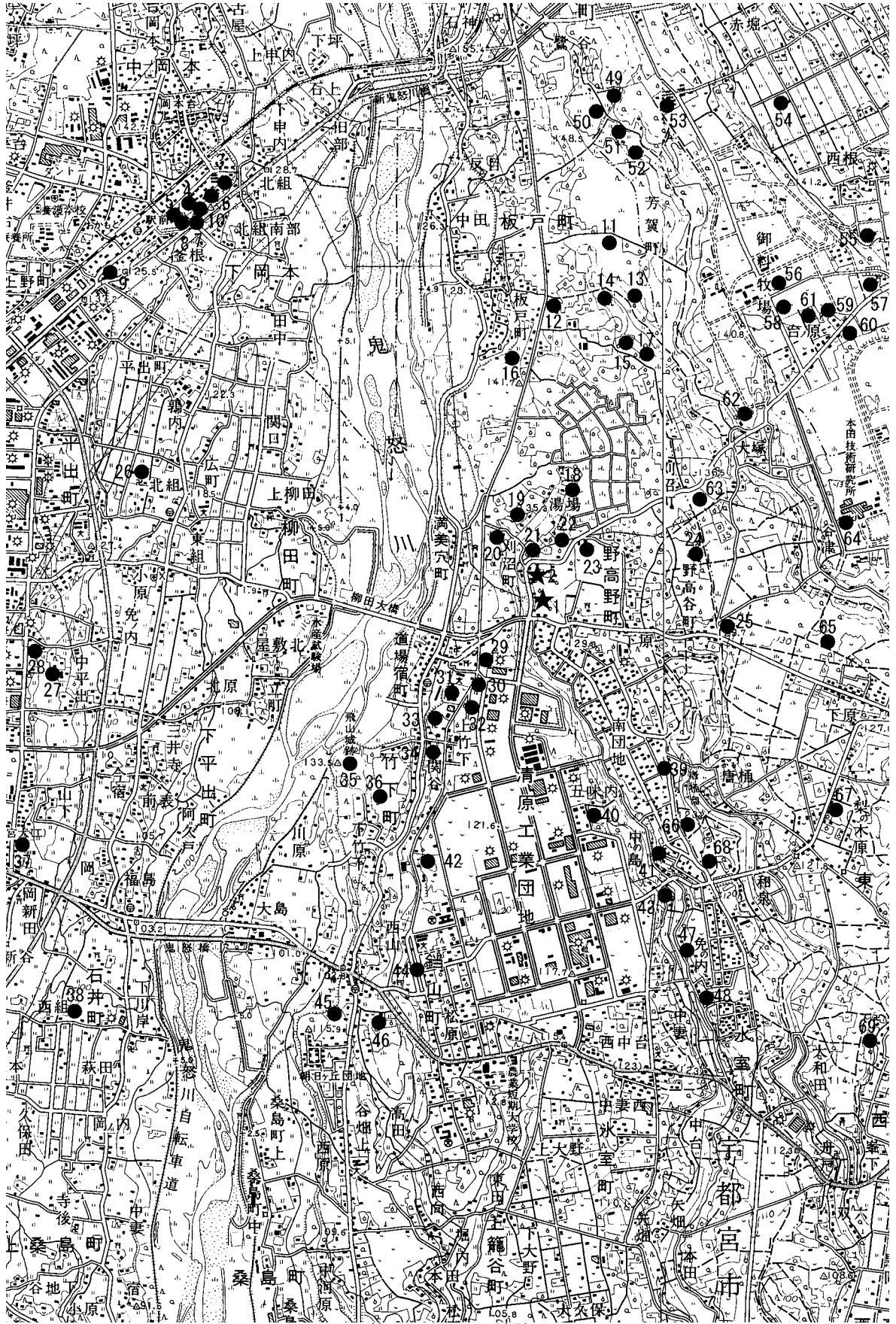
刈沼遺跡に関わる後期後半から晩期を主体とする集落跡は、至近では確認できない。宇都宮市南部の石川坪遺跡は後晩期の遺物が多く採集できる遺跡として著名で、近年の調査でも後晩期遺物の出土が認められるようである。鬼怒川流域をやや遡った位置にあるさくら市勝山城跡では後期前葉の遺構・遺物が氏家町教育委員会（現さくら市教育委員会）により報告されているほか（氏家町1987、1995）、晩期の遺物も示されている（岩淵1981等）。隣接する芳賀町・真岡市、高根沢町等でも、断片的な後晩期遺物の出土遺跡は知られているが（芳賀町坪の内遺跡など）、調査により様相が判明している例は無い。なお県内の後晩期遺跡として著名な寺野東遺跡とは約29km、藤岡神社遺跡とは47kmの距離がある。また比較的多く後晩期遺跡がある那珂川流域、那須烏山市鳴井上遺跡とは19km、那珂川町三輪仲町遺跡とは24kmの距離がある。

弥生時代

北側で隣接する刈沼東原遺跡から中期を主とする破片が30点程度報告されている。刈沼遺跡・刈沼向原遺跡でも中期及び後期の破片が一定量出土しており、本台地上における弥生時代の動向は注目される。やや離れた地域まで見渡しても弥生時代遺跡は限定される。芳賀町免の内台遺跡で前期末や後期の土器が出土しているほか、やや離れるが真岡市井頭遺跡や芳賀町上り戸遺跡で後期の遺構・遺物が確認されている。

古墳時代

古墳時代の古墳としては、満美穴古墳群、大塚古墳、竹下浅間山古墳、五味内古墳、不動山古墳群、板戸愛宕塚古墳群、日陰坂上古墳群などがある。その中で、竹下浅間山古墳は、7世紀に築かれた前方後円墳で、



第7図 周辺の遺跡

第1表 刈沼遺跡・刈沼向原遺跡周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	種別	時期(型式)	備考
1	刈沼遺跡	刈沼町 482-1 他	集落跡	縄文・古墳	
2	刈沼向原遺跡	刈沼町 268-11 他	集落跡	縄文・古墳	
3	岡本小学校遺跡	下岡本町	散布地	縄文(後期)	
4	第二公園内古墳群	下岡本町	古墳	古墳	円墳(供養塚)
5	第二公園南遺跡	下岡本町		縄文(加曾利 E)	
6	日枝神社南遺跡	下岡本町	散布地	先縄文	
7	日枝神社南古墳	下岡本町	古墳	古墳	円墳
8	第二公園古墳群	下岡本町			
9	第一公園東遺跡	下岡本町		縄文(加曾利 E)	
10	古坂塚高塚	板戸町 1711 他	高塚	江戸	
11	中丸遺跡	板戸町 3420 他	古墳	縄文	
12	板戸愛宕塚古墳群	板戸町 2215 他	古墳	古墳	円墳 2
13	山田遺跡	板戸町 3463 他	集落跡	縄文・古墳	
14	不動上供養塚	板戸町 3620-1	供養塚	江戸	
15	不動山古墳群	板戸町 3630 他	古墳	古墳	円墳 2
16	日陰坂上古墳群	板戸町 1839 他	古墳	古墳	円墳 2
17	不動遺跡	板戸町 3660 他	集落跡	縄文	
18	刈沼池前遺跡	野高谷・刈沼	散布地	縄文・古墳時代以降	
19	鎮守林西遺跡	刈沼町 552-1 他	集落跡	縄文・奈良	
20	淡路城跡	刈沼町 469 他	城館跡	室町	
21	向原遺跡	刈沼町 298-4 他	集落跡	奈良・平安	
22	野高谷薬師堂遺跡	野高谷町 657 他	墓地	中世・近世	
23	刈沼東原遺跡	刈沼町東沢 344-1 他	集落跡	古墳	
24	野高谷東原遺跡	野高谷町 1066 他	集落跡	古墳	
25	野高谷北台遺跡	野高谷町 1135 他	集落跡	縄文・古墳	
26	平出城跡	平出町 1512 他	城館跡	室町	
27	免の内台古墳	平出町 4106 他	古墳	古墳	円墳
28	上野遺跡	平出町 411 他	道路跡	奈良・平安	
29	大塚古墳	大塚西	古墳	古墳	
30	大塚古墳	道場宿町	集落跡	奈良	新規命名
31	山之内遺跡	竹下町字山之内 885 他	集落跡	奈良・平安	
32	どどづか高塚	道場宿町 27 他	高塚	江戸	
33	同慶寺館跡	竹下町 1107 他	城館跡	室町	
34	竹下浅間山古墳	竹下町 1100-5 他	城館跡	古墳	前方後円墳 市指定
35	飛山城跡	竹下町 393-6 他	城館跡	室町	
36	竹下遺跡	竹下町 712 他	集落跡	縄文・古墳	
37	山下台高塚群	下平出町 1019-1 他	高塚	江戸	円形高塚 2
38	石井城跡	石井町 1721 他	城館跡	室町	
39	五味内古墳	氷室町五味内	古墳	古墳	
40	五味内遺跡	氷室町五味内	集落跡	奈良	
41	氷室中ノ島北遺跡	氷室町字中島 973-7 他	集落跡	奈良・平安	
42	千波ヶ原遺跡	竹下町 1412 他	集落跡	縄文・古墳	
43	氷室中ノ島遺跡	氷室町 1781-1 他	集落跡	縄文・奈良	
44	鑑山東原遺跡	鑑山町 191-1 他	集落跡	縄文・奈良	
45	草倉坂下遺跡	鑑山町草倉坂下 672 他	集落跡	縄文	
46	根木内遺跡	鑑山町字根木内 617 他	集落跡	奈良・平安	
47	白内遺跡	氷室町 705-8 他	集落跡	縄文・奈良	
48	免の内遺跡	氷室町 1012-1 他	集落跡	縄文・古墳	
49	鷺ノ谷庚申塚	宝積寺字鷺ノ谷	塚	中世・近世	
50	鷺ノ谷 A 遺跡	宝積寺字鷺ノ谷	散布地	中世・近世	板碑
51	鷺ノ谷弁天塚	宝積寺字鷺ノ谷	塚	中世・近世	頂部に弁天様の詞
52	鷺ノ谷 B 遺跡	宝積寺字鷺ノ谷	散布地	縄文・古墳・中世・近世	内耳土器
53	台の原 A 遺跡	上高根沢台の原	散布地	縄文	打斧・磨石 旧名：台の原遺跡
54	一斗内遺跡	石未字一斗内他	散布地	縄文(中～後)・奈良	
55	西根遺跡	上高根沢字西根・大童内他	散布地	旧石器・縄文(前～後)	西根 A、十九夜坂入口遺跡を含む
56	台の原 D 遺跡	上高根沢台の原	散布地	縄文・中世・近世	
57	井戸山塚古墳	上高根沢台の原	古墳	古墳	滅失 平成 5 年確認調査
58	台の原古墳群	上高根沢台の原	古墳	古墳	8 基牧場造成時に滅失
59	井戸山古墳	上高根沢台の原	古墳	古墳	開田時に滅失
60	上の原 A 遺跡	上高根沢上の原	散布地	縄文・中世・近世	内耳土器
61	台の原 E 遺跡	上高根沢台の原	散布地	縄文	
62	不動塚古墳群	下高根沢字大塚不動山	古墳	古墳	円墳 3 旧名：大塚古墳群
63	大塚遺跡	下高根沢字大塚	集落跡	縄文	
64	箸塚遺跡	下高根沢字箸塚	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安	
65	下原遺跡	下高根沢字下原	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安	
66	後久保遺跡	東水沼字後久保・古留 2930	集落跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	
67	梨の木原遺跡	東水沼字梨の木原	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安	
68	後久保古墳	東水沼字後久保・古留 2944	古墳	古墳	前方後円墳
69	谷近台古墳群	西水沼字谷近台	古墳	古墳	円墳 6 市町村番号 325/ 谷近台遺跡

墳丘は失われていたが、昭和48年に農地造成中に発見され、発掘調査が行われた。その結果、頭椎太刀・鉾・馬具類などが出土している。また、不動山古墳群では、平成14年度に最終処分場建設に伴う発掘調査において、3基の円墳が確認されている。いずれも横穴式石室を主体部とする円墳である。遺物は耳環、長頸壺が数点出土しており、これらの遺物から古墳時代終末期の古墳と考えられる。近年板戸愛宕塚古墳群(12)の調査が行われ、板戸愛宕塚古墳周溝の一部及び別古墳の周溝一部が確認されている。

中世・近世・近現代

宝積寺台地とその両側を南流する鬼怒川・五行川沿岸には近隣の飛山城跡、同慶寺館跡をはじめ、宇都宮氏、芳賀氏に関連する多数の城館跡が存在する。飛山城跡は芳賀高俊による築城とされ、豊臣秀吉による宇都宮仕置きで破却の対象となり廃城とまるまで存続したことが発掘調査の結果から判明している。現在は国指定史跡として建物跡の復元も含め整備されている。

刈沼遺跡の東側に位置する野高谷薬師堂遺跡は中近世の大規模墓場が確認された遺跡で、溝で区画された範囲内に多数の地下式坑・井戸跡、竪穴遺構等がまとまって分布している状況が確認された。

近世になると鬼怒川周辺に河岸が設けられ、舟運の発達に伴って清原地区は物資流通の拠点として賑わったとされる。近代では、明治22年の町村合併により、竹下村、鑑山村、上籠谷村、氷室村、刈沼村、刈沼新田、野高谷村、板戸村、道場宿村が合併し芳賀郡清原村が成立する。清原村は1954年に宇都宮市に編入され清原村となる。近年遺跡一帯は宇都宮テクノポリスセンター地区開発の「ゆいの杜」として、近隣の清原工業団地・芳賀工業団地などと連繋した高度技術産業集積活性化計画の拠点となる街づくりが進んでいる。

(参考文献)

- 宇都宮市教育委員会 1983 『宇都宮の遺跡』
- 宇都宮市教育委員会 2005 『国指定史跡 飛山城跡』
- 宇都宮市教育委員会 2005 『宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第51集 刈沼東原遺跡』
- 上三川町史編さん委員会 1979 『上三川町史 資料編』 上三川町
- 芳賀町史編さん委員会 2003 『芳賀町史 通史編 原始古代・中世』 上三川町
- 埴 静夫 2008 『うつのみや歴史探訪』 随想舎
- 下野考古学研究会 1986 「刈沼遺跡 第一冊―表採資料、坂本家寄贈資料―」 『下野考古学』 8
- 下野考古学研究会 1987 「刈沼遺跡 第二冊―刈沼遺跡一次調査、A地点調査報告―」 『下野考古学』 9
- 下野考古学研究会 1989 「刈沼遺跡 第三冊―刈沼遺跡一次調査A地点考察、B C地点調査報告―」 『下野考古学』 11
- 下野考古学研究会 1990 「刈沼遺跡 第四冊―刈沼遺跡二次調査、D地点調査報告―」 『下野考古学』 12
- 下野考古学研究会 1991 「刈沼遺跡 第五冊―刈沼遺跡二次調査D地点考察、二次調査F、F 断面調査報告―」 『下野考古学』 15
- 下野考古学研究会 1992 「刈沼遺跡 第六冊―刈沼遺跡二次調査E地点調査報告―」 『下野考古学』 17
- 下野考古学研究会 1993 「刈沼遺跡 第七冊―刈沼遺跡二次調査E地点考察、第二次調査表採資料―」 『下野考古学』 20
- 下野考古学研究会 1996 「刈沼遺跡 第八冊―刈沼遺跡三次調査H地点調査報告―」 『下野考古学』 23
- 下野考古学研究会 1996 「刈沼遺跡 第九冊―刈沼遺跡三次調査H地点考察―」 『下野考古学』 27
- 下野考古学研究会 2000 「刈沼遺跡 第10冊―刈沼遺跡三次調査G地点調査報告―」 『下野考古学』 28
- 下野考古学研究会 2002 「刈沼遺跡 第11冊―刈沼遺跡三次調査G地点考察―」 『下野考古学』 29

第3章 刈沼遺跡第1次調査区の遺構と遺物

第1節 刈沼遺跡第1次調査の概要

調査経過の概要

刈沼遺跡の第1次調査は、平成9年度及び10年度に行われた。調査は全域に確認調査を行い、遺構が確認できた範囲について面的な本調査としている。地表面での遺物の分布も濃密であったことから、通常行う重機による表土除去は行わず、表土・黒色土について人力による掘削を行った。当初より遺物が多量に出土したことから、トータルステーションによる記録及び取り上げにより作業の効率化を図った。南側から順次進め、全体図でSK26等がある南側の調査区及び、南側の三角形部分を平成9年度に、これより北側を平成10年度に行っている。南側の三角形部分には縄紋時代の住居跡は分布しておらず、溝2条及び土坑27基のみ確認された。グリッド出土遺物も少なく、包含層も浅く、遺物量も限られていたようである。全体図では地形を示すコンター線が一部途切れているが、これは航空写真測量時の表土の状態で確認できなかったところである。第2次調査区においては測量は行われておらず、コンター線が第1次調査区までで途切れる。

遺構の分布と概要（第8・9図）

遺構は包含層掘り下げ後のほぼローム漸移層またはローム層の面で行っている。黒色土中の掘り込みがある遺構も相当数あったことが推測されるが、縄紋時代の遺構として明確な黒色土掘り込みの例は示し得ない。調査区を南北に縦断するSD01,04等の溝については上位からの遺構確認・掘り込みが認められていた。

溝のSD14やSD09、SD17は第2次調査区と連続し、台地を大きく区画する溝である。これらの溝からの遺物で、混入の縄紋時代遺物を除くと時期判断可能なものは殆ど無く、調査時の所見も残されていないことから、時期不明とせざるを得ない。

住居跡については縄紋時代と捉えられている。幾つかの写真を見る限り、黒色土中で住居跡が推定されたものもあるようだが、概ねローム漸移層近辺での確認のようである。逆L字状となる調査区際、概ね環状の範囲に分布し、この範囲は厚い包含層、遺物分布の範囲でもある。I4J0、J1グリッドあたりがやや低くなる中央窪地で、これを取り囲むように集落が展開するとも言い得るであろう。環状の範囲にあってやや窪地より北側の方が住居跡は多く、遺物についてもこの北側の方が多いようである。

住居跡の形態は不整なものが多く判断難しいが、円形～楕円形基調のようである。掘り込みプランが不明瞭なもの、覆土が薄いものも目立っている。平坦な床面、明瞭に立ち上がる壁等も見られないようで、掘り込み・床面・プランの判断が難しかったものも多いようである。住居形態について、整理時にピットの配置などから若干の検討を行ったが、柱穴の形態や覆土の記録が不十分なものも多く、確定的な住居形態の提示に至らない。調査時の住居プランとは若干異なる形態案を提示する例もあることは明記しておく。

ピット群としたものは、調査時には遺構として捉えていなかったものだが、一定範囲におけるピットの集中から住居跡或いは掘立柱建物跡等の建物跡の推定が可能などところに対して便宜的に捉えたものである。調査区全体に比較的多くのピットは検出されているが、とりわけ先ほど示した環状ゾーンに多くのピットが調査されている。これは住居跡等の調査終了後に、念を押す形でローム面で確認されたものようだが、各ピットの記録はかなり限定的で、それぞれのピット番号発番さえ限られている。この整理報告では航空写真測量

のみ、或いは航空写真撮影でのみ確認できたものについても、できるだけ全体図に示すと共に、ピットの配置から、建物跡の推定を可能な限り行った。

全体図を俯瞰すると、中央窪地の縁辺に弧状に連なるピット群を見出すことさえ可能であり、小山市寺野東遺跡や同乙女不動原北浦遺跡、埼玉県加須市赤城遺跡における中央窪地のピット群と類似或いは同種の遺構との推測も考えられるが、上記の状況から判断ができない。このピット群、また他のピットの評価によっては、さらに住居軒数が増えることも想定する必要が生じる。どのような建物跡の復元かにもよるが、また個別に異なるものの、基本的に縄紋後晩期の所産と捉えている。

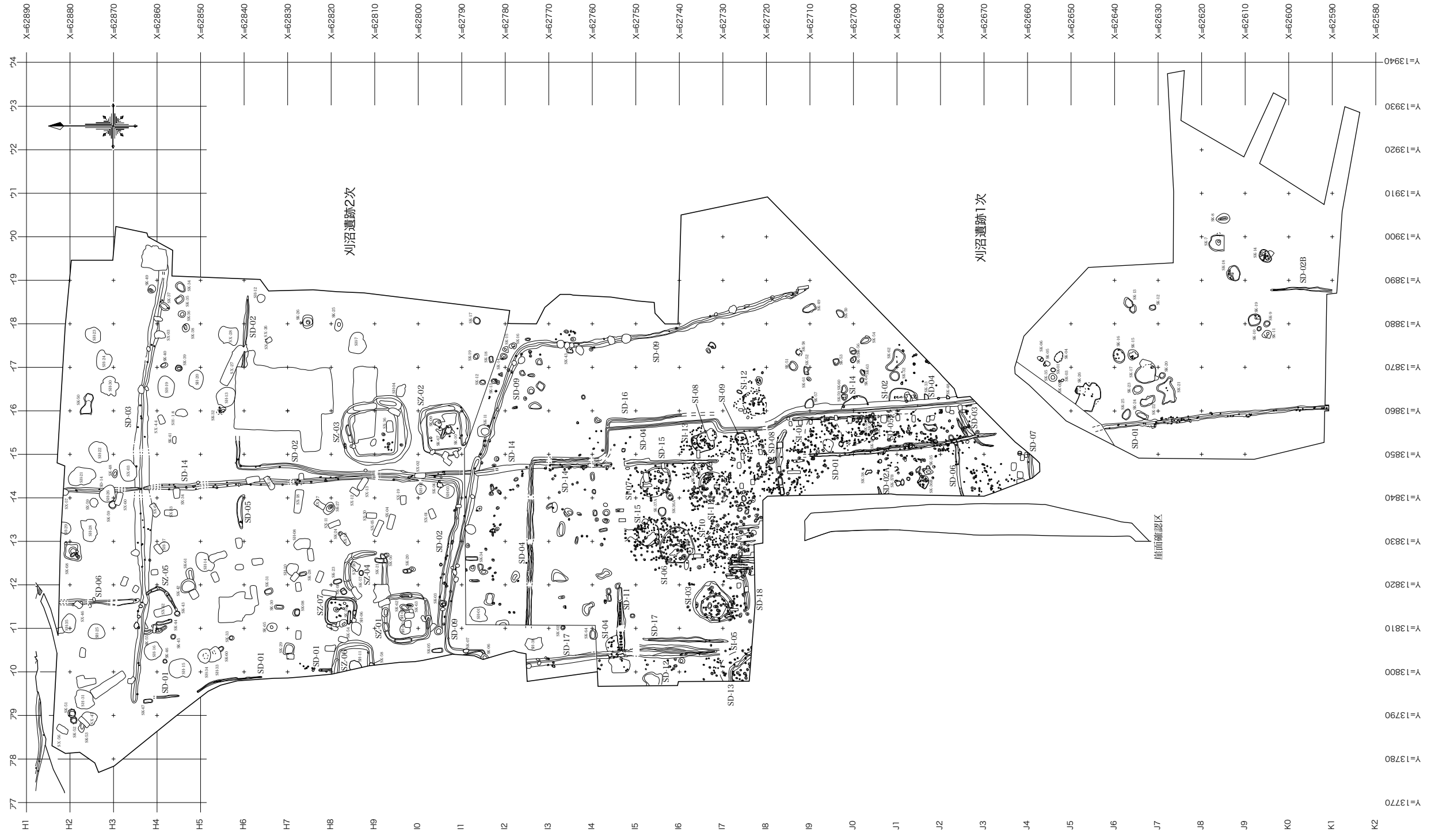
62基検出された土坑については、形態・分布とも特徴を捉えがたい。先にも示した遺構遺物集中域から離れたところで確認された土坑については、縄紋時代以外の遺構となる可能性も高いが、これについても記録が乏しく判断できない。恐らく第1次調査区の南側調査区にある不整形土坑（SK21等）については、縄紋時代以外であると推定できる。また第2次調査区に近いSK14～16についても縄紋時代の可能性は低い。復元可能個体や大形破片の出土があるSK43等や全体に遺物量が多い土坑については縄紋時代の可能性が高いかもしれない。但し粗密はあるものの、かなり広範囲に縄紋時代遺物は出土しており、遺物の出土のみをもっての時期判断は躊躇するところがある。形態的にも縄紋時代に顕著な袋状土坑や長楕円形の土坑、配石を伴うもの等は殆ど無く、形態からの時期推定もし得ない。内部にピットがある土坑も幾つかあるが、土坑に伴うピットか否かも判断は難しいようである。本報告書の体裁としても、時期毎の掲載を当初考えたが、上記のような状況＝時期判断をはじめとする調査時所見の記録が乏しいことから、断念せざるを得なかった。なお全体図中で遺構番号が付されていない土坑状のライン＝落ち込みも幾つかあるが、これについても記録不十分なものである。遺構として扱われない、攪乱や風倒木などの可能性が高いところであろうか。明らかな攪乱については、全体図や遺構図中で上端線のみ示した。

基本土層・包含層（第10～13図）

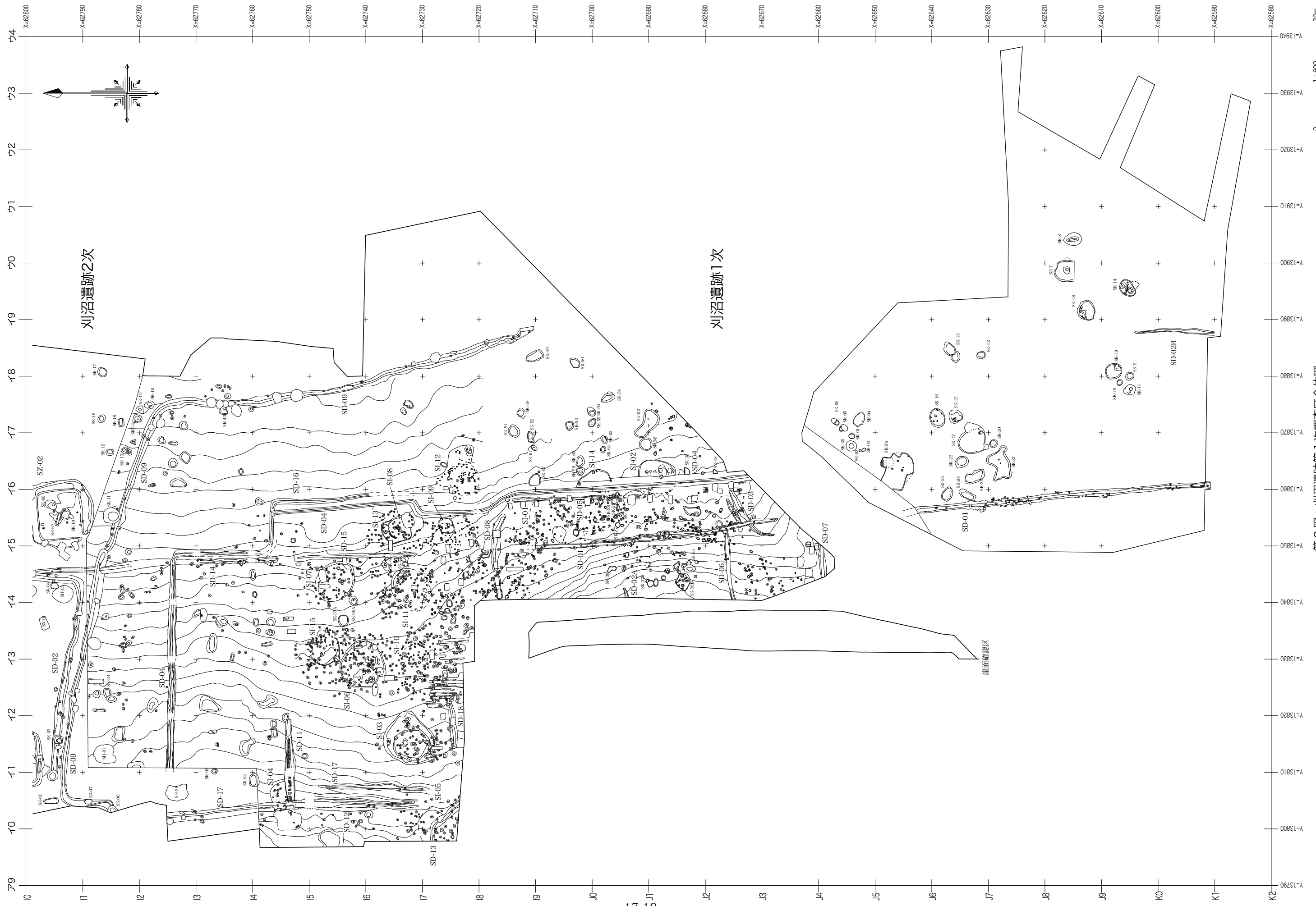
調査区内、とりわけこの刈沼遺跡第1次調査区では、比較的多くの基本土層断面が記録されている。トレンチ調査時のものと面的調査時における土層ベルト断面記録時のものがある。但しこれらは個別に記録され、相互の対比が行われておらず、整理時においても対応関係を把握するに至らなかった。とはいえ、大きくは西側の谷に向かって地形が傾斜し、低くなるに従い包含層がより厚くなる様相が捉えられる。また南北で見ると第10図A-A'ライン＝I4ラインでは、環状の遺構遺物集中域から若干はずれることもあって谷へかかる斜面～台地平坦面では包含層の堆積が薄い傾向がある。一方で第11図I7ライン（C-C'ライン）では環状部分の包含層がやや厚く、しかもやや複雑な堆積を示していることが読み取れる。また中央窪地にかかる第13図J1-T1ライン（E-E'）では窪地部分にかなり厚く包含層が堆積していることが確認される。土層説明記録ではローム面上のT1-3層について「縄文期以降の表土」との記載がありそのまま示したが、この層中から多量の晩期遺物が出土しているようであり、「縄紋期包含層」である可能性が高いと考えている。環状の遺構遺物集中域にある包含層についても、幾つかの断面ラインでの対応など、内容把握の検討を試みたが、人為的な様相の有無、遺構との関連、層の分布範囲など、今なお不明な点が多い。

盛土遺構（第14・15図）

中央窪地縁辺において盛土の痕跡が認められたとの記述が実績報告や年報に記載されている。但し記録類を整理・確認した限りでは、どの範囲にどのような盛土遺構があるのか、現時点では把握できていない。第



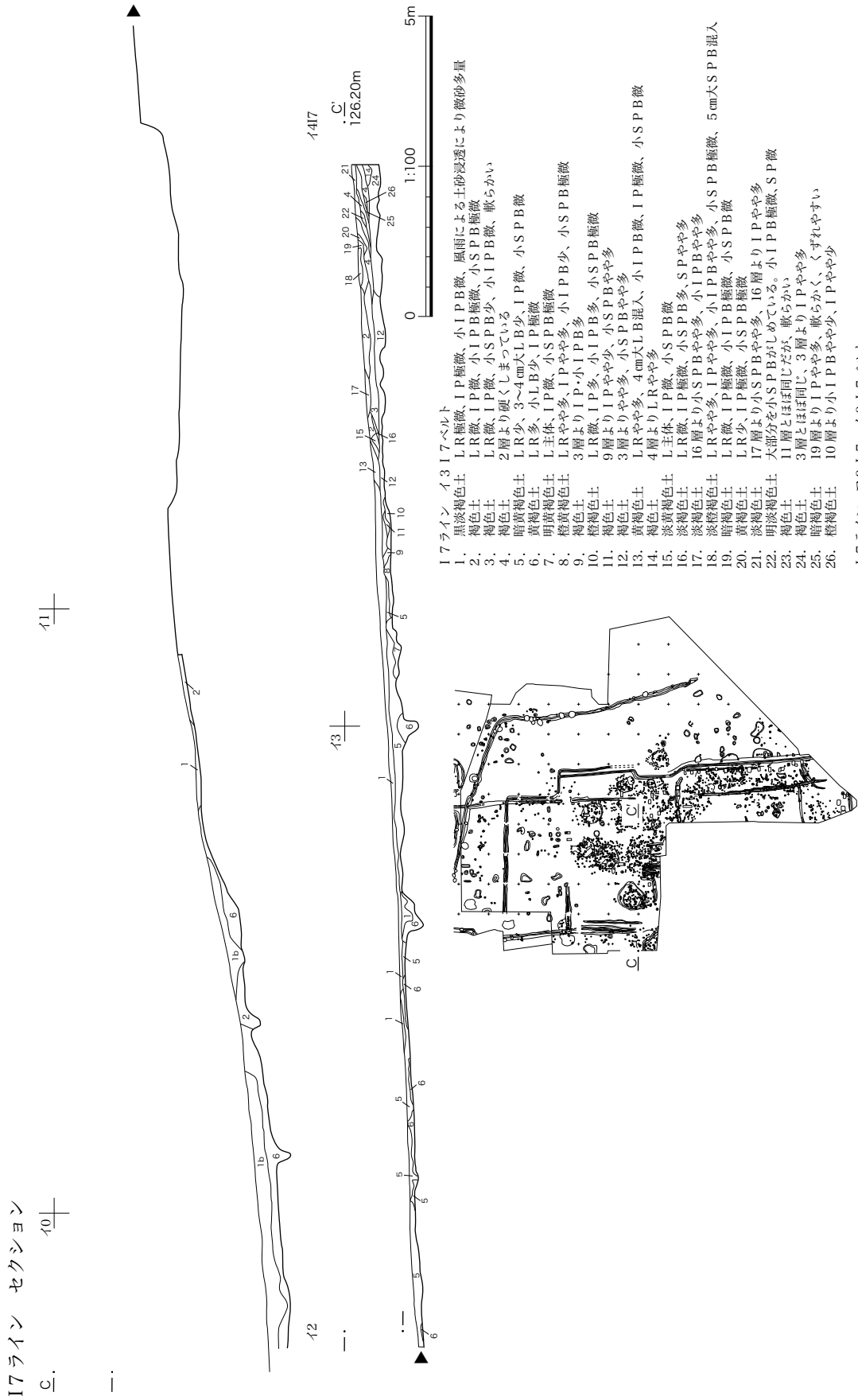
第8図 刈沼遺跡第1次・2次全体図



第9図 刈沼遺跡第1次調査区全体図



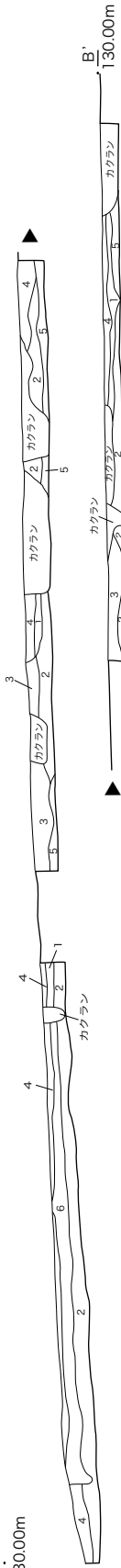
第10図 第1次調査区基本土層 (1)



第11図 第1次調査区基本土層(2)

J1ラインT-5 セクション

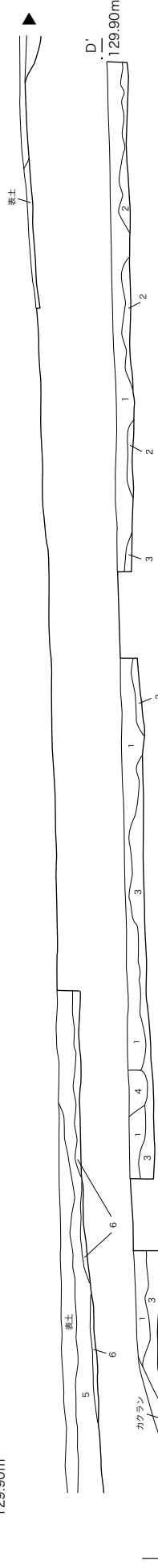
B.
130.00m



- トレンチ5
- 1. 黒褐色土 小IPB極微、IP微、SP極微、(耕作土)
 - 2. 明褐色土 IP少、SP微、LR微
 - 3. 褐色土 LR・IP・SP微、きめ細かい
 - 4. 淡褐色土 IP微、緻密(表土)
 - 5. 暗黄褐色土 LR多、IP・SP少、小IPB少、(漸移層)

J1ラインT-3 セクション

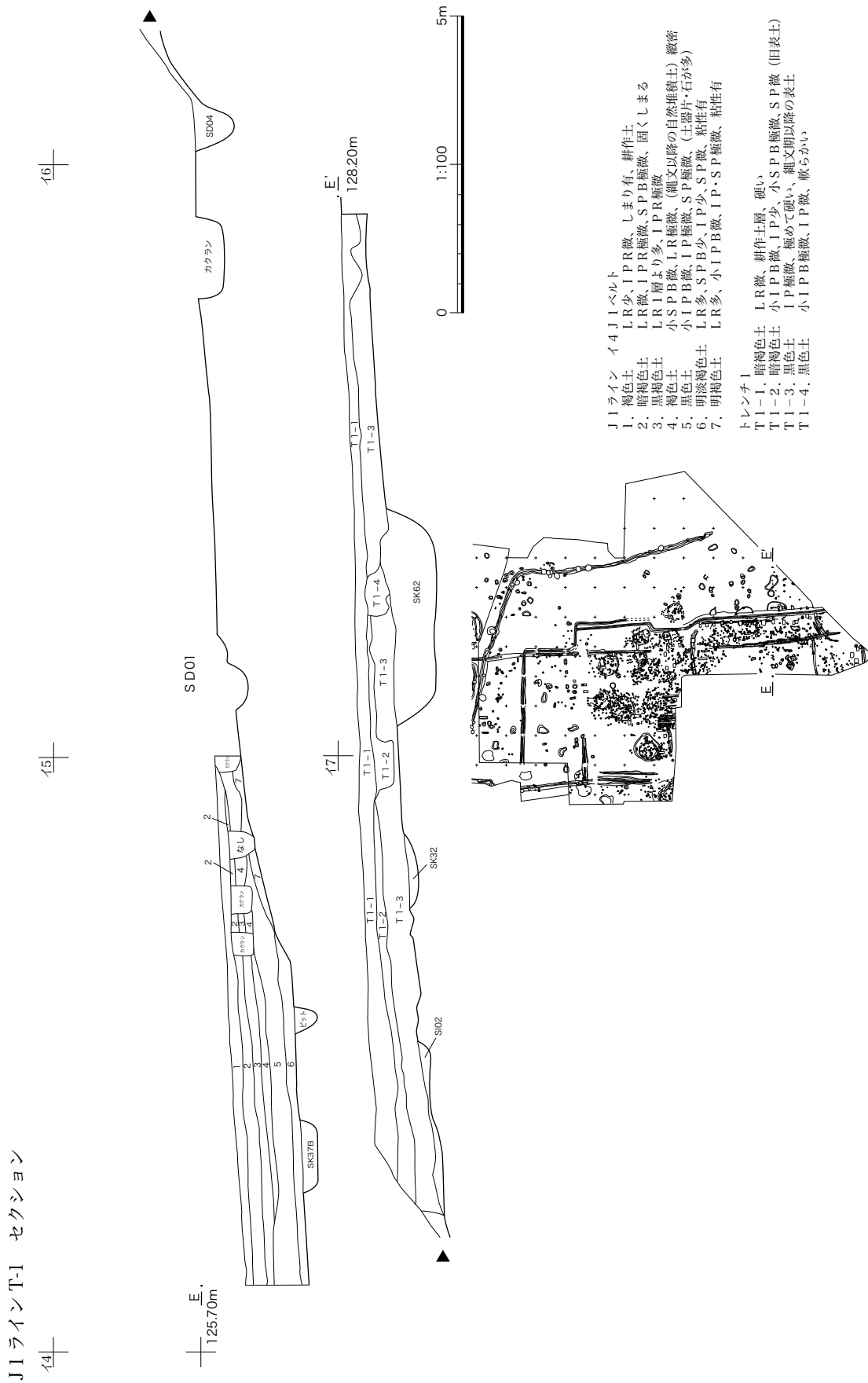
D.
129.90m



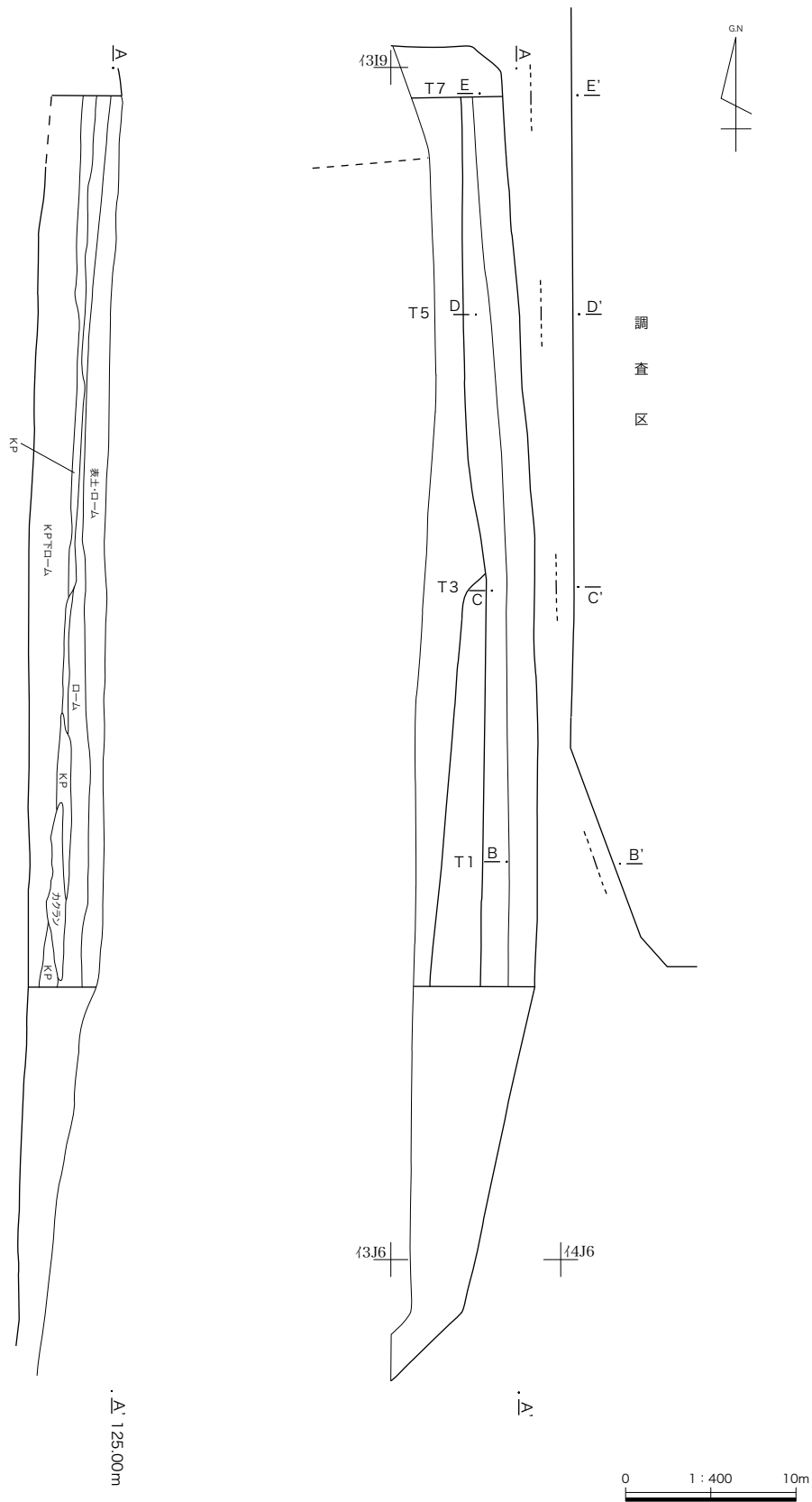
- トレンチ3
- 1. 暗褐色土 小IPB少、小SPB微、LR微、硬くしまっている
 - 2. 暗黄褐色土 LR多、小IPB少、小SPB微
 - 3. 暗褐色土 I層より小IP・SP・LR微、硬くしまっている
 - 4. 暗褐色土 LR少、IP少、小SPB少
 - 5. 褐色土 LR多、IP多、小IPBやや多、小SPB微
 - 6. 橙褐色土



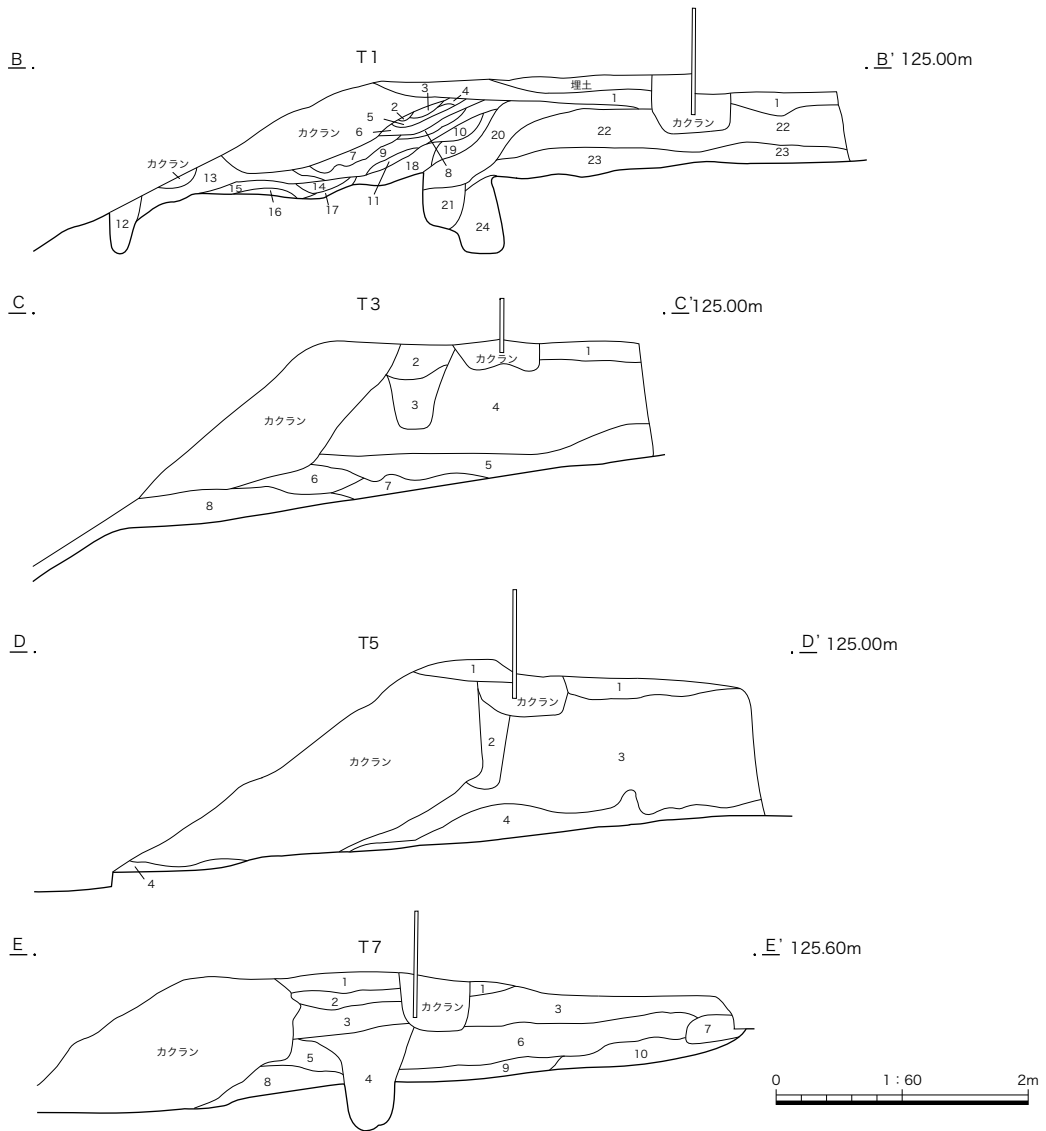
第12図 第1次調査区基本土層(3)



第13図 第1次調査区基本土層(4)



第14図 盛土遺構調査区位置図



盛土遺構 T1

- 1. 褐色土 LR微、IPR極微、硬い
- 2. 暗黄褐色土 5層よりやや軟らかい
- 3. 黒褐色土 6層とほぼ同じ、LB含む
- 4. 暗褐色土 LR少、小IPBを含む、小SPB極微、硬い
- 5. 暗黄褐色土 LR極多、小IPB少、極めて硬い
- 6. 黒褐色土 LR微、小IPB・小SPB極微、極めて硬い
- 7. 黄褐色土 LB・LR極多、小IPB少、小SPB極微、黒色土少量
- 8. 暗黄褐色土 9層よりLB小、小IPB
- 9. 暗黄褐色土 LB多、小IPB少、小SPB微、黒色土少量
- 10. 暗褐色土 黒色土にLRが均一混入、やや軟らかい
- 11. 暗褐色土 LB微、LR極微、小IPB微
- 12. 黒褐色土 LR少、LB含む、小IPB少、砂極微、CR含む
- 13. 褐色土 LB少、LR多、IPB少、硬い
- 14. 暗黄褐色土 9層よりIP少
- 15. 明褐色土 LB微、LR少、小IPB少、SPB含む、SP極微
- 16. 暗黄褐色土 LB多、LR多、IPR・SPR少、やや軟らかい
- 17. 暗褐色土 LB含む、IPB少、やや軟らかい
- 18. 黒褐色土 小IPB少、SPB微、C含む、やや軟らかい
- 19. 橙褐色土 IPB主体でSPB多量混入
- 20. 黒褐色土 22層よりIPR多、小IPB微、22層より軟らかい
- 21. 褐色土 SP・IPR極微、緻密
- 22. 黒褐色土 SPR・IRR微、硬い
- 23. 明褐色土 小SPB少、SPR少、硬い
- 24. 暗黄褐色土 小IPB多、小SPB少、IPR微、やや軟らかい

盛土遺構 T3

- 1. 表土 SPR少、IPR少、LR少、炭(5m大)含む
- 2. 暗褐色土 SPR少、IPR少、LR少、LB少
- 3. 暗褐色土 4層よりIPR・SPRやや少
- 4. 黒褐色土 SPR少、小IPB少、IPR少、LR少、小LB少
- 5. 黒褐色土 小SPB少、SPR少、小IPB少、IPR少、Ca微、砂少(4層よりIPR・IPBやや多)
- 6. 暗黄褐色土 8層よりLR・LBやや少
- 7. 橙黄褐色土 IPBやや多、IPR少、SPR微、LRやや多
- 8. 暗黄褐色土 LR多、LB多、IPB少、SPR微

盛土遺構 T5

- 1. 褐色土 4層よりLR少、小IPB無、SPR微、C混入
- 2. 暗褐色土 IPR微、小IPB極微、SPR極微
- 3. 黒褐色土 黒色土主体、LR微、SPR極微、IPR極微、
- 4. 褐色土 LRやや多、IPR微、小IPB極微、粘土混入

盛土遺構 T7

- 1. 褐色土 小LB微、LR少、SPR微
- 2. 暗褐色土 LR微、SPR少、小SPB少、IPR極微
- 3. 暗褐色土 2層とほぼ同じ、小LB含む
- 4. 暗褐色土 LB少、LRやや多
- 5. 黒褐色土 小LB含む、LR極微、IPR極微
- 6. 暗褐色土 LR少、SP微、SPB1つ、小IPBやや多、IPRやや多
- 7. 暗黄褐色土 SPB主体、IPR微
- 8. 黄褐色土 LRやや多、小IPB少、IPR極微、SPR極微、Ca混入
- 9. 黄褐色土 8層よりIPRやや多、小IPBやや多、LB含む
- 10. 暗黄褐色土 IPR多、小SPB極微、SPR極微、LR極微

第15図 盛土遺構土層断面図

14 図にあるように、調査区西壁部分について、壁を跨ぐようにトレンチが設定され、断面の観察が図られており、図面のキャプションとしても付されていたことから、この調査により「盛土遺構」との判断が為されたと考えられる。第 15 図に示したように、やや複雑な堆積の記録が残されているが、どの層が盛土層なのかの所見が確認できない。他遺跡における盛土遺構で顕著なロームブロックやローム質土の含有についても、この土層記録及び写真から読み取ることが困難であり、むしろ遺構覆土や基本土層の説明と大きく変わるものではないことがうかがえる。具体的には第 15 図 E - E' の 3 層や 6 層の内容が盛土の可能性をうかがわせるが、判断は難しい。平面的な位置では T1 の部分が環状の遺構遺物集中域延長部分となることから、22 層や 23 層が盛土層の疑いが残る。T3 や T5 は中央窪地にかかる部分となり、T3 の 4 層、T5 の 3 層が中央窪地の黒色土包含層と捉えられようか。T 2・4・6 とした他のトレンチについての記録も概ね同様で、盛土や掘削の痕跡を示す記録とは言いがたく、本報告では図として示さなかった。また基本土層ラインでは J 1 ライン T1 (第 13 図) の 7 層が中央窪地より立ち上がる場所から堆積しており「盛土層」の可能性をうかがわせるが、土層説明からはローム地山の可能性すらあり、判断はできない。

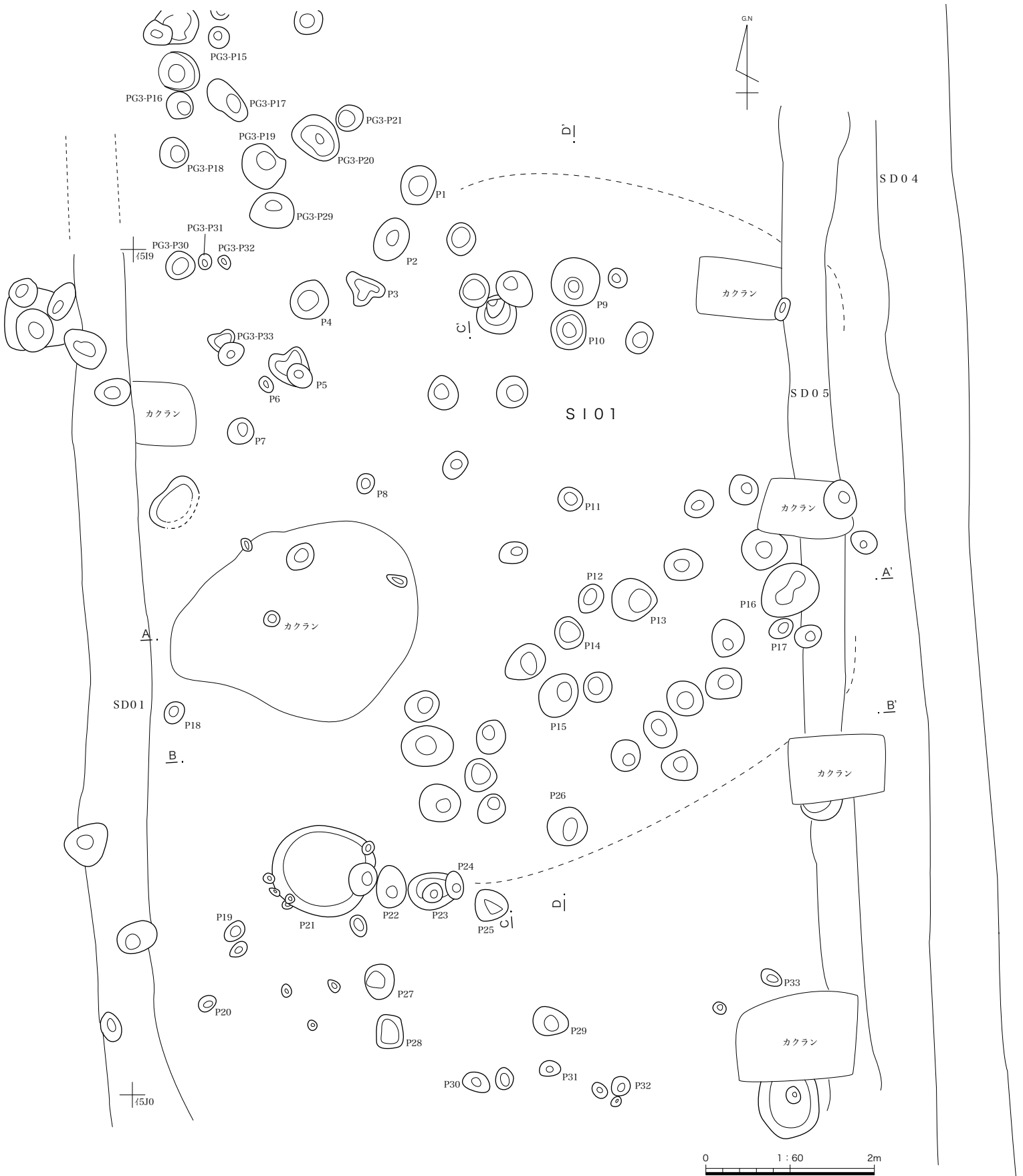
また本調査区西側のカットされた斜面について、断面(斜面)の精査によりローム層の確認が為された。これは中央窪地の成因をここに縄文時代の「沢」「谷」があると当初推定し、それを確かめるために行われた調査のようである。調査年報では半円形の窪みについて「当初縄文時代の開析谷源頭と推測していたが周囲に土塁状の盛土の痕跡が認められたことから、環状盛土とそれに伴う土取りの可能性も指摘される」と記述され、本報告図版 8 - 7 とほぼ同一の写真が示されている。繰り返しの記述になるが、自然地形の谷ではないことがこの断面観察記録により推定されたとは言えるものの、盛土の記録は不十分で、窪地ローム面の層準も調べられていないことから、遺憾ながら盛土の確認や人為掘削の根拠としては極めて弱いものと言わざるを得ない点、明記しておきたい。環状分布の包含層の記録なども含め、更なる検討が必要となる。

第2節 住居跡

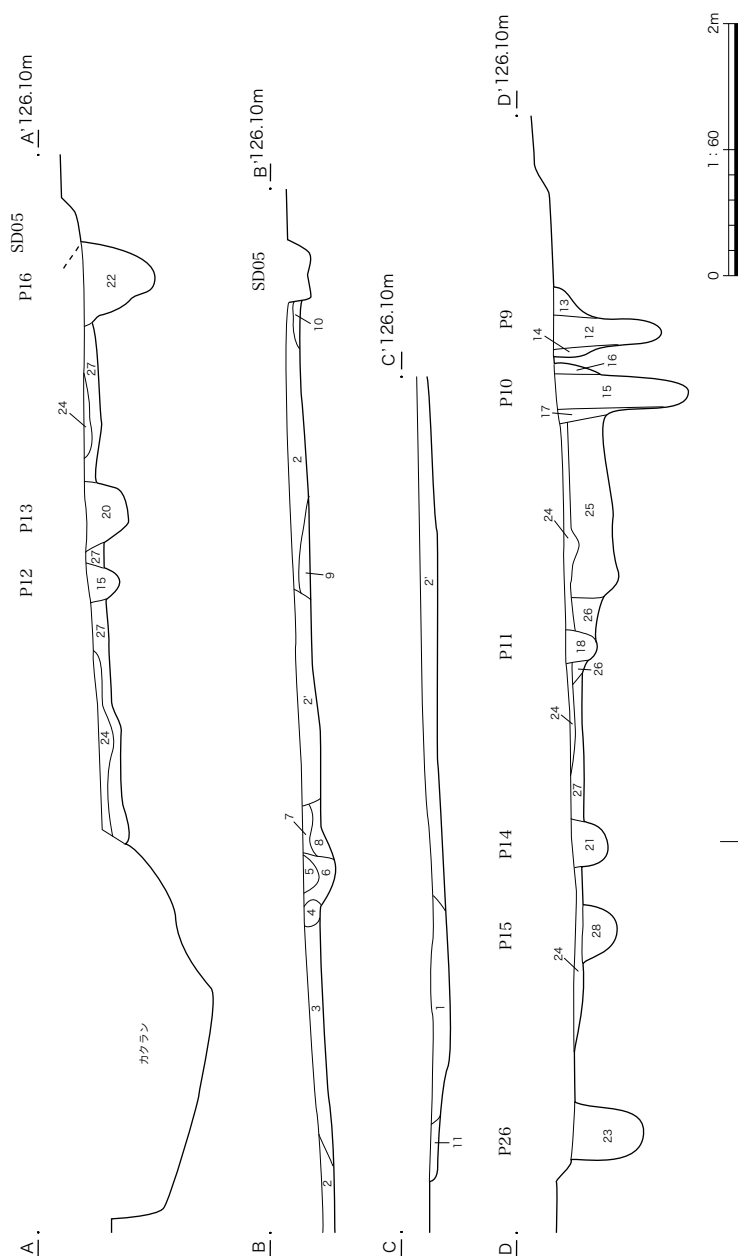
S I O 1 (遺構第 16・17 図、遺物第 18～36 図、写真図版三)

位置・形態 4519・J0 グリッドに位置する。東側を SD04・05 に、西側を SD01 に切られているが、覆土相互の観察によるものではない。明瞭な掘り込みは認められなかったが、点線範囲内で包含層とは異なる「覆土」が観察されこの範囲が住居範囲とされる。確認は概ねローム面である。写真で示したように調査では掘り込みや床の検出も目指されたようだが、明瞭ではない。確認面に近い写真からは黒色土の広がりをも認めることができ、浅い掘り込みを伴う住居と捉えられる。写真では概ね C-C' ラインより東側での黒土堆積であり、問題も残る。C-C' ラインの南端や D-D' ラインで壁・掘り込みが示されており、これを踏まえつつ、ピットの配置なども加え検討した。つまり、東側の P17 から南側の P26 に至るライン付近でピットが連続しており、これに対向する北側の P1 から北西側の P7 に至るピット列も列状を呈していることから、これらを壁柱穴と推定してのプランである。また遺物もこの範囲内に集中する状況が認められている。仮に N-26° -W を軸とする横長楕円形プランを住居範囲とすれば、主軸長 7.8 m、直交軸長 10.2 m となる。

床面・覆土 床面はかなり凹凸があり、D-D' ライン北側など、土坑状の落ち込みのようにも観察される。セクション図では 1～28 層まで土層番号を示したが、2～10 層、24～27 層が住居覆土である。但し後者の層群 A-A'、D-D' セクションラインでの 27～27 層は記録では床下土層となっている。他の土層ではピット覆土に対して付されているが、この 24～27 層群を掘り込むピットと 24～27 層群に覆われるピットとがある。



第16図 S101(1)



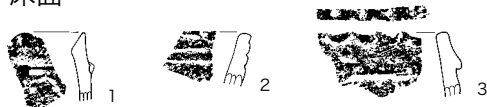
No.	深度(cm)	No.	深度(cm)
P1	5.9	P18	8.6
P2	35.7	P19	8.8
P3	10.4	P20	11.1
P4	52.0	P21	20.1
P5	9.7	P22	4.4
P6	8.6	P23	28.2
P7	43.3	P24	24.1
P8	32.2	P25	16.7
P9	28.0	P26	61.0
P10	86.0	P27	21.3
P11	25.0	P28	20.0
P12	28.0	P29	57.7
P13	36.0	P30	47.6
P14	29.0	P31	17.1
P15	28.0	P32	15.4
P16	58.0	P33	16.3
P17	23.1		

S I O 1 土層説明

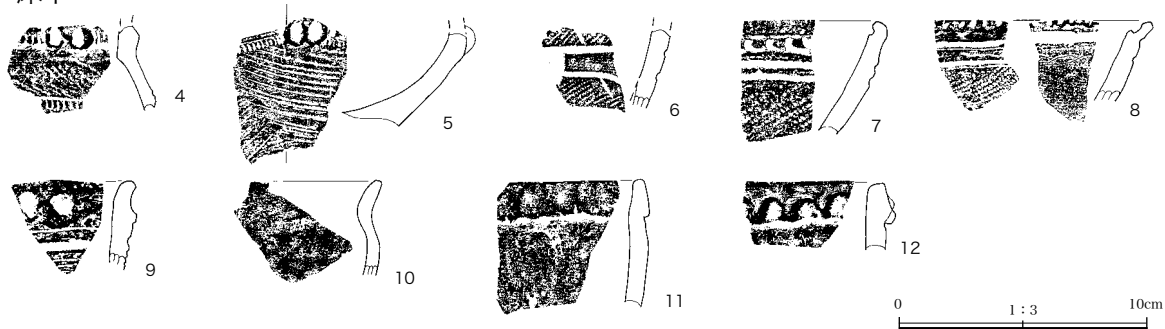
- | | | | |
|-----------|----------------------|-----------|---------------------------|
| 1. 黒色土 | LR極微、IPR微、しまり弱 | 14. 褐色土 | LR少、SPR微 |
| 2. 黒褐色土 | LR微、微LB微、C極微 | 15. 褐色土 | LR少、LB微、IPR、SPR微、CR微 |
| 2'. 黒褐色土 | 焼土R微 | 16. 淡褐色土 | LR多、SPR微 |
| 3. 褐色土 | LR均一少量、小IPB極微、硬い | 17. 褐色土 | LR少 |
| 4. 暗黄褐色土 | LR多、小LB微 | 18. 褐色土 | LR少、LB微、IPR、SPR微、CR微 |
| 5. 黒褐色土 | LR極微、微IPR極微、焼土R極微 | 19. 暗黄褐色土 | LR少、IPR微 |
| 6. 暗褐色土 | LR少、微LB微、焼土R少 | 20. 黄褐色土 | 2層より黒色土多め |
| 7. 黒褐色土 | LR極微、微IPR極微 | 21. 暗褐色土 | LR少、LB微、IPR、SPR微、CR微 |
| 8. 暗淡黄褐色土 | LR少、小IPB微、焼土R微 | 22. 褐色土 | 1層より小IPB及び小SPB多、CR混入、LB混入 |
| 9. 暗黄褐色土 | IPR微、焼土R微、C微、小LRB微 | 23. 褐色土 | LR少、LB微、IPR、SPR微、CR微 |
| 10. 暗黄褐色土 | IPR微、焼土R微、小LRB微 | 24. 暗褐色土 | LR少、LB微、IPR、SPR微、CR微(貼床?) |
| 11. 暗褐色土 | LR微量均等混入、C微、焼土R微 | 25. 淡黄褐色土 | 2層よりLR少、IPR微含 |
| 12. 褐色土 | LR少、LB微、IPR、SPR微、CR微 | 26. 黄褐色土 | LR主体 |
| 13. 淡褐色土 | LR多、SPR微 | 27. 黄褐色土 | LR主体 |
| | | 28. 淡褐色土 | LR少、微IPB微、微SPB少、CR微 |

第17図 S I O 1(2)

床面



床下



第18図 SI01出土土器(1)

A-A'ラインでも P16.P12.P13 がこの層群を掘り込んでおり、底面の凹凸を含め考えれば「床下」の貼り床、掘り方埋土の可能性が高い。つまり薄く黒色土を貼って床面を整えている可能性がある。但し床下の凹凸は最終掘り上がりの図面記録には示されておらず、掘り方・床下の判断も確定し得ない。遺物はこの「床下」からも多く出土しているようであり、この点も気がかりなところである。一方 26、27 層ではローム主体の黄褐色土と記録されており、「地山」の可能性もあろう。

B-B' セクションの概ね中央付近に焼土を含む層があり、この近辺に炉跡があった可能性がある。4～8 層の複雑な堆積やこの下位の掘り込みから、この場所が炉跡となる可能性も高いが、他に記録が無く確定し得ない。写真では範囲南西にも焼土があるようだが、炉跡との判断は為されていない。覆土全体に焼土が多い傾向があることも注意される。また獣骨の出土も記録されているが、出土状況写真以外の記録は確認できない。

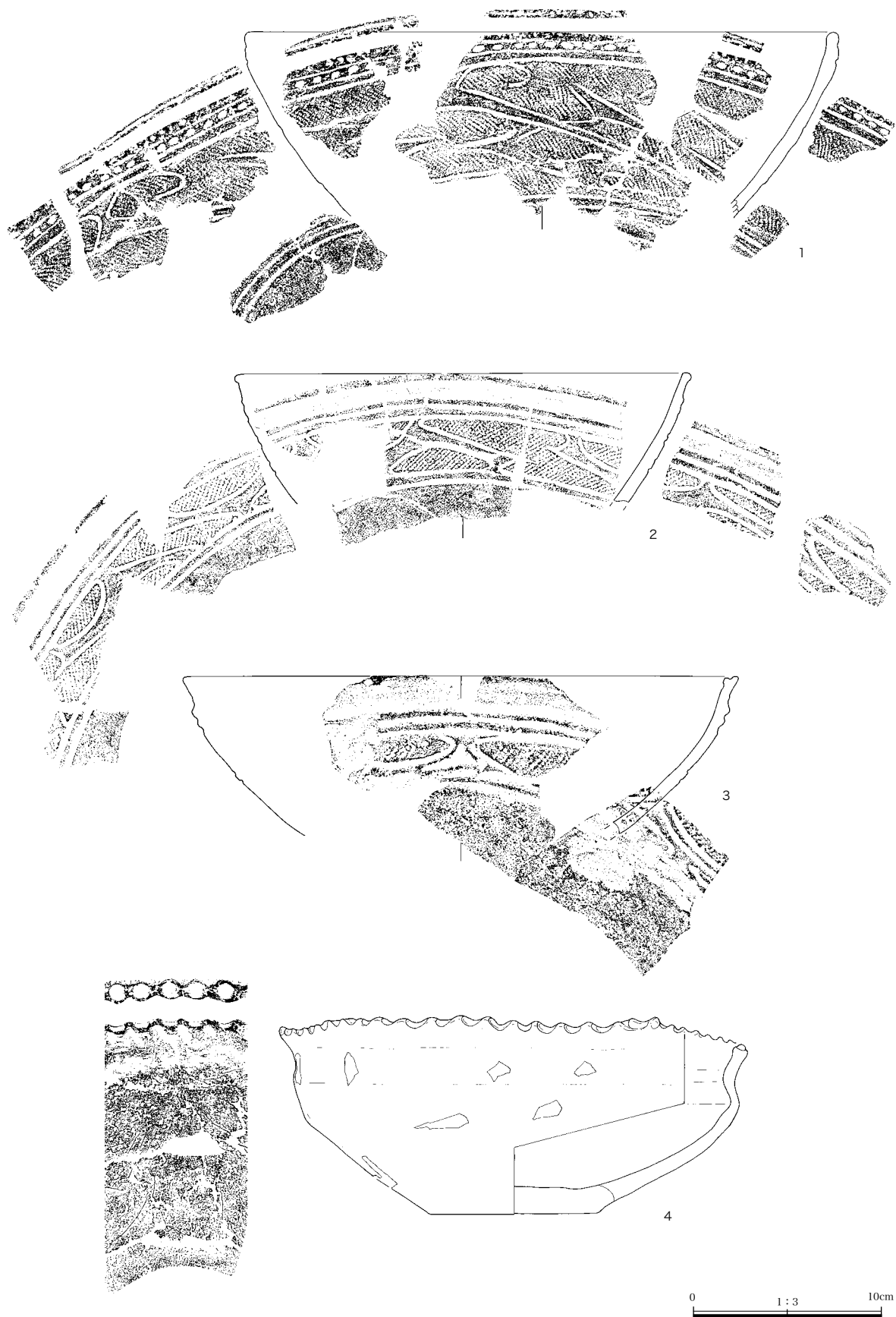
ピット ピットは深さが分かるものが 33 基あり、他に 36 基程ある（カクラン内のものや P21 にある小ピットは除く）。33 基のうち、P19.P20.P27.P28 など 9 基は住居範囲外であり、範囲内に限れば 24 基となる。また住居範囲外でも北西側に十数基、南西側にも十数基がある。深さは 10～30 cm 程度のものが多いが、P10 のように 80cm を超えるものや P4.P16.P29 等の深さ 50cm を超える良好なものがある。P9 や P16 など平面形や位置からも「支柱穴」に相当する柱穴と捉えて良いだろう。これに P47.P26 等を加えたピット配置の想定をすることも可能となろう。

遺物 遺物は多くの出土がある。土器破片が多量であるが、復元個体、或いはこれに類する大形破片の出土もある。石器では磨石類が 61 点、打製石斧が 9 点（うち覆土 6 点）、石鏃が 28 点、磨製石斧 7 点、石錘が 11 点、石剣類・独鈷石が 3 点及び 2 点、耳飾りが 4 点、石皿類 8 点等である。以上の数は石鏃を除けば表掲載分のみであり、実数はさらに増加する。各遺物の出土位置記録については現地での図化・記録が残されているが、膨大なドットの集合であり、各遺物相互の関係などは捉えがたく、遺構内の位置等についての検討もし得ていないことから、ここでの図示は為し得なかった。一瞥する限り、明瞭な特定箇所・特定レベルへの集中は認められないことのみ記しておく。

SI01 からは多量の土器が出土しており、復元個体も多い。第 19 図～30 図が覆土中出土で取り上げた土器である。第 31～36 図は当該グリッドである I5I9 グリッドから出土した土器を示す。第 18 図は SI01 の床



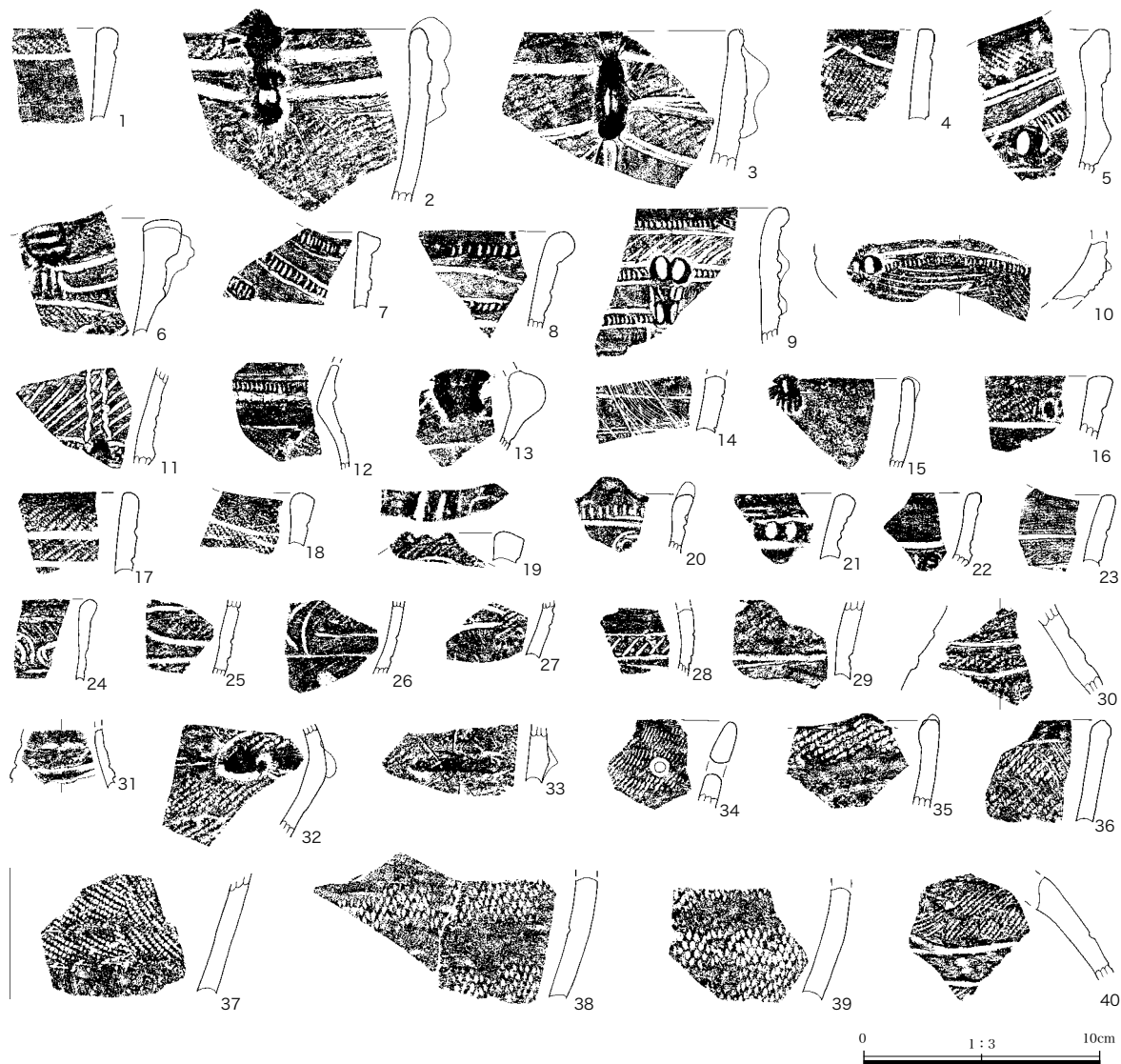
第19図 S101出土土器(2)



第20図 S101出土土器(3)



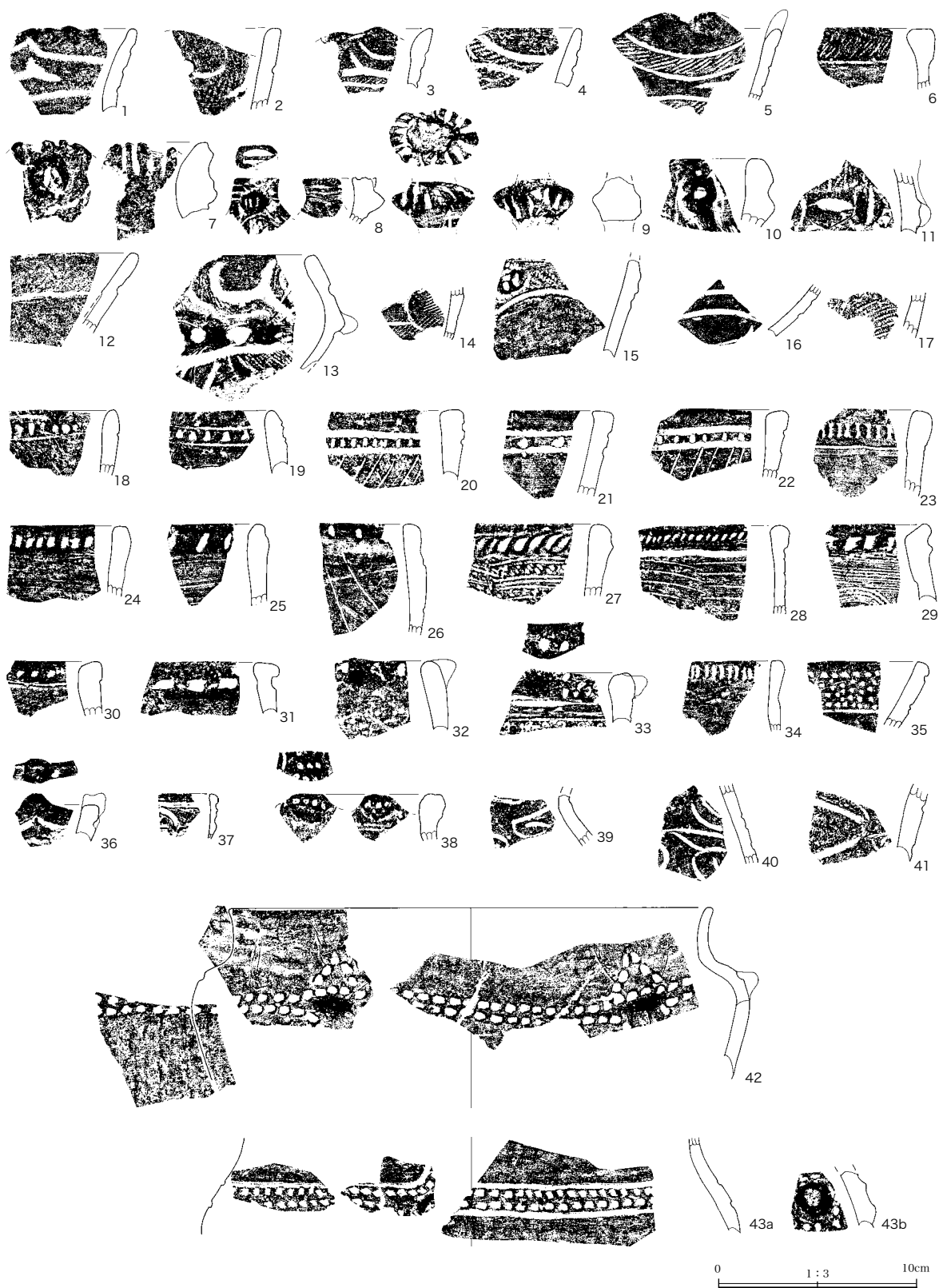
第21図 S101出土土器(4)



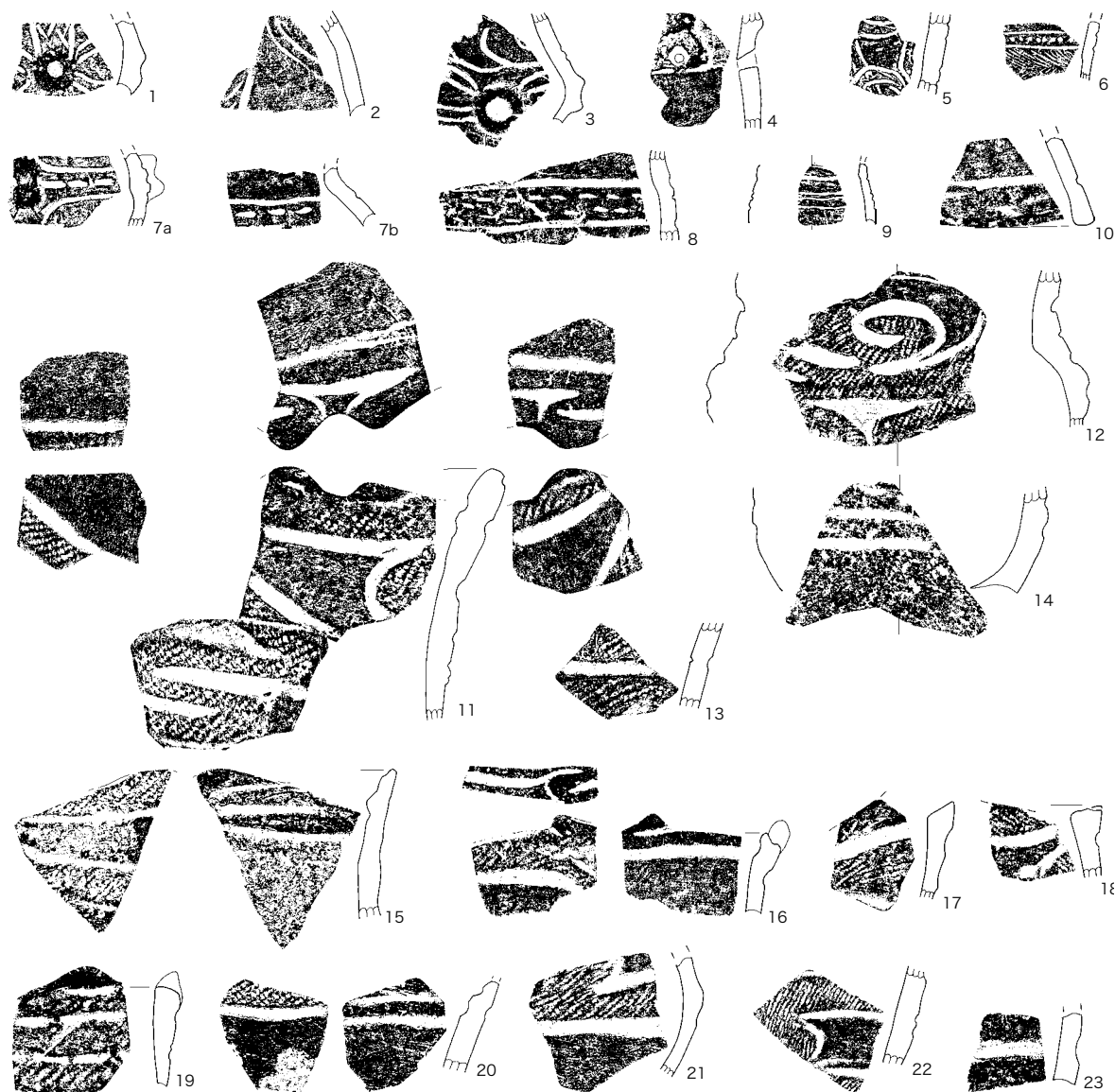
第22図 S101出土土器(5)

面および床面下として取り上げられているもので、後期安行式(4.5)、大洞C1式～C2式(7.8)、付帯口縁の土器(11.12)がある。以下注目される復原個体の観察記録を中心に示す。

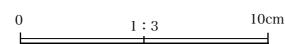
第19図1は広口の壺形土器で体部上半は3分の1程の遺存であろうか。沈線→LR→無文部ミガキ。削り～研磨ともみられる調整。最大径より下位では直下は横位、以下縦方向のミガキ調整で、ヘラ状工具によるその痕跡も比較的明瞭である。胎土には石英・白色粒を多く含み、色調は褐灰～にぶい褐色を呈する。第19図2は、やや広口の壺で、大きく2片の接合である。体部上半に文様が描かれる。沈線→LR→無文部ミガキだが、縄紋原体はかなり細かいものを用いている。内面ナデ、胎土には白色粒を多く含む。第19図3は注口土器で、口縁～頸部が壺状になるものと推定される。全体に剥離部分が多い。沈線→LR→無文部ミガキ、赤彩も残る。注口部上位及び下位に突起がある。鈎物は少なく白色粒少量、色調は内外面褐灰色を呈する。第19図4は、沈線→RL→無文部ミガキ、下半は削りに近いやや粗い調整が確認される壺状の土器体部である。第19図5は口頸部に磨消縄文による文様帯、以下に網目状燃糸紋が描かれるやや小形の深鉢である。細い網目状燃糸紋で、原体は0段Lと見られる。頸部文様は沈線→LR→ミガキ。口縁端部の装飾も刺突などで顕著である。6は小形で壺に近い形態の体部破片で、細い沈線と刺突が特徴的である。7は壺に近い形態の深鉢で、



第23図 S101出土土器(6)



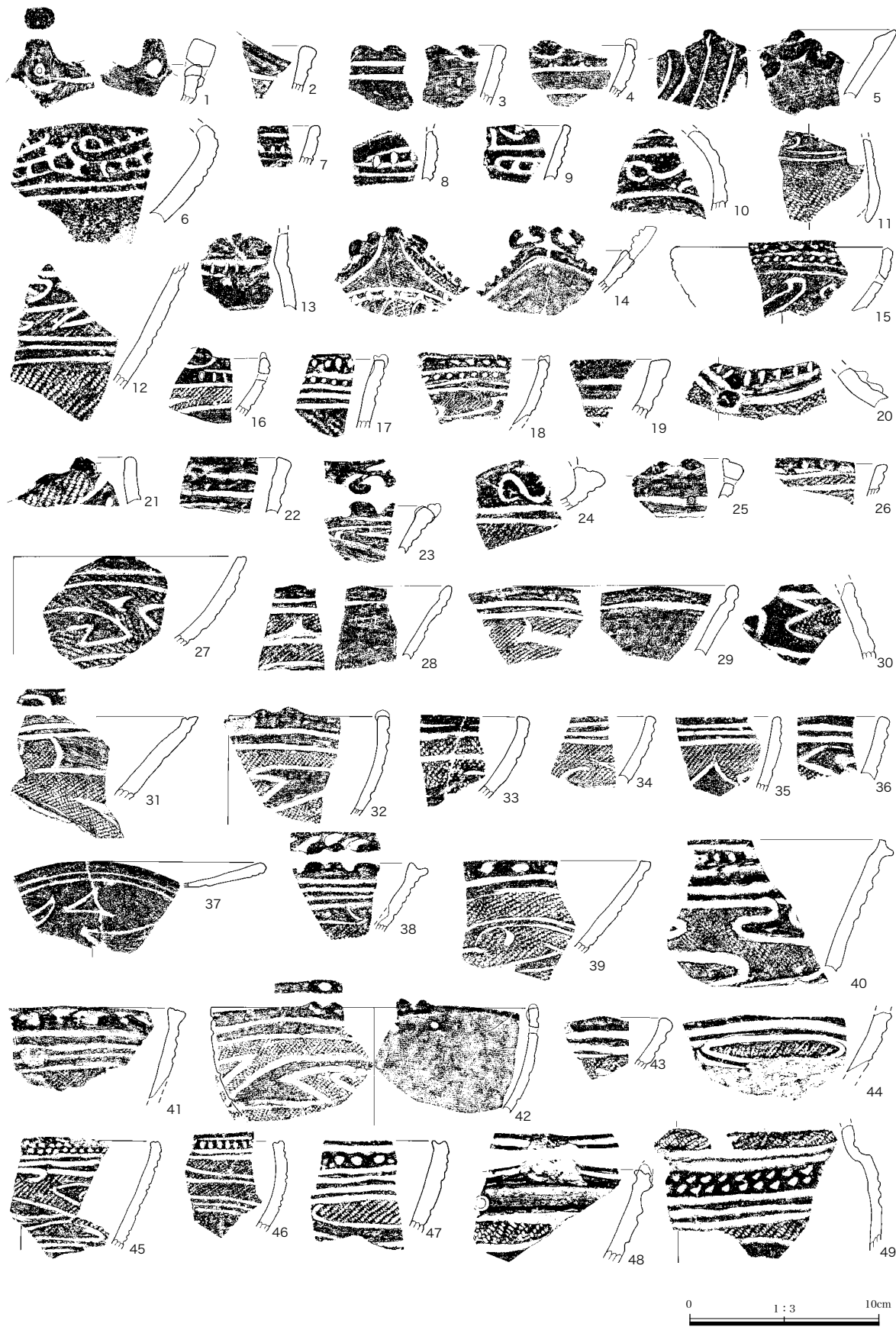
第24図 S101出土土器(7)



頸部沈線以下の大形破片から径を復元したもの。幅広い頸部の沈線→網目状撚糸紋(1段R)→無文部ミガキ。内面粗いナデ、胎土には白色粒・角閃石などをやや多く含む。

第20図1～3は大洞式の浅鉢である。1は大洞C2式の浅鉢で比較的幅広の磨消縄文による施文域がある。沈線→縄紋RL→無文部ミガキで文様が描かれ、胎土には白色粒を多量に含み、色調は褐灰色を呈する。2は、無文帯直下に磨消縄文による文様が描かれるもので、沈線→縄紋LR→無紋部ミガキの順によっている。内面もミガキで、石英・角閃石を多量に含む。示したように同一破片は多いが、接合は思わしくはない。3は大洞C2式浅鉢で、狭い施文域に楕円状の単位文が並んで表現され、単位文間には三叉状の凹部が描かれる。色調は橙色を呈する。4はやや高さのある浅鉢で口端に刺突列がめぐり、やや大きく円形に窪む刺突(押捺)でこれにより口縁が小波状を為すとも言えるが全体がかなり歪んでいる。内外面ミガキ調整だが器面がやや荒れている。胎土には石英、白色粒、角閃石を多量に含む。外面灰褐色、内面暗赤褐色を呈する。

第21図1は頸部屈曲の深鉢で体部には縄紋RLが斜方向に施されている。2は壺または近い形態の土器で、



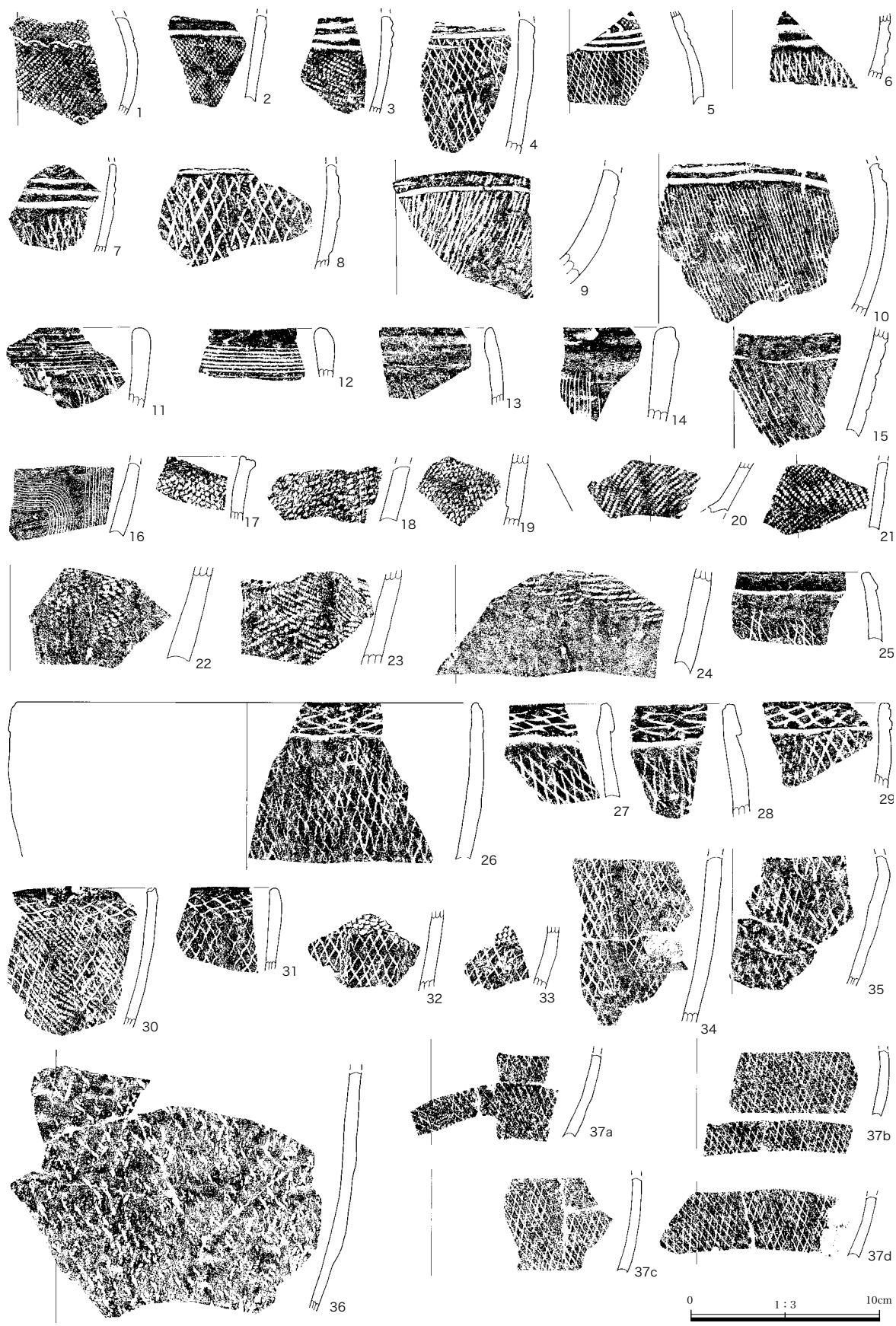
第25圖 S101出土土器(8)



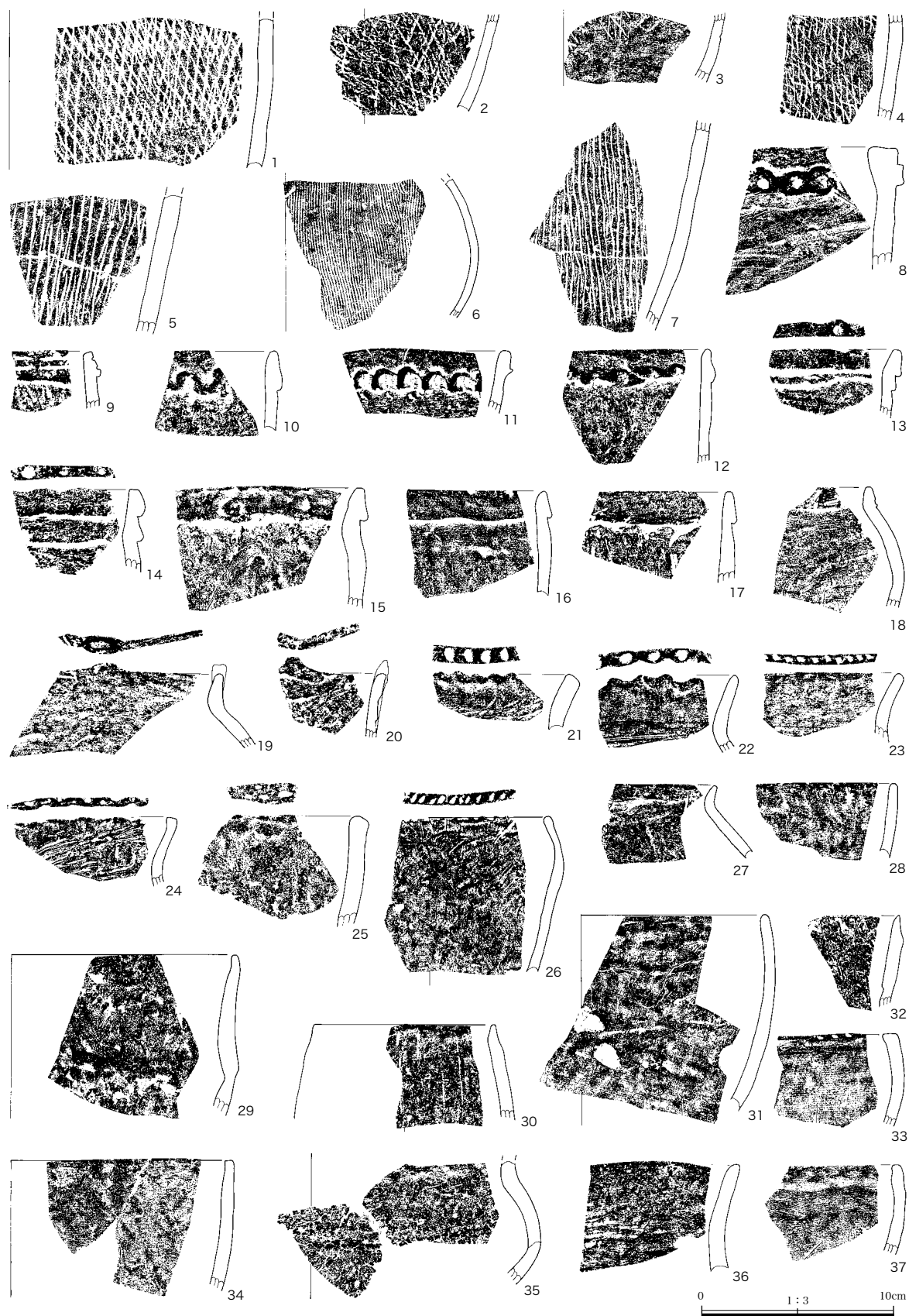
第26図 SI01出土土器(9)



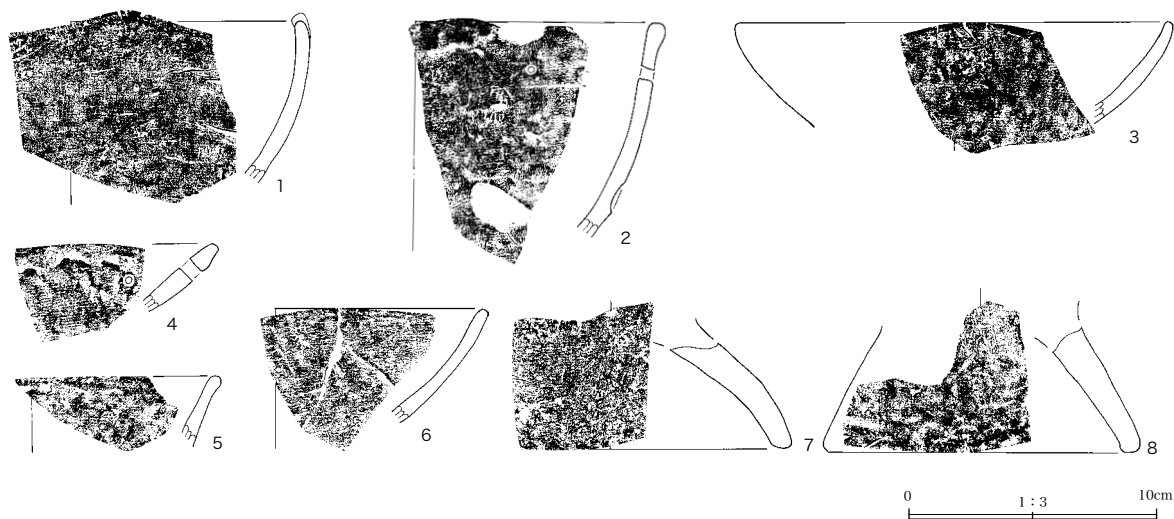
第27図 S101出土土器(10)



第28図 S101出土土器(11)



第29圖 S101出土土器(12)



第30図 S101出土土器(13)

部分的な遺存だが口縁直下の眼鏡状隆帯、溝底の刺痕、工字文状の文様が特徴的である。7は広口壺で、おそらく下位まで無文となる。内外面ミガキ調整、胎土には石英・角閃石を含む。9は底部破片で、器種は小形深鉢であろうか。大きめの剥落は意図的な打ち欠きによる可能性がある。外面黒褐色、内面暗褐色を呈する。内外面ナデ調整。10は、深鉢の体部下半でおそらく上位は壺状に括れる頸部を有する形態が推測される。石英・白色粒を極めて多く含む。ナデ～部分的なミガキが観察される。外面灰褐色内面赤褐色。

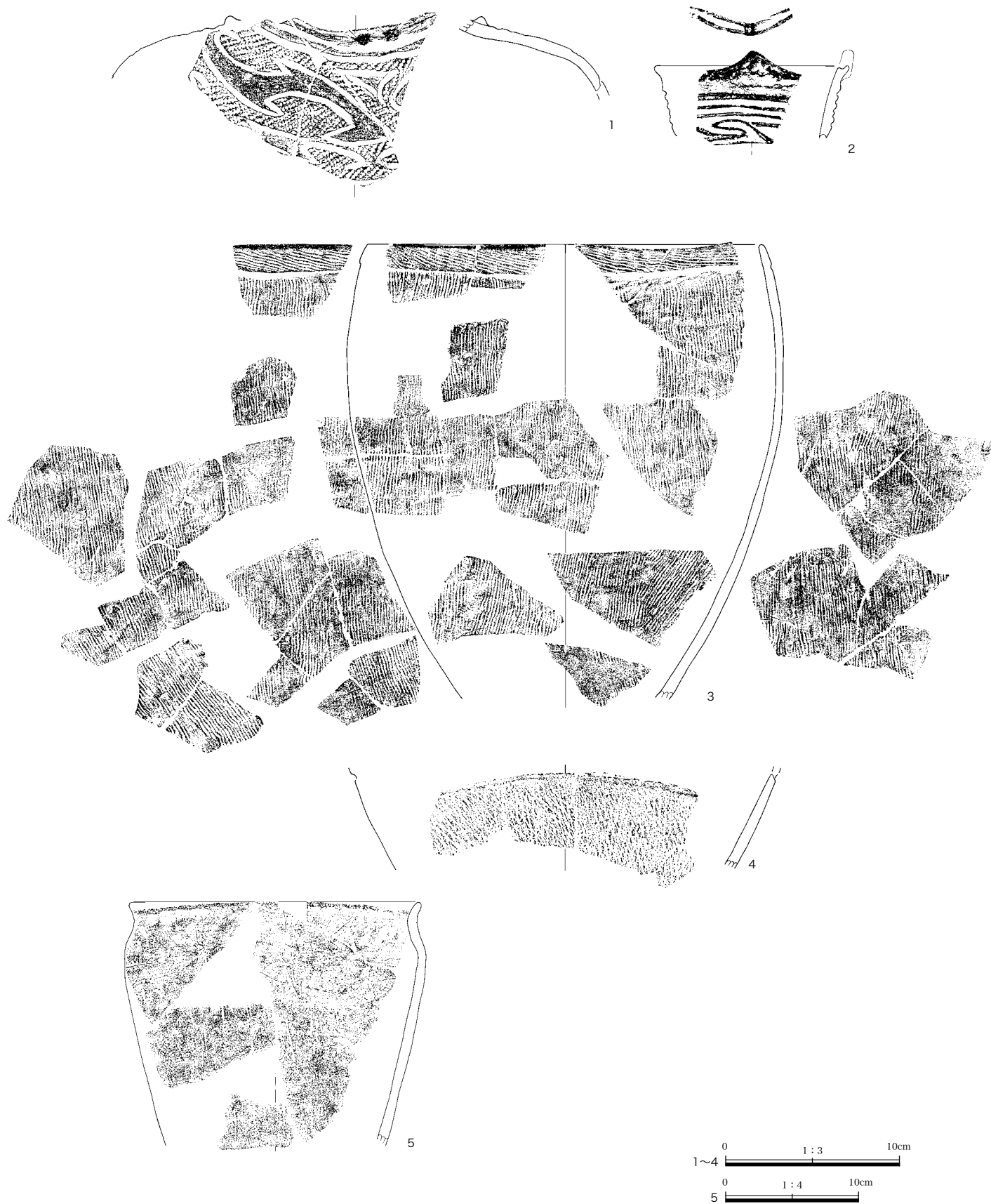
第22図1～14は後期安行式をまとめた。厳密な意味での南関東の安行式とは言い難い表現例もいくつかある(1～3など)。16以下は瘤付系である。35以下は縄紋のみ描かれるものだが、無文部との交互帯状表現例(35)や瘤付系の単位文様を縄紋部のみで帯状効果を示すもの(37)がある。38.39は擬縄紋の例。40は壺・注口土器の可能性を考えたが、単純に上下逆で深鉢の底部近くとした方が良いかもしれない。

第23図1～17は主に晩期前半が推定される磨消縄文文様の破片。7～9は安行式大波状縁深鉢の突起部、分、1～5は大洞B式との判断もあろうか。17は円形の透かし孔を有するもので、台付き鉢等となろうか。18以下は紐線文系の粗製土器および沈線や刺突により文様を描くものである。本遺跡では附点紐線文系、隆線文系とも少ないが、18.23.28などはこの仲間と考えても良いか。35以下は分類・類型化しづらい文様を有しているもので、細かな円形刺突が密に施される35など型式判断が難しい。42.43は径復元し得た大形破片で、おおむね最大径の体部上半に帯状の刺突列を描き、瘤状の突起を数単位配する構成のようである。瘤上位で三角形に突出文様が描かれることも特徴でいわゆる「天神原式」との類似も窺える。

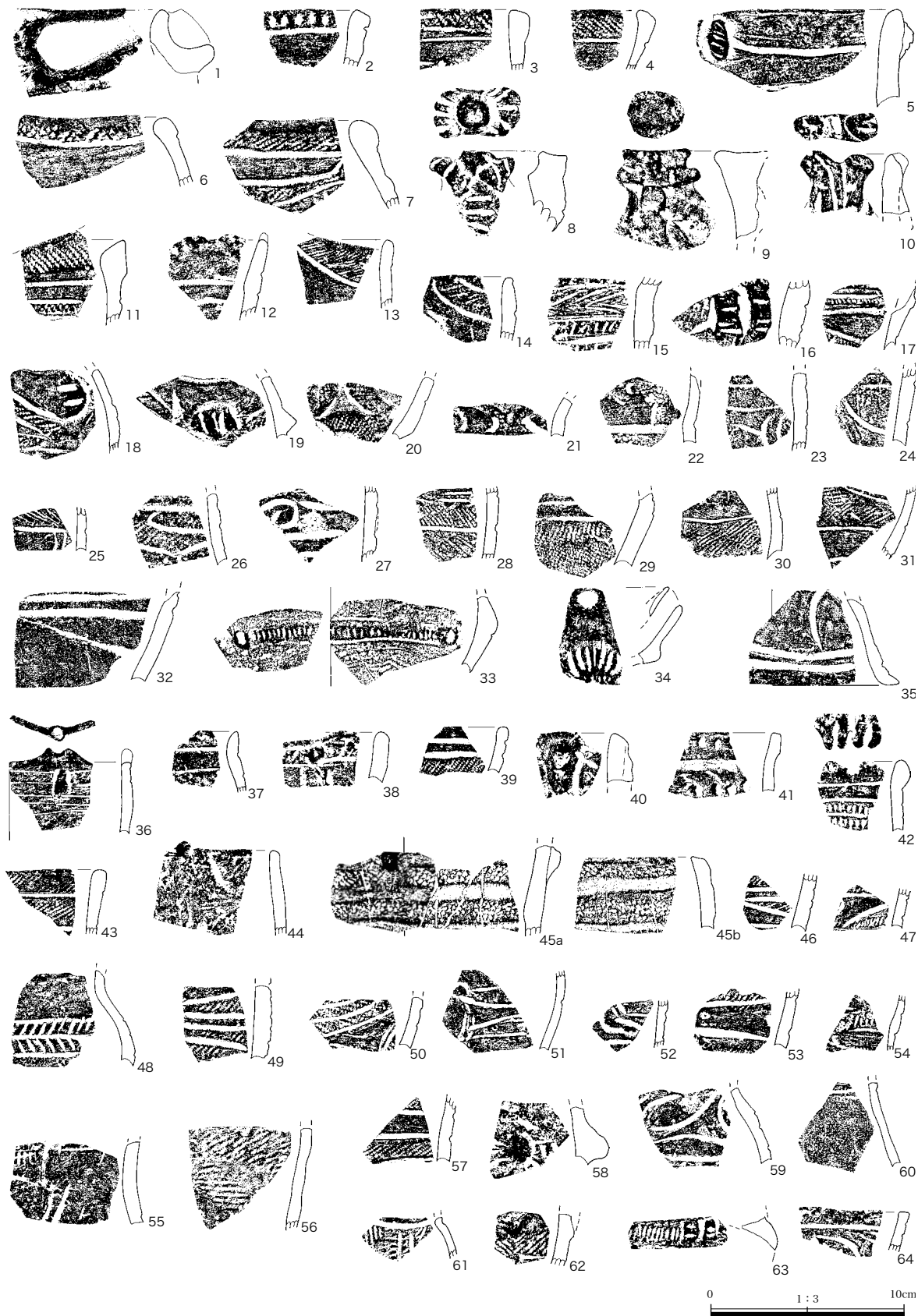
第24図1～10も同種の土器群で安行3c～3d式併行期をおそらく主体とする。沈線+円形突起の1.3なども特徴的である。6は細密沈線文の土器。9は小型土器とすべきか、10は台付脚部。11～23は前浦式で太い沈線、内面文様などが特徴となる。

第25～27図は大洞式であるが、大洞B式、同B-C式などは少なく、大洞C1式・C2式を主体とする。器種は浅鉢が目立ち壺や深鉢が一定量ある。第25図5.14は安行式系とすべきか。42は円形貫通孔が並列配置されているもので、2孔の間に割れ口はなく補修孔ではない。焼成前穿孔で、またこの2孔を結ぶライン及び左上方へ細い線状の変色部があり、紐状の装飾がかけられていた可能性を示す。

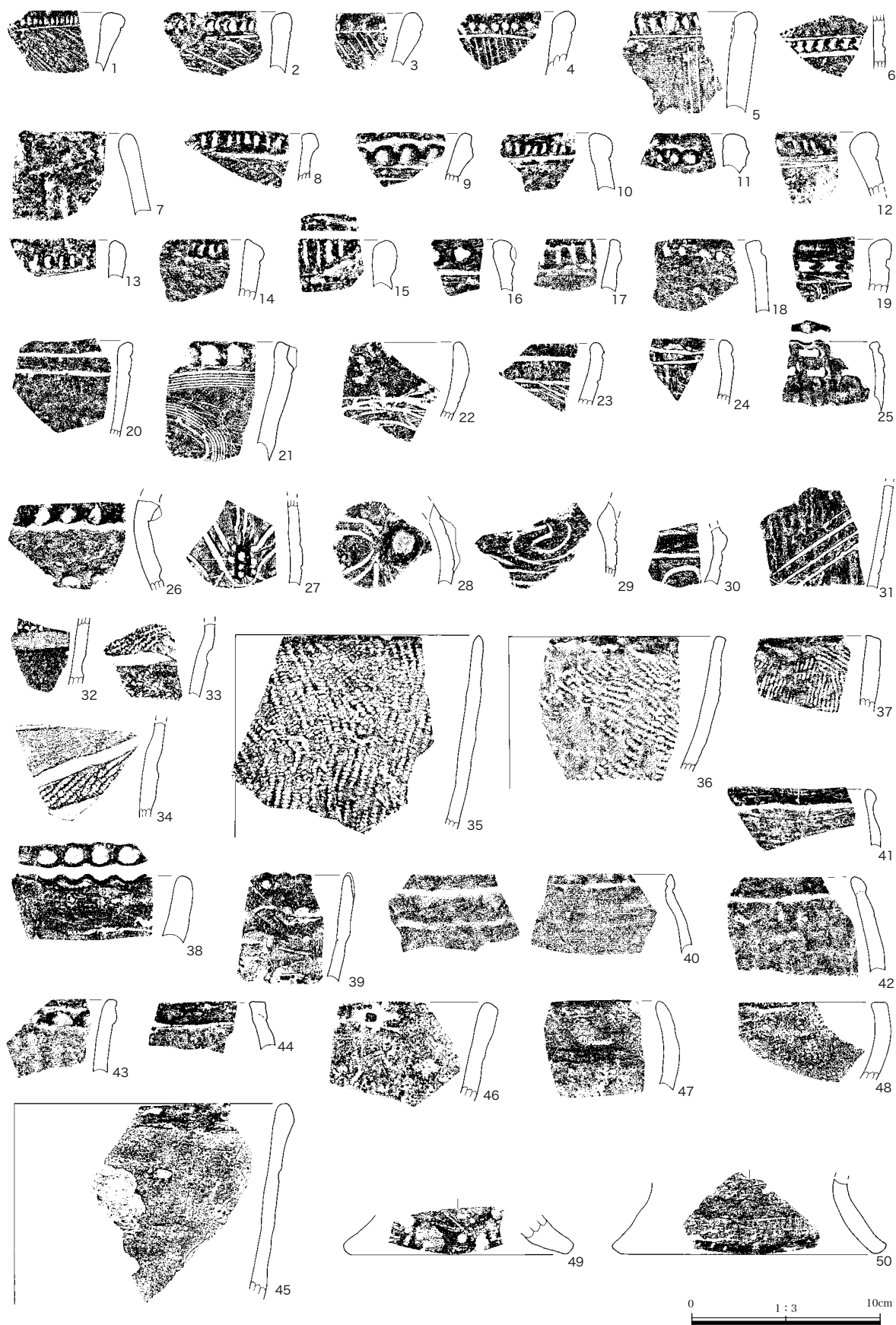
第26図1～32は大洞C2式を主に示すが、浅鉢、深鉢頸部など、磨消縄文雲形文がかなり変形している例が目立つ。粗い撚糸紋上に変形雲形文が表現される25なども注目される。35～40は壺形で、35はかなり小形の例か、41～43は注口土器である。



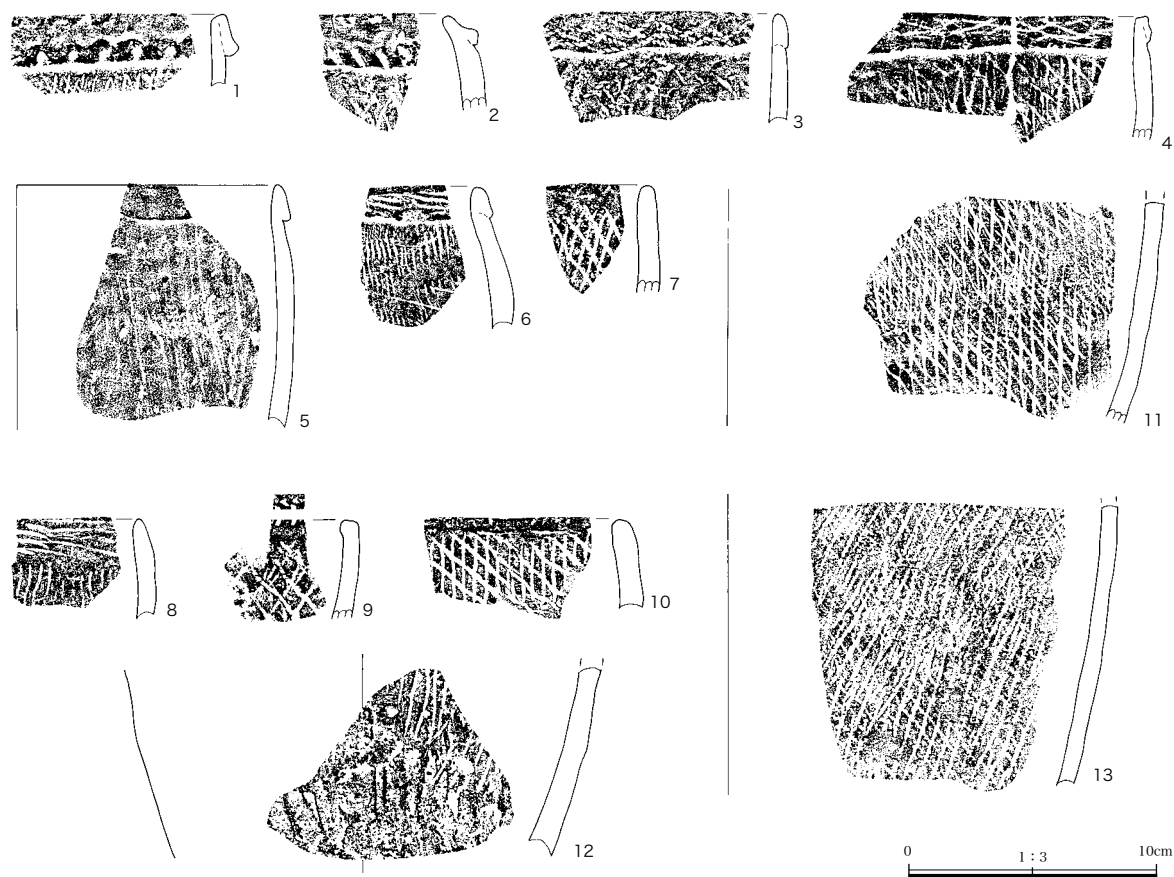
第31図 S101出土土器(14) [1519]



第32図 S101出土土器(15) [1519]



第33圖 S101出土土器(16) [1519]



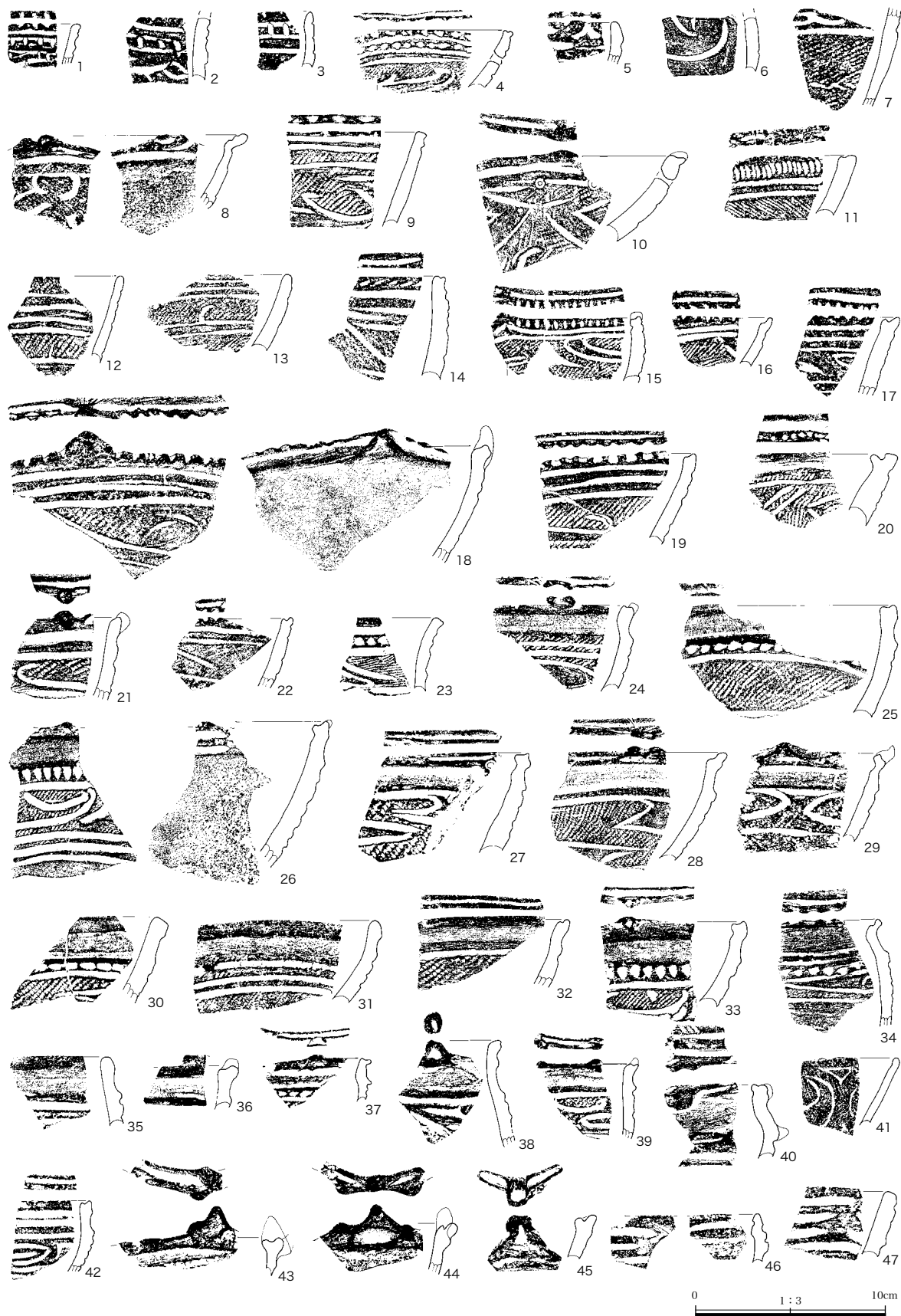
第34図 SI01出土土器(17) [15I9]

第27図1～29は体部破片、30～44は半精製または「頸部刺突列土器群」で円形刺突列+縄文(36.39)、刺突列+円形突起(40.41)などが特徴である。47～54には大洞C2式新段階および以降が推測される破片を示す。50は径復元し得たもので、壺に近い形態、A突起、細い隆線状表現の口縁部・頸部文様など注目される。54は沈線で矢羽状の表現が描かれているようである。

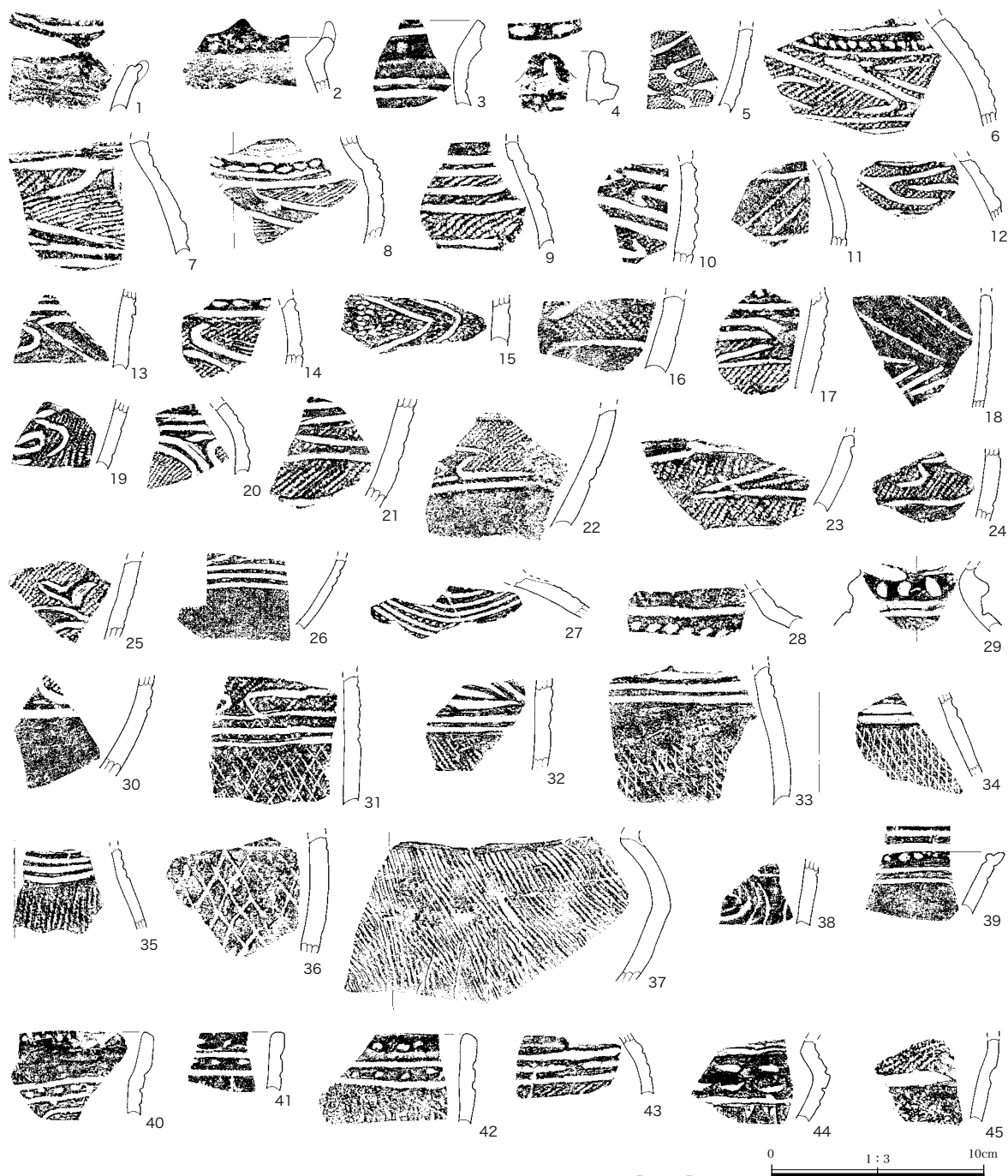
第28図1～10は体部文様帯下端の沈線+以下に縄紋・網目状撚糸紋・撚糸紋が描かれる破片。11～16は条線の破片で、おそらく後期後半主体、17～24は縄紋のみの破片である。17～19は擬縄紋、21は羽状を構成している例。25～29は付帯口縁の破片で網目状撚糸紋主体。30.31は同様の構成ながら折り返し・段が見られないものである。32.33は縄紋と網目状撚糸紋の併用例。34以下第29図4までは網目状撚糸紋のみの例だが、原体末端が確認できる34やかなり粗い原体の36など注目される例を含む。第29図5～7は撚糸紋のみ確認できる破片。8以下は付帯口縁で、この下端に刺突などの装飾が施されるものもある(8.10～12)。14は二段の折り返しで口縁端部には刺突がやや間隔をおいて施される。19以下は口縁以下無文の破片だが、19～26では端部に刺突・刻みが加えられる。28以下は無文で装飾もないものだが、器種や器形の多様性を示せるよう選択している。量的には単純に外傾する34のような例、あるいは若干内湾する31.33のような例が多い印象である。第30図には無文の浅鉢および台付鉢を示す。総じてミガキが丁寧である。

第31図以下はSI01が位置するグリッドイ5I9グリッド包含層出土土器を示す。第31図に復元個体、第32～36図には破片を主に示す。

第31図1は壺の体部上半破片である。沈線→縄紋LR→無文部ミガキで、縄紋原体は節大きめ、ミガキは丁寧な感がある。頸部には2個1対の突起が付される。内面もミガキ。胎土中の鉱物は少なめで白色粒を少



第35圖 S101出土土器(18) [1519]



第36図 S101出土土器(19) [1519]

量含むのみである。色調は外面黒褐色、内面褐灰色を呈する。主文様の雲形文は比較的整っているように見えるが、全体の構成ではやや乱れたような配置とも見える。2は小形精製深鉢の口頸部破片で、口縁直下の無文部、以下に磨消縄文ではない大洞C2式文様が特徴となる。内面調整も含めミガキが丁寧で、胎土には白色粒を含み、色調は黒褐色を呈する。3はやや口縁内湾する深鉢で、いくつかの破片群から形態復元したものである。破片数は多いものの接合は必ずしも思わしくなく、形態復元や図での破片配置には不確実な部分が残る。口縁は付帯状で、この部分には横方向の擦糸紋、以下体部では縦方向の擦糸紋(1段R?)が密に施される。4は網目状擦糸紋が施される体部破片で、破片上端に沈線が巡り、この上位に精製文様が描かれる可能性がある。5は無文の粗製深鉢で、頸部~口縁ではやや丁寧なミガキ、体部ではケズリに近い調整である。

白色粒及び灰色粒をやや多く含む。内外面とも灰黄褐色を呈する。

第32図1は中期の土器で加曾利E I式または前後の土器、2以下が安行式系の土器で、6.7は内湾する深鉢の口縁部、8～10は大波状縁深鉢の突起、13.14はおそらく晩期前半、18以下の体部破片でも晩期とすべき例があるが明確に示し得ない。6は擬縄紋の可能性はある。33.35は台付鉢、34は瓢形注口土器の注口部。36～64は瘤付系と分類したものだが、ここでも判断の迷う例は多い。45は擬縄紋の例で、文様構成的には安行式に近い。

第33図は粗製土器紐線文系（1～6）、口縁直下に押捺紐線を有する北関東東部系粗製土器（9.11）、沈線や刺突で文様を表現するもの（25.27～29等）、前浦式（33.34）などがある。35～37は縄紋のみの例、以下折り返しの付帯口縁無文（42.44）、無文の鉢（47.48）、台付脚部（49.50）、付帯ではないが口縁が肥厚している無文深鉢（45）等を示す。

第34図1～4は付帯口縁で体部が網目状捺糸紋のもの。5は付帯口縁無文、6は捺糸紋、7.8は折り返し・段の見られないものである。

第35.36図は大洞式の破片で、覆土取り上げ破片同様、大洞C 1式、同C 2式を中心とする。第35図では24以下に無文帯を有するものや非磨消縄文の破片、A突起を有するもの等新しい様相を示すものを配した。雲形文は総じて変形している例が目立つが、28のようにいまだ整然としている例もある。第35図10は雲形文を描く末端沈線がくの字状に直線的となっている例。本例では焼成前穿孔の細い孔2孔が見られる点も注目される。第36図5以下は体部破片で、31～37は下半の縄紋、捺糸紋などが目立つ破片を示す。27～29は明らかな壺だが、6.7.9.12なども「広口壺」と考えてよいかもしれない。18は矢羽状沈線が施される破片、39～44は半精製もしくは刈沼遺跡で特徴的な一群、45はここに示したが前浦式である。

S I O 2（遺構第37・38図、遺物第39～60図）

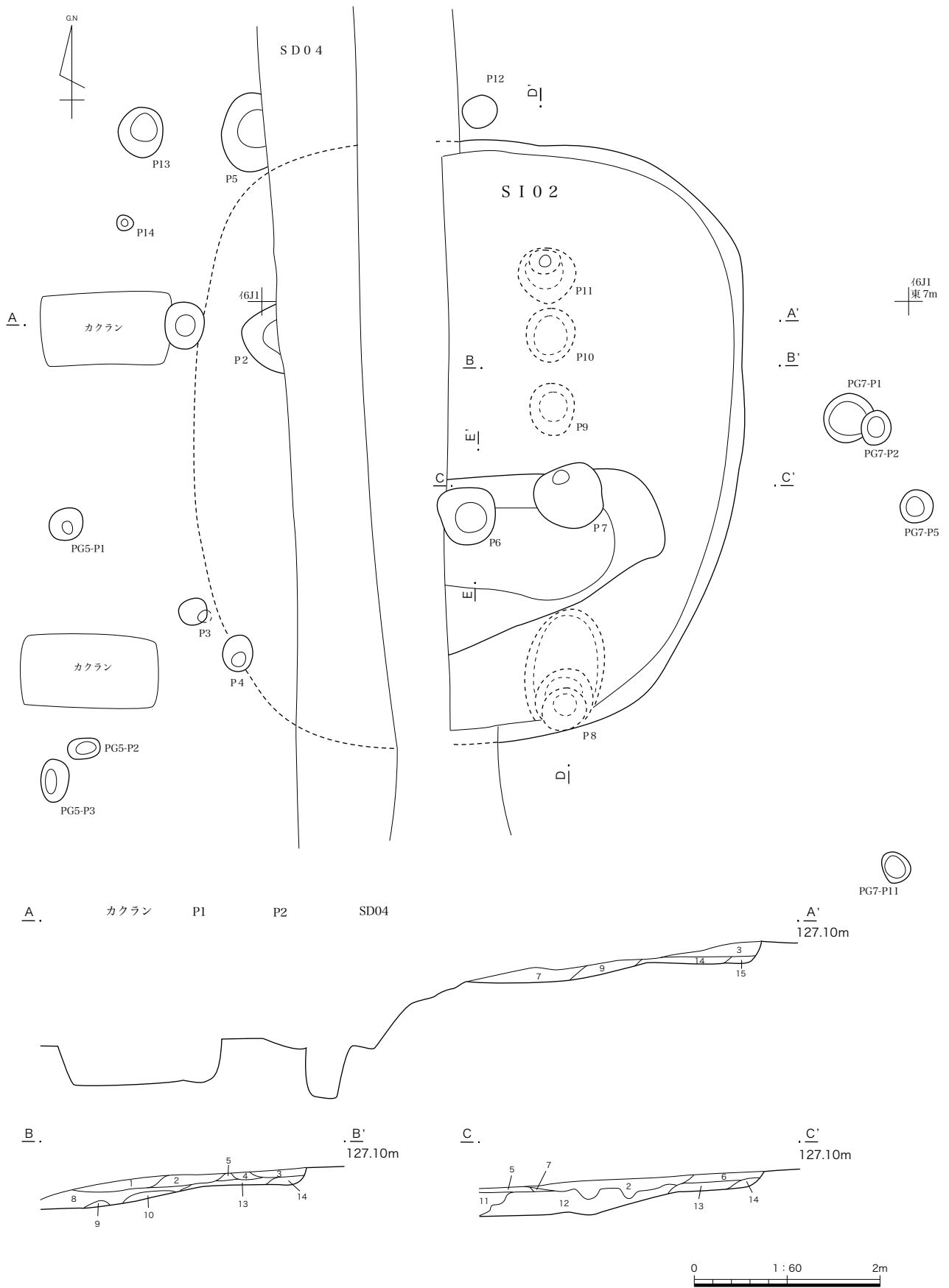
位置・形態・経緯 イ6J1・J0、イ5J0・J1 グリッドに位置する。SD04に西側を大きく壊される。東側の掘り込みは比較的明瞭で壁も捉えられているが、西側の掘り込みは不明である。南北6.46 m、東西推定で6 m、覆土のある範囲では東西3.2 mである。円形～隅丸方形プランで、これから推定できる軸はほぼN-0°となるが、後述のように問題がある。周辺のピットも図示したが、隣接するものを除けば本跡に関わる可能性は低い。P6.P7がかかると不整形のプランは床面でも黒色となっており、カクランの可能性もあるが、床面レベル近辺でも他と大きく変わらない遺物出土状況を示しており、住居構築前の遺構或いは落ち込みの可能性が考えられよう。C-C'セクションではピットにかかる部分をあわせて示しておらず当初記録の土層断面のみ示す。

確認はローム漸移層だが、黒色土の範囲はプラン外の南側まで広がっている。南側の壁は断面での土層観察による判断ではなく、写真記録からも明瞭ではないことから、プラン・平面形態も不確定なところが残る。或いは、明確に捉えられなかったが、別の遺構と重複している可能性もあろうか。また本遺構図では示していないが、この上位包含層部分のT-1トレンチ土層断面図では、おおよそ相当する位置（少しずれあり）で包含層を切る遺構の土層が示されており、本遺構が包含層を掘り込んで作っている可能性も残る。

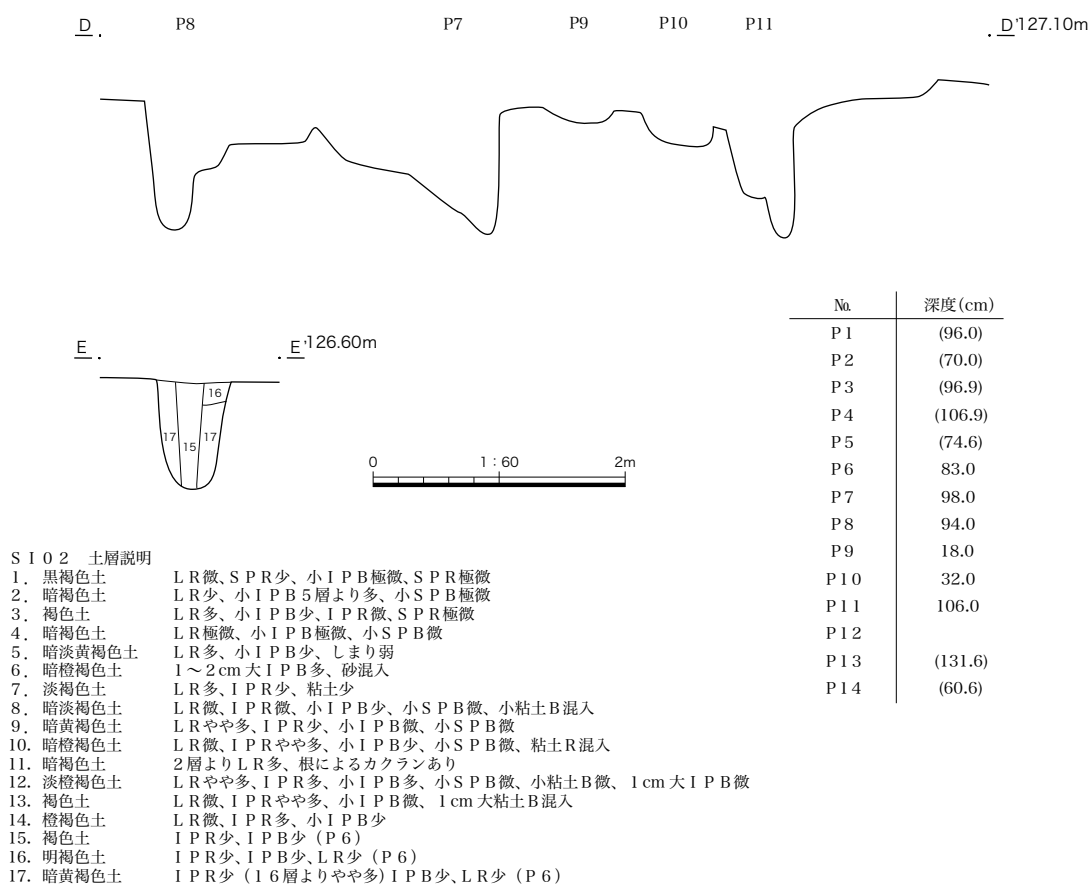
床面・覆土 覆土はローム・今市パミス・七本桜パミスの粒の多少によりかなり細かく分層されているが、黒色土を基調として、壁際の堆積層ではロームが多いようである。1～5層が黒色基調の上位層群、8～15層がロームや今市パミス等が多い下位の層群と大別してみることもできる。

P8～P11はエレベーションの記録及び写真から確認したもので、平面図上では点線で示した。

床面は概ねローム面で、若干の凹凸があるうえに、東西セクションで見ると西側（中央側）が下がっており、



第37図 S I 0 2(1)



第38図 SI02(2)

外側のテラス状平坦部とは緩やかな傾斜ながら段差をなしているとも捉えられる。

ピット 本跡のピットとしてP1～P14まで付したが、P13.P14はプラン外で壁からもやや距離がある。一方南西側のピット群5で扱ったピットや東側のピット群7で扱ったピットも関わる可能性が残されている。支柱配置の検討も難しいが、P2.P11.P7は一定の深さがある良好なピットであり、これらが支柱穴となる推定案もあろう。壁柱穴がきわめて少ないことから「支柱構造」の可能性も想定させるが、良く分からない。推定壁プランに近く位置するP3.P4等もかなり深く注意される。土層断面記録のあるものはP6のみであるが、柱痕状の分層が為されている。

遺物 覆土上位から床面レベルにかけて多量の遺物が出土しているが、概ね土器片である。土器は多量で、復元個体、或いはこれに類する大形破片の出土もある（原図遺物出土状況図は示していない）。石器では磨石類が33点、石皿類が5点、石錘が6点、打製石斧が1点、磨製石斧が2点である。

SI02出土土器はI6J1グリッド出土のものと併せて掲載した。

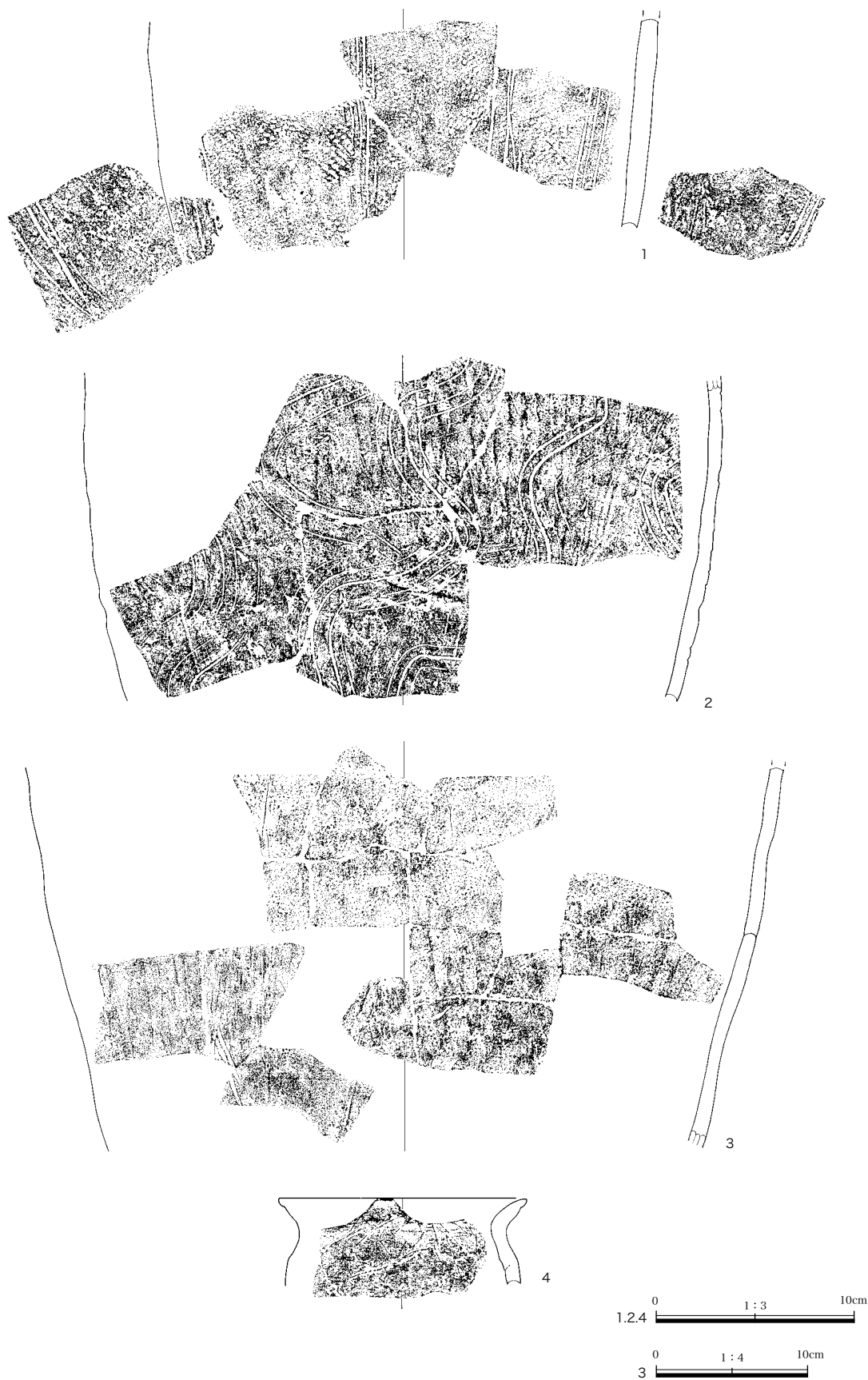
第39図1はやや厚手で小形の鉢。沈線→縄紋LR→ミガキ・研磨で内面も丁寧なミガキである。内外面とも黒褐色を呈し胎土には石英・白色粒を多量に含む。沈線ため口縁端部の装飾もやや太めの隆線による。

第39図2は太い沈線が特徴な大洞式鉢。沈線→LR→無文部ミガキで、無文部研磨～削り取り状の浮彫的な表現である。白色粒少量、石英多量に含み、色調は内外面黒褐色を呈する。

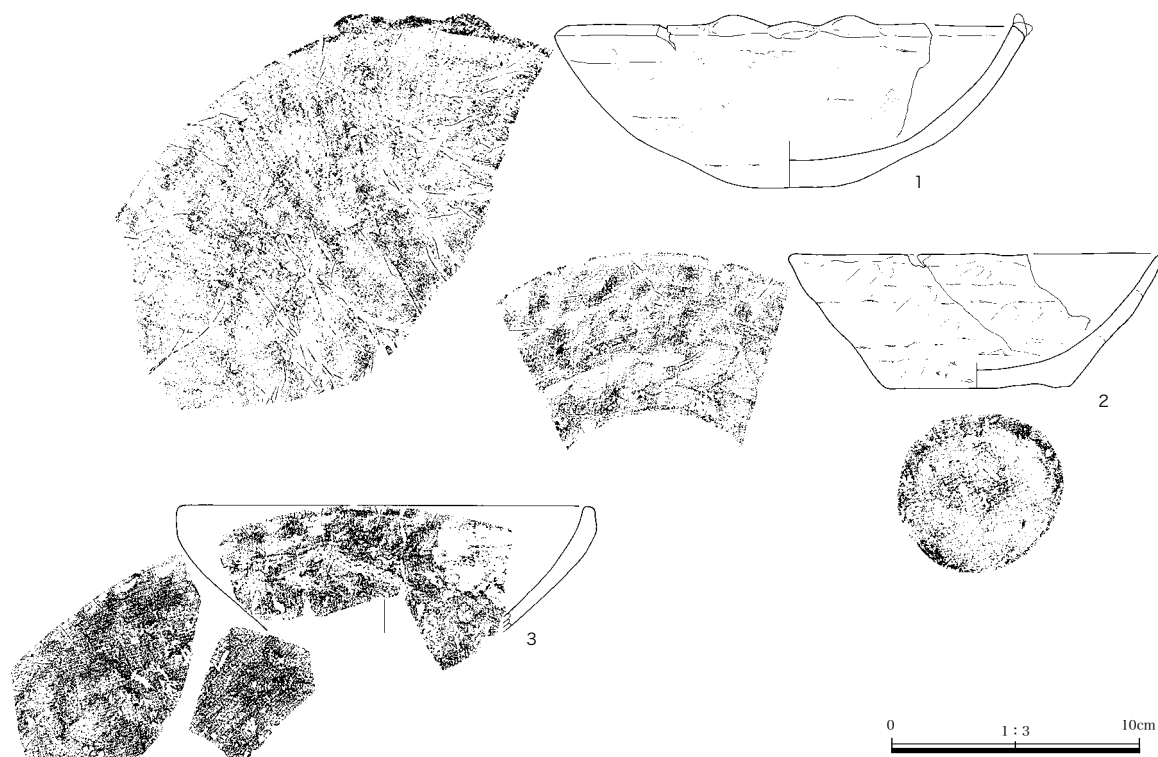
第39図4は口縁部および頸部に点列を巡らす深鉢である。口縁端部にB突起に近い突起1か所が見られる。沈線→刺突→粗いミガキで、体部縄紋は結節がある。色調は外面にぶい赤褐色～黒褐色、内面黒褐色、胎土には2mm程度の礫をやや多く含むほか石英・白色粒を含む。煤付着が顕著である。同図3も4と同種構成



第39図 S102出土土器(1)



第40図 S102出土土器(2)



第41図 S102出土土器(3)

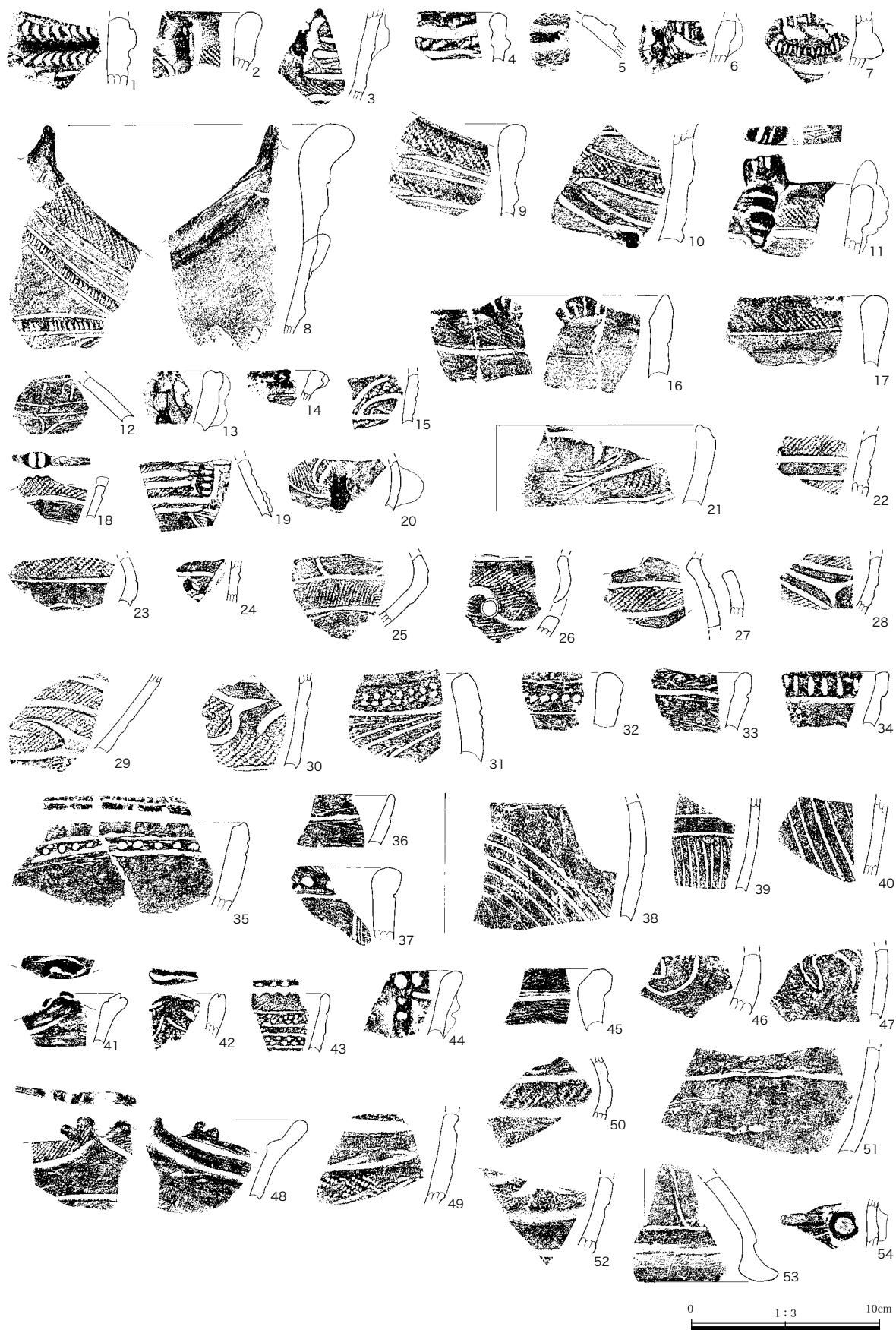
の土器だが頸部にも縄紋が加えられる。外面の剥落部が多い。沈線→刺突→縄紋LR→無文部ミガキの順で描かれ、内面はミガキである。胎土には1～2mmの礫や白色粒を多く含む。5は無文の広口壺で、内外面ともミガキに近い調整が観察される。石英・白色粒を少量含む。色調は内外面にぶい橙色を呈する。6は体部下方に最大径を有し、頸部から強く外反する深鉢である。頸部沈線より下位は縄紋Lに結節が加えられる。口縁端部には刺突が施される。胎土には白色粒を多量、白色針状粒を少量、石英少量含み、内外面にぶい赤褐色～黒褐色を呈す。7は硬質な感を受ける無文の深鉢で、外面はケズリ調整といえる線状痕が多く認められる。外面橙色～黒褐色、内面橙色～褐灰色、胎土には石英・角閃石をやや多く含む。8は肩部に最大径を有する無文深鉢で、口縁端部には若干上位に突出する突起が付される。白色粒・灰色粒を多く含み、外面橙色、内面灰褐色を呈する。

第40図1～3は体部の大形破片で、1は縄紋地に沈線による懸垂文が描かれており堀之内式となろうか。2は条線が疎らに施される土器、3は無文の土器である。4は小形で広口壺状のものである。

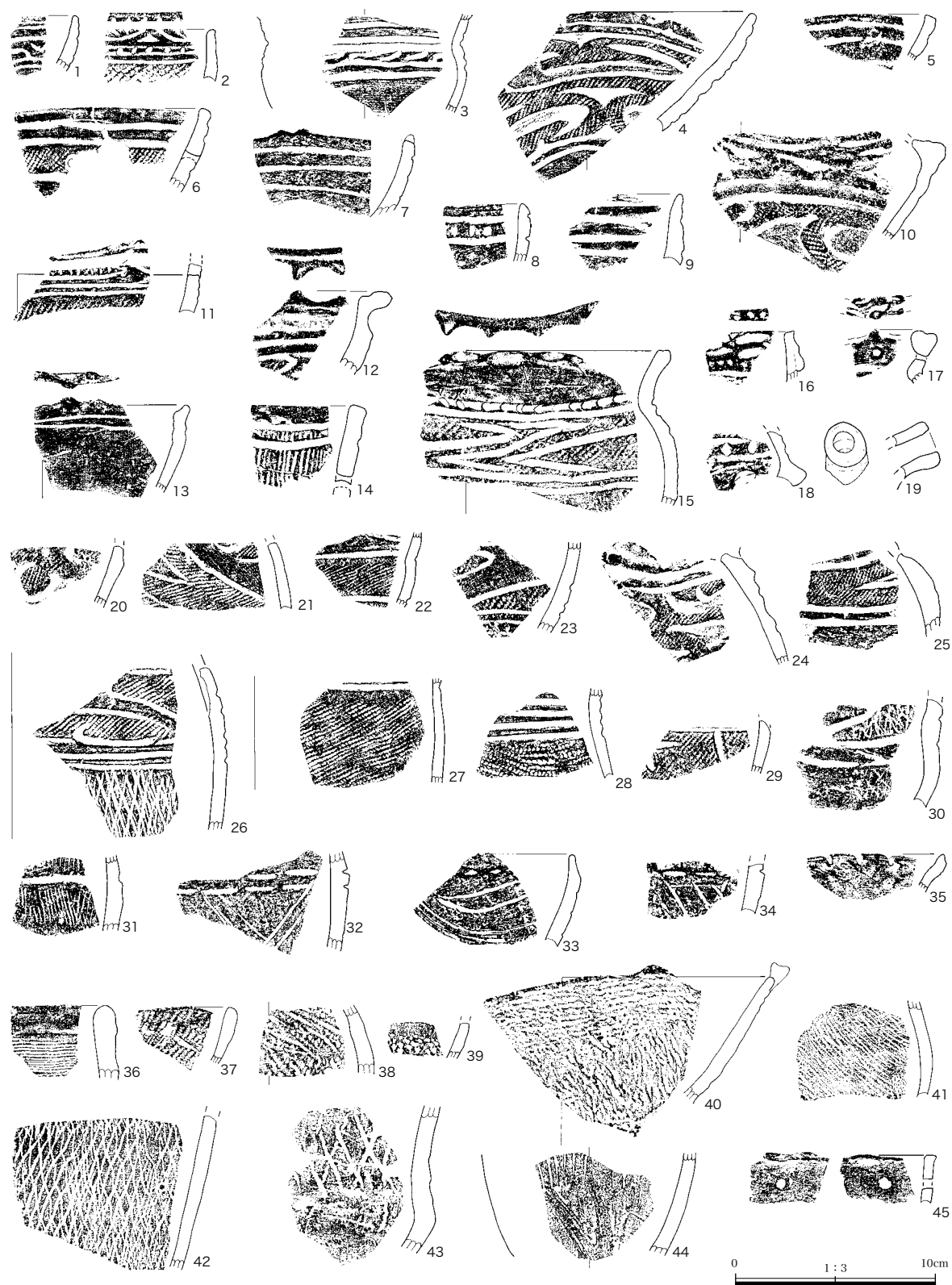
第41図1は無文の鉢で口径19cmとやや小さめである。外面ケズリ～ミガキ、内面ミガキで口縁端部には三山の突起がおそらく1単位付される。胎土には石英多量、白色粒少量を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。2は無文の鉢で内外面ともミガキ調整だが、外面は輪積痕および成形時の凹凸を多く残している。色調橙色基調で、胎土には白色粒・灰色粒・角閃石を少量含む。3は無文小形の鉢で、外面凹凸残すやや粗いナデ、内面ミガキ調整。色調は内外面褐灰色で、胎土には石英・白色粒・角閃石を多く含む。

第42～44図には破片資料を示す。1が中期の土器、2～12が後期安行式と当初分類したものだが、10.11など安行3a式の可能性もある。16～20は一応壠付系としたもの、21～30が晩期初頭としたものである。31以下は紐線文系の土器と沈線・刺突で文様を施すもので、時期幅は広い。41.42は姥山Ⅱ式系の突起を有している。49～52は前浦式、53は晩期安行式の脚部、54が円形貼付文を有しているものである。

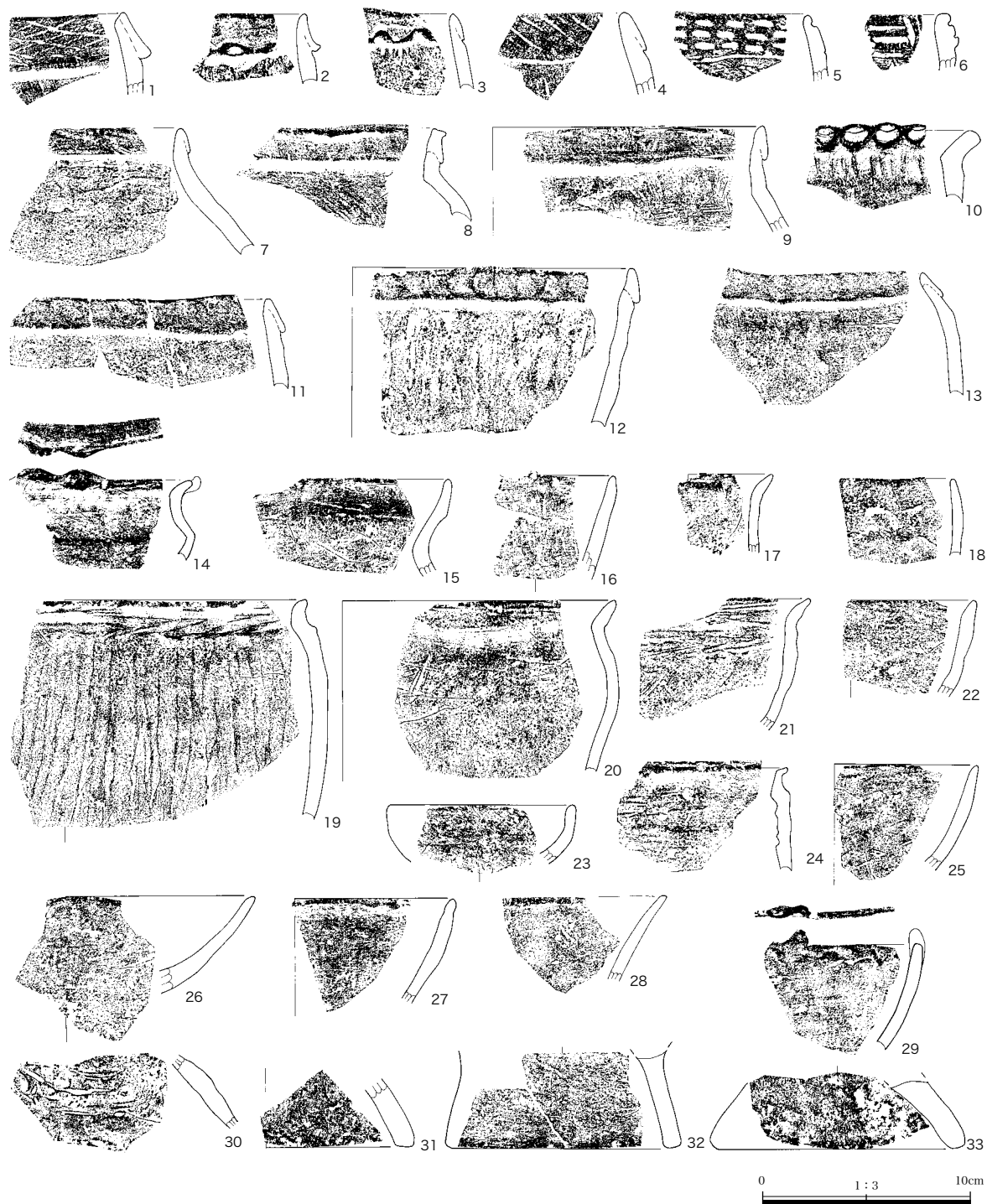
第43図には大洞式系を示す。15のような雲形文変容例が注意される。36以下は条線、縄紋、網目状撚糸



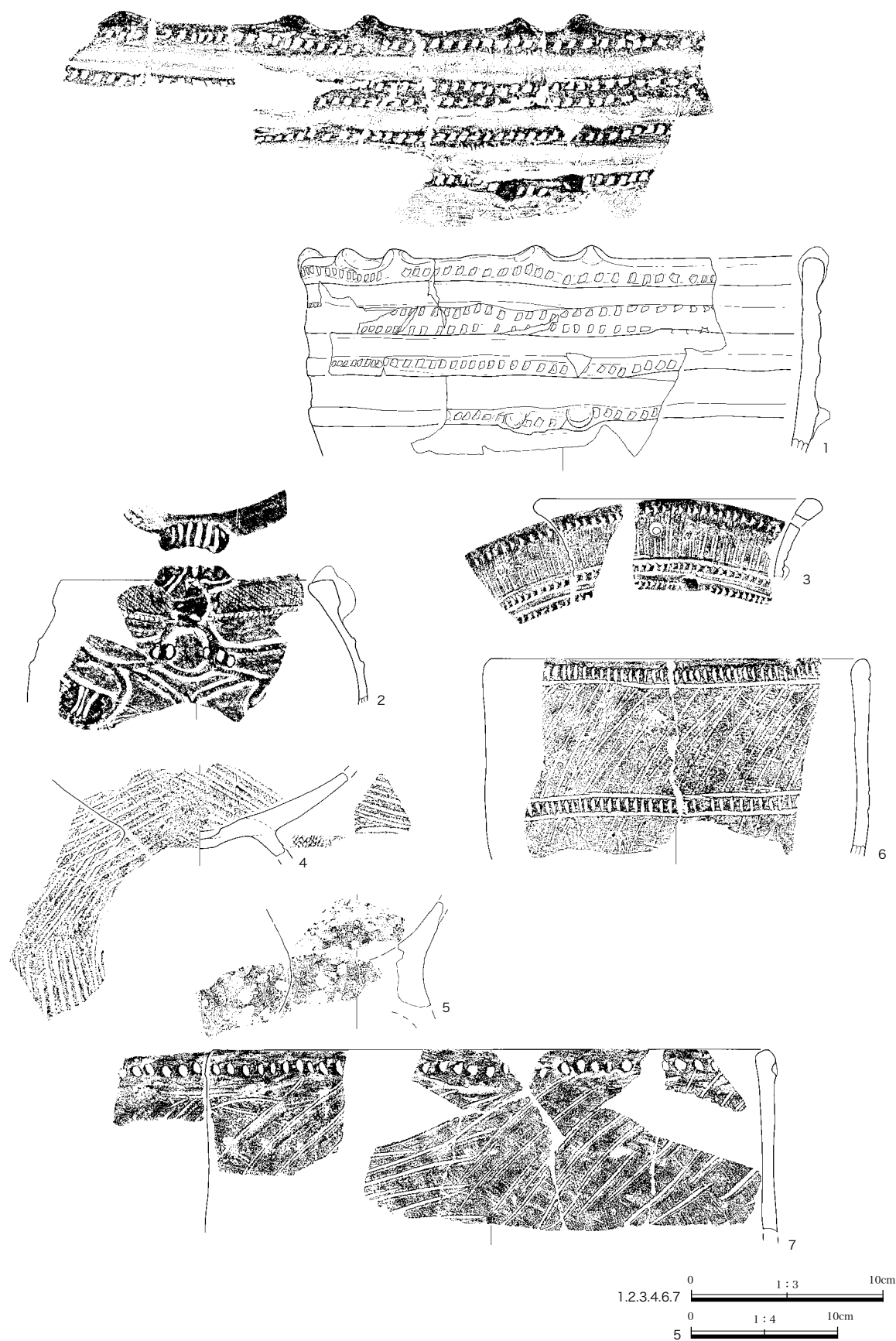
第42図 SIO2出土土器(4)



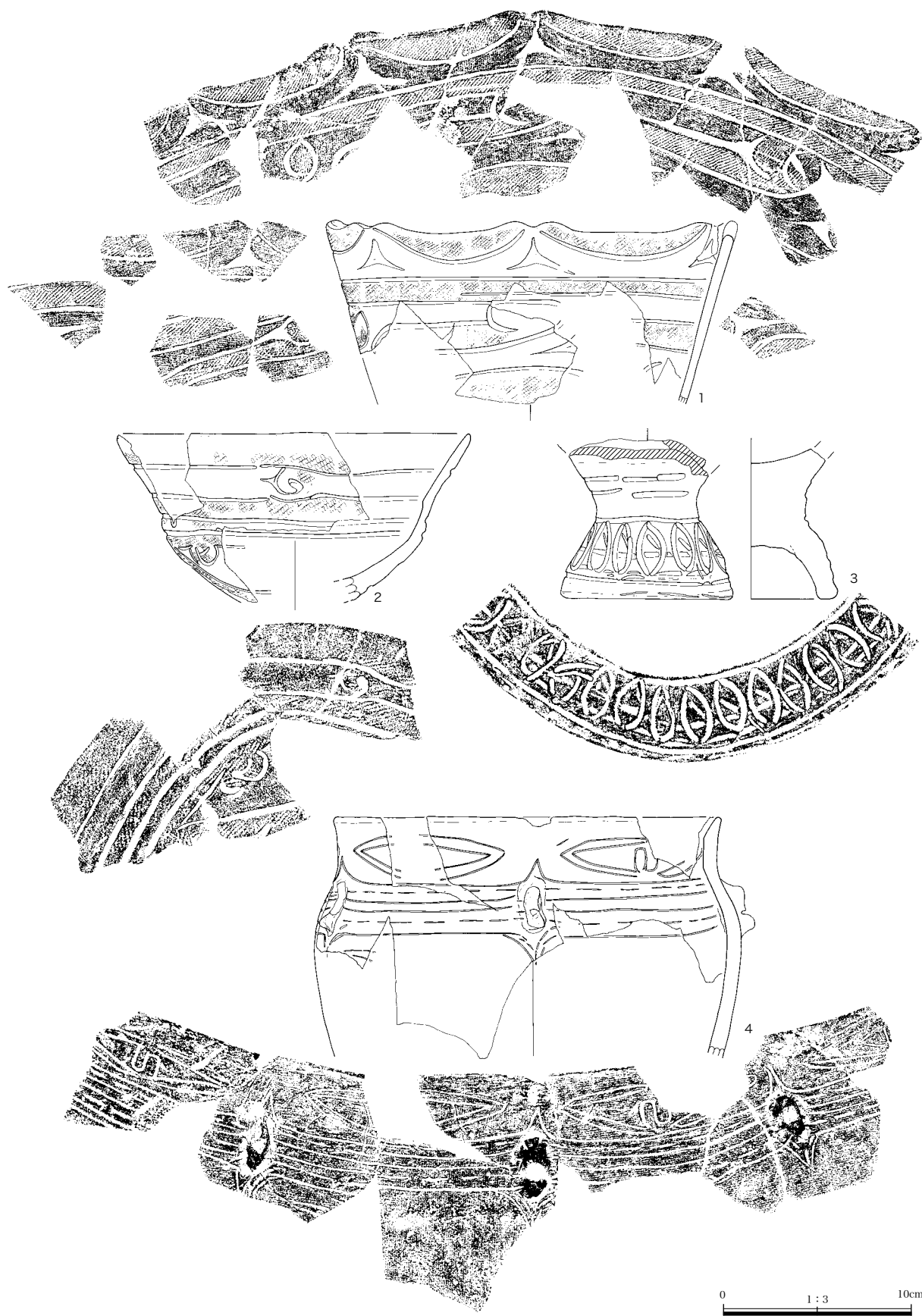
第43図 SI02出土土器(5)



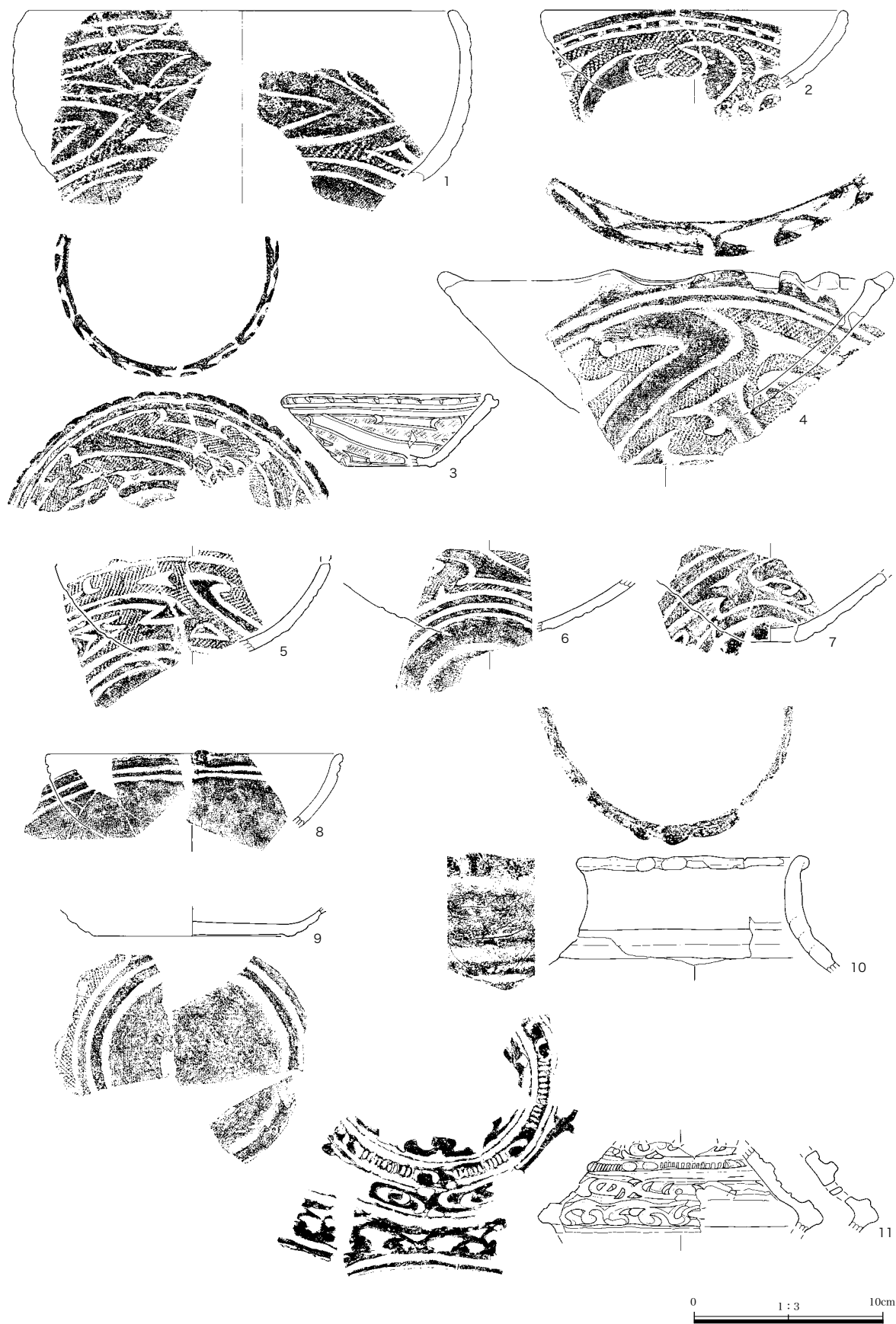
第44図 SIO2出土土器(6)



第45図 S102出土土器(7) [16J1]



第46図 S102出土土器(8) [16J1]



第47図 S102出土土器(9) [16J1]

紋などの例である。40は撚糸紋が施される鉢のようで、やや異質である。39は擬縄紋例である。

第44図に付帯口縁の深鉢、無文の深鉢、鉢などを示す。口縁直下が屈曲し、以下が膨らむ最大径を若干下がった位置に設ける器形があり、大洞C2式に伴う可能性が高いと考えられるが、多少の変化を伴うようであり検討が必要である。

第45図以下が当該グリッドのI6J1グリッド出土例である。

第45図1は隆帯と凹部が交互帯状に描かれるもので、凹部は安行1式～同2式の隆起帯間の凹部に近いミガキ～研磨となっている。突起→刺突施文後のミガキである。刺突は先端が二叉状の工具で、刺突内部にその痕跡がある。二段目のみ2列の刺突列となる。内外面にぶい褐色を呈し、胎土には雲母やや少量、白色粒および石英少量を含む。2は安行2式瓢形の土器で注口土器となろう。質感や豚鼻状突起、細い隆起線上の刻みなど南関東例と大きな差異は感じられない。3.4は安行式台付鉢だが、同一では無さそうである。4の台付鉢は、外面条線、脚部には縄紋RLが施される。内面へラ状工具によるミガキ、脚部内面はナデ、胎土には石英・白色粒を含む。5は台付土器の接合部破片。向き正しければ上位は高さのある深鉢となるが、上下逆の台付鉢とした方が良いかもしれない。図での坏部内面丁寧なナデ、外面ミガキ調整だが器面があらわれており、アバタ状の剥落部が多い。胎土には小礫、石英・白色粒を多く含み、色調は外面灰褐色、内面褐色を呈する。7は口縁部に刺突列が描かれるもので、施文域配置・文様は附点紐線文系と同種だが、質感・印象はかなり異なる。若干口縁肥厚しているが、場所によっては段差に近いところもある。刺突は段直下に近いところで、左側に粘土のまくりが生じるC字状（爪形状）の施文、頸部沈線は細く先端鋭角な工具によるもので、かなり間隔をあけての施文が特徴的である。胎土には石英・白色粒を多く含むほか、角閃石・褐色粒を少量含む。色調は内外面ともにぶい赤褐色。一方6の土器は口縁部及び頸部に沈線及び刻みが巡る紐線文系で、南関東例と大きな差異は感じられない。

第46図1は口縁～頸部の遺存部が多い深鉢で、口縁では弧線＋三叉文、頸部に入組文＋三叉文が描かれる。頸部では遺存部がやや少ないこともあるが、整った入組三叉とは言い難く、典型的ではない円文などもみられる。沈線→縄紋LR→ミガキで、三叉部分は削り取り状の手法が見られる。胎土中の鉱物は少なく緻密だが、白色粒や褐色粒を少量含む。色調はにぶい黄褐色～黒褐色を呈する。2は口縁外傾する鉢だが、台付となる可能性が高い。沈線→縄紋LR→無文部ミガキだが、ミガキは一部でさほど丁寧ではない。器面やや荒れている。色調はにぶい橙色で、胎土には褐色粒を少量含む。沈線の幅が細いところとやや太めのところがあり、縄紋・無文帯の幅も一定しないなど、やや雑な作りともみられる。

第46図3は台付鉢の脚部で全周に文様が展開する。定型的な文様構成ではなく、いわゆる「小型・ミニチュア」の類でみられる類例の少ない特例的な文様構成例とも捉えられる。下位の「I字文」は横位沈線及び右下がりの短い沈線を切るようにレンズ状弧線文で描かれる。括れ部の沈線も含め、幅広で深めの施文である。沈線施文後一部ミガキが加わるが、さほど丁寧ではない。白色粒・角閃石を多量、石英をやや多量に含み色調は外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色（全体に白っぽい色調）を呈している。4は頸部に文様が描かれる深鉢である。沈線・長めの刺突（短沈線）は先端鋭角な工具による細い沈線である。中央に窪みを有する縦長の突起は3単位あり、全体では5単位か。この部分では横位区画線から上下へ三角形状に突出する。沈線は突起作出後である。胎土には白色粒を含み、色調は外面にぶい赤褐色～黒褐色、内面橙色～黒褐色を呈する。頸部区画線より下位に文様はないようで、一部沈線状に見える横位線も文様とみてよいか疑問が残る。

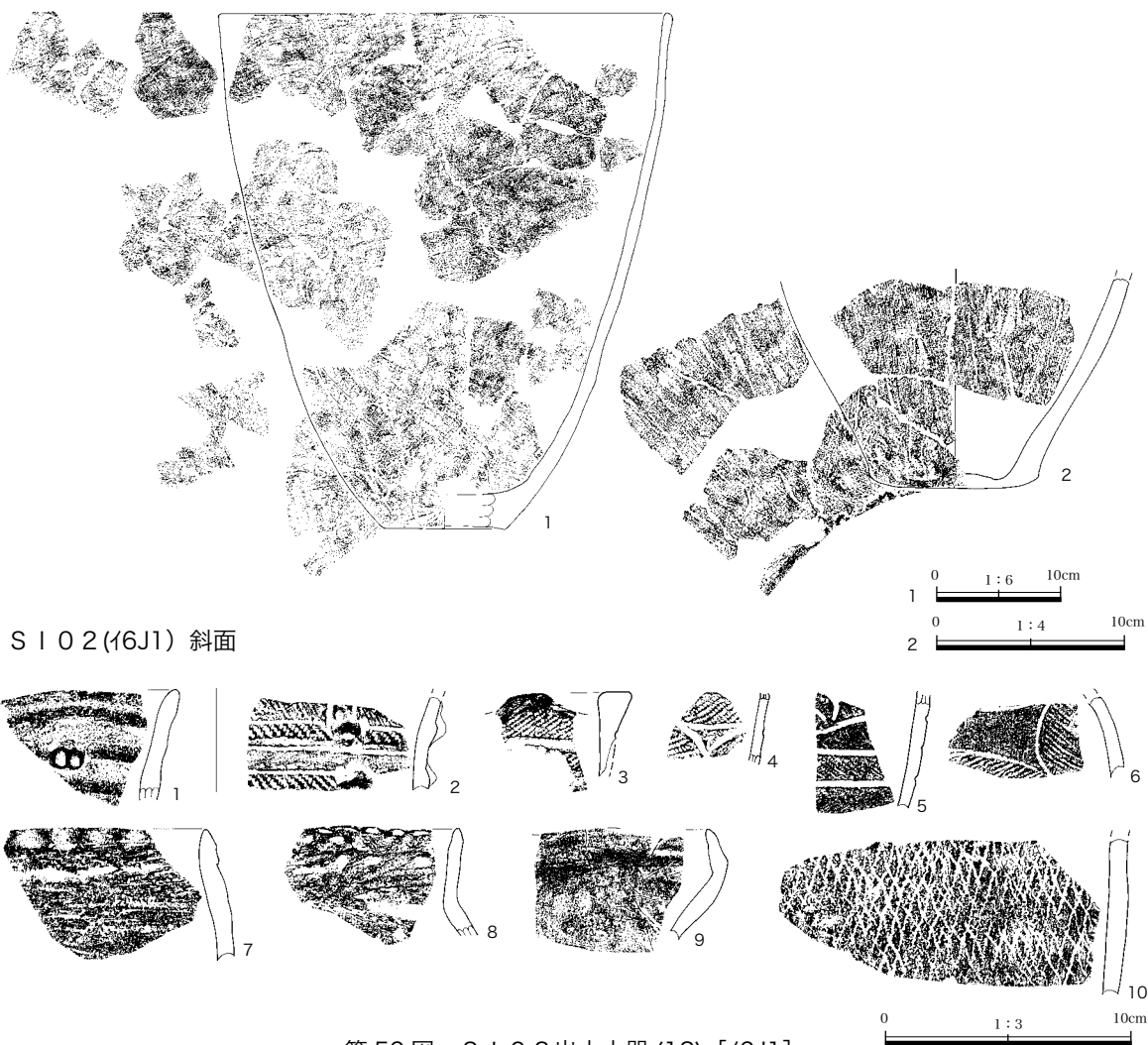
第47図には大洞式系の鉢・壺などをまとめた。1は内湾する鉢でやや広い施文域に雲形文変化の文様が描かれる。上下対向の三角形部分が特徴的である。2は比較的整った雲形文表現例で、無文部ミガキなども



第48図 S102出土土器(10) [16J1]



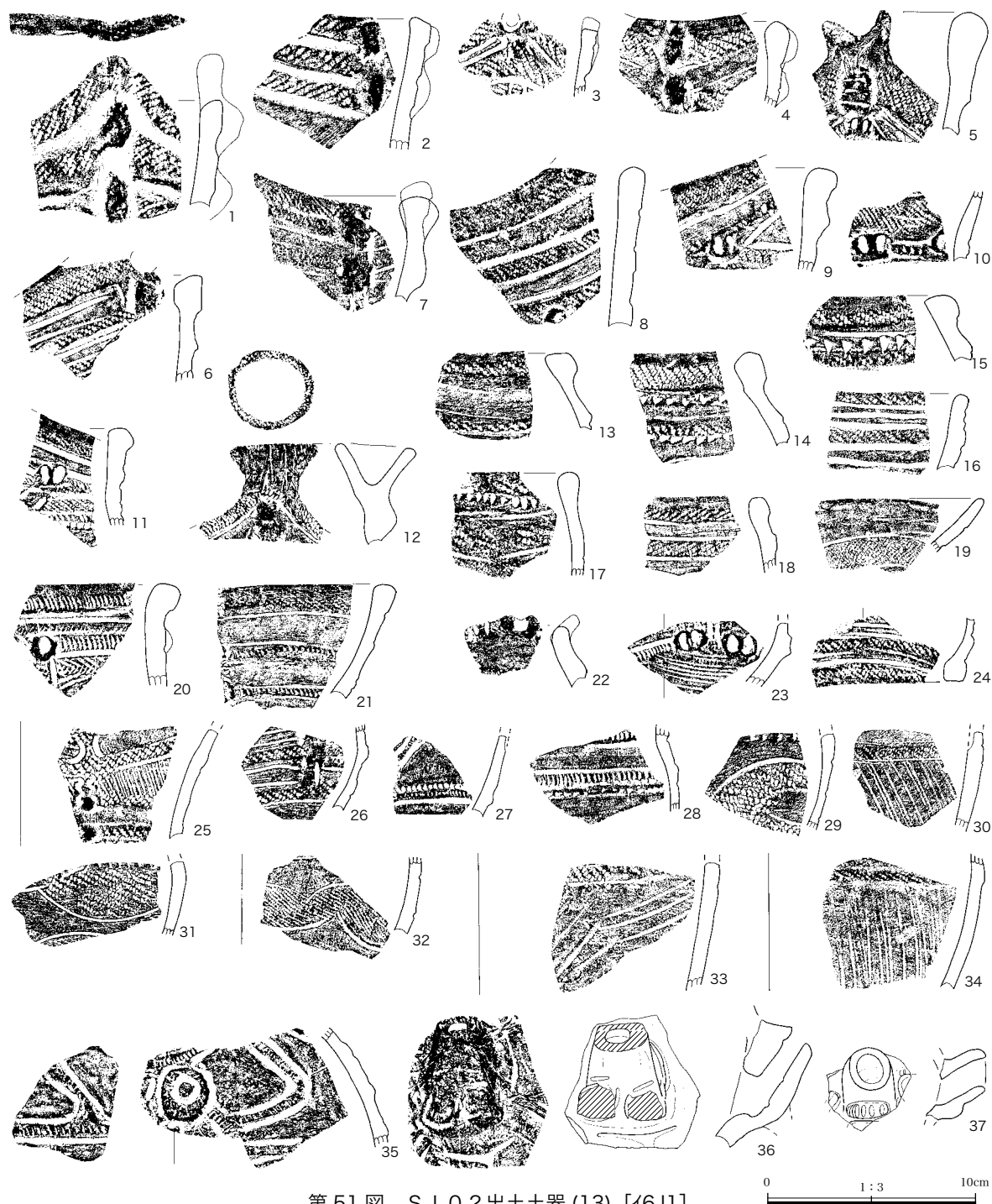
第49図 S102出土土器(11) [16J1]



S I O 2 (16J1) 斜面

第50図 S I O 2出土土器(12) [16J1]

寧な感がある。3は小形の平底鉢である。沈線→縄紋 LR→無文部ミガキの順が観察される。ミガキは比較的丁寧だが、削り取りや研磨手法ではなく浮彫的な表現とはなっていない。内面丁寧なミガキ調整。胎土には白色粒を多く含み、色調は内外面とも黒褐色を呈する。4は大洞C1式の鉢で、大きさの割にはやや大柄な文様が描かれるものである。沈線→縄紋 LR→無文部削り取り～研磨で、沈線も幅広深めで比較的浮彫的な表現となっている。口縁端部の装飾も隆線および凹部の表現で立体的である。拓影左側に焼成後の穿孔があるが、断面で示したように未貫通で、しかも若干ずれた位置に内面側からも穿孔されていることが確認される。本来両側からの穿孔で貫通を目指したものが途中で留まっているのであろうか。石英・白色粒を多量に含み、雲母・角閃石を少量含む。色調は外面黒褐色、内面灰黄褐色を呈する。9は平底でやや大きな鉢と推定される個体の底部。底部近くまで文様が施され、雲形文あるいはその変化の文様と推定される一部が確認される。沈線→縄紋 LR→無文部研磨で内面や底部も良く磨かれている。色調は内外面とも褐灰色。10は広口壺で口縁端部の前面にB突起状に突出する瘤状突起が付される。厚手の作りで輪積み痕も残る。器表面のあれが著しい。沈線・凹線→ミガキ。胎土には石英・白色粒・灰色粒を多く含み、色調は外面灰褐色、内面褐灰色を呈する。11は香炉形土器で、体部下方は残っていないものの、おおよその形状を推定できる優品である。上面に大きく二つの窓状空間部がある香炉形が一般的であるが、本例の上端観察からはやや異なる形となる可能性もある。透かし孔はいずれも硬質な工具で明瞭に切り込み状に削られており、その後のミガキも丁寧に



第51図 S102出土土器(13) [16J1]

為されている。内面は粗いナデ、外面は突起や透かし孔による表現部にもミガキが加えられ、一部に赤彩痕跡が残る。胎土には白色粒及び雲母を少量含み、色調は内外面褐灰色を呈する。

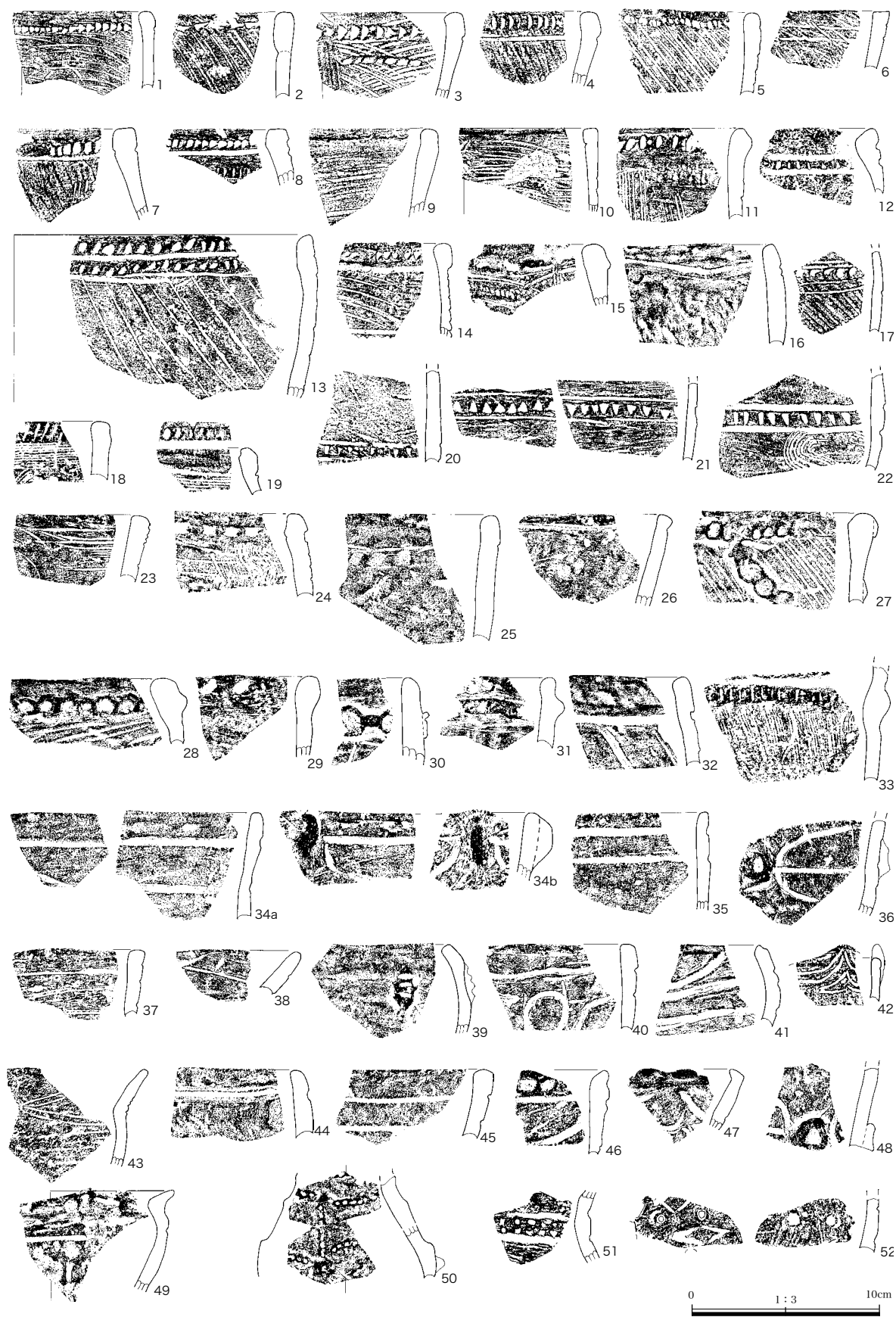
第48図1は高さ推定で27.6cmとやや大きな深鉢である。左右それぞれに弧線の入り組みを擁する沈線の単体が頸部に横位並列配置される。体部は4～9条1単位の燃糸紋がやや雑に施される。内面調整はナデ。底部も粗いヘラナデ状の調整が見られる。2は小形の深鉢口頸部破片で、入組状の文様がやや深い沈線で描かれる。口縁直下に溝底の刺痕がある。無文部は比較的丁寧に磨かれている。3は小形の深鉢で頸部は沈線
(→P72)



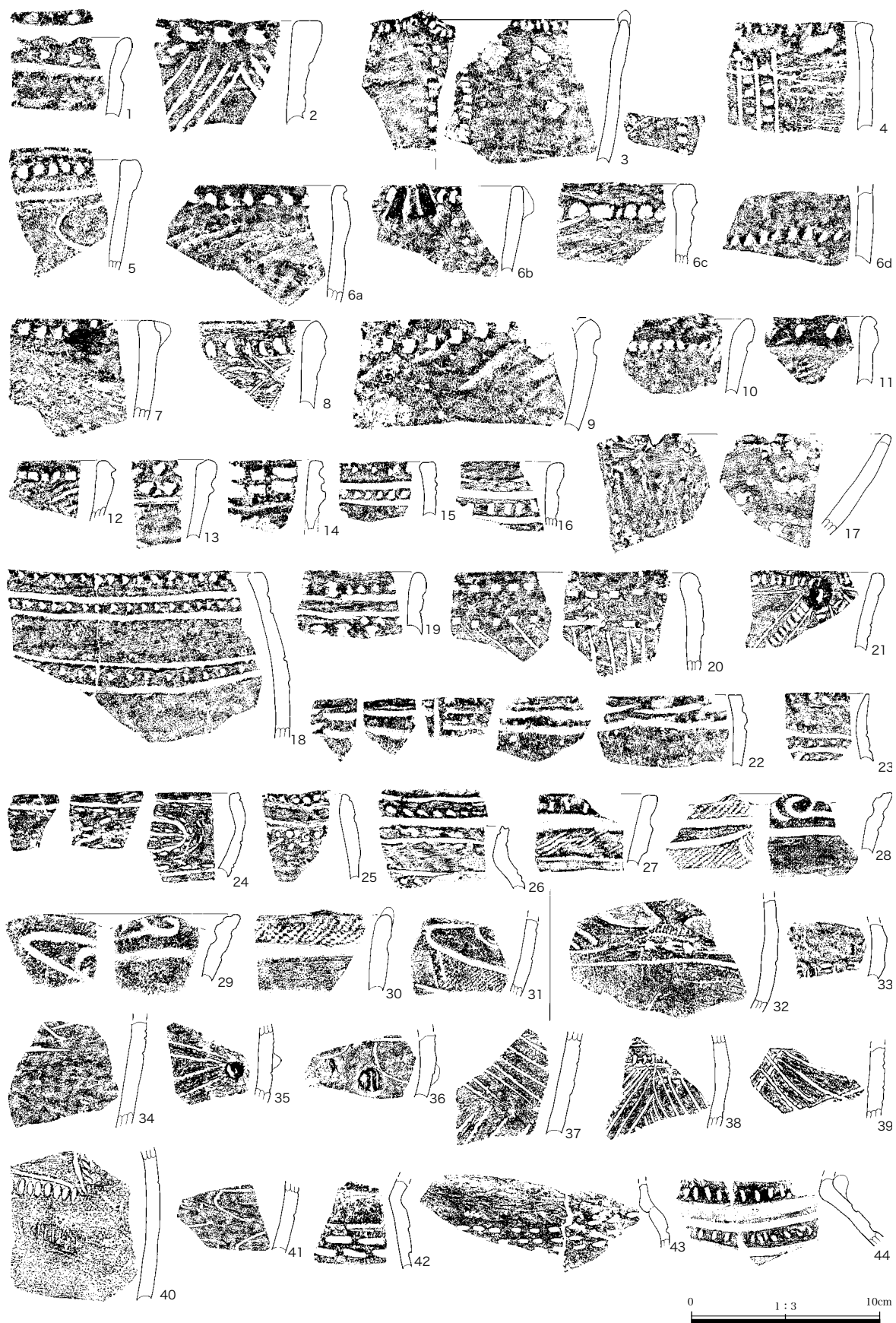
第52図 S102出土土器(14) [16J1]



第53図 S I O 2出土土器(15) [16J1]



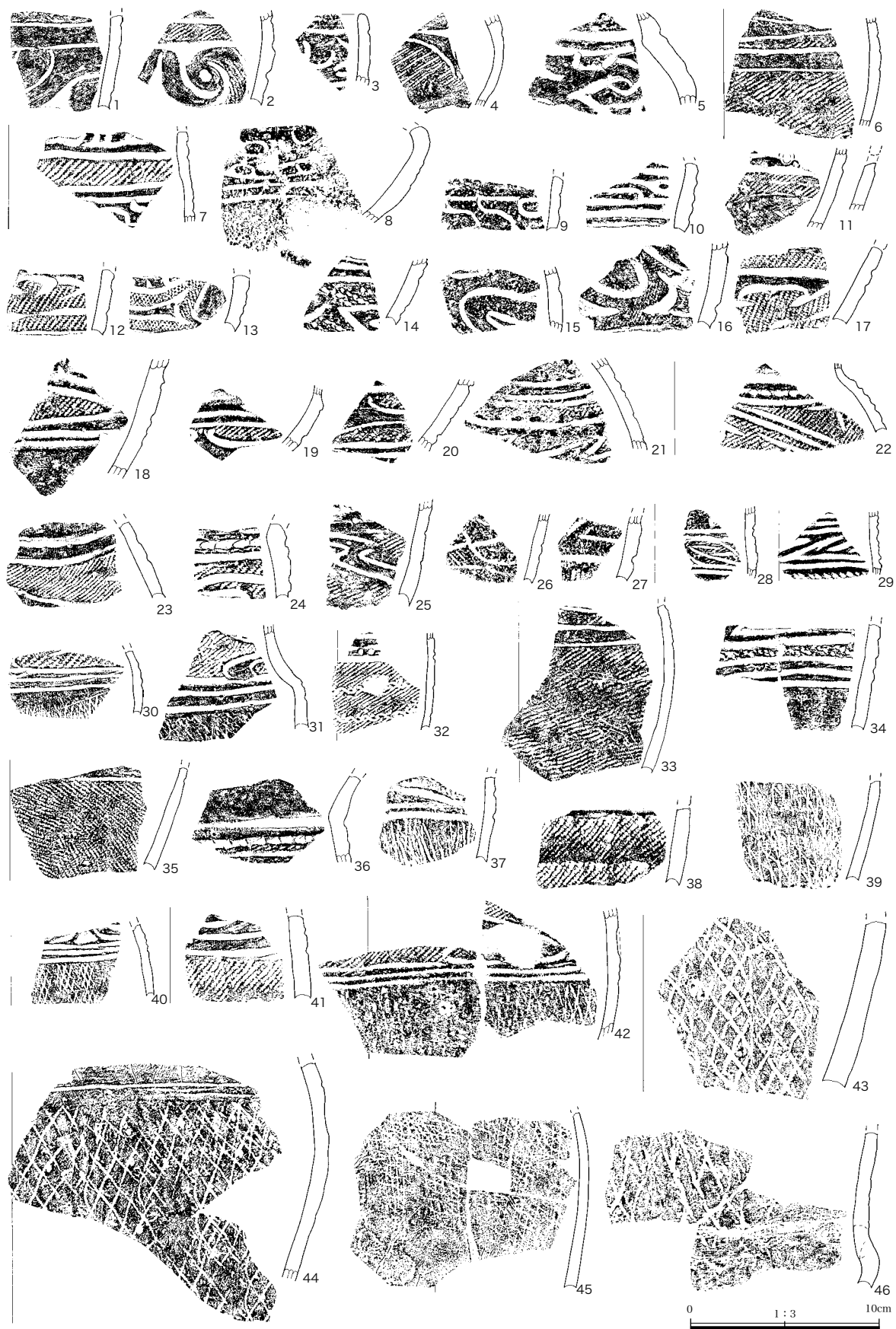
第54図 S I O 2出土土器(16) [16J1]



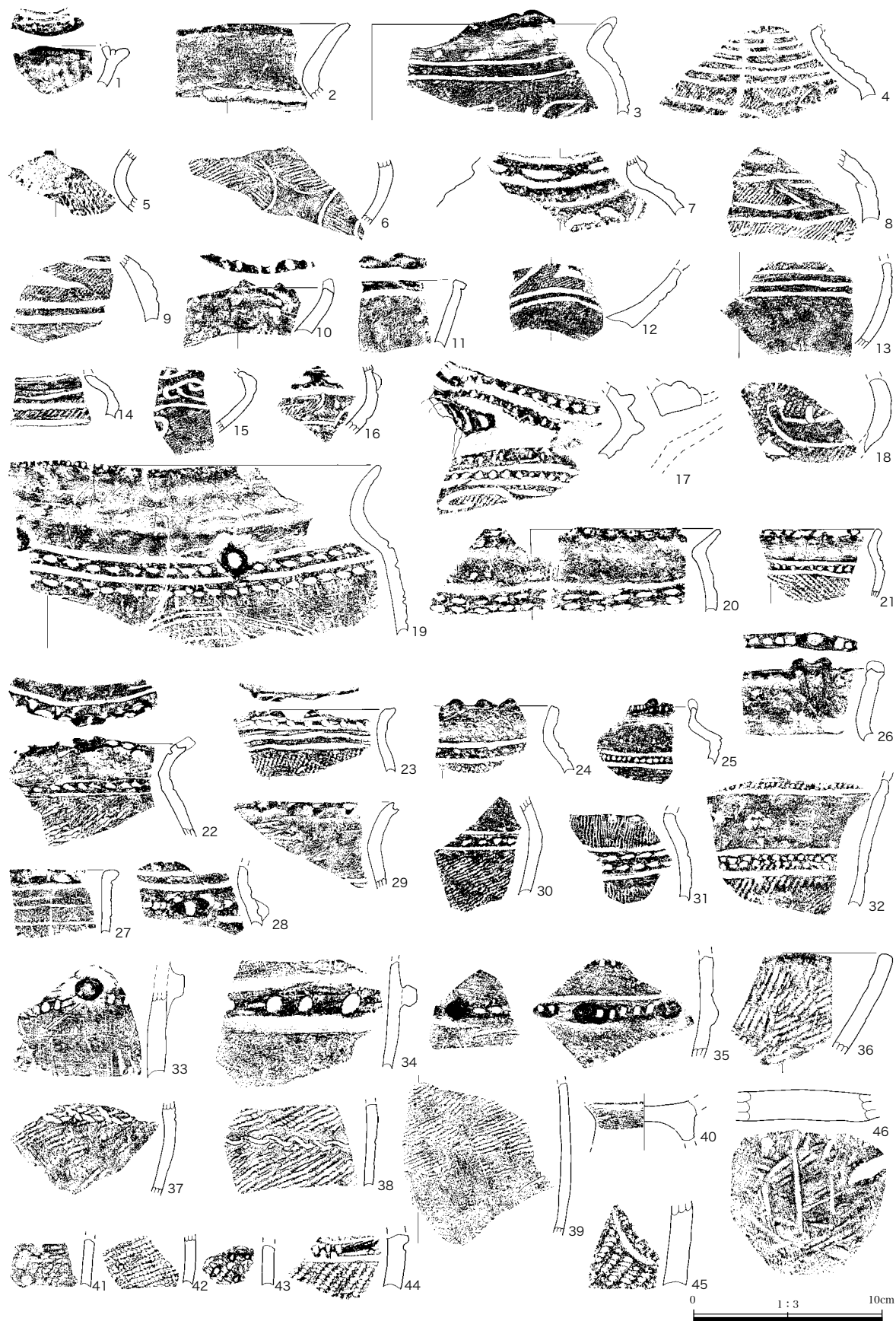
第55図 S102出土土器(17) [16J1]



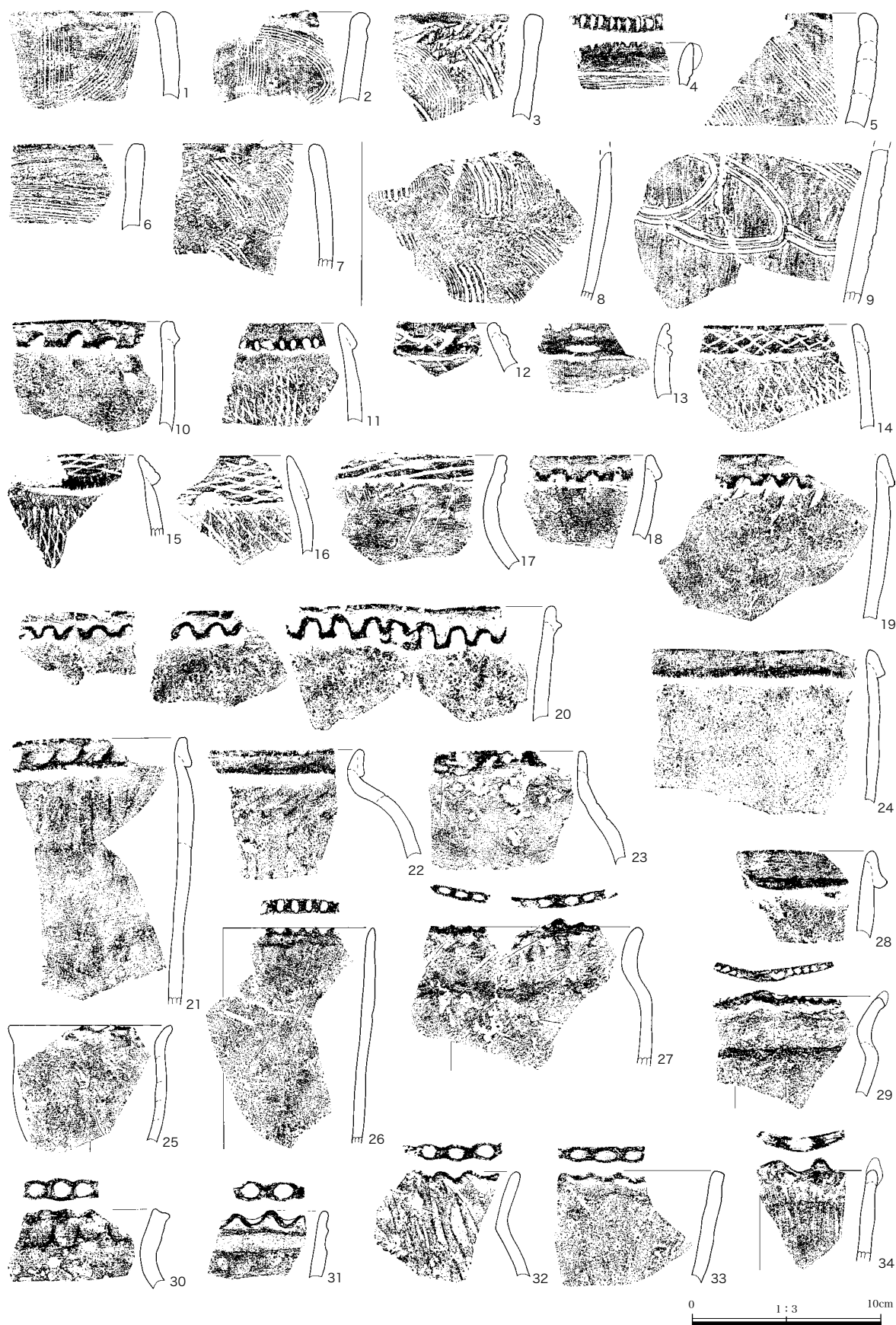
第56図 SIO2出土土器(18) [16J1]



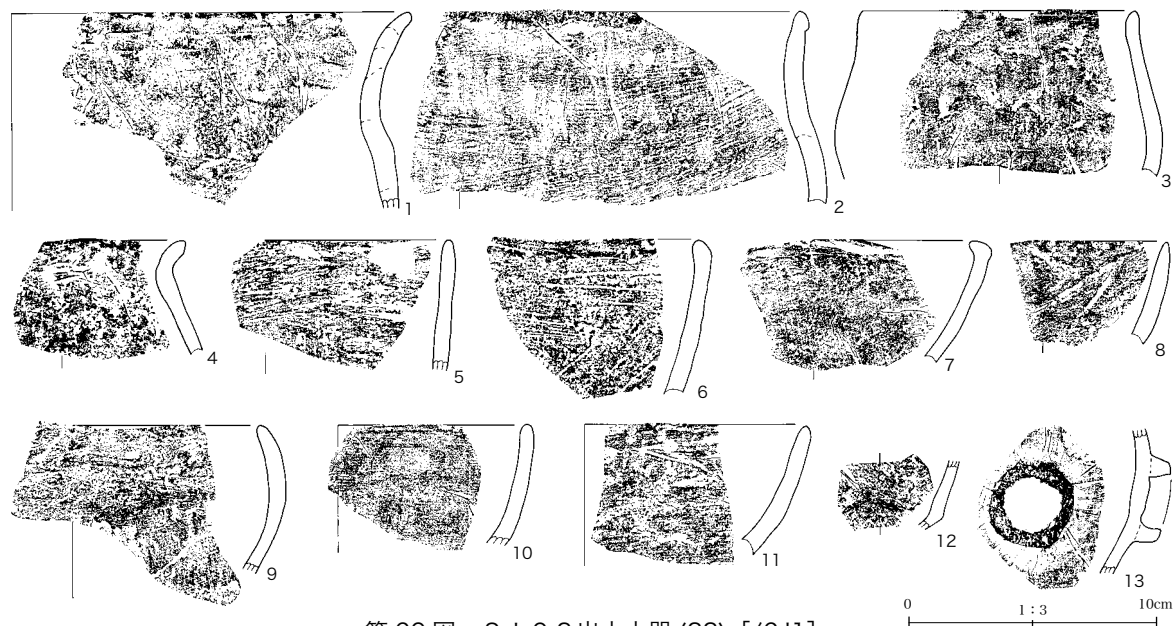
第57圖 S102出土土器(19) [16J1]



第58図 S102出土土器(20) [16J1]



第59圖 S102出土土器(21) [16J1]



第60図 S I O 2出土土器(22) [I6J1]

のみによる文様表現である。沈線施文後ミガキが加えられている。下半は網目状撚糸紋が施される。大きく3破片の接合だが、右上の破片が他と色が大きく異なり外面白っぽい色調、内面黒味強い色調を呈しており、他がにぶい橙色を示しているのと対照的である。破片分割後の遺存状態の違いが想定される。4は口縁の刺突列以下縄紋のみの深鉢または高さのある鉢である。沈線→刺突→縄紋LRである。胎土には石英・白色粒を多く含み、色調は内外面灰褐色を呈する。5は口縁端部に押捺状で太めの刻みが連続して付されるやや厚手の土器である。外面遺存部に文様や装飾は無く、恐らく体部下半～底部も無文になるものと推定される。

第49図は無文の深鉢復元個体例をまとめる。1はやや高さの低い「鉢」にも近い。煤が顕著に残る。外面ナデ～一部ケズリに近く、輪積痕を残すなどやや粗い調整と観察される。胎土には白色粒・石英を多く含む。2は無文の深鉢で内外面ミガキ調整、黒褐色を呈し胎土には白色粒をやや多く含む。ミガキは総じて丁寧だが条線に近い痕が残るところもある。3は内外面ナデ～ケズリだが一部ミガキで、接合痕が明瞭に残る。石英粒・白色粒を多量、角閃石を少量含む。外面暗褐色、内面灰褐色を呈する。4は付帯口縁無文深鉢で、外面ナデ～一部粗いミガキ、内面ナデ、胎土には0.5～1mmの白色粒・石英を多量、褐色粒を少量含む。

第50図1は無文の深鉢でいくつかの大形破片から推定復元したもの。ミガキ～ナデ調整である。2は無文部分の体部下半～底部で、外面ケズリ、内面ナデ調整、灰色粒・白色粒多く、雲母・角閃石を少量含む。色調は外面にぶい赤褐色、内面黒褐色を呈する。なおこの図の下半に示す資料は「I6J1斜面」として取り上げた土器で、それらの内一部を示した。I6J1グリッド全体と大きな様相の変化はないようである。

第51～60図にはI6J1グリッドの破片資料を示す。第51図は後期安行1式、同2式を示すが、1.2のように南関東例とやや異なる在地的な表現例も含む。12の隆起帯上縄紋は擬縄紋のようである。また体部破片では29のようにやや古い様相を示すものもあるが、総じて安行1式でも新段階以降のものが目立っている。35～37は瓢形の注口土器となろう。

第52図は瘤付系の資料である。第2段階の資料も一定数あるが、第3・4段階の資料が目立っている。52～55はやや不鮮明だが縄紋の帯状表現のみで入組文を表現しているものである。57～63は深鉢以外の器種で、壺または注口土器が主となる。

第53図は晩期安行式、姥山Ⅱ・Ⅲ式などを示すが、一部後期末の資料があるかもしれない。典型的な安行

3 a 式・3 b 式波状縁深鉢は限られ、平縁例や姥山Ⅱ式系のものが目立つ。体部破片をはじめ細別型式判断が難しいものも多い。26 は上下逆かもしれない。41 は透かし孔があるもので、台付脚部と推定される。

第 54 図は紐線文系粗製土器、沈線、沈線及び刺突で文様を描く晩期の土器を示す。紐線文系ではいわゆる附点系が多く、隆線貼付例は少ない。30 のようなやや低い位置に大柄な押捺が加えられるものも少数認められる。43 は第 46 図 4 と同一個体である。50 は小形壺状でかなり異質であり、いわゆる「小型・ミニチュア」の類かもしれない。52 も良く分からないものだが、2 個 1 対の穿孔があり台付脚部となろうか。

第 55 図は口縁部に刺突列が巡る土器、前浦式、屈曲下位の体部上半に刺突列が巡る土器などを示す。粗製土器紐線文系の系統をひくものもあるが、大洞式の「二溝間の刺痕」「点列」に近い形態・技法例もあり、或いは系統複合しつつ独自に在地的な展開を窺わせるものも多い。瘤状突起と沈線が組合わさるものでは「天神原式」を想定させるものもあるが、異なる点も多く検討が必要であろう。18.20.24 もかなり異質で型式判断が難しい例である。

第 56 図は大洞式を示す。大洞 B 2 式、同 B - C 式等もできるだけ図化掲載している。大洞 C 2 式では雲形文が明確なやや古い様相を示すものと、無文帯を擁するやや新しい様相を有するものがある。

第 57 図は大洞式系の体部破片をまとめた。1 は後期末かもしれない。大洞式前半では縄紋（+結節）が主体のようだが、大洞 C 2 式では網目状燃糸紋が主体的なようである。46 はやや異質で、下方に膨らみがある。

第 58 図には大洞式系の壺・注口・鉢の体部破片などを 1～18 に、刈沼遺跡独自の刺突文土器群を 19～35 に示す。36 以下は縄紋のみの破片を示す。19.32 等注目される資料もある。

第 59 図は条線施紋例、付帯口縁例、無文で口縁端部に装飾を有するものなどを示す。第 60 図には装飾のない無文の深鉢・鉢を主に示す。13 は底部の可能性も考えたが、体部中位に付される円形突起と推定される。

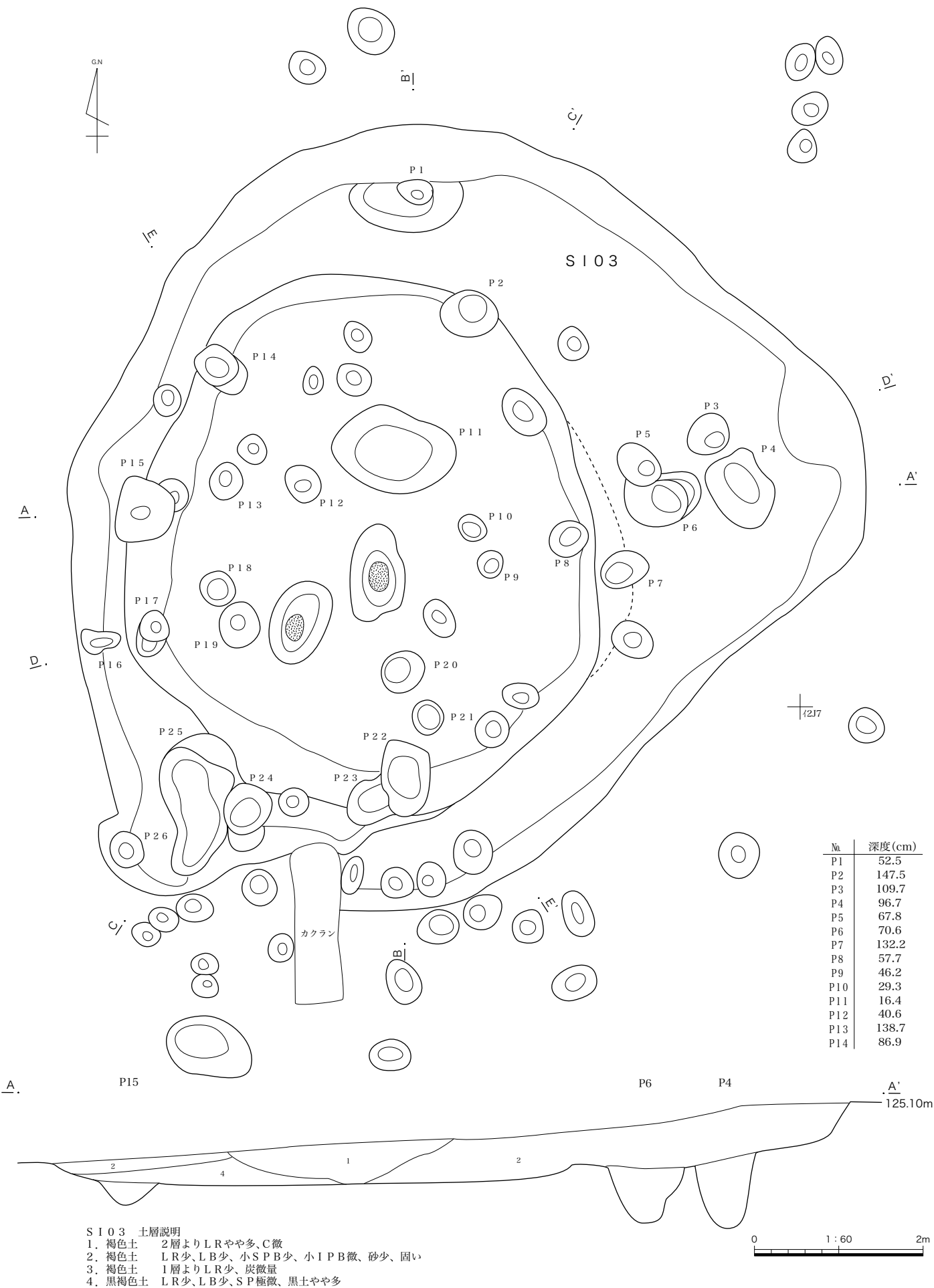
S I O 3（遺構第 61～64 図、遺物第 65～80 図、写真図版三）

位置・形態・経緯 集落内やや北側の区域で、西側には SD13.SD17 が、北東には SI06 がある。南 5 m 以南は未調査区となる。I 116、I 117 グリッドに位置する。平面プランとして 2 軒の掘り込みが捉えられており、内側を SI03a、外側を SI03b とする 2 軒として扱う。土層断面記録からすれば、SI03a → SI03b となる。また掘り込み南端近辺でより南側に向かって展開する弧状のピット群があり、これを別遺構とすれば重複関係にある遺構となる。北側などでも幾つかのピットがあり、関わる可能性もあるが判断し得ない。

確認はローム漸移層～ローム層で、壁・床面はほぼローム層である。この周辺のローム層では今市パミスが少ない傾向にあるようだ。SI03b 住居跡の壁は北～西側では緩やかで、東～南側では比較的急である。内側プラン SI03a 住居跡の壁は傾斜が緩やかであるが、ローム層への掘り込みは比較的明瞭である。若干の段差で外側住居跡の方が新しいとすれば、貼り床等床面の整えが想定されるが、平断面の土層観察からは捉えられていない。確認面が西側に向かってやや下がる傾斜であり、総じて東側の方が壁の高さ（床面までの掘り込み深さ）がある。床面は内外 a b とも概ね平坦だが、東西南北方向いずれの断面でも中央に向かって緩く下がる（凹む）状況が確認される。なお本跡は下野考古学研究会が G 地点として調査している。

規模は外側 b 住居が 9.95 m × 8.92 m、a 住居が 6.45 × 5.9 m で、いずれも主軸を N-25° -E (C-C' ラインより若干北に振った角度) とした場合の計測である。南西側が若干張り出しており、後晩期住居跡の典型例とは言い難いものの、入口に関わる部分と捉えられる。P24.P25 が内側 a 旧住居の入口ピット群、P26 及び周囲の掘り込み部分が外側新住居の入口部分と推定できる。

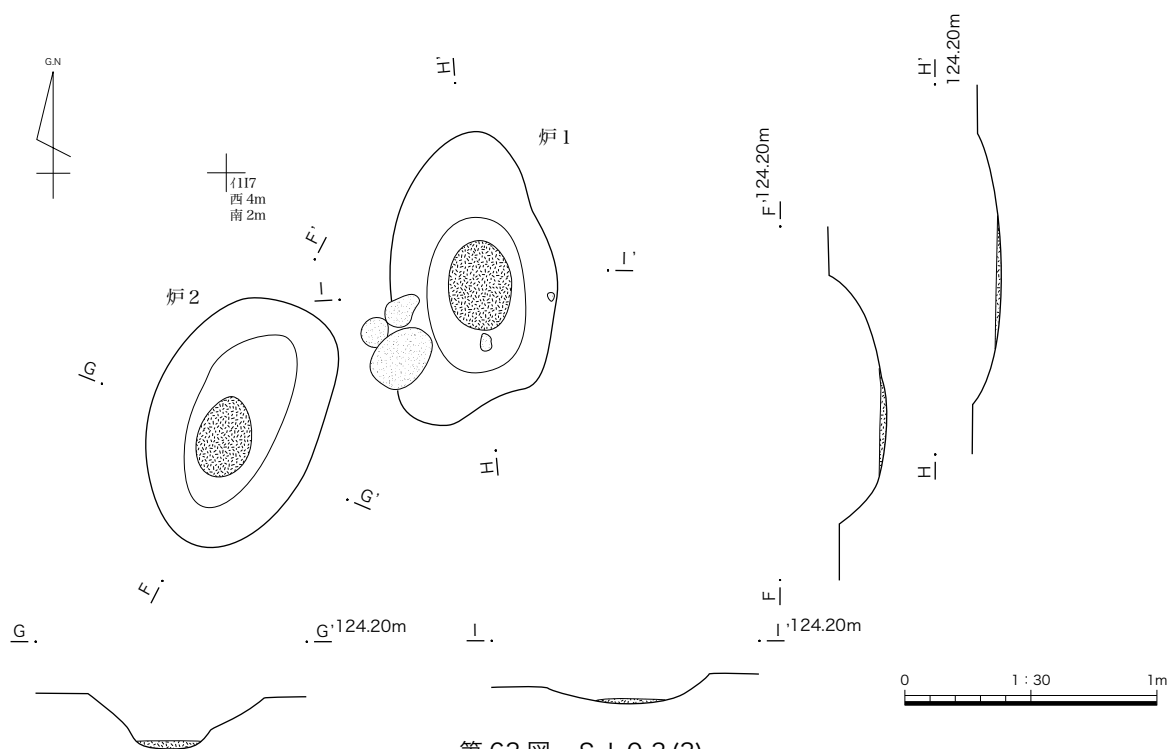
炉 炉跡は 2 基捉えている。北東側の炉 1 は 118 × 67 cm、深さ 11 cm で南西側に 3 個の石がある。浅い掘り



第61図 S103(1)



第62図 S103(2)



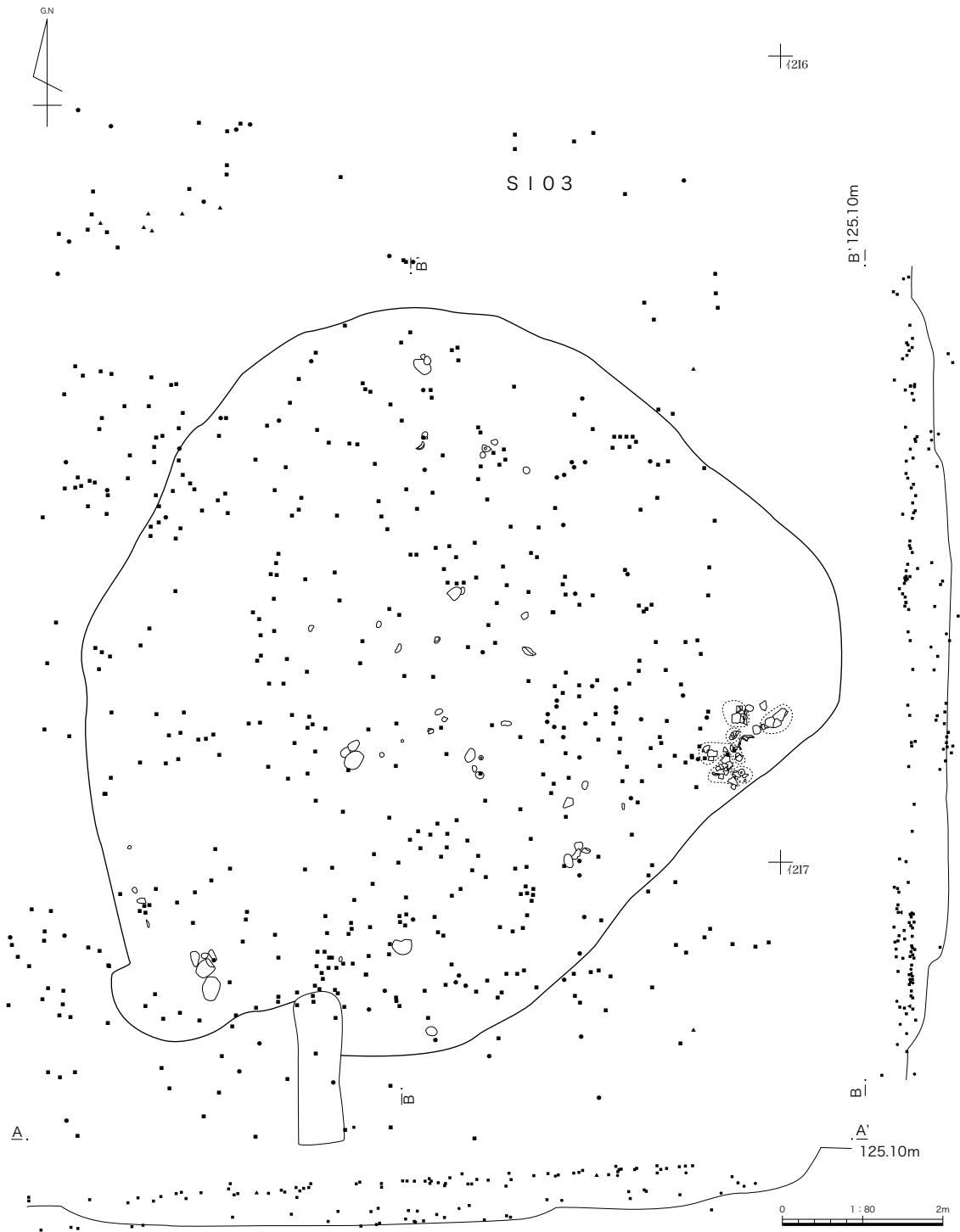
第63図 S103(3)

込みだが、ほぼ中央に焼土が確認されている。南西側の炉2は100×67cm、深さ22cm、こちらほぼ中央に焼土がある。いずれも覆土は観察されていない。深さのある炉2は壁の傾斜がやや急となる。炉1は概ね全周石が巡る石囲炉であった可能性がある。北東側にある炉1が外側b住居に伴うと考えるのが自然であろうが、柱穴配置も含め考えてa住居のほぼ中央に炉1が位置することからも慎重な検討が求められる。

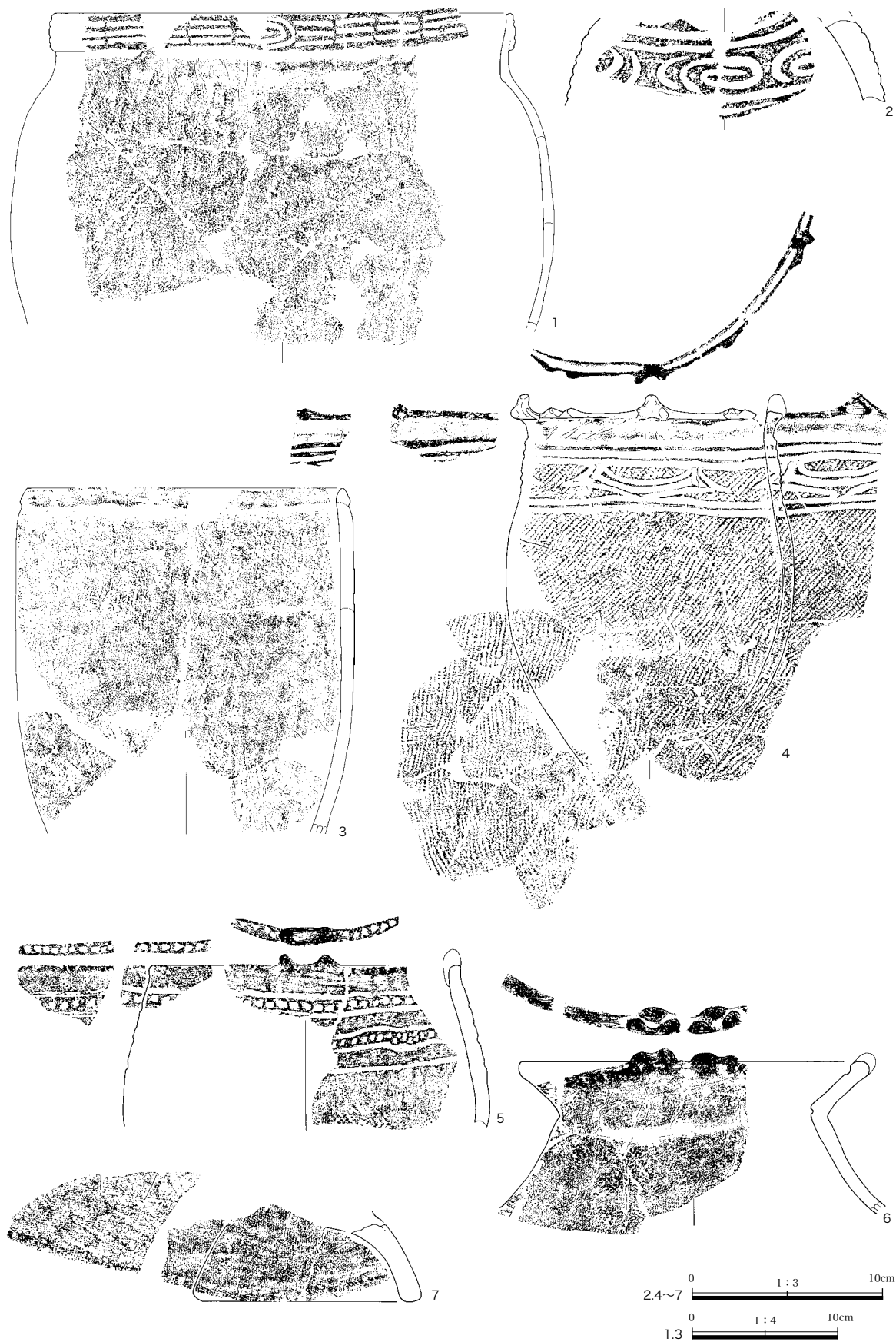
覆土 1～4層が概ねレンズ状の堆積で、全体に褐色土系の土を基調とするようである。

ピット ピットはP26まで付したが、深さが判明するもので14基、他に未命名ピットも含め住居内で19基、計35基がある。P2.3.7.13が100cmを超える深さがあるほか、総じて深く良好な例が目立つ。深さの記録がないものでも、写真記録から相応の深さを確認できる。軸上奥側に位置するP2の左右にP14.P8、これにP15.17、P○-P22を結ぶと「奥左右壁3本」のパターンが浮かび上がる。内側はP12.P10.P20.P19が整った方形に近い形の支柱配置となる。一方外側の深いピットP3またはP4を基に、反時計回りに示すとP1-P14-P22またはこの南東の未命名ピット-南東の未命名ピット（P7の南側ピット）という長方形6本の配置を考えることができる。この配置が外側b住居のプランと概ね整合することも注意したい。他の深いピットもあることから、別の推定案も充分考えられるものの、ピットがやや希薄な区域もあり、更なる検討を要しよう。少なくとも単純にa b各1軒ではない、複数回の住居構築を想定させるピット配置と言えよう。

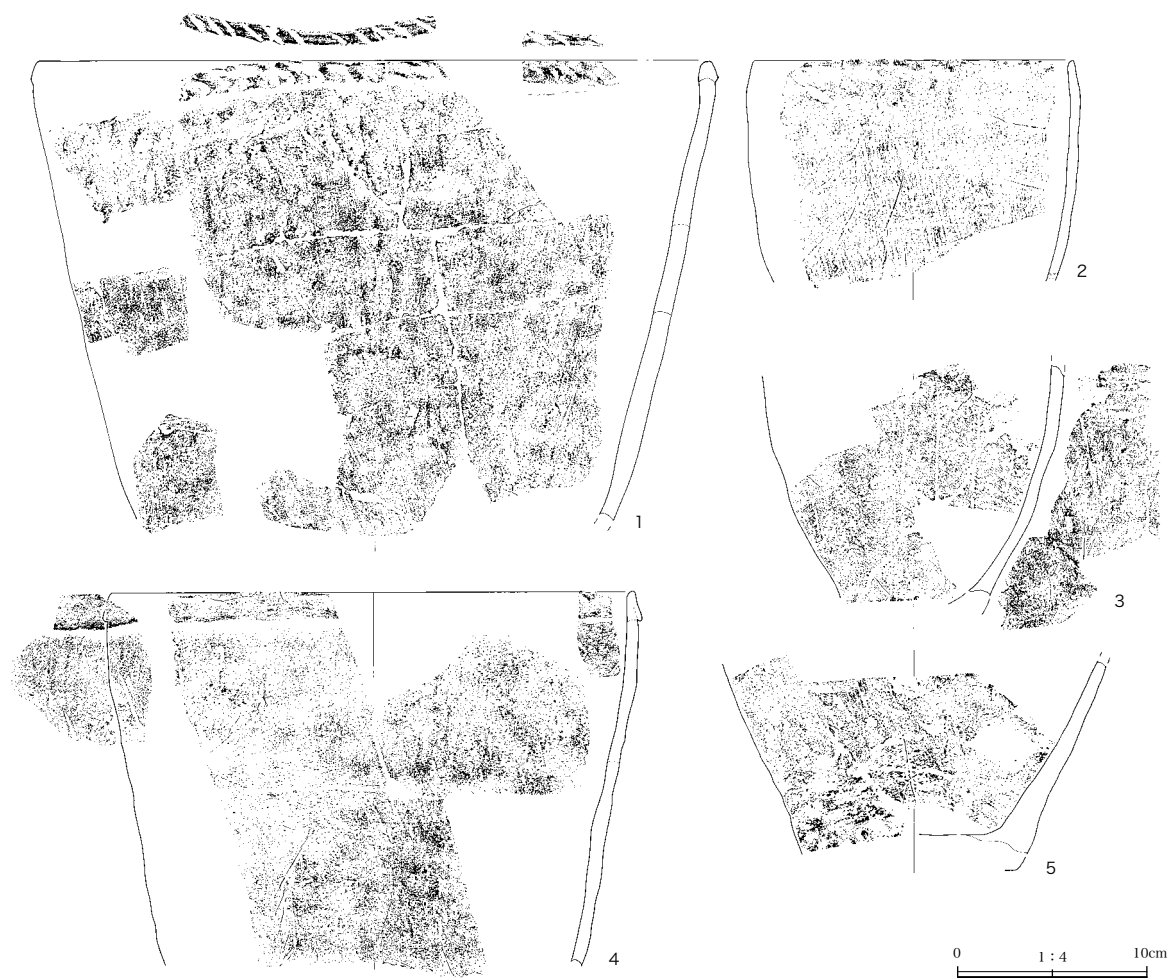
遺物 遺物はかなり多く認められている（第64図）。レベル的には床面近くより確認面近くでの出土が多いようである。やや外側プランb住居側で多いようにも見えるが確定的な判断は難しい。また遺物分布はプラン外にも広がっているようである。東側壁近くでやや大形の破片がまとまる場所があり、第65図1がここからの出土のようである（写真3-4）。覆土中の土器破片は安行1式から大洞C2式まで出土している。復元個体も幅広く瘤付第3段階から大洞C2式中段階の個体まであり、量的には大洞C1式・C2式が多い。破片では大洞C1式・C2式が多い。住居跡の時期について、住居形態からすれば後期後半～晩期前半を想定したくなる場所であるが、最新の時期をもってすれば晩期中葉という推定もあろう。各個体の出土位置・



第64図 S103(4)



第65図 S103出土土器(1)



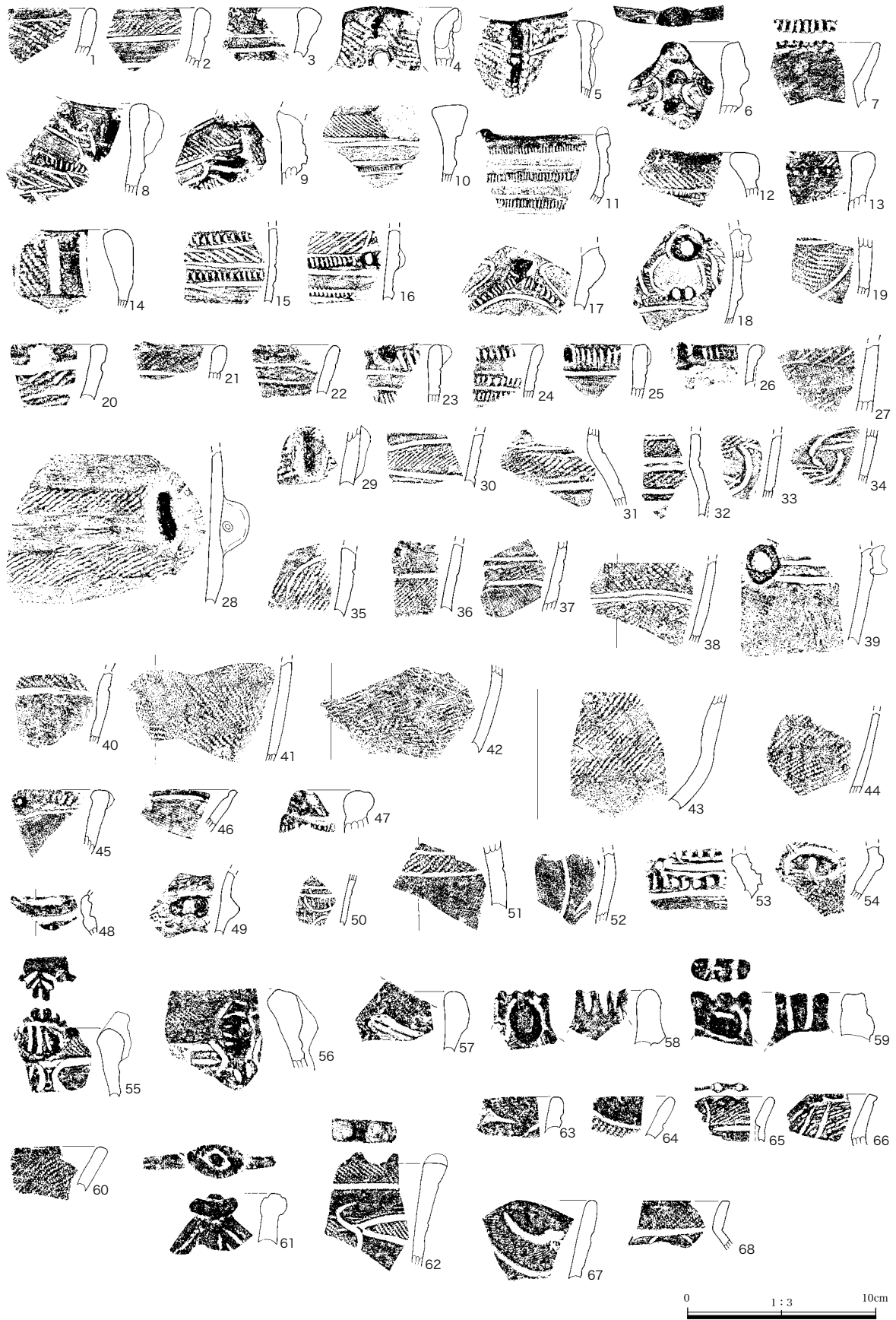
第66図 SI03出土土器(2)

レベルのチェックは未了で、検討を要する。石器では磨石類が21点、石皿類が9点、石錘が7点、土偶が2点、耳飾が4点、石製垂飾品が2点がある。

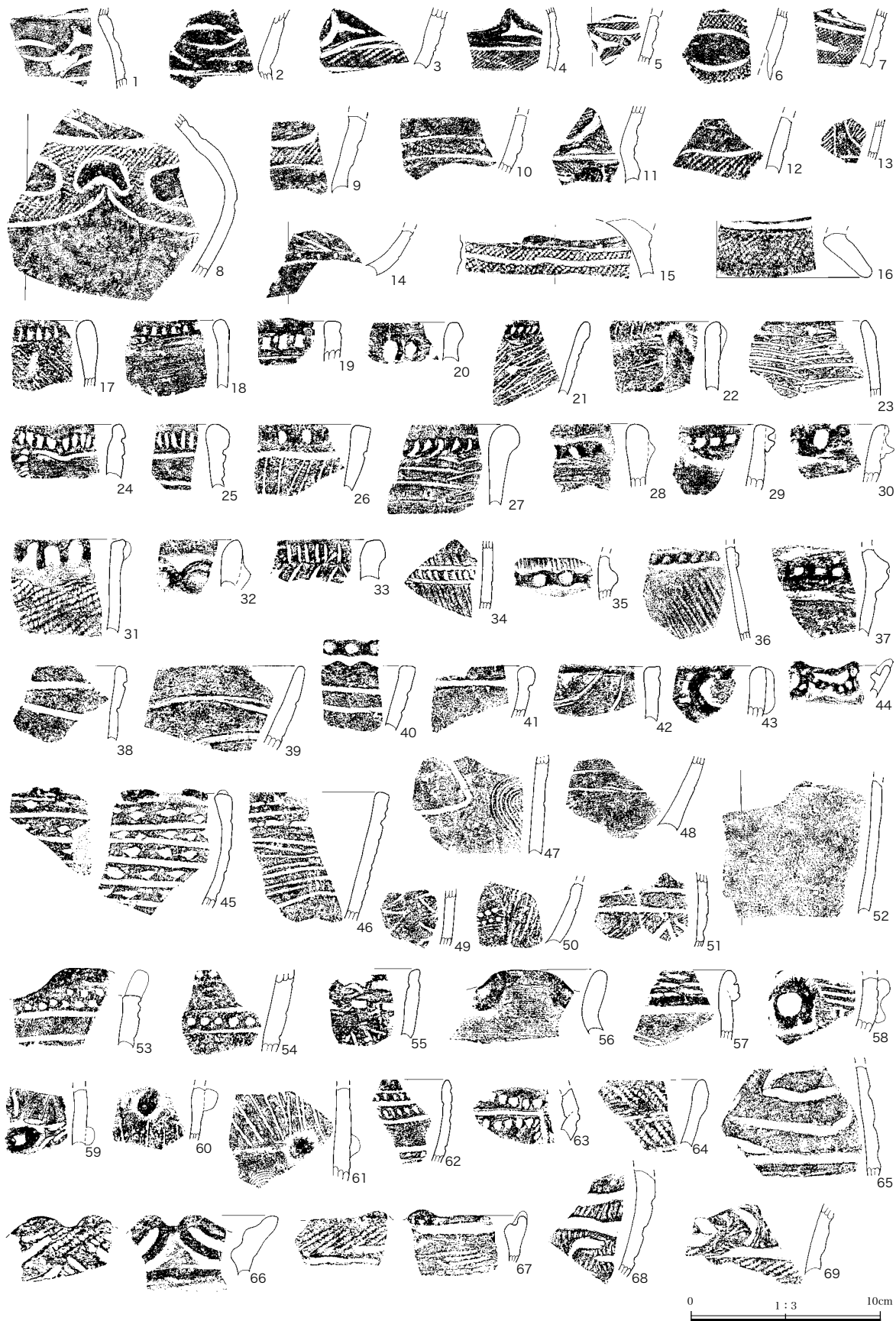
SI03からは多くの土器が出土しており、復元個体も一定数ある。覆土取り上げ例を第65～73図に示す。

第65図1は肥厚する縁帯状口縁に3本単位の途切れる沈線群および2本単位の弧線単位文様が描かれる土器である。膨らむ体部中位に最大径を有する。沈線は浅めだが幅広で、比較的明瞭な描線となっている。内面にぶい赤褐色、外面黒褐色を呈し、胎土には白色粒・石英を多く含む。2は台付鉢の脚部でやや太めの沈線による渦巻文が描かれるものである。渦巻文自体は雲形文変化の文様で見ることができ、脚部文様として配される例は珍しい。3は直線的な立ち上がりを示す網目状擦糸紋を施す付帯・折り返し口縁の深鉢。白色粒多量、石英や褐色粒を少量含む、色調は内外面にぶい橙色を示す。第65図4は、頸部に文様のある大洞C2式の深鉢である。無文部がかなり狭くなっている。縄紋LRは沈線施文後に施されている。胎土には、石英・白色粒を少量含む、色調は外面黒褐色、内面褐色を呈する。5は内傾する口縁～頸部にかけて沈線+刺突列が2段巡るものである。口縁端部にも同種工具による刺突列及び突起が付される。体部には縄紋RLまたはR?が施される。6は広口壺状の形態で、口縁にB突起に類する形態の三山1単位となる突起を2単位付している土器である。7は大きな2つの破片を台付土器の脚部と考え推定したもので、厚手のつくりが特徴である。外面ミガキ・内面ナデ～ミガキ調整、胎土には雲母・白色粒・石英をやや多く含む、色調は内面黒褐色外面にぶい褐色～黒褐色を呈する。

(→P86)



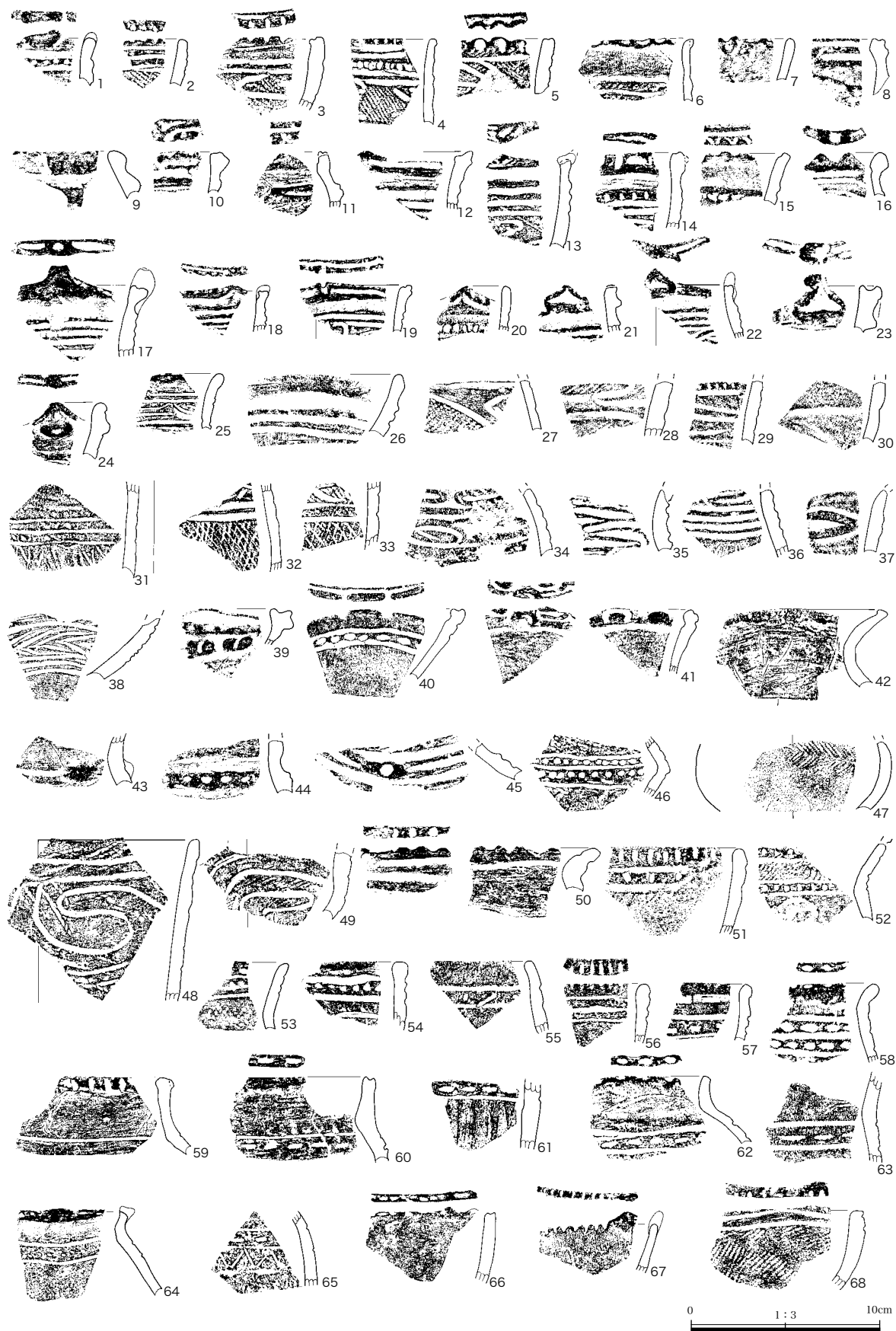
第67図 SIO3出土土器(3)



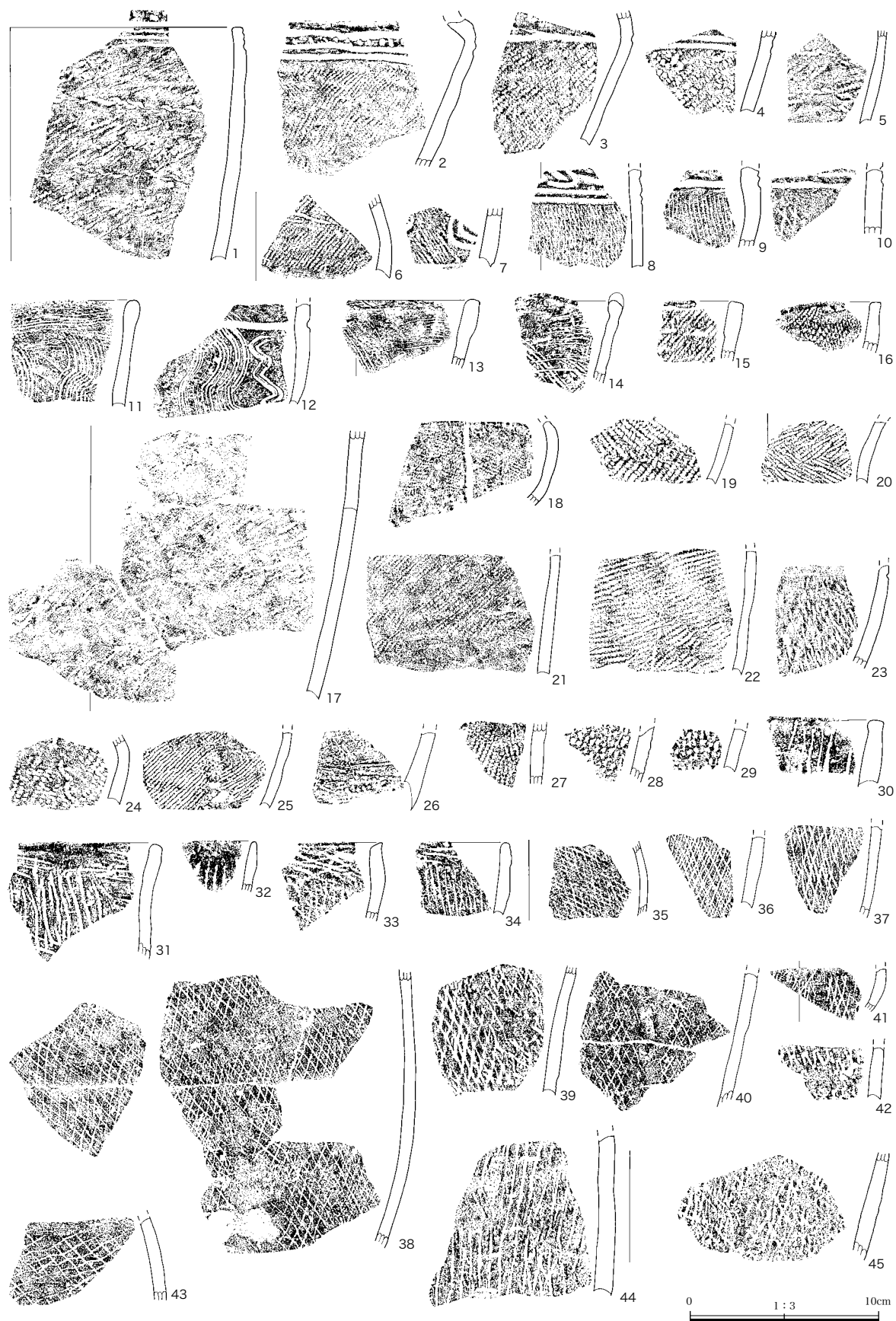
第68圖 S103出土土器(4)



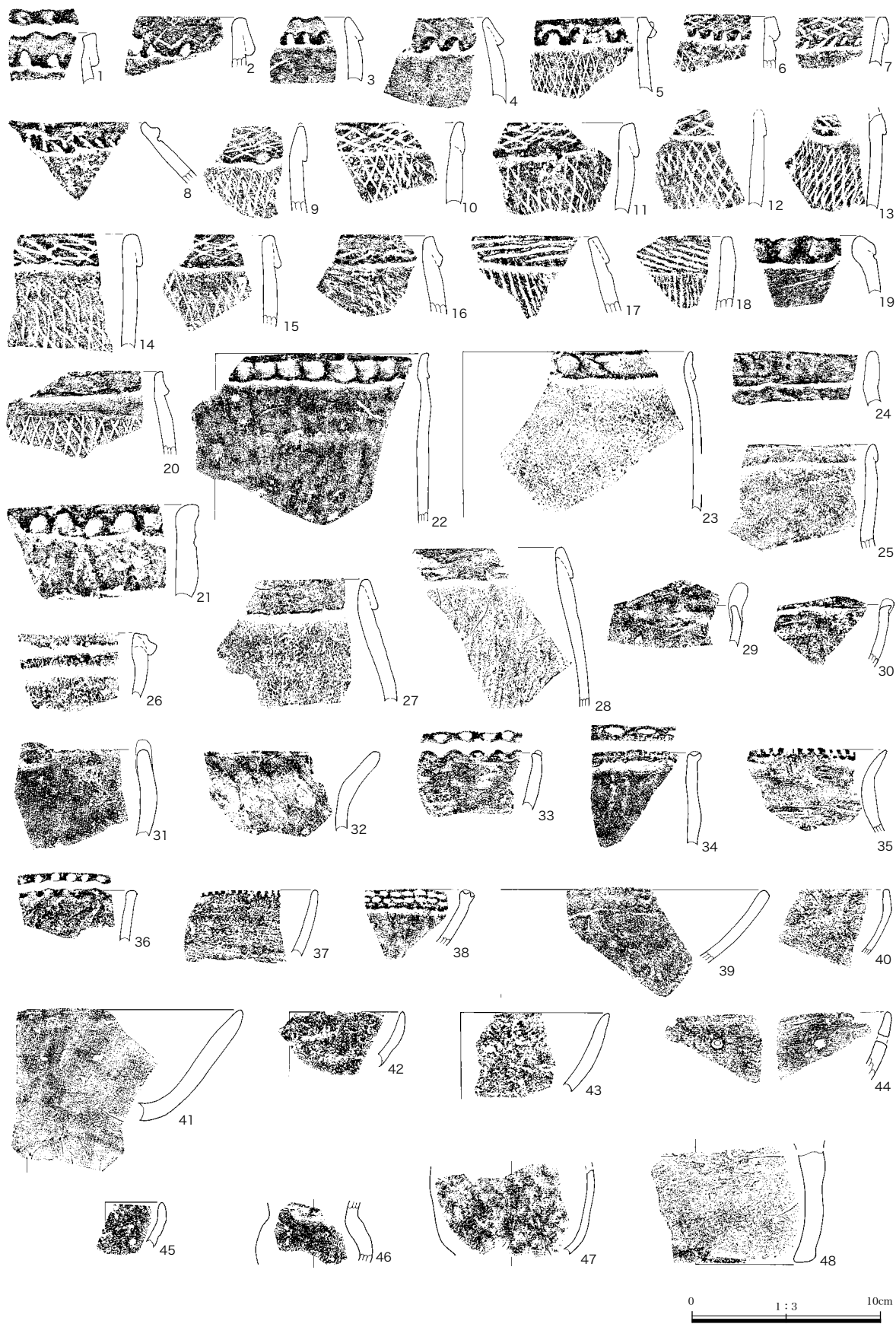
第69図 S103出土土器(5)



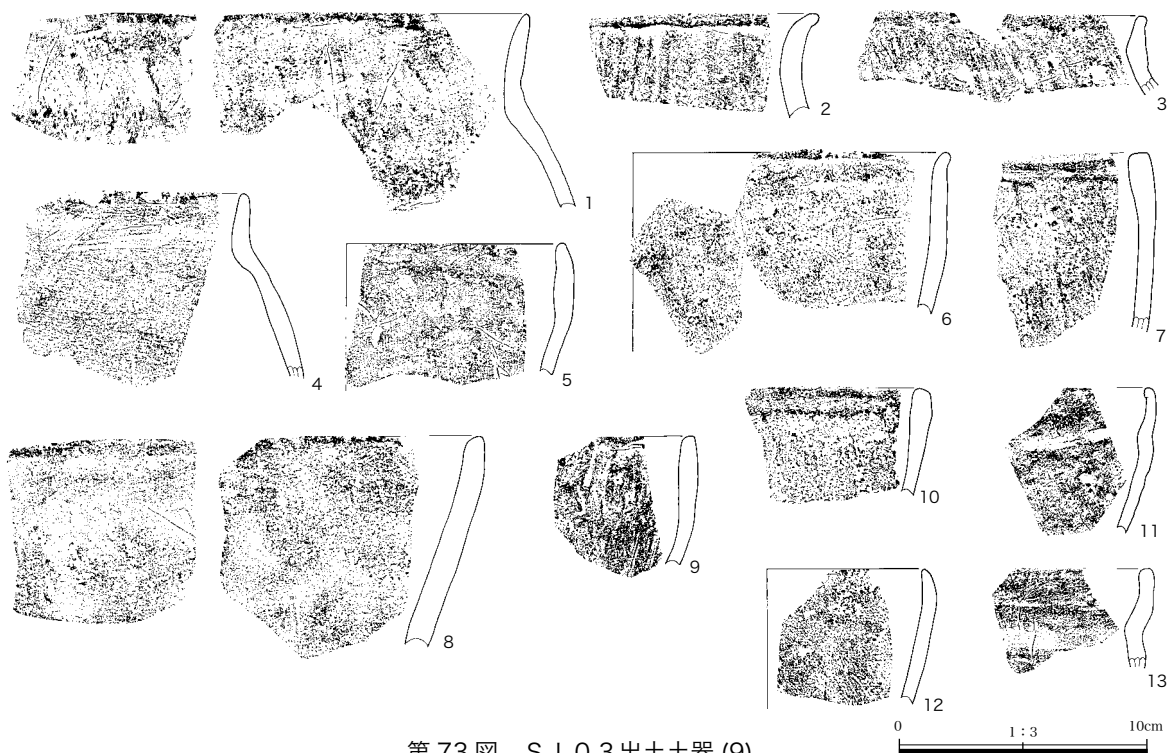
第70图 S103出土土器(6)



第71図 S103出土土器(7)



第72図 SI03出土土器(8)



第73図 S103出土土器(9)

第66図1は体部無文の深鉢で口縁端部に刻み～沈線状装飾が付される。内面褐灰色、外面黒褐色、胎土には白色粒をやや多く含む。2～5は無文の深鉢で、ケズリ～研磨が観察されるもの。4は付帯口縁の土器で、体部は比較的良く磨かれている。

第67図には後期安行式(1～19)、瘤付系(20～54)、晩期安行式系(55～68)を示す。晩期安行式では大洞B1～B2式との区別が難しいものも多い。61は姥山Ⅱ式系、62は後期末瘤付系となろうか。

第68図1～16は晩期安行式を主とする破片群。17～36は分類A群とした粗製土器である。38以下のA群では沈線や沈線+刺突列により文様が描かれる。65～69は前浦式である。

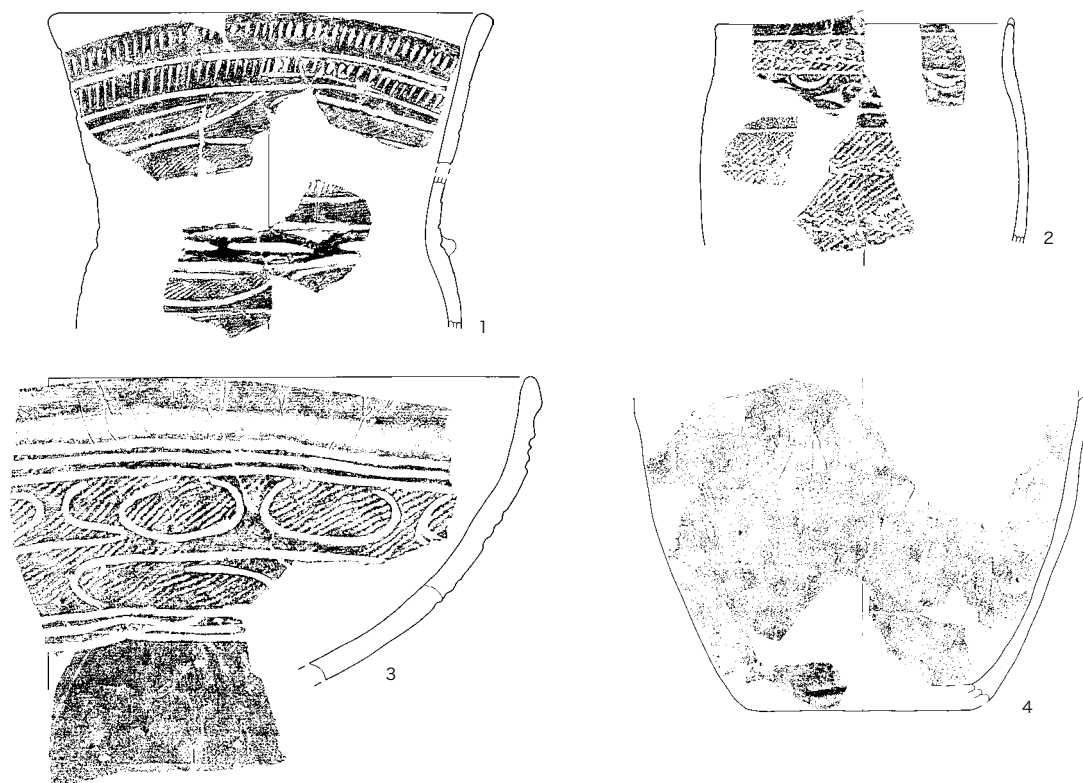
第69図～70図には大洞式系を示す。大洞B1式～同B-C式、同C1式は少なく大洞C2式が多数を占める。器種では鉢が目立つ傾向にあるうか。第70図17～37は口縁やや下位に無文帯を擁する大洞C2式中段階以降のもので、深鉢や広口の壺に近い形態も目立つ。35.36は浮線に近い手法と観察される。58.60.62等は頸部に刺突列帯を擁する本遺跡に特徴的な土器である。

第71図は主に粗製土器を示すが、2～10には上位等一部に大洞式文様がうかがえる。以下条線の例、縄紋例、撚糸紋、網目状撚糸紋それぞれを示す。縄紋では28.29が擬縄紋の例。撚糸紋では口縁部横方向施紋のものがある(33.34)。

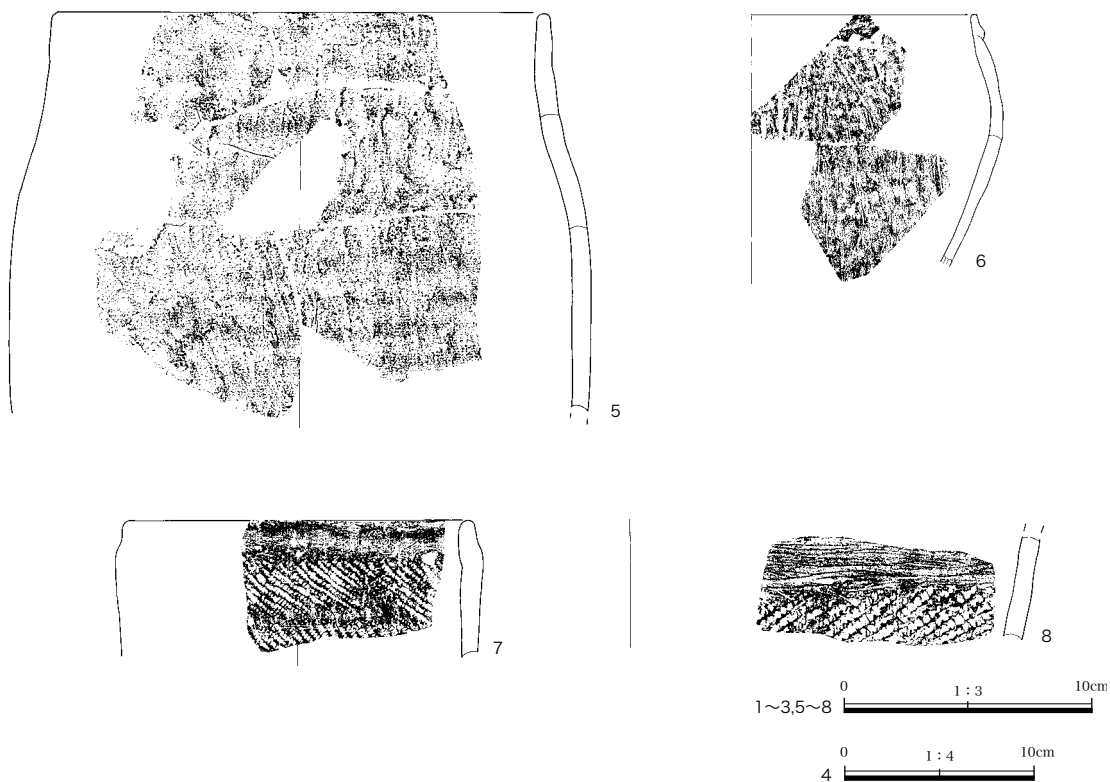
第72図1～28は付帯口縁例で、1～8は体部との境界(付帯下位)で刻み・押捺を加えるものが目立っている。19.21.22では付帯部全体を押捺するような手法である。29以下は口縁端部に装飾を有するもの、無文の鉢、小形の壺などを示す。45.46は小型・ミニチュアとすべき例か。48は台付土器の脚部。第73図は無文の深鉢で、器形では体部に最大径を有するもの、直線的に口縁が外傾するものなど、多様性が窺える。

第74～80図はI1I6グリッドおよびI7グリッド出土のもので、第74図が径復元個体である。第74図1は小片から器形・径を復元したものである。体部破片とは接合しないものの、同一個体と判断し、位置関係も推定した。沈線→刻み・縄紋LR→無文部ミガキの順が観察される。胎土には石英多量、雲母少量を含み、

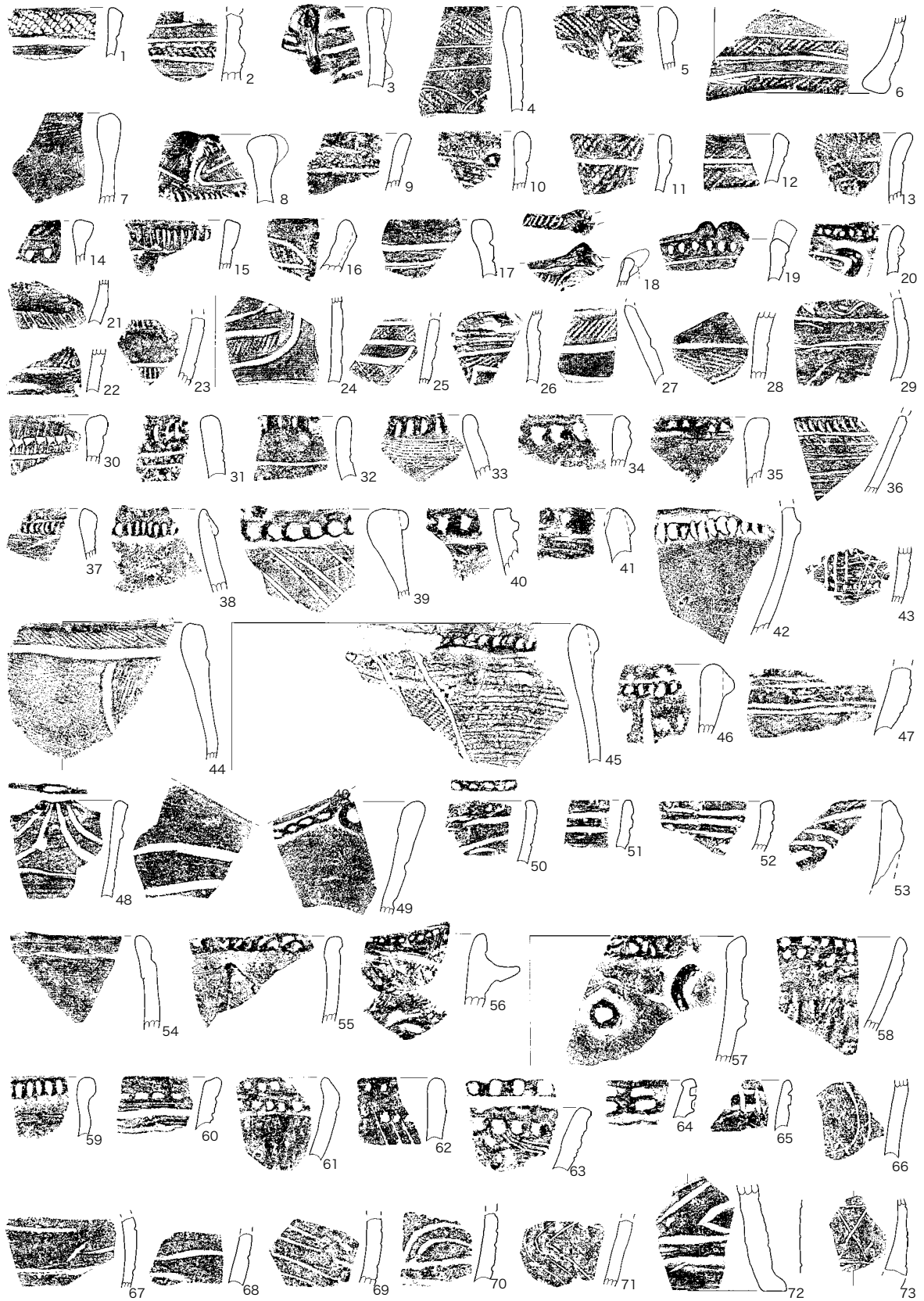
S I - 0 3 [1116]



S I - 0 3 [1117]

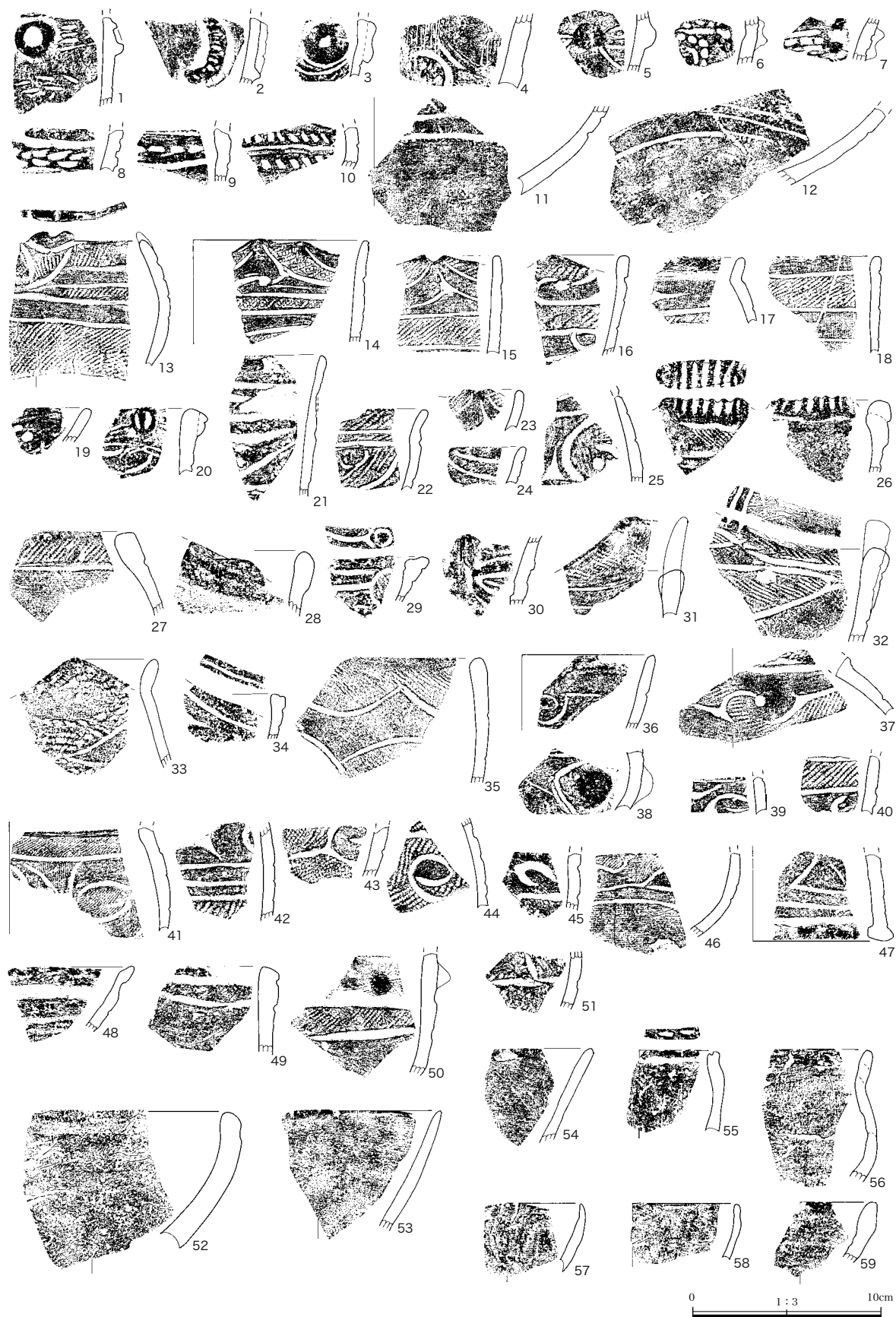


第74図 S I 0 3出土土器(10) [1116・1117]



0 1:3 10cm

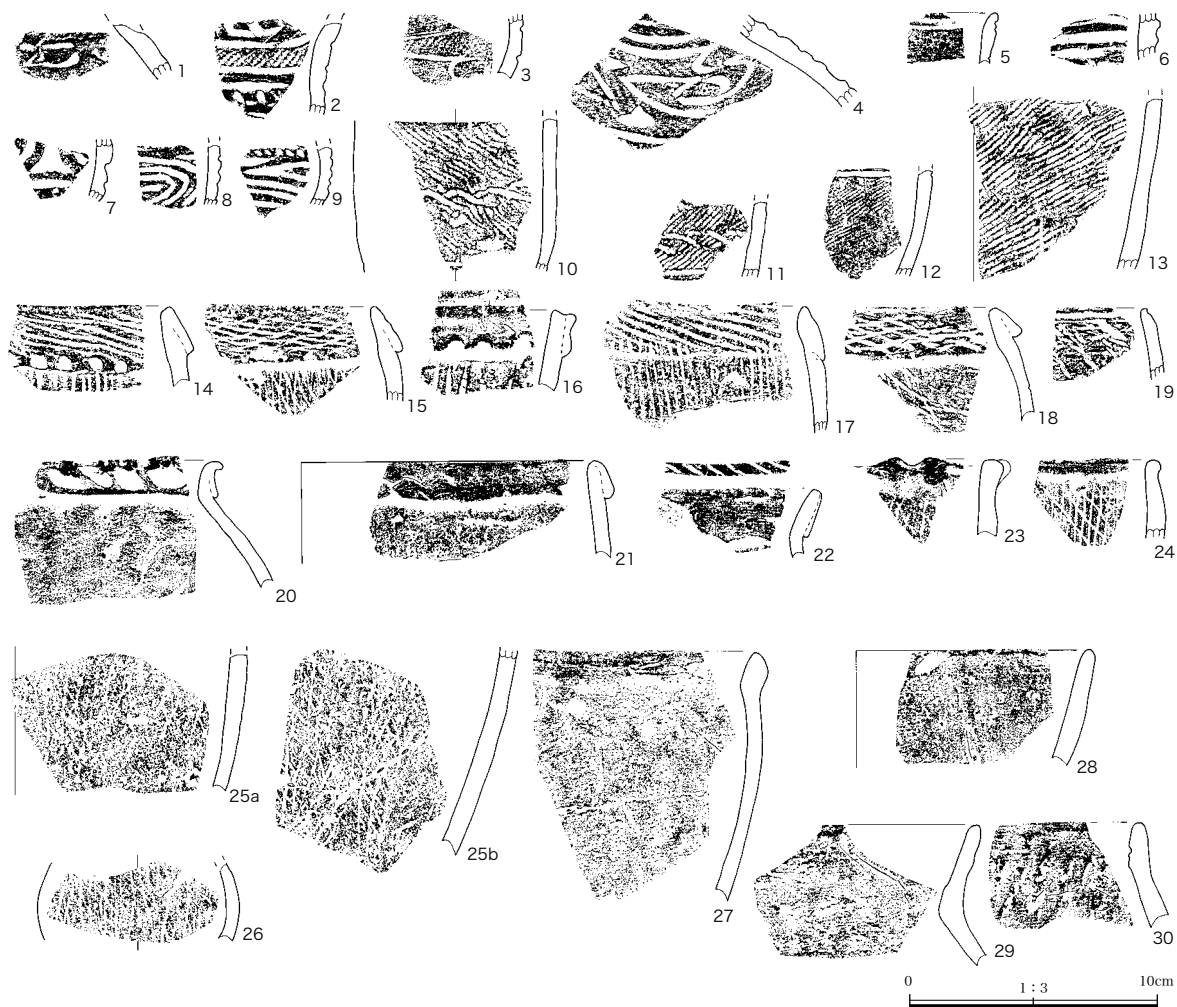
第75図 S103出土土器(11) [1116]



第76図 S103出土土器(12) [116]



第77図 SIO3出土土器(13) [116]



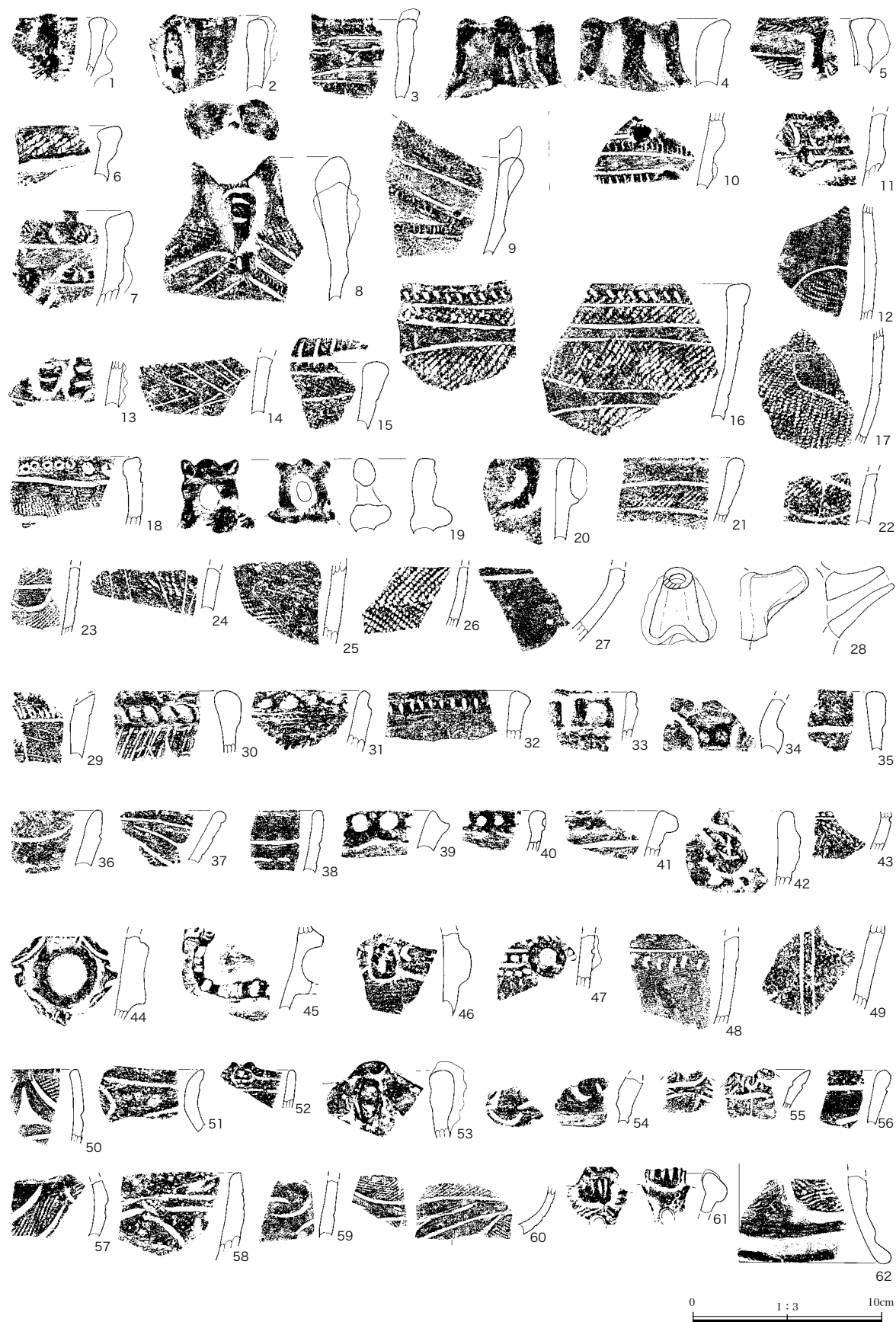
第78図 S103出土土器(14) [I116]

色調は内外面橙色を呈する。内面ヘラ状工具による丁寧なミガキも観察される。2は沈線→縄紋LR→無文部ミガキが観察され、欠けていて詳細不明だがB突起状の突起が付されていたようである。縄紋には結節が加えられる。外面にぶい赤褐色、内面黒褐色を呈する。3はかなり大形となる大洞C2式の鉢で、雲形文変化の一様相が示される。5～8はI117グリッドの径復元土器である。5はやや大きな破片から器形を復元したもので、厚手だが外面ミガキ調整を特徴とする。白色粒やや多く、褐色粒・角閃石を少量含み、色調は内面褐灰色、外面灰黄褐色を呈する。

第75図には、後期安行式、瘤付系、A群粗製土器系、晩期安行式系の沈線表現例、刺突を併用するもの、刺突+添付隆線のもの(57など)、刺突のみの例58などがある。第76図1～10は円形貼付文や刺突列などを特徴とするもの。13以下47までは安行3a・3b式もしくは大洞B1・B2式を主とする。後期に遡るものもあるかもしれない。52～59は無文の鉢だがいくつかの形態差が確認される。

第77図～78図1～9は大洞式系で大洞C2式を主体とする。第78図10以下は縄紋施紋例、付帯口縁例、網目状擦糸紋の例などを示す。

第79～80図以下はI117グリッド出土例を示す。第79図には後期安行式、瘤付系、分類A群の粗製土器、晩期安行式の沈線文表現例などを示す。第79図44～47では円形貼付文や隆帯+刺突が特徴的である。第80図1～44は大洞式系で、大洞C2式が多い。41は体部に雲形文変化の文様がやや不規則的に描かれており、



第79図 S103出土土器(15) [117]



第80図 S I O 3出土土器(16) [117]

頸部の隆線も含め、構成不明な土器である。45～48は前浦式、51～52は付帯口縁上にも原体施紋がある例。53は凹線により口縁部体部が区切られている、やや珍しいものである。

S I O 4（遺構第81・82図、遺物第83～85図、写真図版三）

形態・経緯 集落内北西外縁部で、西側7mより西は未調査区となる。SIO3は南南西19mのところの位置する。SD11.12及び攪乱に壊されている部分が多く、全体の形状は不鮮明である。グリッドではI0I4、I0I5グリッドに位置する。全体に西に向かって下がる傾斜地に位置する。北東やや離れてSK64がある。

確認は概ねローム漸移層～ローム層で、半円状の黒色部分が確認されたことから掘り下げを進め、住居跡と判断された。確認部分では掘り込み・壁は比較的明瞭であるが、他の部分では他遺構との重複もあって掘り込み・プランを確認できていない。結果的に遺構の北東部分、およそ1/4～1/6程度の確認である。平面記録不十分で掘り込み下端部ラインを示せないが、壁はやや緩やかな角度で立ち上がっている。

プランから想定される規模を一応示すと、東西方向（SD12東縁まで）で3.57m、南北方向で2.78mである。最大深さは0.23m。仮に軸をN-66°-Eとすると、軸長は3.55mとなる。図示したあたりまで住居範囲が拡がるとすれば径8.5m程の規模となる可能性もある。

床面・覆土 床面はローム層で概ね平坦だが、地山の傾斜に沿って西側が低く傾斜している。覆土はかなり細かく分層されているが、黒色土基調で下位や壁際ではローム粒・ブロックをやや多く含む傾向が窺える。この黒色土自体が周囲の上位包含層と類似している点も注意される。記録からはやや不自然な堆積と観察され、また図A-A'ラインでの4・5層がかなり下がった位置にあることも気になりなところである。4・5層にはついてはロームブロックが多い褐色土基調と記されており、床面より下位の貼り床土或いは地山である可能性もあろう。写真では掘り込み中央近くSD12に近いところで炉跡状の浅い掘り込み・焼土？が見えるが、記録無く不明である。

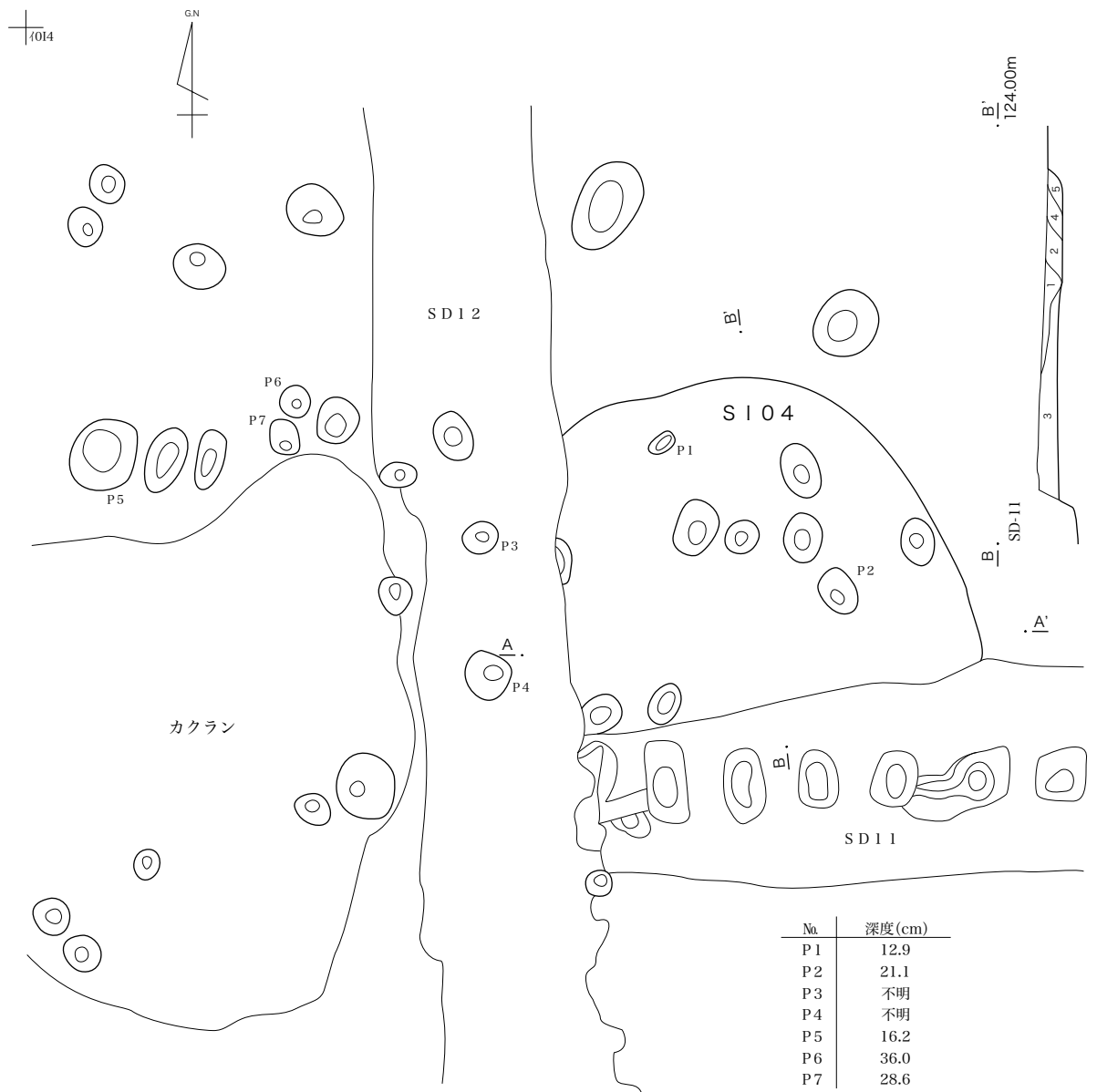
ピット ピットは捉えられた床面部で8基、この外側でやや多くのピットが確認されている。SD11内のピットはSD側に帰属する可能性が高いが、SD12内のピットについては、本跡に関わる可能性がある。P5～P7についてはプランから想定される住居範囲の外となるが、この近辺でのピット集中も気にかかるところでありあえて平面図中には示した。つまりP5から東方向に列状に並ぶピット群や、P5から北東へやや散漫ながら弧状に並ぶピット群を住居等遺構範囲と推定する案も考えられる。深さは多くが不明であるが、写真確認の限りではさほど深いピットは無さそうで、概ね10～15cm程度の深さと思われる。

遺物 第82図に示した出土状態の記録からは、遺物はやや少数で30点ほど（内石器・礫が20点程）の出土で、平面では比較的一定範囲、レベルでは床面より上位の確認面近くにまとまることが確認される。

復元個体も少なく、数点に留まる（第83図1～3、第84図1.2）。安行3b式の浅鉢1点（第83図1）が時期を示す可能性がある。破片では晩期中葉まで認められる。各個体の出土位置・レベルのチェックは未了で、検討を要する。土製品として小型土器1点、石器ではSIO4から磨石類が2点、磨製石斧が2点、石皿類（多孔石）が1点、I0I4グリッド扱いで打製石斧が2点、石錘未製品が2点、磨製石斧が1点である。

全体に土器出土量が少ないSIO4覆土資料である。

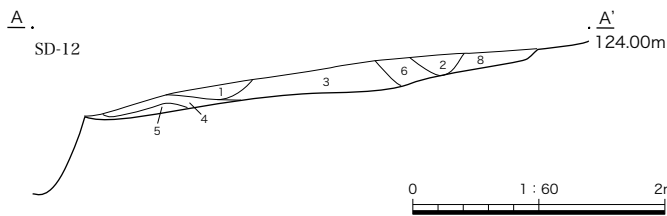
第83図1は口縁部にステッキ状文様が描かれる浅鉢で、器面はやや荒れている。やや太めの沈線→縄紋L R→無文部ミガキの順で文様が描かれる。確認される1単位で小渦巻状表現の瘤状突起（4個1単位？）が口縁端部に付される。頸部下にも1列（1幅分）のみ横帯に縄紋が施される。胎土には白色粒多量、石英少量を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。2は無文の鉢で、外面ケズリ～ミガキ、内面ナデ調整が観察される。



4015

S104 土層説明

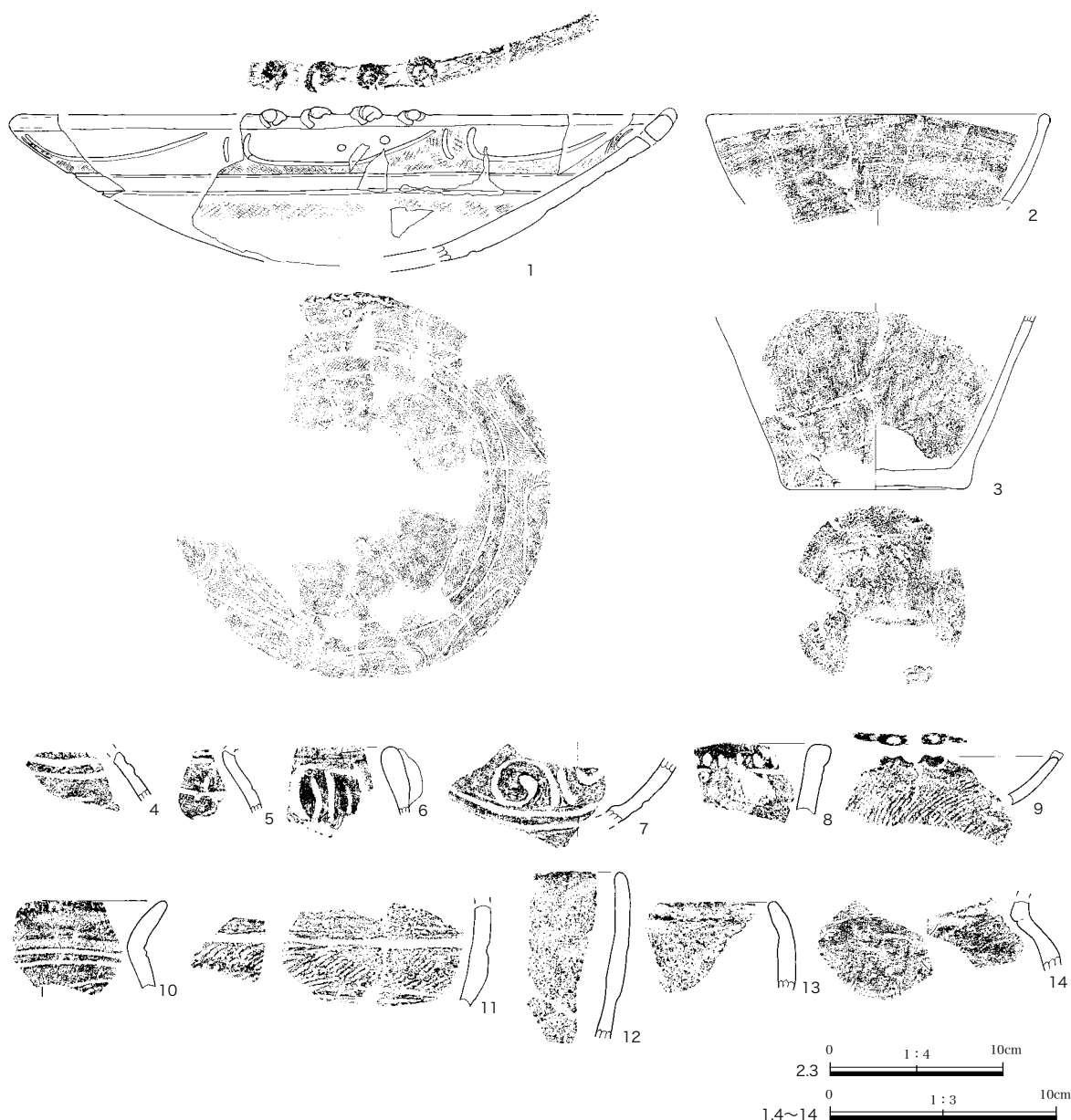
- 1. 暗褐色土 LRやや少
- 2. 暗黄褐色土 LRやや多、SPR微、IPR極微
- 3. 褐色土 LR微、IPR極微、小SPB含む
- 4. 暗黄褐色土 LBやや多、LR少、IPRやや少
- 5. 黄褐色土 小LB多、LR多、IPR微
- 6. 黒褐色土 小LB微、LRやや少



第81図 S104(1)



第82図 S104(2)



第83図 S104出土土器(1)

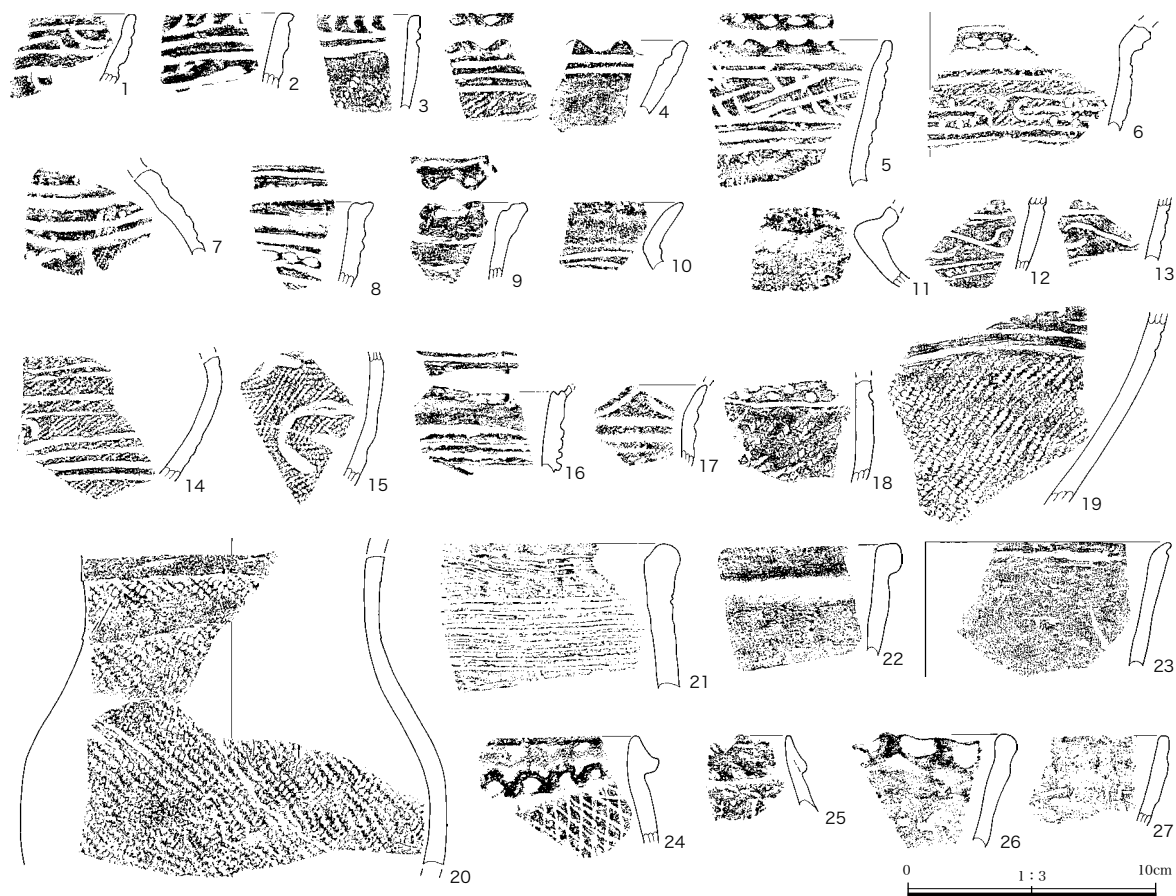
色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には白色粒を少量含む。4以下には晩期安行式、前浦式、無文土器などを示す。

第84図には4014グリッド出土の破片を示す。1は径を復元し得た晩期安行式鉢で、入組三叉文が描かれる。2は屈曲する頸部以下に縄紋が施される土器で、おそらく頸部より上位に大洞式文様が描かれることが想定される。3以下は破片で、3～13は瘤付系土器、14～22はいわゆる粗製土器紐線文系、ただし16や18は頸部に弧線文が描かれ、或いは精製の沈線+刺突文で系統判断が難しい。23以下は沈線や刺突を特徴とするもので、30には円形貼付文がある。34及び36以下は安行3a式・同3b式等である。50は直立の傾きで示しているが、内面粗いミガキ調整が観察され、鉢の底部に文様が描かれる例となる。

第85図1～19には大洞式系有文例を示す。20はやや節が太めの縄紋を施す体部が膨らむもので、胎土には白色粒・石英のほか、白色針状粒・角閃石を少量含む。色調は黒褐色を基調とする。21以下には条線、無文・網目状擦糸紋などの例を示す。



第84図 S104出土土器(2) [1014]



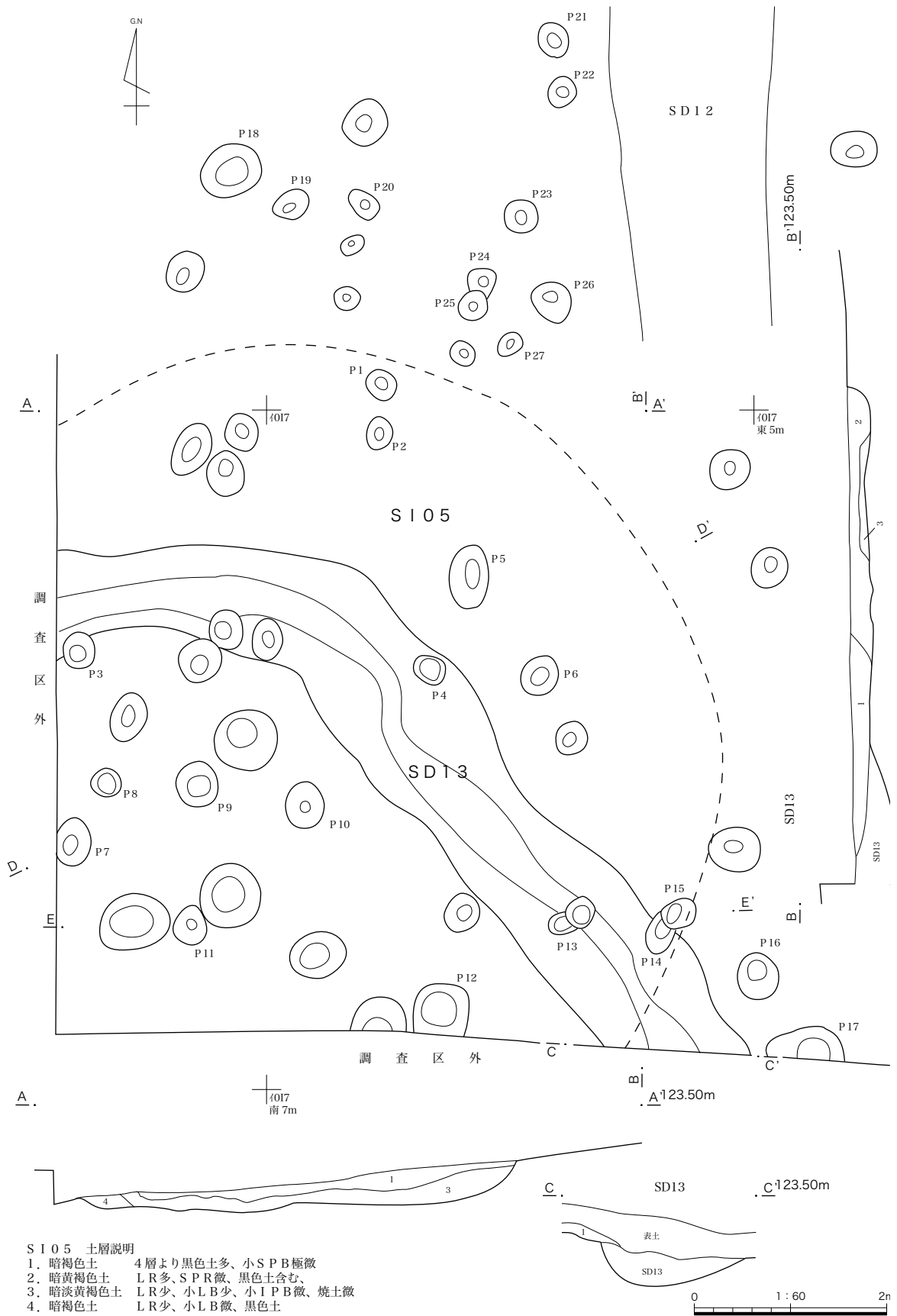
第85図 S I O 4出土土器(3) [1014]

S I O 5 (遺構第86～88図、遺物第89～93図)

位置・形態・経緯 集落内北西部で、西側・南側は未調査区となる。西側は数mでカットされた崖面となっており、地表面・確認面とも西側に向かって傾斜している(A-A'セクション)。SD13と重複する。SD12とも重複する位置関係にあるが、関係は不明である。東8mにはSI03が位置している。

本跡は包含層グリッド掘り下げの過程で確認されたもので、確認はローム漸移層～ローム面のようなものである。土層断面は、このグリッドラインの南北・東西ベルトで記録されている。これにより掘り込みが確認されているが、対応する平面記録が無く住居の形態は把握し得ない。この断面記録での掘り込みプランを点線で示したが、ここでの規模を計測すると、7.1m×6.9mとなる。円形を想定すれば径9m近くとかなり大きな規模となる。SD13とは同時に調査されている。

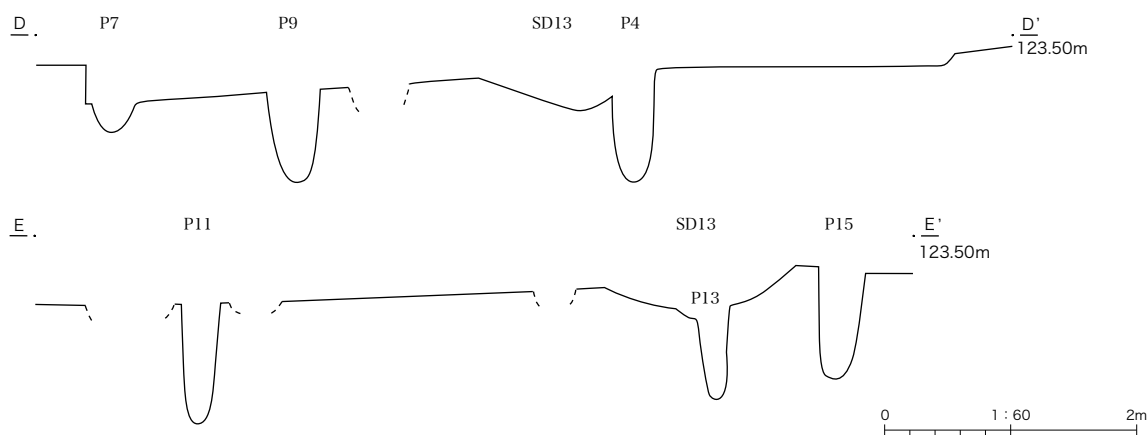
床面・覆土 写真や断面記録等からは、比較的凹凸のあるロームの床面である。住居跡覆土は1～4層に分層され、最も厚いところでは40cm近い。1～4層は概ねレンズ状の自然堆積を示しているように観察される。SD13との関係が問題となる。C-C'セクションで示したように、溝覆土の方が住居覆土に覆われることが記録されている。ここで示していないが、SD13西端でのセクション記録(SD13A-A'、第242図)でも同様の関係性が記録されており、住居より古い溝遺構となる。この部分のSD13のセクション写真を確認しても溝覆土を覆っての黒色土堆積が明瞭であり、この関係性に問題はないと判断される。遺物出土状態の平面分布(第88図)もこの推定を傍証する。この溝が住居壁溝等の遺構や「掘り方」となる可能性もあろうが、形態的には考えにくい。調査所見通り住居より古い溝と捉え、住居の時期について考える必要があるか。或いは包



S105 土層説明

- | | |
|-----------|--------------------|
| 1. 暗褐色土 | 4層より黒色土多、小SPB極微 |
| 2. 暗黄褐色土 | LR多、SPR微、黒色土含む、 |
| 3. 暗淡黄褐色土 | LR少、小LB少、小IPB微、焼土微 |
| 4. 暗褐色土 | LR少、小LB微、黒色土 |

第86図 S105(1)



No.	深度(cm)	No.	深度(cm)
P1	12.5	P15	90.1
P2	28.0	P16	14.6
P3	92.0	P17	46.0
P4	95.5	P18	34.5
P5	33.5	P19	32.3
P6	31.1	P20	19.2
P7	24.3	P21	30.5
P8	35.0	P22	27.7
P9	75.8	P23	7.0
P10	12.5	P24	16.5
P11	98.1	P25	16.1
P12	26.0	P26	7.7
P13	84.8	P27	3.9
P14	49.8		

第87図 S105(2)

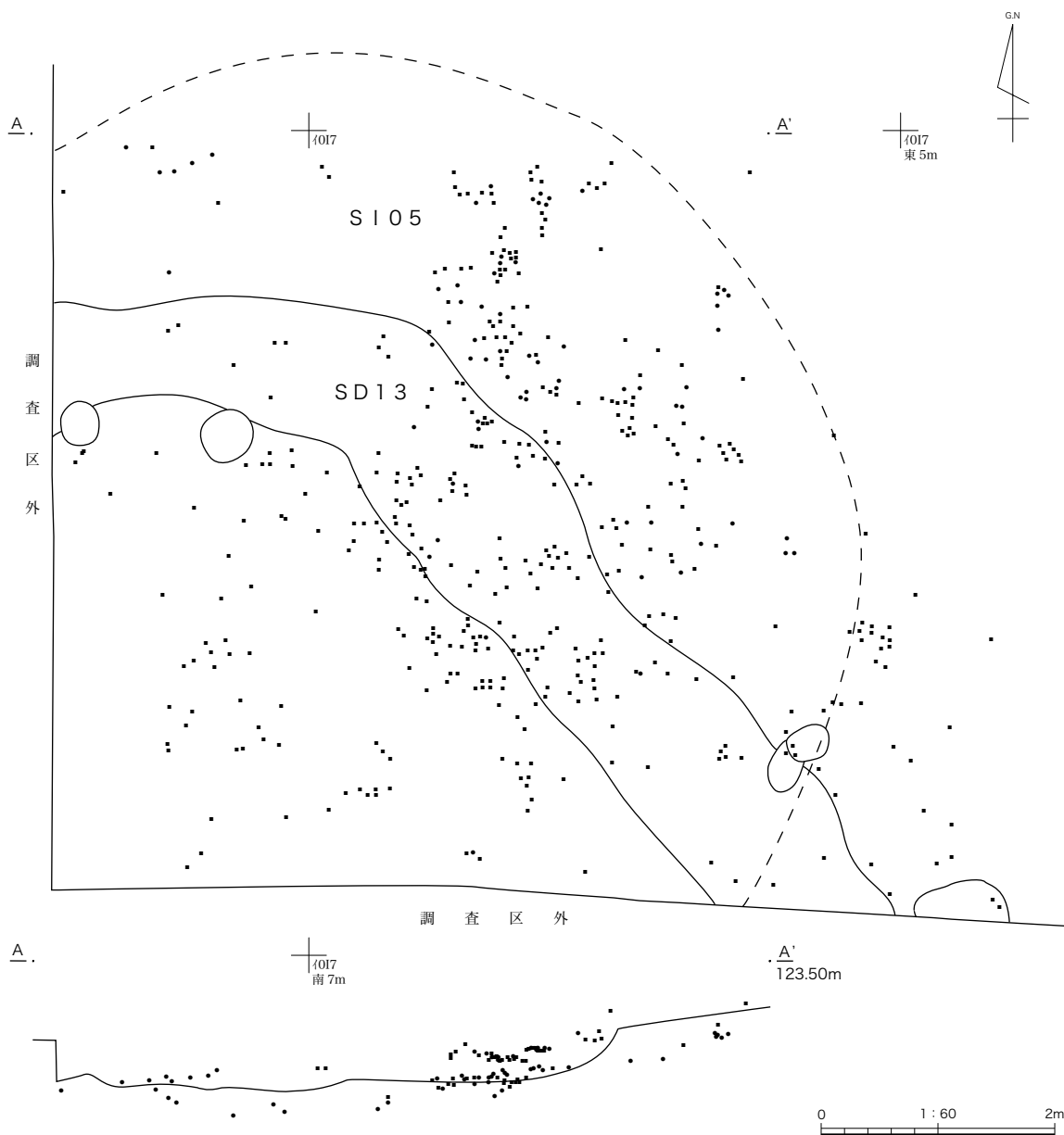
含層と住居跡覆土の区別も明瞭ではないようであり、縄紋時代の住居跡との判断に問題があるのかもしれない。断面記録から判断する壁の立ち上がりはやや緩やかであり、自然の落ち込みの可能性も残るとはいえ、深いピットの存在等から、形態判断は措くとしても、住居跡の存在自体は認めて良さそうである。

ピット 周辺も含め深さの判明する27基に番号を付した。点線範囲内でのピット数は30基である。深さ50cmを超えるピットとしてP3.P4.P9.P11.P13.P15があり、これに注意してエレベーション図を示した。但し支柱配置や壁柱穴の巡りを推定することは点線範囲外側を考慮しても尚困難である。また列状の並びが窺えるところもあり掘立柱建物跡も検討したが、明瞭な判断はできない。

遺物 遺物の出土は多く、中央～北東よりの位置でやや多い傾向にあるうか。既述のようにSD13範囲と無関係に分布しているようであり、少なくとも遺物を包含する層を壊しての溝構築ではないと判断される。記録取り上げ遺物の40%ほどは礫・石器のようで、とりわけ礫（搬入礫）の多さは注意される。復元個体は第89図1～7が出土しているが、個別の出土位置は確認していない。土器全体では大洞C2式が主体を占めており、住居跡の時期もこの時期と考えて良いであろう。石器・石製品では磨石類が55点、石皿類が8点、打製石斧が3点、磨製石斧が3点、石錘が9点、石剣類が3点、岩版1点である。

土器についてS105覆土出土例を第89～91図に、当該グリッド出土例を第92、93図に示す。

第89図1は頸部に施文域がある深鉢で、口縁に大きめの二山突起がやや短い間隔で巡る。沈線→縄紋LR→無文部ミガキだが、沈線の太さは不定で、ミガキも不十分など、文様の変容と相まって粗雑な印象を受ける。縄紋部・無文部の交互施文も乱れが顕著である。外面下方はケズリ～ナデ、内面ナデ～ミガキである。胎土には石英・白色粒・角閃石を多量に含み、色調は黒褐色～灰褐色を呈する。2は撚糸紋R施紋の土器で、口縁付帯部は横方向、体部は縦方向施紋である。内面ナデ調整だが口縁近くはミガキに近い。胎土には0.5～1.5



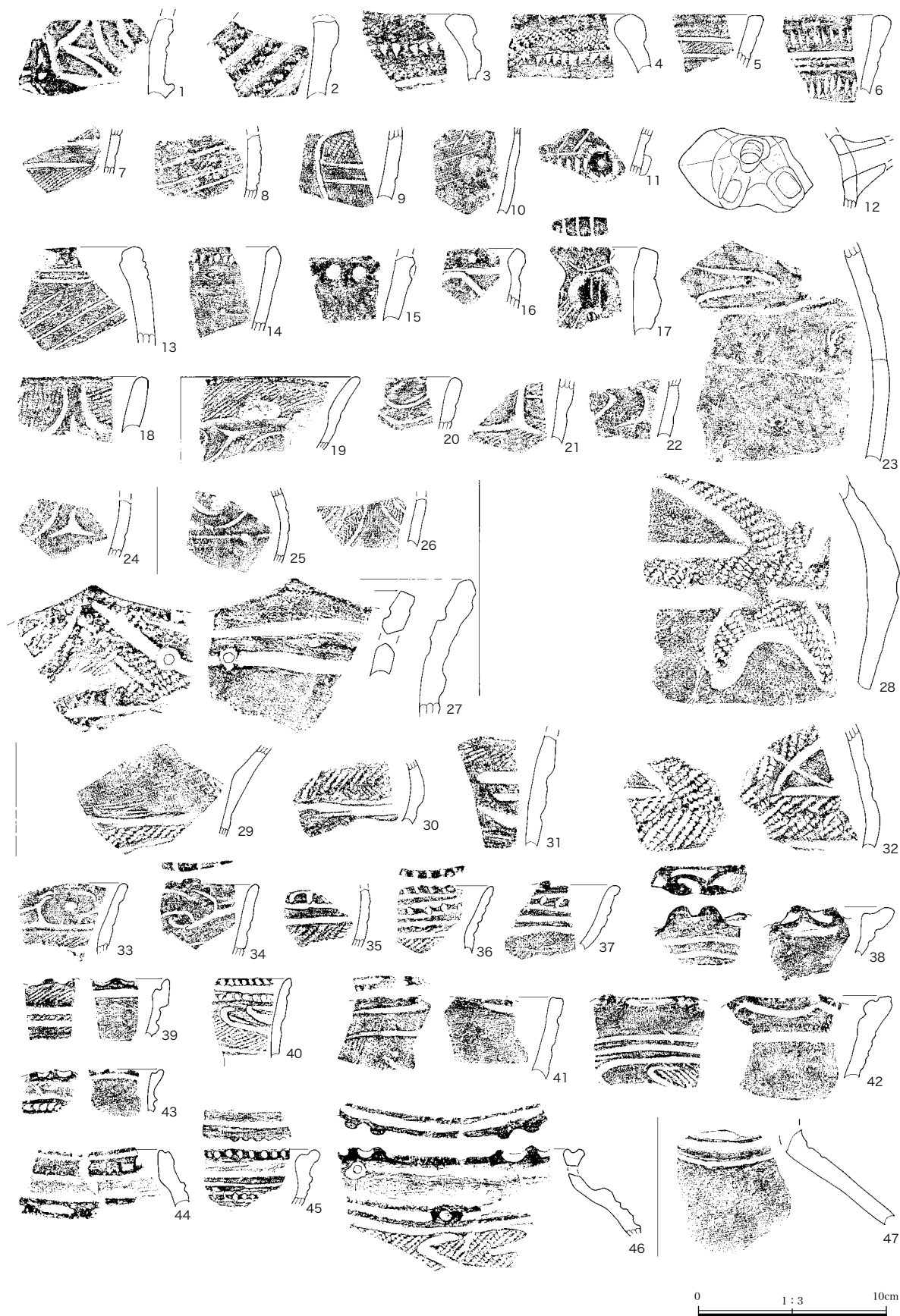
第88図 S105(3)

mmの白色粒を多量に含む。外面灰黄褐色、内面にぶい黄橙色～褐灰色を呈する。3の小形浅鉢は沈線→刺突・縄紋LR→ミガキの順で描かれる比較的丁寧な施文の土器である。胎土中の鉱物は少なく堅緻な質感で、少量含まれる白色粒も0.5mm以下の粒子状である。内面のミガキも丁寧である。4は頸部屈曲の深鉢で、無文の頸部以下には撚糸紋Rが施される。内面ナデ調整で、胎土には石英を少量含み、色調は黄灰色を呈する。6は頸部沈線と体部の撚糸紋Lのみ確認されるが、恐らく上位に大洞C2式文様が描かれる小形壺に近い形状の深鉢と推定される。内面ミガキ調整で、胎土では粒径の小さい石英・白色粒を含み、堅緻硬質な感を受ける。色調は灰黄褐色～黒褐色を呈する。5は網目状撚糸紋が施される深鉢の体部下方である。内面ナデ～ミガキ調整で、バンド状の焦げが確認される。7は皿状の器形で、上面観が正円とはならず楕円形となる可能性がある。内外面ミガキ調整、突起下の小孔は焼成前の穿孔であり補修孔ではない。

第90図には後期安行式(2～4)、瘤付系(5～12)、晩期安行式及び関連する土器(17～26)、前浦式(27～32)、大洞式系(33～47)を示す。比率を示し得ないが、大洞C2式、前浦式あたりが目立っている。



第89図 S105出土土器(1)

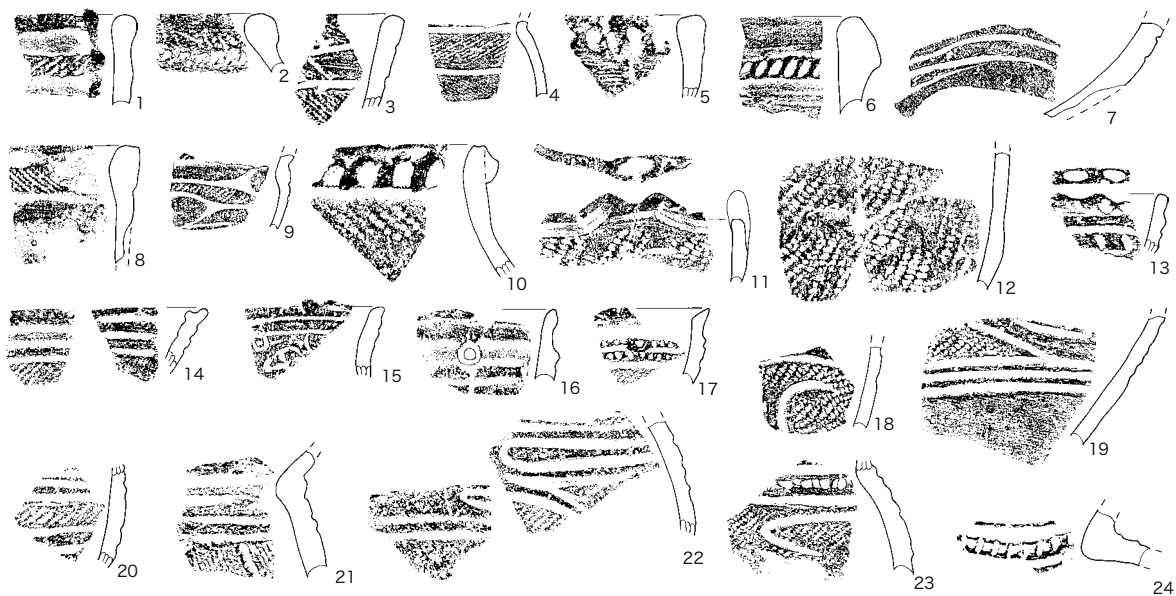


第90図 S105出土土器(2)

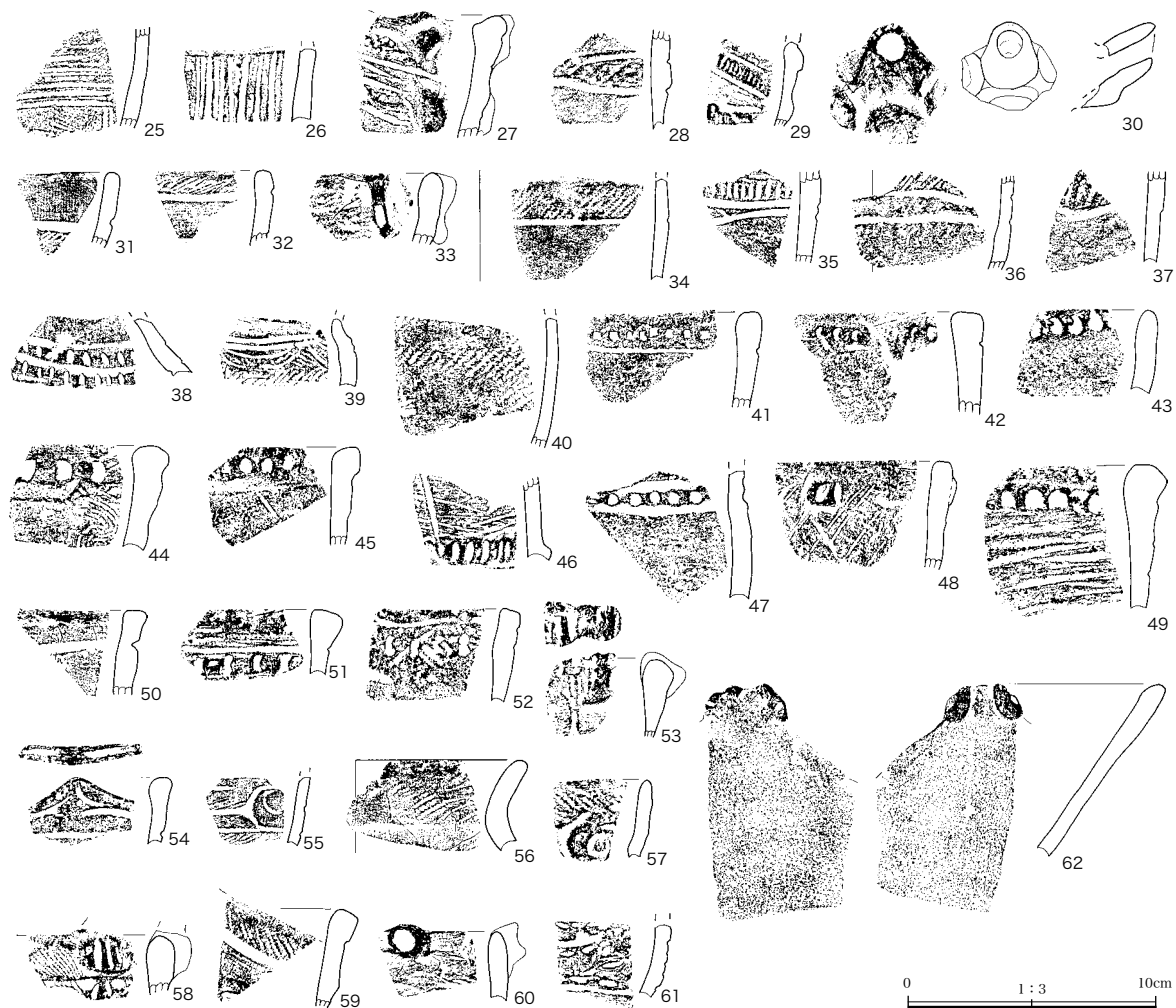


第91圖 S105出土土器(3)

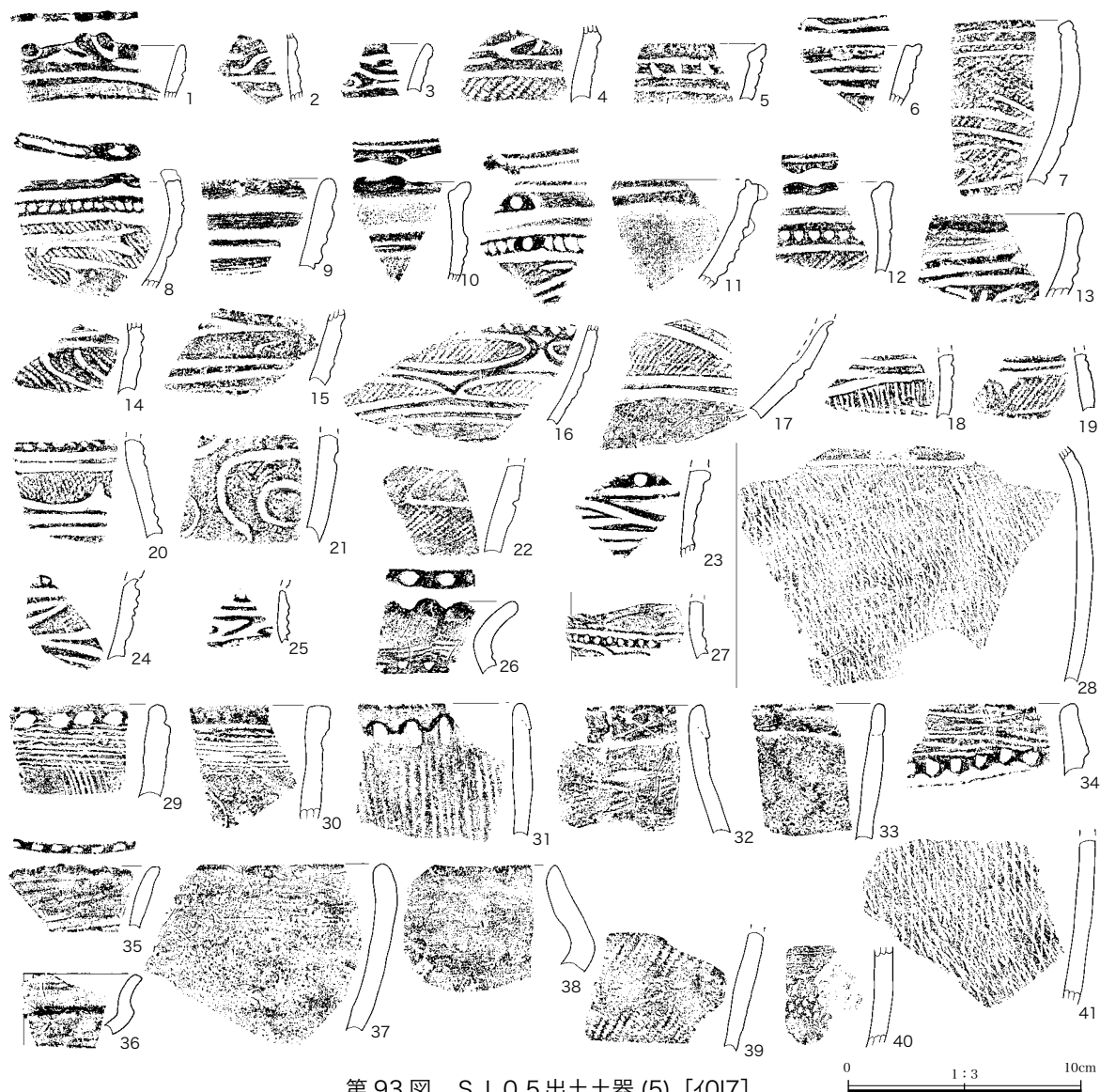
7917



1017



第92図 S I O 5出土土器(4) [7917・1017]



第93図 SI05出土土器(5) [1017]

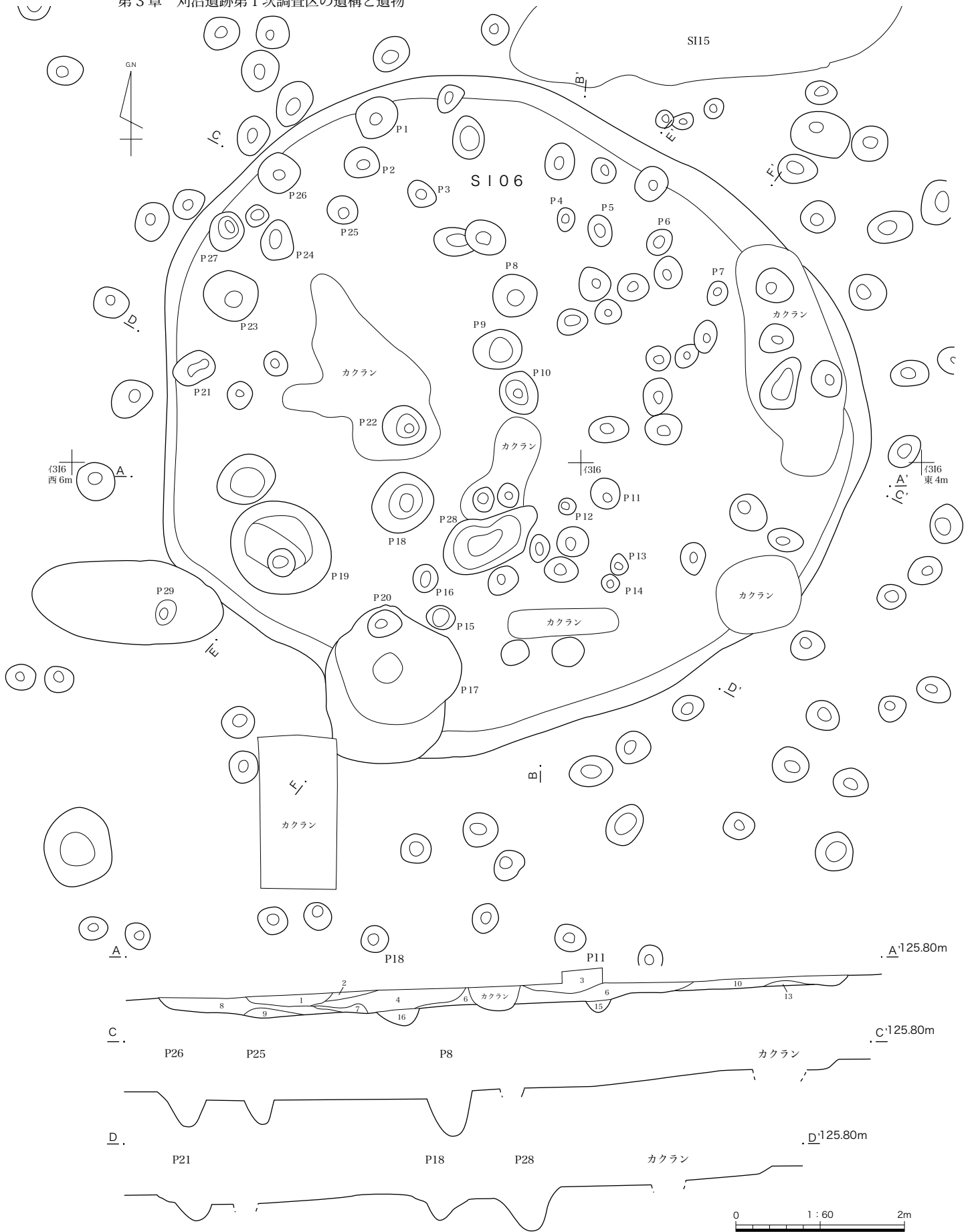
第91図1～24にも大洞C2式を主とする土器群を示す。3.4.10など雲形文変容の文様例が確認できる。25.26は条線例、27～35は付帯口縁の例で、刺突や燃糸紋施紋などの付帯上の装飾の多様性がうかがえる。以下縄紋例・燃糸紋例、無文の例などを示す。

第92図上段に7917グリッドの出土破片を示す。ここでも16～23など、大洞C2式の幾つかの文様例が示される。25～62には1017グリッド出土の例を示す。25.26は確定的な判断はし得ないが、堀之内式に対比されようか。27以下に後期安行式(27～29)、瘤付系(31～40)、粗製土器紐線文系(41～49)、晚期安行式系もしくは大洞B1・B2式(53～62)を示す。

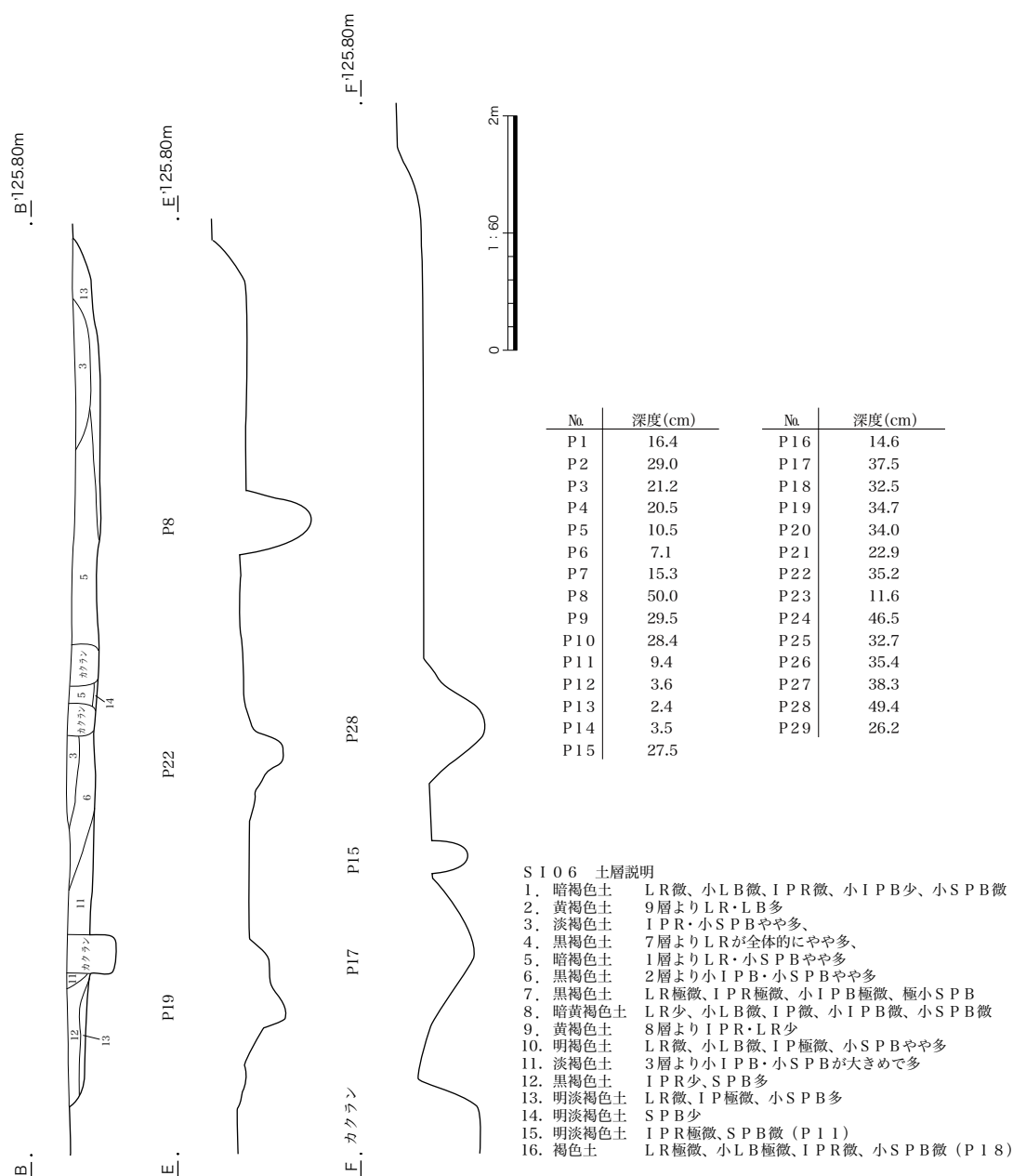
第93図1～28には大洞式系、29以下に条線紋や付帯口縁の土器、縄紋のみの例、網目状燃糸紋例などを示す。40は擬縄紋の例である。

SI06 (遺構第94～96図、遺物第97～105図)

位置・形態・経緯 集落内北西部で、比較的遺構が集中する区域である。南3mにSI10、北側1mにSI15、南西側6mにSI03が位置する。SI15とは近接しており、ピット配置からの想定案によっては重複する位置



第94図 S106(1)



第95図 S106(2)

関係にあるとも言える。

本跡は一定の深さで包含層グリッド掘り下げを行った後の包含層黒色土面で確認されたものである。壁も概ね黒色土のようであり、包含層と覆土相互の区別についての記録もないことから、掘り込みプランも確定的として良いか判断が難しい。但し土層断面観察では、3、10層など、やや明るい色調を呈していること、ロームの粒やブロックの含有が見られることなど、包含層との区別を観察している所見と判断することもできる。軸をN-36° -Eとしたとき、規模は7.42×8.21×0.25mとなる。この軸は南西のP19.P20を入口とし、プランの形態、ピット配置等から検討したものであり、若干直交軸の方が長い楕円形の形態と言える。

床面・覆土 床面はローム面で比較的平坦、硬化しているようにも見えるが、確実な所見の記録はない。確認面の傾斜に概ね沿うように、床面もやや西側が低く傾斜している。また写真記録の一部からは、東～南側



第96図 S106(3)

1/3～1/2の床面がやや明るい色調の面（今市パミスが目立つ面？）で、かつ一段低く下がっているようにも見えるが、図の記録には示されておらず良く分からない。

覆土は14層に分けられ、やや複雑な堆積が示されている。但し写真記録からは各層さほど大きな差異は認められず、黒色土を基調とし、微妙な色調の違いや含有物の差異から分けられているようである。分層を大きく捉えれば概ね壁際→中央への自然堆積を示しているようにも観察できようか。

また平面図記録で「カクラン」とされている範囲について、大きくローム面下方まで至るようなカクランではないようであり、形態も含め不明な点が残る。

ピット 深さが判明している 29 基について番号を付した。1 基以外はプラン内である。40cm を超える深さのものとして、P8.P24.P28 の 3 基がある。P8.P28 については、その位置からも支柱穴となる可能性がある。また P17.P19 はやや大きな規模であり、入口ピット関係と推定することもできる。プラン内には番号を付していないピット 38 基があり、掘り込みプラン内は計 66 基となる。またプラン外にも図示したように多数のピットがあるが、ほとんどは深さ不明である。北西側ではプランの壁に沿うように幾つかのピットがあり「壁支柱穴」を想定させるが、南東側など散漫である。深さ 20～40 cm の深さのもの—P19 や P21 等を検討してゆく必要があるか。但し住居の掘り上がり写真では、これら発番していないピットは確認できない。つまり第 94 図に示した遺構図は、住居跡完掘後の周辺も含めた包含層掘り下げ過程で判明したものの記録（掘り上がり航空写真測量図含む）を合成して示しており、住居跡調査の中では確認されていなかったものを含む。これら最終的な確認を積極的に評価すれば、弧状や列状に並ぶようなところもあることから、掘り込みを捉えたプラン形態とは別の住居跡を想定してゆくことも不可能ではないが、記録不十分故に検討は困難である。なおピット覆土では P11.P18 の 2 基のみ記録がある。

遺物 遺物は一定量散漫な分布ながら出土している。やや南側に多いようにも捉えられる。平面ドットの記録はされているものの、際立った特徴を見出しがたいこともあり図示は控えた。SI06 復元個体は第 97 図 1 の 1 点のみであるが、当該グリッド出土土器は比較的多く、これらのものが本跡に伴う可能性もある。出土している土器の個別の出土位置は検討し得ていない。大洞 C 1 式～C 2 式併行の土器が主体を占めており、概ね住居跡の時期を示すと考えて良いであろう。石器では磨石類が 9 点、石皿類が 3 点、石錘が 3 点、石鏃が 1 点、磨製石斧が 1 点、I 2I6 グリッドで石鏃未製品が 1 点等である。

第 97～99 図は覆土出土資料である。第 102 図 3 は、SI15 範囲、B' の北東 3m から出土している。

第 97 図 1 は高さ 43 cm の大形深鉢で、口頸部に大洞式文様、体部に網目状撚糸紋が施される土器である。撚糸紋は R で軸縄は不明。胎土には石英・白色粒を多く含むほか、灰色粒及び白色針状粒を少量含む。色調は外面橙色、内面赤橙色を呈する。2 は付帯口縁で撚糸紋が施される土器で、幾つかの破片から復元したものである。接合せず位置も確定し難い 2 片を別に示した。

第 98 図には後期安行式、瘤付系、大洞式系などを示す。6 の擬縄紋例、撚糸紋地に文様が描かれる 23、刺突が口縁端部にも施される 16、小形の鉢 53、注口土器または異形土器の 58 等、注目される資料がある。

第 99 図には大洞式体部破片、網目状撚糸紋の土器、付帯口縁の土器、無文の鉢などを示す。付帯上に縄紋が施され、付帯下端に大きめの切込み状刺突（窪み）が加えられる 15 は、15 b .15 c として示した破片が同一個体と推定されるが、器形復元はし得なかった。

第 100 図、第 101 図 1～8 は I 2I5 グリッド出土資料で、SI06 または SI15 に帰属する可能性があるものとして示す。安行 2 式、瘤付系第 3 段階、前浦式、大洞 C 2 式あたりがやや目立っている。第 101 図 6 は付帯口縁に網目状撚糸紋が施される土器である。R の縄が巻き付けられているが、軸縄は不鮮明で LR であろうか。石英・白色粒をやや多く含み、色調は明赤褐色を呈する。第 101 図 9 以下は I 3I5 グリッドのもので、これも SI06 または SI15 帰属の可能性がある。後期後半安行式、晩期安行式、大洞式系などを示すが、25.28.29 など刺突列が特徴的な資料も認められる。大洞式では C 2 式の鉢がやや目立っている。

第 102 図には同じグリッドで器形や径を復元し得たものを示す。1 は口縁が内湾するやや小形の深鉢で、南関東で見られる紐線文系変化の条線文系と推定されるが、やや粗く雑な施文という印象を受ける。内面は丁寧なミガキ調整、外面には焦げの付着が観察される。色調は内外面ともにぶい赤褐色～黒褐色を呈する。2 は無文の浅鉢で、口縁端部での上位よりの押圧で、直下の前面に狭い粘土突出が見られる。通常ケズリやミ



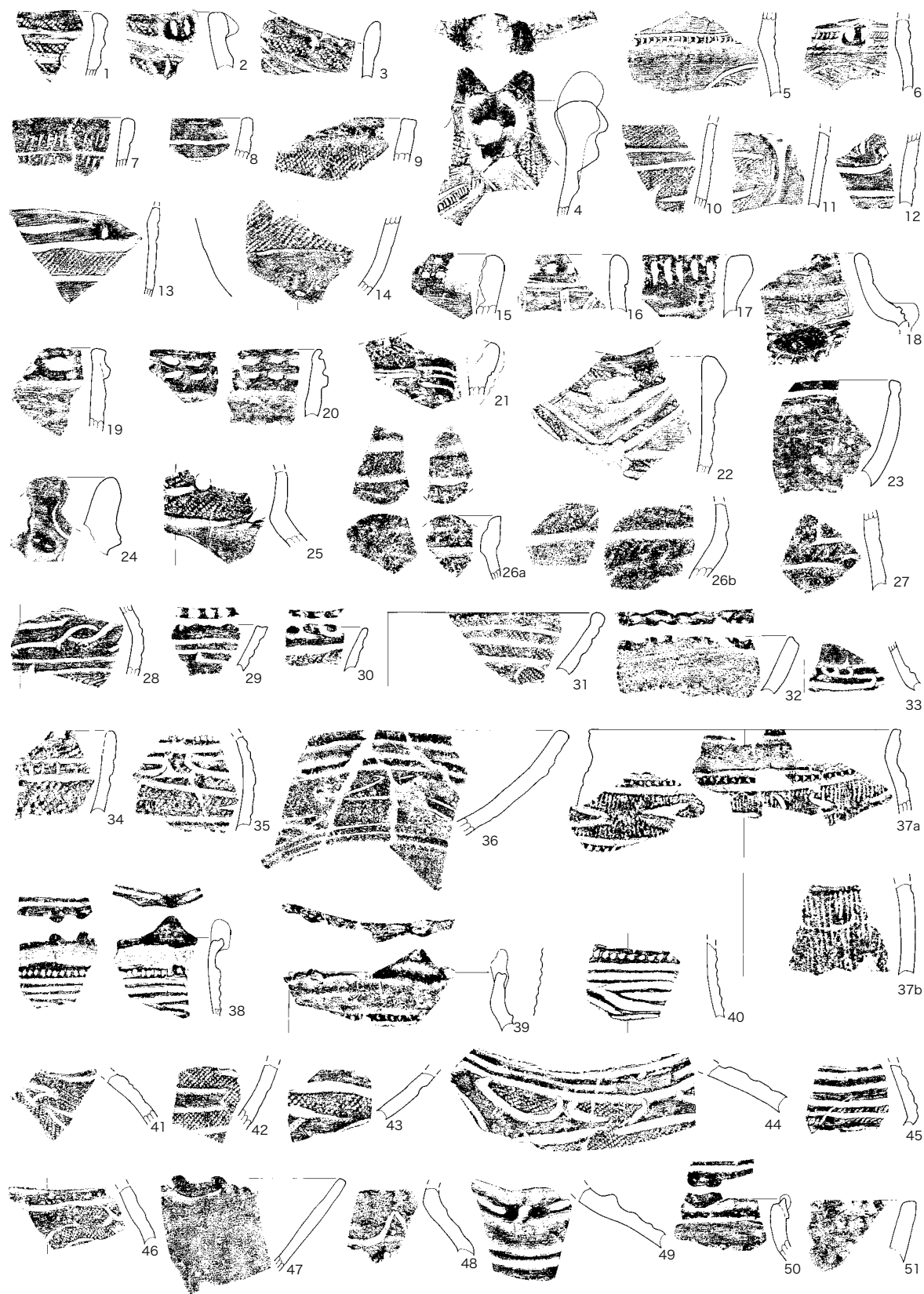
第97図 S106出土土器(1)



第98圖 S106出土土器(2)



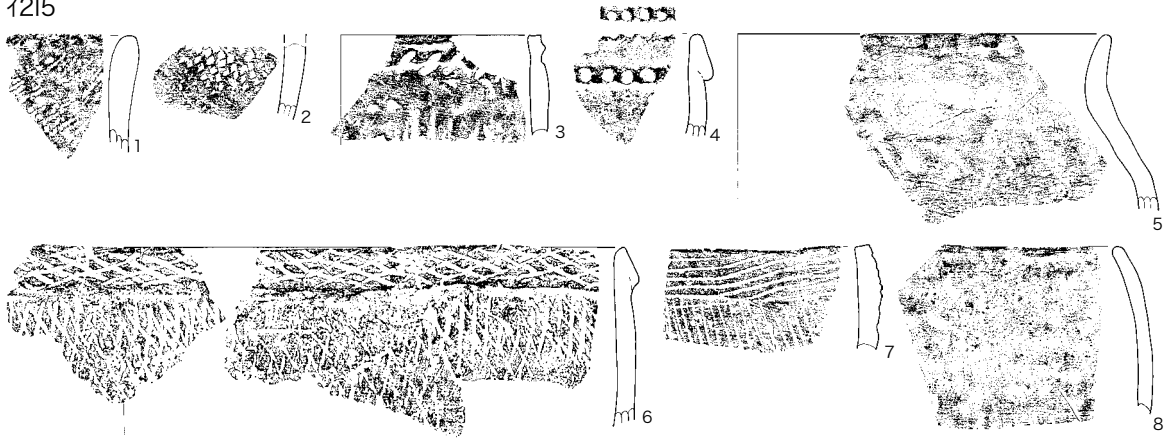
第99図 S106出土土器(3)



0 1:3 10cm

第100図 SIO6出土土器(4) [1215]

1215



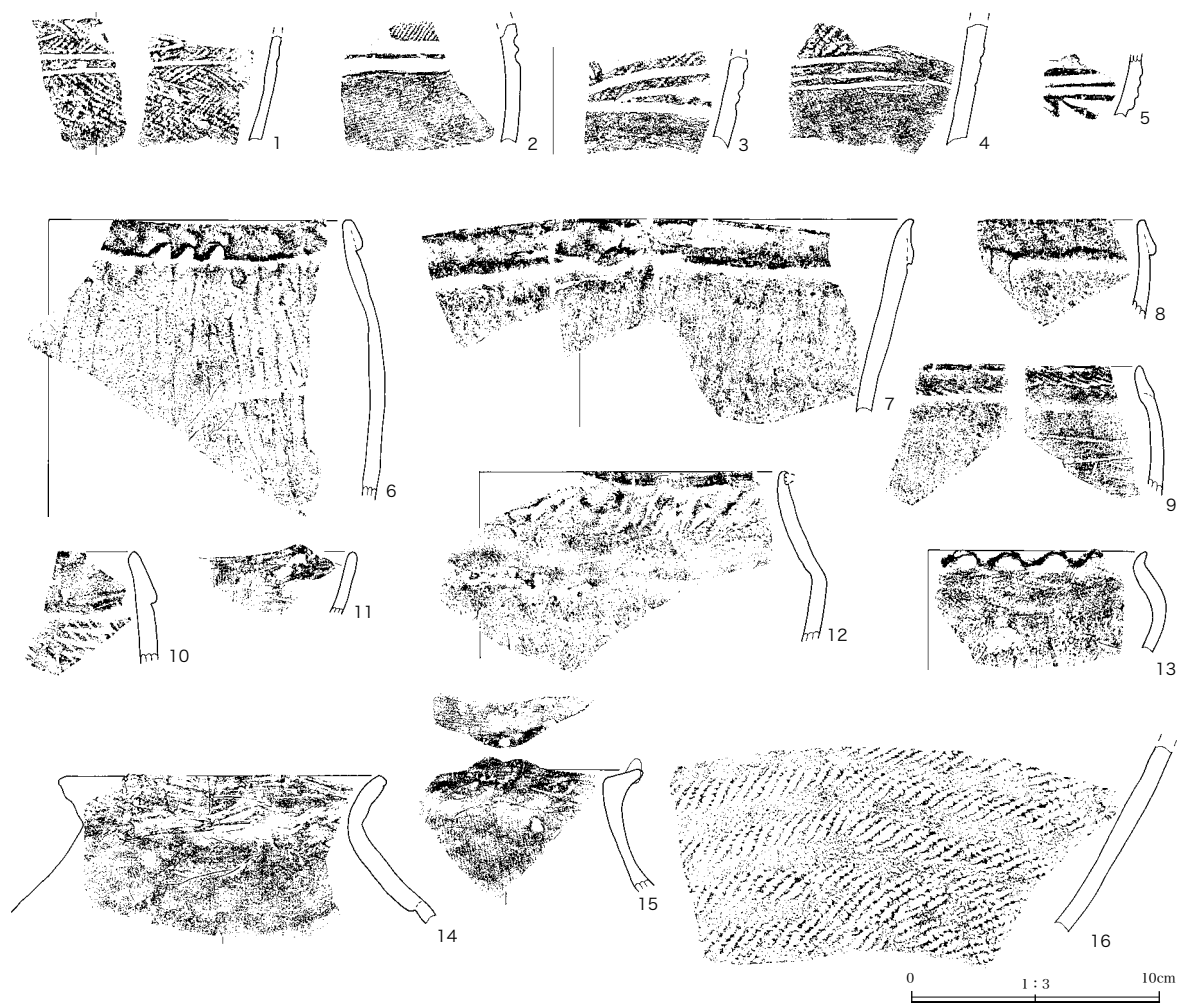
1315



第101図 S106出土土器(5) [1215・1315]



第102図 S I O 6出土土器(6) [1315]



第103図 S106出土土器(7) [1315]

ガキでこの粘土はみ出しは削除されるが、本例は残っているやや珍しい例と言える。3は頸部に屈曲がある深鉢で、本遺跡に特徴的な系統の土器である。屈曲部の少し下位に、やや細くシャープな沈線・刺突及び瘤状突起による文様がある。口縁端部に加えられる刺突列も細長く、頸部文様の手法に類似する。同図4は広口壺状で、体部は縄紋無節Lに結節が加えられる。端部の刺突はやや深い施文、頸部の沈線・刺突はやや浅く、ミガキも加えられる。胎土には石英・白色粒を多く含み、外面赤褐色、内面にぶい赤褐色～黒褐色を呈する。6は無文深鉢で、大形破片群からの器形復元である。外面へラ状工具によるナデ～粗いミガキで、内面も概ねミガキによっている。比較的丁寧なミガキのわりには接合痕が残り、或いは接合部分での割れが多く観察される。白色粒・石英・雲母をやや多く含み、色調は内外面にぶい橙色～黒褐色を呈する。

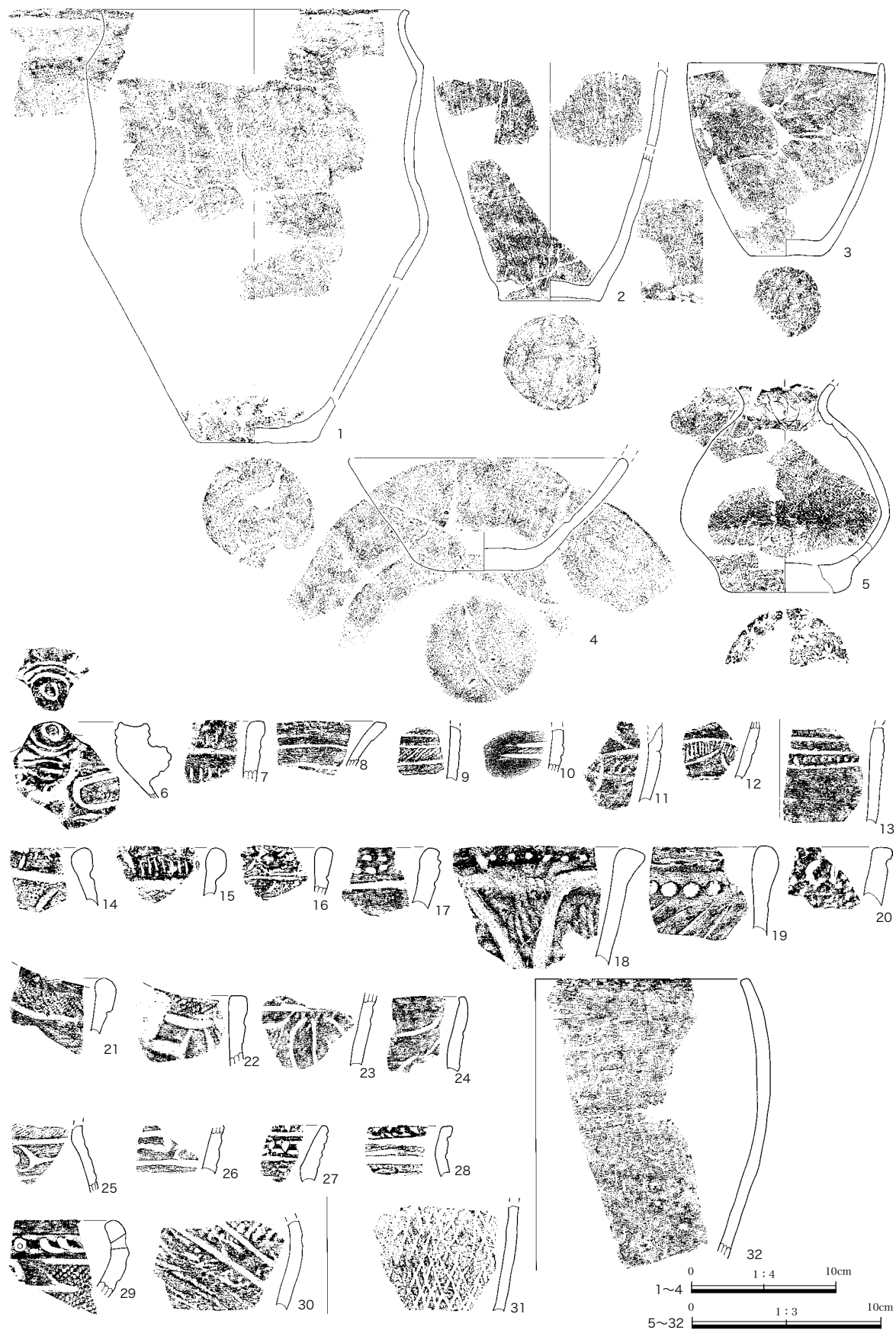
第103図には大洞式系の体部破片、付帯口縁の土器、壺の無文部分などを示す。

第104図はI216グリッド出土例である。器形復元した1は隆帯による意匠表現（一部刻み加飾）があるもので、隆帯貼付後の器面にミガキが加えられるが、やや雑な感がある。胎土には白色粒・角閃石・石英を多く含み、色調は内外面明赤褐色～灰褐色を呈する。2～35の破片資料では、14.15.19.21.22等の、主に沈線で文様を描く類が典型的な安行式系と異なる例として注目されよう。37は擬縄紋の例である。

第105図はI316グリッド出土のものを示す。1は無文の深鉢で、大形破片数点から器形復元したものである。底部の破片とは胎土・質感などから同一と判断したが、器形復元推定は確定的ではない。薄手の作りと



第104図 S106出土土器(8) [1216]



第105図 S106出土土器(9) [1316]

器形の突出部が特徴的で、「異系統」土器群と推定される。二次的な被熱であろうが、かなり赤く変色し外面橙～灰褐色、内面褐灰色を呈している。胎土には0.5～2mmの白色粒を多量に含み、内外面はやや粗いナデ調整と観察される。3は比較的丁寧なミガキが観察される小形の深鉢である。にぶい橙色～黒褐色を呈する。4は深鉢の体部下方～底部だが、破片の割れ口上端面がかなり擦れており、擬口縁として再生している可能性が考えられるものである。内外面ミガキ調整で、色調はにぶい黄橙色を呈する。5は小形の壺で、「小型土器」という判断もあるかもしれない。内面ナデ、外面ナデ～ミガキ調整であるが、頸部付近は輪積痕跡が残る。胎土には灰色粒をやや多く、石英・白色粒を少量含む。外面明赤褐色、内面にぶい橙色を呈する。6～32に破片資料を示す。18は図とは上下逆で台付の可能性があるが、判断できない。やや下がった位置に刺突列がある19やC字形の爪形状刺突がある20など、興味深い資料がある。

SI07（遺構第106～108図、遺物第109～112図、写真図版三）

位置・形態・経緯 集落内北部で、比較的遺構が集中する区域の中でも北側でI4I5グリッドに位置する。言い換えれば、SI04と共に刈沼後晩期集落の最も北側にある住居跡と言える。南7mにSI01、西側5mにSI15、南東7mにSI13が位置する。またSD15と近接しており、ピット配置からの想定案によっては重複する位置関係とも言えるが、遺構覆土相互の新旧関係は捉えられていない。

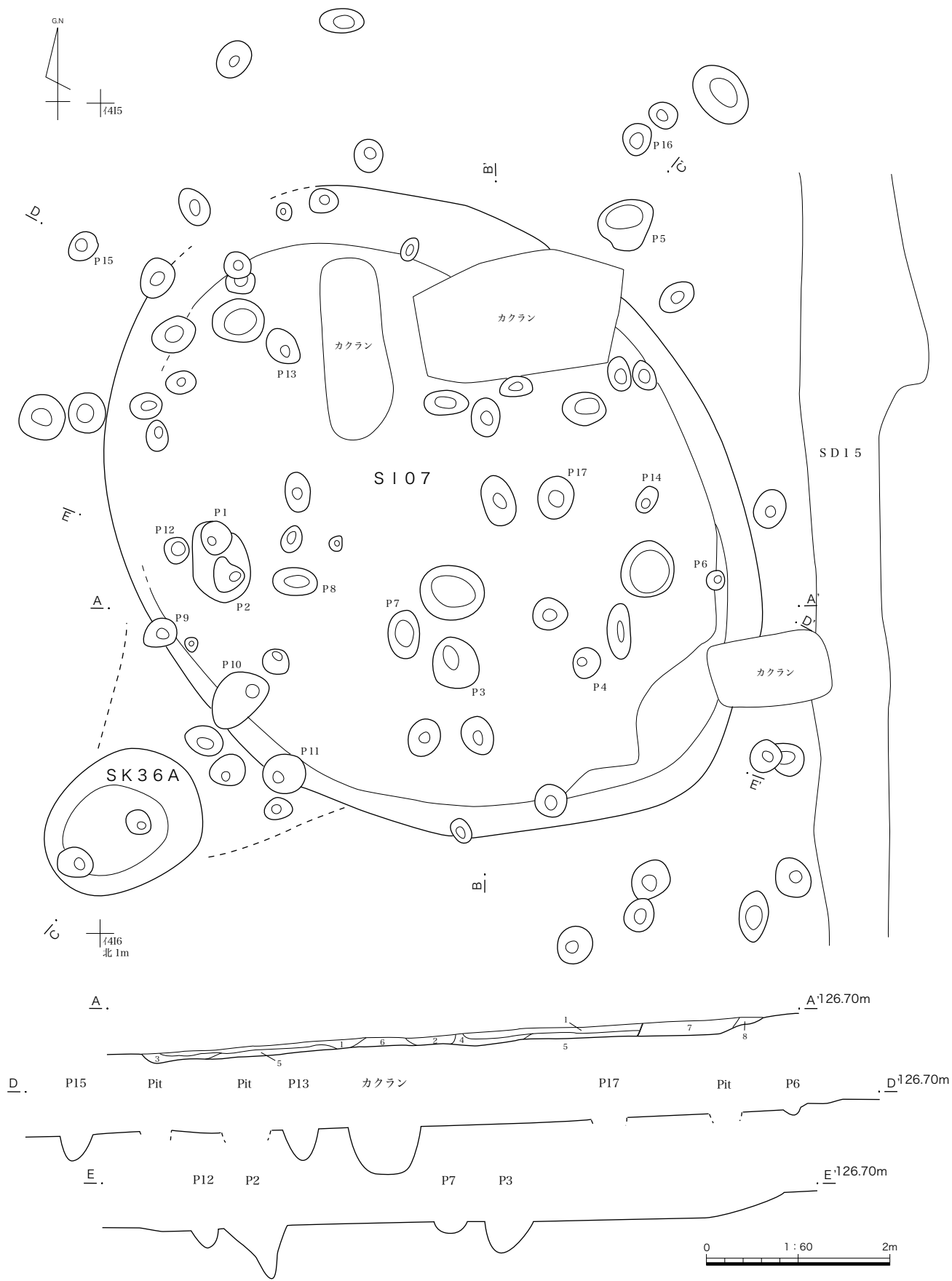
本跡は一定の深さで包含層グリッド掘り下げを行った後のローム漸移層上面で確認されたものである。壁は場所によって異なり、ローム層・ローム漸移層のところと黒色土の部分が認められる。壁の傾斜は比較的緩やかなところが多いが、やや急角度のところもある。写真記録で見える限り比較的掘り込みは明瞭なようで、覆土も包含層黒色土に比べて総じて明るい色調が観察されるなど、概ね掘り込みプランの判断も問題ないように捉えられる。床面より下位に及ぶカクランも幾つかある。

住居跡の形態は楕円形で、概ねこのプランから主軸をN-39°-E(C-C'ライン)とした場合、軸長6.36m、直交軸長7.94mとなる。深さは最大16cm、平均して概ね10cm程度である。SK36Aが本跡の入口ピット関連となる可能性があり、この場合での端部間距離を測ると長軸8.75mとなる。調査においても、この「土坑」と住居との間が地山では無く掘り下げられており、写真の一部では同じ深さで接続され一連の遺構となっている。第106図の遺構図ではこれを点線で示している。但しこの「土坑」や内部のピットも浅く（北東側20cm、南西側は不明）、周囲のピットを含め考えても典型的な入口ピット群の形態とは異なっていること、支柱配置や住居形態から考える軸とはややずれる点など、問題も多い点付記しておく。

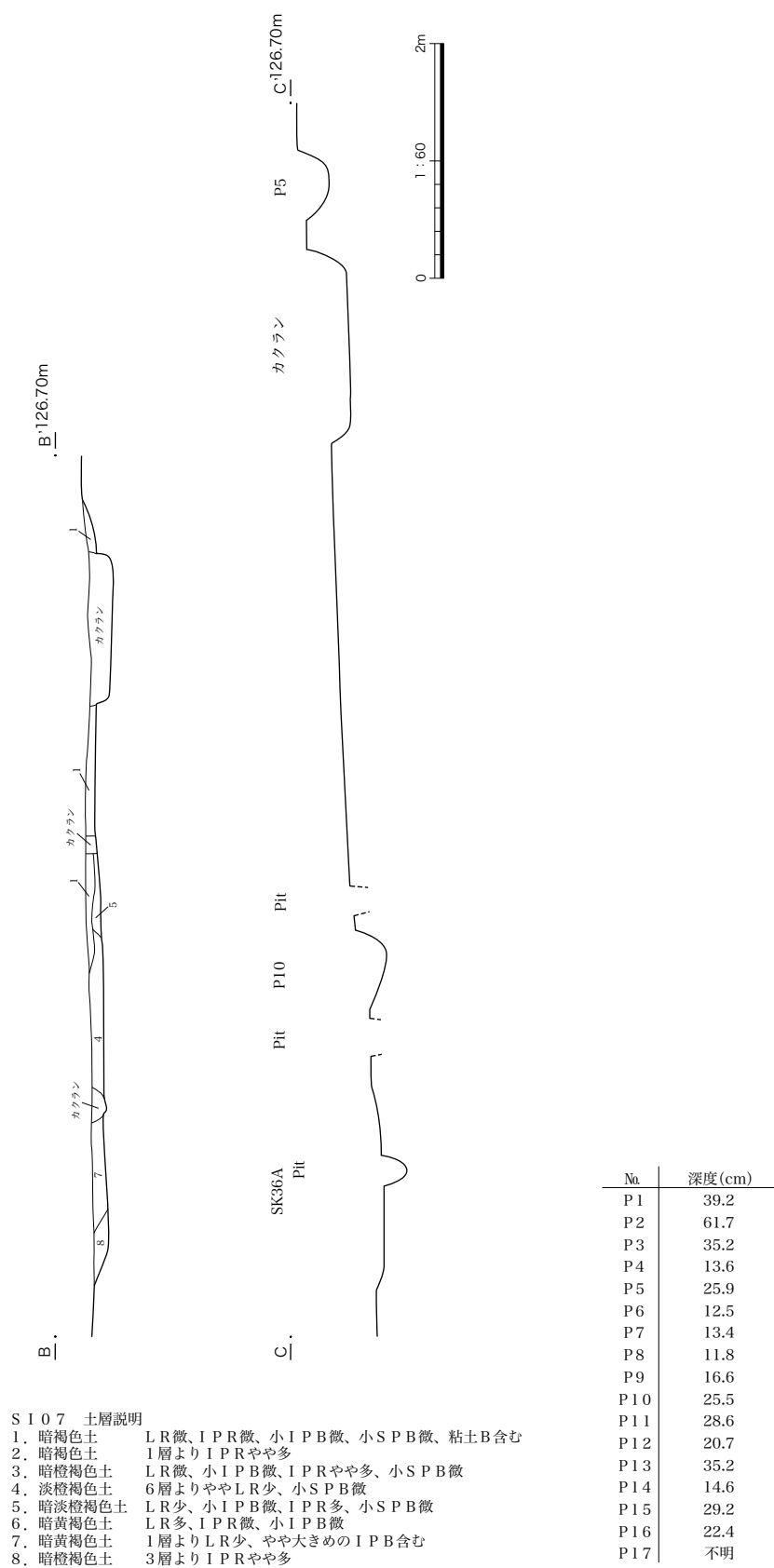
床面・覆土 床面はローム面で平坦であるが、確認面に概ね平行するように、西側～南西側が低く傾斜している。覆土は1～8層に分層されている。細かな含有物の違いで分けられているようであるが、総じてローム粒がやや多い暗褐色～暗黄褐色基調の土層と見られる。不自然な堆積のように記録されているところもあるが、壁際→中央、床面上→上位への自然堆積と考えられる。

ピット 深さの判明するもの16基に番号を付したが、このうち3基はプラン外となる。これに未発番の31基を加えたプラン内ピットの総数は44基となる。但し当初掘り上がり完掘時に捉えられたピットは少なく、その後の測量時まで掘り下げられたピットを合成した図としており、本跡に関わらないピットを含めている可能性がある。プラン外に示したピットは、ほぼこのパターンの住居跡完掘後の調査時によるものだが、プランに近接しているものについては、本跡との関わりを充分推測させるものであろう。

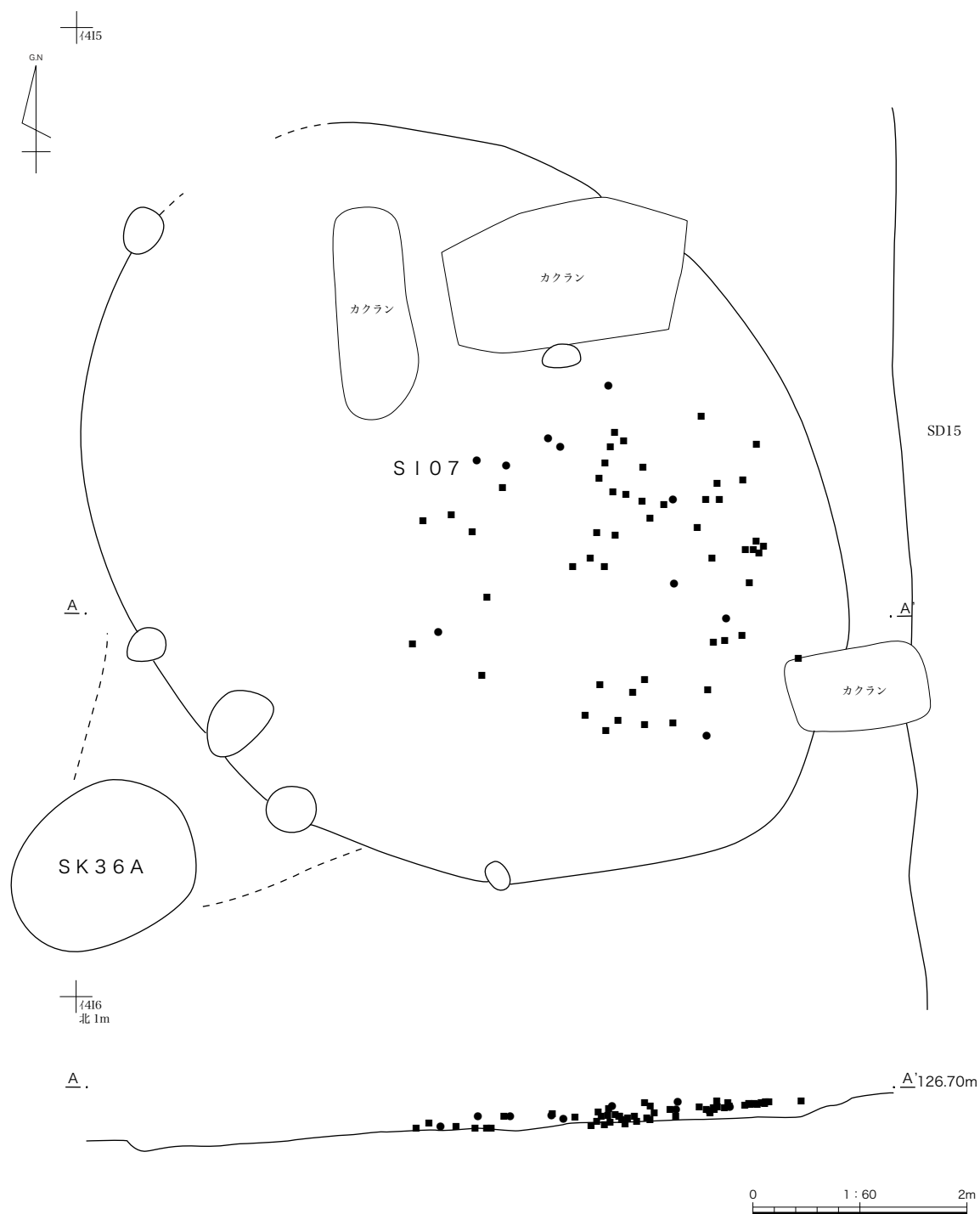
ピットは総じて浅い傾向にあるが、深さ30cmを超えるものとして、P1.P2.P3.P13の4基がある。これらにP17（深さ不明）を加えた4本が本住居の支柱穴と判断される。但しこの4支柱を結んだラインは若干住



第106図 S107(1)



第107図 SIO7(2)

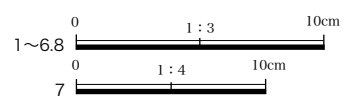
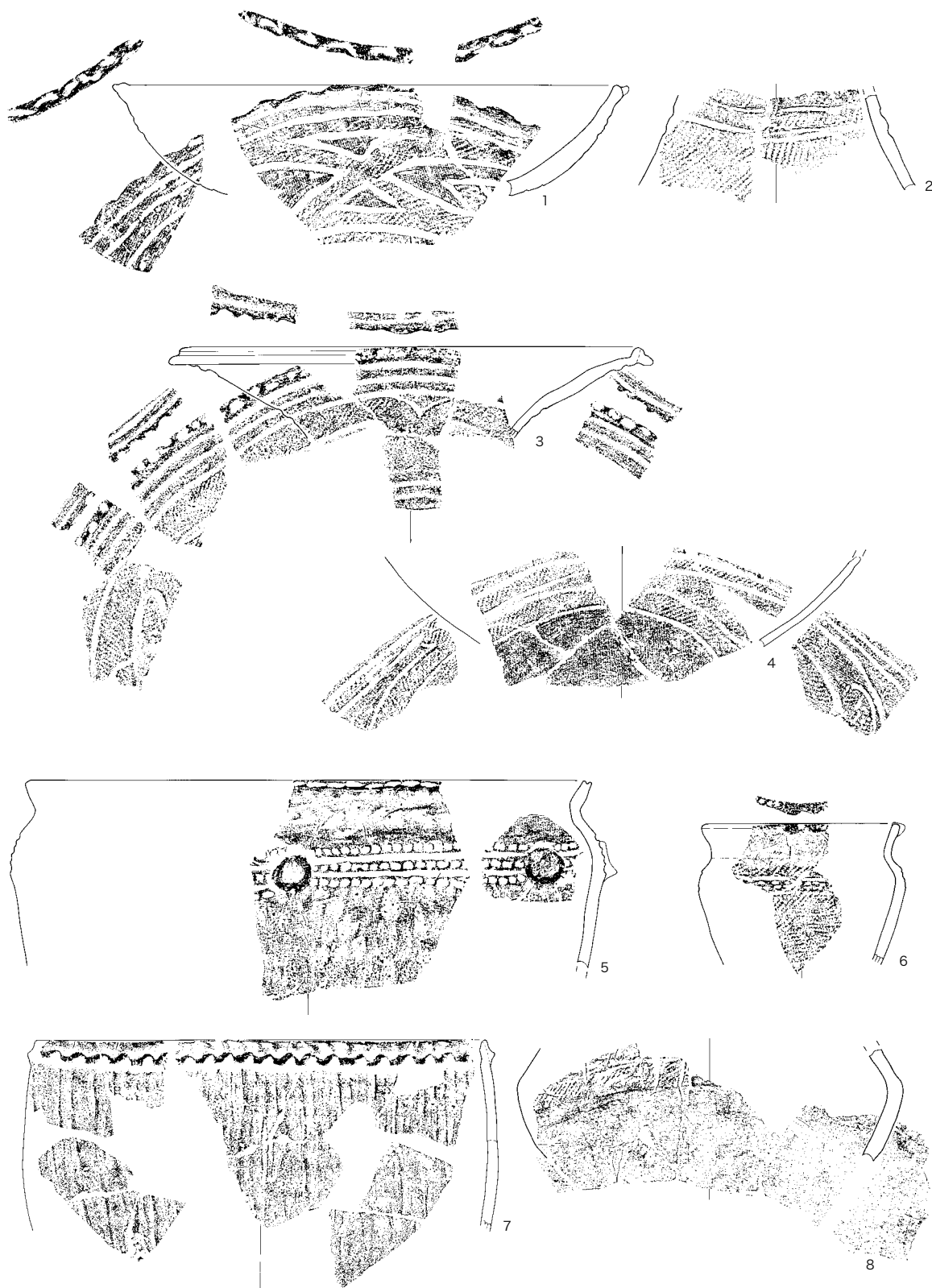


第108図 S107(3)

居プラン・軸とずれており、問題も残る。P1.P2の重なりから示されるように、複数回の構築も想定され、他の配置案も含め考えていく必要がある。

遺物 出土状況の写真がなく検証できないが、図の平面記録を第108図に示す。遺物はやや少なく散漫であり、傾向を見出すのも難しいが、やや南東側、確認面近くで多いと言えようか。

復元個体では8点がこの遺構帰属とされている。但し、個別の出土位置は検討し得ていない。晩期中葉大



第109図 S107出土土器(1)

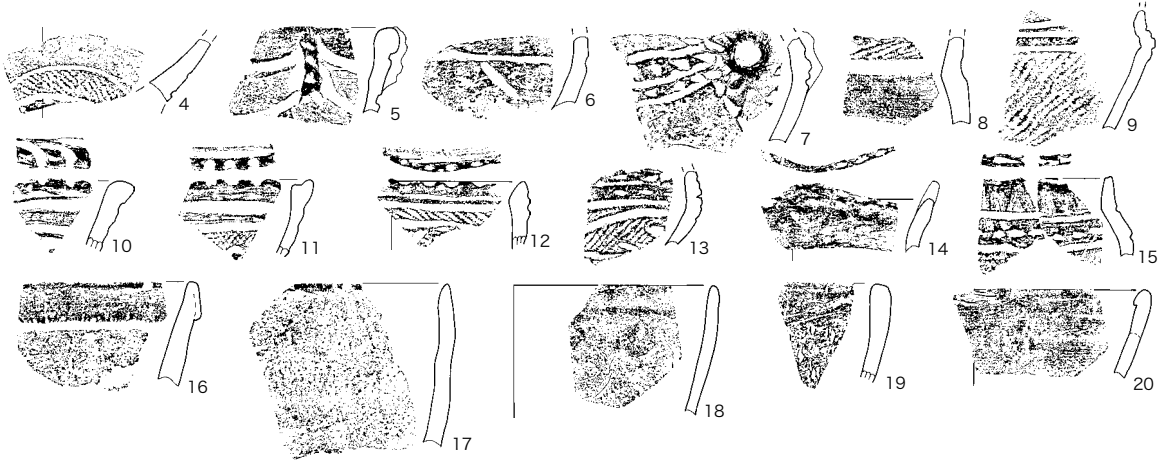
P10



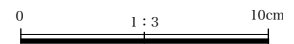
P5



S107



S107(1415)



第110図 S107出土土器(2) [1415]

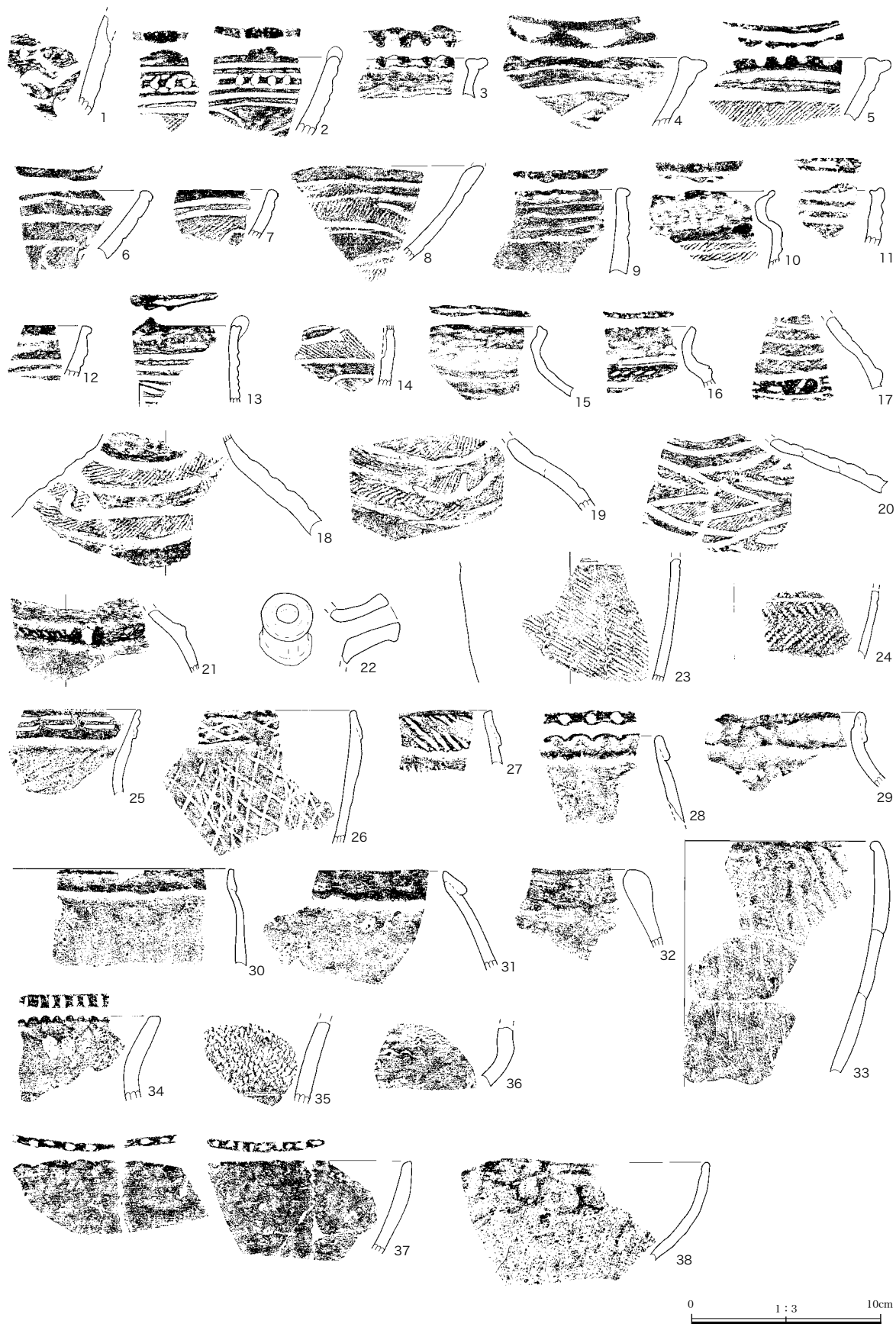


第111図 S107出土土器(3) [1415]

洞C1式～C2式併行の土器が主体を占めており、概ね住居跡の時期を示すと考えて良いであろう。石器では磨石類が3点、石皿類が3点、磨製石斧が1点、石錘が1点である。

第109図1は厚手でやや雑な施文の印象を受ける土器である。沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順が観察される。沈線はやや硬く直線的な描出で、浮彫的な表現ではない。内面は丁寧なミガキ調整で、胎土には白色粒・黒色粒を少量含み、色調は灰白色基調である。同図2は屈曲部より上位に主な文様施文域がある壺に近い形状の大洞式系であろう。3は破片数点から復元した鉢で、破片数は多いもののあまり接合関係は良くない。沈線→縄紋LR→無文部ミガキだが、器面の荒れ・摩滅で文様がやや不鮮明になっている。胎土には石英・白色粒・灰色粒をやや多く含む。4は雲形文変化の文様が描かれる鉢体部で、沈線→縄紋LR→無文部ミガキの工程で、若干浮彫的表現と観察される。内面はミガキ調整で、色調は橙色～明褐色を呈する。5は大形破片から径を復元したもので、屈曲した頸部に沈線・刺突列・円形瘤状突起が組み合わさるものである。胎土には石英・白色粒を多く含み、色調はにぶい黄橙色～黒褐色を呈する。6は小形深鉢で、体部上半に沈線・刺突列帯、その上下に縄紋が施される。沈線→縄紋LR・刺突の順で描かれ、口縁端部には前面突出のB突起及び細かな円形刺突列が認められる。胎土には白色粒を多く含むほか、石英や白色針状粒を少量含む。色調は橙色～赤灰色を呈する。この類の土器としてはかなり小形である。7は付帯口縁下端に刻み押捺が巡る土器で、体部にヘラ状工具によるナデ～ミガキ痕跡が明瞭に残される土器である。色調は外面褐灰色、内面にぶい橙色を呈する。8は屈曲部がある壺状の器形と想定されるが、良く分からない。

第110図は4～20が覆土出土の破片、1～3がピット出土の破片である。覆土出土例では晩期安行式系



第112図 S107出土土器(4) [1415]

及び大洞式系がやや目立っている。21～56はI415グリッド出土の土器である。後期安行式系、晩期安行式系及び粗製土器を示す。43の姥山Ⅱ式的な突起が付される浅鉢は、口頸部に三叉文が向かい合って施される例で、突起の下位に円形貫通孔（焼成前穿孔）があることも注目される。他には刺突列が文様表現となる52.54や曲線的な沈線文様がある56等が注意される。

第111図はこのグリッドからの径復元個体を示す。1は頸部に沈線＋刺突列が巡る刈沼遺跡特有の一群に近い深鉢で、遺存していないが瘤状突起が付されていた可能性がある。一部木口状工具？による条線に近い調整痕が認められる。胎土には石英・白色粒を多く含み、色調はにぶい褐色～黒褐色を呈する。3は壺の体部上半である。沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順が観察されるが、器面がかなり荒れて摩滅しており、文様が不鮮明になっている。器面の荒れは二次焼成によるようである。図中央の頸部剥落部には瘤状突起の貼付痕跡が観察される。胎土には白色粒をやや多く含み、色調は内面にぶい橙色、外面褐灰色を呈する。5は皿状に近い形態の無文鉢で、内外面とも丁寧なミガキ調整が観察される。6は台付脚部だが、径に対してやや高さがある例となる。内面ナデ調整だが、底部付近は磨かれている。沈線→縄紋R→無文部ミガキの順が観察される。胎土には石英・白色粒を多く含み、色調はにぶい橙色～褐灰色を呈する。

第112図はI415グリッド出土の大洞系及び付帯口縁の粗製土器、無文の鉢等を示す。18～20のような変容大洞式文様が壺肩部に描かれる例が注目される。

SI08・13（遺構第113・114図、遺物第115～117図、写真図版三・四）

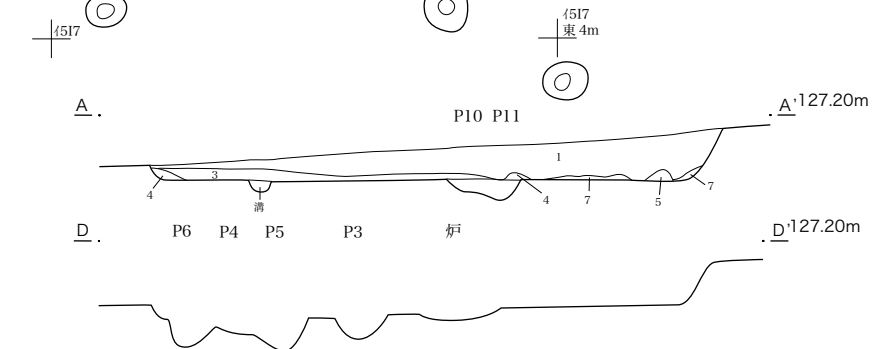
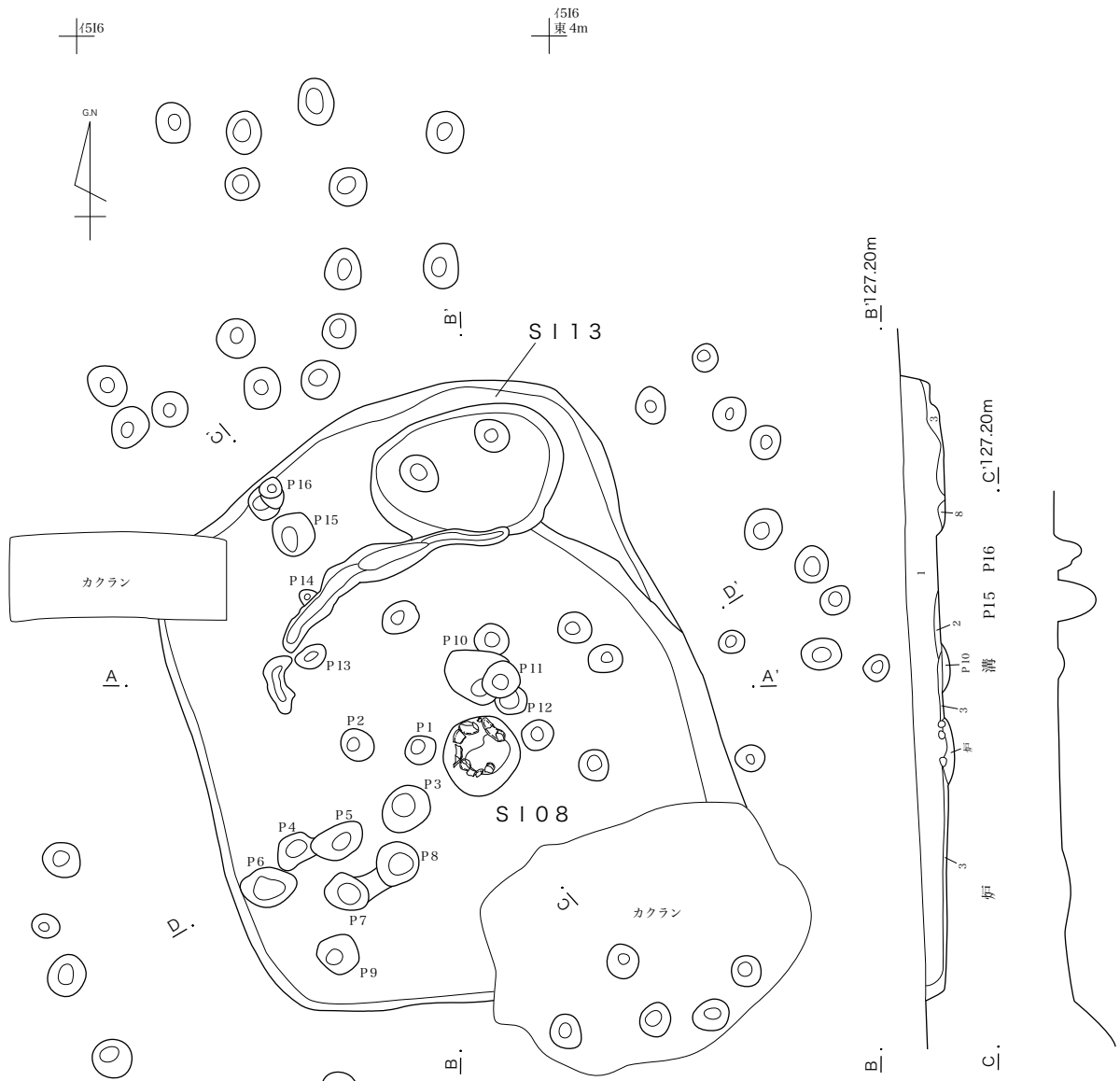
位置・形態・経緯 集落内北東部で、比較的遺構が集中する区域の中でも北東端部とも言える。つまり本跡より北東側では縄紋時代の遺構分布はきわめて薄くなる。I516グリッドに位置する。西側にSD15、東側にSD04が位置し、西側5mにはSI01、南5mにSI09が位置する。この2軒の住居跡とはほぼ隣接しており、ピット配置からの想定案によっては重複する位置関係となる可能性もある。

SI08について、南西側P4～P9周辺を入口ピットと考え、楕円～隅丸長方形形態と推定し、軸をN-54°-Eとして計測すると3.52m、直交軸長4.4mとなる。外側SI13について、長方形～台形状プランをそのまま計測すると長軸N-21°-Wとした時、軸長5.25m、直交軸長4.39mとなる。覆土の最大厚は42cmである。南東側に不整形の攪乱、北西側に長方形土坑状の攪乱があり、後者は本跡床面より下位に及んでいる。他と比べて、規模が小さめの住居跡と言える。

本跡は黒色土包含層下位～ローム漸移層近くで黒色の落ち込みが確認され、そのプラン内を掘り下げでの調査が進められた。壁は主にローム漸移層（下位はローム層）で比較的急角度であるが、本来の壁として良いか疑問なところも残る。この掘り下げで一端床面検出とされたが、明瞭なロームの平坦な床面が拡がらず、更にこの内部に土坑状等の黒色プランが確認され、また炉跡や浅い周溝状の落ち込みが認められた。一応この時点で2軒の住居跡と判断され、外側プランがSI13、内側がSI08と発番されている。

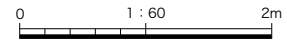
床面・覆土 遺構確認面は西側に向かって緩く傾斜しているが、ロームの床面は概ね水平平坦で、従って東側の壁が高い傾向にある。外側SI13側と内側SI08内との境界は浅い溝もしくは若干の段差が認められるが、必ずしも明瞭ではない。全体的には概ね平坦だが若干の凹凸、根穴状の攪乱などが見られる。

第113図のセクション3層は炉との関係からすれば床面整地の層とも見られるが、東西ラインではそのまま壁際近くまでこの層が続いており、整合しない。もとの記録のまま床面に薄く堆積する層で、2.3.5.7層なども含め住居跡覆土としておく。但し、炉の記録から、ローム面より上位で整地された面を床面と考えた方が良いかもしれない。2.4.8層はロームの多い黄褐色系であることも注意される。覆土は全体的には厚く、1

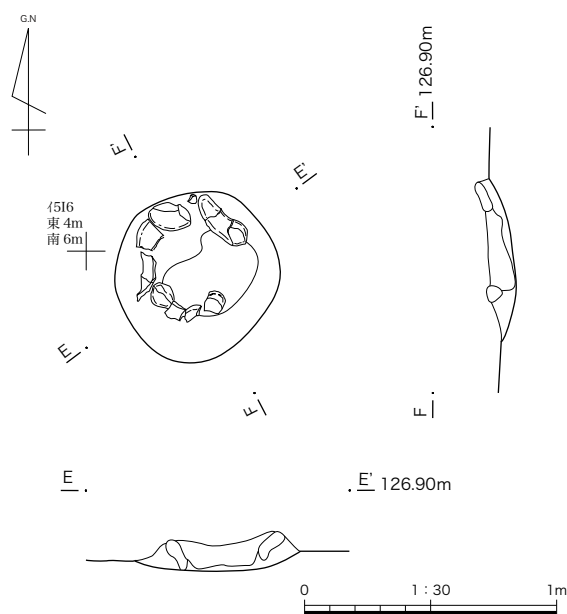


No.	深度(cm)
P1	29.4
P2	40.6
P3	19.4
P4	9.5
P5	25.9
P6	18.8
P7	14.9
P8	8.3
P9	14.7
P10	15.4
P11	33.2
P12	7.4
P13	15.9
P14	6.9
P15	41.8
P16	25.9

- SI 08・13 土層説明
- 1. 黒褐色土 LR少、IPR少、SPR少、微IPB少、微SPB少、小SPB微、小IPB微
 - 2. 暗黄褐色土 4層より小IPB少
 - 3. 暗淡褐色土 LR少、IPR少、SPR微
 - 4. 暗黄褐色土 LR多、IPR少
 - 5. 橙褐色土 LR多、LB少、小IPBやや多、小SPB少、炭微
 - 6. 橙褐色土 5層よりLB少、小IPB少、炭微
 - 7. 暗黄褐色土 4層よりLB多、炭微
 - 8. 淡黄褐色土 LR多、LB多、IPR微、小IPB少



第113図 SI 08(1)



第114図 SI08(2)

層の堆積で、写真記録を見る限りでは包含層より黒味が強く、遺構覆土的なように見える。SI13内北側の楕円形状落ち込み範囲内でもこの1層が堆積している。SI08プラン付近での分層がされていないことと併せ考えればSI08→SI13の関係性が判断される。但し写真記録の中にはSI08範囲の外側の覆土の方が黒味強くローム粒多いように見えるものがあり、SI13→SI08の可能性も残る。また土坑状楕円形プランについても、別遺構ではなく、住居に付随する遺構もしくは若干の落ち込みとして考える必要が生じるが、残されている記録からのみでは判断できない。平面プラン確認ではより黒味強くSI08を切っているようにも見える。総じて4～14cmほど周囲より下がっており、土坑扱いとした方が良くかもしれない。

炉 SI08プラン内ほぼ中央に石囲炉が認められた。66cm×64cm×8.4cmの掘り方を有し、この内部に大きく8個の石がある。この掘り方は黒色土からロームに至るレベルで、石は黒色土（掘り方埋土）中で50cm×50cm範囲の円周状に置かれ、東側が抜けているが、本来全周していた可能性が高い。囲まれた内部は火床となろうが、焼土・炭化物が見えるものの、明瞭な記録がない。北東側の1点のみやや細長い礫で、残りは円礫～楕円形の礫または石器？で、個別の分析はし得ていないが、凝灰岩・安山岩系が主体のようである。ちなみに他に本遺跡での石囲炉は他にSI09で確認されている。第114図F-F'で示したような分層の記録があるが、土層観察の記録が不詳でありここで示し得ない。

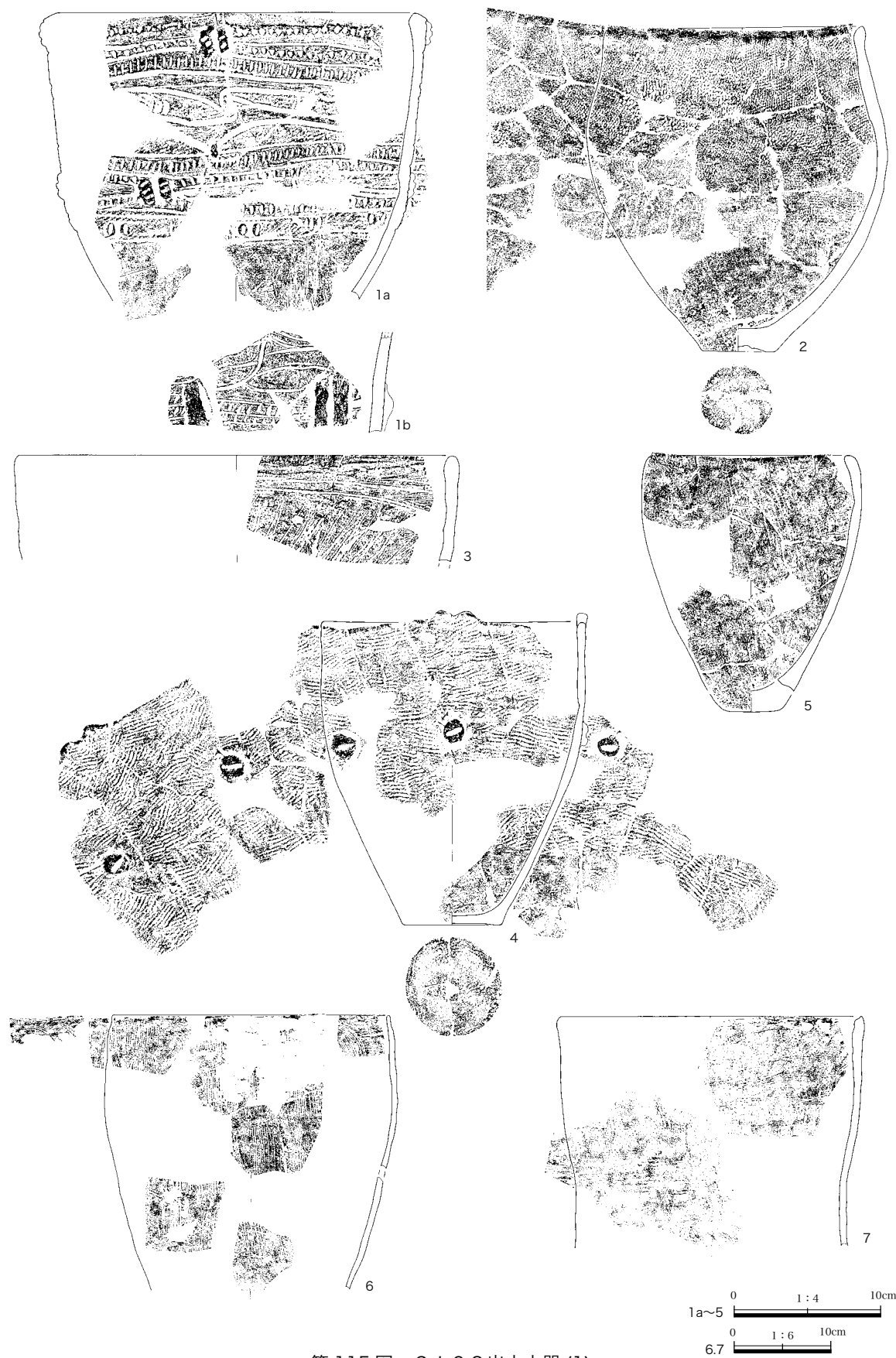
ピット プラン内にピット番号を付した13基に4基を加え計17基がある。深さ30cmを超えるものはP2.P11.P15の3基である。P2.P11に推定2本を加えた4本主柱を想定することもできるが判断困難である。既述のように、P4～P6,P7～P9の配置が入口対ピット状である。また周囲にも多数のピットがあり、直線状や弧状に並ぶところもあることから、柱穴配置・壁柱穴構成について若干の検討も行ったが、深さ不明なこともあり配置案を示すことはできなかった。本跡北西のピット集中については、別の遺構を想定した方が良くかもしれない。

遺物 全体に少ないようである。写真記録の中には20点程度の遺物が示されているものがある。現時点で他に出土状態の記録は無く、出土状況の確認はできない。

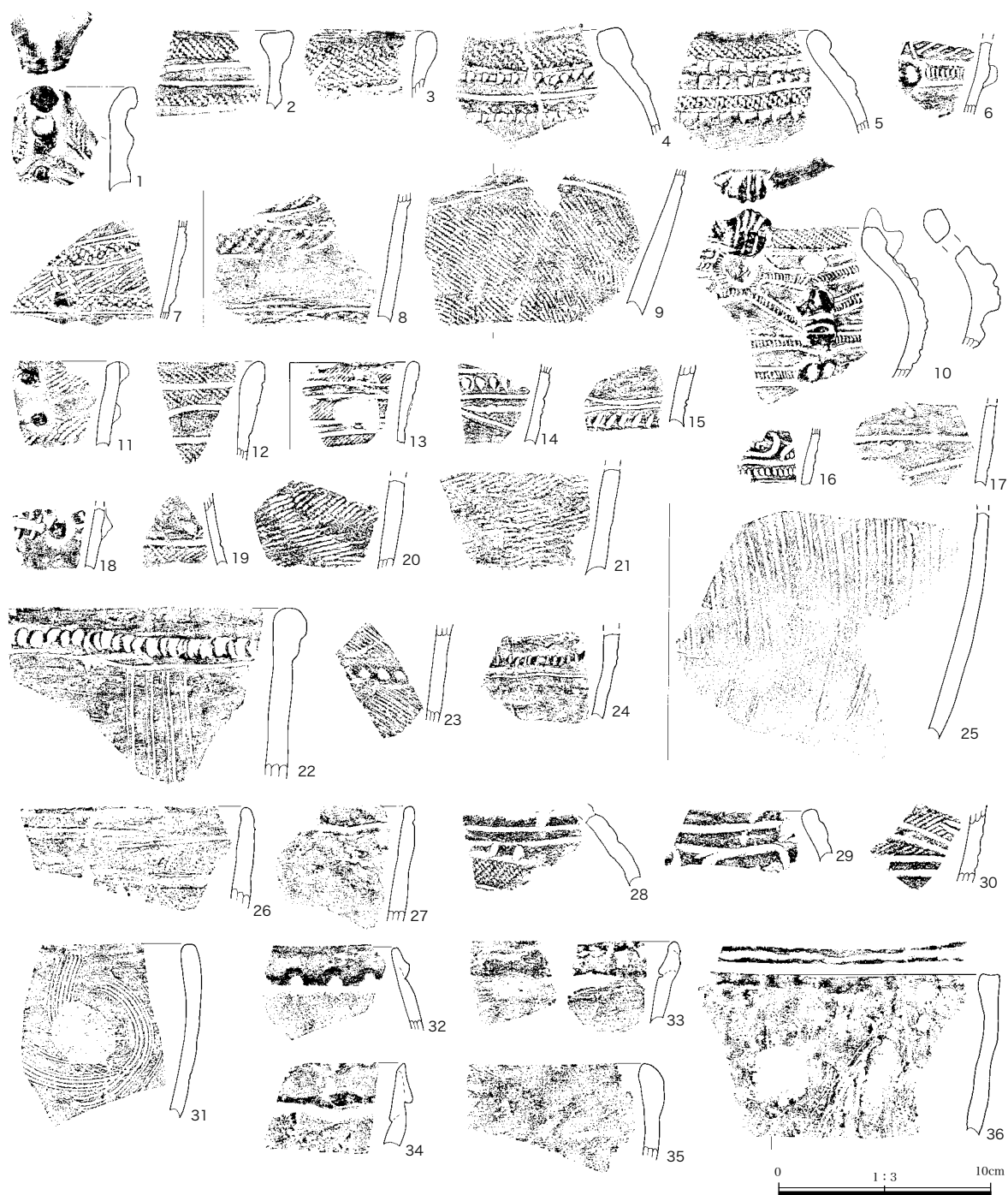
復元個体7点等がある。後期後半瘤付系第3段階が目立っており、この時期の遺構と推定できよう。出土している土器の個別の出土位置は検討し得ていない。石器では磨石類が5点、石皿類が2点、打製石斧が1点、石鏃未製品が1点である。

本遺構SI08からの出土土器はやや少ない。覆土出土土器を第115.116図に、イ516グリッド出土土器を第117図に示した。

第115図1は瘤付系の深鉢だが、沈線や刻み列が水平に整った帯状構成となっておらず、やや雑な印象を受ける土器である。1bの破片は同一個体と推定したが、やや疑問な点も残る。頸部の2列1単位となる縦長の瘤は、破片やや右よりのところでは剥落している。沈線→縄紋LR→刻み・瘤貼付→無文部ミガキの順が



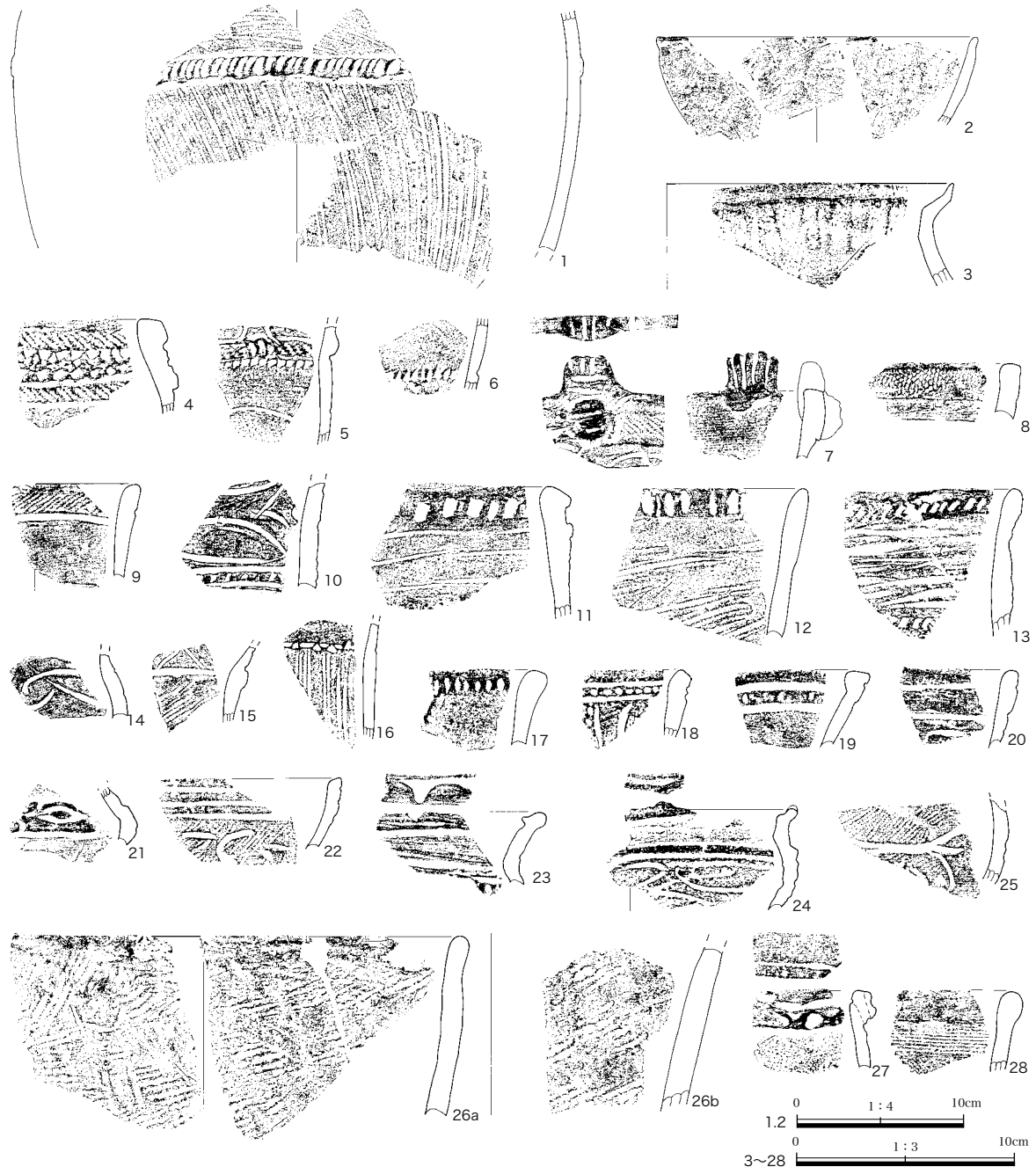
第115図 S108出土土器(1)



第116図 SI08出土土器(2)

観察される。口縁・頸部とも複数段の刻みだが、刺突の長さ・形態などが各段で異なっている。頸部の階段状入組文部分や頸部最下段区画の帯状部分では縄紋施紋後の刻み（掘り起こし状）が2～3個1対で加えられる。内面はナデ～ミガキ調整、胎土には白色粒・石英を多く含み、雲母・角閃石・白色針状粒を少量含んでいる。色調は外面黒褐色、内面褐灰色を呈している。

第115図2は全面に擬縄紋が施されるものである。70～80%程度は遺存している。詳細な観察と拓影の提示などが必要であろうが、ここでは為し得ずアップ写真（図版37）を参照されたい。施紋は縄紋原体と概ね同じ幅（数cm程度）で、横位～斜位に施されている。隙間を空けて帯状効果を意識させるかのような部分



第117図 S108出土土器(3) [1516]

もあるが、概ね全体に擬縄紋が行き渡るように施されている。土器の形態を上面から見るとやや歪み、楕円形に近づいている。また全体にやや厚手の作りであることなどの特徴はあるが、本遺跡の他の出土土器と比べ極めて異質な感を受けない。胎土には白色粒を多量に含み、色調は外面にぶい橙色（黒変部也多）、内面灰褐色を呈する。後期後半と推定するが、晩期との考えも指摘されており、類例の確認も含め検討が必要となろう。3は口縁部破片から径を復元したもので、口縁直下の浅く密な条線→横位沈線→頸部の深めで間隔やや疎らな沈線の順で文様が施される土器である。胎土には石英・雲母を少量含み、色調は褐灰色を呈する。

第115図4はほぼ全面に縄紋が施される深鉢で、体部の中位に刻み刺突が加えられた円形瘤状突起がおよそ一定の間隔をもって、恐らく計6単位付される。縄紋無節L→瘤貼付→瘤上刻み→瘤周囲ナデの順が観察される。底部及び底面近くは縄紋施紋後にミガキが加えられる。また口縁端部には一定単位でやや大きめのB

突起が付される。この単位も6単位程度だが、体部瘤とは対応していないように見える。内面はミガキ調整基調で、色調は外面にぶい灰褐色、内面褐灰色を呈する。5は口径14cm、高さ16cmの小形深鉢で、外面のミガキ～研磨調整が顕著なものである。内面も研磨で、口縁端部付近は削りとりに近い。胎土には白色粒を多く含み、色調は外面暗赤褐色、内面黒褐色を呈する。6は大形破片数点から器形を復元したもので、若干内湾の口縁を推定した。6～9本1単位の条線をやや間隔疎らに施すもので、直線的に垂下する文様部分と曲線的・弧状に描かれる部分とがある。全体でやや図形的な意匠表現となる可能性もあるが判然としない。7は2つの大形破片から器形を推定復元したもので、口縁の一部にのみ押捺（刺突）が施される土器である。

第116図には覆土出土の破片をまとめた。安行1式、同2式及び瘤付第3段階辺りが比較的目立っている。20の破片は本地域の瘤付系土器群で屢々見られる縄紋带状部のみで入組文などの意匠を表現しているものである。他では粗製土器頸部に直線的な複数線が入る22や、弧線入組状の条線が施される31等の注目例がある。

第117図には遺構が位置する当該グリッドのI5I6グリッド出土例を示す。大洞C2式も一定量あるが、後期安行式及び平行する土器がやや目立っている点は興味深い。1は粗製土器紐線文系の大形破片である。条線→頸部隆帯貼付→紐線上押捺の順で描かれ、条線は口頸部横方向、体部縦方向となる。体部破片であるが、質感も含め南関東紐線文系と良く類似している。胎土には角閃石を微量含む程度で、鈹物が少ない感がある。色調は外面灰黄褐色、内面にぶい黄褐色を呈する。

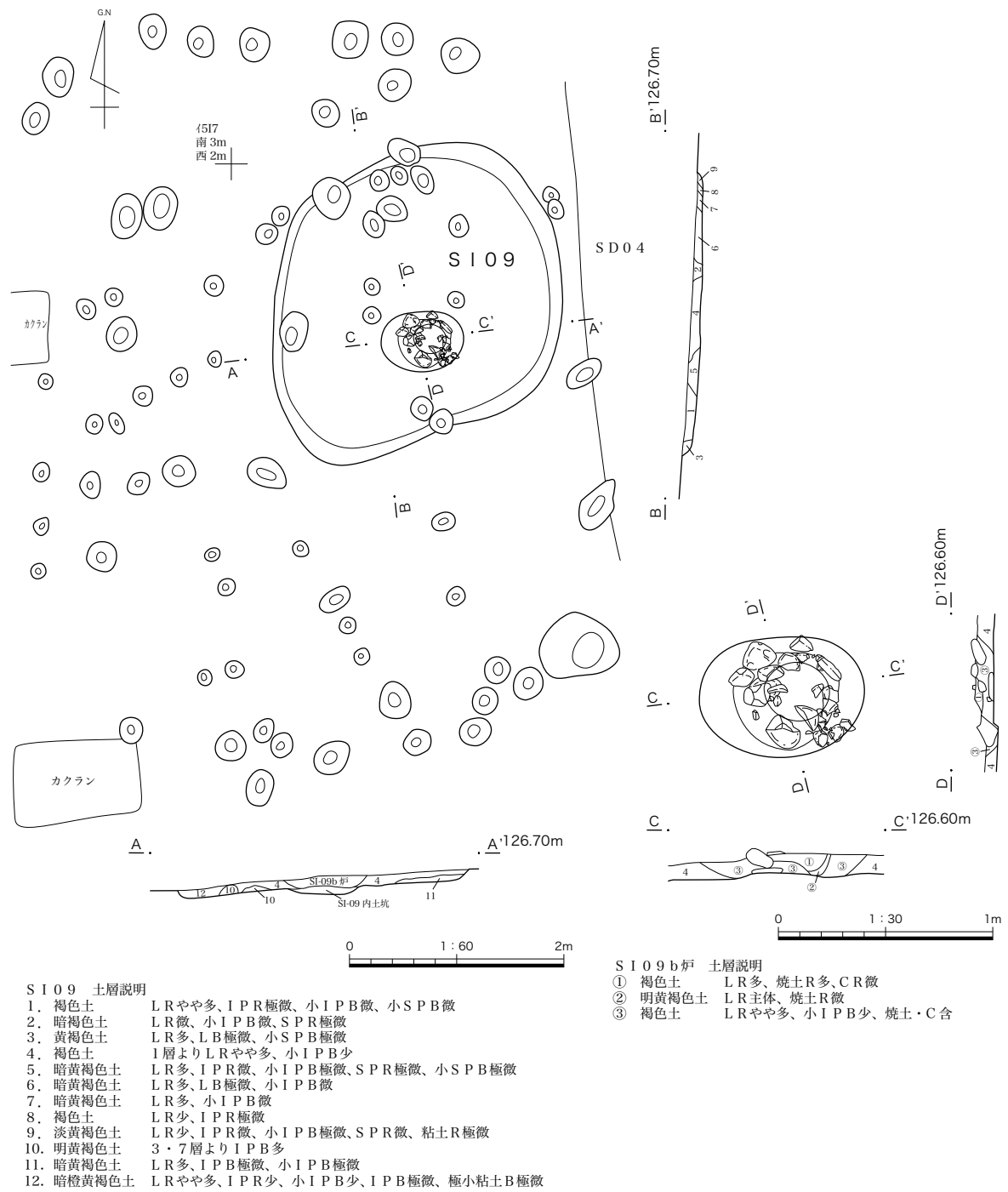
SI09（遺構第118図、遺物第119～121図、写真図版四）

位置・形態・経緯 集落内北東部～東部で、比較的遺構が集中する区域の北東外縁になる。主にI5I7グリッドに位置する。北側にSI08、北西側にSI11、東4mにSI12が位置する。東側のSD04は本跡と重複する位置関係にあるが、覆土相互の新旧関係は把握されていない（恐らくSI09→SD04）。

図示したように、調査当初、黒色土包含層～ローム漸移層で不整な黒色の落ち込みが確認され、この部分を掘り下げて住居跡が把握された。不整な形態だが、軸をN-11°-Wとして計測すると、長軸2.78m、直交軸2.68mとなる。この時点では炉跡の確認はあったものの、ピットの確認はなく、またかなり規模が小さく住居との把握にも問題があること等から、最終的には壁も壊して周辺も含め、ほぼローム層面まで掘り下げてピット確認を行い、形態把握に努めたようである。その結果図示したように、多くのピットが確認され、とりわけプランに近い位置の外側で良好な柱穴が認められたものの、土層や深さの記録が確認できないこともあって、尚本跡の住居形態の把握には困難が伴う。やや大きめのピット6本を主柱と考えての軸はほぼN-0°で、ピット群の検討から考えられる想定最大値での規模は、径7.2m程度となる。また掘り込みプランを遺構として記せば、覆土は最大10cm程度となる。壁は比較的急な角度で、ローム漸移層～ローム層と観察される。

遺構確認面はかなり西側に傾斜しているが、この掘り込みでの床も概ねこの地形の傾斜に沿うような角度である。覆土は細かく分層されているが、ローム粒が少量～やや多量の暗褐色土系を基調としている。この近辺では覆土・地山とも今市パミスはやや少ないようである。やや複雑な堆積記録からは人為的な堆積、或いは床下掘り方埋土との想定も可能となろうが、現存の記録からは判断が難しい。

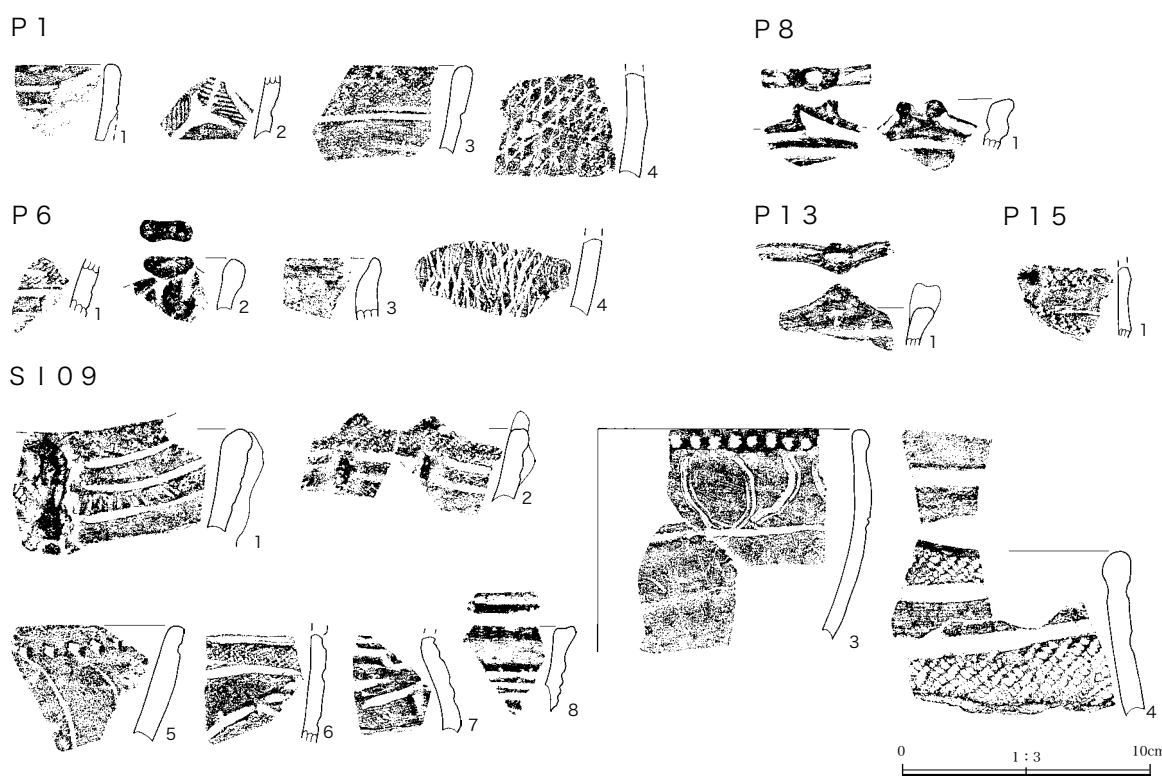
炉 掘り方は77cm×57cm×11cmで、このほぼ中央に石を巡らせている。石で囲まれた範囲内の覆土で①層は焼土がやや多い。石は焼けているものが多いようであるが、判然としない。土層断面は原図をそのまま示すが、これによれば住居覆土4層を切る形となっており、ここからは覆土4層上面が床面との判断となる。A-A'ラインでは、この下位で「床面」を掘り込む落ち込みが示されており（SI09内土坑としたところ）、こ



第118図 S109

れが炉跡の掘り方で、石が浮き上がった可能性も考えられるところである。或いはほぼ同位置での炉2基（作り替え）の可能性もあろうか。写真ではこの下位落ち込み周囲に部分的な焼土や炭化物の堆積が示されており、またこの掘り込み覆土からも焼土が確認されているようである。この掘り込みは比較的明瞭でほぼ平坦な底面と縁辺での小ピット状の落ち込みも認められる（図なし、写真未掲載）。上位の石は整った配置とはなっておらず、やや散漫に見えることは、原位置からの移動を思わせるが、これも推定に留まる。

ピット 先にも触れたように4または6本の深そうなピットが支柱穴となる可能性があるが、現時点で深さ不明である。写真から見ると少なくとも20cm程度はありそうに見える。またこれより西側、炉からすると西



第119図 S109出土土器(1)

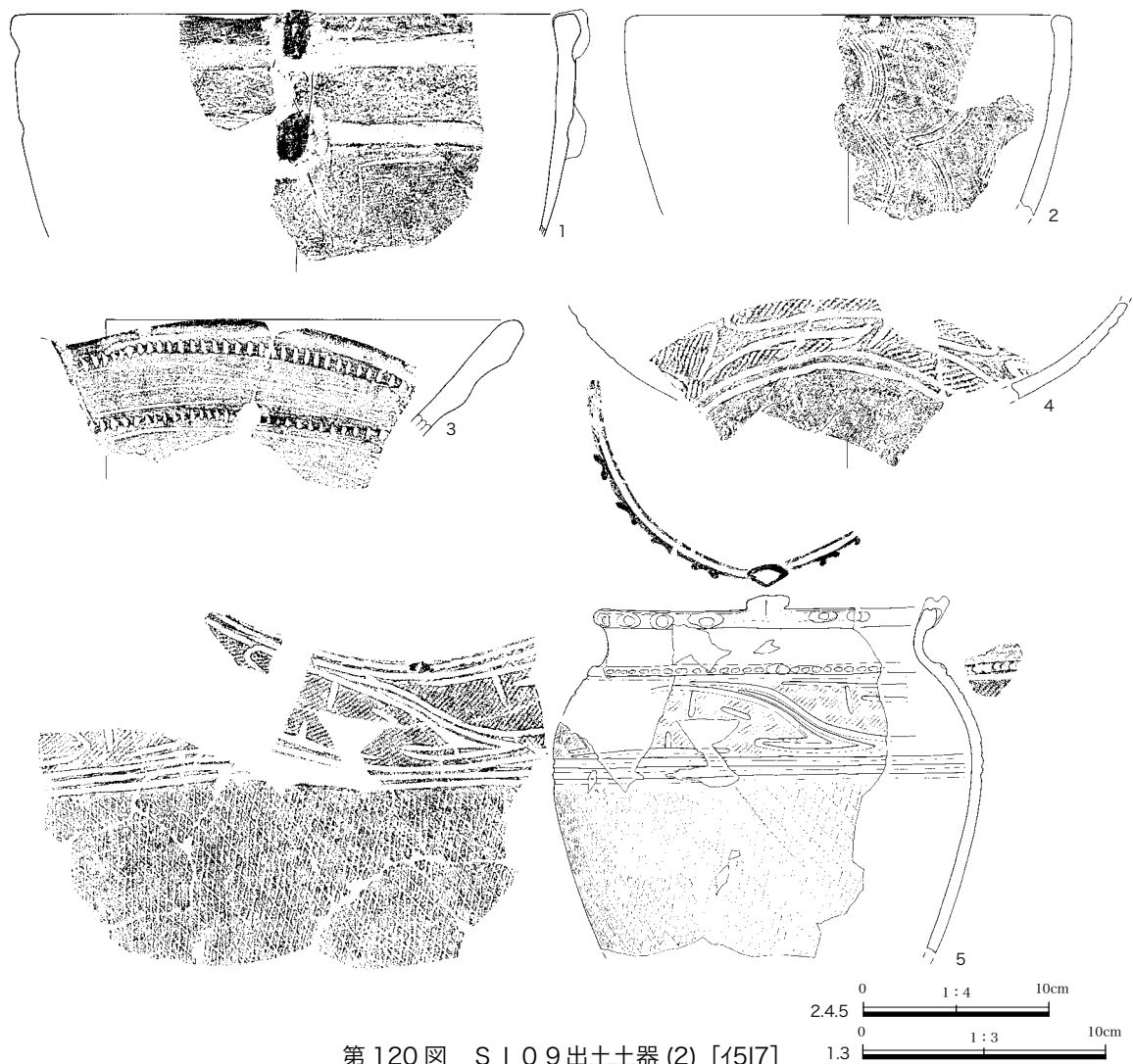
2.5 m程度の距離にやや大きめのピットが南北直線状に並び、更に北側でこれと直交する直線的な並びを確認することができる。これらを、壁柱穴または「奥左右壁3本柱構造」とする案も推定できるが、判断が難しい。これらの案では南側が入口となるが、入口ピット群が未確認であることも想定を難しくさせている。いずれにしても掘り込みプランのみでは住居としては小さすぎ、周辺を含め考えるべきであろう。南北6 m、東西5 m程度の範囲内にはピットがやや多く、径30 cm程度のものも20基程度、10～15 cm程度のもの40基程があり、掘り込み範囲内のピット(14基)と併せ検討したい。或いは数の多さからは2軒以上の住居・遺構の重複を考えた方が良いかもしれない。東側は大きくSD04に壊されていることも考えておく必要がある。

遺物 遺物出土状態の記録が無く、その分布状態は不明である。一部残る写真からは、散漫に少数の土器や礫が出土している状況が窺える。

遺物は、確認した復元個体5点等がある。後期後半と晩期中葉大洞C2式があり、いずれの時期と考えるのか判断が難しい。とりあえず新しい方の晩期中葉と推定するが、後期後半1軒が重複している可能性もあろう。なお出土している各個体の出土位置は検討し得ていない。石器では磨石類が2点、石皿類が4点、磨製石斧が1点、打製石斧が1点である。

第119図にはピット出土土器及び覆土取り上げ資料から選択して示した。一つのピット出土土器でさえ複数型式を含んでいる。覆土出土土器も後期後半から晩期安行式、前浦式・大洞C2式までを含んでいる。

第120図はI517グリッド出土土器の径復元資料を示す。1はナデ状のやや深い凹線が特徴的な後期安行式深鉢の口縁部破片である。内外面ともナデ～ミガキ調整、胎土には石英・白色粒をやや多く含み、色調はにぶい褐色～黒褐色を呈する。外面一部に煤の付着が観察される。2は条線施紋の深鉢で、口縁端部付近は条線施紋後なでられている。内面ケズリ～ナデ調整で、胎土には石英及び灰色粒を多く含み、色調は外面褐灰色、内面褐色を呈する。3は台付鉢の口縁部破片で、隆起带上刻み・沈線施文後の丁寧なミガキが観察される。破



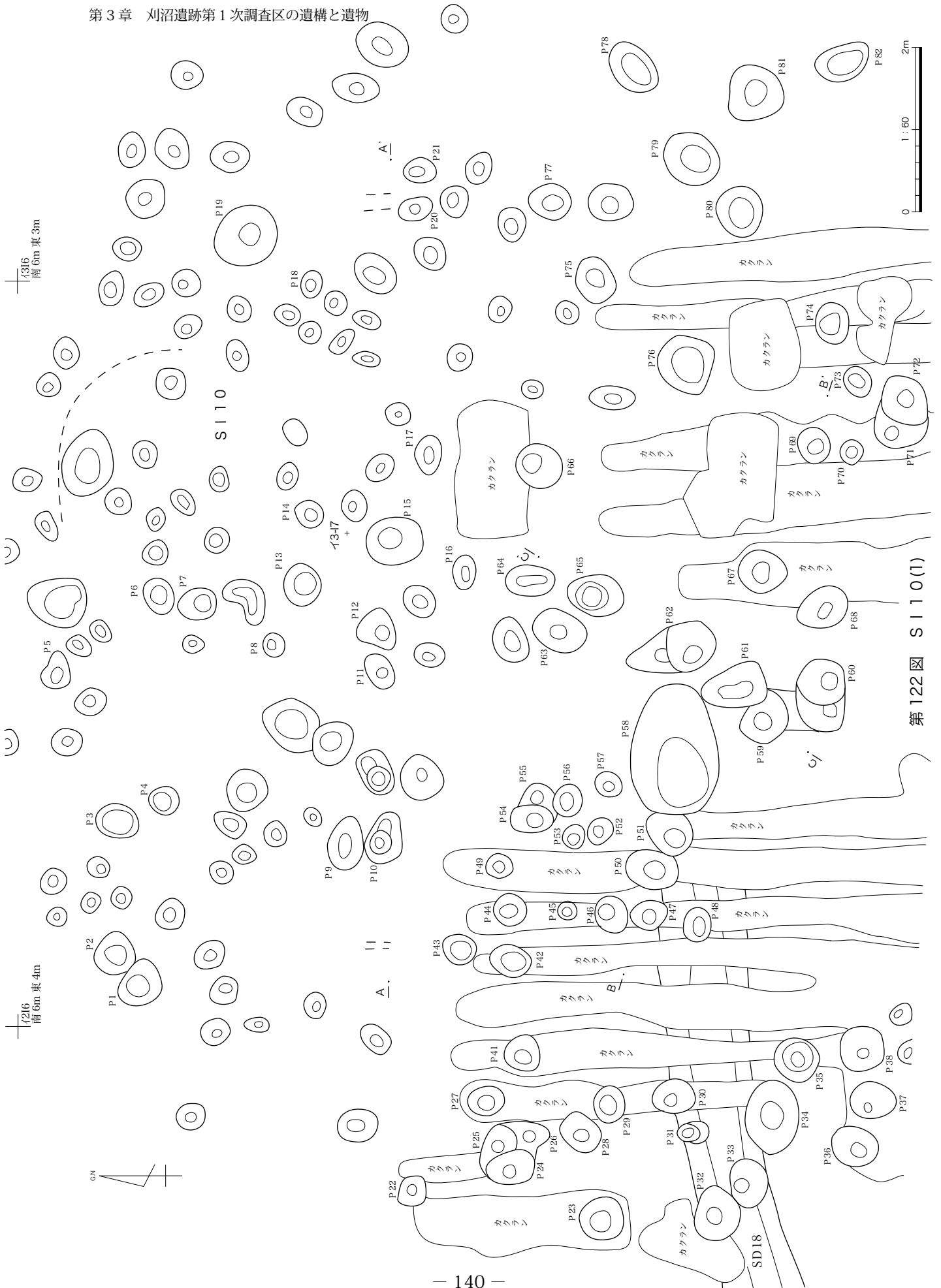
第120図 S109出土土器(2) [1517]

片左端近くで弧状に近い隆起帯間を結ぶ縦方向の沈線が確認できる。内面のミガキ調整も丁寧である。胎土には白色粒を多く含み、色調は内外面赤褐色を呈する。色調や質感は南関東安行式のものと同種と観察される。4は大洞C2式の鉢で、沈線→縄紋LR→無文部ミガキが観察される。胎土には雲母及び石英を多く含み、色調は内外面灰黄褐色を呈する。5は広口壺に近い器形の土器で、肩部に雲形文変化の文様が描かれる。沈線→縄紋LR→無文部ミガキ・沈線なぞりの順である。頸部文様下端、網目状燃糸紋が施される体部との境界沈線部分は丁寧に磨かれる。口縁には上位突出の突起間に、前面突出のB突起4単位が配されている。胎土には白色粒・石英を多量、角閃石をやや多量、雲母を少量含み、色調は外面暗赤褐色、内面暗褐色を呈する。

第121図には1517グリッド出土の破片資料を示す。1～3は中期の資料で、阿玉台式終末～加曾利E I式初頭にかかる資料であろう。4～20が後期安行式、瘤付系土器及び晩期安行式である。18.19は姥山II系の波状口縁深鉢、20は副文様帯系の破片と推定されるもので、本遺跡では数少ないものである。21～27は粗製土器紐線文系などを示すが、円形瘤とここから垂下する線がある25等、興味深い資料もある。28～47が大洞式系で多くが大洞C2式になる。A突起が付される42や浮線文47は大洞C2式新段階以降となる。48以下は大洞式系体部の縄紋例、無文の土器、付帯口縁の土器などを示す。54は内面でも屈曲部の押捺、口縁直下の調整痕があり、注意される破片資料である。



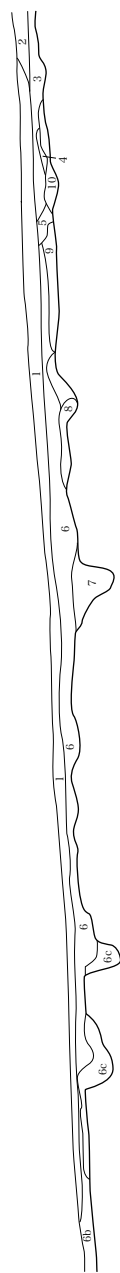
第121圖 S109出土土器(3) [1517]



第122図 S110(1)

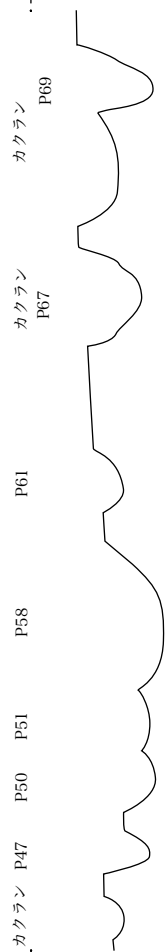
.A'126.00m

A.



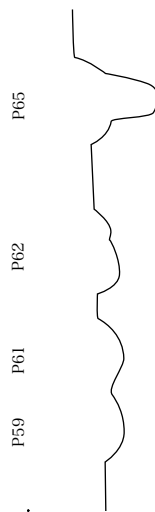
.B'125.50m

B.



.C'125.50m

C.

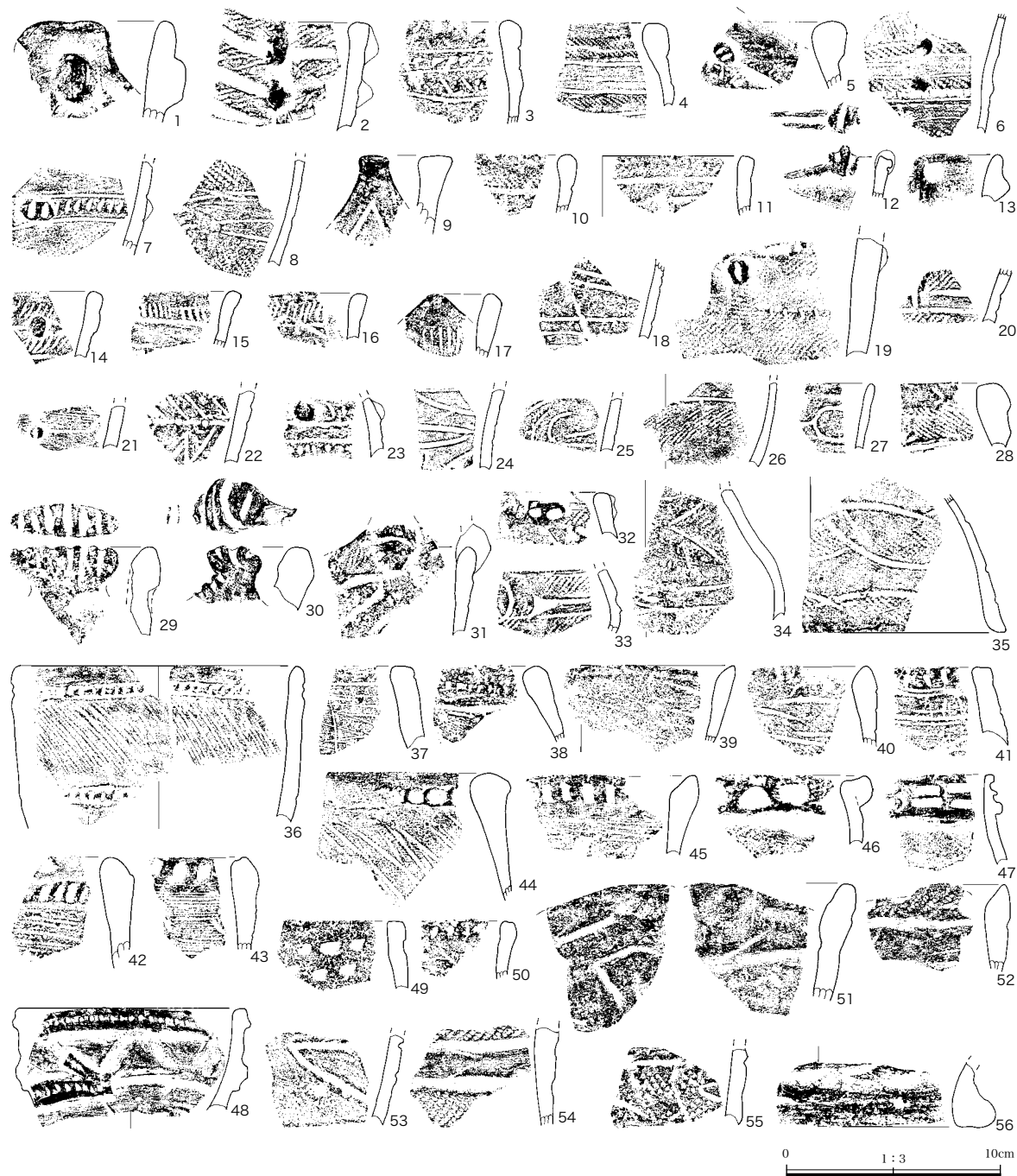


S I 1 0 土層説明

- 1. 黒褐色土 LR極微、IPR極微、小IPB微、全体的にカクラン受けている
- 2. 黄褐色土 全体的にLRやや多、4cm大LB含む、小IPB微、IPR極微、小SPB微
- 3. 褐色土 5層よりIPやや多、小SPBやや多
- 4. 褐色土 5層よりIPRやや少、小SPBやや多
- 5. 暗褐色土 6層よりIPR及び小IPBやや多
- 6. 暗褐色土 LR少、3~4cm大LB少、IPR微、小SPB微
- 7. 黄褐色土 LR多、小LB少、IPR極微
- 8. 明黄褐色土 L主体、IPR微、小SPB極微、極小GB含む
- 9. 橙褐色土 LRやや多、IPRやや多、小IPB少、小SPB極微、小GB含む
- 10. 橙褐色土 LR微、IPR微、小IPB全体的に多、小SPB極微、小GB微
- 6b. 暗黄褐色土 LR少、IPB微、小SPB微、小LB微
- 6c. 黄褐色土 LR多、LB少、IPR極微

No	深度(cm)	No	深度(cm)
P1	67.2	P29	11.8
P2	58.6	P30	43.5
P3	49.0	P31	10.5
P4	36.9	P32	17.1
P5	26.7	P33	17.9
P6	36.6	P34	46.9
P7	23.2	P35	12.1
P8	38.4	P36	45.8
P9	51.5	P37	40.3
P10	49.8	P38	37.0
P11	60.4	P39	22.9
P12	49.2	P40	15.3
P13	57.2	P41	9.5
P14	42.7	P42	39.5
P15	69.0	P43	69.8
P16	22.8	P44	28.0
P17	30.3	P45	15.0
P18	22.5	P46	24.4
P19	11.9	P47	33.2
P20	13.7	P48	20.0
P21	9.7	P49	11.2
P22	31.8	P50	34.9
P23	20.9	P51	28.1
P24	21.8	P52	38.1
P25	18.1	P53	25.5
P26	11.6	P54	46.1
P27	29.2		
P28	9.7		

第123図 S I 1 0(2)

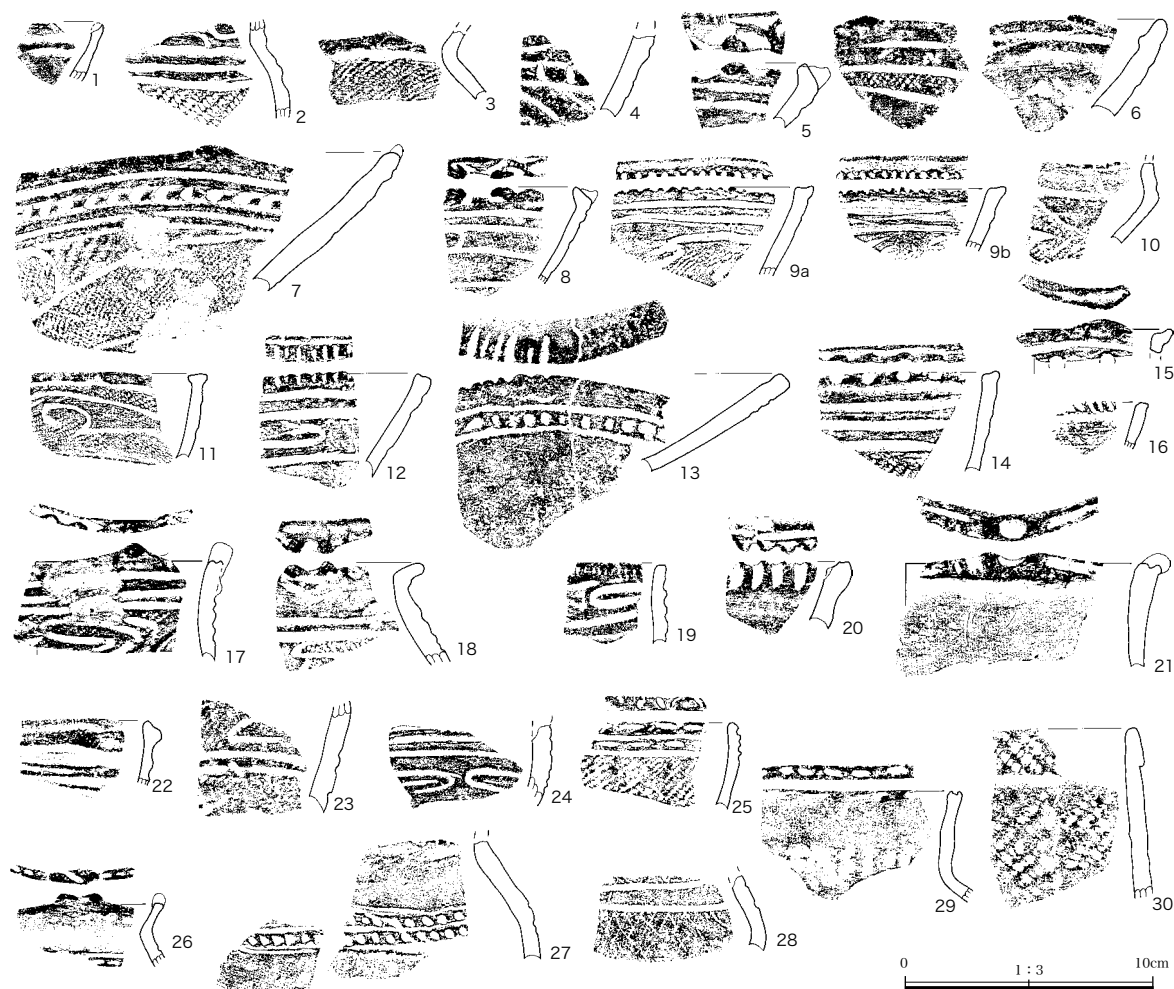


第124図 SI10出土土器(1) [I217]

SI10 (遺構第122・123図、遺物第124～126図)

位置・形態・経緯 集落内北部で、比較的遺構が集中する区域内になる。主にI216～I316グリッドに位置する。北側にSI06、西側にSI03、東にSI11が位置し、いずれも3m程度の近い距離となる。南2mから南は未調査区となる。

本住居跡は明瞭な竪穴掘り込みプランの確認はないが、包含層調査における土層断面で緩やかながら掘り込みとも見られる分層が確認されたことから、住居跡と推定して調査を進めたようである。平面的には図でのA-A'ライン上に点線で示した部分、土層では1層と2層及び、6b層との境界がこれに相当する。その後の調査でも明瞭な掘り込み、床面・壁の検出は無かったものの、ピットの集中は明瞭であり、住居の存在は



第125図 S110出土土器(2) [I217]

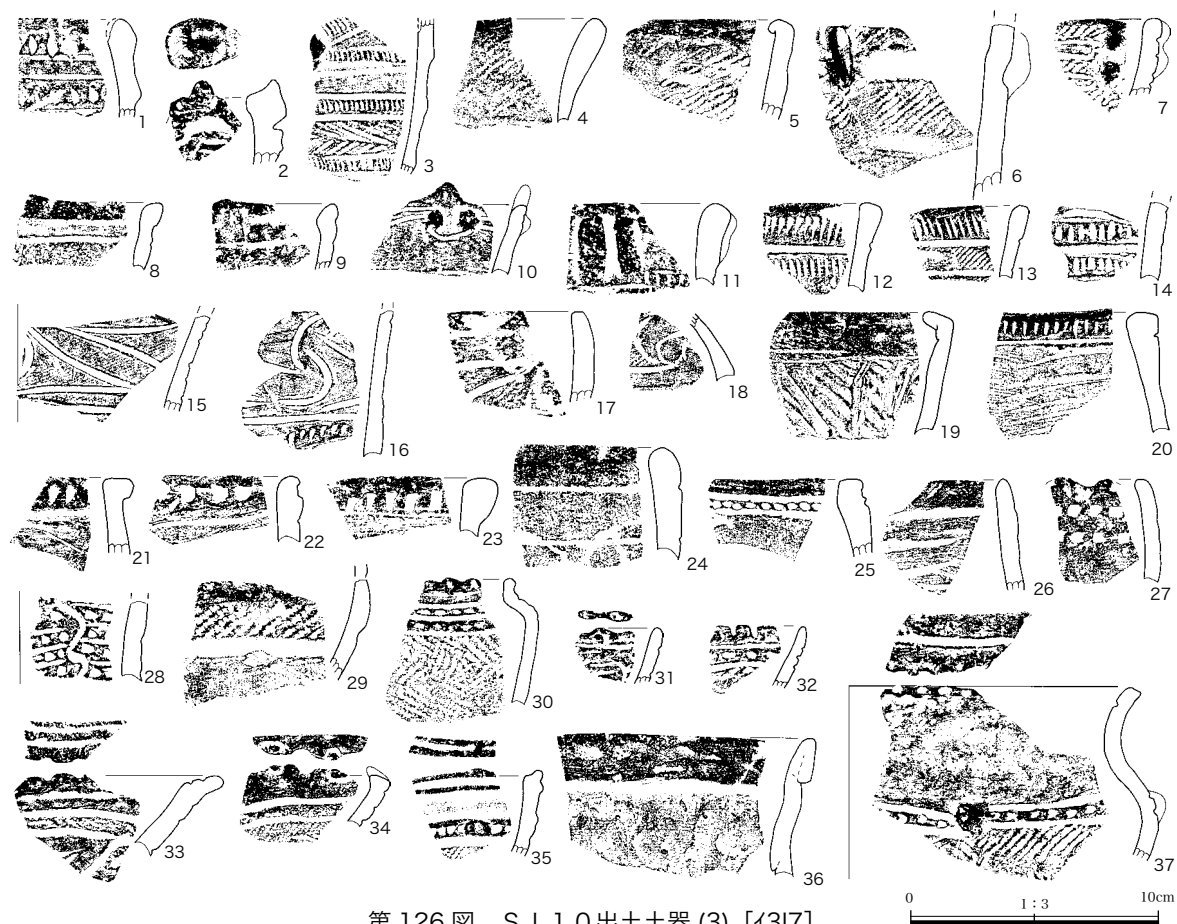
問題無さそうである。記録不詳ではあるが、北東側の点線で示した部分も内外で土層の違いがあったようである。南側一帯では長方形帯状の攪乱が多数入っており、形態把握をより困難なものとしている。ここではやや広い範囲だが東西15m×南北11mまで図示した。

床面・覆土 確認は包含層中～ローム漸移層で、最終的にはローム層面まで下げてピットの確認を行っている。確認面より上位にも黒色土包含層の堆積はあったようであるが、関係は不明である。確認面上面、地山とも西側に向かって低く傾斜している。記録からはこのローム地山面はかなりの凹凸が確認される。

A-A'ライン上で認められた土層の堆積については4,5,9,10層の辺りが不自然な堆積を示している。立ち上がり重視すれば覆土は1層のみで6層上面が床面となるが、この場合ピット覆土と整合しない。4層や6層の土層観察記録では地山ロームに近い特徴が示されていることも気付きではある。いずれにしても1～10層すべてを住居覆土とすることには問題が多い。

この範囲の土層と包含層との区別もさほど明瞭ではなかったようである。また土層観察部分は限られるが、ピットがローム面より上位の土層を切って（掘り込んで）作られていることが判明している例はない。

住居形態・ピット ピット番号を付したのものとして54基があり、これ以外も80基を超えるピットがある。攪乱を切るような表示をしているが、浅い攪乱より深さがあるものが殆どで、調査としては同時に掘り下げているものも多い。SD18と重複する例についても同様で、実質的には溝覆土を掘り下げた後に確認された



第126図 S110出土土器(3) [I317]

ピットである。S110ピット→SD18の関係と言える。

ピットが多数あることから、幾つかの推定復元案が考えられるが、P59～P62、P67.P68を入口ピット群、P9 (P10) -P14-P66-P54 (P55) の4本を支柱穴、P5を奥壁ピットと推定する案がある。この場合主軸はN-3° -W、軸長9.9m、直交軸長10.9mとなり、横長の楕円形に近い形態となる。一方軸をN-4° -Eと考え奥壁ピットをP5の東隣のピット、支柱もP54以外別の4支柱穴と推定し、住居東壁を概ね土層1層の端(平面での点線部分)とする推定案がある。この場合は主軸長9.9m、直交軸長10.45mとなりこれも横長楕円形のプランとなる。いずれの場合も北側は壁柱穴が並ぶようにやや密集しているが、他はあまり顕著な列状密集が無く、推定の蓋然性をやや低くしている。それでもP46.P50.P51の並びやP20～P70の並びは住居壁際の壁柱穴を思わせる。

先に推定案の支柱穴としたP9.P10.P54などは深さ40cmを超える。P1.P2も50cmを超える良好な柱穴で、平面的にもやや大きめであることも含め考え、「奥左右壁3本柱」の一つであることをも想定させる。一方住居内ほぼ中央でやや集中するP11.P12.P13.P15の4基、住居内のP3.P43の2基、また推定案の住居外となるがP30.P34.P36.P37等も40cmを超える深さがある。他に直線状に並ぶところや弧状に並ぶところもあり、先の深いピットも含め更なる検討が必要となる。P11～P15の集中を入口ピット群や支柱の一部、或いは壁柱穴列とみなしての、上記推定案とは大きく異なる北側や東側に展開する復元案なども検討したが、蓋然性が低く、示し得なかった。

遺物 確実に本跡に帰属する遺物の記録はない。I2I7、I3I7グリッドの遺物を参考的に示すが、後期後半～

晩期中葉までの破片が出土しており、大形破片もないことから、住居跡帰属遺物を抽出推定することは難しい。個別の出土位置も検討していない。石器では磨石類が10点以上、石鏃未製品が5点、打製石斧が7点、磨製石斧が8点、石錘が13点が出土しているが、いずれもグリッド出土分のうち、表掲載分のカウントである。

本遺構からの覆土出土土器は無く、当該グリッドであるI2I7グリッド及びI3I7グリッドからの出土例を示す。第124図は後期安行式(1～8)、瘤付系(9～26)、晩期安行式(28～35)、粗製土器(36～45)、沈線・刺突による文様を特徴とするもの(48～55)等がある。54は前浦式、56は脚部の破片のようだが本来の形態は良く分からない。隆帯上に刺突加飾がある48はやや異質な例で、剥落部から鋸歯状の文様構成であることが分かる。

第125図は大洞式系及び関わる土器、無文例などを示す。多くが大洞C2式で文様変容例も確認される。25.27は本遺跡で特徴的な半精製の土器で、沈線及び刺突文が巡る27は第126図37等と同じく、比較的安定的に組成している。25の口縁端部装飾も興味深い。

第126図はI3I7グリッド出土例で、後期後半瘤付系第3～4段階も比較的目立っている。10.19.28等がやや異質な例として注目される。

S I 1 1 (遺構第127・128図、遺物第129～131図、写真図版四)

位置・形態・経緯 集落内北東部で、比較的遺構が集中する区域内になる。主にI4I5・I4I6～I4I7グリッドに位置する。北側にSI07、西側にSI10、東にSI13が位置し、いずれも4～6m程度の近い距離となる。東2mにはSD15、北東1mにはSK46がある。

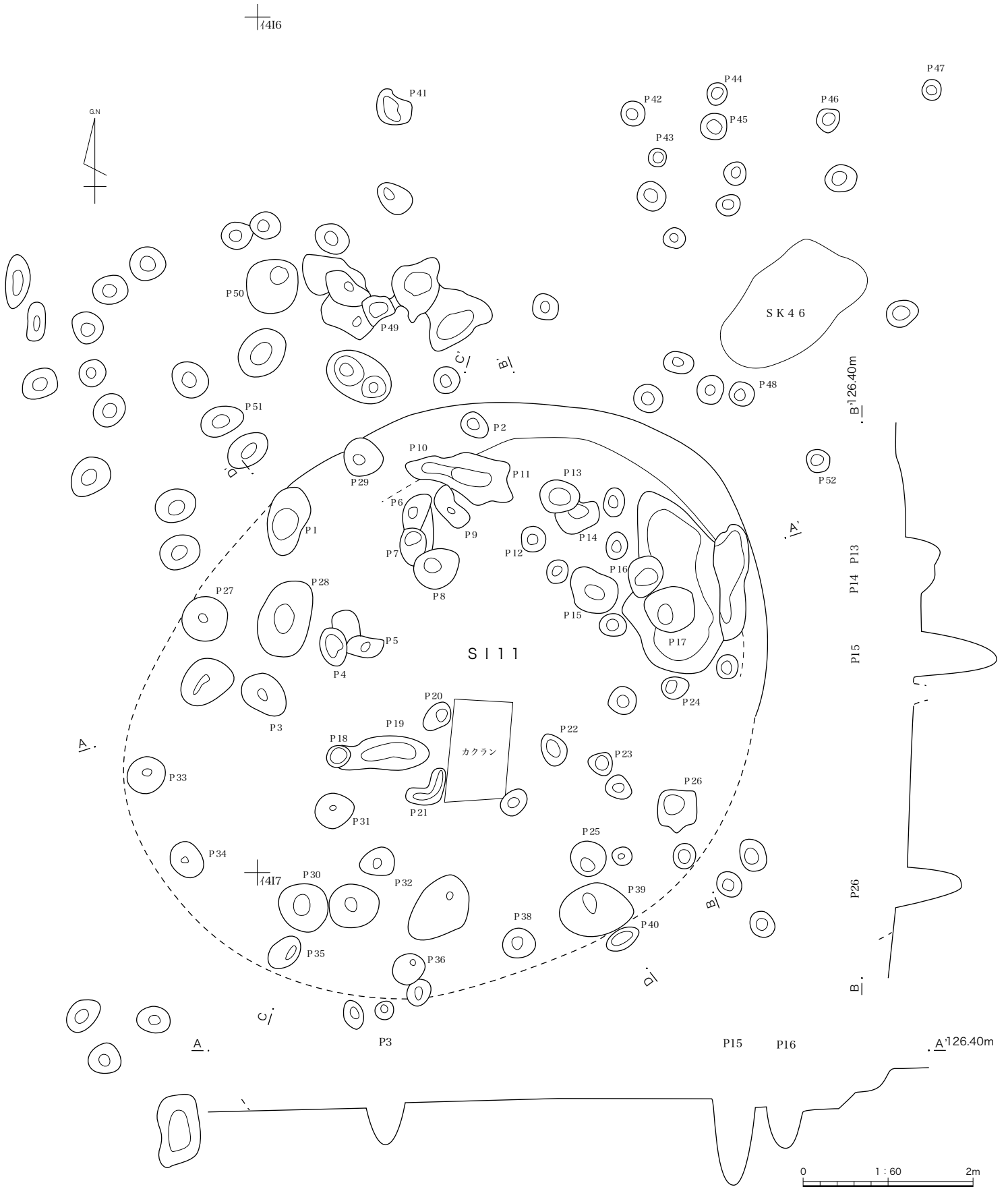
本住居跡は北東～南西に向かって傾斜するところにあり、やや高い位置の北東の一部でのみ竪穴の掘り込みプランが確認された。壁の高さは最大で42cmとなっており、傾斜は緩やかなようである。記録が無く本跡調査の経緯も不明であるが、土層断面の観察はし得なかったようで、壁の状態・包含層との関係や覆土の内容等を示し得ない。またこの上位には40cm程の包含層の堆積があったようである。確認面・壁・床面ともローム漸移層～ローム層で、写真からは地山における今市パミスの比較的多い状況が確認される。また住居南西側では七本桜パミスも目立っている。床面は若干の凹凸はあるが概ね平坦のようである。

上記のように掘り込みが一部のみで住居形態の把握は難しいが、ピットの配置も含め検討し、概ね点線の範囲となる楕円形のプランを想定した。ピットの形態・深さと位置からP3.P15.P26.P30にP7或いは更にP38を加えた4～6本を支柱穴と推定し、A-A'セクションラインにほぼ直交する方向を主軸とする。このときの軸長は6.65m、直交軸長は7.83mとなる。主軸の角度はN-16°-Wである。

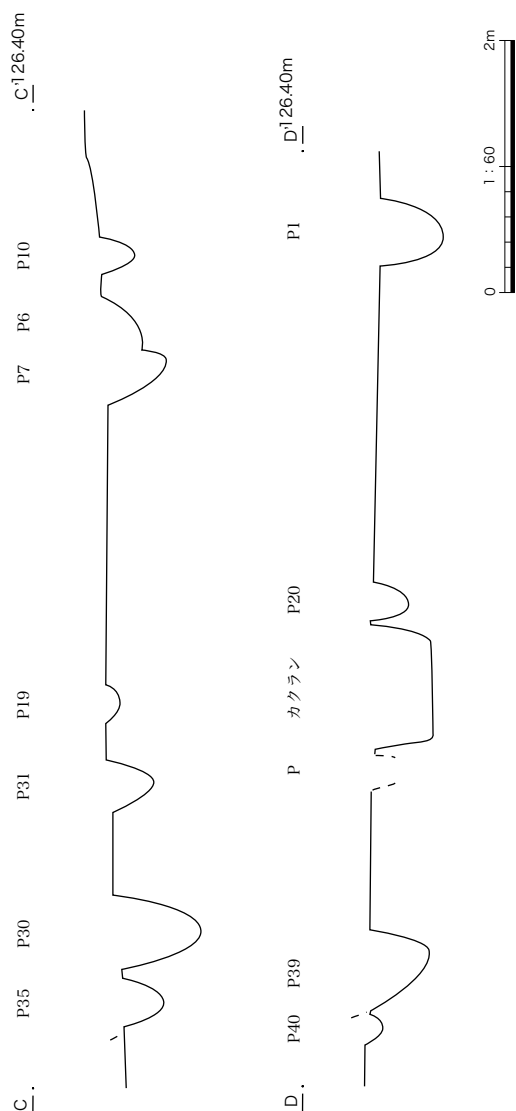
ピット プラン内で番号を付した深さの判明する39基+未発番の14基がある。このうち40cmを超える深さのものは16基である。またプラン外で40基程度確認されているが、本跡に関わるものは少ないかもしれない。北西側でのピットの集中では直線状や弧状に並ぶように位置している一群もあり、別の住居跡を想定した方が良いかもしれない。深さ20～30cm程度のものがやや多いことも別遺構の想定を傍証する。南側のピット群1も併せての検討が必要となろう。

また先に4～6本の支柱案を示したが、その外側でもP35.P39.P16.P1等の深く大きめなピットがあり、これらを組み合わせた支柱案も充分推定可能である。

住居内北東のP16.P17周辺に不整形の掘り込みがあり、入口ピット群となる可能性があるが、先の支柱穴配置とは整合しない。同様に推定プラン北側のP49～P50周辺を入口ピット群と捉える案もあろうが、これも判断が難しい。ともあれ、ピットの多さからは複数軒重複の可能性が高く、更なる検討が必要となる。



第127図 S111(1)



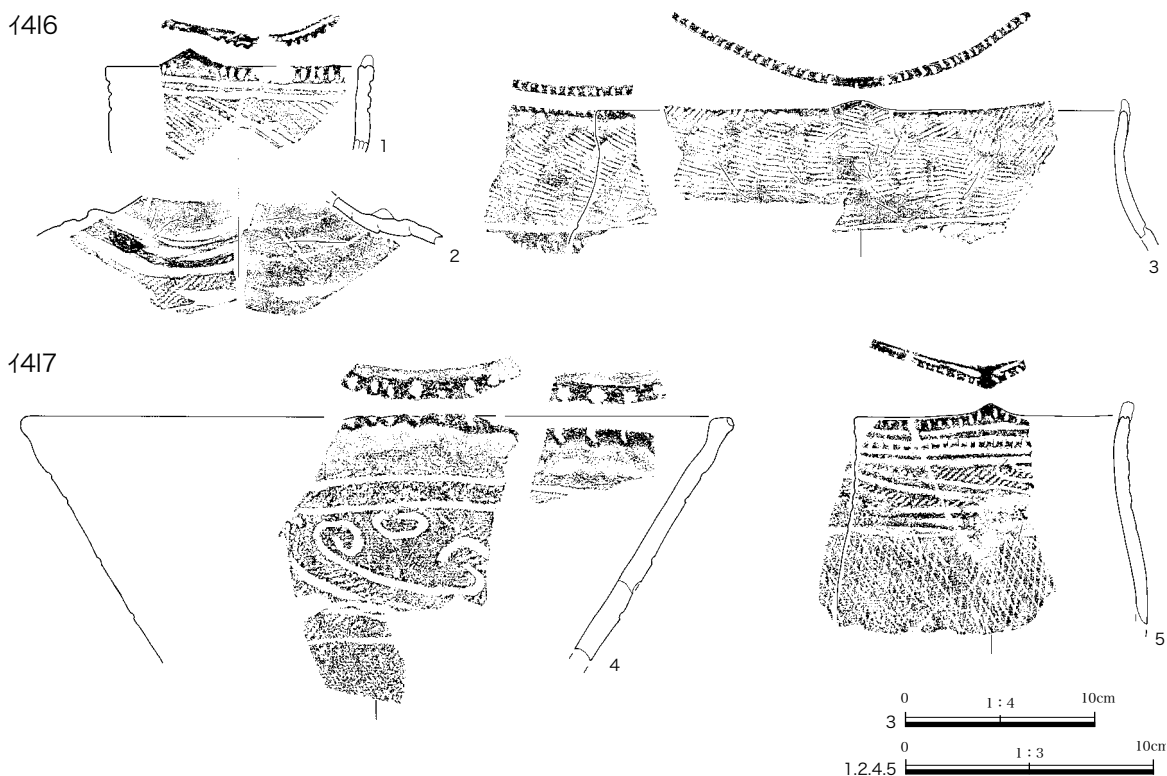
No.	深度 (cm)	No.	深度 (cm)
P1	51.4	P27	24.9
P2	16.3	P28	24.8
P3	45.5	P29	8.3
P4	24.3	P30	65.6
P5	44.1	P31	29.8
P6	45.0	P32	36.3
P7	45.3	P33	11.4
P8	20.5	P34	16.0
P9	12.5	P35	41.1
P10	13.5	P36	38.4
P11	21.0	P37	19.6
P12	34.8	P38	65.0
P13	33.0	P39	54.3
P14	25.6	P40	12.6
P15	94.8	P41	20.8
P16	51.0	P42	45.3
P17	49.3	P43	19.6
P18	49.0	P44	15.3
P19	9.6	P45	20.2
P20	18.9	P46	23.2
P21	11.0	P47	23.5
P22	68.0	P48	32.0
P23	26.3	P49	21.4
P24	38.8	P50	16.0
P25	49.1	P51	23.5
P26	78.0	P52	30.5

第128図 S111(2)

遺物 遺物出土状況の記録が無く、遺構帰属遺物は不明である。当該グリッドの土器では復元個体4点及び破片があり（第129～131図）、時期幅はあるものの、晩期中葉大洞C2式がやや目立っていると言えようか。出土土器個別のグリッド内の出土位置は確認していない。確実に帰属する石器も不明であるが、当該グリッドのものは伴う可能性もあろう。

本遺構も覆土出土土器はなく、当該グリッド出土土器を参考として示す。第129図には復元個体を、第130～131図には破片資料を示す。

第129図1は直線的に立ち上がる深鉢口縁部で、頸部に雲形文変化の磨消縄文が描かれる。2は壺の肩部破片で、内面での輪積接合痕が顕著に残る。3は口頸部に縄紋が施される深鉢で、頸部の沈線+刺突列以下の体部は不明である。口縁端部に1にも類似する形態の小山状突起が付される。内面ミガキ調整、胎土中の鉱物は少なめで、色調は内外面にぶい黄橙色基調である。4は大形破片から形を推定復元したものである。沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順が観察される。雲形文類似の磨消縄文意匠が描かれる。内面はミガキ調整である。石英・角閃石を少量含み、色調は外面にぶい黄橙色、内面にぶい黄橙色～黒褐色を呈する。5は小形壺深



第129図 S I I I 出土土器(1) [1416・1417]

鉢の大形破片である。沈線→縄紋LR→無文部ミガキだが、やや浅めの沈線等、平板な印象を受ける。体部下半は網目状撚糸紋（軸縄不明）が施され、内面はミガキ調整である。胎土中の鉱物は少なく、石英・雲母を少量含むのみである。外面褐灰色、内面黒褐色を呈する。

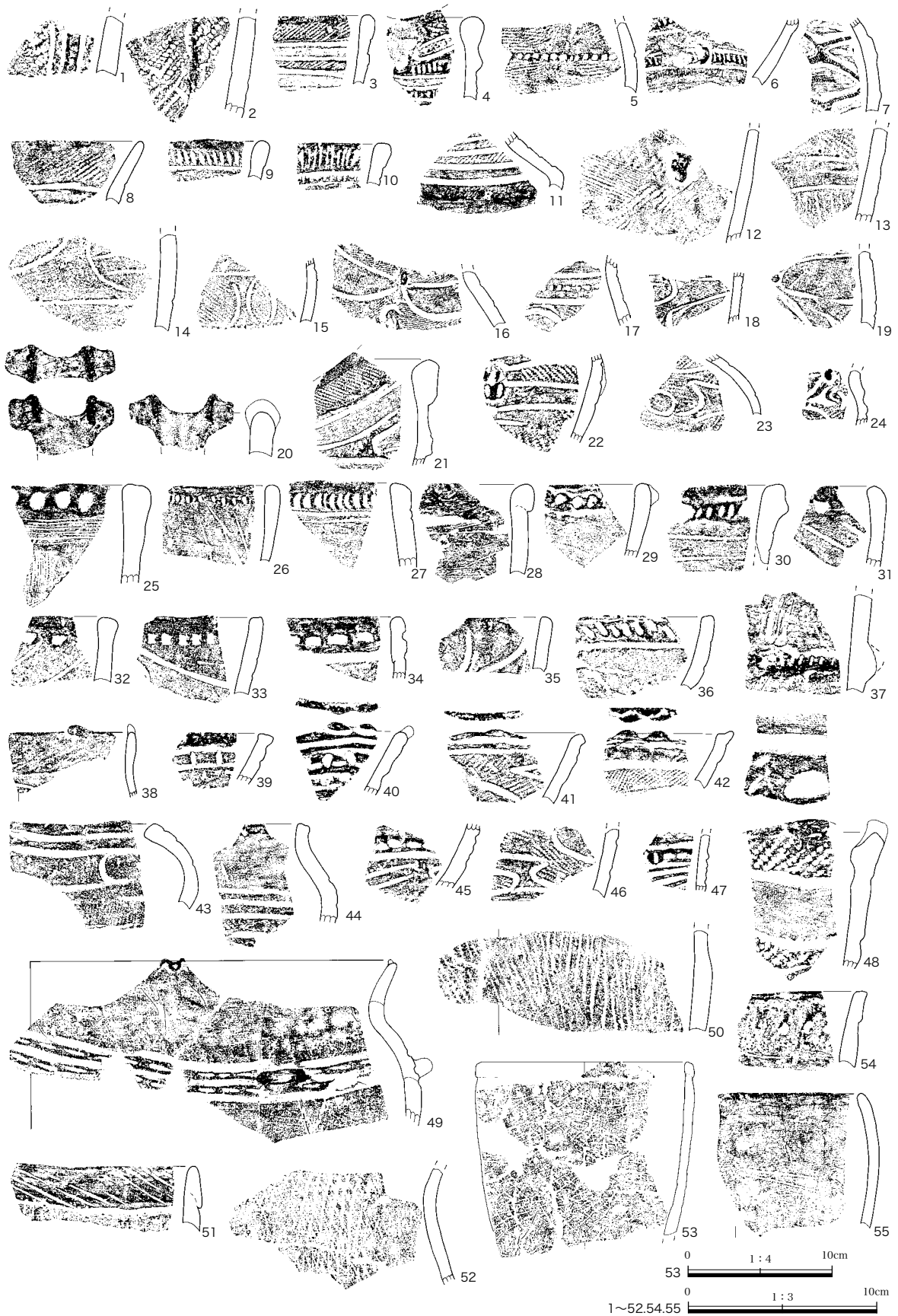
第130図には1416グリッド出土の破片をまとめた。後期後半安行式以下、瘤付系、晩期初頭土器群、粗製土器、大洞式系、付帯口縁や口縁・口縁端部に刺突を巡らすものなどを示す。小片であるが瘤付系第3・4段階から晩期初頭例がいくつか見られる。

第131図は1417グリッド出土の破片を示した。1.2は中期の土器、3～24が後期安行式、晩期安行式、及び瘤付系を示す。8～10が瘤付系で、11は壺または注口土器となろうか。26～38は紐線文系の粗製土器及び、沈線や刺突で文様を描く一群（分類A群）である。39～47が大洞式系で、大洞C2式がここでも目立っている。48は前浦式である。

49は屈曲部直下に最大径を有する壺に近い形態の深鉢口縁部破片である。2列の刺突列と脇の沈線、これに横長の突起が付される。外面無文部及び内面はナデ～ミガキ調整が観察される。2列の刺突例はあまり例を見ないもので注意される。53は体部に網目状撚糸紋が施される小形の深鉢である。口縁は単口縁にそのまま粘土帯を積み上げ未調整に近い作りとし、付帯口縁状にしている。軸縄を含め原体不鮮明だがrまたはRの付加したもので、かなりランダム・雑な施紋であることも特徴となろう。胎土には石英・白色粒などを多量に含み、色調は外面暗灰黄褐色、内面黒褐色を呈する。



第130図 S I I I 出土土器(2) [1416]



第131図 S111出土土器(3) [1417]

S I 1 2 (遺構第 132 図、遺物 133～144 図、写真図版四)

位置・形態・経緯 集落内北東～東部で、遺構集中域外縁の遺構が散漫な区域にかかる位置となる。主に I 5I7・I 6I7 グリッドに位置する。西側 3 m に SI09、北西 10 m に SI13 が位置する。西 3 m には SD16、東 7 m には SD09、南東 9 m には SK51 がある。北西側には大きな攪乱が入る。

本住居跡は概ね台地平坦面にあるが、西側に向かって緩やかに傾斜しているようである。図面等の記録が少なく、本跡調査の経緯も含め不明な点が多い。竪穴の掘り込みプランも写真からは認められるが、図の記録が無く確実な壁・掘り込みとして良いか判断し得ない。確認面は黒色土からローム漸移層のようで、床面はローム漸移層またはローム層とみられ、概ね平坦なようである。プラン外の北側～東側では今市パミス・七本桜パミスの堆積も窺える。写真から推定される壁は西側では黒色土主体、東側ではローム漸移層のようで、高さは 10 cm 程度、角度は比較的急な傾斜となっている。示し得なかった写真の 1 枚には遺物を含む黒味の強い層部分を中心に十字のサブレンチが設定・掘り下げられており、ここでの断面観察をもとに住居跡を判断したことも想定されるが、確実な所見の記録は無く、また上位包含層との区別も明瞭なようには見えない。一方完掘写真では点線で示したラインより外側まで床面と同じ高さで掘り下げられており、覆土と地山や包含層との区別が困難であったことを示すと共に、住居プランがより外側まで拡がる可能性も示される。点線プランで計測すれば東西 5.52 m、南北 5.35 m、写真での掘り込みはこれよりやや小さいようで、径 3.8 m 程度と推定される。

ピット 点線で示した範囲内で 59 基、この外側で 21 基のピットを示した。但し完掘写真で示されているのは 9 基のみで、この 9 基も含め航空写真等からおこして掘り下げられたピットを含め第 132 図に示している。故にすべて深さ・覆土の内容については不明であるが、プラン内中央の大きめのピットをはじめ、写真記録に示されているピットについては径 30 cm 以上、深さ 20 cm 以上の例が多いように見える。それ以外では径 15 cm 程度のものが多い。柱穴配置については、点線プラン東半分ではプランに沿って弧状に並ぶようにも観察でき、これらが壁柱穴群である可能性を示すが、情報不足のためこれ以上の検討は難しい。

遺物 写真記録では住居中央～東側で一定量の遺物分布が窺え、床面に近いものも観察できる。一部に平面図の記録もあるが整合しないためここでは示さない。当該グリッドのものでは 30 点以上の復元個体があり、遺物量は多い。復元個体では大洞 C 1 式・同併行期のものが目立っており、住居跡の時期判断の参考にはなる。個別の出土位置・レベルの確認はしていない。石器では磨石類が 2 点、石皿類が 4 点、打製石斧が 8 点、磨製石斧が 7 点、石鏃（未製品含）が 11 点、石錐が 3 点、石錘が 4 点である。

第 133 図 1 は鉢の口頸部破片で、沈線→縄紋 LR→刺突・無文部ミガキが観察される。内面はヘラ状工具によるミガキ調整である。胎土は白色粒が多く、砂っぽい感があり、色調は内外面にぶい橙色を呈する。口縁端部にも弧線の連続による装飾が加えられる。帯状空間内に施される円形の刺突は、やや深く大きめの表現である。2 は小形の鉢に近い器形で、大きさ・形態からは「小型土器」への分類も可能であろう。内面で赤色顔料や黒色付着物（漆？）を観察でき、顔料容器であった可能性を示す。内外面ミガキ調整、胎土には石英・雲母・白色粒を多量に含み、色調は内外面灰黄褐色を呈する。3 はやや高さのある鉢で緩い波状縁の頂部には突起が付される。4 は小形無文の鉢で、1 か所突起が確認される。外面は比較的丁寧なミガキ調整によっている。胎土には白色粒を多く含むほか、雲母を少量含む。5 は深鉢体部下半で上端に施文域下端の沈線が観察される。6 は口縁端部に B 突起が連続して付される鉢である。内面で 1 個おきに突起間を連携する弧線が隆線で描かれる。8 は台付の脚部とみられるもので、レンズ状の 3 本沈線の間に点列が充填される。

第 134 図 1 は例を見ない形の土器で、体部下方に屈曲があることも注目される。頸部屈曲よりやや下位に

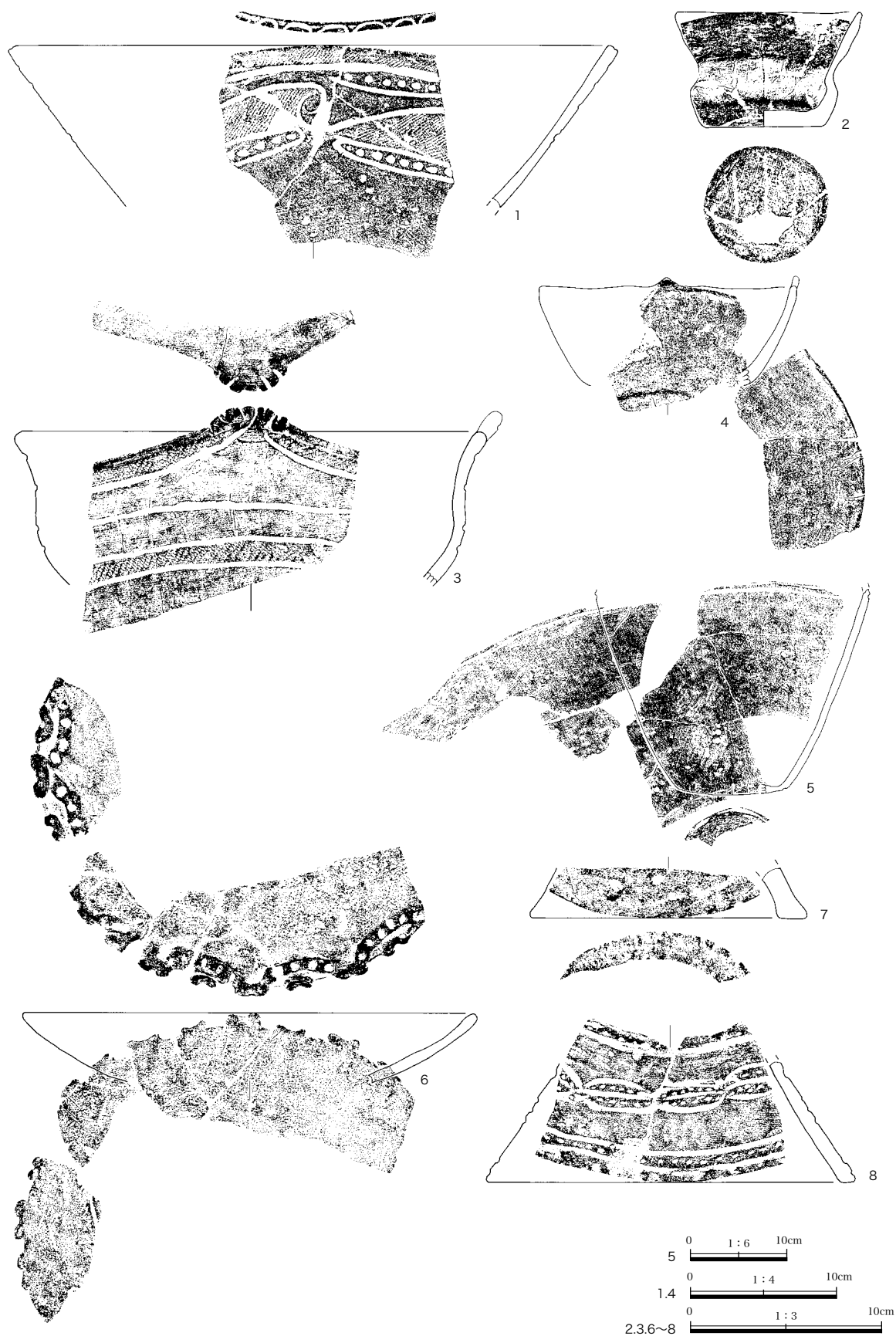


第132図 S112

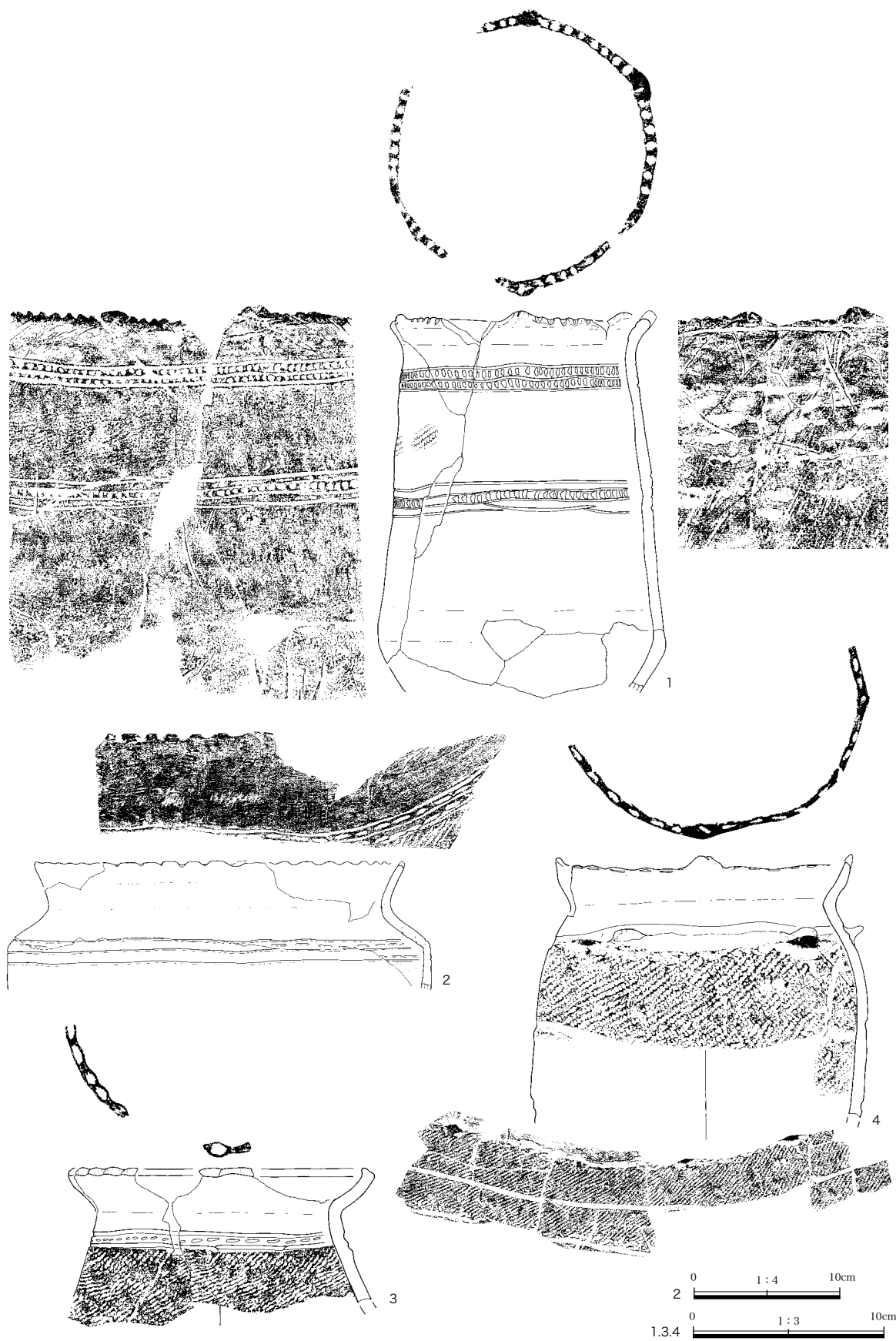
沈線+刺突列が巡る点は、ほかの幾つかの頸部刺突文土器（同図2.3等）とも共通するが、体部中位にも区画沈線+刺突列が巡る点は大きな差異となる。浅く縄紋LRが施されるが、施文順位は明瞭に確認できない。無文部の調整はケズリに近いミガキ、内面ナデ～ミガキ調整である。胎土には白色粒及び角閃石を多量に含む。内面の状況を図の右側に示したが、輪積痕、指頭押圧状の調整痕跡や口縁直下の沈線が認められる。口縁の上方突出の突起は全体で6単位のように、この間に切り込み状～押捺状の刺突が巡る。

第134図2は屈曲部よりやや下位に沈線+刺突列を巡らす土器で、沈線・刺突とも比較的先端細い工具による施文である。体部の縄紋L?は沈線施文後に施されている。内面ナデ調整だが輪積痕が残る。胎土には白色粒を多量に含み、内外面褐灰色を基調としている。3は頸部以下に縄紋無節Lが施される深鉢である。頸部の沈線→刺突→縄紋無節Lの順が観察される。口縁端部も押捺が巡る。色調はにぶい褐色～にぶい橙色である。4は頸部屈曲の土器で、上位は比較的遺存が良い。縄紋LR→横位に巡るナデ状凹線の順で描かれる。舌状の瘤状突起は口縁突起とはずれた位置（軸間のちょうど中間の位置に近い）に配される。突起やナデ部分との境界が器形上の屈曲より若干下位に位置しているが、この位置に沈線・刺突列が配される同種土器群との共通性を見ることができる。外面に煤が部分的に付着、内面には焦げの付着も観察される。口縁突起は2単位確認でき、おそらく全体で4単位となる。口縁～頸部の無文部はミガキに近いナデ調整である。

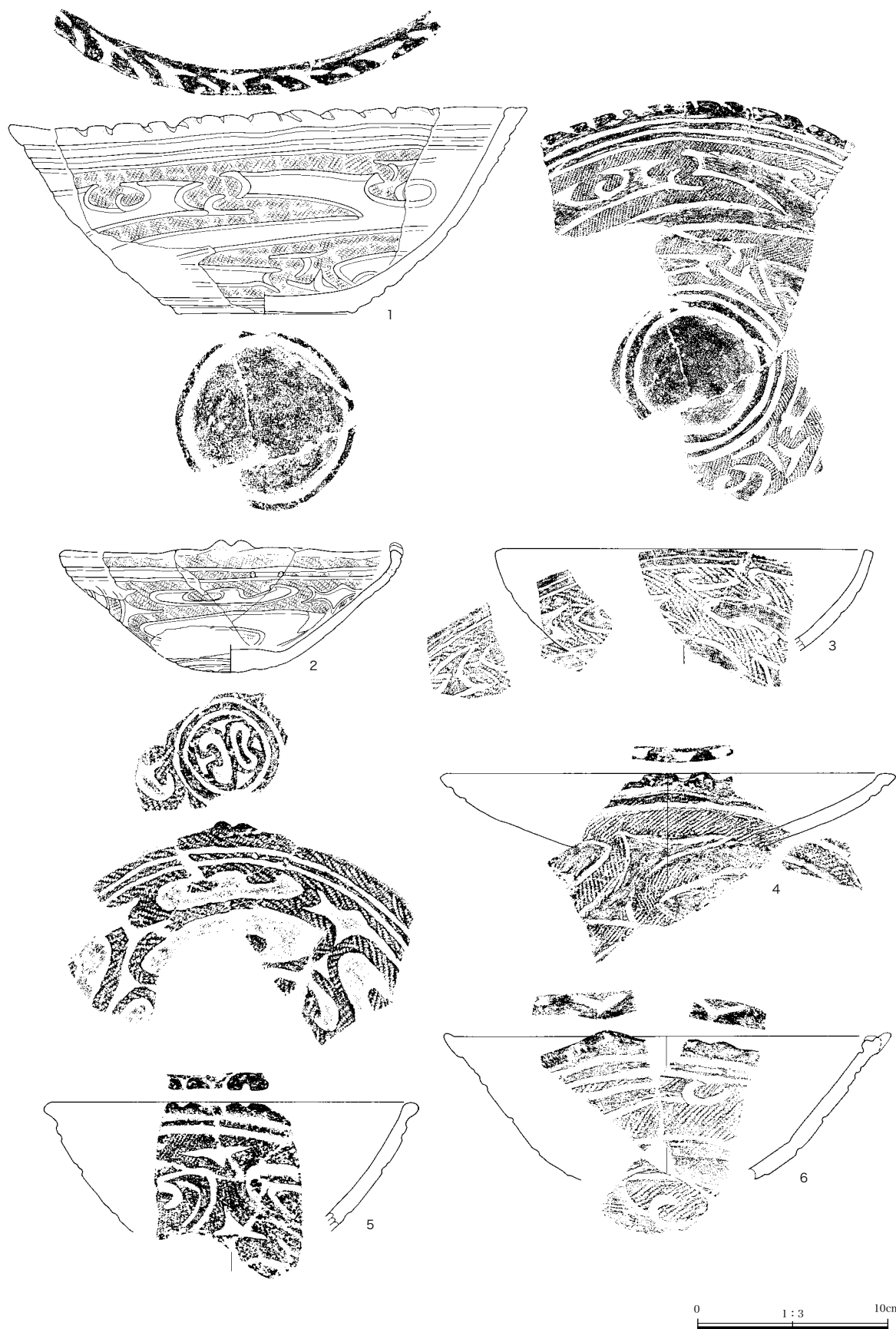
第135図1はやや大形の大洞式浅鉢である。沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順に施されるが、ミガキが
(→P160)



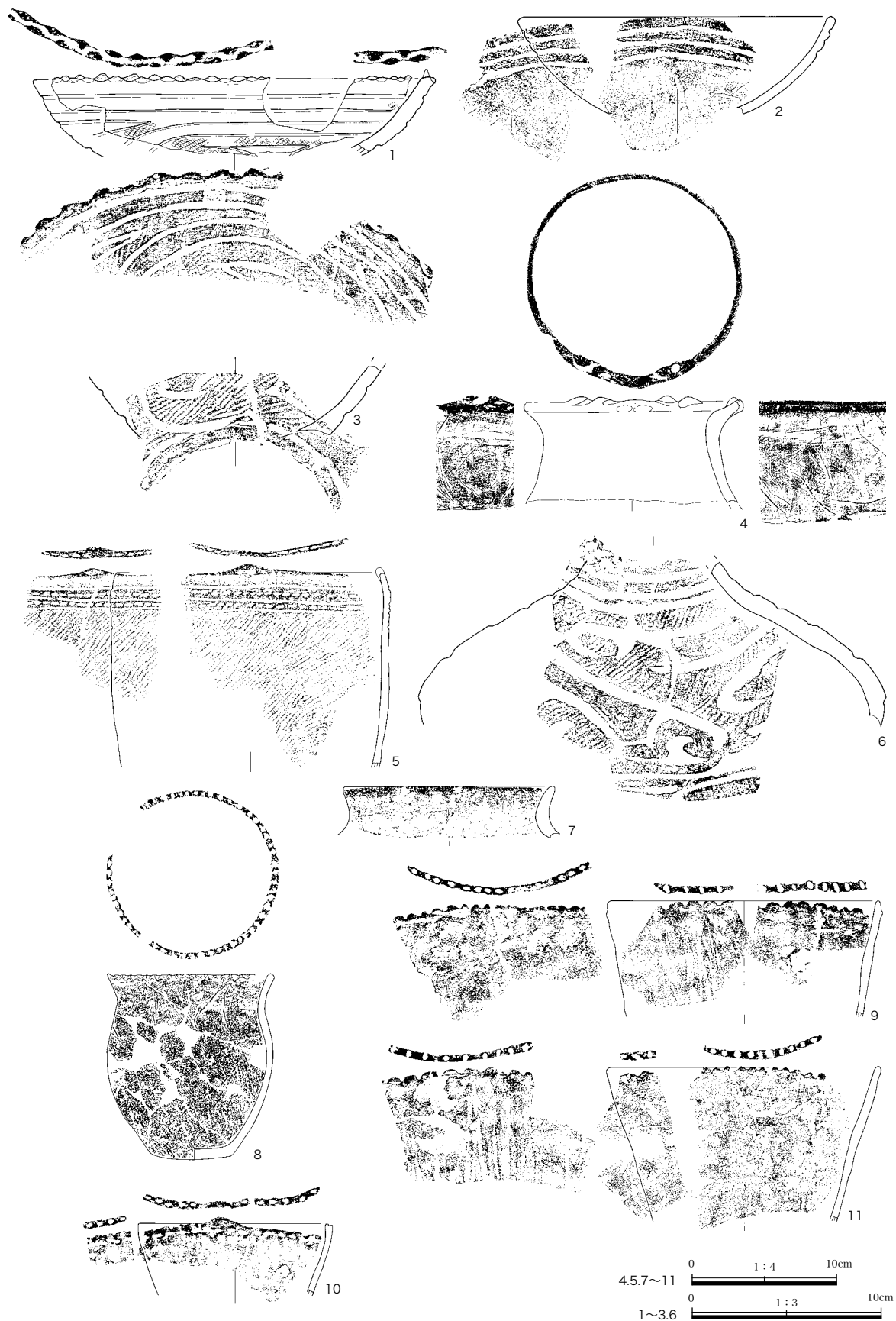
第133図 S112出土土器(1) [1617]



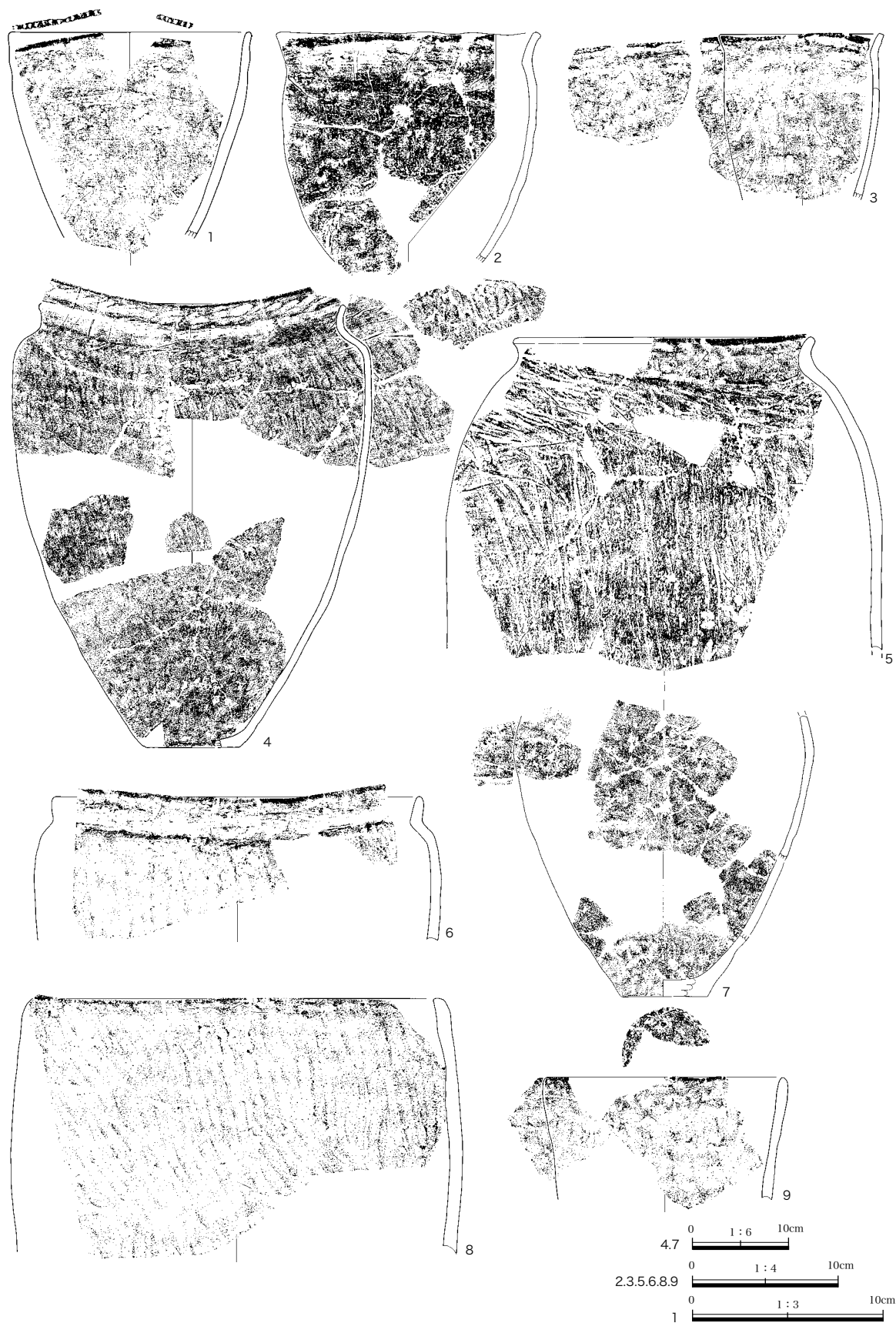
第134図 S112出土土器(2) [1617]



第135圖 S112出土土器(3) [1617]



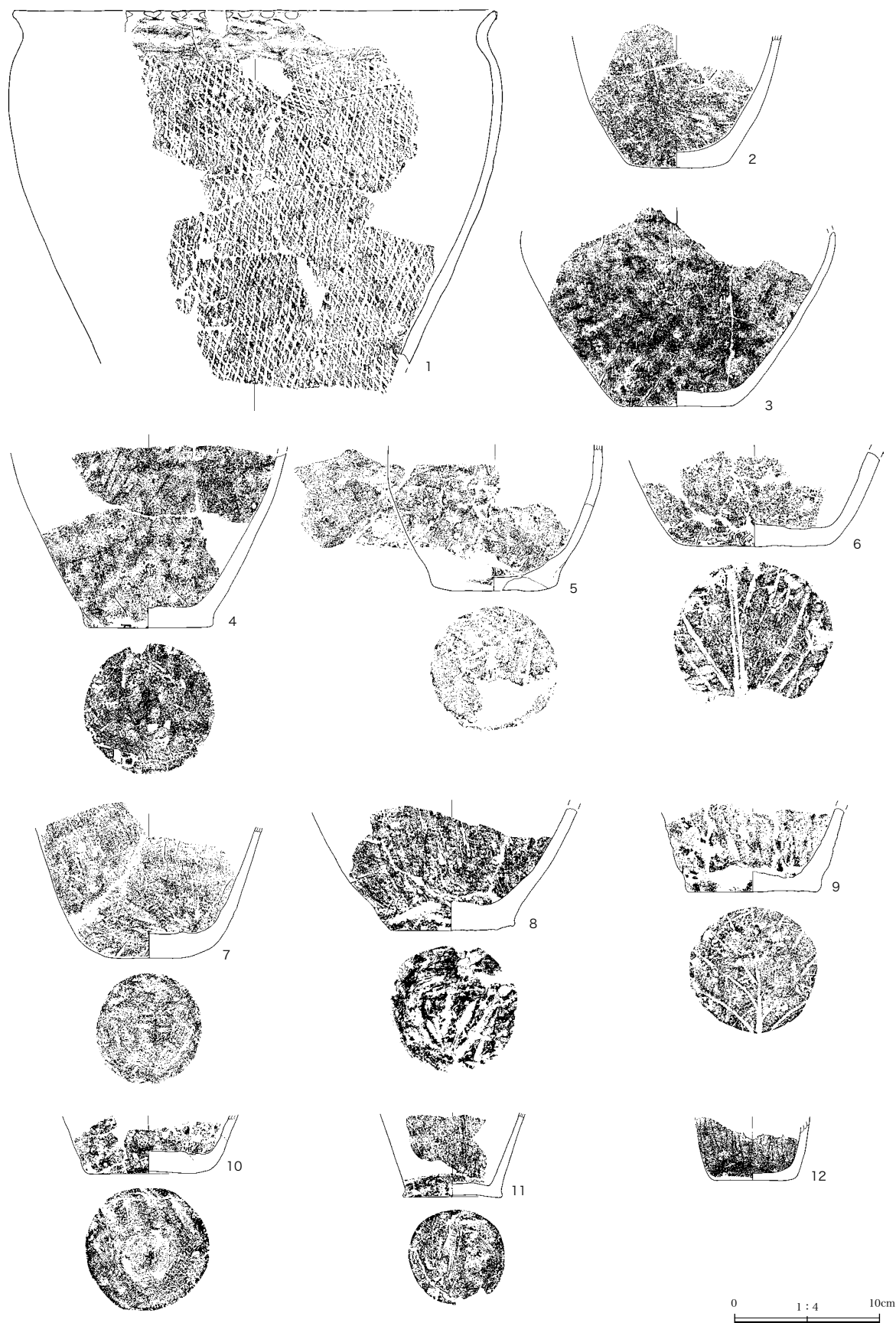
第136図 S112出土土器(4) [1617]



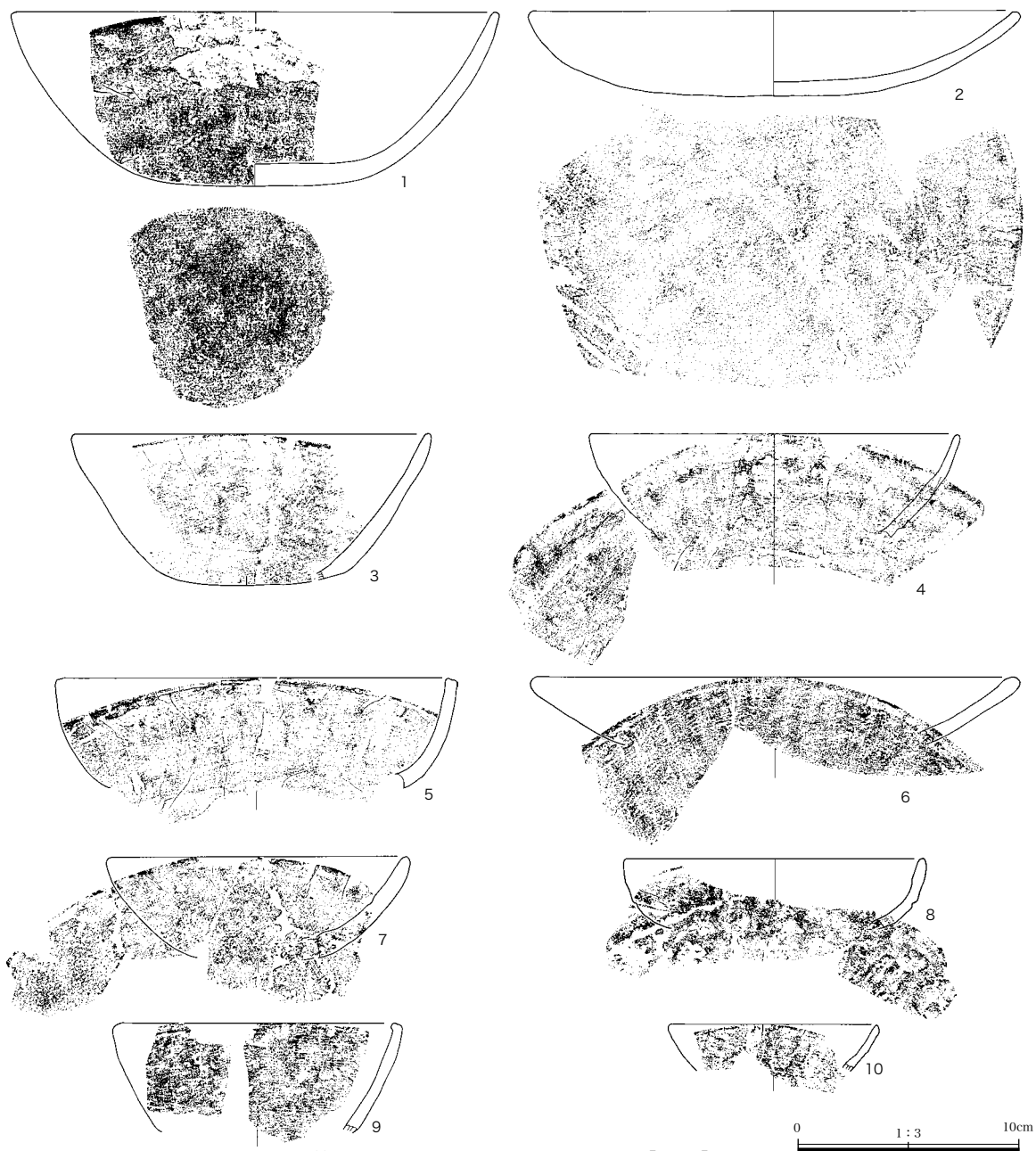
第137図 S112出土土器(5) [1617]



第138図 S112出土土器(6) [1617]



第139圖 S112出土土器(7) [1617]

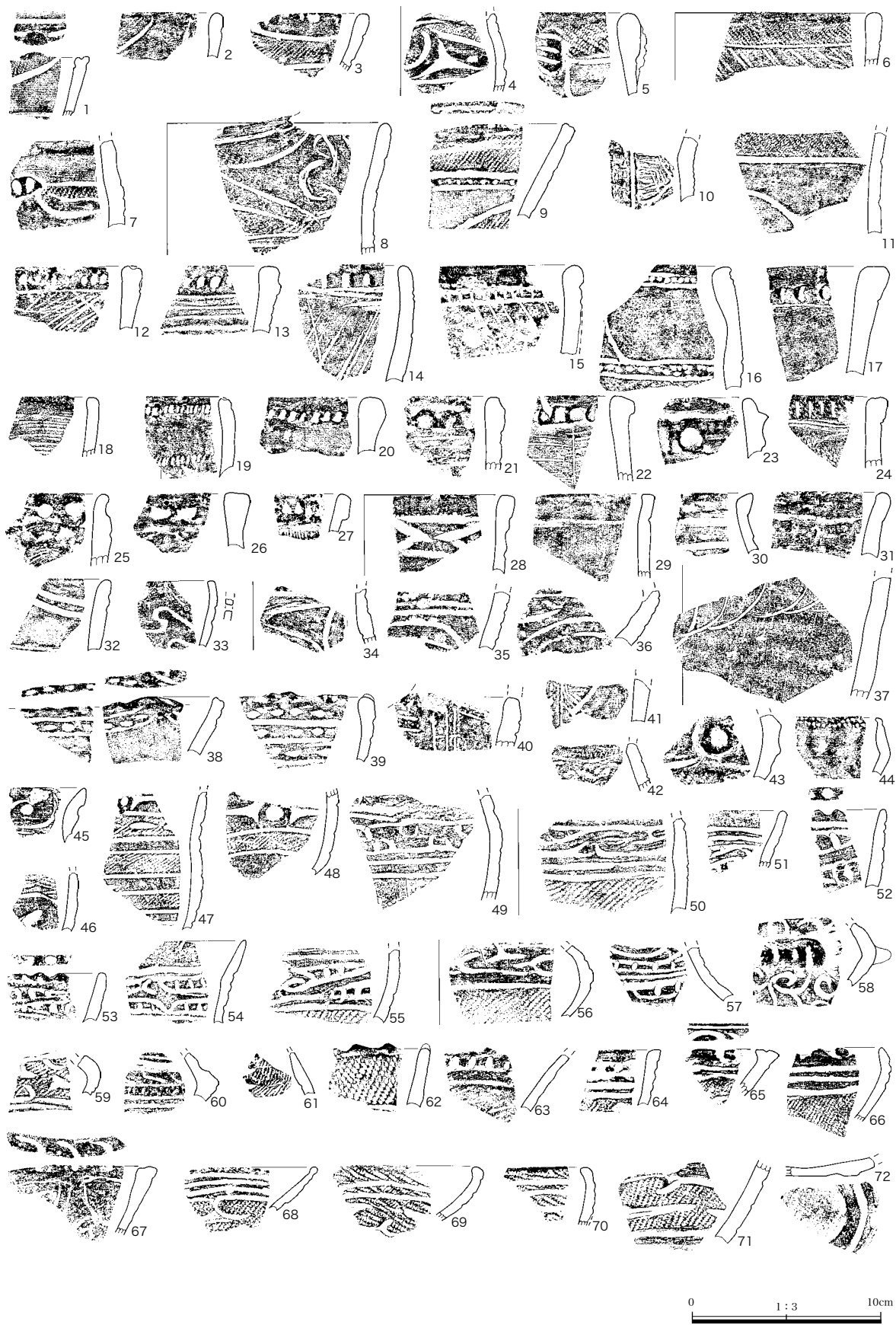


第140図 S112出土土器(8) [1617]

若干削り取り状で、雲形文は若干浮彫的な表現である。口縁端部は三叉状沈線とノの字状沈線を交互に繰り返す表現である。内面もミガキ調整、胎土には白色粒・褐色粒を多量、石英を少量含み、色調は外面灰褐色、内面褐灰色を呈する。2は40%程度遺存の小形の鉢である。ネガ部分が大きな単位文となっており、沈線→縄紋RL→無文部ミガキの順で描かれる。ミガキは一部研磨～削り取り状だが、さほど彫刻的な感は受けない。焼成前穿孔2か所が近い位置にあり、割れ口を間に挟んでいないことから、補修孔ではない穿孔である。外面に煤あるいは漆状の黒色付着物がある。胎土には0.5～1mm程度の白色粒多量・石英を少量含み、色調は灰黄褐色を基調としている。内面はやや粗いミガキ～ナデ調整。3の鉢では副文様の配置が見られるが、4では底部にかけて大柄な文様構成となっている。5は小形の鉢で、沈線→縄紋LR→ミガキの順に描かれ、沈線は深さ・幅が不定である。胎土には白色粒・石英・灰色粒を多く含み、色調は内外赤褐色を呈する。口縁



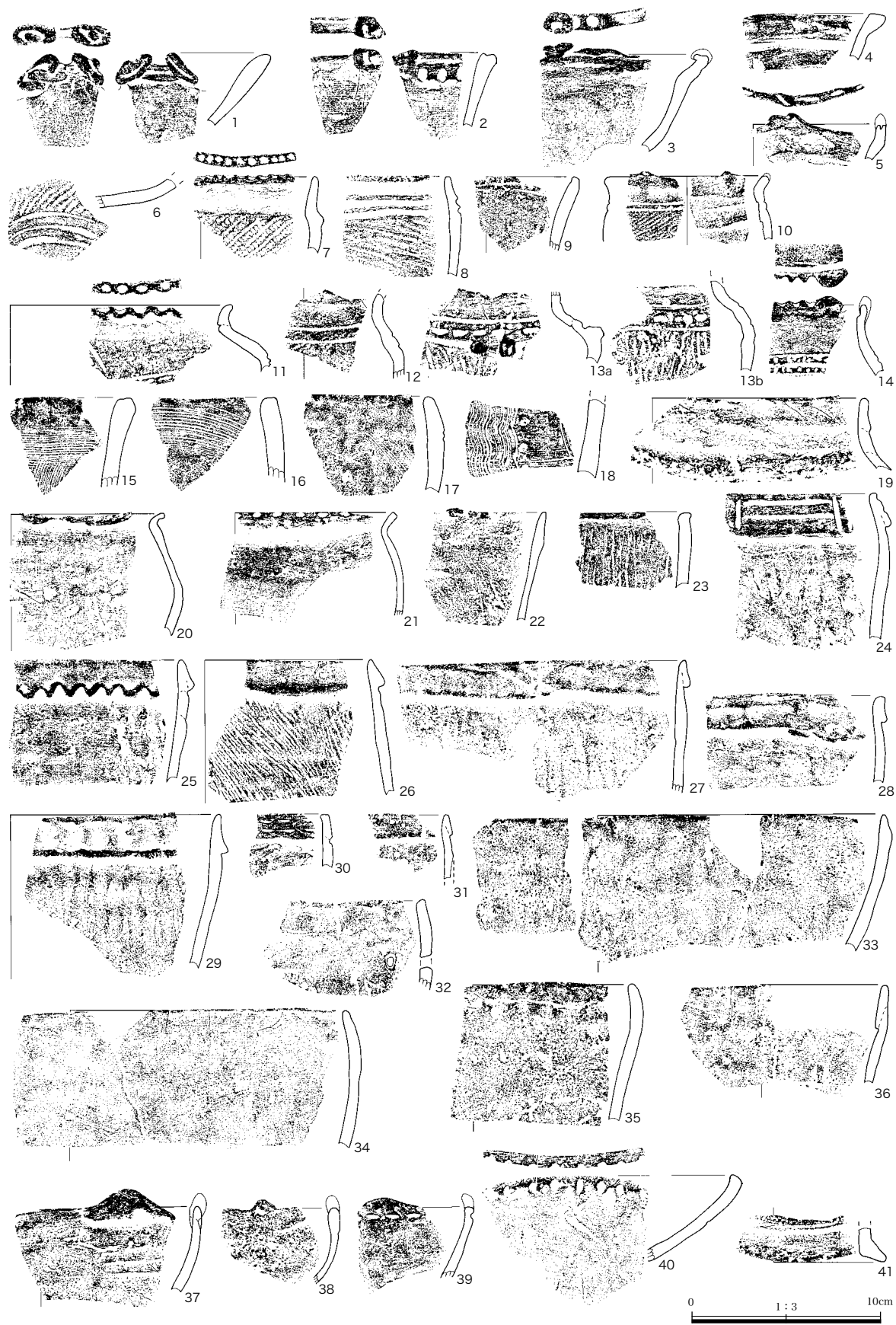
第141圖 S112出土土器(9) [1617]



第142図 S112出土土器(10) [1617]



第143圖 S112出土土器(11) [1617]



第144図 S112出土土器(12) [1617]

端部の突起はやや高さがある。6はやや深めの鉢で無文部のミガキ調整はやや不十分なところがある。

第136図1は体部から底部に文様が描かれる鉢である。沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順と観察される。2は口縁直下の沈線のみ確認できるものである。3は鉢または台付鉢の鉢部下半と考えたものだがやや疑問が残る。4の壺口頸部は、この部分では全周残る。B突起風の突起が2個1対で1単位配される。口縁の装飾及び頸部無文部とも良く磨かれている。5は口縁直下に3本沈線・刺突列が巡るものである。口縁端部に細長い刺突の列も加えられる。6は壺の肩～体部上半で、やや太い沈線で文様が描かれる。8は小形の深鉢で、口縁端部に連続的な押捺が巡る。外面ナデ～ミガキで下半はケズリに近い調整である。胎土は白色粒多量で、色調は内外面黒褐色を呈する。9～11及び第137図1は無文深鉢の口縁端部に刺突が加えられる。

第137図2は外面研磨～やや粗いミガキ調整の深鉢である。胎土には白色粒を多く含み、色調は内外面赤褐色を呈する。3も同種の形態だが若干小さい。4は口縁から頸部がくの字状に屈曲するやや大形の深鉢である。体部は研磨線状痕が残る調整、口縁部は指頭押捺状の凹凸がある。5は外面でケズリに近い粗いナデ調整が確認され、内面も同種のやや粗い調整である。調整痕及び方向は拓影でも確認できる。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土には石英・白色粒をやや多く含む。6も4.5に近い口縁形態の土器である。一方8.9や第138図3.4は直線的に口縁が立ち上がる土器である。8は6同様の強いヘラナデ状調整痕跡が確認される。

第138図2の無文深鉢はケズリに近い調整痕やヘラナデ状の調整痕が残る。外面暗赤褐色、内面明褐色を呈する。5bは無文または無文部の体部下方～底部で、同一個体と推定される口縁部破片5aを共に示す。但し図での間隔よりかなり上位に位置すると推定され、図上復元もしなかった。6～9は付帯口縁の土器、10は破片上端近くに縄紋LRが確認でき、無文粗製土器とは異なる。6は内外面ミガキ調整が観察される。

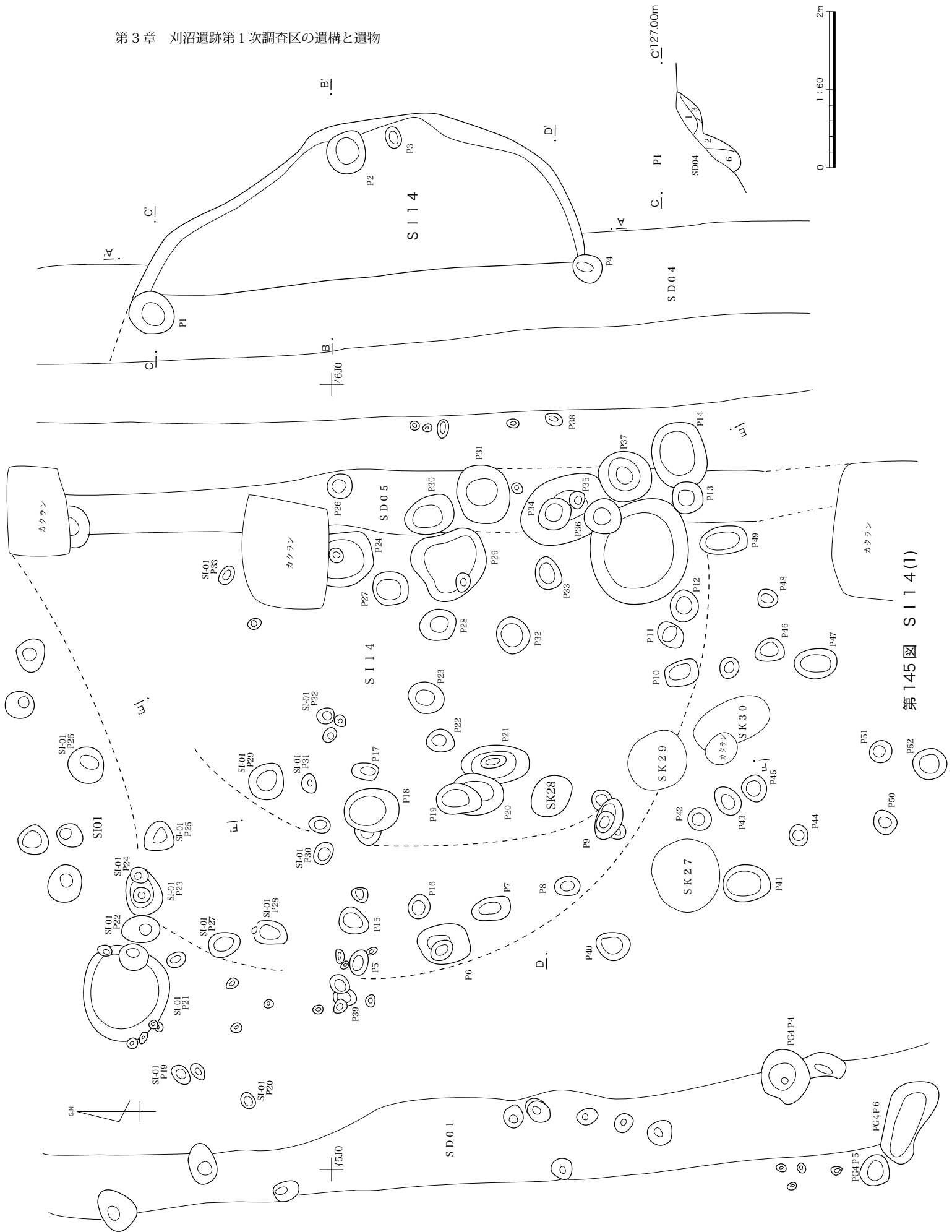
第139図1は体部に網目状擦糸紋が施される深鉢で、頸部はナデ調整、口縁端部には刺突が加えられる。胎土には白色粒及び角閃石を多量に含み、色調は外面暗褐色、内面褐色を呈する。2～12には体部下半～底部、底部の資料を示す。「網代痕」は少なく、ケズリ～ミガキ状の調整を確認できるものが多い、型式判断不能ではあるが、少数木葉痕が認められる点は注意される(6.9)。

第140図には無文の鉢・浅鉢を示す。内外面ミガキ調整で比較的丁寧に作られているものが多い。

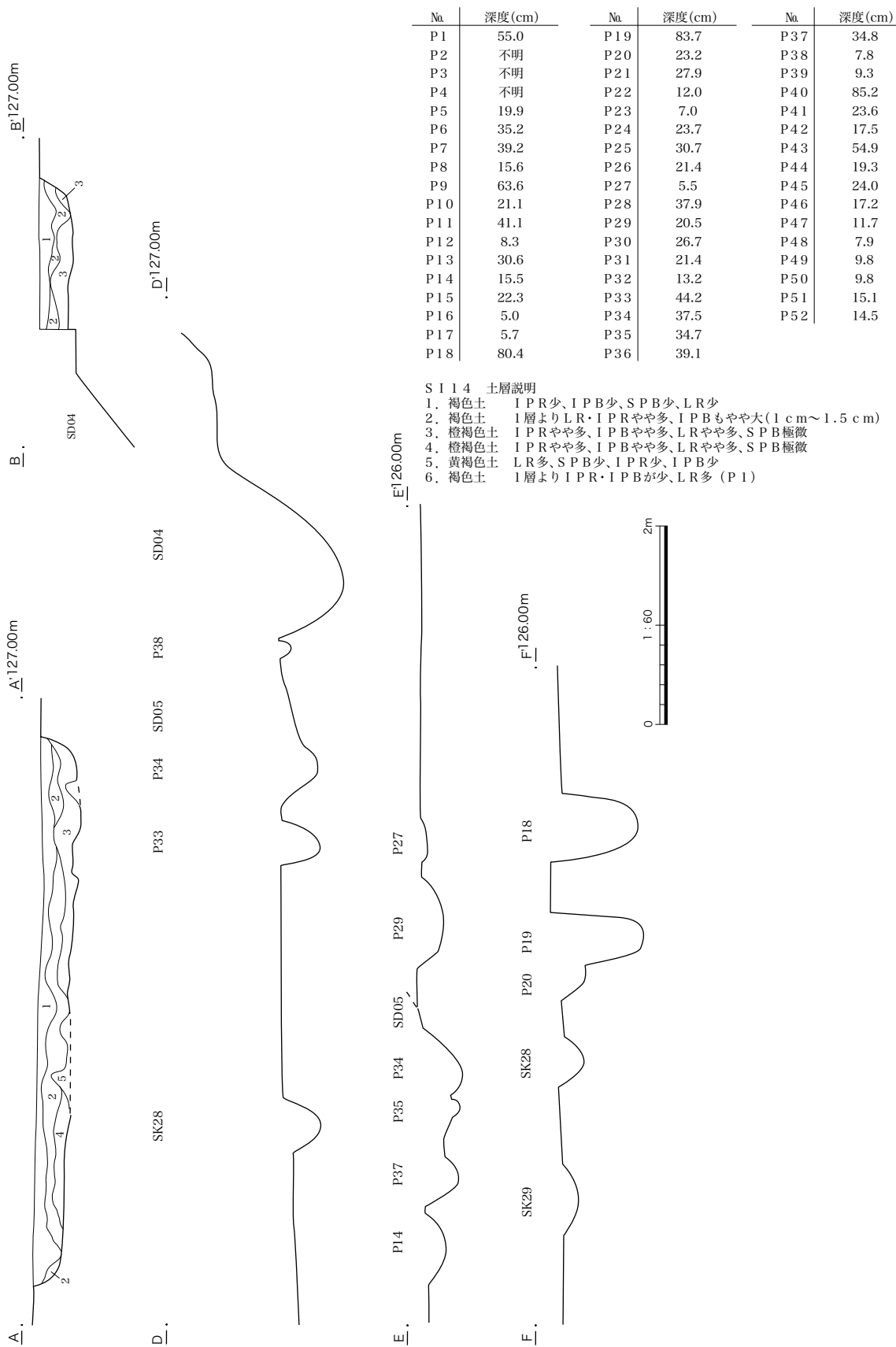
第141～144図にはイ6I7グリッド出土の破片資料を示す。第141図1～3は中期の資料で、突起部の1内面には爪形文がある。4以下が後期安行式及び瘤付系の資料である。7.10.11.15等は南関東安行1式と類似する質感と認められる一方、4.5.9等は異質な感がある。30以下に瘤付系を示すが、34などは瘤付系としても問題がある。40は堅い原体または擬縄紋例、45は壺または注口土器である。

第142図1～11は安行3a式～同3c式及び対比される土器群、12～24は粗製土器紐線文系、25～44は刺突文や沈線の特徴とする分類A群とした土器群、45以下が大洞式である。典型的な安行3c式・3d式はないが、38.39等は近い様相も見受けられる。大洞式ではこれまでの資料同様、大洞B2式や羊歯状文施文の大洞B-C式では沈線後の入念なミガキ調整が観察され、総じて丁寧な感を受ける。

第143図は大洞C1式、同C2式をまとめる。口縁下に無文帯を設ける大洞C2式中段階以降も多いが、他の遺構やグリッドと比べて大洞C2式の古相を示す資料がやや多いかもしれない。27は壺?の体部下方で、これより上位に大洞式文様が展開するようである。28は屈曲部の眼鏡状隆帯下に描かれる雲形文変化の文様が注目される資料である。42以下に壺を示すが、形態や口縁端部の装飾、体部文様など多様である。第144図1～14には大洞式系の鉢、装飾性の弱い深鉢、刺突列を特徴とする土器群などを示す。15～18は条線文の土器で主に後期後半となろう。19以下には体部無文で口縁装飾や文様のある土器、付帯口縁の土器、突起などを有する無文の鉢等を示す。注目される資料もあるが観察記録は省略せざるを得ない。



第145図 S114(1)



第146図 S I 1 4(2)

S I 1 4 (遺構第 145・146 図、遺物第 147～174 図)

位置・経緯 集落内東部で、遺構集中域外縁の遺構が散漫な区域にかかる位置となる。本跡より東側は土坑の分布が薄くある程度で、遺構は散漫な分布となる。I5I9・I6I9、I5J0、I6J0 グリッドに位置する。北西 1 m に SI01、南 4 m に SI02 が位置する。本住居跡と重複して SD04.05 があり、住居跡を壊している。西 2 m には SD01 がある。地形的には台地平坦面であるが、緩やかに西側に傾斜している。北西側の SI01 で捉えたピットの中には本跡に関わるものがあることも想定されることから、一部併せて示した。

調査時は東側の半円状掘り込みに対してのみ遺構扱いとされていたようだが、溝 SD04.05 を挟んだ西側でもピットがやや多く確認されていることから、これらを含めた範囲で示す。

形態・規模 東側の掘り込みと西側の点線で示した推定ラインのうち東側のライン (P18 や SK28 を壁際のピットと推定) とを繋げて推定する楕円形の住居形態をプラン B とする。この場合の規模は 9.43 m × 7.45 m、軸は N-7° -W となる。西側の壁をこれより外側の点線ライン (P6～P9 を壁柱穴列と推定) で推定する楕円形の住居形態をプラン A とする。この場合の規模は 11.18 m × 8.2 m、軸は N-2° -E となる。上記 2 案とは別に、東側の掘り込みプランを考慮せず、ピットが集中する範囲で考えた円形の住居形態案 (P40.P10～P13 の弧状のピット列を考慮した案) をプラン C とする。この場合の規模は径 7.3 m 程度となる。以上の形態案については柱穴配置の説明で再度触れる。

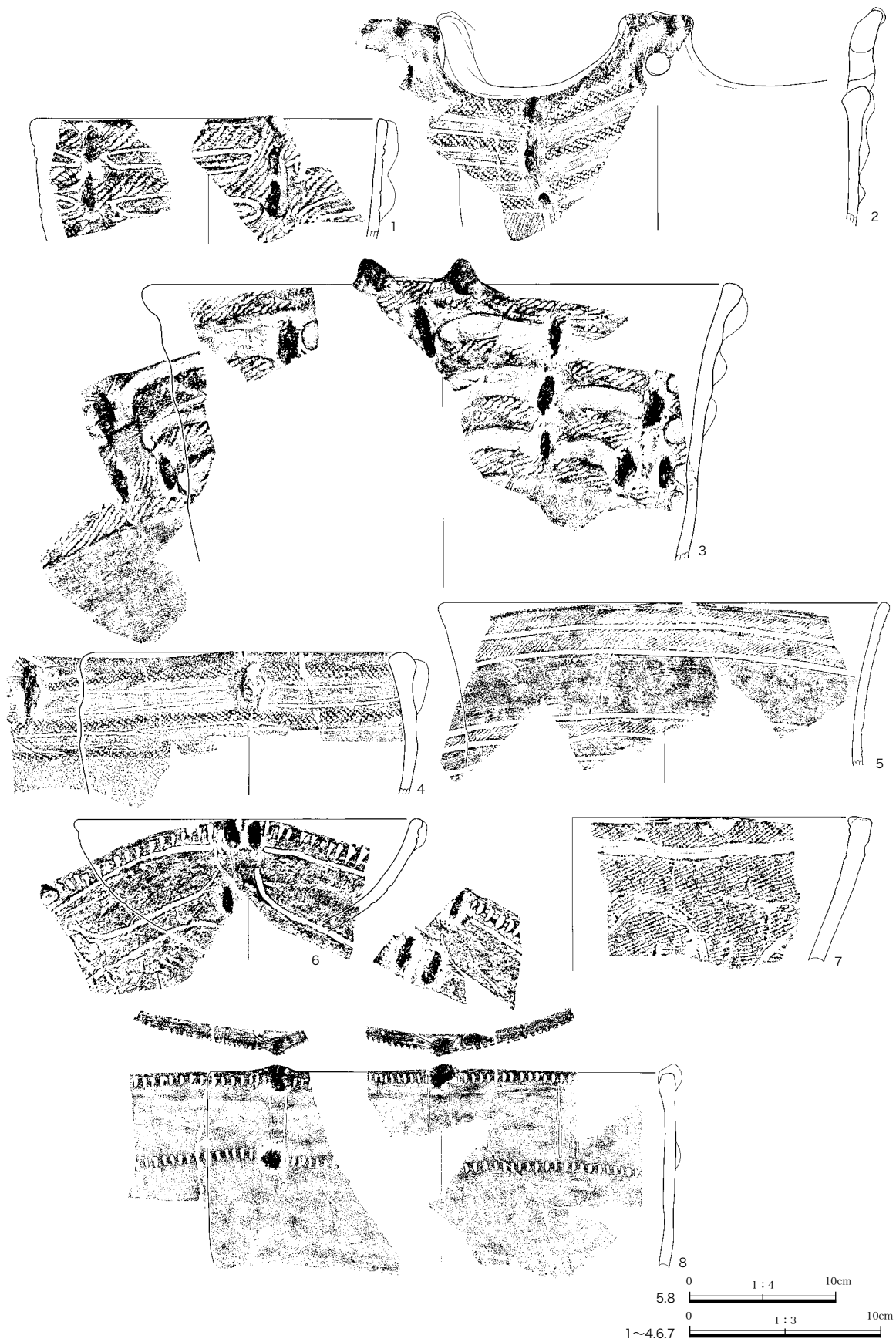
東側の掘り込み 東側の掘り込みは黒色土～ローム漸移層で確認され、地山より黒味の強い部分を覆土して掘り下げられている。壁は黒色土～ローム漸移層、床面はローム層のようである。壁は比較的急角度で立ち上がり、床面は概ね平坦なようである。但し A-A' の南北セクションでは床面の凹凸が記録されている。

掘り込みの住居跡覆土は 5 層に分けられ、注記では褐色土基調のように記されるが、写真を見る限りでは壁際以外黒味が強い色調を呈し、さほどローム粒や今市パミスなどを含まない特徴が見られる。3・4 層等は地山ローム層である疑いも残るが、判断は困難である。

ピット・住居形態 東側の掘り込み範囲内で 4 基のピットがあり、うち P1 は深く良好な柱穴状である。写真では P2 の西側に浅いピットが掘られているが、平面図記録は無く、ここでも示していない。西側の範囲まで含めると深さの判明する 49 基、それ以外 (細いピットが多い) で 20 基程度ある。ピット扱いの内 17 基が 30 cm を超える深さを有し、それらは概して平面規模もやや大きめのものが多い。ピットの中には平面規模の長径が 70 cm を超えるような例もある。SK 扱いとした穴の中には柱穴とも推定できる例があると共に、逆にピット扱いながら柱穴とは考えにくい例もある。形態や位置から入口ピット群を推定できる例は抽出し得なかったが、P18.P19 周辺の集中や P14.P34～37 の集中は多少の可能性を残す。

SD04・05 西側のピット検出面は、最終的に掘り込みの床面より 60 cm 程度低い位置で調査している。ここではピットも含め上位の層の観察がされておらず、東側の掘り込みプランと同一遺構と捉えることにも問題は多い。なおピット計測値はそれぞれの確認面からの標高差で示している。

再度プランとの関係を示すと、A は P5.P8～P14 の並びに、SI01P24.P27.P26 等も含めて壁柱穴を構成すると考えた案である。B 案は P18～P20、SK28、P10～P14 の並びに SI01P29 を含め壁柱穴列を考えた案、C 案は P15-P6-P40-P45-P46-P48-P49-P14-P38-P26-SI01P29 と円周上に並ぶ壁柱穴列を想定する案である。C 案では P39.P41.P45 を考慮してやや隅丸方形に近い形態を推定する案もあるかもしれない。問題は P18.P19 等 80 cm を超える深さのものがあることで、これらを支柱穴とする案も検討したが整合的な形態案を示し得ない。またエレベーション E-E' ラインや F-F' ラインで示した直線的なピット列なども気にかかるところで、掘立柱建物跡案も含め検討したが、適当な建物跡復元には至らなかった。



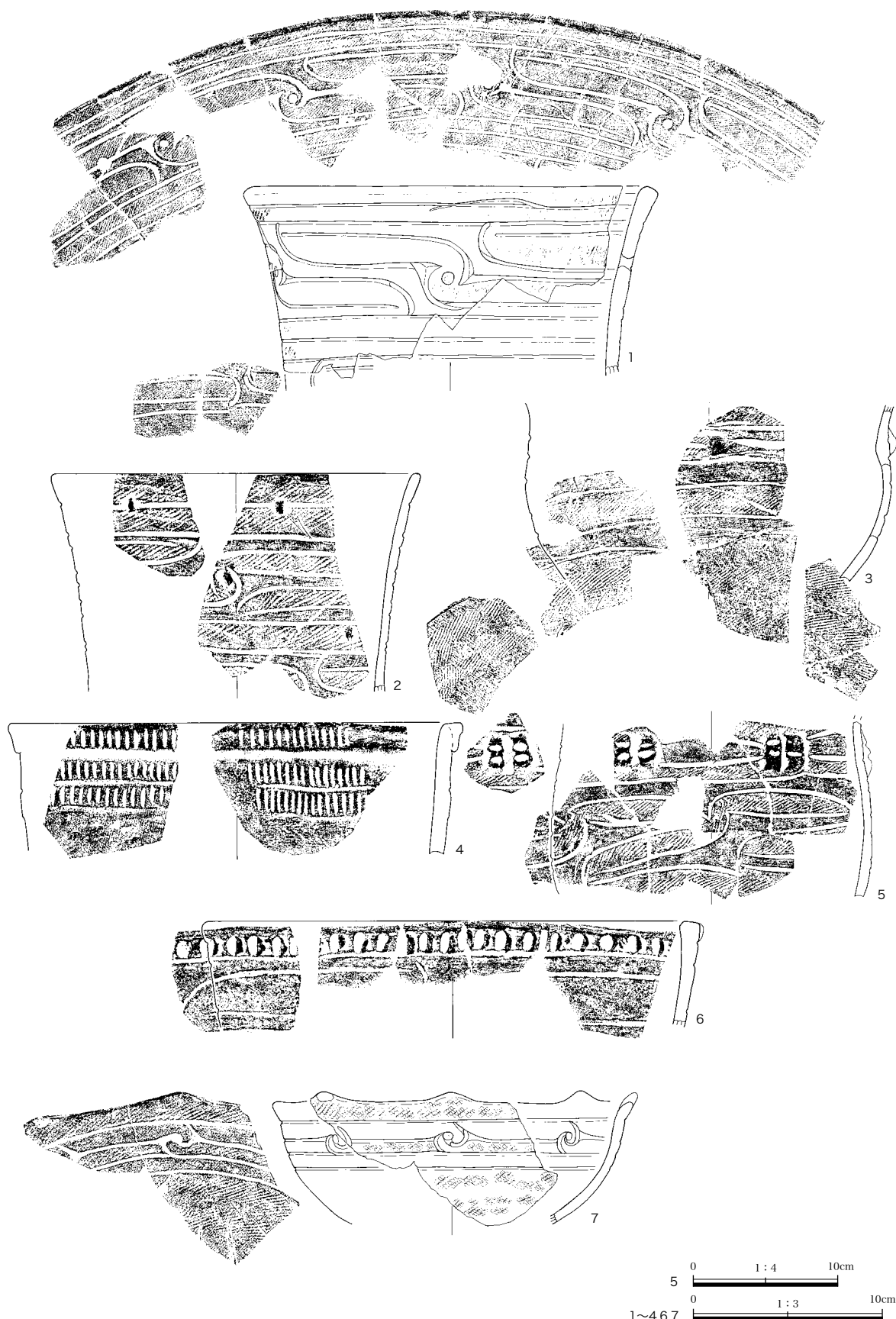
第147図 S114出土土器(1) [1619]

遺物 SI14 で取り上げた土器は確認できない。写真では土器小片の出土が見られるが、遺物出土状態図記録が無く不明である。ここでは当該グリッド包含層の出土資料を示す。北側がメインのI6I9グリッドで14個体、I6J0グリッドで30個体の復元土器がある。I6J0グリッドでは後期後半安行1式、瘤付系第3段階が目立つ。I6I9グリッドでは幅があるが、後期末～晩期初頭、大洞C1式等がある。後期後半がやや多い傾向にあるかもしれない。個別の出土位置・レベルは確認しておらず、住居範囲外包含層出土の土器も多いことが想定され、あくまで参考例として示す。I6J0グリッドでは一部SI02にかかる位置となることも注意される。石器では石鏃が17点、打製石斧が40点、磨製石斧が13点、磨石類が23点、石錘が31点である。

I6I9グリッド出土土器を第147～155図に、I6J0グリッド出土資料を第156～174図に示す。

第147図1は安行1式平縁深鉢で、隆線・突起作出→沈線・条線→縄紋RLの順が観察される。口縁端部の一部に煤が付着している。内面ミガキ調整、胎土には白色粒をやや多く含み、色調は内外面暗赤褐色を呈する。2は安行1式波状縁深鉢の口縁部で、隆線・沈線→縄紋RL→無文部ミガキが観察される。胎土には白色粒を少量含み、色調は外面黒褐色、内面暗赤褐色を呈する。質感は南関東安行1式と大きな差異は見られない。3は調査区内出土資料など、やや広い範囲にわたる出土例とも接合或いは同一個体が判明したもので、低平な隆帯とその間のナデ状～凹線状の沈線相当部が特徴的なものである。凹線作出時の粘土が縄紋Lにかかっていることから、縄紋が先行もしくは凹線部をなぞっているとみられる。縄紋は瘤にもかかる。内面はへら状工具によるナデ～ミガキ調整で、胎土には石英や白色粒を多く含み、色調は褐色～暗褐色を呈する。4は安行1式平縁深鉢で、頸部以下の文様は省略されている例かもしれない。5は瘤付系の土器だが、瘤や刻みなどの単位が見られないものである。6はやや異質な土器で、2個1対の縦長瘤を起点に、横位線・弧線により文様が描かれる鉢である。沈線→刺突で、やや雑な施文である。胎土には白色粒を多量に含み、色調は褐灰色を呈する。7は地縄紋LR上に沈線で文様が描かれるものである。互連弧線文となる可能性もあるが良く分からない。内面は粗いミガキ調整、胎土には石英及び白色粒を多量に含む。

第148図1は口縁が外反気味に立ち上がる深鉢の上半で、頸部より上位は70～80%遺存している。下方は欠失しているが、拓影で示した1片が同一個体の体部と判断する。体部にも1段の入組文が展開する土器となろう。文様は沈線→縄紋無節L→無文部ミガキの順である。ミガキは比較的丁寧である。玉抱三叉文の三叉部は若干深い抉り込み状である。原則階段状入組文内部に縄紋が充填されるが、1単位のみ無文のままのところがあり、また頸部の縄紋帯も縄紋が施されないところがある。口縁直下の帯状部も縄紋が施されるところと無文部があり、本来磨き消すべきところで、縄紋が残されているのかもしれない。内面はミガキ調整で、全体に丁寧な作りという印象を受ける。胎土には白色粒多量、白色針状粒やや多量、石英・雲母やや少量含み、色調は外面灰褐色、内面にぶい褐色を呈する。1箇所焼成後穿孔があり、補修孔であろう。2は大形破片から推定復元した瘤付系の深鉢で、沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順で文様が表される。入組部などに付される瘤は小さめの貼り瘤である。3は深鉢の体部で、帯状部縄紋充填の表現である。4は一定の範囲に沈線＋刻みが付されるもので、空間をあけてこのような単位が連続するようである。型式判断が難しく、瘤付系として良いかも疑問だが、刻みの手法はやや類似しているように思える。5は屈曲の弱い区画部分から体部下方の破片で、階段状入組文が二段確認できるものである。6は沈線及び口縁直下の刺突が確認されるものだが、頸部文様は遺存が悪く不明な点が多い。刺突は円形～楕円形で、右側に粘土はみ出しが残る手法の刺突である。沈線後の無文部ミガキは比較的丁寧である。色調は黒褐色を呈する。7は浅鉢の破片で沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順が観察される。縄紋はやや浅く不鮮明なところもある。内面のミガキは丁寧である。胎土は緻密で鈹物が少ないが、角閃石を少量含む。色調は内外面黒褐色を呈する。



第148図 S114出土土器(2) [1619]

第149図1は大洞式壺肩部の破片で、羊歯状文変化の文様が描かれる。上段・下段ともやや丸味を帯びた刺突での表現である。2はやや内湾する体部に沈線→縄紋RL→無文部ミガキ、沈線→刺突により文様が描かれる。比較的丁寧な施文で一部浮彫状である。沈線はやや太めで、口縁下の二溝間の点列はやや丸味がある。内面はミガキ調整。胎土には石英・白色粒を多量、雲母を少量を含み、色調は内外面にぶい黄褐色基調だが黒変部分も多い。外面の比較的広い範囲に煤が付着している。内外面とも器面が荒れており、アバタ状の剥落部もやや多く観察できる。3は平縁深鉢で、頸部に対向弧線文が描かれるものである。やや上位に突出する瘤を起点に文様が展開するもので、沈線→縄紋RL→無文部ミガキの順が観察される。沈線はやや太く浅めな感がある。胎土には白色粒・石英を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。4は壺の口縁部破片で、受け口状の口端部が特徴となる。頸部無文部のミガキは丁寧である。6は肩部分に文様が描かれる広口壺状の土器である。文様構成は遺存が悪く、良く分からない。5.7は無文の鉢、8は低い台の付く底部で、接地面に網代圧痕がある。

第150図には紐線文系の土器や無文土器などの「粗製土器」をまとめた。1は隆線貼付の紐線文系土器で、口頸部間を結ぶ隆線も一部認められる。文様はやや粗いナデ→条線→紐線貼付→紐線上押捺の順で描かれる。条線は浅く、隆線は低い。内面はミガキ調整で、胎土には白色粒を多量、石英を少量含み、色調は外面褐色、内面暗褐色を呈する。2は口縁直下に押捺状の刺突が巡る土器で、頸部無文部は粗いミガキ～ナデ調整である。3は最上段積み上げが厚く、若干内湾気味に作られているもので、体部外面の調整はケズリに近いミガキである。4は無文の深鉢で肥厚する口縁部に押捺痕跡が巡るものである。押捺が殆ど認められない部分もあり、どの程度装飾効果を意図して付されたものかは不明である。外面のミガキ調整は、口頸部横方向、体部縦方向を基本とするようである。5は底部資料だが、拓影で示したように、1回作った底部外縁に粘土を継ぎ足しているものである。底部形態自体はより不整となった感があるが、補強を目的としたものであろうか。外面側は丁寧になでられ、痕跡はほぼ残らない。色調はにぶい赤褐色を呈する。6はあまり遺存良くないが、紐線文系に近い器形や口縁部装飾ながら体部条線の土器である。条線はやや疎らな間隔で、曲線的にやや下方まで施される。7.9は無文部分の体部下方～底部、8は無文鉢で内外面ナデ～ケズリ調整を基調とし、口縁近くはミガキ調整が観察される土器である。

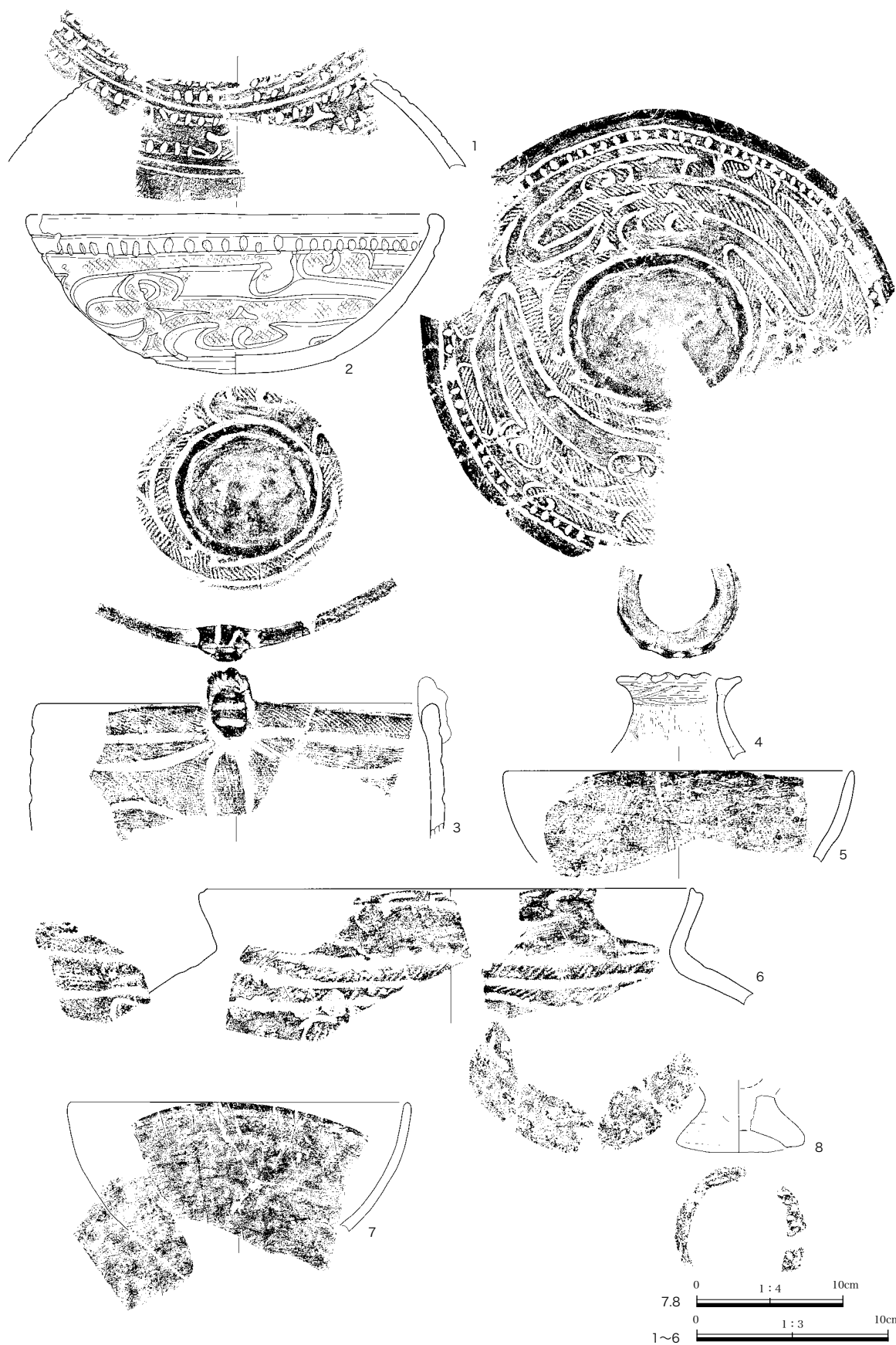
第151～155図には46I9グリッド出土の破片資料をまとめる。第151図1.2は早期の資料で、2では繊維を少量含む。3～5は中期阿玉台式終末～加曾利E I式期の資料、6以下が後期後半以降の破片である。9～15のような安行2式波状縁深鉢が目立っている。20等は晩期以降の可能性がある。以下39までに体部破片や台付鉢等を示す。40～46は安行3 a式・同3 b式であろう。

第152図には瘤付系の資料をまとめた。3.4.9.12のように安行1式との中間的な様相を示すものも比較的多い。18はやや異質なもので、隆起帯上刻み、隆起帯間凹線、頸部の曲線的な文様が特徴的である。23以下には第3段階に特徴的な刻み手法の資料、縄紋充填の入組文表現例、体部破片等を示す。

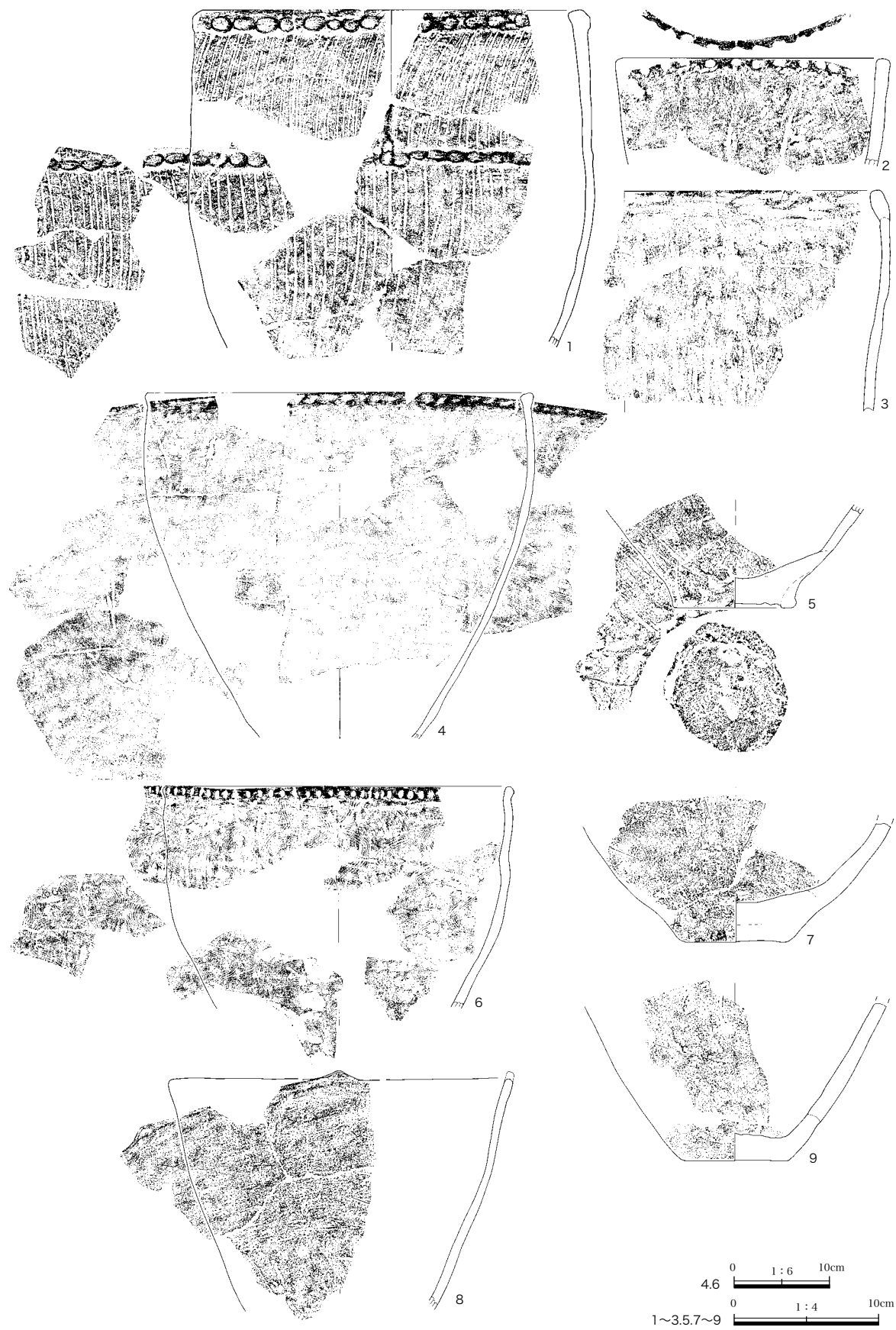
第153図1～11も瘤付系土器群で、6以下は壺・注口土器など深鉢以外の器種が想定されるものを示す。12～31は紐線文系土器で附点系、隆線系の別があり、後者では頸部に斜線や垂下線などの文様を描いているものもやや目立つ(27.29.31等)。34以下は刺突及び沈線により文様を描くもので、変異に富んでいる。39は先端鋭角な工具による刺突列で弧線文様を描いており、かなり異質な土器である。41も波状～鋸歯状文様を浅い沈線で表現しており、例を見ない。46～49は太い沈線の特徴とする前浦式である。

第154図には大洞式系をまとめた。配列では型式・器種等の区別を徹底していないが、概ねの変遷を考慮している。26～32は注口土器または壺である。33以降主に大洞C2式の鉢・深鉢を示すが、39の器形や41など気にかかる例がある。57.58の体部破片も特異な文様が描かれており、器種・型式等不明である。

(→P180)



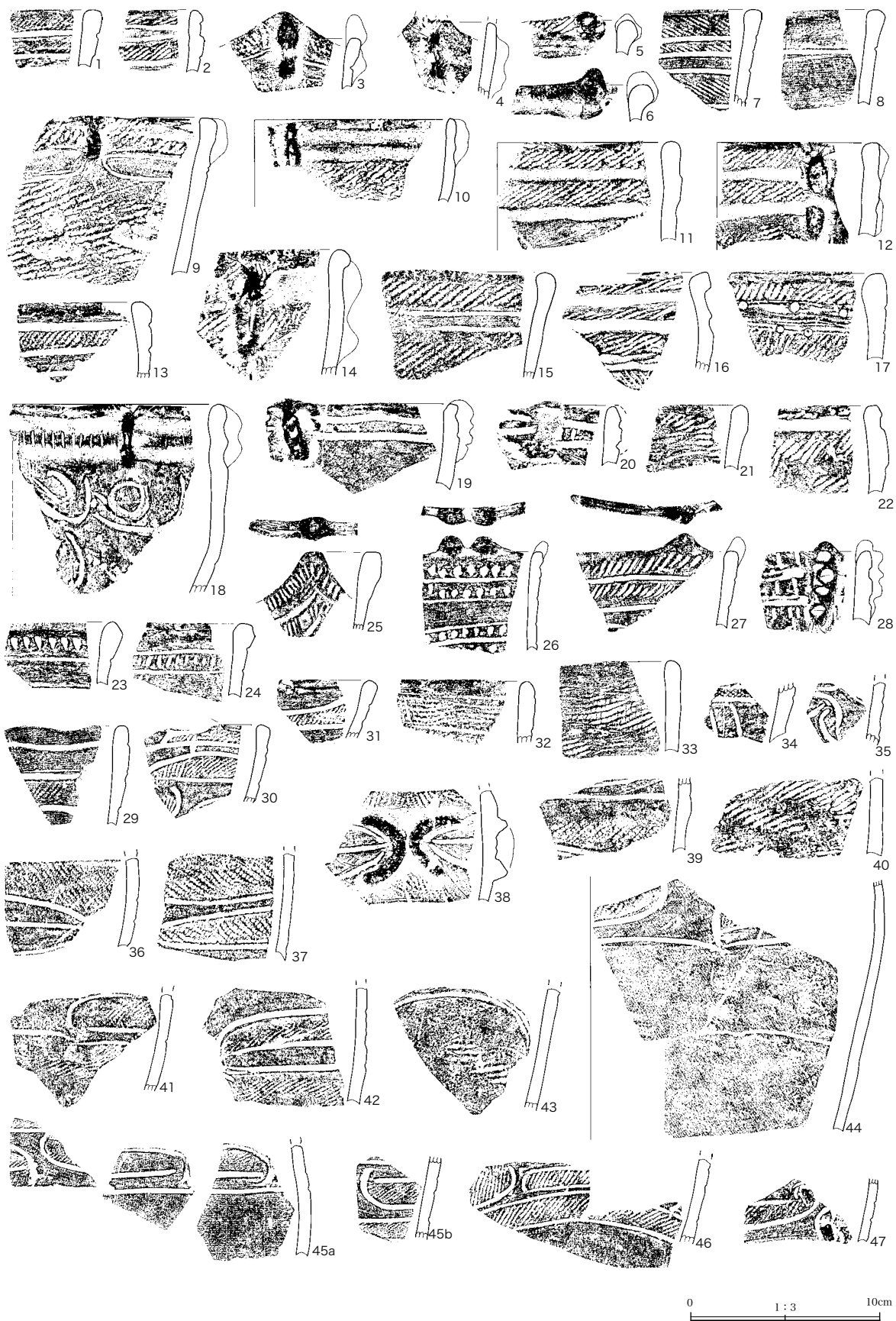
第149図 S114出土土器(3) [1619]



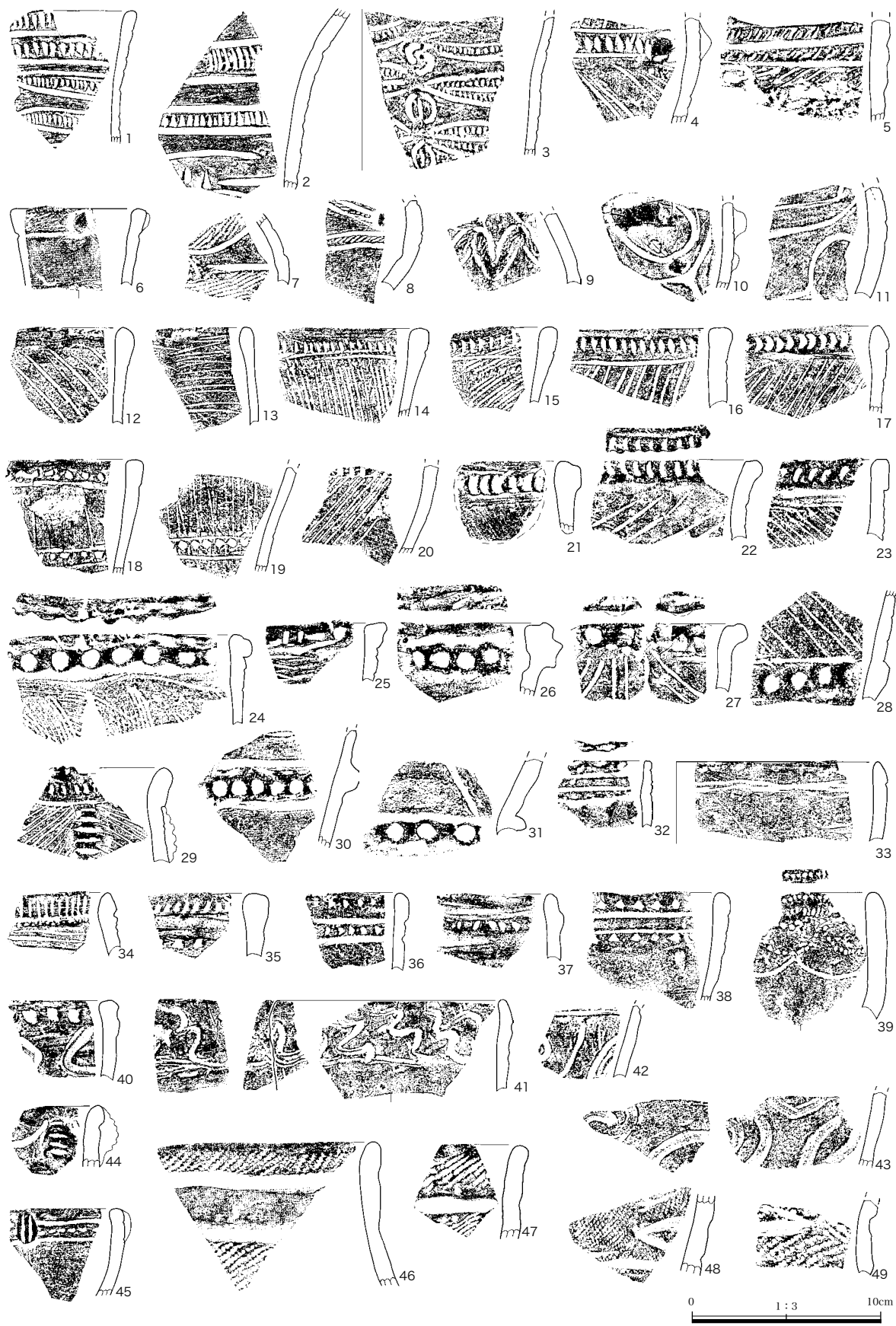
第150図 S114出土土器(4) [1619]



第151圖 S114出土土器(5) [1619]



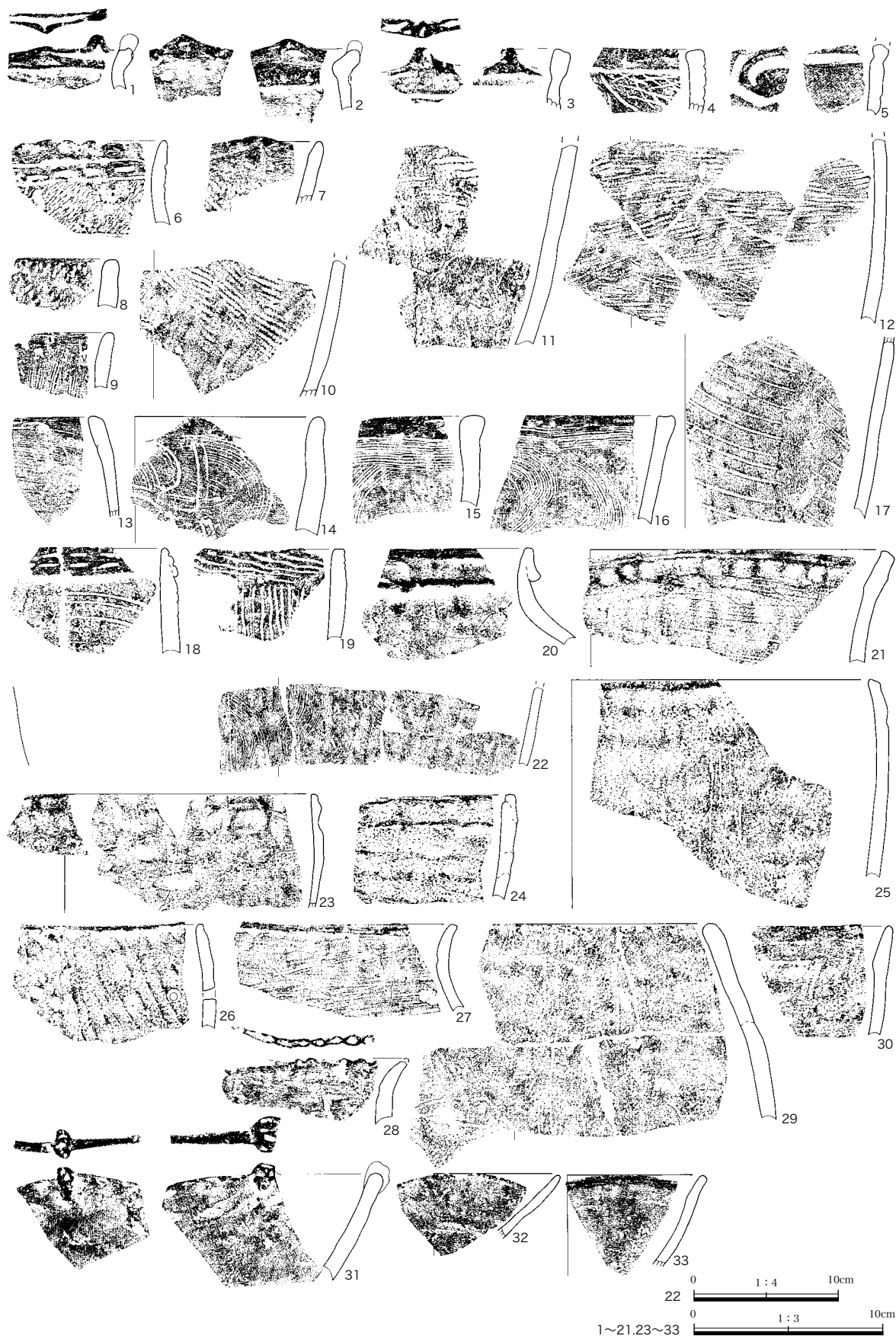
第152図 S114出土土器(6) [1619]



第 153 図 S I I 4 出土土器 (7) [1619]



第154図 S114出土土器(8) [1619]



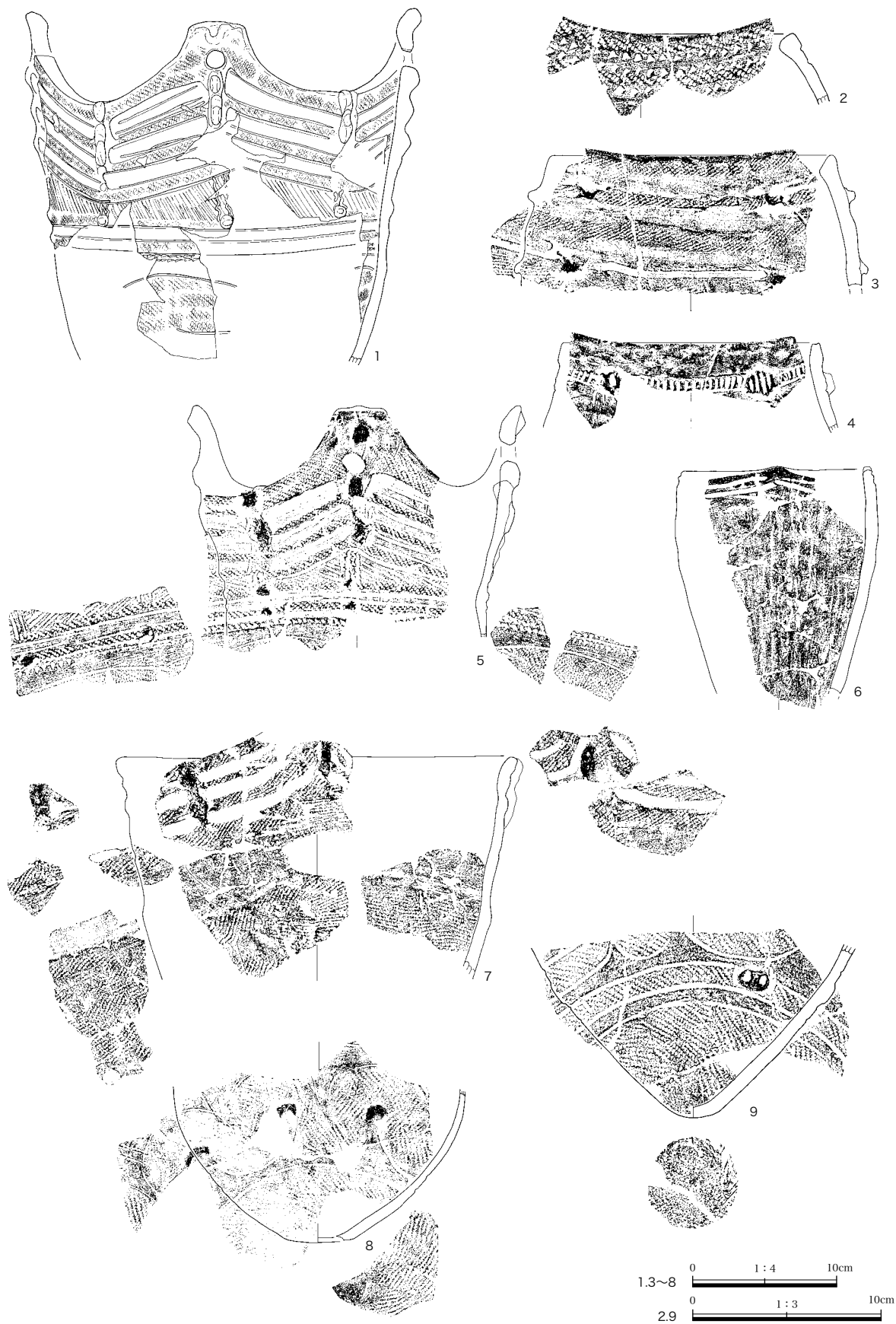
第155図 S I I 4出土土器(9) [1619]

第155図1～6は大洞式系または大洞式変容の土器群、7～12が縄紋施紋のみ確認できるもの、13～16が条線施紋のものである。18～20は付帯口縁の土器で多様性が窺える。22～30が無文の深鉢、31～33は体部無文の鉢である。

第156～174図にはI6JOグリッド出土資料を示すが、出土量は多く、ここでも復元個体も含め、多くの資料提示となる。後期後半がかなり多い点は注目される。

第156図1は安行1式波状縁深鉢で、さほど遺存は良くないが、概ねの器形・構成を明らかにできるものである。隆線・沈線→縄紋RL→無文部ミガキで文様が描かれる。頸部の沈線は条線施文後である。胎土には石英及び白色粒を含み、色調はにぶい赤褐色を呈する。色調・質感は南関東出土例と類似している。2は瓢形の深鉢で、隆起帯縄紋と刺突列の組合せによるもので、注口土器の可能性がある。3も瓢形の平縁深鉢で、横位に周回する縄紋帯状部、一定間隔で瘤が配される縄紋帯及び無文帯が交互的に描かれている。単位性が希薄な点は瘤付系土器群との関係を窺わせる。内面はミガキ調整で、胎土には白色粒を少量含み、色調はにぶい黄橙色を基調とする。4は内傾する深鉢の口縁部破片だが、遺存部分少なく全体の構成は不明である。後期安行式を主とする図版中の提示だが、晩期に入る可能性がある。刺突は比較的深く先端やや鋭角な工具による施文である。5は安行1式波状縁深鉢で、条線→沈線、隆帯・瘤・沈線→縄紋RL・刺突により文様が描かれる。体部の遺存はあまり良くないが、交互連弧上位の弧線文は確認される。胎土には白色粒をやや多く含み、色調はにぶい赤褐色～黒褐色を呈する。6は体部無文の小形深鉢で、粗い研磨調整（線状痕残す調整）→口縁の沈線→口縁直下一部ミガキが観察される。胎土には白色粒を多く含むほか、雲母・角閃石を少量含む。色調は外面灰赤褐色、内面暗赤灰褐色を呈する。7は波状縁深鉢の破片群から器形復元したものである。接合率は良好ではなく不明な点も残るが、概ね口縁部の文様構成は明らかとなる。凹線状の沈線が瘤を繋ぐように施されるが、安行1式の典型的な隆起帯縄紋/ミガキの無文帯とはかなり異なる表現法である。体部は縄紋のみのようで、ややランダムな方向の施紋である。内面ナデ～ケズリ、胎土には白色粒・石英・角閃石を多く含み、色調は暗赤褐色を呈する。9は安行式深鉢の体部下方～底部で、沈線→縄紋RL→ミガキが観察される。底部は丸底に近く、やや擦れたような痕跡も観察される。内面ナデ～粗いミガキ、色調は内外面にぶい赤褐色～暗赤褐色を呈する。遺存部分少なく不詳だが、体部文様が典型例とは異なる可能性がある。

第157図1は現存高30.2cmとやや大形の平縁深鉢で、文様は口縁部付近に限られる。縄紋LRは平板な器面上、ケズリ～研磨調整の上に施され、縄紋帯間が凹むことはなく、安行式的な手法によっていない。ただし、縄紋帯脇はミガキが加えられやや整えられる。縦長の瘤突起は中央が凹む形態で、一部縄紋が覆う。頸部～体部はケズリ状の粗い調整痕を残す。内面はナデ～研磨調整。胎土には白色粒・石英を多く含み、色調は外面赤褐色～にぶい橙色、内面はにぶい黄橙色である。2はやや細長い器体に復元された安行式平縁深鉢である。内面ケズリ～研磨調整（砂粒移動痕を顕著に認める調整）、外面もほぼ同様の調整で、沈線施文後は一部のミガキ調整に留まる。下方は特に粗い調整のままである。外面にぶい橙色、内面にぶい黄褐色を呈する。胎土には白色粒多量、角閃石・石英をやや多く含む。3は平縁深鉢で口縁は概ね全周遺存するが、体部は欠損している。拓影及び上面を含む拓影は1/8で示した。縦二連の刺突が加わる縦長瘤状突起が3単位、これを結ぶように沈線二条が描かれる。沈線は凹線状で口縁の歪みも含め雑な印象を受ける。内面ミガキ調整、胎土には白色粒・灰色粒を多量に含み、色調はにぶい黄橙色、内面にぶい赤褐色を呈する。4は隆起帯縄紋に瘤の貼付があるもので、器体の観察や縦方向に垂下する隆起帯等から「角底土器」と推定される。5は隆起帯縄紋の浅鉢で、赤味を帯びた色調、質感などからも南関東安行1式と類似している。6は口頸部に磨消縄文による文様のある浅鉢である。沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順で、瘤付系の入組文変化の文様が単位文配置的に



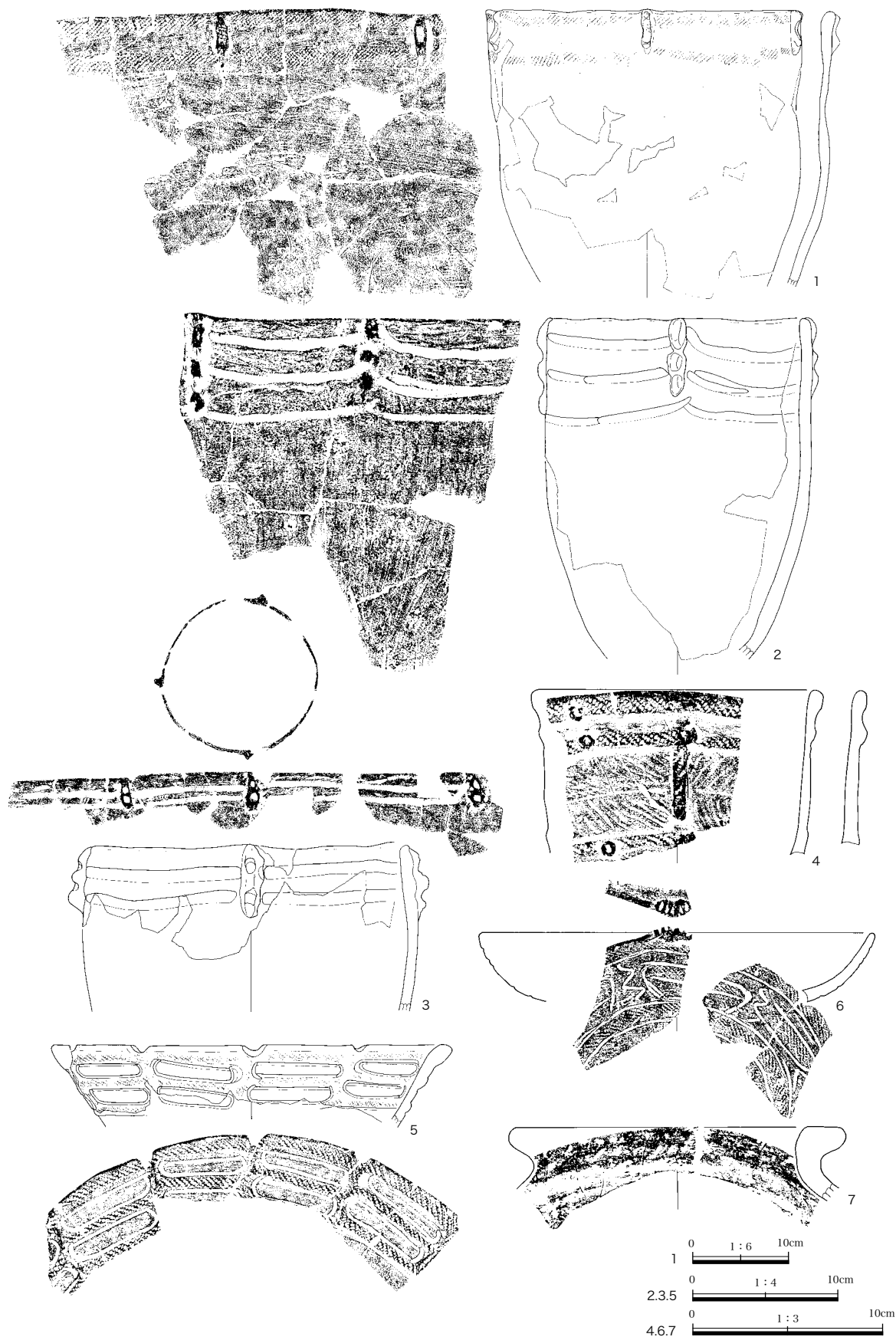
第156図 S114出土土器(10) [16J0]

描かれる。安行2式と推定するが、やや珍しいもので注目される。7は当初脚部と考えたが、角度などから口縁に変更したものである。但し広口壺状の器形とするにはかなり異質であり、端部の調整痕跡等も含め考え、湾曲の強い台付脚部とした方が良いかもしれない。

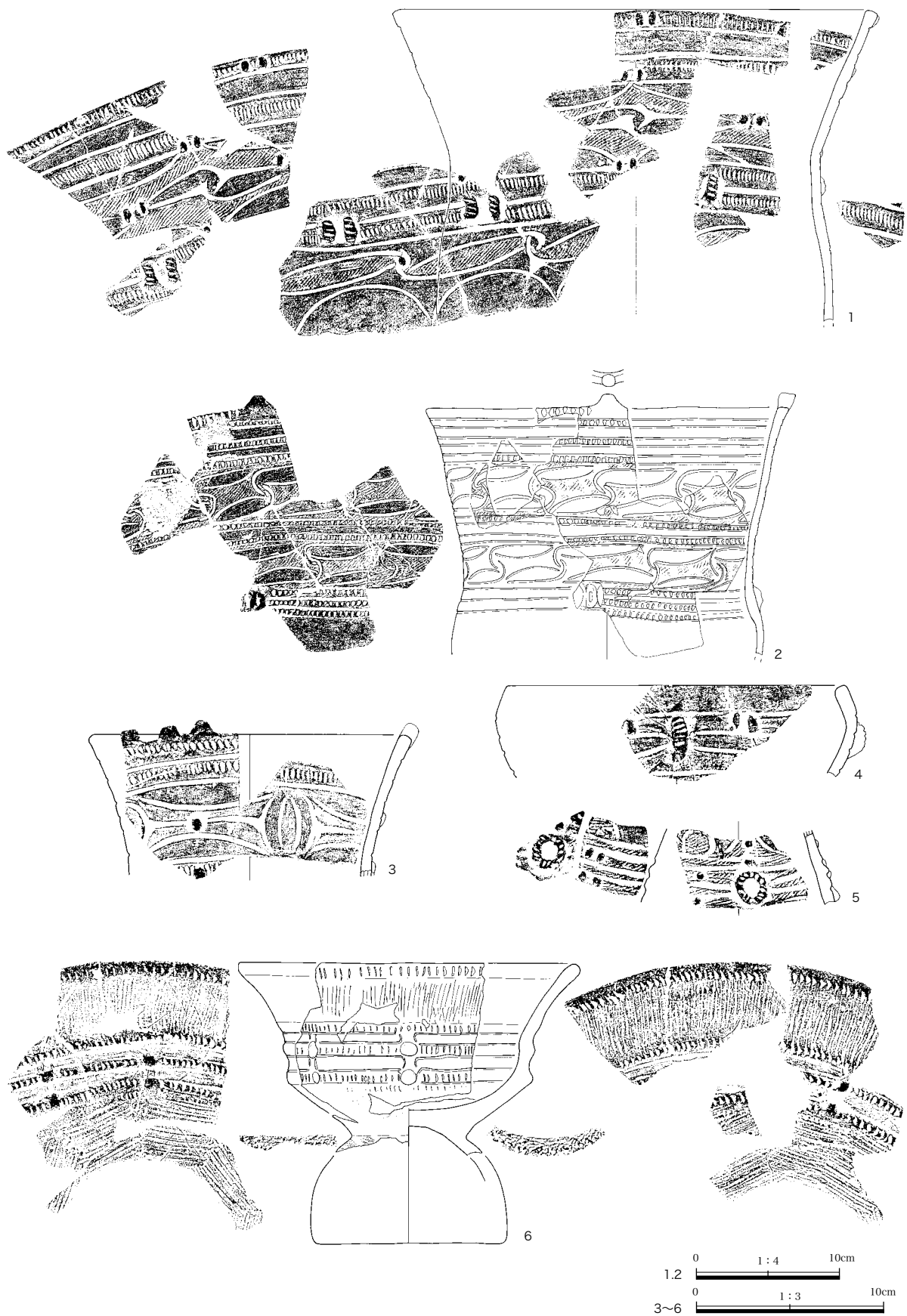
第158図1は瘤付系の深鉢で、接合やや思わしくないが、文様構成にも注意しながら拓影を配置した。沈線→縄紋LR→瘤貼付・無文部ミガキ、沈線→刻み→瘤貼付が確認される。胎土には白色粒を多く含むほか、白色針状粒を少量含む。内面はミガキ調整で、色調は内外面とも黒褐色を呈する。2も1と近い形態の深鉢で、遺存はさほど良くないが可能な限りの推定復元をした。沈線→縄紋LR→刺突→ミガキを基本として文様が描かれる。縄紋は刻文帯となるところにも施されている部分が多く、総じて浅い施文で節が細かい。体部刻文帯に跨って付される大きめの瘤には細長い刺突が加えられる。胎土は緻密硬質な感があり、鉱物も白色粒を少量、角閃石を微量含む程度である。色調は内外面黒褐色を呈する。3は口頸部～体部上半の破片で、文様描出法とともに、無文部や内面の丁寧なミガキ、硬質緻密な質感の胎土など、丁寧な作りが窺える土器である。頸部文様は粗い調整のままの部分とミガキ調整部分との対比的な効果が示される。4は小片で不詳だが鉢となるうか。横截痕が加わる縦長の瘤は安行式的要素である。無文部は良く磨かれている。5は壺または注口土器と推定される破片で、頸部上位にも磨消縄文文様が配されている。6はやや小形の台付鉢で、条線→刻み・刺突が観察される。接合部直下で縄紋帯がある。最下段の刻み隆起帯の直下には浅い刻み列が一部観察される。内面丁寧なミガキ調整で、胎土には白色粒多量、石英やや多量に含み、色調は外面黒褐色～にぶい褐色、内面黒褐色を呈する。

第159図1は附点紐線文系の土器で、条線→沈線→刻み→口縁部ミガキが観察される。硬質な質感など、南関東例と大きな差異は無いように見受けられる。胎土には石英・白色粒を含み、色調はにぶい褐色を呈する。2は紐線文系粗製土器だが、口頸部の幅が広めで、厚手であることも含め、若干の異質感を窺わせるものである。粗い縄紋LR?→条線→スリット状沈線→口頸部の隆線貼付→隆線上刻みの順で描かれる。内面ナデ調整、胎土中の鉱物は少なく、白色粒を少量含む程度である。色調は外面暗赤褐色、内面褐色を呈する。4の紐線文系も条線の表現などやや異質な感がある。口縁隆線貼付→押捺→沈線、頸部では条線→隆線貼付→押捺→隆線脇のナデが観察される。外面一部に煤が付着し、内面には焦げも一部観察された。胎土には石英を少量含み、色調はにぶい黄橙色を基調とする。3.5は南関東紐線文系と大きな差異は見られないものだが、5の肥厚口縁上に付される刻みは細くシャープな感があり、若干の手法上の差異もあろうか。6の小形粗製深鉢は口縁及び器体全体の歪みが目立ち、沈線や刺突もやや雑な施文である。内面の広い範囲に焦げが付着している。胎土には角閃石をやや多く含み、色調は外面褐色、内面黒褐色を呈する。7は頸部に磨消縄文文様が配されるもの、8は口縁直下で横位の条線、以下直線的な条線と弧線連続的な条線が描かれる土器である。条線は7～9条を1単位とする。内面はナデ調整、胎土には石英・角閃石を少量含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈する。9はやや接合率低く、幾つかの破片群から形態を図上復元した紐線文系粗製土器である。頸部体部の細い条線状沈線は隆線貼付後の施文で、1本描きのやや雑な施文のように見えるが、細くシャープな感はある。外面にぶい褐色～にぶい黄橙色、内面明赤褐色を呈する。

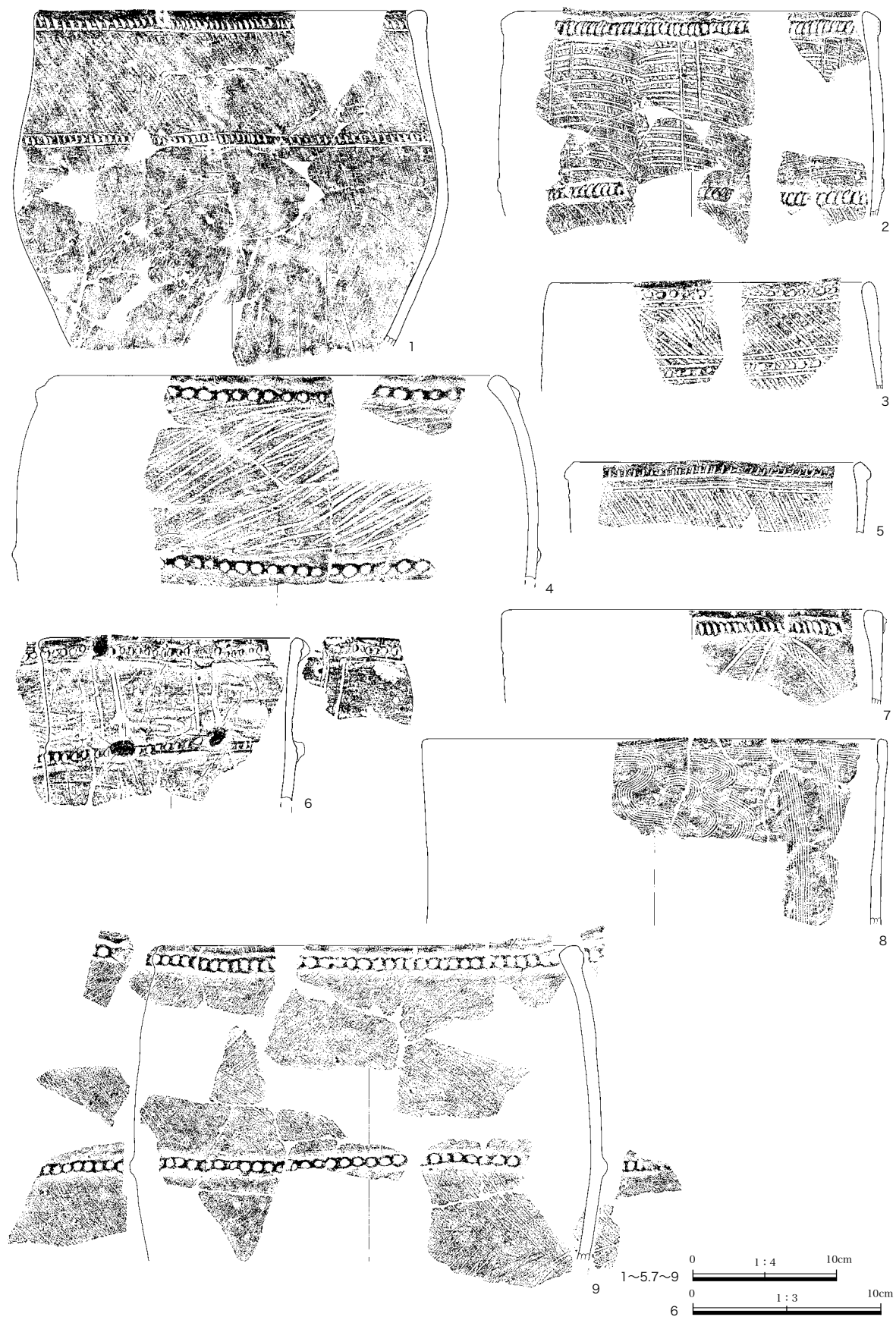
第160図1はかなり大形となる深鉢で、粗製土器紐線文系に大きくは分類できるが、かなり異質な要素が多い。外面粗い調整の上に沈線や刺突が施される。原則的に隆線・瘤貼付→刺突・刻みで、瘤間を縦につなぐスリット状の沈線は2本単位の平行沈線多截竹管状工具による施文で、沈線間がナデ状・調整状になっている。胎土には白色粒を多く含むが、全体にやや不均一に含まれているようにも見える。色調は外面にぶい黄褐色、内面にぶい褐色を呈する。2はやや小形の深鉢で、体部に3本1単位の沈線が途切れながら周回す



第157図 S114出土土器(11) [16J0]



第158図 S114出土土器(12) [16J0]



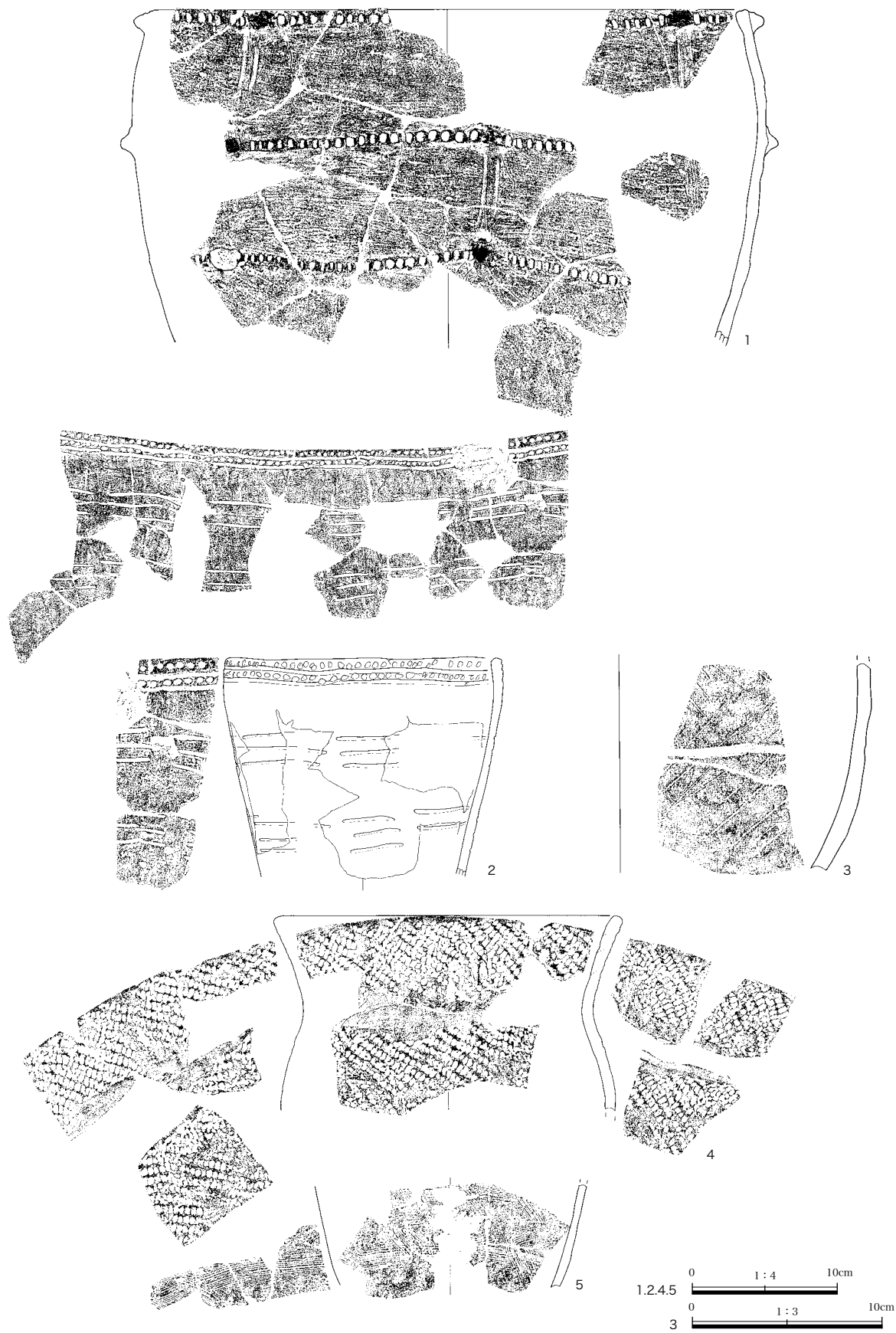
第159図 S114出土土器(13) [16J0]

る珍しい表現の例である。隣接する単位と揃うように描かれるところと、やや上下にずれて描かれるところがある。口縁の刺突列は左側がやや深くなる施文で、左→右の施文順が想定される。ナデ→沈線→刺突・一部ミガキが観察される。内面はナデ～ケズリ調整。胎土には白色粒を少量、角閃石を微量に含み、色調は外面黒褐色、内面灰黄褐色～黒褐色を呈する。4は頸部が屈曲する深鉢で、全面縄紋施紋である。粘土・器体がやや軟らかい段階での施文のようで、節の凹凸が著しいRLである。頸部は一部縄紋をナデ消している。内面もナデ調整が観察される。胎土には角閃石をやや多く含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。厚手で縄紋の特徴などから加曾利B式に遡ると推定されるが、他で殆ど加曾利B式を見ることができず、やや気がかりなところである。或いはより遡る可能性もあろうか。

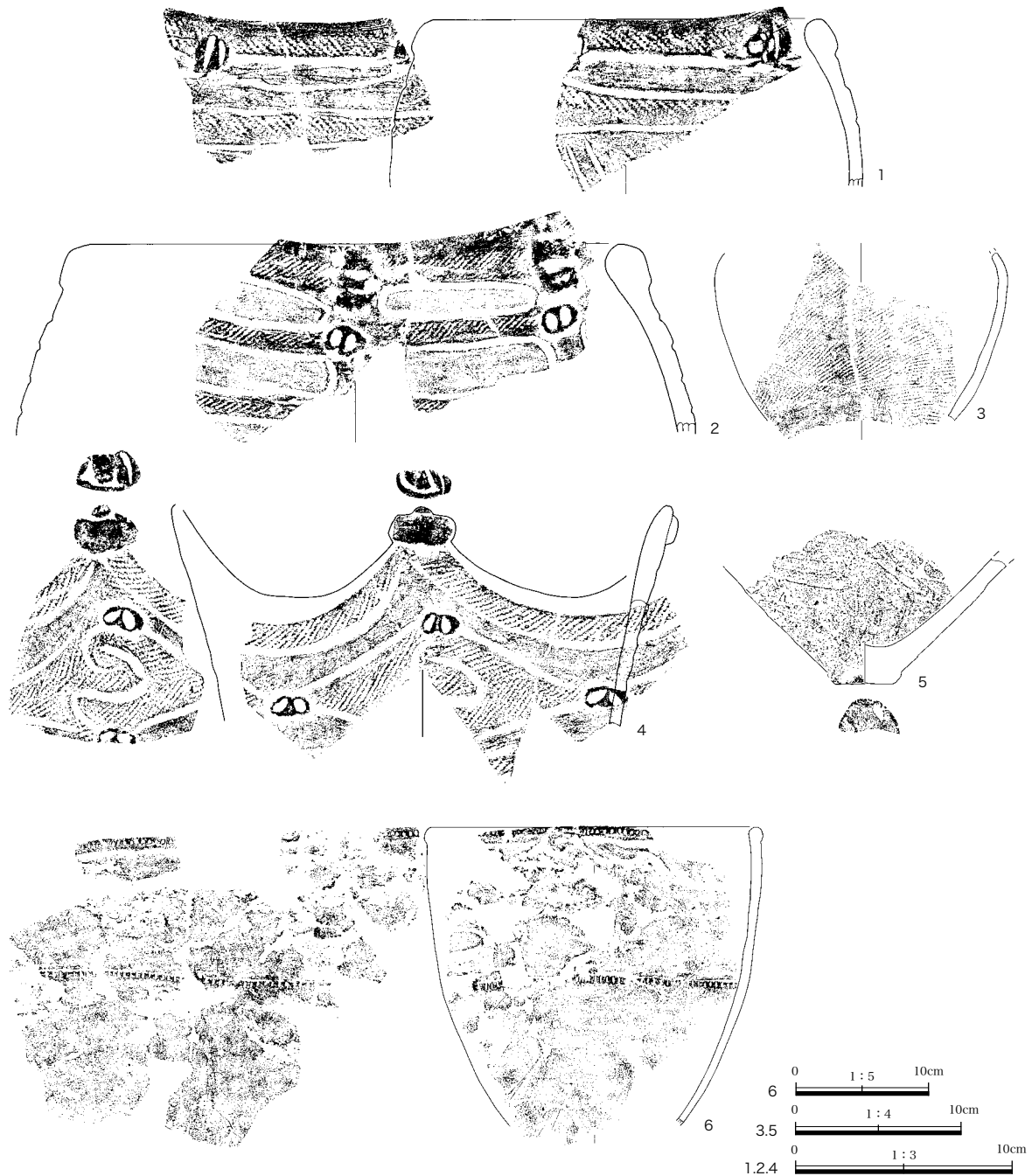
第161図1.2.4には安行3a式、同3b式、姥山Ⅱ式系を示す。3は縄紋のみ施紋のもので、大洞式系の体部かもしれない。5は無文部分の体部～底部破片。6は紐線文系粗製土器だが、器面の荒れ・剥落が目立つものである。頸部区画線がやや下方に位置していることなど、若干の違和感がある。

第162図には大洞式系の復元個体を示す。1は小形の鉢で、确实ではないが下位は台付となる可能性がある。沈線→縄紋LR→ミガキで、玉抱三叉文が描かれる口縁文様部は良く磨かれている。胎土には白色粒・角閃石をやや多く含み、色調は内外面褐灰色を呈する。2は深鉢頸部に二溝間の点列が三段重なるものである。沈線→刺突→ミガキで体部は縄紋LRに結節が加わる。内面もミガキ調整。3.4は若干高さのある鉢となろうか。頸部に羊歯状文が描かれるもので、特に4は薄手硬質な感があり、丁寧なミガキ調整も観察される。5は台付鉢または鉢の大形破片で、沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順で文様が描かれる。6は広口壺状の器形で、上位はやや遺存率が高い土器である。沈線→縄紋LR→無文部ミガキだが、ミガキは不十分かつ雑で、浮彫的な表現とはなっていない。胎土には石英・白色粒をやや多く含み、色調は外面明赤褐色、内面明褐色を呈する。7.8.10は無文の鉢・広口壺などである。9.11は大洞式系鉢で、9は比較的丁寧な施文の例でミガキも丁寧である。11はやや厚手で器面が荒れていることもあって、ミガキがやや粗い感がある。文様帯幅も狭く、文様変容はかなり著しい。12は鉢の体部下方～底部で、沈線→縄紋LR→無文部ミガキが観察される。文様構成不明ながら大洞式系としておく。内面ミガキ調整、胎土には石英・白色粒を多く含む。

第163図1は器面の荒れ・剥落が著しく文様構成不明な例である。上下も異なるかもしれない。2の壺も遺存悪く、文様構成不明である。3は複数破片から推定復元したもので、体部下方は比較的接合率も良いが、上位はあまり接合せず、器形復元も若干問題を残すかもしれない。輪積痕、指頭押捺痕、縦方向の調整線状痕を顕著に残す土器で、特に内面粗いナデ調整にとどまることから、輪積痕が良く残る。口縁端部の鋭角な削り取り状刻みも特徴的である。外面赤褐色、内面にぶい褐色基調で、胎土には白色粒・石英を多量に含む。4は遺存率のある付帯口縁深鉢で、体部はナデ～木口状工具によるケズリに近い線状痕が残る。口縁付帯部では指頭圧痕＝押捺痕跡が確認される。胎土には5～10mmの礫を含むほか、白色粒・灰色粒もやや多く含む。色調は内外面橙色を呈する。5は口縁～体部上半が比較的残りの良い深鉢で高さは44cmある。口縁下の3単位（1個剥落、計4単位か）に瘤状突起があり、これを連繋するような横方向条線、体部に弧線を組み合わせた文様が描かれる。疎らで一部交互連弧状にも見えるが、判然としない。上下10cm程度の狭い範囲に施文の単位があり、図形的な表現に近い点は注意される。内面へラ状工具によるミガキ調整。内外面橙色を呈する。胎土には白色粒をやや多量に含むが比較的緻密である。中位より下方は条線施文がない。ミガキに近い1次調整→条線で、その後も一部ミガキが入るようである。内面下方底部近く及び中位で帯状の焦げが観察される。6は全面条線施文となる土器である。口縁の横方向条線→縦方向条線の順である。縦方向線は弧線を連続～波状に近い描き方で単位間に空白部を設ける＝間隔施文状である。



第160図 S114出土土器(14) [16J0]



第161図 S114出土土器(15) [16J0]

第164～174図には16J0グリッド出土の破片資料を示す。第164図では1.2が中期の資料で、3以下が安行1式、同2式である。波状縁深鉢の突起では靴籠状のものと上面円形の瓶口状となっている例がある。19は隆起帯上縄紋に加え刻みも加わる例である。22～33は平縁深鉢、40が瓢形の深鉢（または注口土器）、41.42が台付鉢である。37や38も台付鉢の可能性はある。

第165図には安行式の体部破片及び瘤付系を示す。1の口縁部破片は第156図6と同一個体である。2も波状縁波頂部下に突起、口縁に沿う沈線が施されるものである。3以下は体部破片で、13は瓢形注口土器の破片となろうか。17～53及び第166図には瘤付系を示すが、安行式との中間的な様相を示すものも含まれている。3.4は刺突列が口縁に二段巡るもので、やや異質である。13～16は縄紋のみの破片で型式・系統判



第162図 S114出土土器(16) [16J0]



第163図 S114出土土器(17) [16J0]



第164図 S114出土土器(18) [16J0]

断難しいが、一応ここに示す。55以下も同様だが、縄紋の帯状表現で階段状入組文を表しているものがあり、例えば57では縄紋の条方向に一部違いがあり、入組部の表現が観察される。

第167図1～14には瘤付系の壺・注口土器を示す。小片が多く全体の文様構成が判明するものは無い。15以下に当初大洞式系（前半）として分類した土器を示すが、15～18や32～35は後期瘤付系に遡る可能性がある。羊歯状文施文例を主とする大洞B-C式では、55.62.65～67のようなクランク文表現例が一定数確認される。系統の違いとなる可能性もあろうか。68は第162図4と類似する。

第168図は安行3a式～同3c式対応の土器群を示す。波状縁例では安行式大波状縁系のものと姥山Ⅱ式系のもの（9等）とがある。13以下に平縁系のものを示すが、16のような「副文様帯系」も含め数は限られる。33以下には鉢、広口壺状のもの、注口土器などを示す。38～44は細密沈線文系の土器で、一定数この系統の土器があることは注意される。

第169図は紐線文系を主とする粗製土器である。附点紐線文系を22までに示すが、刺突の手法は多様で、瘤付系の刻みに近いものも見られる。26～29は頸部に縦位の隆線や沈線・スリットが描かれるもので、2個1対の円形瘤直下にこれが配される26等がある。37のような一定範囲に刻みが付される例も興味深い。

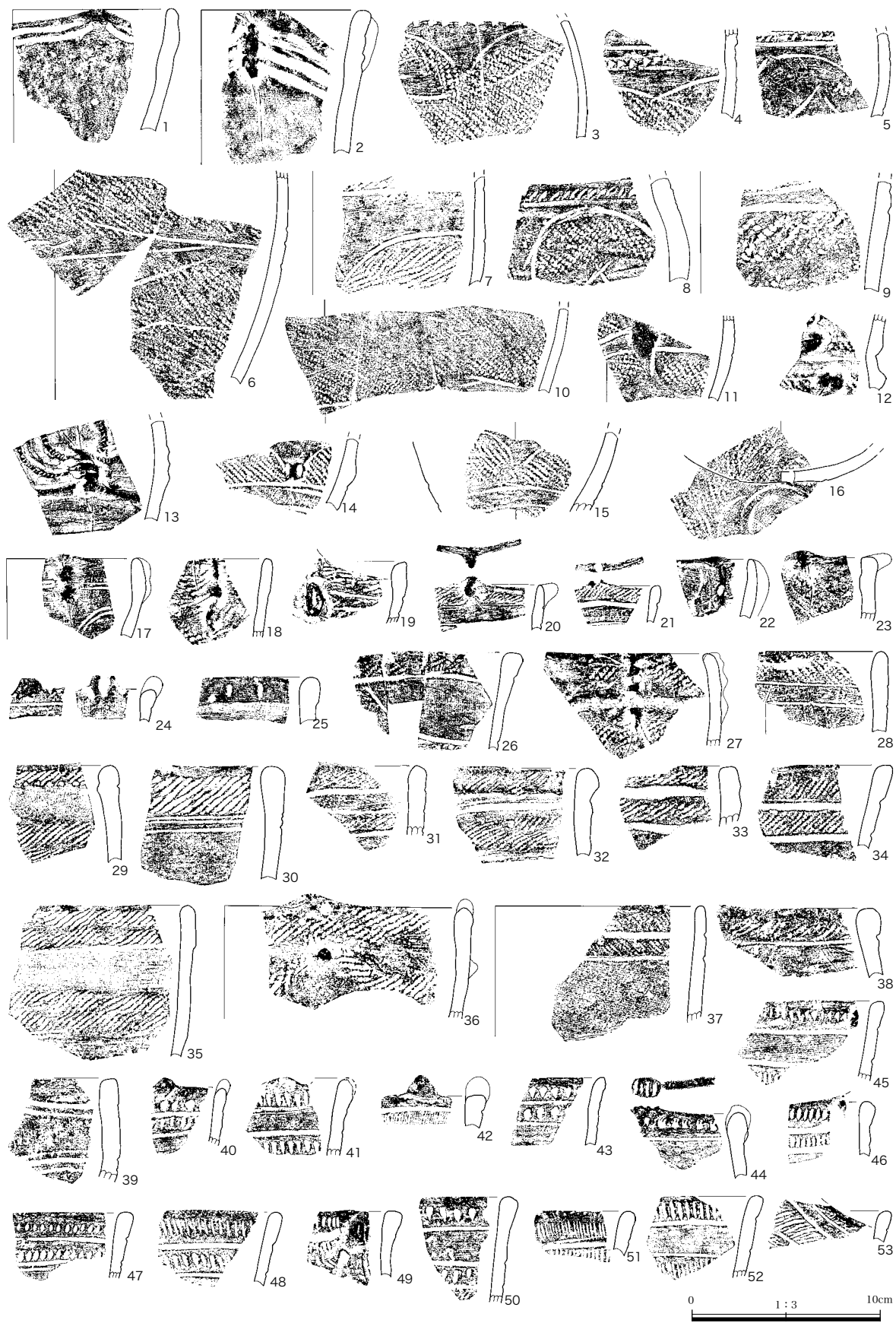
第170図は隆線貼付の粗製土器や刺突文・沈線文の土器等を示す。1～5は口縁から若干下がった位置に大きめの押捺を伴う隆線が付されるもので、茨城県北部で多く見られる粗製土器の手法である。頸部には縄紋が付されるものが多いようである。また4のようなやや間隔があくものもある。15以下はこれまで示した口縁直下に刺突を伴う粗製土器とはやや異なる本遺跡に特徴的な一群だが、文様・施文手法とも多様である。36はこれらの中にあってもかなり異質で、浅いナデ状の凹線による文様が描かれる。薄手で小さな形状であることも含め別種土製品の可能性もあろうか。

第171図は大洞C1式、同C2式を示す。比較的整った雲形文が描かれる15のような例もあるが、総じて変容例が多い。29以下には主に口縁下に無文帯を配するものを示す。42のように大洞C2式でもやや新しい様相を示す例も見られる。44は図・拓影ではわかりにくい、表裏貫通の穿孔があるもので、二孔間に割れ口はなく、焼成前穿孔である。

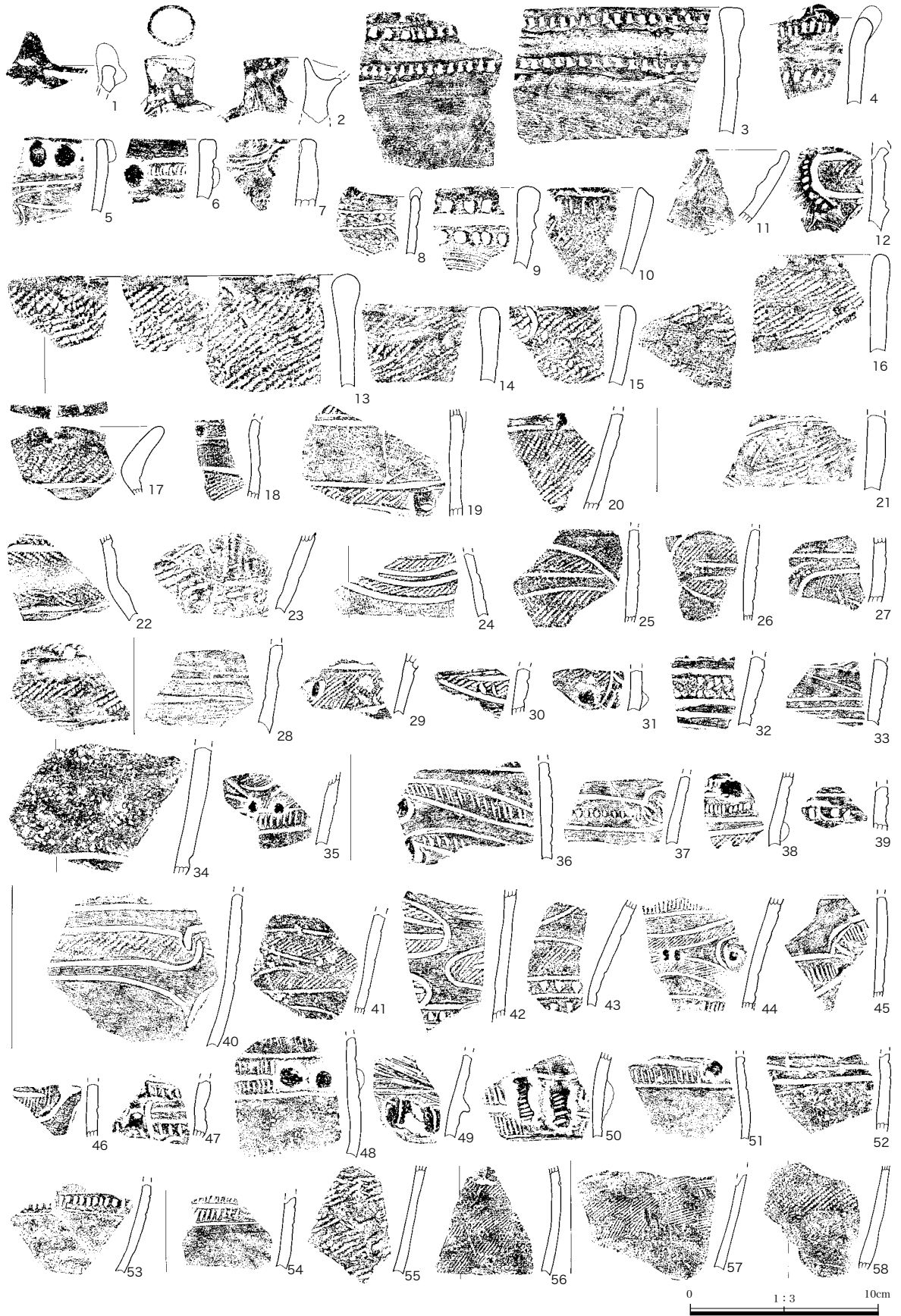
第172図1～23は体部破片を示す。18は大きく変容した渦巻状単位文を並列的に配している。24～26はA突起を特徴とするものである。厚手の作りで、第171図までに示した土器とは質感などもやや異なる。27～32は大洞C1式・同C2式との関わりも想定される頸部直下刺突文列の土器群で、第170図17～37に示した刺突文の土器とも近い部分がある。

第173図1～23は大洞式系の壺・注口土器、台付土器などを示す。安行式系で捉えた方が良いものもあるかもしれない。23は削り取りの透かし孔が明瞭に観察できる台付脚部である。24～30.32は条線の土器だが、26のように短い施文の例も認められる。33以下は縄紋のみのもので、38が擬縄紋例、39～42及び第174図1～10は付帯口縁の例である。第174図11以下は無文、撚糸紋等の例で、口縁端部に刺突を有するもの、19のような口縁直下に指頭押捺があるもの等が見られる。25～27はイ6J0斜面として取り上げられていた資料から選んだ。具体的にどの部分を指示するのか不明であるが一応ここで示す。

第174図23は、口径34.5cm、高さ52cmを測る大形の深鉢で、全面無文ながら注目される資料であり、若干の観察記録を記す。旧イ6K0（=イ6J0）出土資料が大半であるが、イ6K1出土資料が1点、SK32出土破片が8点、SK25出土破片が1点ある。イ7K1グリッドポイントの西北西1.5～2mの地点で、2×1m範囲内から出土した。一部はSK32土坑周囲にかかる位置である。やや上位では大形破片の集中として記録されている。晩期におけるこの種の大形復元個体は、「埋嚢」や「埋設土器」として出土することが多く、本例もその
(→P200)



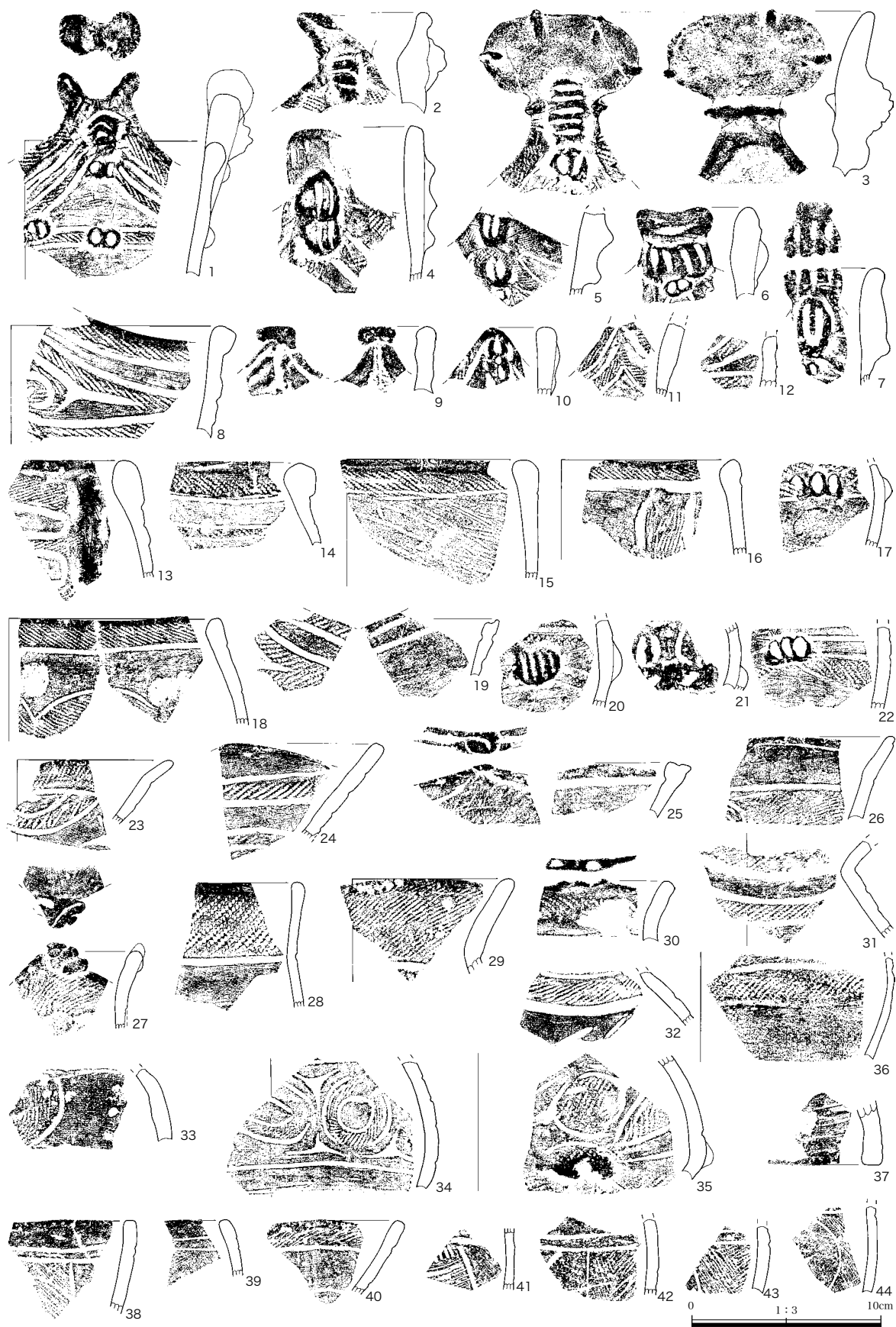
第165図 S114出土土器(19) [16J0]



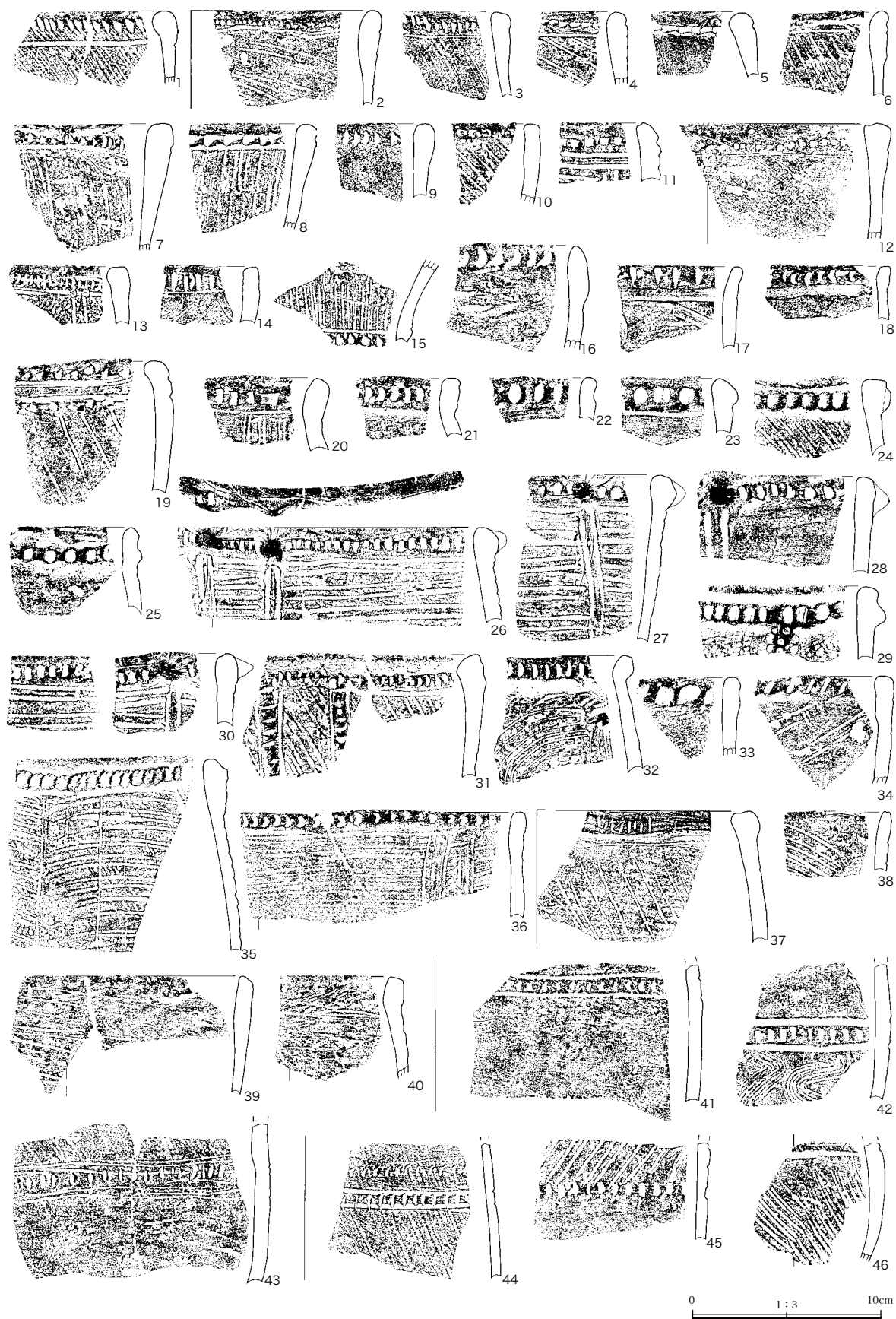
第166図 S I 1 4出土土器(20) [16J0]



第167図 S114出土土器(21) [16J0]



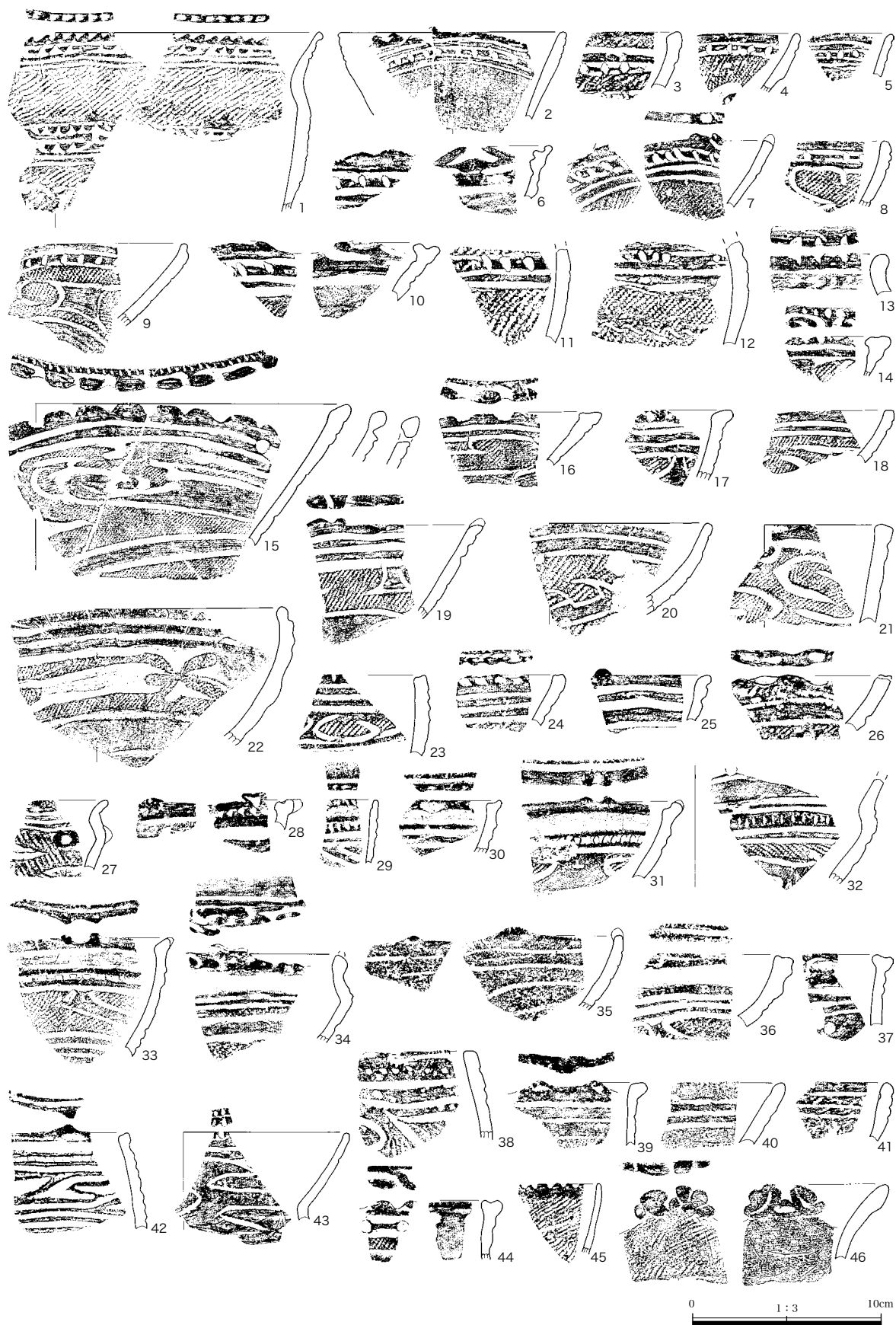
第168図 S114出土土器(22) [16J0]



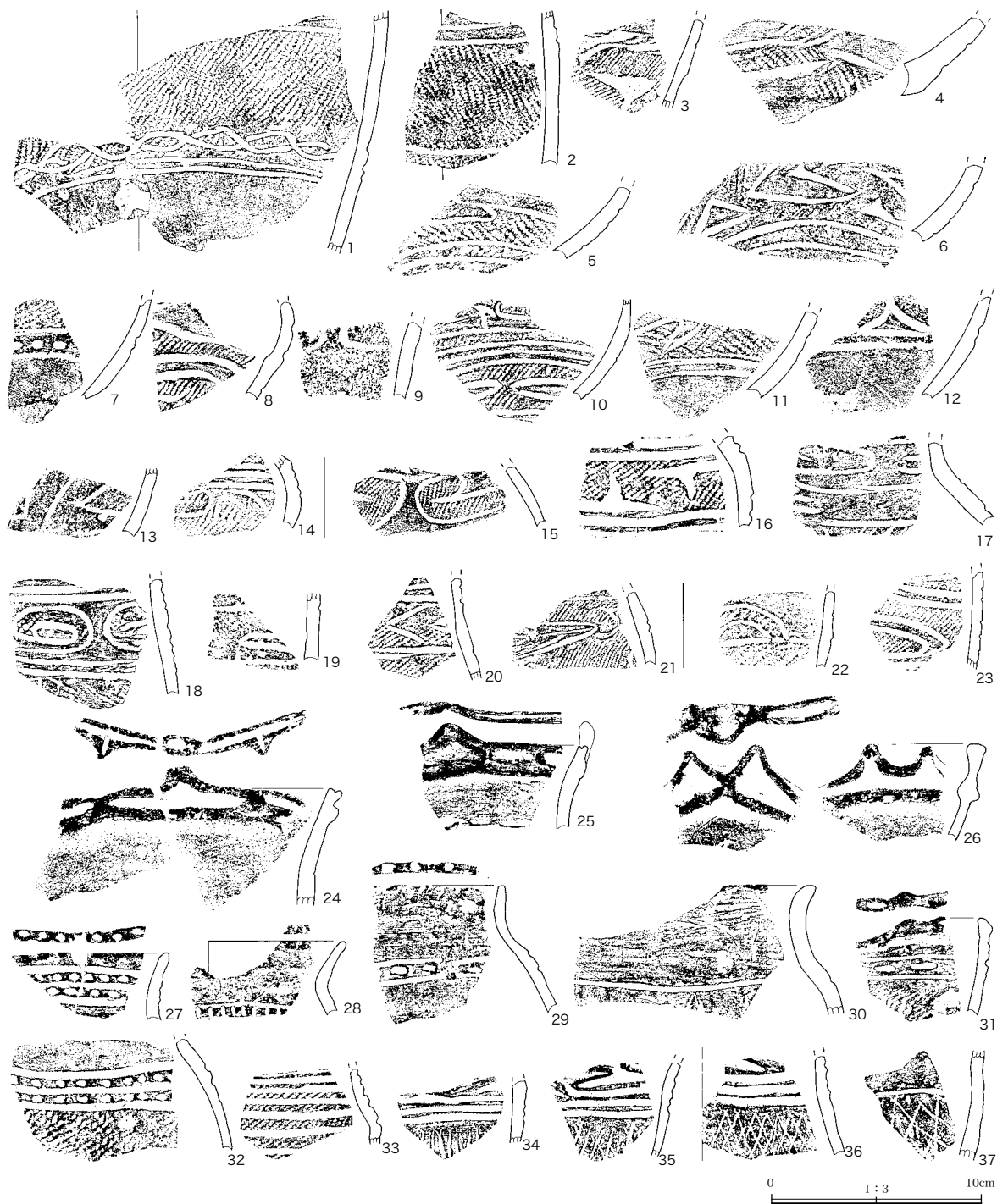
第169図 S114出土土器(23) [16J0]



第170図 S114出土土器(24) [16J0]

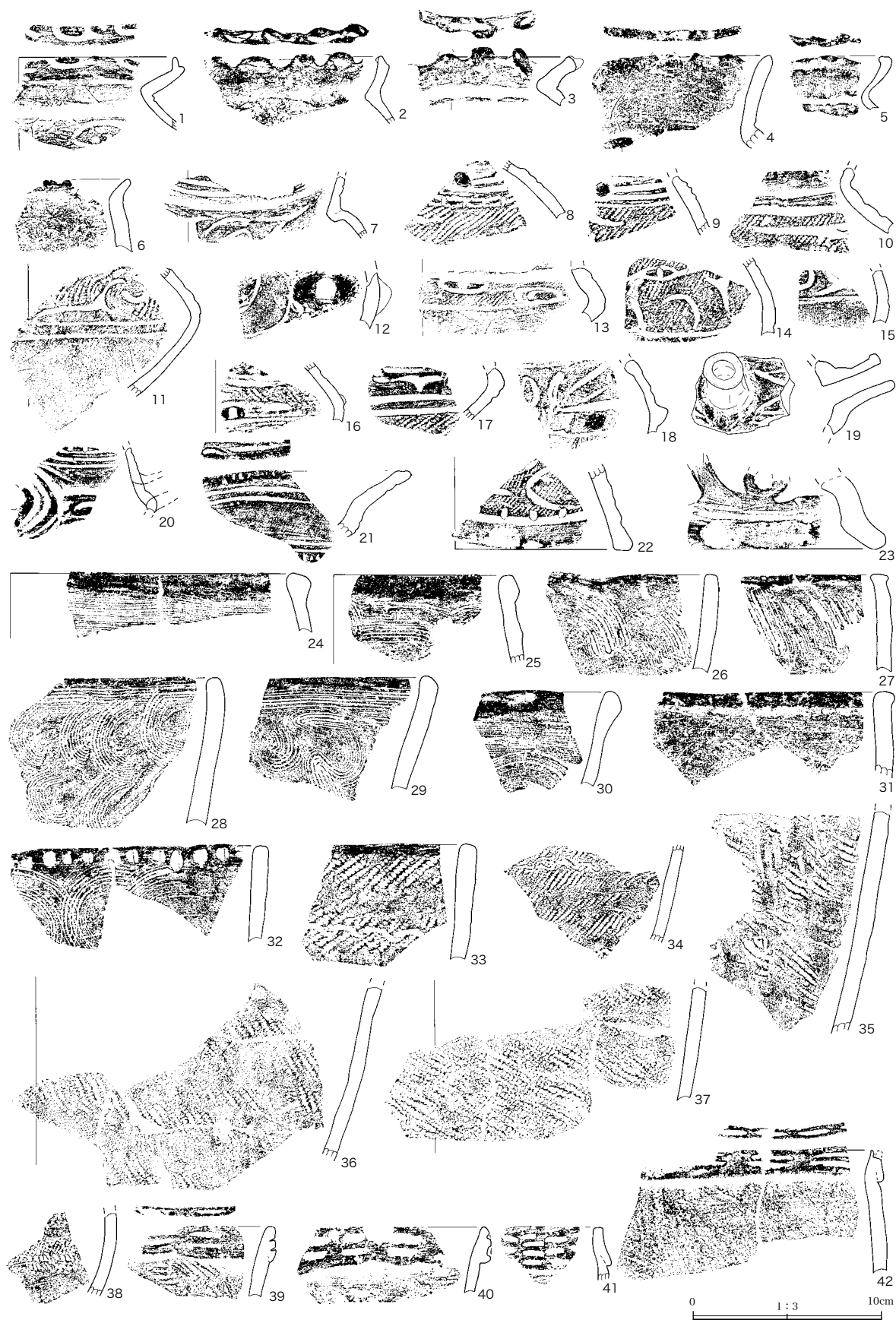


第171図 S114出土土器(25) [16J0]

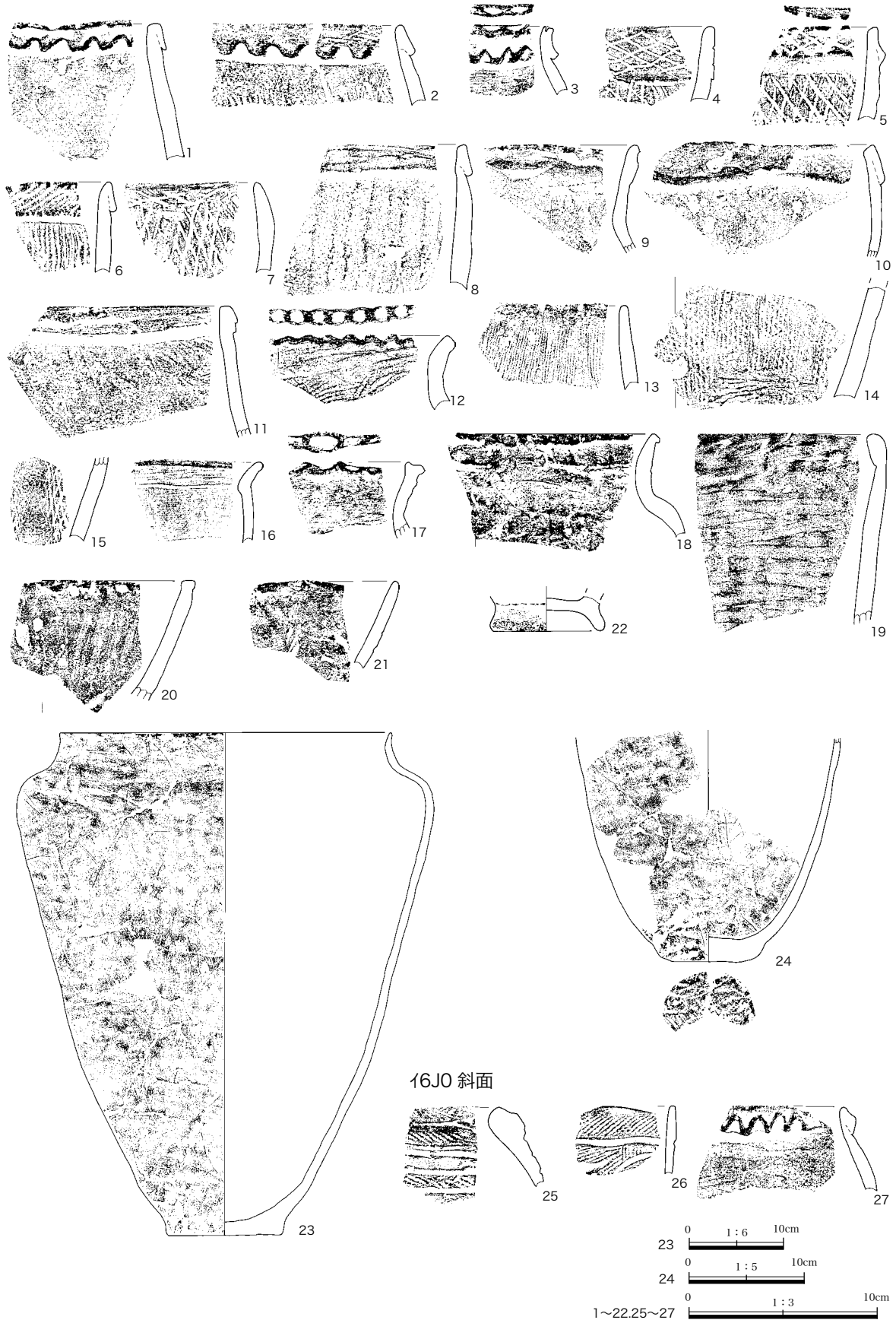


第172図 S114出土土器(26) [16J0]

疑いは残る。体部下半などで欠損部分もあり、全体では8割程度の遺存であるがほぼ完形に復元した。大きさの割には薄手と言えるかもしれない。外面橙色～明赤褐色、内面にぶい橙色を呈する。調整は、外面ケズリ～ミガキ調整、口縁直下は指頭押捺がある。内面も口縁～頸部は指頭押捺があり、輪積痕も残るが、端部に近い2cm程の範囲はミガキが加えられる。頸部～体部の内面はミガキ調整基本で一部ナデ調整。破片によっては器面の荒れが目立ち、アバタ状剥落も見られる。胎土には石英・白色粒・褐色粒を多く含む。底部外面



第173図 S114出土土器(27) [16J0]



第174図 S114出土土器(28) [16J0]

は若干欠けているが、内面は残っており「穿孔」はされていない。全体の歪みはさほど見られず整っているが、破片の接合部分（割れ口部分）は多くが輪積痕部分である。

S I 1 5（遺構第 175 図）

位置・経緯・形態 集落内北部で、遺構集中北端の位置となる。本跡より北側は土坑の分布がある程度で、縄紋時代遺構は散漫な分布となる。主に I 2I5・I 3I5 グリッドに位置する。南側ほぼ隣接して SI06 があるほか、東 5 m に SI07 が位置する。土坑では東側に SK37A、や SK36A がある。地形的には緩やかに西側に向かって傾斜しているところに位置している。

調査時は円形の掘り込みに対してのみ住居跡扱いとされているが、周辺でピットも多く、ここではやや広い範囲まで示した。後述する配置案をもとに規模を示すと、軸長 6.6 m、直交軸長 5.65 m、軸は N-45° -E となる。南西側のやや張り出すところを入口部と考えての主軸である。写真記録からはこの入口ピット群張出部もかなり大きな掘り込みが見える。このプランとは別に、南東側のピットの並びや西側のピットの並びを考慮した一辺 7 m 程度の形態案も考えられる。

確認は黒色土～ローム漸移層・ローム層で、主に掘り込み範囲の西側半分及び以西では今市パミス・七本桜パミスの堆積が目立っている。

覆土・壁・床面 遺憾ながら記録の読み取り不可とデータの確認ができず、掘り込みの覆土については不明である。完掘写真からは、壁の南東側は黒色土～ローム漸移層、北西側ではローム層となっている。角度はやや緩やかなようである。床面は若干の凹凸はあるものの、概ね平坦のようで、ほぼロームを床面としているようである。

ピット 掘り込み範囲内に 45 基程有り、うち 8 割程度が住居跡調査時に確認されていたものである。残りは航空写真測量時の写真・図面を合成した。これについてもピットの深さが分かるものを示すと、P1 が深さ 36 cm、P2 が 13 cm、P2 すぐ南西のピットが 14 cm、P1 すぐ北側のピットが 22 cm、以上 4 基のみである。これ以外のピットの深さについてはデータの読み取りができないが、写真から観察すると、やや大きめのものについては 10～20 cm 程度、小さめのものは 5～10 cm 程度のものである。全体に径 15～25 cm 程度の小さめのピットが多く、すべて人為的な遺構として良いかも疑問が残る。主軸入口から見て奥側、掘り込みプラン内北東側でピットが多く、支柱や「奥左右壁 3 本柱」を想定することも不可能ではない。とりあえず先に示した軸に直交する方向で確認されるやや大きめの 4 本を支柱穴とする配置案をひとつの案としておくが確実性は低い。当然ながら他にも多くのピットがあることから、複数軒の配置案を想定するべきであろうが、ピット深さが不明のため検討困難である。住居跡奥側となる北側から西側にかけての壁際でややピットが多いように見え、壁柱穴群と捉えることもできるかもしれない。

遺物 掘り込み範囲内の遺物の確認ができていない。当該グリッド遺物の抽出では SI06・15 として行い SI06 で示した（第 100～103 図）。復元個体は 7 点ほどある。出土位置の確認も行っておらず、住居跡との関係も不明であるが、晩期中葉大洞 C 1 式～同 C 2 式併行期のものが目立っている点は注目される。住居跡の時期を参照的に示しているかもしれない。土製品や石器・石製品についても SI06 および SI06（I 2I5・I 3I5）で扱った遺物が本跡に伴う可能性がある。



第175図 S115

第3節 ピット群

ピット群1（遺構第176・177図）

位置・経緯・形態 集落内北東部で、遺構集中域内の位置となる。本跡の西側・南側にも縄紋時代遺構が分布する。主にイ4I7・イ5I7グリッドに位置するが少し南北にも拡がる。北側ほぼ隣接・重複してSI11があるほか、東1mにSI09が位置する。南側のピット群2とも隣接・重複する位置関係にある。地形的には緩やかに西側に向かって傾斜している。

調査時は建物跡群との認識はなく、整理時にピットの集中をもってピット群1とした。後述するように、70cmを越える深さのピットもあり、複数の建物跡を想定させる検出状況ではあるが、炉跡・密な壁柱穴の並び、入口ピット群等が確認できず、明確な住居跡や掘立柱建物跡の指示・復元には至らない。

建物跡復元推定 第一の建物案は、エレベーションラインAを主軸とし、SI11P30～P19-P33-P37.38-P11.12と楕円形に巡らす住居プラン案である。P15.16やP8.17等を支柱穴とする配置案も考慮したが、プランとの整合性はあまり良くない。大まかな規模を示すと8m×6.9m程度で、主軸はN-16°-Eとなる。第2の案はP7.8-P13-P26-P38等を壁柱穴と考えての楕円形住居案である。内部に深さ50cmを超えるピットがP16.P13.P19.P27.P26.P33.P34.P41.P42.P43.P45と11基ある。形態・位置からはP19.P27.P43について支柱を構成する柱穴と推定することはできるが、整合的な配置案の提示はし難い。この場合の規模は10m×9m程度で、概ね軸は第一のプラン案と同じである。第三の案は、P40-P43-ピット群2-P2及びこの延長（未明名ピット）で弧状に巡るピットから9m×8.5m程度の円形に近いプランを考えるものである。P9.P17.P10を北西側のピットとして捉えても良いかもしれない。但し南西から南側を除くと整然とした、或いは密な弧状の並びを確認できず、やはり整合的な住居プラン案の提示には至らない。

既述のように、深さ不明のピットも多いが、中には深い例もあり、またピット同士の重複例もあることから、上記以外の推定案を検討し、2軒以上の建物跡群を考えた方が良いかもしれない。

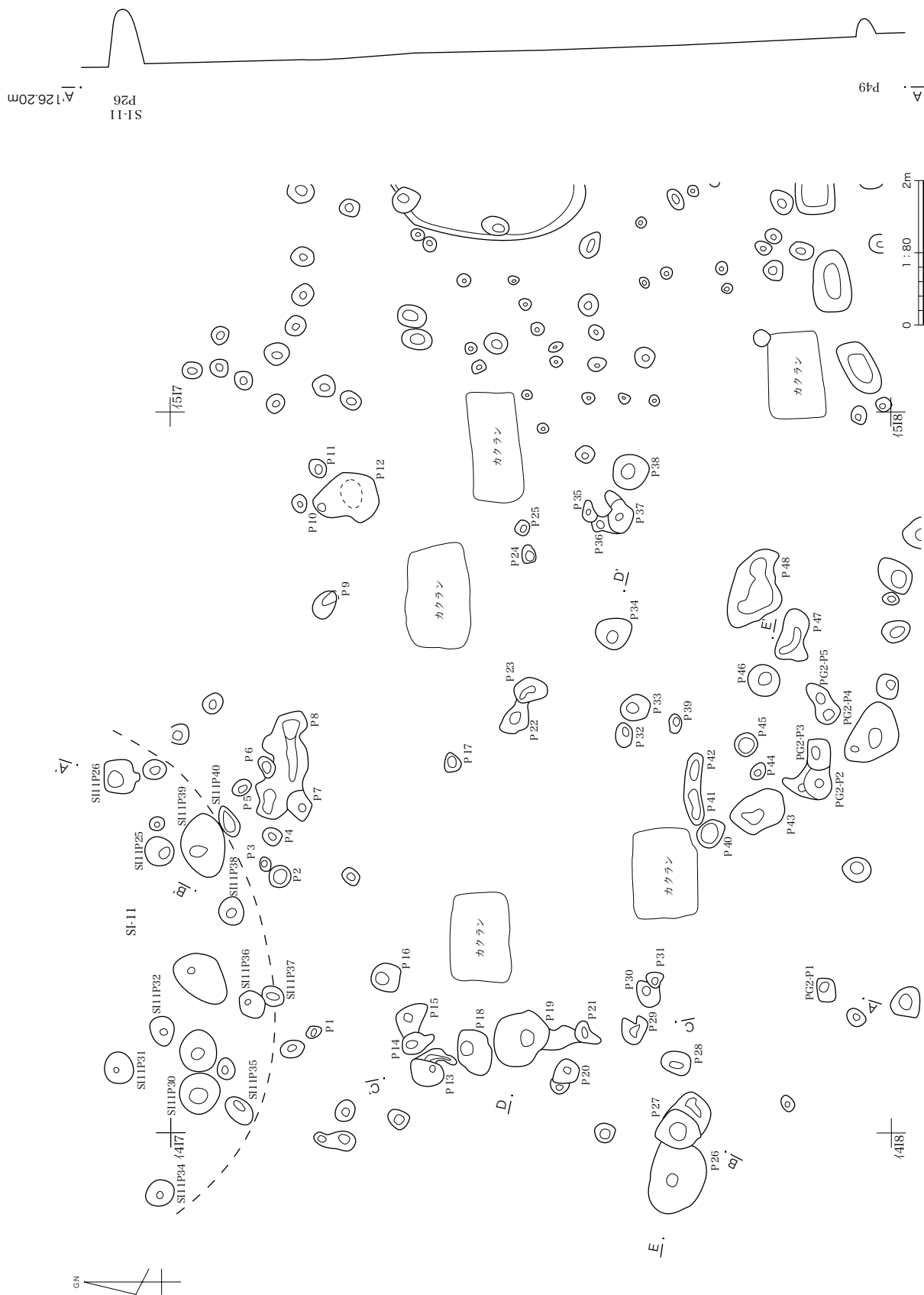
なおピットの確認は黒色土～ローム漸移層・ローム層のようだが、最終的にはローム面まで下げてピットの検出調査に至っているようである。また個別のピット形態の記録も限られており、壁の状態・覆土の堆積状況等も不明である。

遺物 イ4I7グリッド包含層の遺物についてはSI11のところに示している。まともにも見出しがたく、時期幅もあることから、本ピット群の時期絞り込みを行うことは難しい。晩期中葉大洞C1式～同C2式併行期となる可能性が高いようにも思われるが、感覚的な推定に過ぎない。石器・石製品や土製品についても、このグリッド出土資料が本跡に伴う可能性がある。

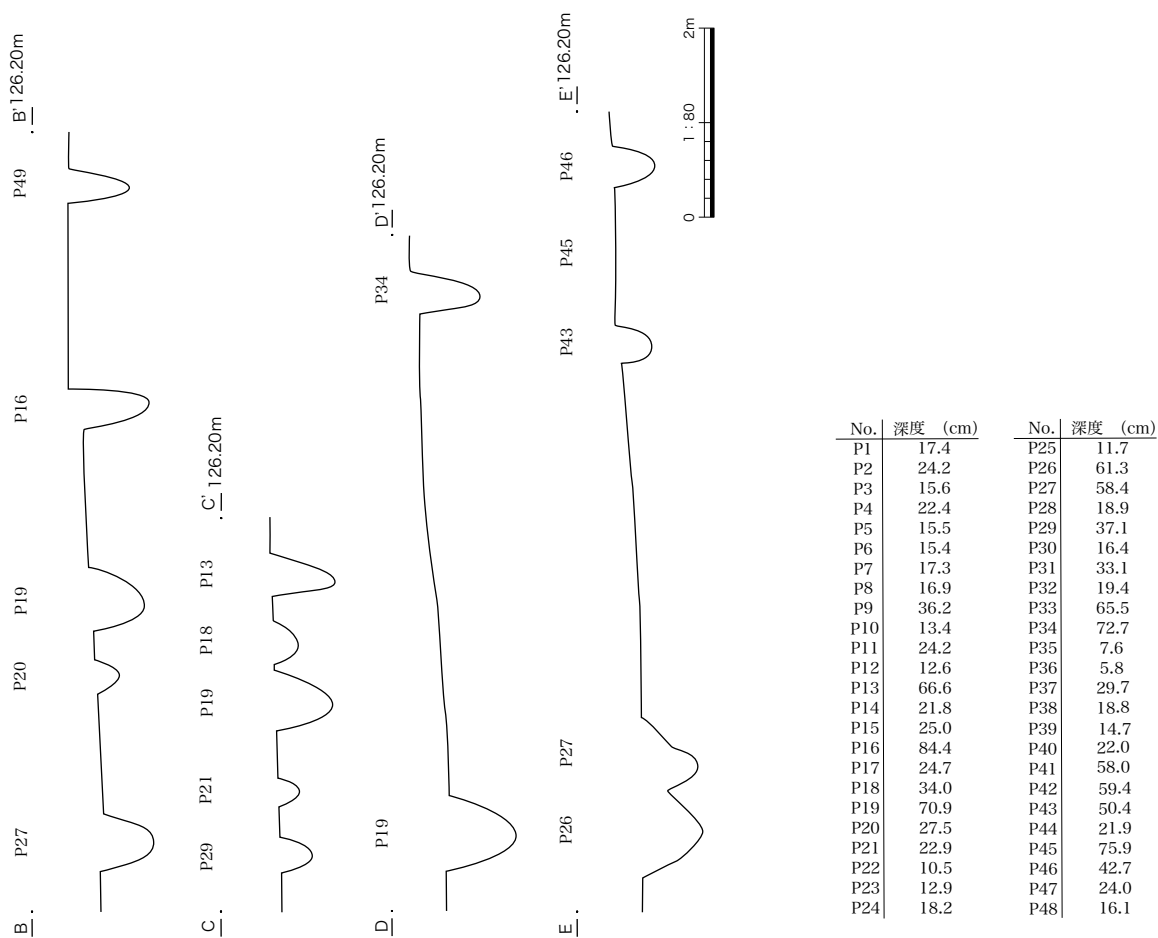
ピット群2（遺構第178図、遺物第179図）

位置・経緯・形態 集落内中央～東部で、遺構集中域内の内縁、窪地に面する位置となる。本跡の西側は未調査区だが、北側・東側には縄紋時代遺構が分布する。北東側にはSI03がある。主にイ4I7・イ4I8グリッドに位置する。北側ほぼ隣接・重複してピット群1があり、南東側のピット群3も重複する位置関係にある。地形的には緩やかに南西側に向かって傾斜している。ピットの確認は黒色土～ローム漸移層・ローム層のようだが、最終的にはローム面まで下げてピットの検出調査に至っているようである。また個別のピット形態の記録も限られており、壁の状態・覆土の堆積状況等も不明である。

調査時は建物跡群との認識はなく、整理時にピットの集中をもってピット群2とした。全体で70基を超え



第176図 ピット群1(1)

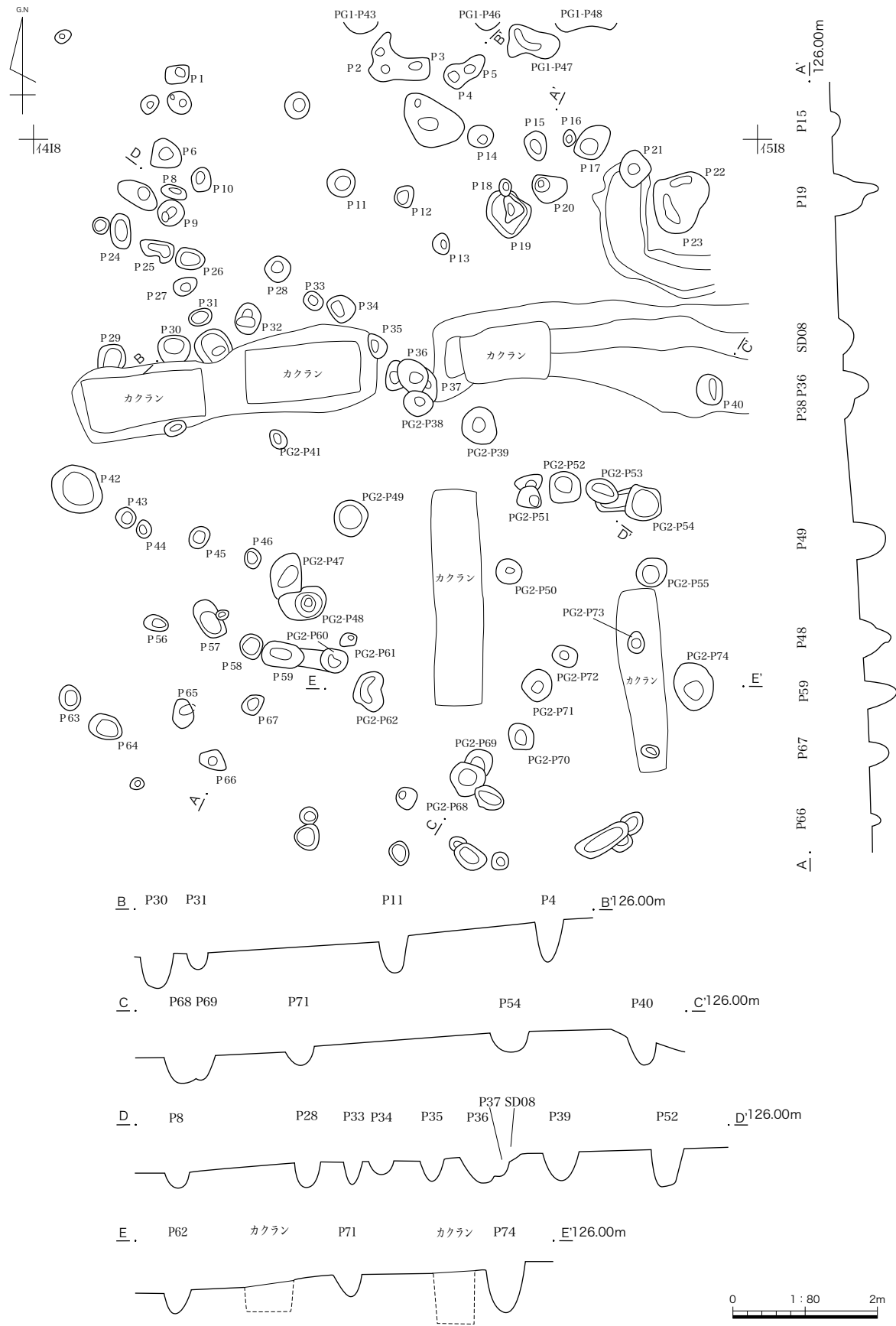


第 177 図 ピット群 1 (2)

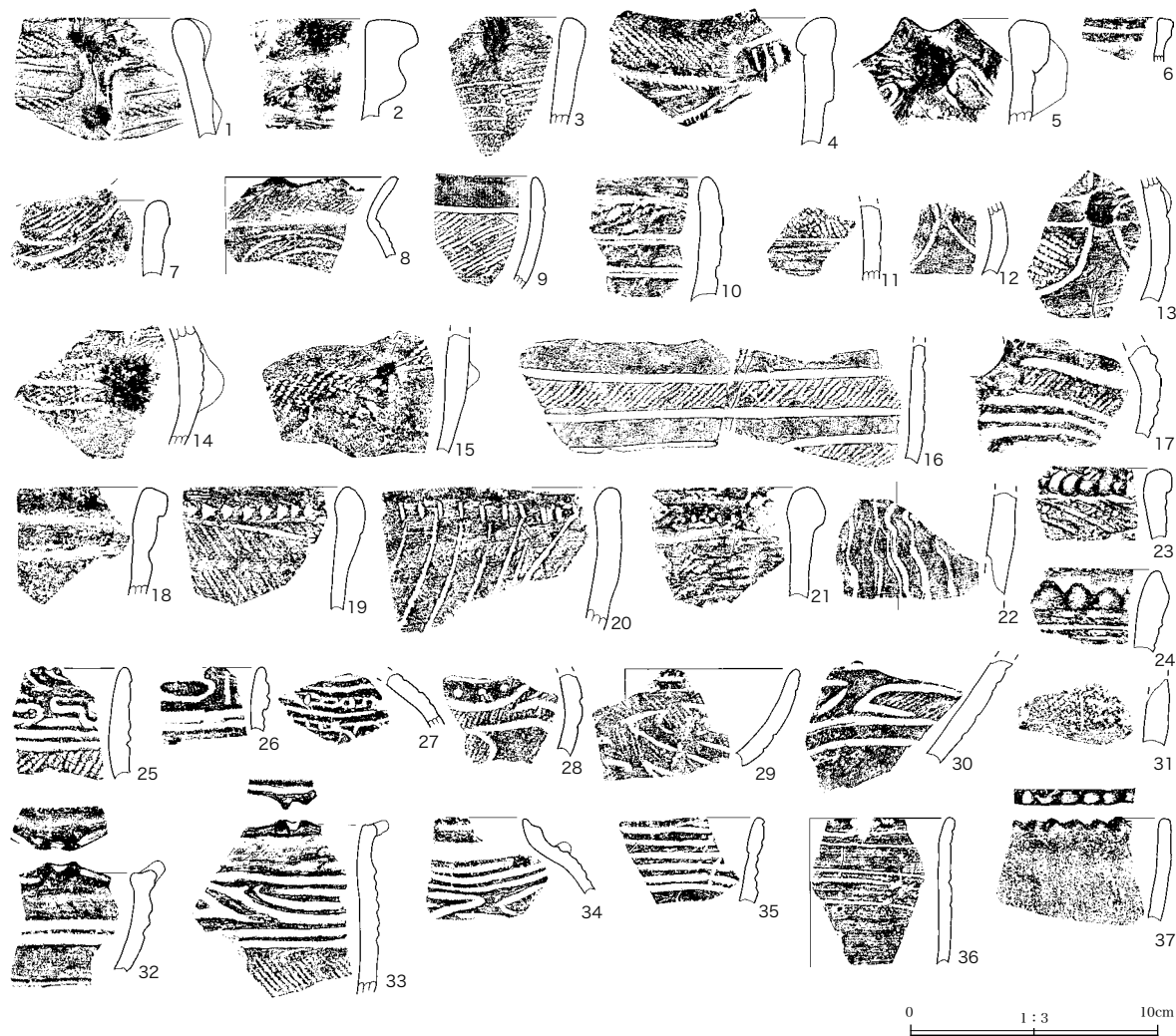
るピットがあり、40 cmを超える深さのピットが 22 基、うち 70 cmを超える深さのピットが 3 基ある。発番していない深さ不明のピットもあり、複数の建物跡を想定させる検出状況ではあるが、炉跡・密な壁柱穴の並び、入口ピット群等が確認できず、明確な住居や掘立柱建物跡の指示には至らない。また長方形土坑状の攪乱も多く見られる位置である。

建物跡復元推定 第 1 の建物案は、エレベーションライン A を概ね主軸とし、P5.4-P26-P4.3-P57-P59-P71-P55-P40-P22 とほぼ円形に巡るピットの並びから考える住居跡復元案である。9.1 m × 8.9 m 程度の規模となり、主軸は N-27° -E となる。第 2 の案は、P27-P29-P64-P74-P54-P39-P37-P34-P28 と楕円形に近くめぐらる案だが、南側はピットが散漫となる。北東側 P28 から P54 に至る部分のピットは密であるが、やや直線的な配列となる点は注意される。6.5 × 5 m 程度の規模となる。主軸は示しがたいが、横長楕円形とすれば N-35° -E 程度となろう。P27.P74 など 50 cm を超える深さのピットがこの壁柱穴に含まれると共に、楕円形の囲まれた内部にも深いピットが確認される。P41.P50 等を用いての 4 本主柱なども想定不可能ではない。P42 や P74 のような径も大きいものを主柱穴と想定したくなるが、プランとの整合性は思わしくない。P42 から東側へのびるピットなども気にかかるところである。

A -A' ラインや D -D' ラインで直線的にピットが並び様子も窺え、1 × 1 ~ 2 間の掘立柱建物跡を想定すること（例えば P42-P59-P68-P55-P36-P28 の 6 本構成など）も可能である。ともあれ、上記以外の推定案も



第178図 ピット群2



第179図 ピット群2・3出土土器 [I418]

充分考えられ、更なる検討が求められよう。

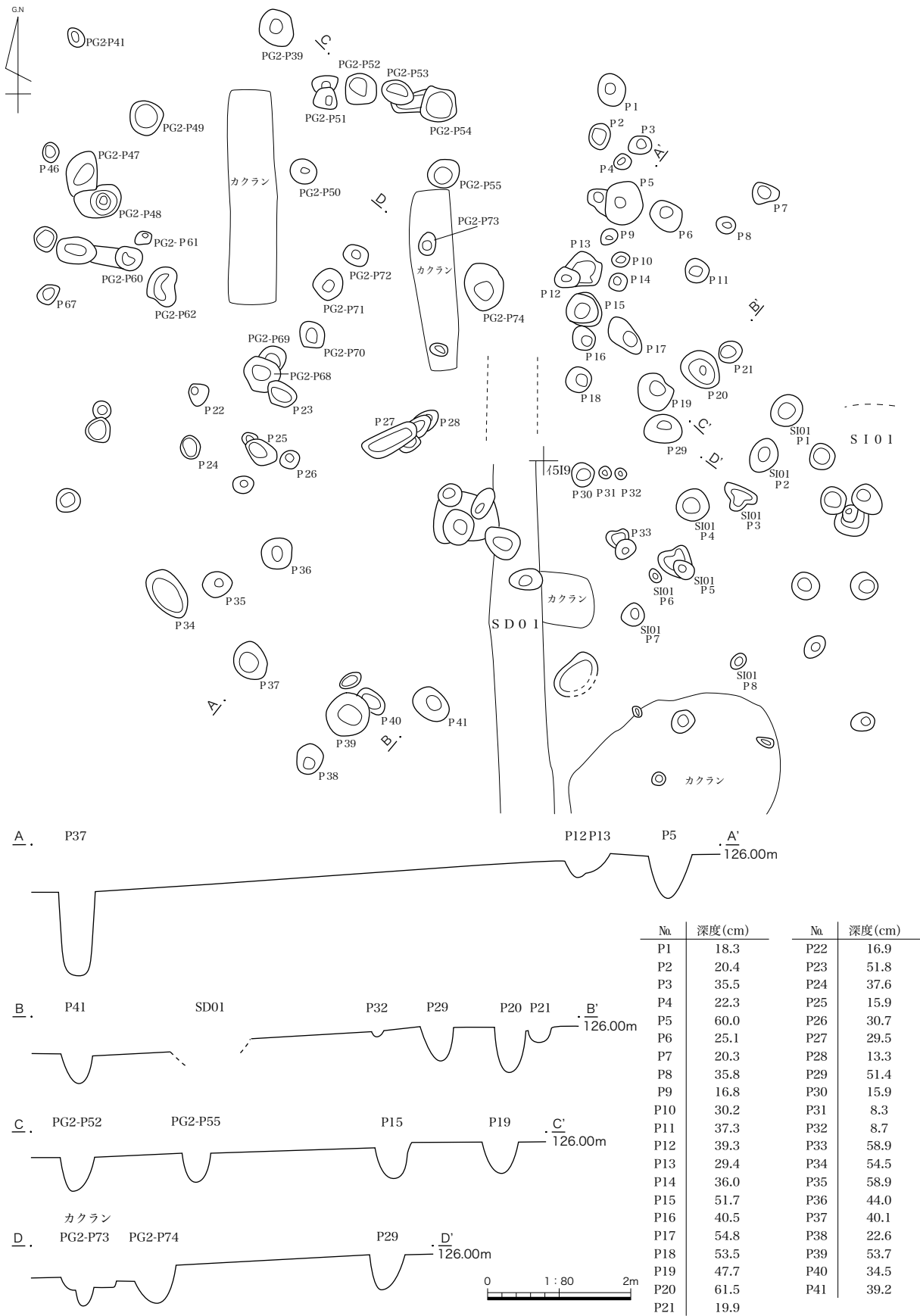
遺物 I418 グリッド包含層の遺物については第179図に示している。まとまりも見出しがたく、時期幅もあることから、本ピット群の時期絞り込みを行うことは難しい。グリッドでの遺物集計では後期安行式・瘤付系及びA群がやや多い。石器ではこのグリッドから打製石斧が13点、磨製石斧が5点、磨石類が2点、石皿類が1点、石鏃1点が図や表で掲載した分の数量である。遺構への帰属については不明である。

包含層区域から窪地包含層にかかる部分であるが、このグリッドからの出土土器は提示資料を限定しているとはいえ、比較的少ない。或いは整理時の見落としがあるかもしれない。第179図に安行1式～安行3b式対応の土器(1～14)、瘤付系の資料(15～17)、粗製土器紐線文系(19～24)、大洞式系(25～35)を示す。大洞C2式でもやや新しい様相を示す33～35は深鉢または広口壺状の器形となるようである。36はここに示したが、やや古いかもしれない。

ピット群3 (遺構第180図、遺物第181図)

位置・経緯・形態 集落内中央～東部で、遺構集中域内の内縁、窪地に面する位置となる。主にI418・I518・I419・I519グリッドに位置する。北西側でほぼ隣接・重複してピット群2がある。地形やピット検出

第3章 刈沼遺跡1次調査区の遺構と遺跡



第180図 ピット群3

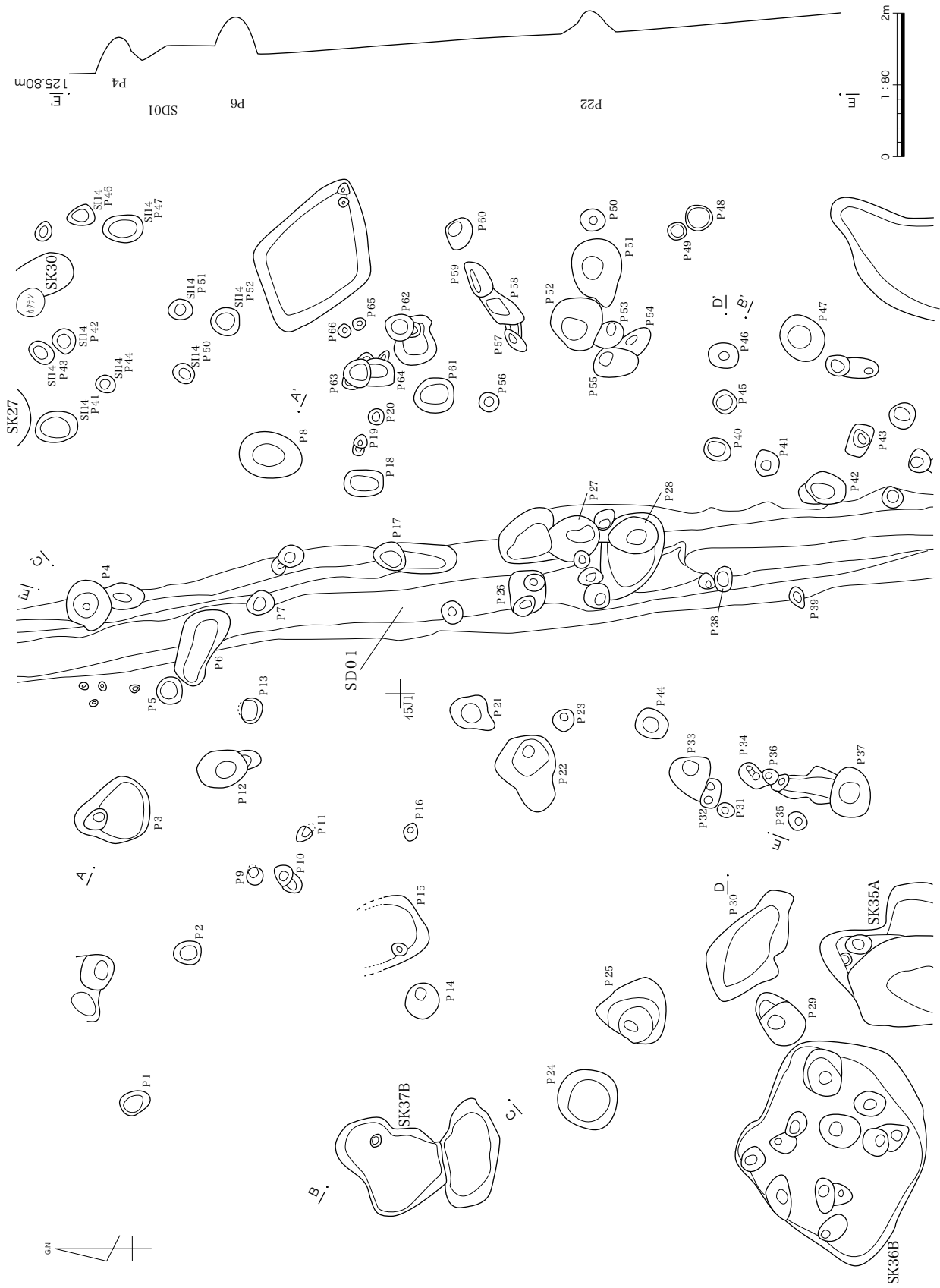


第181図 ピット群3出土土器 [1518]

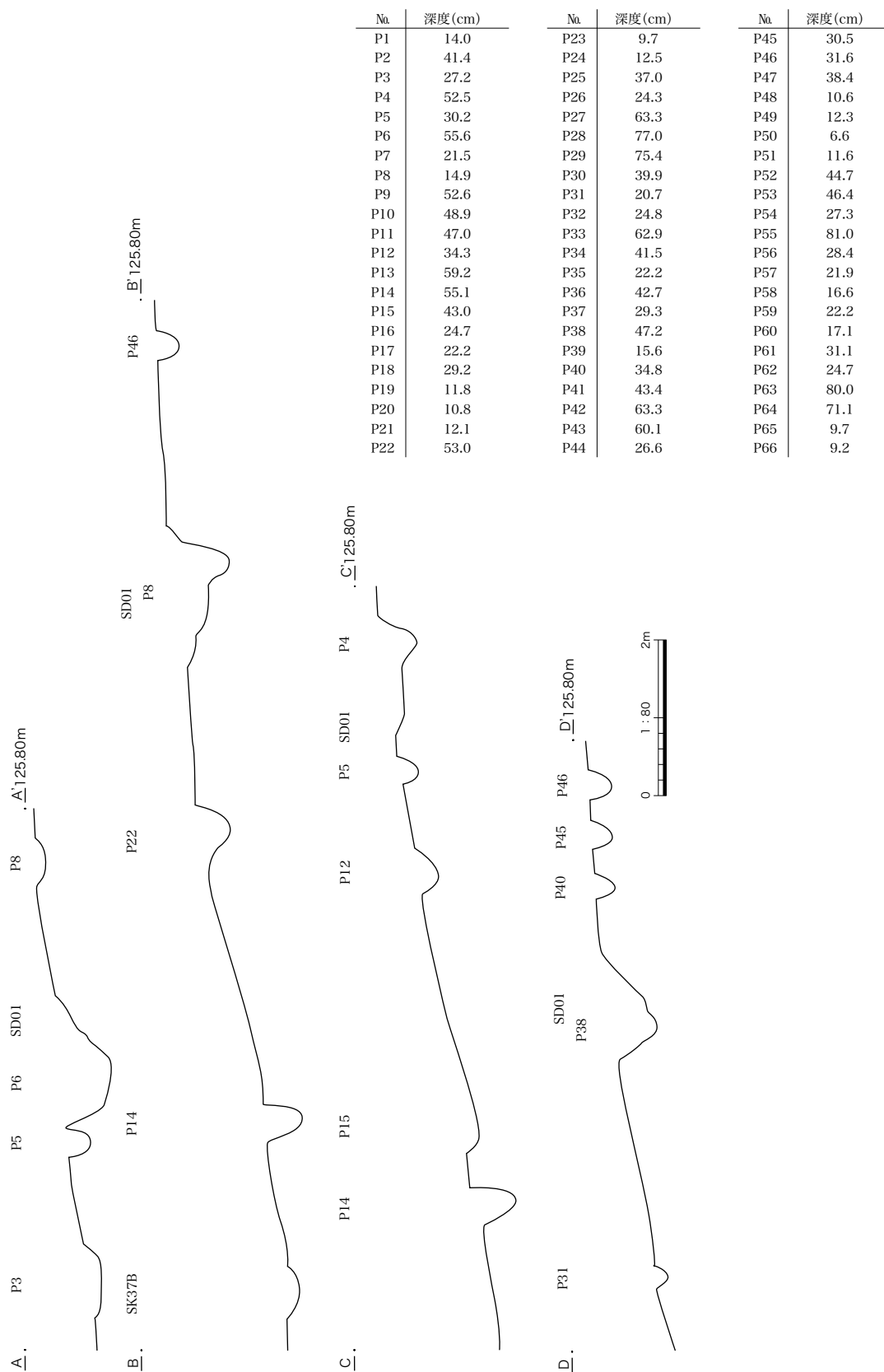
状況はピット群2と同様である。

本遺構も整理時にピットの集中をもって判断したもので、全体で40基を超えるピットがある。但し、最終的な測量以外でこのグリッド内の遺構記録があり、ある程度ピットの集中を調査時に捉えていたようである。また、北西側のピット群2で発番のピットや南東側のSI01内ピットを含め考える必要があり、一定範囲重複して示している。ピット群3扱いのピットでは、40cmを超える深さのピットが15基ある。ピット群1・2に比して、概ね上端径20～30cm程度で円形状を為しているものが多い＝形態上均一的な傾向があるかもしれない。発番していない深さ不明のピットもあり、複数の建物跡を想定させる検出状況ではあるが、炉跡・密な壁柱穴の並び、入口ピット群等は確認できない。また長方形土坑状～溝状の攪乱も見られる位置である。

建物跡復元推定 第1の建物案は、エレベーションラインAを概ね主軸または直交軸とし、P34-P38-SI01P7-同P5-同P3-同P1-P7-P1-PG2P55-同P72-同P68-P24と楕円形に巡るピットの並びから考える住居復元案である。この内部のP35-P39-○-P29-PG2P74の長方形に並ぶ1×1間または1×2間を主柱とする案とも概ね整合的である。11m×7.4m程度の規模となり、主軸はN-39°-Eとなる



第182図 ピット群4(1)



第 183 図 ピット群 4 (2)

第2の案は、SI01P7～同P3からP21-P11-P1-PG2P39-同P49-同P47-P34と概ね円形に巡らす案である。径10m程度の規模となる。

上記案以外では、P1から南側P19.P29に向かって直線的に並ぶピット列が気にかかるところで、これをいかしての方形に近いプラン案なども検討したが整合的な案の提示には至らない。ともあれ、上記以外の推定案も充分考えられ、更なる検討が求められよう。

遺物 イ4I8グリッド出土土器を第179図に、イ5I8グリッド出土土器を第181図に示した。少量の抽出だが、そもそも出土量がやや少ない。分類別の比率傾向も顕著な特徴はみられず、このグリッド及びピット群の時期絞り込み・推定を行うことは難しい。本ピット群のイ5I8グリッドでの遺物集計では後期後半や晩期前半がやや多い。石器ではこのグリッドから磨石類が4点、石皿類が2点、石鏃が1点、石錘が2点、打製石斧が15点、磨製石斧が3点である。打製石斧がやや多い傾向があろうか。

環状に巡る包含層区域内であるが、遺物量は少ない。但し提示資料はかなり限定していることは記しておく。第181図1～3は安行1式と瘤付系第2段階の中間的な土器である。円形の瘤や平板的な表現は瘤付系の要素といえる。5.6は安行2式平縁または波状縁深鉢で、隆起带上刻みが確認される。14.15は瘤付系の注口土器であろう。16～18は粗製土器的な資料、19～22が大洞式である。23はやや幅のある口縁端部に多重に沈線を施すもので、台付脚部の可能性も考えたものである。脚部とした場合底面（接地面）文様となり、違和感が残ることから、一応壺口縁としておくと、異質感は拭えない。24も形態不明なもので、壺の屈曲部としたものの、やや波状となる口縁、橋状突起と推定される剥落部など、B突起から推定されるこの時期の土器としては異質である。

25～28は「イ5J8斜面」として取り上げられた資料だが、具体的にどの部分を示すのかは良く分からない。後期後半の資料が目立つが有意義な事象かも判断し得ない。

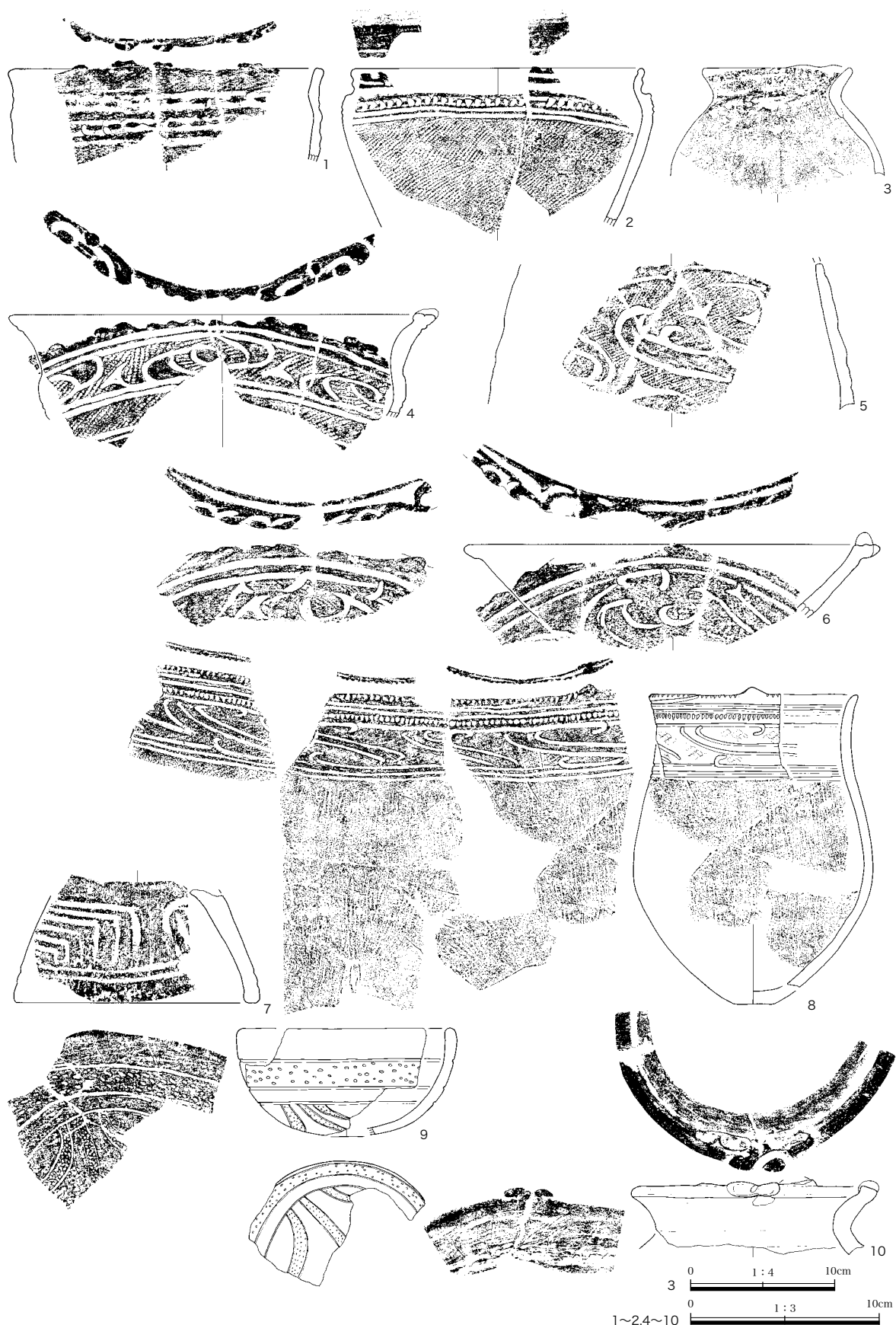
ピット群4（遺構第182・183図、遺物第184～198図）

位置・経緯・形態 集落内中央～南東部で、遺構集中域内の内縁、概ね窪地に面する位置となる。主にイ4J0・イ5J0・イ4J1・イ5J1グリッドに位置する。東側にSI02、北東側にSI14があるほか、南側にピット群6が近い位置にある。SD01内のピットについては溝より古いことが推定されるが、確実な記録は無く、溝より新しい、或いは伴うピットもあるかもしれない。地形は、エレベーションで示したように、西側に向かって比較的急角度で傾斜している。イ4J0・イ4J1はほぼ中央窪地範囲内と言っても良い位置である。

本跡も整理時にピットの集中をもって判断したもので、全体で60基を超えるピットがある。また北東側のSI14で発番したピットや南東側のSK35A、36B内のピットを含め考える必要がある。ピット群4扱いのピットでは、40cmを超える深さのピットが30基程度ある。平面形については均一性などの様相は確認できないが、P30.P3等のようにやや大きめで不整な例もある。複数の建物跡を想定させる検出状況ではあるが、炉跡・密な壁柱穴の並び、入口ピット群、床面・硬化面等は確認できない。

建物跡復元推定 第1の建物案は、P2.P61.P28.P14の4基を主柱穴とし、P4を奥壁ピットとする円形に近いプランの想定である。SK37BやP37.P50～55のあたりを壁際の柱穴群とし、主軸をN-19°-Eとする。15m×13.5m程度のやや大きめの規模となることが気がかりで、先の主柱4本を壁際の柱穴群とするやや小さめのプラン復元案も推定不可能ではない。南西側を入口と考えればピットの集中するP37～37の並びやSK36B・35A等が関わるピットの可能性として注目されるが、判断は難しい。

第2の案は、P14-P5-P61-P33の4本を主柱穴とし、SK37B、P3.P8等を壁際の柱穴とする、方形基調の



第184図 ピット群4出土土器(1) [14J0]

プラン案である。P40～P43.P45～P47を入口ピット群、P2 或いはその北側の未命名ピットを奥壁ピットと考える案である。主軸はN-36° - Wで、規模は14 m × 12 m程度とこれもやや大きくなる点が問題となるうか。主柱穴では南東のP62～64の集中も気がかりで、これとP4との対応を組み合わせる案もあろう。またP50～55の集中も注意され、とりわけ深さ80 cmを超えるP55は主柱的な柱穴の可能性も考えられる。

上記案以外では、SI14P46.P47から本ピット群のP63.P61.P52.P48と弧状に連なるピット群や、P60.P62.P18.P17.P21.P22.P33と連なるピット群を住居壁柱穴群とする想定もある。いずれにしても、覆土の観察も含め記録が不十分で判断が難しいが、上記以外の推定案も充分考えられ、更なる検討が求められよう。

遺物 イ4J0及びJ1グリッドから出土した遺物はかなり多く、第184～197図に示した。主体を為すのは大洞C2式である(第184図8、第188図4.6)が、晩期前半安行3a式・同3b式対応の例や姥山Ⅱ式系(第188図5)、細密沈線文系の例(第189図1)も比較的目立つ。本遺跡内にあつては晩期前半の土器が多いグリッドと言えるかもしれない。また第187図や第194～197図に示したように、大洞C2式新段階～A1式が比較的多く認められる点も、中央窪地の評価に関わって重要である。第197図14～16のような明らかな浮線文の資料も注目される。

イ5J1・J2グリッドについては、ピット群5にも関わるグリッドで、第198図に出土土器を示した。ここではわずかな抽出ピックアップに留まったとはいえ、そもそも土器出土数量もやや少なくなり、型式分類の傾向も捉えづらい。各ピットからの出土土器も示したが、示した以外で確認できたものではP6から瘤付1点、大洞1点含め計6点、P11から瘤付1.B群・A群各1点、P26から後期安行式が1点、瘤付が1点、P27から瘤付が1点、P33から後期安行式が1点、瘤付1点が確認されている。他のピットからも無文の小片等は出土している。総じてここでのピット出土土器は後期後半が目立っており、時期を示唆しているかもしれない。グリッドでの集計では大洞式が多い。石器は打製石斧が27点等多数出土している。

イ4J0グリッド(旧名称イ4K0グリッド)からの出土資料はかなり多く、復元個体も一定数あるが、ここで資料は特に抽出選択を限定して示さざるを得なかった。このグリッドは中央窪地包含層範囲内で、後期の資料はやや少なく、晩期中葉の資料が主体を占める。また大洞A1式も一定量出土しており、本来丁寧な整理・報告すべきであるが、遺憾ながら代表例の提示に留まる。

第184図1は二溝間の点列が口頸部に二段巡る深鉢で、口縁端部のB突起も比較的密に巡る。口縁直下及び頸部に縄紋帯(LR?)が設けられる。2は体部縄紋施紋の鉢で、沈線や刺突は丁寧な施文である。堅く緻密な質感で、胎土には細かな透明粒をやや多く含むほかは鉱物が少ない。色調は外面にぶい黄褐色、内面黒褐色を呈する。3は小形の壺で外面口縁はナデ、体部はナデ～ミガキ調整、内面は口縁部ミガキ、体部ナデ調整である。口縁～体部上半は全周する。胎土には白色粒を多量に含み、色調は内外面明赤褐色を呈する。口縁が若干波打つような凹凸があり、突起状の部分にも見えるが、意図的なものか歪みかは不明である。4は沈線→縄紋LR→無文部ミガキで文様が描かれる鉢である。沈線はやや太めで、口縁端部にB突起を組み合わせた大柄な突起2単位が付されている。色調は内外面黒褐色を呈し、胎土には白色粒・角閃石を多量に含む。5は体部破片で広口壺状の器形としたが、傾きも含め不明な点が残る。内面ミガキ調整が観察されることから、上下逆で鉢と考えた方が良いかもしれない。沈線→縄紋LR→無文部ミガキで文様が描かれる。胎土には白色粒を多量に含み、やや緻密さに欠ける胎土と観察される。色調は外面にぶい黄褐色、内面黒褐色を呈する。6は大洞C1式?の鉢で、厚手の作りである。沈線→縄紋RL?→無文部ミガキのようだが、摩滅著しく不鮮明である。胎土には角閃石・雲母を多量に含み、色調は外面橙色、内面黒褐色を呈する。口縁端部のやや欠けている部分にも突起・装飾を有するようである。7は台付土器の脚部で、沈線によりL字状や弧



第185図 ピット群4出土土器(2) [14J0]

状の文様が描かれるが、全体の文様意匠推定は難しい。器面荒れ・摩滅で不鮮明なところがある。

第184図8は大洞C2式の小形深鉢で、比較的遺存良く完形に近く復元された。全体からすると80%程度の遺存となろう。頸部は沈線→縄紋LR→無文部ミガキだが縄紋は摩滅で不鮮明である。口縁部沈線直下の刻みも沈線施文後の施文である。体部の擦糸紋はRのようだが細く節不鮮明であり0段rの可能性もある。頸部文様は雲形文由来のZ字状文末端が区画線に完全に接し、或いは共有的な施文となっている。口縁端部には細い線及び刻みが付される。若干上位に突出する突起は1単位のみ確認できる。内面はナデ～粗いミガキ調整、胎土には石英及び白色粒を少量含み、色調は内外面黒褐色を呈する。9は口径11cm、高さ5.7cmの小形壺状の土器で、「小型土器」としても良いかもしれない。沈線と刺突で文様が表現されるが、刺突はいずれも先端鋭角な工具による。頸部と体部下方～底部の刺突とでは若干異なっており、詳細な観察からの工具や手法上の検討も必要であろうが為し得ていない。内面ナデ調整で、胎土には白色粒・角閃石を少量含む。色調は外面にぶい黒褐色、内面にぶい褐色を呈する。10は壺の口縁部でやや大きめの突起1単位が確認されるものである。5/6周程度遺存しており、複数単位となる可能性は低い。突起は前面に突出するB突起と組み合うように、内面側で二山のB突起状突出が2個1対で付されていたようであるが剥落している。内外面ミガキ調整で、胎土には白色粒を多く含み、色調は黒褐色を呈する。

第185図1～4は「イ4K0ピット」として取り上げられている資料である。ピット番号ではP2がP67、P4がP12、P8がP2、となる。時期推定の参考になろうが、小片のため判断は難しい。5はやや小形の壺で、外面は比較的よく磨かれている。角閃石・雲母を多く含み、色調はにぶい橙色を呈する。6は壺の体部下半～底部と推定され、内外面ナデ調整が観察される。器面全体が荒れている。7は壺状の小形鉢で、内面ナデ～ミガキ、外面ケズリ～粗いナデ調整が観察される。色調はにぶい黄橙色で、胎土には白色粒をやや多く含む。

第185図8以下は破片資料で、概ね型式、器種、系統などに注意しながら配列した。8.9は中期の土器である。10は加曾利B3式～曾谷式もしくは瘤付系第1段階辺りであろうか。11は縦長二連の突起が付されるもので、やや異質な感がある。13は壺または注口土器、15は安行系台付鉢脚部であろう。16以下には晩期安行式、姥山Ⅱ式系などを示す。23は各ブロックグリッド出土土器第225図2と同一個体である。28.29は台付脚部で三角形等の透かし孔が確認される。

第186図は大洞式系の資料で、主に大洞C2式中段階位までの資料を示す。5の鉢では、他グリッド等でも幾つか確認された、2個1対の焼成前穿孔が確認される。7.8及び24～27は注口土器で、27はより新しい様相を示す。25の小形壺では破片下端に貫通孔があり、形態等も含め不明な部分が残る。

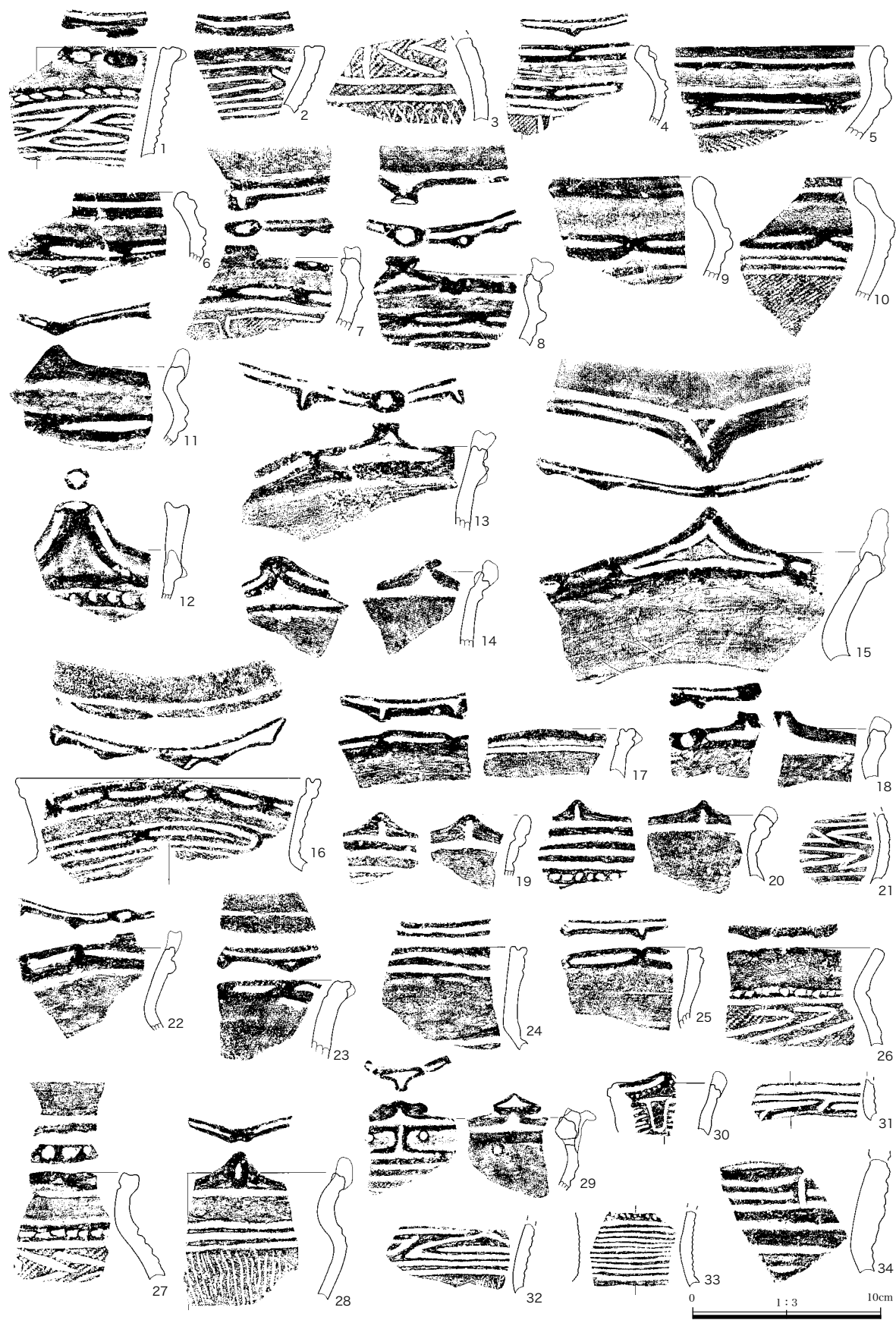
第187図は大洞C2式の中段階～大洞A1式までの資料を示す。口縁下に無文帯を擁し、その直下で眼鏡状の隆帯を付す鉢が目立っている。また15.24.25のような口縁部にA突起に連続する隆帯を設け、その下位の頸部を無文とする鉢もやや多い。その他幾つかの変異があり、できるだけ多様性を示せるよう選択しているが、グリッド出土土器や細別時期毎の様相を示すにはやや不十分な提示となっている点了解されたい。

ピット群4相当グリッドの内、中央窪地包含層範囲内でもあるイ4J1グリッド（旧名称イ4K1グリッド）の出土資料を第188～197図に亘って示す。このグリッドからの出土土器はかなり多く、復元個体も比較的多く認められた。破片はかなり限定しての提示であるが、イ4J0グリッド同様晩期中葉のものが主体を占めると共に、大洞A1式も一定量出土している。可能な限りの図化を試みたが、粗製土器の多くを掲載できないことをはじめ、不十分な点は否めない。

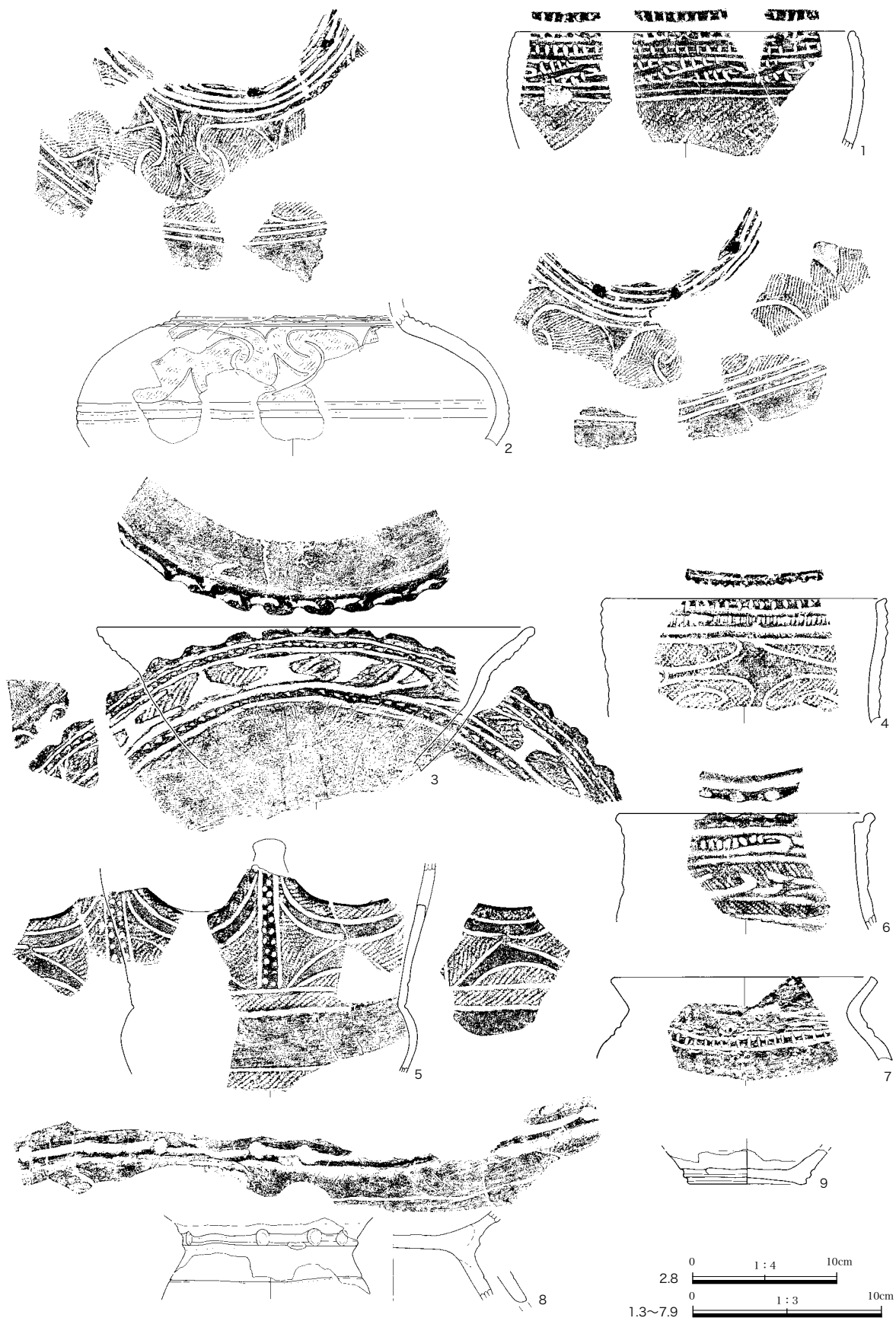
第191図はピット出土土器である。ピット番号は遺構図で示した番号に改称して示している。晩期前半の資料がやや多いように見受けられるが、小片ということもあって参考程度のものであろうか。



第186図 ピット群4出土土器(3) [14J0]



第187図 ピット群4出土土器(4) [14J0]



第188図 ピット群4出土土器(5) [14J1]

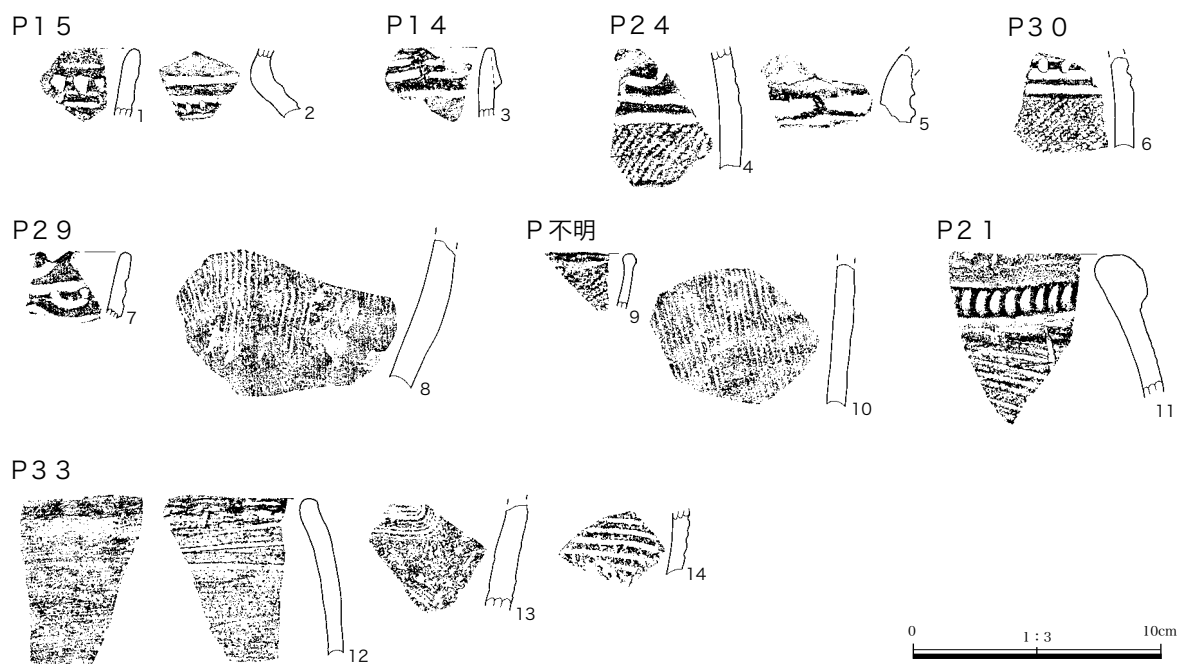


第189図 ピット群4出土土器(6) [14J1]



第190図 ピット群4出土土器(7) [14J1]

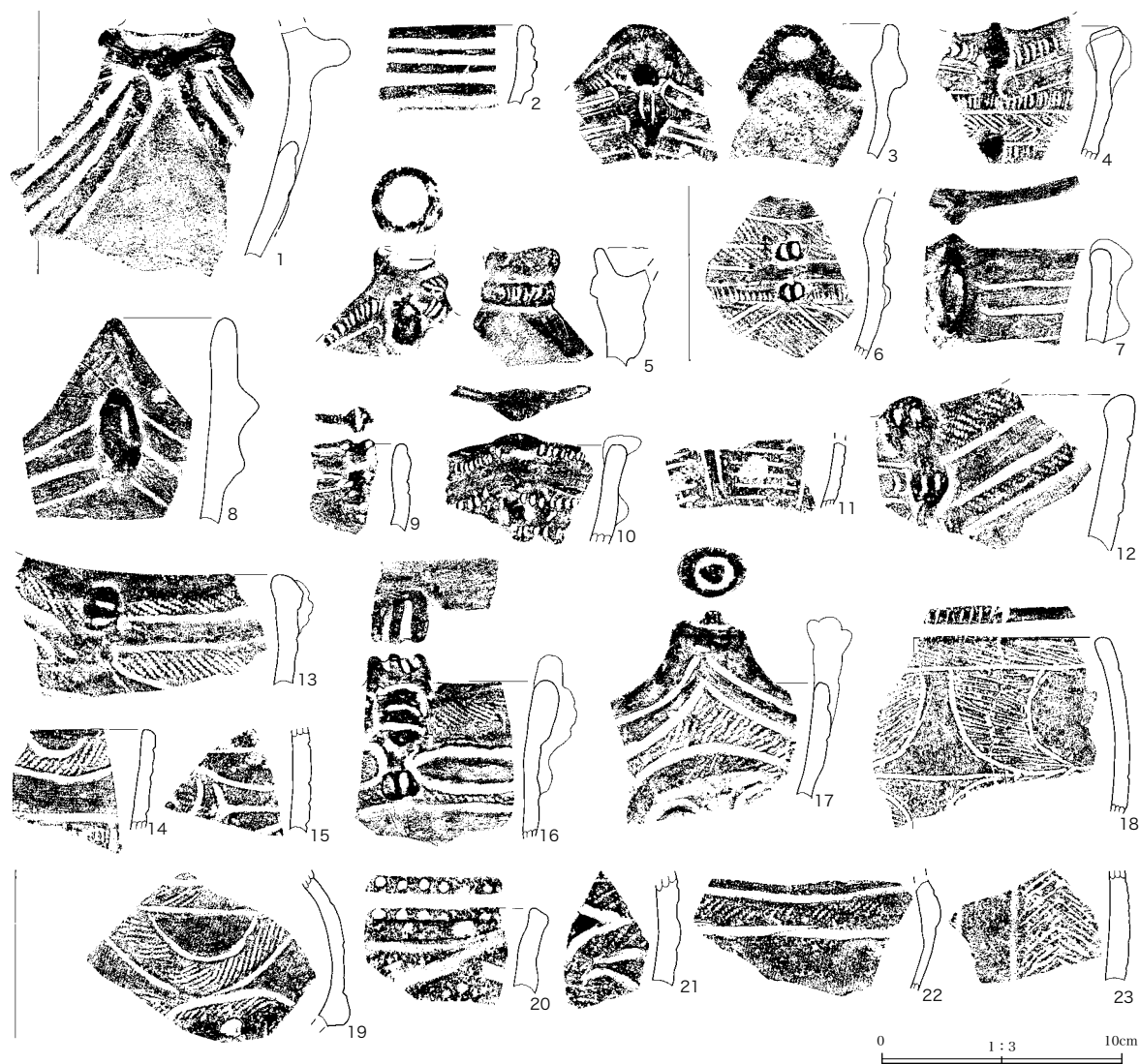
第188～190図に復元個体を示す。第188図1は口頸部に羊歯状文を施す深鉢で、沈線施文後のミガキは丁寧である。2は壺の肩部破片から復元したものだが、破片数の割にはあまり接合せず、文様はやや分かりづらい。沈線→縄紋LR→ミガキで、沈線部分はやや反復的になぞっているものの、さほど彫刻的な手法ではない。胎土には石英少量、白色粒をやや多量に含み、外面にぶい褐色、内面黒褐色を呈する。3は口頸部に文様が描かれる鉢で、削り取り状の無文ネガ部分と縄紋LR施文部とが交互配置的に配されている。端部から内面にかけて巡る装飾的な突起は全周するようである。4は頸部のやや広い範囲に雲形文変化の文様が配されるもので、口縁2段目の刻みは「溝底の刺痕」である。5は姥山Ⅱ式系の深鉢で、ある程度文様構成が判るものに復元された。口縁波状の単位は5もしくは6単位である。全体に比較的丁寧な施文で、縄紋LR充填後のミガキも丁寧である。内面もミガキ調整。胎土は緻密で鉱物が少ない傾向にあり、角閃石を少量認める程度である。色調は内外面黒褐色を呈する。6は頸部に文様が展開する深鉢口縁部破片で、浅い沈線施文など、やや雑な印象を受ける土器である。7は広口壺状の器形で、屈曲やや下位に刺突列が巡る本遺跡特有の土器である。8は台付鉢の脚部上位部分で、この範囲では全周するものの、上位や下位の破片が確認できず、全体の構成は不明である。拓影では分かり難いが、1か所のみ透かし孔の切り込み部が認められる。隆線→凹線→凹



第191図 ピット群4出土土器(8) [14J1]

点状の刺突→ミガキの施文順が観察され、胎土には白色粒多量、褐色粒少量を含む。

第189図1は口径24cm、高さ27.5cmを測る深鉢である。おおむね復元したが全体での遺存は40%程度であろうか。口頸部区画線内を横→縦→弧状の順で沈線区画し、細密沈線充填部と沈線や刻み施文後の無文ミガキ部分とで対比的な表現としている。但し細密沈線→区画沈線のように観察できるところもあり、沈線のナゾリ或いは追加施文部分があるのかもしれない。口縁端部にも1か所一定範囲に刻みが加わる。細密沈線は原則1本描きのように、間隔密なところとやや疎らなところがある。体部下半はミガキ調整だが砂粒移動顕著なケズリに近いところもある。内面もミガキ調整で、一部焦げの付着が認められる。外面にも炭化物・煤の付着があり、また黒変部分があることは二次的な被熱によるかもしれない。胎土には石英・白色粒・灰色粒・角閃石をやや多く含み、色調は外面橙色、内面にぶい褐色を呈する。2は深鉢体部上半で、この範囲では一周近い破片数がある。円形の刺突列が頸部に施されるが、体部の撚糸紋Rはこの直下では横方向、この下方で斜方向から縦方向の施紋となる。図示していない撚糸紋のみの破片20点程度があるが、おおむね体部上半部のようなものである。復元し得なかったが、無文の頸部は比較的短く、破片上端から程なく口縁になると推定する。内面ナデ調整で、胎土には白色粒・石英を多量、褐色粒少量含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈する。3は広口壺状の器形で、屈曲部に刺突加飾の隆帯が巡る。4は付帯口縁の土器で、付帯部及び体部に撚糸紋Rが施される土器である。付帯部が厚手となる特徴が見られる。内面ナデ調整で、胎土には石英粒を少量含み、色調はにぶい橙色基調である。5も付帯口縁を有し、体部に撚糸紋Rが施される土器である。撚糸紋Rは4～7条程度の単位幅が観察され、比較的密に施される。一部に見られる木口状工具による調整痕は、撚糸紋施紋前の第一次調整のようである。内面はナデ調整で、外面には煤の付着が確認される。胎土には石英・白色粒をやや多く含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈する。6は体下半部を主とする資料と口縁部破片から推定復元した深鉢である。概ねこの配置での復元を考えたが、若干疑問な点が残る、器形復元線も示していない。外面ミガキ～ヘラナデ調整で、色調はにぶい黄橙色を呈する。底部に指頭ナデ状の痕跡がある。7は付帯口縁の土器口縁部で、付帯上は指頭押捺状の痕跡が確認される。

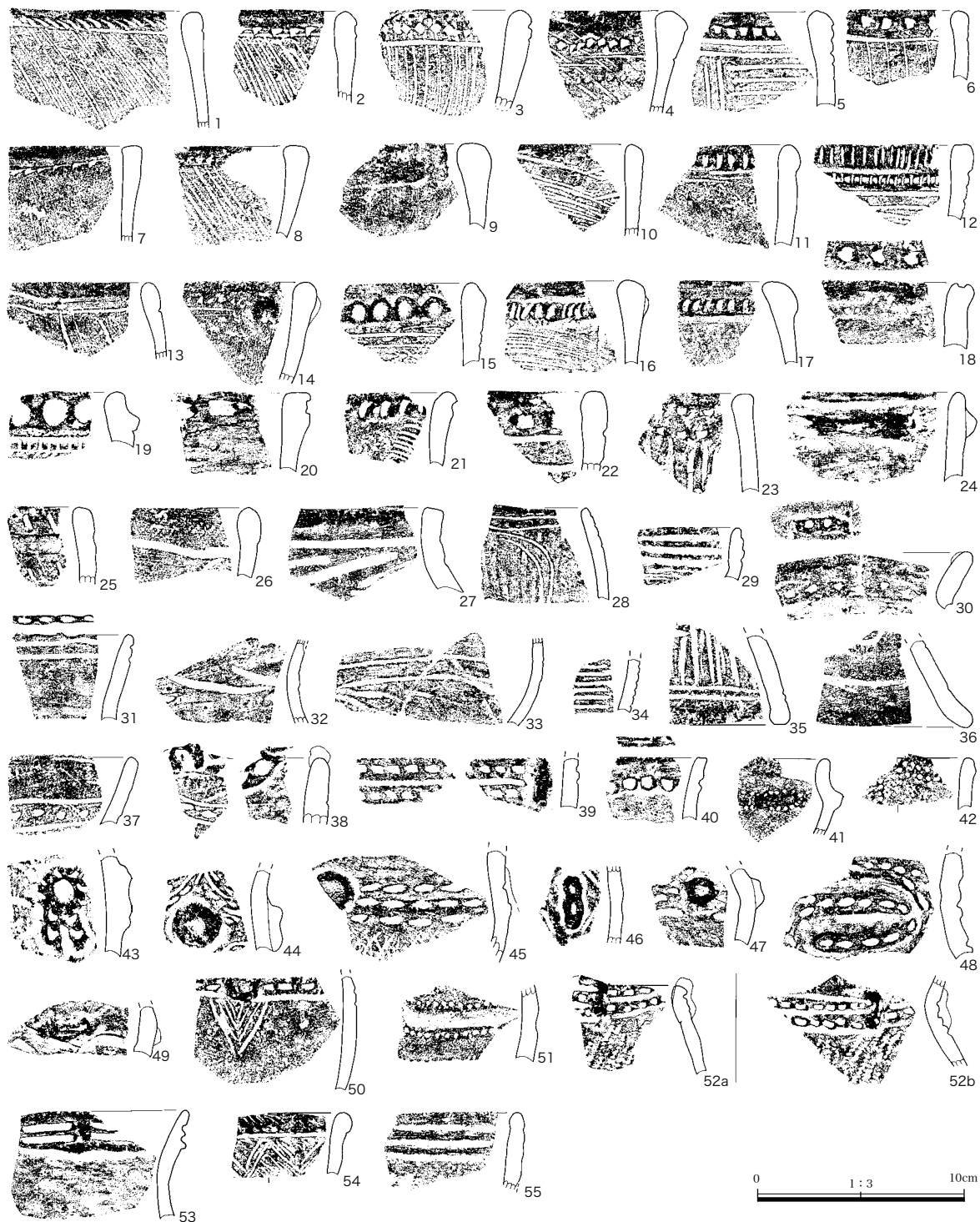


第192図 ピット群4出土土器(9) [14J1]

第190図1は無文の鉢だが、上面楕円形を呈するものの可能性がある。ただし遺存は1/6～1/8程度なので歪みかもしれない。外面灰黄褐色基調だが、破片の下方は明るい色、口縁部は黒味強い色となっており、割れた後に変色した資料と推定される。内面は灰褐色を呈し、胎土には石英・白色粒・灰色粒を多量に含む。2は皿状の無文鉢で内外面ミガキ調整の土器である。やや厚手ではあるが丁寧な調整であり、後期土器の質感を窺わせる。3は無文の鉢だが上面観正円とならず、歪みもしくは楕円状の形態作出の可能性がある。口縁端部に一定幅の低く上位に突出する粘土貼付がなされているが、装飾性に欠けるもので、どの程度意図的なものか、良く分からない。体部・内面ともナデ～ミガキ調整で、胎土には石英・白色粒を多く含む。5は深鉢体部下～底部の資料だが燃糸紋がほぼ底部まで施される。6は便宜的にここに示したが古墳時代の土師器坏である。外面口縁はヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面ナデ～ミガキ調整が観察される。胎土には角閃石をやや多く含み、色調は内外面にぶい黄褐色を呈する。

第192図は安行1式～同3b式、前浦式等を示す。1は大波緑の波頂部で、隆帯による表現が特徴的である。高井東式とも想定されるが、良く分からない。21.22は前浦式で、20も近い時期の土器となろう。

第193図は後期後半～晩期の紐線文系粗製土器、刺突文・沈線の特徴とする晩期前半～中葉の土器を示す。



第193図 ピット群4出土土器(10) [14J1]

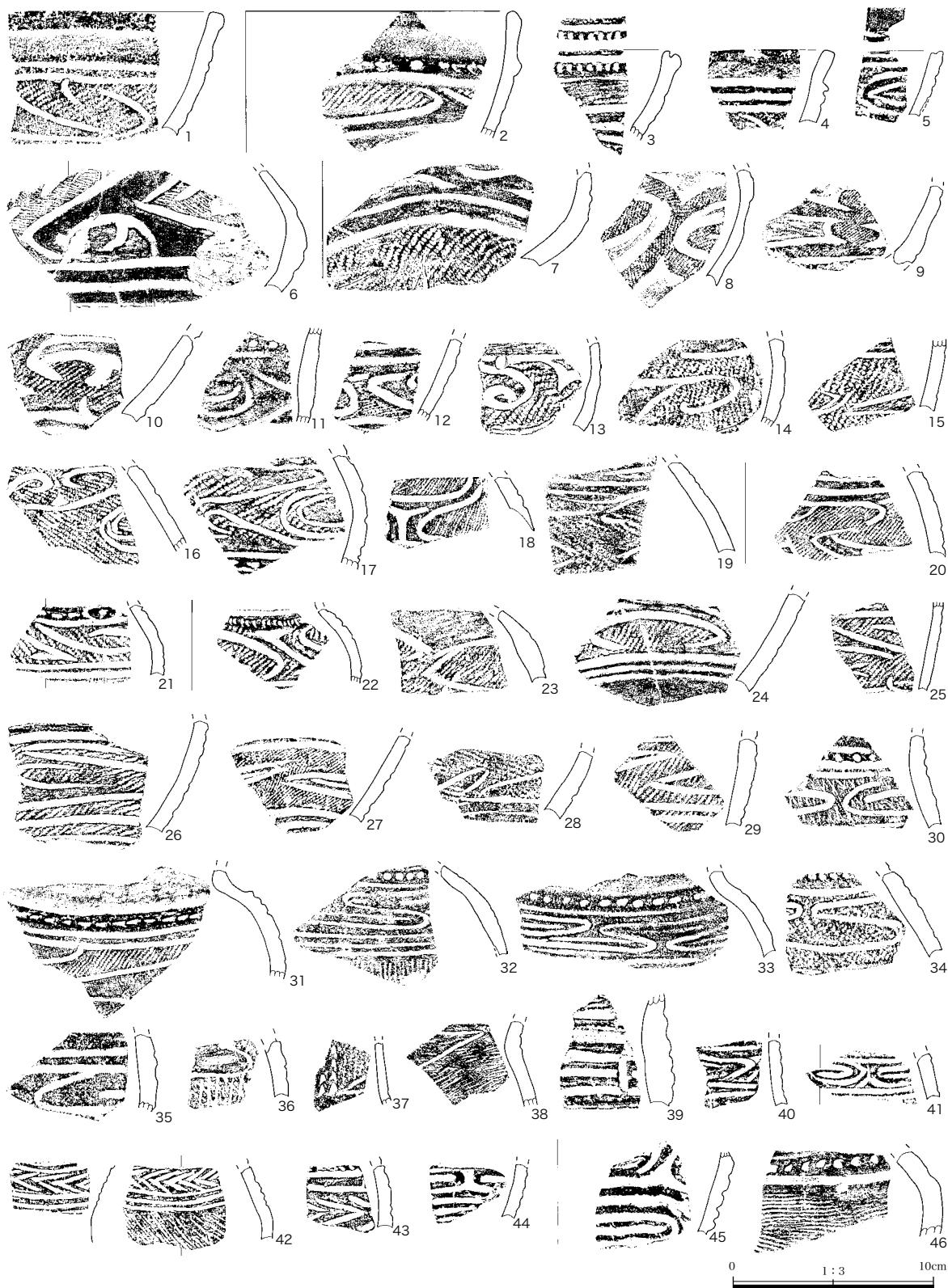
後者では43～47のような円形貼付文を有するものも多く認められる。

第194図には大洞C2式中段階位までの大洞式系を示し、引き続き体部破片を含め第195図に示す。第195図32以下に示した破片では大洞A1式に入るものもあろう。46は第189図2と同一個体か。42.43のような矢羽根状沈線例も大洞C2式新段階等で見られる文様である。39はかなり厚手で沈線も太い施文であり、かなり大形の土器となる可能性がある。

第196図には大洞C2式中～新段階、大洞A1式の土器を示す。A突起の作りや形態などで若干の変化は



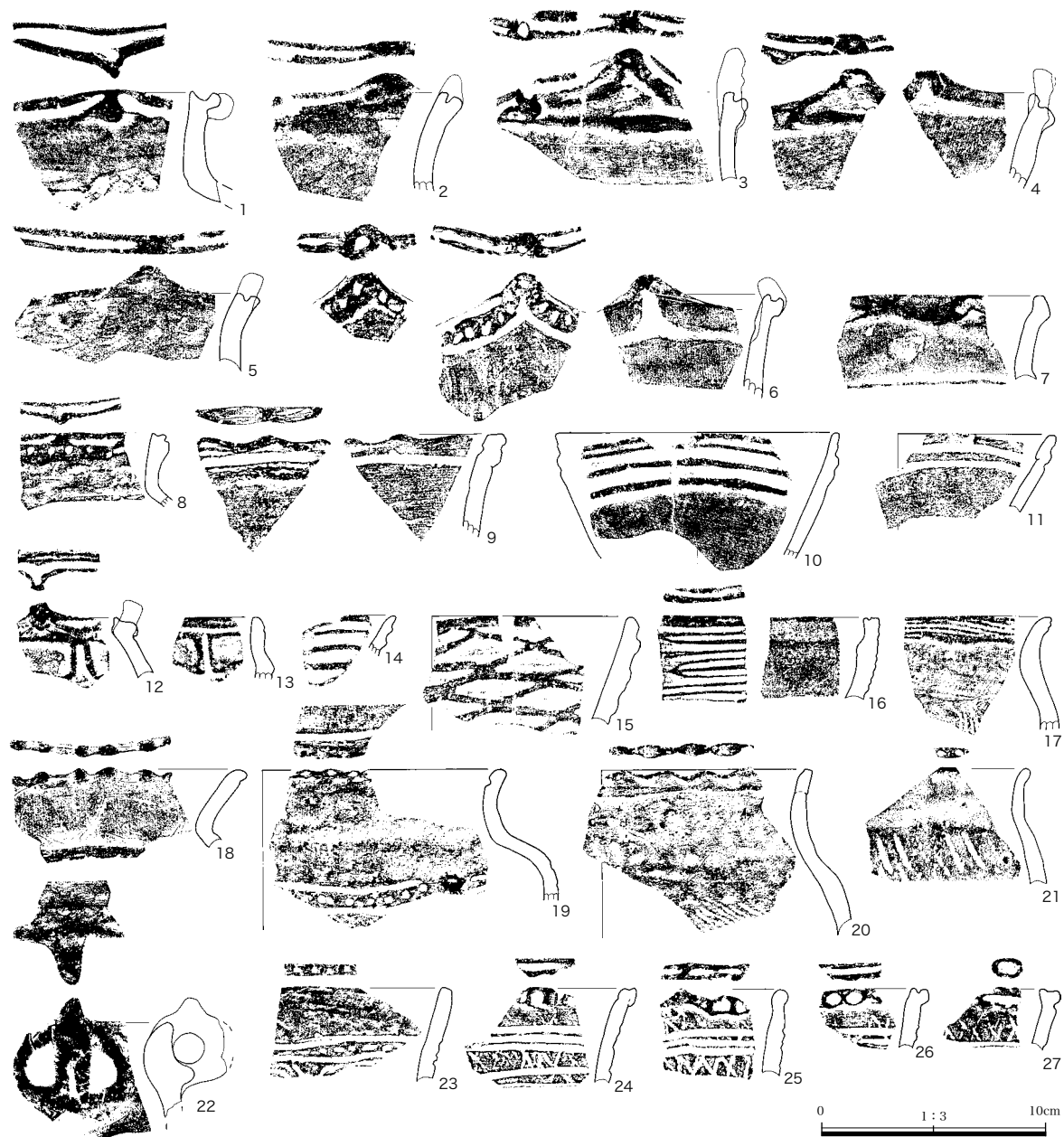
第194図 ピット群4出土土器(11) [14J1]



第195図 ピット群4出土土器(12) [14J1]

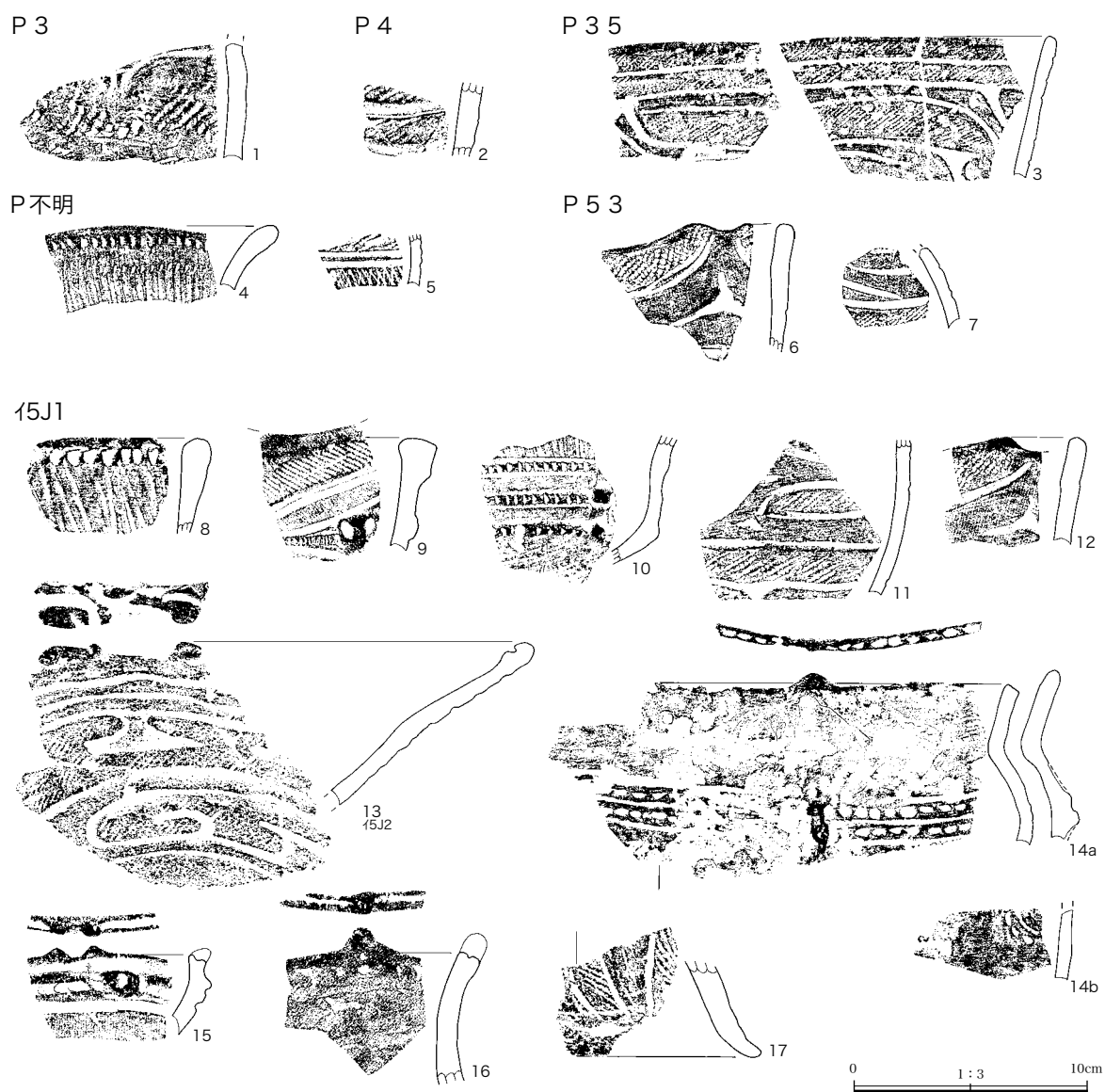


第 196 図 ピット群4出土土器 (13) [14J1]



第197図 ピット群4出土土器(14) [14J1]

あるものの、総じてこれらの破片群は規範的な文様施文であり、胎土や質感も概ね類似している。その中において隆起帯上に縄紋LRが施される15はやや異質で、異系統の可能性があろう。25以下で示すように、内面文様の発達も特徴の一つと言える。第197図にも同種の土器を示すが、刺突を加える隆帯の6や、口縁端部にレンズ状の凹みが巡る9等も異質な感がある。15.16は明らかな浮線文土器で、特に16は丁寧な作りが観察される。17以降は粗製の土器で、19は本遺跡に特徴的な刺突文土器である。24～27は網目状撚糸紋上に沈線施文がある土器で、小片で少数ながら特徴的なものである。22の橋状突起は下位が不明であるが、質感などから概ね上記土器群の時期と推定した。

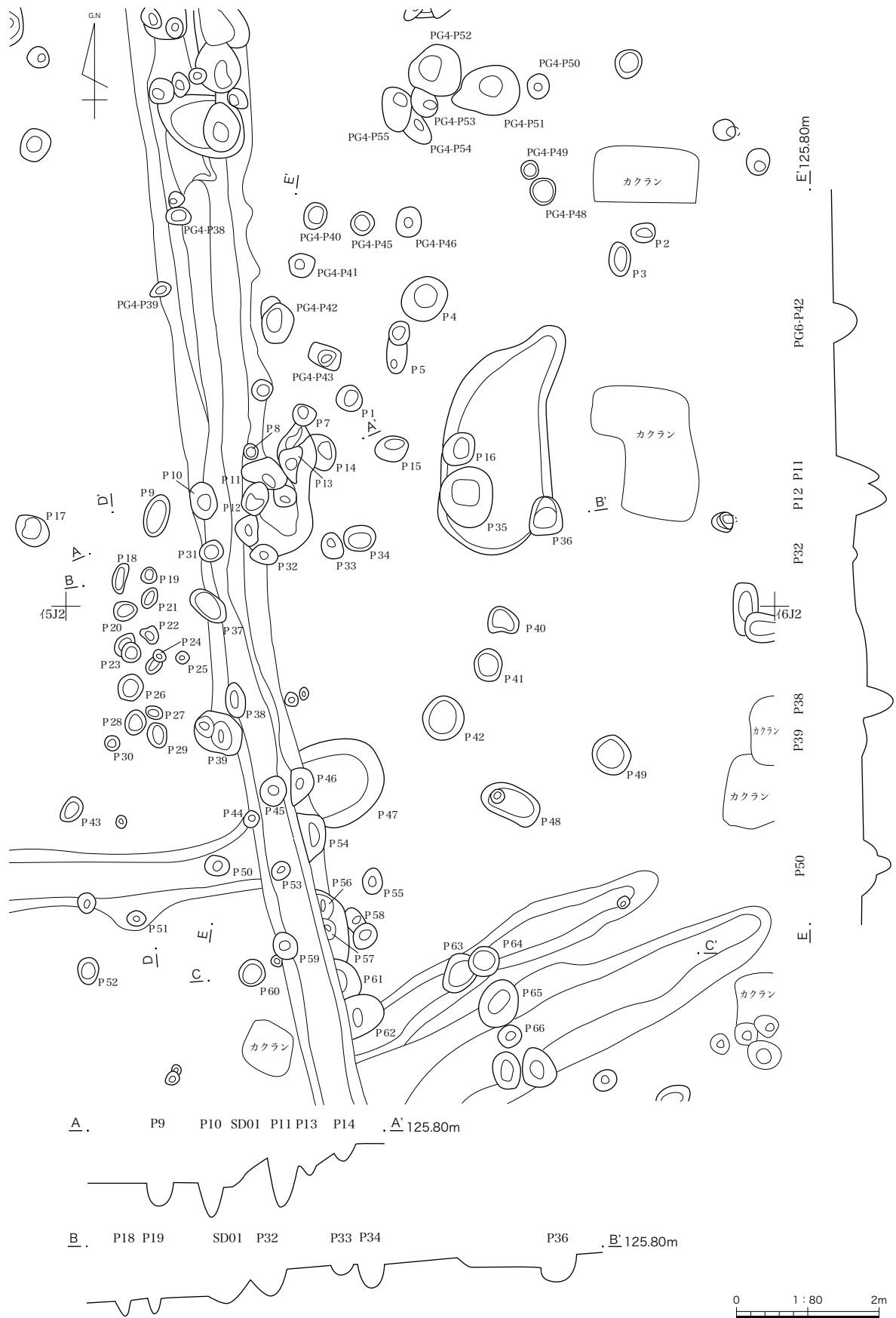


第 198 図 ピット群4・5出土土器 [15J1・15J2]

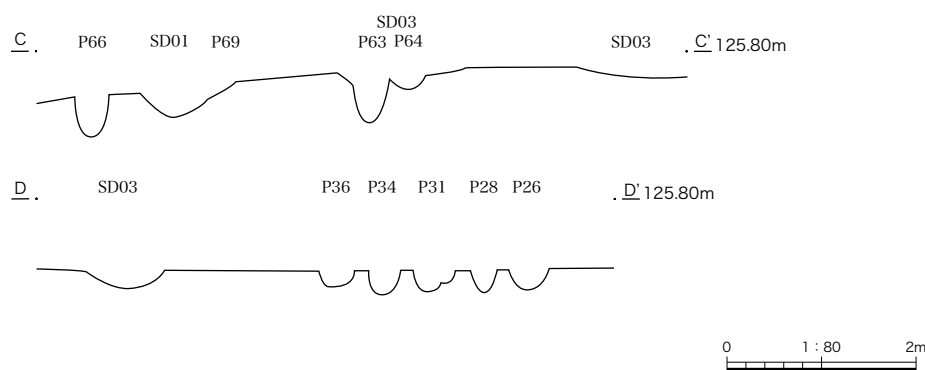
ピット群5（遺構第 199・200 図、遺物第 198 図）

位置・経緯・形態 集落内中央～東部で、遺構集中域内の内縁、窪地に面する位置となる。主に15J1・15J2 グリッドに位置する。北側ほぼ隣接・重複してピット群4がある。地形は東西方向で見るとやや西側が傾斜しており、中央窪地にかかる縁部分と言える。中央やや西側でSD01が縦断し、重複するピットも多いが、ピットと溝相互の関係が捉えられているものはない。幾つかは溝に伴うピットの可能性もあろうか。

本跡も整理時にピットの集中をもって判断したもので、全体で60基を超えるピットがある。本跡として示した範囲外にもある程度ピットの分布は認められており、これらも含めて考える必要がある。ピット群5扱いのピットでは、40cmを越える深さのピットが14基ある。他のピット群に比して、概ね上端径20～30cm程度のやや小さめのものが多い傾向があるかもしれない。発番していない深さ不明のピットもある。P18～P30のようなかなり集中する区域がある一方、p48.49周辺のように比較的散漫な区域もあり、規則的な並びもあまり見られないことから、建物跡の想定が難しい状況とも言える。炉跡・密な壁柱穴の並び、入口ピット群・



第199図 ピット群5(1)



No.	深度(cm)	No.	深度(cm)	No.	深度(cm)
P1	17.2	P23	24.2	P45	28.0
P2	8.8	P24	18.3	P46	34.1
P3	15.1	P25	10.6	P47	29.8
P4	43.4	P26	27.8	P48	36.8
P5	16.6	P27	14.7	P49	24.5
P6	25.2	P28	10.9	P50	40.5
P7	13.2	P29	39.4	P51	30.0
P8	30.3	P30	5.9	P52	13.9
P9	32.5	P31	36.7	P53	51.6
P10	34.4	P32	37.5	P54	34.5
P11	72.1	P33	24.8	P55	9.9
P12	92.7	P34	36.4	P56	16.6
P13	33.5	P35	43.0	P57	31.3
P14	14.4	P36	42.3	P58	14.2
P15	31.1	P37	3.3	P59	32.3
P16	55.4	P38	49.2	P60	41.4
P17	43.0	P39	12.0	P61	14.9
P18	25.4	P40	48.5	P62	7.0
P19	28.9	P41	15.4	P63	54.8
P20	29.6	P42	25.7	P64	21.2
P21	20.7	P43	14.2	P65	84.5
P22	14.7	P44	9.0	P66	3.8

第 200 図 ピット群5(2)

硬化面等は確認できない。また長方形土坑状や溝状の攪乱も見られる位置であり、注意される。

建物跡復元推定 第1の建物案は、PG4-P42-P4-P35-P12の4本を主柱と考え、北側範囲をPG4-P52、南側をP41、南西側をP18.21とする径8m程度でおおよその円形プランを考える案である。4本主柱と考えたピットはいずれも深さ40cmを超える良好な例である。入口ピットや奥壁ピットが無く主軸も示しがたいが、主柱配置からはN-6°-Wとなる。密な壁柱穴が巡らない点も問題となる。

第2の案は、P7.P8.P13あたりからP9.P18、またこの南側P27～P29あたりの集中を隅丸方形プランの北西部壁柱穴群と推定するものである。対応する主柱穴ではP37-P38-P45-P57の直線的な並び、またこれに直交するP33.P34、或いはP36やP48.49のピットなどとの組み合わせを考慮するが、整然としないところがある。P38.36.49.57を4主柱とし、P63.64がある北西-南東方向の溝或いはこの南側で併行する溝を住居周溝と考える案がある。一辺9.5m程度の方形プラン住居案だが、先のピット集中部以外、密な壁柱穴群を見出せず、特に東側でピットが少ないことなど問題も多い。或いはこれより一回り大きくプランを推定する案など、幾つかのプラン案があるものの判断難しく、更なる検討が求められよう。

遺物 イ5J1、イ5J2グリッド包含層の遺物については第198図にピット群4と併せての提示としている。ピット群4の項で説明したように、全体に出土量少なく、時期幅もある。本ピット群の時期絞り込みを行うことは難しいが、ピット出土土器は参考とすることはできよう。グリッドでの集計では大洞式が多い。石器では

このグリッドから石鏃が14点、石錘が8点、磨石類が3点、打製石斧が1点、磨製石斧が1点である。やや石器の出土量が少ない中で、剥片石器類が多い傾向があるかもしれない。

ピット群5に相当するイ5J1J2（旧イ5K1.K2）グリッドの土器を第198図に示す。イ5J1グリッドの主な資料はピット群4の項で示しており、補足的な提示とピット出土土器をここに示す。1～7がピット出土土器だが、他のピット同様、これらが各ピットの時期を指示するのか、判断は難しい。8～12は後期後半から晩期初頭の資料である。13はイ5J2（東ブロックともいえる部分）出土の大洞式鉢である。沈線→縄紋LR→無文部ミガキで、白色粒・石英を少量含み、色調は橙色を呈する。14は口頸部のやや大形となる破片である。頸部の刺突列+瘤、口縁端部の突起及び刺突列が本遺跡固有の「頸部刺突列土器群」の特徴を示している。器面がかなり荒れており、剥落部も多い。14bとして示した体部破片を当初同一個体と推定したが、弧状の沈線+刺突の特徴は14aの破片と異なっており、別個体と考えた方が良いかもしれない。

ピット群6（遺構第201図、遺物第202～205図）

位置・経緯・形態 集落内南部、遺構集中域内のほぼ南端で概ね窪地に面する位置となる。主にイ4J2・イ4J3グリッドに位置する。北東側でピット群4・5があるが、若干の距離があり、その間は主要遺構空白域とも言える。地形は、西側及び北側がやや下がっているが、急角度での傾斜とは言えない。中央窪地が南側で上がりかけている＝窪地の深さが減ってきている部分とも観察される。

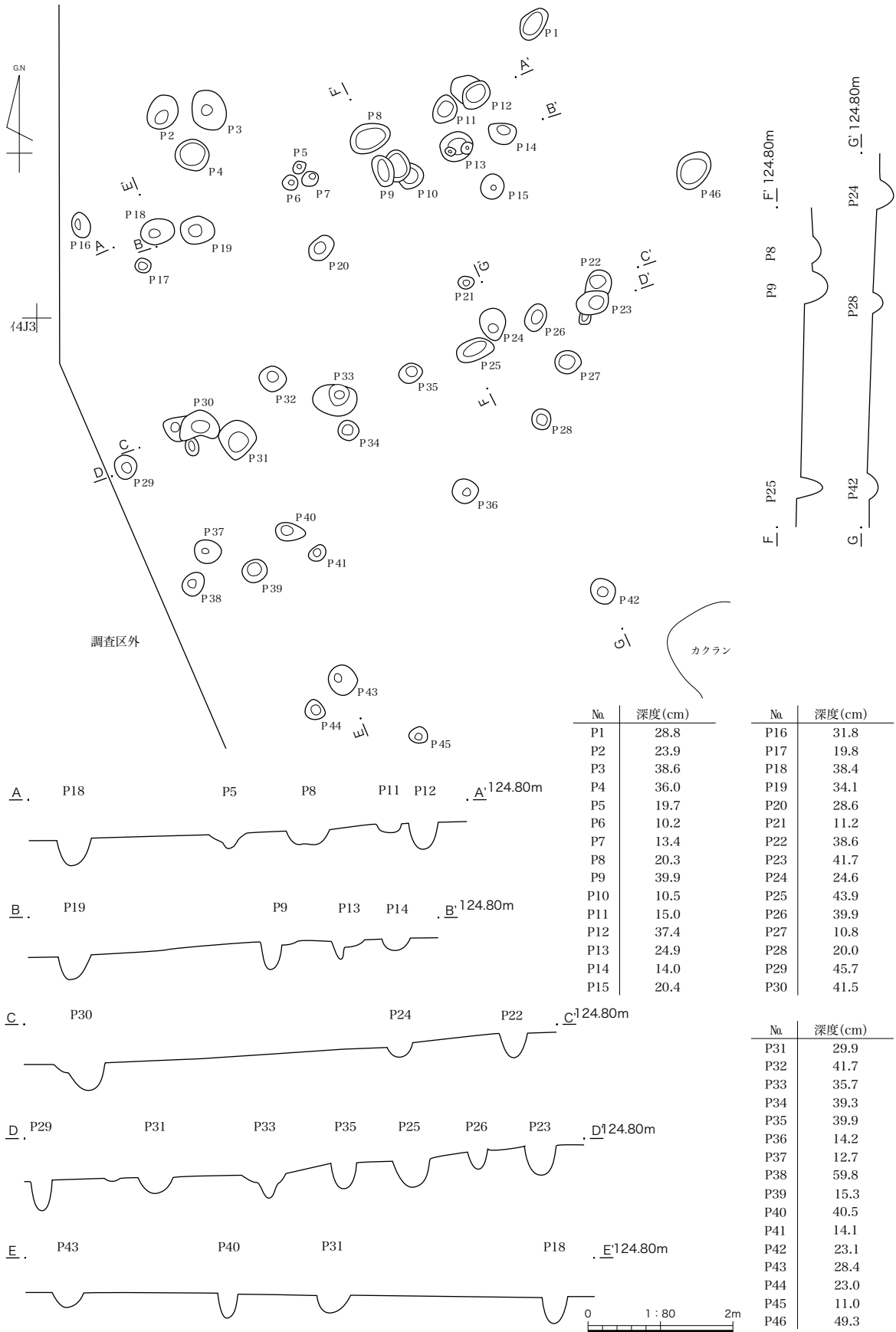
本跡も整理時にピットの集中をもって判断したもので、全体で46基のピットがある。南側の若干離れた位置などで未命名のピットはあるが、概ね8m×7m程度の範囲に集中している点は注意される。D-D'ライン上のピットは径30～50cm、深さ40～50cmの形態例が多い。他のピットについても、比較的平面形及び規模が均一的と言えるかもしれない。ピット同士の重複もあることから、複数の建物跡を想定させる状況である。炉跡・密な壁柱穴の並び、入口ピット群、床面・硬化面等は確認できない。

建物跡復元推定 第1の建物案は、D-D'ラインのP30（またはP31）-P33-P25-P23の4本と概ね平行するA-A'ラインのP18-P9-P12をもって掘立柱建物跡を考える案である。1間×3間（長軸5.3m、短軸3.1m）となるが、P29を含めて考えれば、更に桁行4間以上に伸びる可能性がある。D-D'ラインを主軸とすればN-70°-Eとなる。B-B'ライン上のP19-P9-P14やC-C'ラインのP30-P24-P22も含め考えて、建て替えまたは重複の2回以上の掘立柱建物跡を考える必要がある。南側のP36.P39等のピットも関わる可能性があり、或いは別の復元案（例えば軸を90°回転させて考える案）も考えられるところであろう。

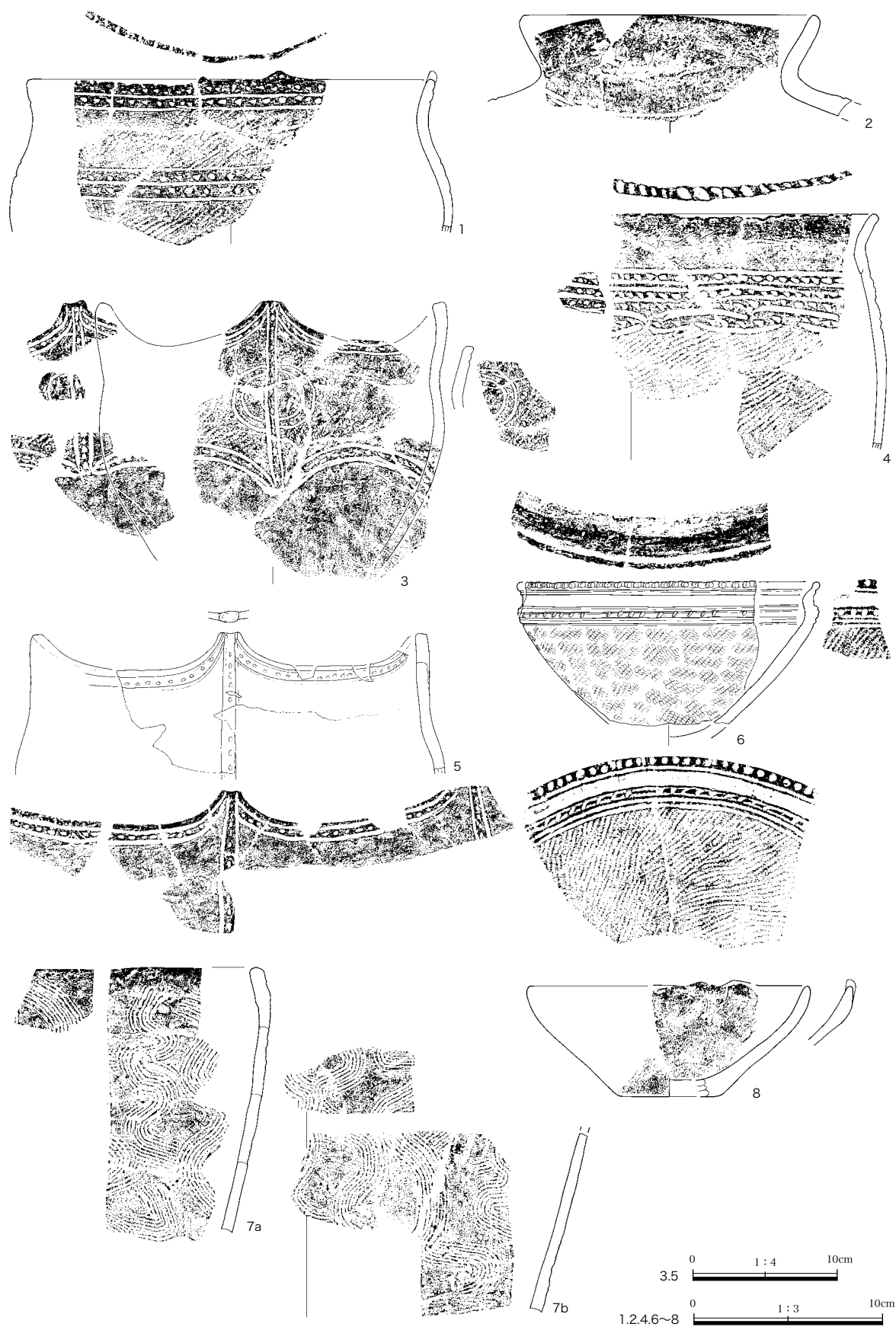
第2の案は先の掘立柱建物跡で考えたピットの内4本を住居支柱穴で考える案である。この場合P42.P43等は壁柱穴となり、軸長7～8mの楕円形プランと考えることができよう。但しピットが疎らで少なく、入口ピット群等を想定できるピットが無いことは問題として残る。

上記二案のいずれ、或いは他案いずれにしても、この区域に建物跡があるとの推定には、比較的蓋然性の高さを示すことができようが、更なる検討は必要であろう。

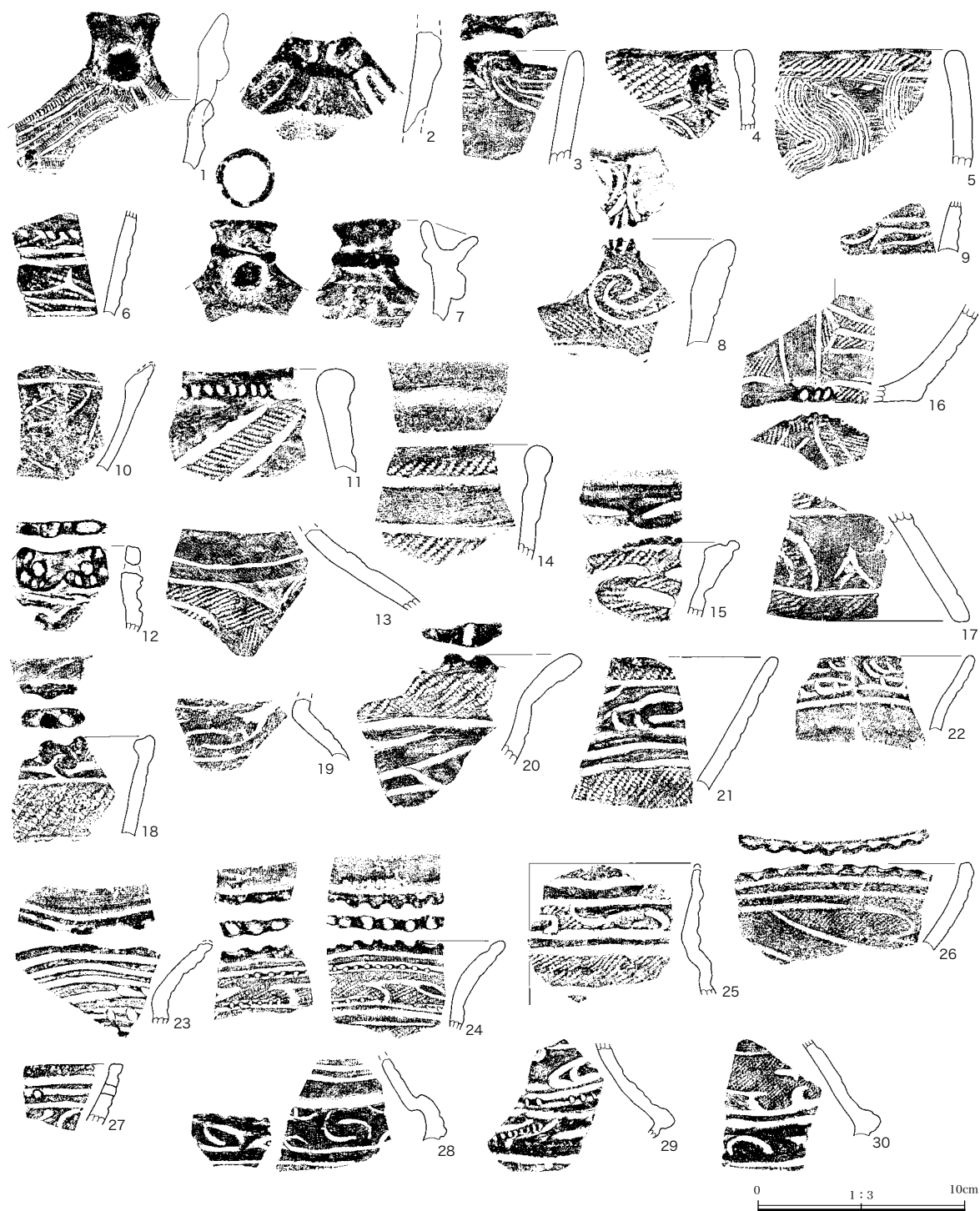
遺物 イ4J2グリッドから出土した遺物はかなり多く第202～205図に示した。グリッドでの遺物集計でも大洞式が多い傾向が捉えられている。やや恣意的なピックアップであるとはいえ、イ4J2グリッド出土遺物の主体を為すのは晩期で、大洞C1式・同C2式が目立っている（第202図）。他と比べ大洞C1式及び併行型式がまとまりを示しているようにも見える。一方第204図や第205図上段に示したように、大洞C2式新段階～同A1式がやや多くある点も注目される。浮線文の資料もある（第204図34）。第204図16は隆起帯上に刻みを伴う特徴的な土器で、T-2表採土器と接合した（第255図4）。



第201図 ピット群6



第202図 ピット群6出土土器(1) [14J2]



第203図 ピット群6出土土器(2) [I4J2]

I4J3 グリッドではわずかな抽出ピックアップに留まったとはいえ、そもそも調査区の問題もあって土器出土数量もやや少なくなり、型式分類の傾向も捉えづらい(第205図下段)。石器ではこのI4J2 グリッドから磨石類が10点、石鏃が37点、石錐が4点、石錘が19点、打製石斧が7点、磨製石斧が11点である。I4J3 グリッドからは磨石類が1点、石鏃が2点、石錘が2点である。

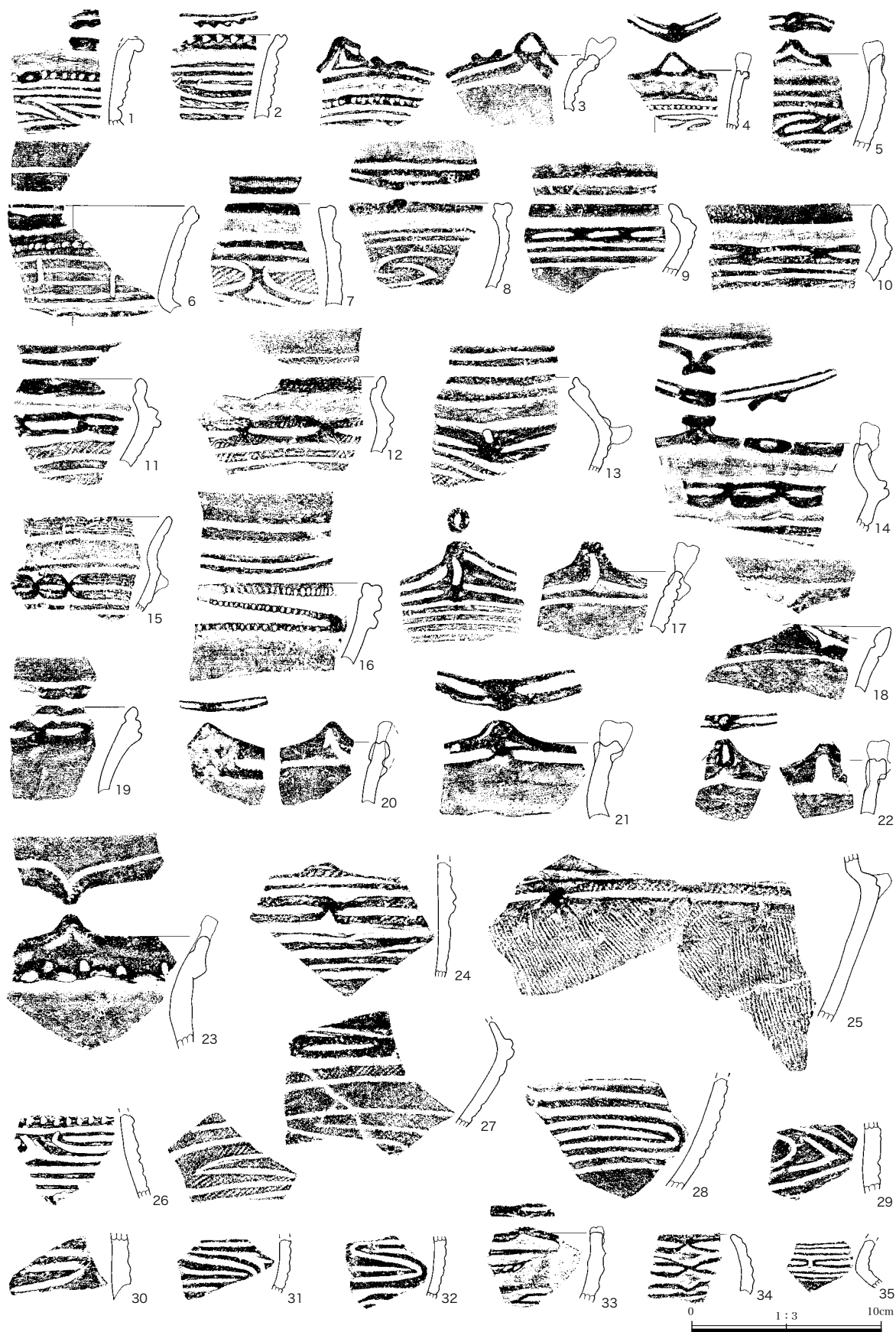
ピット群6が位置するI4J2・J3(旧I4K2・K3)グリッドの土器を第202～205図に示す。第205図下段4～12のみI4J3(旧I4K3)グリッド出土土器である

第202図1は口縁部の大形破片で、沈線→無節L→刺突→(?)無文部ミガキで文様が描かれる。内面はナデ調整、砂っぽい胎土で白色粒を少量含む。色調は外面にぶい褐色、内面にぶい橙色を呈する。2は広口壺状器形の口縁部で、頸部に横位沈線が一部確認される。沈線の巡る位置が屈曲部よりやや下位であり、刺突列が巡る一群と共通する。内外面ミガキ調整だが、厚手でやや雑な作りの感がある。胎土には灰色粒・白色粒をやや多く含み、色調は内外面橙色を呈する。3は大形破片及び幾つかの破片から推定4単位の波状縁深鉢と復元したものである。沈線→粗い縄紋LR→刺突・ミガキの順で文様が描かれる。胎土には不透明白色粒を極めて多く含むほか、石英も多く含む。色調は外面灰褐色、内面黒褐色を呈する。4は体部がやや膨らむ深鉢で、沈線→刺突・縄紋LR、刺突は下から刺すような手法が観察される。内面のミガキは丁寧で、胎土には白色粒を含み、色調は外面灰褐色、内面黒褐色を呈する。口縁端部にも押捺状の刺突が加えられるが、一定範囲のもの(図中央)が大きく深めであり、単位を示している可能性もあろう。5は口縁部破片から4単位の波状口縁深鉢を推定復元したものである。沈線及び円・楕円形の刺突で文様が描かれる。刺突施文後にやや粗いミガキが加えられ、内面も粗いミガキ調整である。胎土には白色粒・石英・灰色粒を含み、色調は内外面赤褐色基調である。全体的な質感は3と類似している。6は小形の鉢だが台付の可能性があるので、丁寧な作りの印象を受ける土器である。口縁直下に刺突列、無文帯を挟んで下位に「二溝間の截痕」、体部に縄紋LRが施される。二溝間の截痕は楕円形でやや斜方向に刺突され、また点列のないやや間隔をあける部分が認められ、注目される。胎土には白色粒を多く含み、色調は外面にぶい赤褐色、内面黒褐色を呈する。7a,7bは条線がやや粗い研磨調整上に施される土器である。内面ナデ調整、白色粒は少なく、やや緻密な胎土である。条線はかなり曲線的に描かれており、図形的意匠に近いようにも見える。8は口径14.6cmの小形の鉢である。外面灰黄褐色を呈し、内外面ミガキ調整である。

第203図には安行2式から大洞C2式古段階までの資料を主に示す。3.4.8等はやや異質な感がある。14.15は前浦式または前浦式直前型式、16は角底土器、17は台付脚部である。18以降に大洞式系をまとめた。羊歯状文から雲形文の文様が確認されるが、クランク文の25は、凹凸を残す器面調整と共に異質な感がある。28～30は注口土器である。

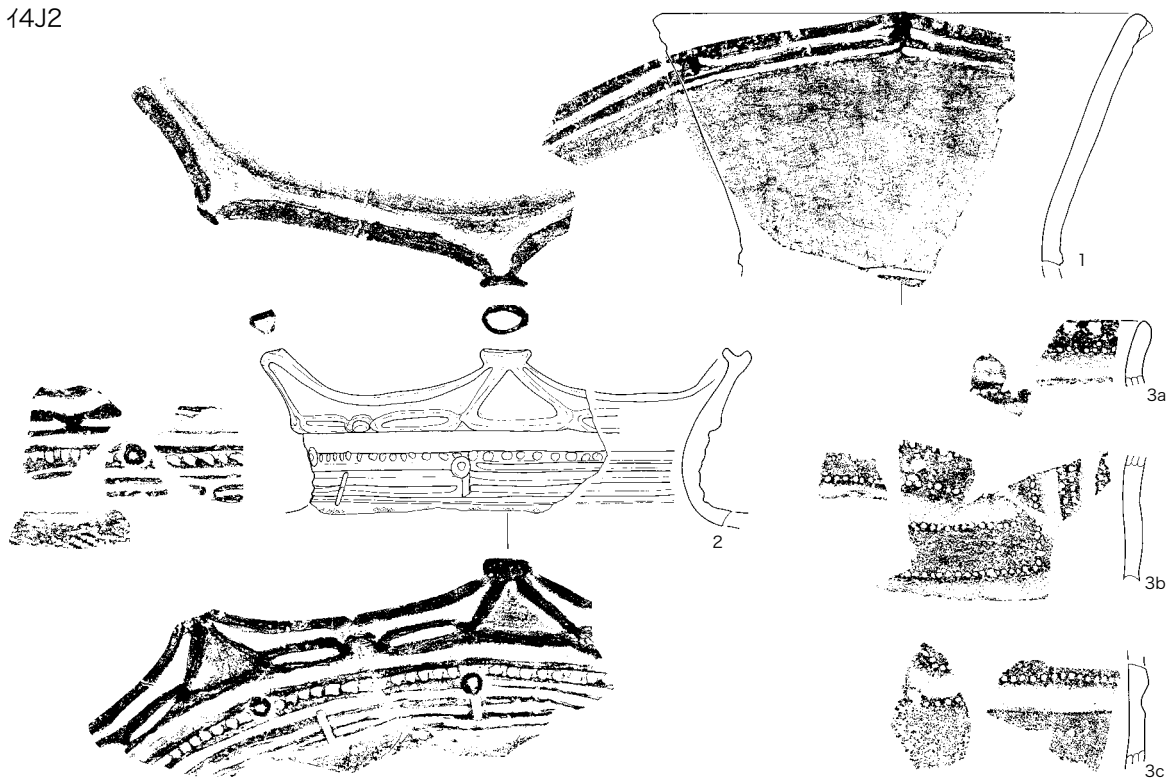
第204図には大洞C2式中段階以降の資料を示す。体部に雲形文変化の磨消縄文文様を残すものもあるが(7.8等)、沈線或いは隆線での文様表現が主体的となる。17以降のA突起や隆起線による文様を特徴とする一群は比較的文様の共通性が高い。その中であって16.23.24はかなり異質である。16は隆起線の上に刺突を加える「鳥屋式」との指摘が為されているもので、別グリッド出土資料との接合が判明している。接合後の図はグリッド・ブロック図第255図4に示した。34.35は浮線文の資料である。体部破片では28.31.32が新しい文様形態であり注意される。

第205図1は深鉢の口頸部破片で、破片下端に頸部の沈線も確認できる。瘤貼付→沈線→ミガキの順が観察される。薄手で硬質緻密な胎土で、石英・白色粒は少量である。外面灰黄褐色、内面黒褐色を呈する。C14年代測定分析を行っている資料である(第9章第1節参照)。2は広口壺状の器形で、4単位波状縁と推定される土器である。波頂部のA突起、この下位の眼鏡状隆帯が特徴で、無文帯を挟んだ下位には「溝底の刺痕」である円形の刺突が巡る。体部はほぼ欠失しているが一部縄紋RLが認められる。沈線→刺突・(円形貼付文→刺突)→無文部ミガキの順が観察される。隆線部、隆線内凹部のミガキは丁寧で、内面のミガキも丁寧である。胎土は緻密であるが鉱物は多めで、石英・白色粒・角閃石などをやや多く含んでいる。色調は外面褐色、内面にぶい褐色を呈する。3(3a.3b.3c)は隆带状の凸部と凹線状の部分で文様を表しているもので、線の縁に細かい円形刺突(一部2列)に沿っている。破片の中に赤味の強いところがあり、赤彩の可能性も残る。胎

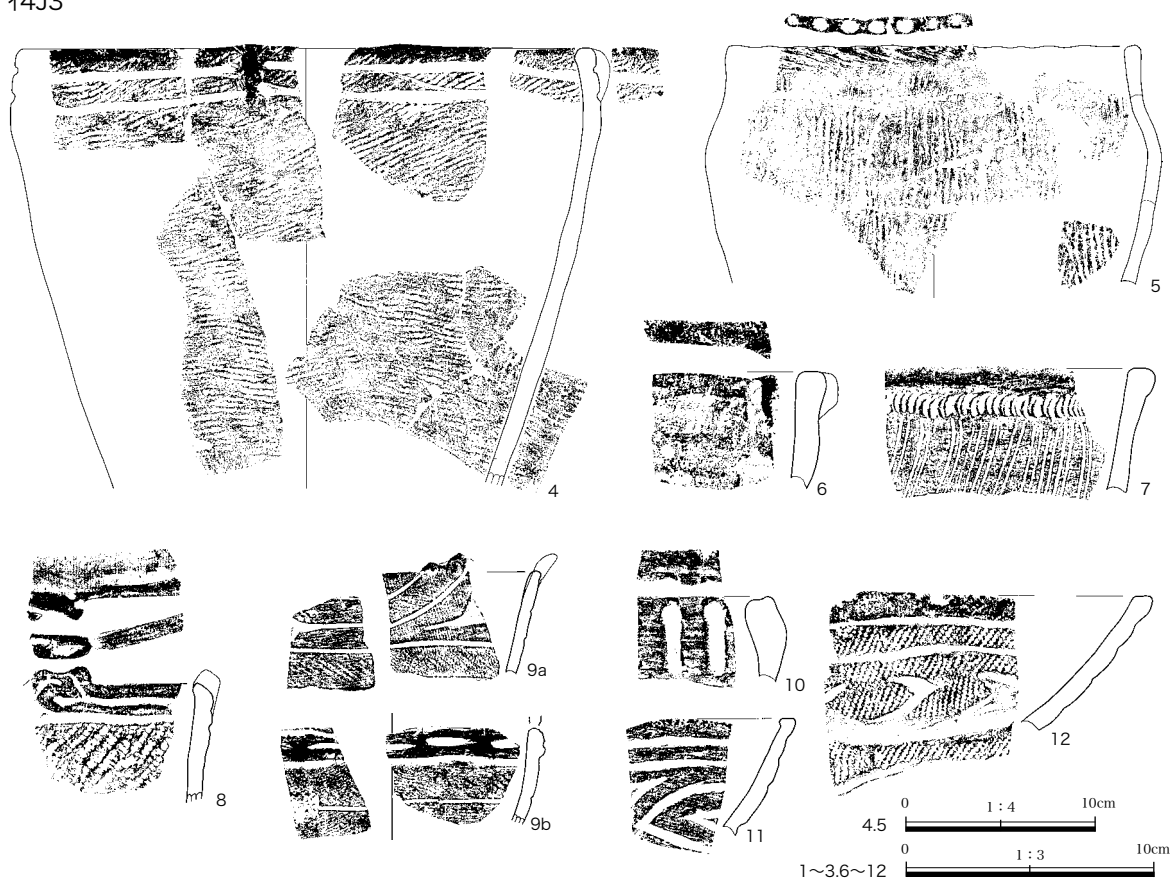


第 204 図 ピット群6出土土器 (3) [14J2]

14J2



14J3



第205図 ピット群6出土土器(4) [14J2・14J3]

土には褐色粒をやや多く含み、内面はミガキ調整である。かなり異質な土器で注目されるが、残念ながら径を復元できず、全体の構成も不明とせざるを得ない。

第205図4以下にはI4J3グリッド出土資料を示す。4は口縁部文様のみ描かれる後期後半の深鉢である。縄紋LR・突起作出→沈線の順で描かれる。内面はケズリ～粗いミガキ調整。胎土には白色粒・灰色粒を多く含み、色調は外面にぶい黄橙色、内面にぶい黄褐色を呈する。本例のような口縁部文様が平板で体部に文様が無いものは南関東安行式ではあまり例を見ないが、本地域では一定数あるようにも思える。5は粗いナデ調整後に擦糸紋が施される土器で、口縁端部に押捺状刺突がある。色調は内外面にぶい黄橙色を呈する。6以下ではかなり限定して資料を示す。8.9が晩期初頭、10は在地的な粗製土器の変化したものであろうか。

ピット群7（遺構第206図）

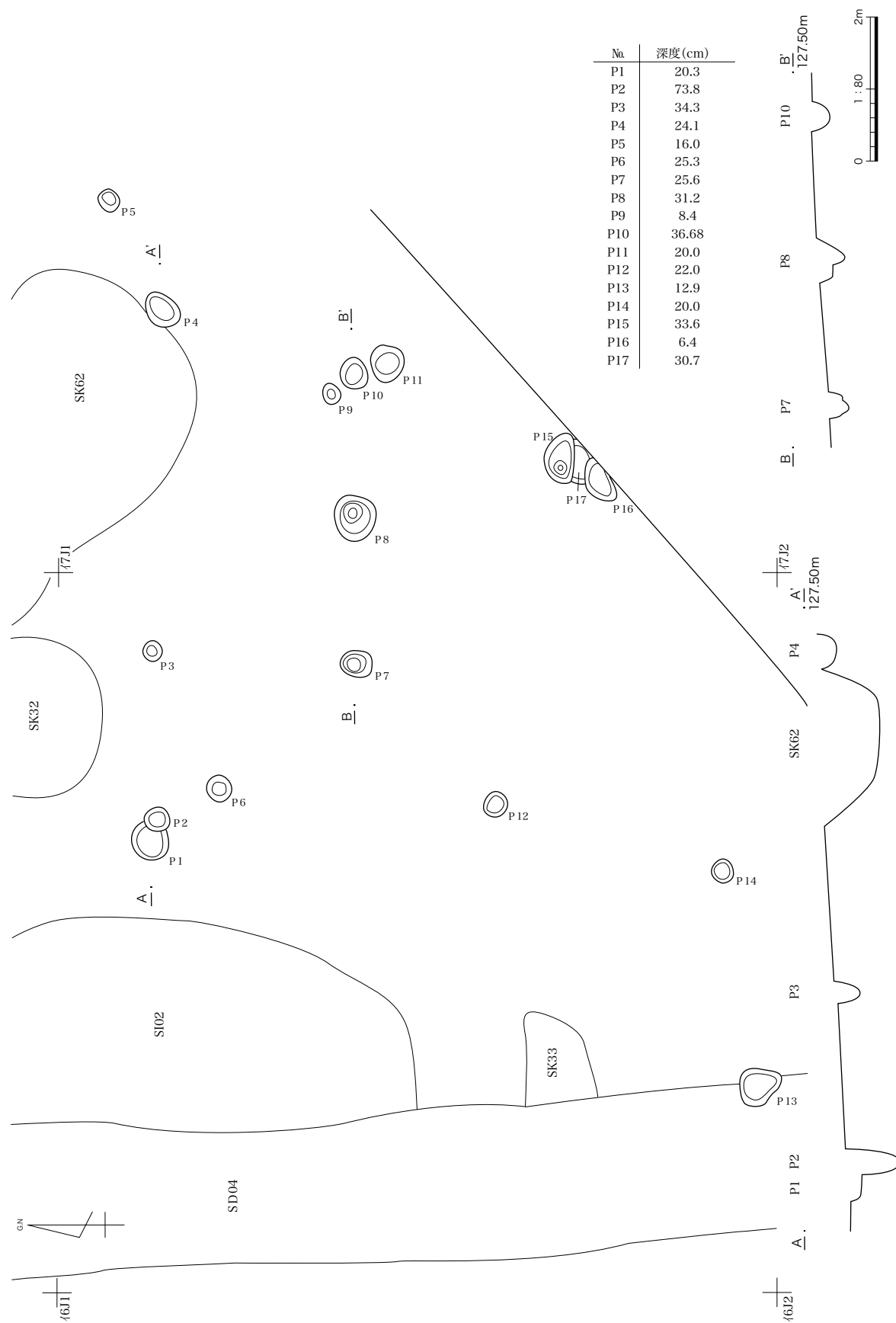
位置・経緯・形態 集落内南東部、遺構集中域の外縁またはややはずれた場所で、主にI6J1・I7J1グリッドに位置する。北西側にSI02、北側で隣接してやや大きめの土坑であるSK32及びSK62がある。地形は、ほぼ台地平坦面である。

本跡も整理時にピットがややまとまることから判断したもので、全体で17基のピットがある。他のピット群に比べ数も少なく、分布も散漫な感がある。P2が70cmを超える深さであるが、それ以外は10～30cm程度の深さの例が多い。概ね10m×9m程度の範囲で示し、西側以外の外側では更にピット分布が薄くなる。炉跡・密な壁柱穴の並び、入口ピット群、床面・硬化面等は確認できない。

建物跡復元推定 P1～P4の連なりとP7-P8-P10がそれぞれ直線的に並び、かつ両者はほぼ並行する。ピット間の距離も等間隔に近く、1間×2または3間の掘立柱建物跡を想定できる。P1とP4間の距離は7.4m、P7-P10間は4m、P3-P7間は2.8m、軸はN-90°である。上記ピットの並びから住居跡の4本支柱穴を想定する案も考えられるが、壁柱穴に相当するようなものは殆ど無く、この住居案の想定は難しい。掘立柱建物跡との推定は、比較的蓋然性高いが、時期については判断が難しい。一応縄紋時代後晩期のものとしておくが、軸がSD01・04と概ね直交する方向となること等も含め、更なる検討が求められよう。

遺物 I6J1グリッドから出土した遺物は示していない。I7J1グリッドについては集落外縁東側ゾーンとなるが、その部分からの資料を示した第252・253図には本グリッド出土例はない。またI6J1グリッドも住居群東ブロック範囲内だが、図示資料はない。グリッドでの遺物集計ではいずれも大洞式が多い傾向が捉えられている。

石器ではこのI6J1グリッドから打製石斧が20点、磨製石斧が6点、石錘が13点、石皿類が5点、石鏃が9点、石錐が1点である。I7J1グリッドからは打製石斧が2点、磨製石斧が2点、石錘が3点である。



第206図 ピット群7

第4節 土坑

概要 刈沼遺跡の第1次調査区では、総数62基の土坑が確認されている。これらの土坑は不整なものが多く、形態の分類や概観を行うことは難しいが、円形～楕円形及び不整形の浅いものが殆どである。円筒形の深い土坑や袋状土坑などは認められていない。分布では住居跡や包含層が分布する環状区域内の例もあるが、その外側のもも一定数認められる。第208図に示した調査区南半部分からも一定数確認されている。遺物については、出土しないまたは縄紋土器数点出土という例が多く、まとまって出土したような事例は殆ど無い。覆土はやや複雑な堆積の記録が為されている例が多いが、他の遺構との大きな差異を認めて良いかは判断できない。遺物が少ないことから時期判断も難しく、縄紋時代以外の土坑も相当数あることが想定される。

以下の報告では、土坑の分布から第209～225図に分割し、また単独的に位置するものは第211、226図等に編集して示した。そして、この分割図毎にそれぞれの記録を示しながら整理時の所見を含めつつ各土坑の調査結果を概略的に記載する。個別の詳細な記録は省略するが、計測値については第3表に示す。

SK01・02・03・04・05・06・35B（第209図）

南側調査区の北側で7基の土坑が集中している。SK01は楕円形土坑で比較的定型的な土坑だが、セクション写真や図が確認できず、覆土の内容・掘り込みは不明瞭である。SK02はピットとして扱いうる形態・規模のものである。この近辺の土坑は黒色土中での確認だが、底面はいずれも概ねローム面またはローム漸移層である。SK03の底面はやや凹凸があり、覆土の掘り込みもやや不明瞭である。SK04は不整な楕円形土坑で、確認面・壁とも黒色土で、概ねローム層の底面もやや凹凸がある。土層断面の記録もなく、遺構との判断も問題が残る。SK05・06は不整楕円形土坑で、いずれも攪乱と重なっている。こちらも覆土は不明で、底面は凹凸がある。SK06の底面はロームだが、壁の上位～中位は黒色土である。写真記録では底面中央にピット状の落ち込みがあるが、人為的なものか不明である。SK35Bはこの群の中で西側にある。重複発番したもので、SK35とは完全に別遺構である。断面の記録が無く、形態など不詳な部分がある。

SK32・62（第210図）

SI04の東側調査区南東端近くに位置する。SK32は比較的整った平面形態の円形土坑で、確認面はローム漸移層～ローム層、掘り上がり写真ではSK62と重なっている。底面は凹凸がある。遺物の出土があり、5点のうち2点を第227図に示した。晩期付帯口縁の破片及び縄紋のみの破片である。SK62は不整形土坑で2基重複の可能性を窺わせる形態である。遺構の掘り込みは比較的明瞭なようである。土層断面でも重複の可能性を窺わせ、平面図でも点線ラインを示したが、確定的な遺構重複との判断は難しい。

SK07・08・12・13a・13b（第211図）

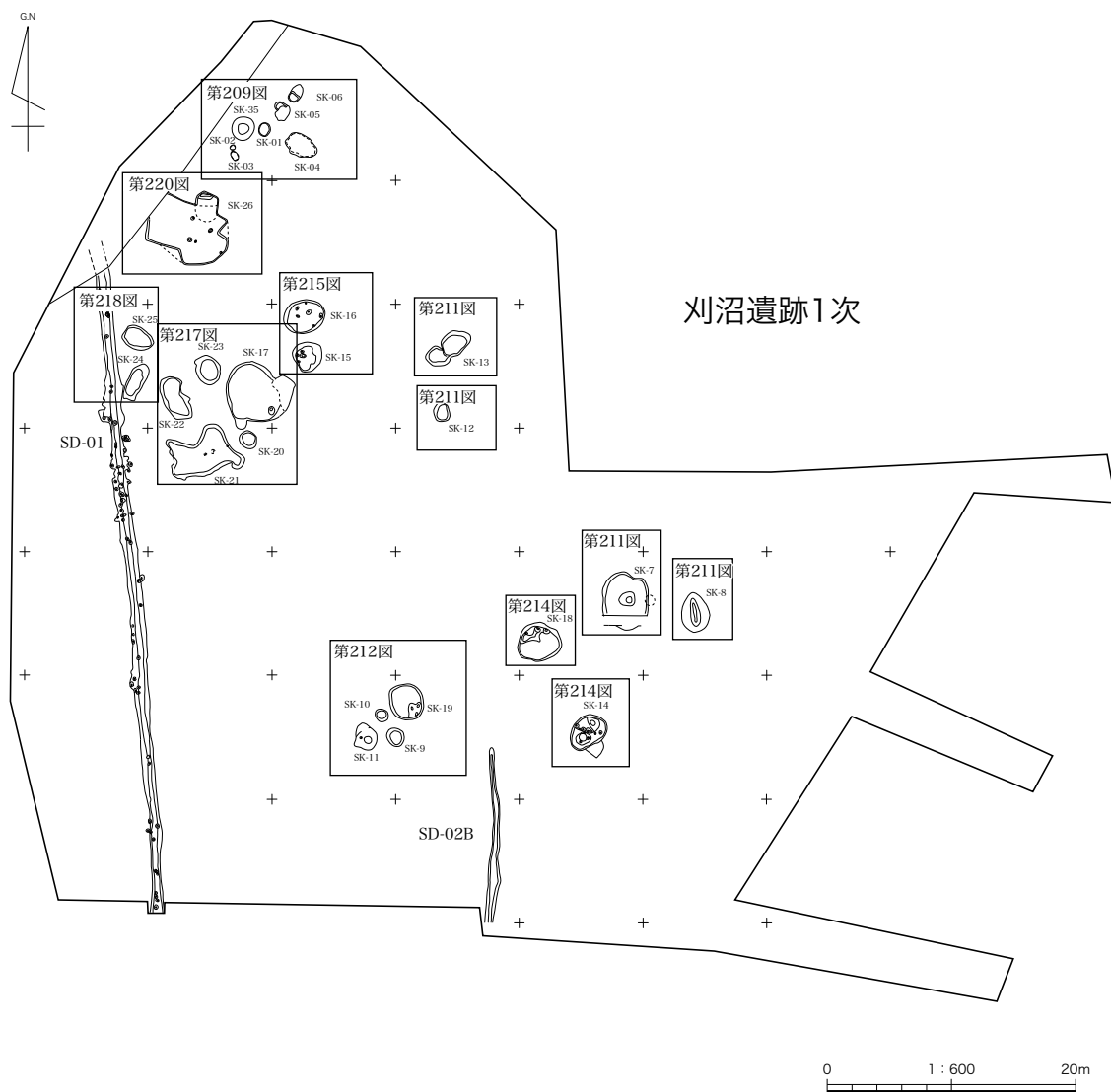
SK07・08は南側調査区の東側、SK12・13はそのやや北西にあり、いずれも台地平坦面上にある。SK07・08の西側にはSK14・18が比較的近くにあり、ややまとまっているとも言える。

SK07は黒色土での確認で、掘り込み・壁はやや不明瞭、ロームの底面はかなり凹凸がある。他にもピットがあるようだが記録不詳である。中央が一段下がるが、伴う掘り込みか別遺構かの区別は不明である。大きさ等からは竪穴状遺構とも捉えられるが、かなり不整な点は注意される。SK08は浅い不整楕円形土坑で中央が溝状に一段下がる。壁～確認面は黒色土～ローム漸移層で、掘り込み不明瞭なことから、遺構との判断に

第3章 刈沼遺跡第1次調査区の遺構と遺跡



第207図 刈沼遺跡第1次遺構区割り図(1)

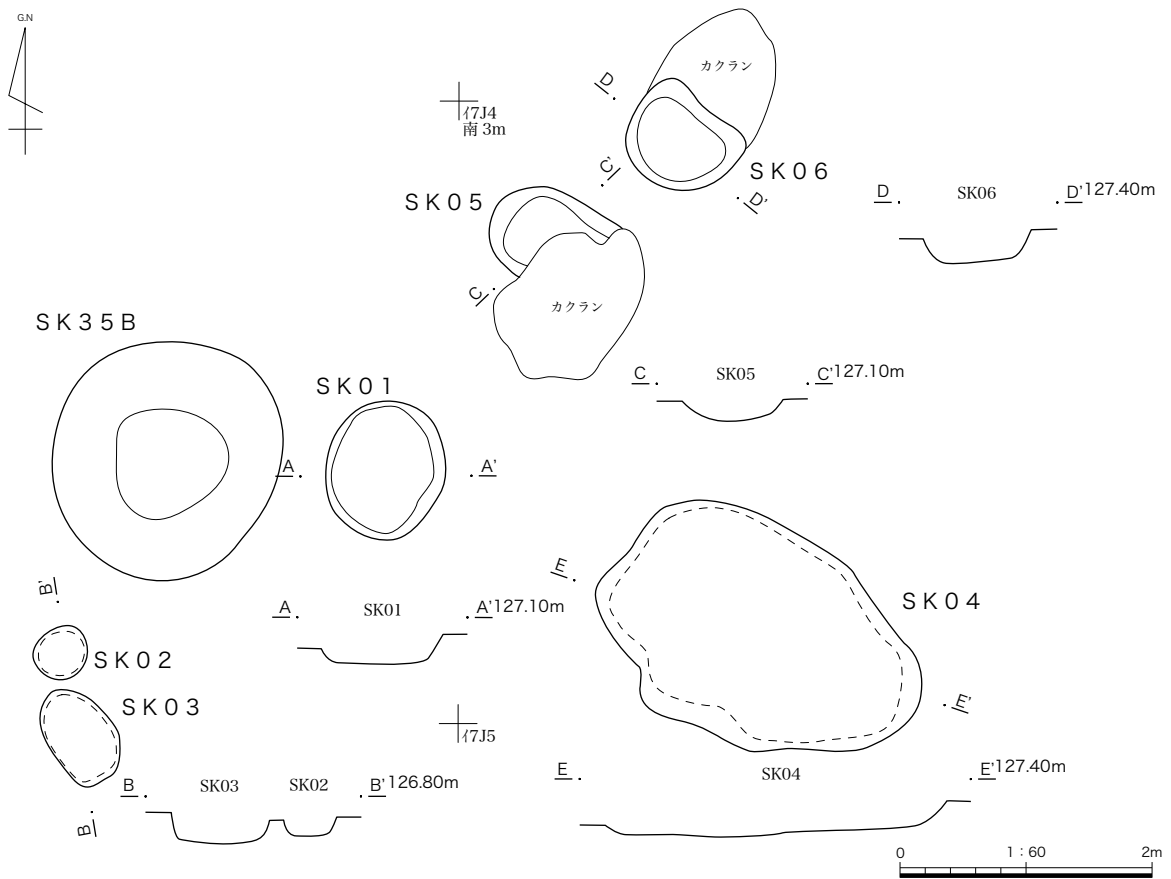


第208図 刈沼遺跡第1次遺構図区割り図(2)

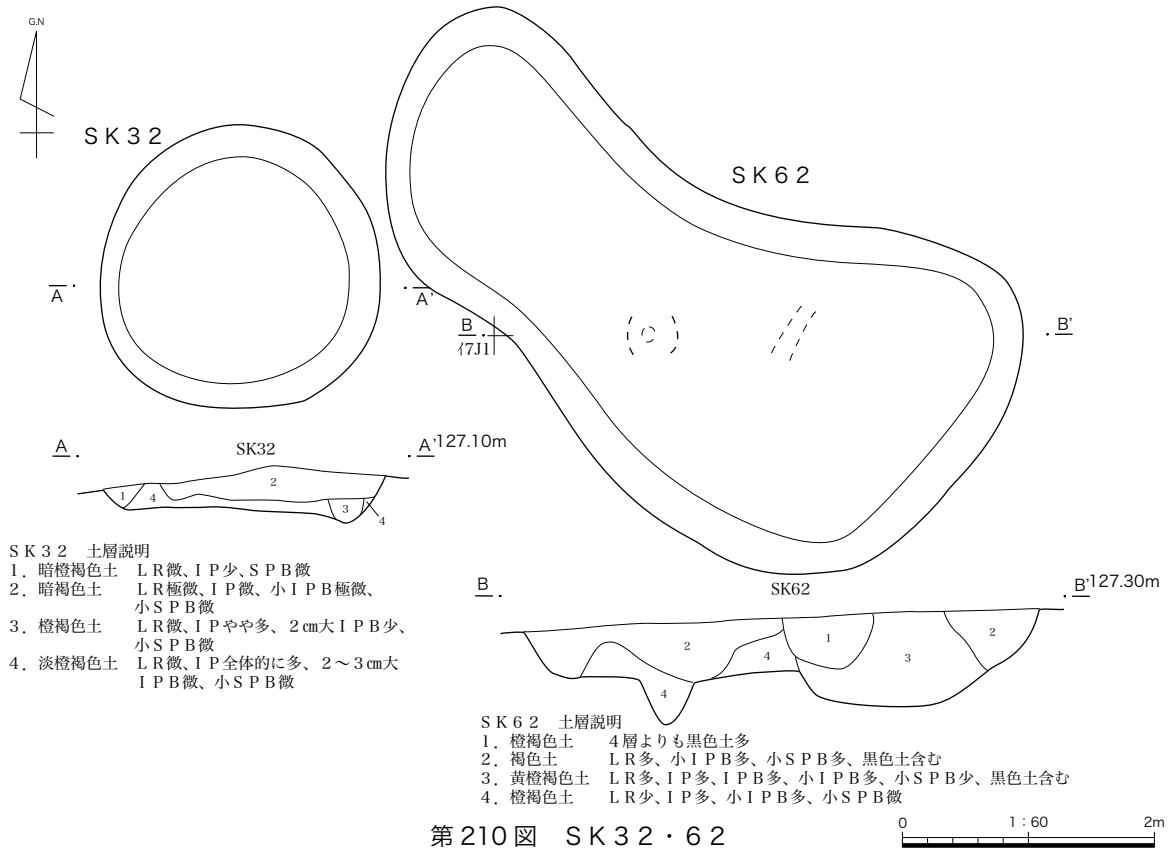
も疑問なところもある。SK12・13a・13b いずれもやや不整形な土坑で、確認は黒色土である。写真の観察ではSK12の壁及び覆土下位はローム層で、やや掘り過ぎている可能性がある。SK13は2基の土坑で、a→bの関係である。底面凹凸があり、bからは遺物の出土が確認されている。

SK09・10・11・19 (第212図)

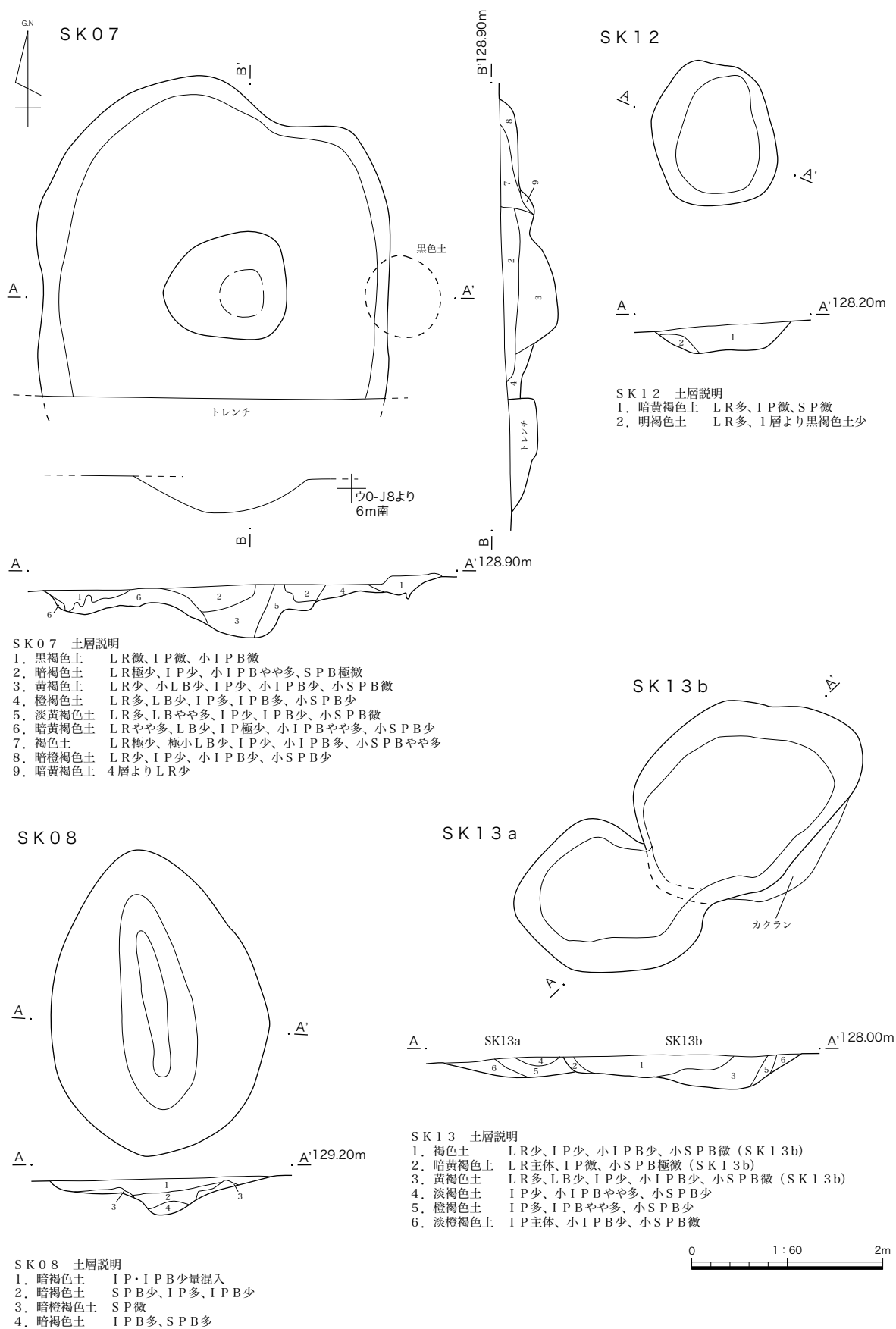
南半調査区の中でも南端近くとなる。東側にSD02B、SK14、SK18等はあるが、これより西側や南側での遺構分布は確認できない。またいずれも確認はローム漸移層、底面はローム層のようである。SK09は浅い楕円形土坑で掘り込み不明瞭である。SK10は浅い円形土坑だが写真記録では底面の凹凸著しく、攪乱が入っているようである。この穴自体も人為的な掘り込みとして良いか疑問が残る。SK11はやや大きめの土坑で、形態やや不明瞭である。内部にある落ち込みピットも人為的なものとして良いか判断できない。SK19は浅い土坑である。土坑内南東にあるピット状ラインも明瞭なピットではない。覆土2層はローム基調のようで、地山掘り過ぎの可能性も残る。北西にやや遺物がまとまるところがあり、レベル的には比較的下位からも出土しているようである。遺物では後期後半の小片が目立っている。



第209図 SK01~06・35B



第210図 SK32・62



第211図 SK07・08・12・13a・13b

SK27・28・29・30（第213図）

この4基の土坑は縄紋集落範囲内東側にある。東側にSD04、西側にSD01があり、縄紋期住居跡SI14範囲内でもある。覆土の記録が無く、写真では平面記録も無いことから、遺構判断についても厳しい部分がある。確認面や底面の状況等についても不明である。形態・規模としては住居跡柱穴に近く、SI14に伴う可能性もある。SK28は2基重複の可能性があるので、内側小さい方を計測すれば34×23×47cmとなる。SK30も2基重複のピットで、北側aは深さ14cmと浅いが、南側bは45cmとやや深い。

SK14・18・33・34（第214図）

SK14・18は南調査区の南東、東側にSK07・08、西側にSK19・09等がある。SK14は浅めの円形土坑で、確認面は黒色土中、底面はロームだが凹凸が著しい。平面で示した底面のピットは一応示すが、攪乱のようである。或いはこの土坑全体が攪乱の可能性もあろうか。SK18は確認ローム漸移層、壁下位からはローム層である。掘り込みは比較的明瞭なようであり遺構として良さそうだが、底面は凹凸があり、また覆土6層等はかなりローム質であり、掘り過ぎの可能性もある。北側のピットや落ち込みについても、記録所見少なく良く分からない。覆土上位で遺物の出土がある。第227図に条線紋の土器1点を示した。SK33は北側調査区の南端近く、SD04と重なる位置にある。浅い楕円形に近い形態の土坑で、壁・確認面はローム漸移層、底面は概ねローム層となる。底面ほぼ平坦で覆土は2層、数点の礫及び土器片が出土している。第227図には4点示したように後期安行式が目立っている。SK34は第1次調査区の北端、第2次調査区との境界部分にある長方形土坑である。縄紋集落範囲から離れており、形態からも中世以降の可能性を窺わせる。底面ほぼ平坦で壁の掘り込みも明瞭である。

SK15・16（第215図）

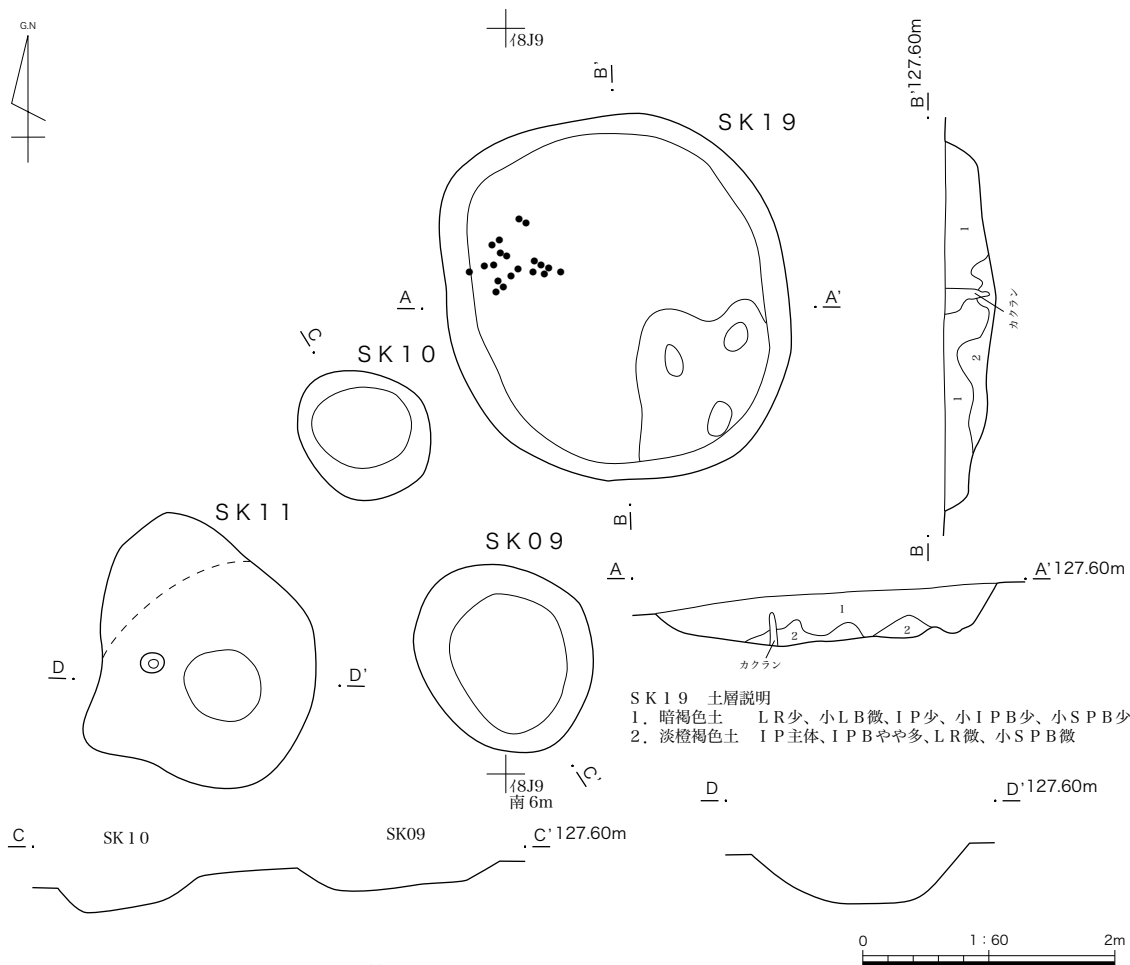
この2基の土坑は南半調査区のほぼ中央で、東側にはSK13、西側にはSK17・20～23がある。いずれも黒色土中での確認、壁下位～底面はローム層である。SK15にはピット4基があるが、伴うものかは不明で攪乱の可能性もある。覆土はやや不自然な堆積を示しており、幾つかの土坑が重なっている可能性や掘り過ぎの可能性もある。SK16も底面の凹凸や不明瞭な掘り込みなど、遺構と判断して良いか疑問が残る。記録として残り、図でも示した5基のピットについても、伴うものか不明で攪乱の可能性もある。

SK59・60（第216図）

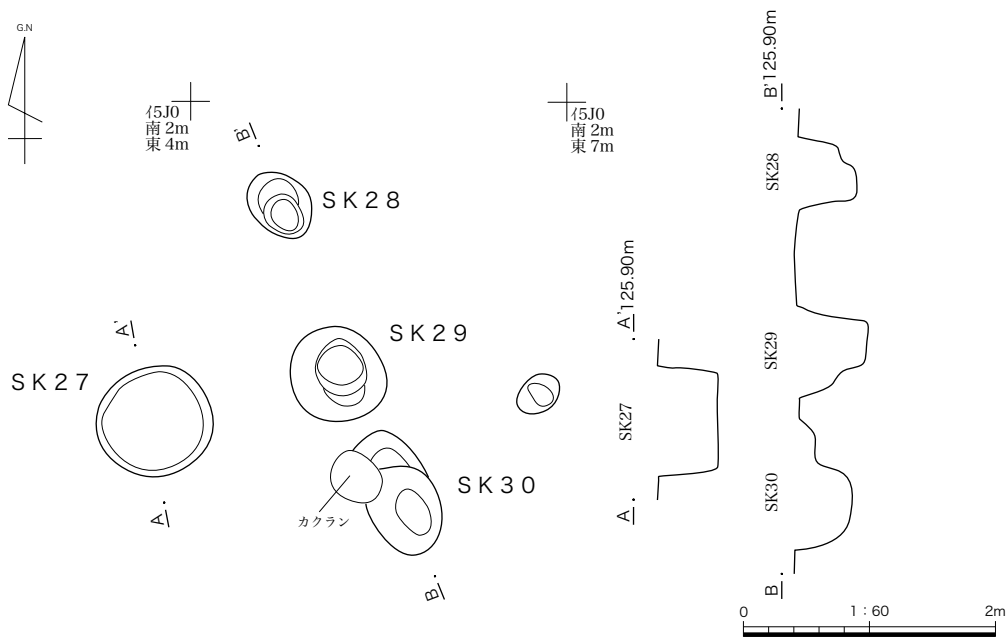
SI14の北西、ほぼ接する位置にある。2基の土坑いずれも確認面はローム漸移層、底面はロームのようである。SK59の底面はかなり傾斜・凹凸があり、土層断面も複雑な堆積が記録されている。写真からは4層は地山のようにも見え、2基のピット或いは土坑かもしれない。SK60も掘り込み不明瞭で、確認面にやや広く黒色土が不整に拡がっている部分の一部を掘り下げているように見える。土層断面ではかなり複雑な堆積が記録されているが、写真と整合しない部分があり、良く分からない。表の中では一応全体を遺構として計測しているが、問題の多い遺構と言える。

SK17・20～23（第217図）

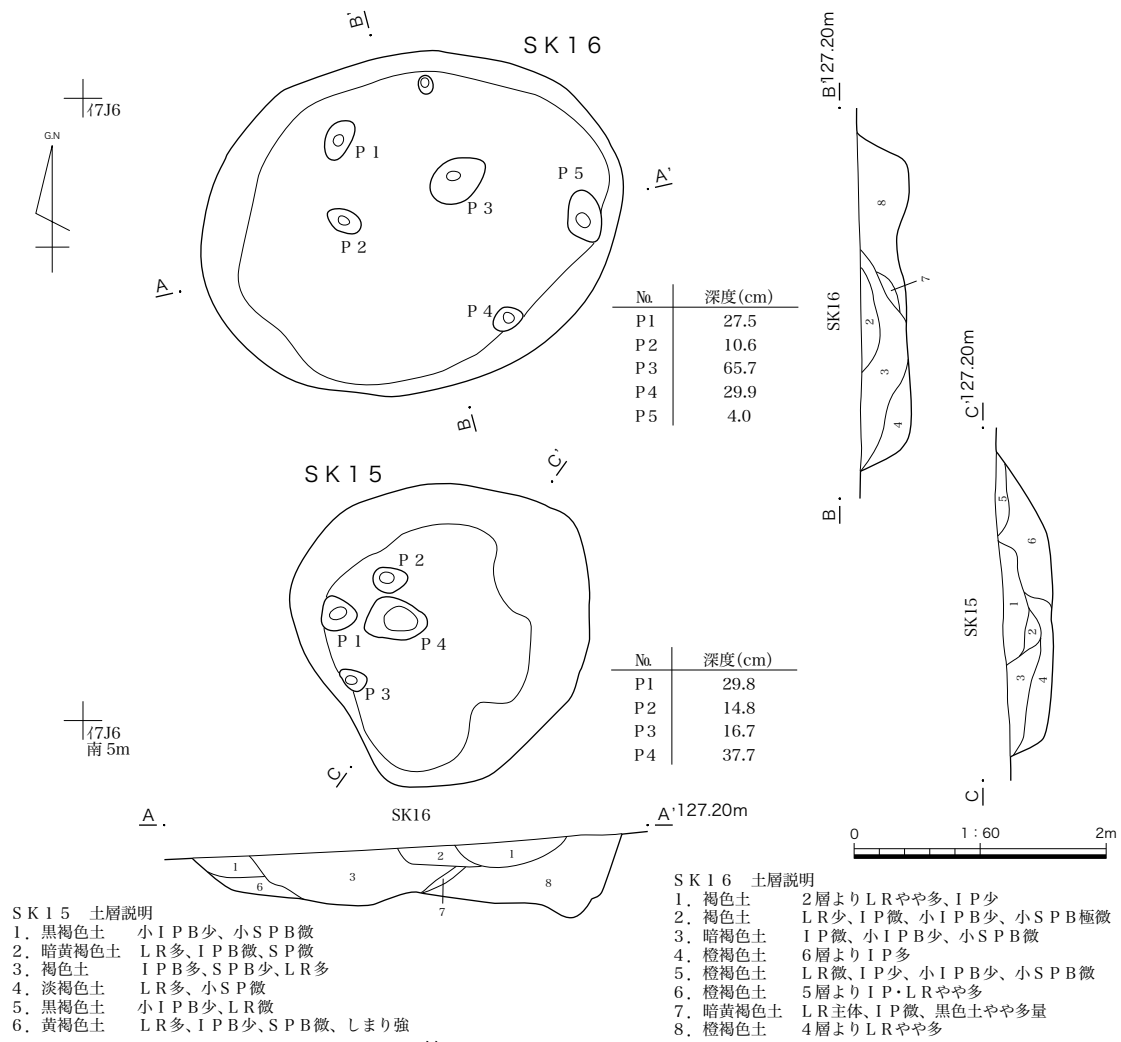
南半調査区はやや中央～北側で、第14図のSK15・16が東側に、西側にSK24・25、北側にSK26がある。土坑がややまとまる区域とも言えよう。5基いずれも確認は黒色土～ローム漸移層。SK17は底面の凹凸著しく、



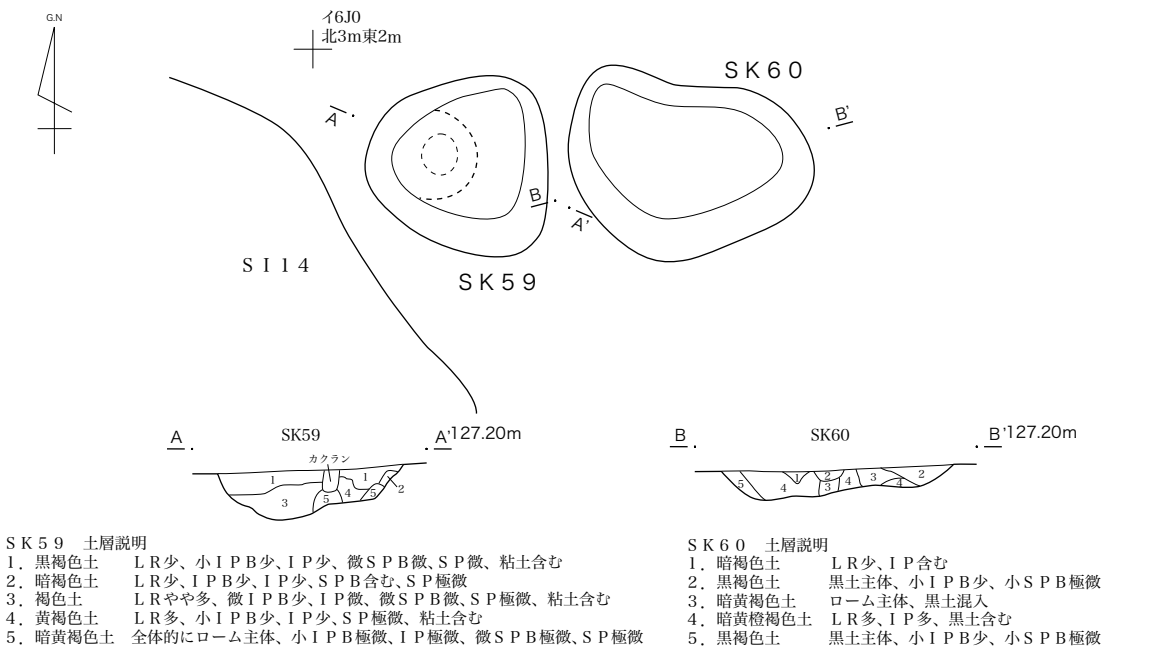
第212図 SK09~11・19



第213図 SK27~30



第215図 SK15・16



第216図 SK59・60

形態も不整なこと、覆土と地山の区別も不明瞭であり、遺構として良いか疑問が残る。包含層の黒味が強い部分を掘り下げている可能性もあろう。SK23も同様で、覆土3層の内1層・2層の上位は包含層黒色土に近く、下方はローム地山に近いように写真からは観察される。攪乱或いは包含層、或いは一部のみ遺構であろうか。SK20は浅めの円形土坑で、礫1点が出土しているようである。SK21は不整な土坑で、底面の凹凸が著しい。断面でのみピット状になっているところについて、平面図では点線で復元したが、ピット遺構か攪乱かは不明である。SK21自体も、幾つかの土坑重複の可能性はあるが、所見が無く判断できない。掘り込み不明瞭であることも含め、包含層～浅い落ち込みを掘っているだけかもしれない。SK22についても、断面の記録からは大部分が攪乱となるが、平面と対応せず良く分からない。掘り込みが問題ないとすれば1・2層が覆土となり、1基の土坑+攪乱穴の複合が平面的に図化されていると考えられよう。

SK24・25 (第218図)

東側にSK20～23等がある南半調査区やや北側である。SK24は個別図には示していないがSD01とほぼ接する位置にある楕円形土坑である。壁の傾斜は緩いが掘り込みは明らかなようである。底面及び壁の下位はローム。SK25はやや不整な楕円形土坑である。断面の記録では複数遺構重複の可能性を窺わせるが、良く分からない。写真からは底面の凹凸及び、概ね中央にピットが確認される。

SK53・55・56 (第219図)

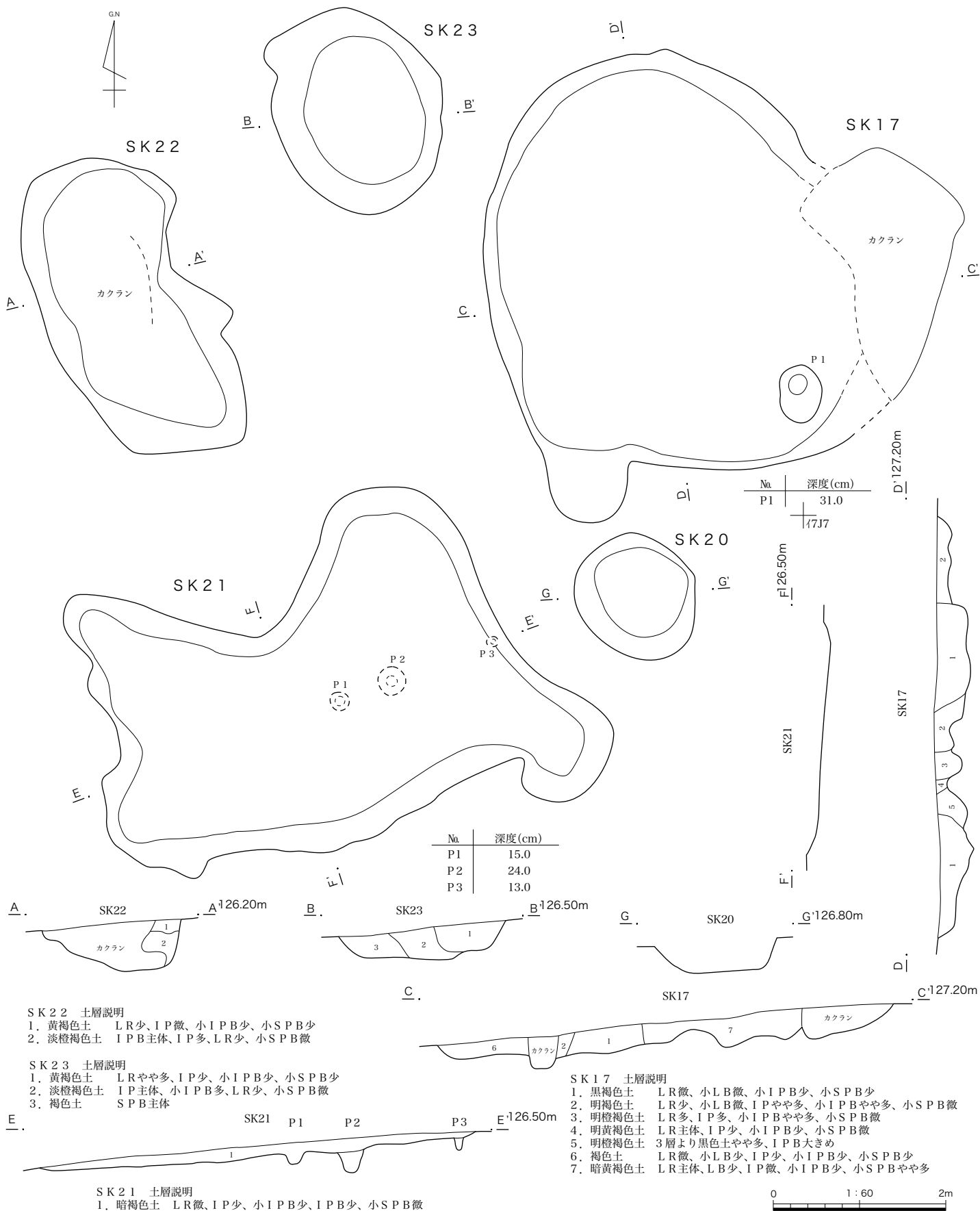
この3基の土坑は調査区南東の台地上に位置する。縄紋集落範囲からはやや離れるが、西7mにSI14がある。SK53の掘り上がり写真では土坑東側の壁際にピットが掘られているが、記録無く攪乱扱いとされたかもしれない。土層断面記録をみると複雑な堆積を示しているが、2・4・5層はかなりローム質の土層で、地山を掘り過ぎている可能性が高い。その場合西側の1層のみピットまたは土坑覆土という扱いになろう。表では土坑全体を遺構として計測している点注意されたい。SK55も複雑な土層堆積図面が残されている。確認面下で包含層或いはしみ状の乱れた層が堆積しており、分かりにくかった可能性はある。写真記録などからは3・4層のみ遺構覆土的に見え、この場合2基のピット遺構という扱いになろう。判断難しく、平面図上にも点線で分層ラインを示した。SK56も黒色土面での確認で、掘り込みは不明瞭である。2・3層はローム基調で、掘り過ぎの可能性はある。

SK26a・26b・26c (第220図)

南半調査区の北側にある。北西側に攪乱が入る。全体かなり不整で、計測表に示した数字もかなり便宜的に軸を設定し測ったものである。写真を見る限り掘り込みは不明瞭で、地山+包含層の壁と覆土との区別は難しく、包含層部分を掘り下げているだけかもしれない。平面図上で幾つか点線で示したように、幾つかの土坑重複の可能性もある。北側に突出する楕円形部分a(覆土9・10層対応部分)、北西の底面の段差・覆土1～3層を別の土坑部分b、南東の大きく広がる部分cを本体掘り込みとは別遺構となる可能性、更にこのa～c土坑範囲を除いた大きな掘り込みについて、例えば住居跡となる可能性も考えたが、判断はできない。また図化された4基のピットについても、遺構として良いか、不明である。

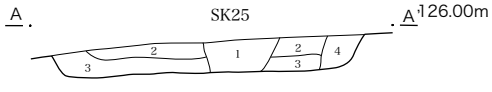
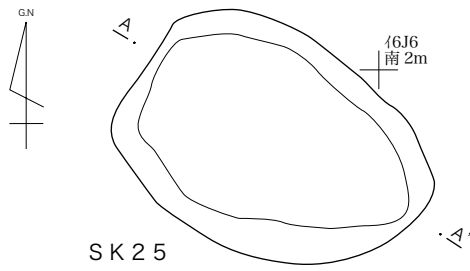
SK35A・36A・36B・37A (第221.222図)

調査区南東、「中央窪地」の南側、概ね縄紋集落範囲内と言える。東側にSD01、南側にSD06がある。

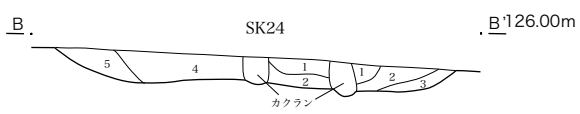
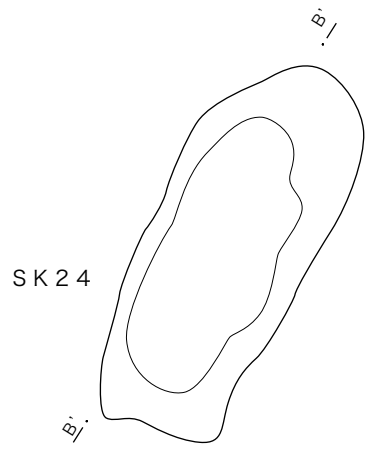


第217図 SK17・20~23

第3章 刈沼遺跡第1次調査区の遺構と遺跡

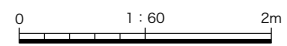


- SK25 土層説明
- 1. 褐色土 L R少、小IPB微、小SPB微
 - 2. 暗褐色土 小IPB少、小SPB少
 - 3. 橙褐色土 L R多、小IPB少、小SPB少
 - 4. 暗橙褐色土 L R多、小IPB多、小SPB微

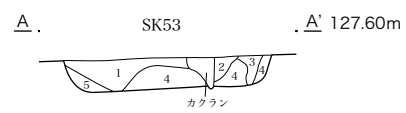
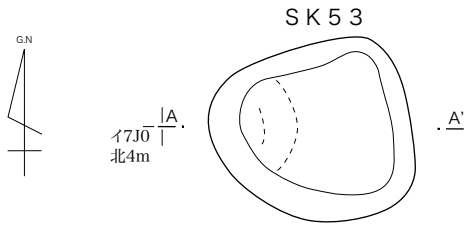


- SK24 土層説明
- 1. 褐色土 L R少、小IPB微、
 - 2. 明橙褐色土 L R多、IP多、IPB少、小SPB微
 - 3. 淡黄褐色土 L R多、小LB少、IPB微、小SPB極微
 - 4. 明黄褐色土 SP主体、小IPB微、LR微
 - 5. 暗橙褐色土 L R少、IPB少、小SPB微

46J6
南8m



第218図SK24・25



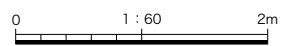
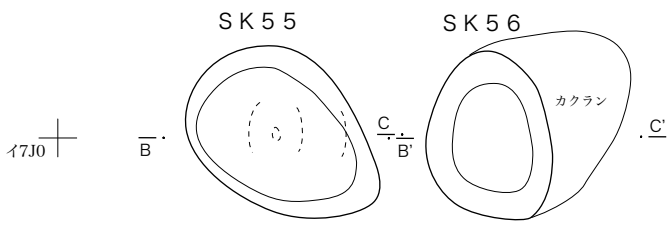
- SK53 土層説明
- 1. 黄褐色土 L Rやや多、IP少、IPB少、SPB少、砂粒微
 - 2. 暗橙褐色土 L R少、IPやや多、IPBやや多、SPB少
 - 3. 暗黄褐色土 1層よりIPBやや多
 - 4. 橙黄褐色土 L R多、IP少、IPBやや多(地山?)
 - 5. 明黄褐色土 L Rやや多、LB少、IP少、IPB少、SPB少



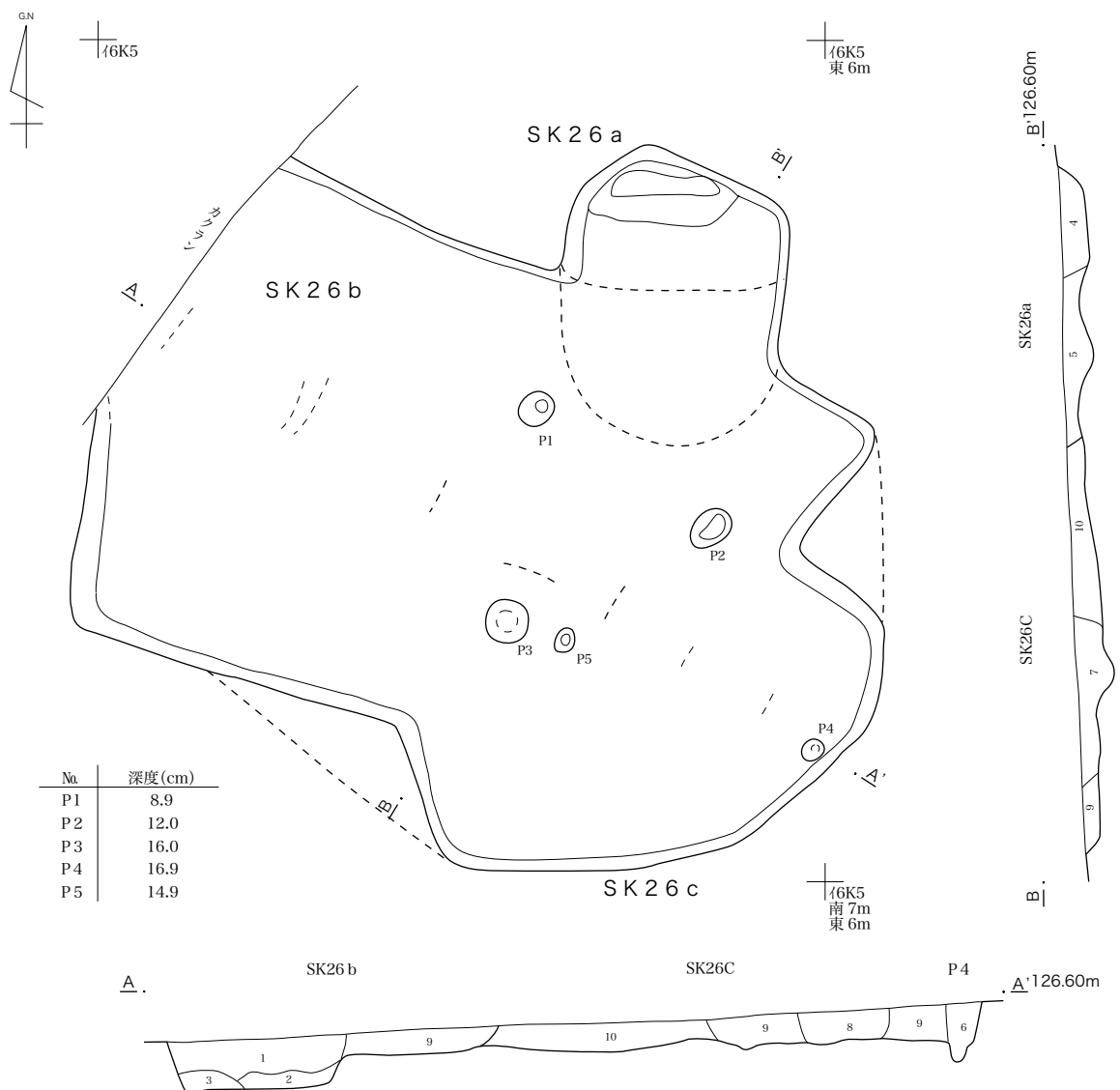
- SK55 土層説明
- 1. 暗黄褐色土 小SPBやや多
 - 2. 暗黄褐色土 L R多、IPB少、小SPB少
 - 3. 橙褐色土 L R微、小IPB多、IP少
 - 4. 暗橙褐色土 IP多、小IPB多
 - 5. 橙褐色土 3層に似ているがLRやや多
 - 6. 暗黄褐色土 L R多、小SPB微、小IPB微



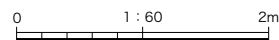
- SK56 土層説明
- 1. 褐色土 L R少、IP少、IPB少、SPB少
 - 2. 黄褐色土 L Rやや多、LB少、IPB少、砂岩(2mm大)少
 - 3. 暗黄褐色土 L Rやや多、LB少、IP少、IPB少、SPB極微



第219図SK53・55・56



- SK 26 a.b.c 土層説明
- 1. 暗褐色土 LR少、小IPB少、小SPB極微 (SK 26 b)
 - 2. 明黄褐色土 LR多、IP少、小IPB極微、小SPB極微 (SK 26 b)
 - 3. 暗橙褐色土 LR多、IP少 (SK 26 b)
 - 4. 暗黄褐色土 9層よりIPBやや少 (SK 26 a)
 - 5. 暗黄褐色土 LRやや多、小IPB少、小SPB極微 (SK 26 a)
 - 6. 暗褐色土 1層よりIPBやや多 (SK 26 c)
 - 7. 黒褐色土 小IPBやや少、小SPB極微 (SK 26 c)
 - 8. 淡褐色土 LR少、IPB多、小IPB多、小SPB極微 (SK 26 c)
 - 9. 黄褐色土 LR多、小IPB多、小SPB極微
 - 10. 褐色土 LR少、小IPB多、小SPB極微、IP微 (SK 26 c)



第220図 SK 26 a・26 b・26 c

SK35 はかなり不整形な土坑で、東側に突出する部分は断面ラインからも別遺構と推定される（89×78×38 cm）、掘り込みは比較的明瞭なようだが、写真記録が無く、底面の状態、覆土・壁など不明である。北側にあるピットについても伴うものかは不明。SK36B は内部に多数のピットが認められている土坑である。土坑と新旧関係があるかもしれないが、これも記録が無く判断できない。ピットの中にはかなり深いものがあり、何らかの建物跡の存在を予測させる。SK37A 及び SK36A は調査区中央、縄紋集落範囲の北東範囲内にある。いずれも浅い楕円形土坑で、比較的底面は平坦である。SK36A には2基のピットがあるが、伴うか否かは不明で、SI07 に関わる可能性も残る。当初の記録ではSK37A は点線ラインの部分で、航空写真測量・コンター図等より遺構判断を行った。

SK46・47（第223図）

2基の土坑は調査区ほぼ中央、縄紋集落範囲内の北東に位置する。南西のSI11はほぼ接する位置にある。SK47はSD15とも重複する。記録や所見はないが、溝の方が新しい可能性が高い。2基いずれも写真記録が無く、確認面などは不明である。SK46中央、SK47北側には比較的深いピットがあるが、土坑との関係は不明。2基の土坑周囲にも比較的多くのピットがあり、併せて捉えた方が良いかもしれない。

SK63・64（第224図）

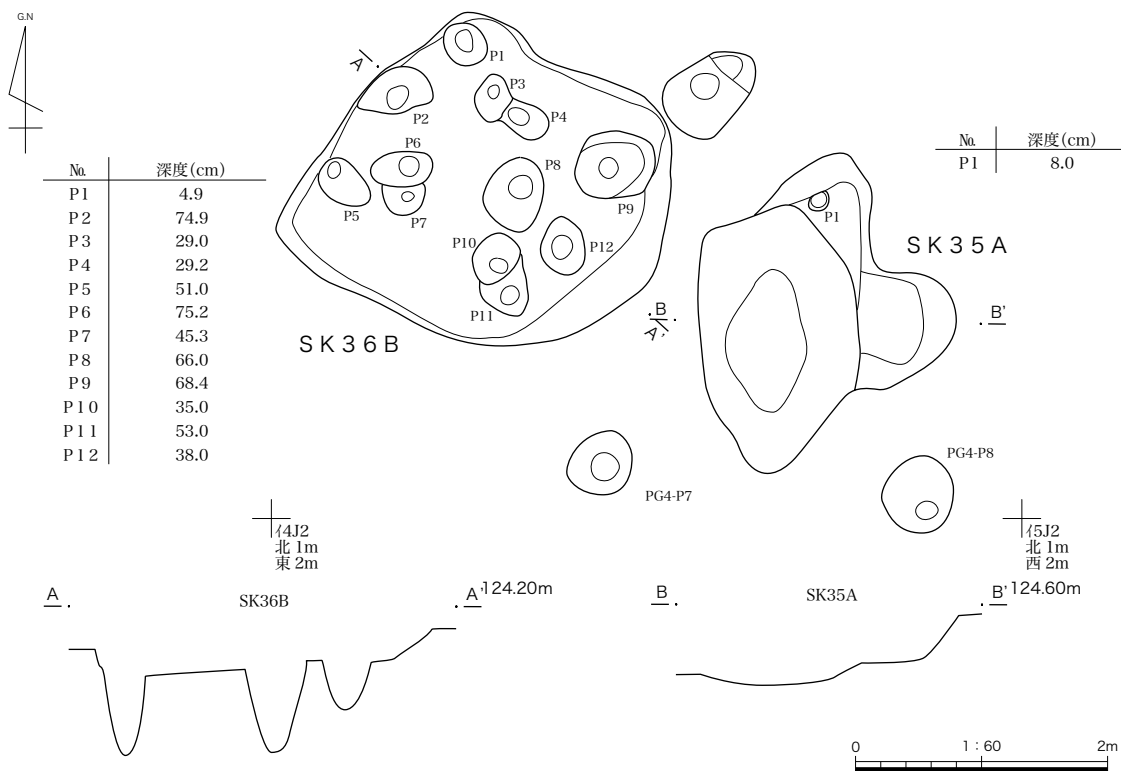
SI14の東側、SK55・56の西側に位置する。2基の土坑いずれもローム漸移層面での確認のようである。SK63の掘り上がり写真を見ると周辺にピット複数があるが、図で示している土坑と重なるピットについても、重複の別遺構となるのか。やや深さのある楕円形土坑として記録されているが、土層断面写真からは地山ローム層を掘り下げているように見える。SK64は比較的深い掘り込みで、写真では土層断面での3層が黒く見え覆土的だが、壁際や底面近くなどはかなりローム質と観察でき、やはり掘り過ぎているように見える。2基の土坑いずれも当初の記録のまま示し、表でも掘り込みラインからの計測値を示すものの、遺構との判断に多く問題を残すものである点明記しておく。

SK51・52・58・61（第225図）

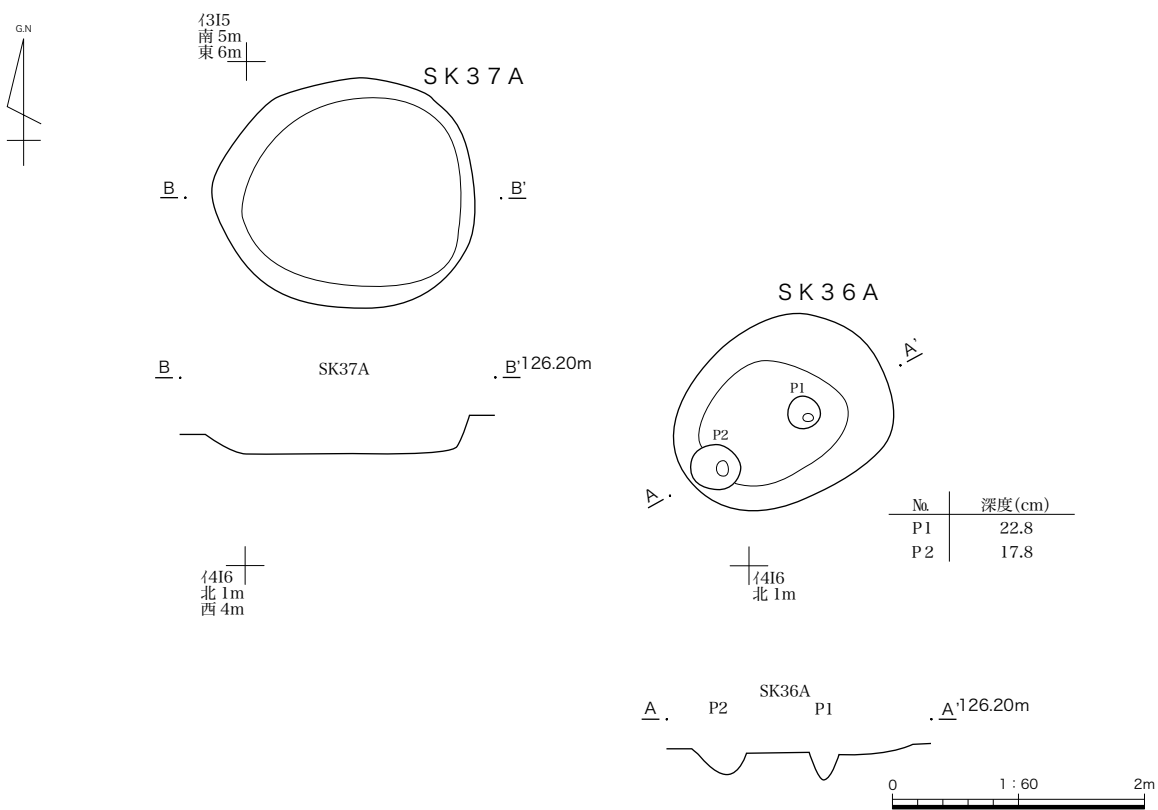
この4基の土坑は調査区中央東よりの位置にあり、4基の位置関係はそのまま示した。縄紋集落範囲からはやや離れるが、北西9mにはSI12がある。確認面はローム漸移層、底面・壁は概ねローム層のようである。SK51は浅い不整形土坑で、掘り上がり写真では内部及び周囲にピットがある。6層に分層されているが、上位の黒色土系と下位のローム基調系に分けられる。下位の層群については地山掘り過ぎの可能性もあるか。SK52は不整形の土坑だが、平面形態や土層断面から2基重複の可能性はある。東側は底面比較的平坦で、西側の底面との間には段差がある。平面図上に点線で示した部分に対応し、断面記録をもってすれば東側の土坑の方が新しいことになる。SK58は円形土坑だが完掘写真では外側ラインまで掘られている。底面やや凹凸があり、小穴（攪乱?）も認められる。複雑に分層されているが、覆土上位は黒色土、2・3層など下位はローム基調であり、地山を掘り過ぎている可能性がある。上位の黒色土についても人為的な掘り込みとして良いか疑問が残る。SK61は円形土坑で覆土中央は黒色土、壁際はロームが入る土で柱穴状の堆積である。

SK37B・38・43・49・48・50・54・57（第226図）

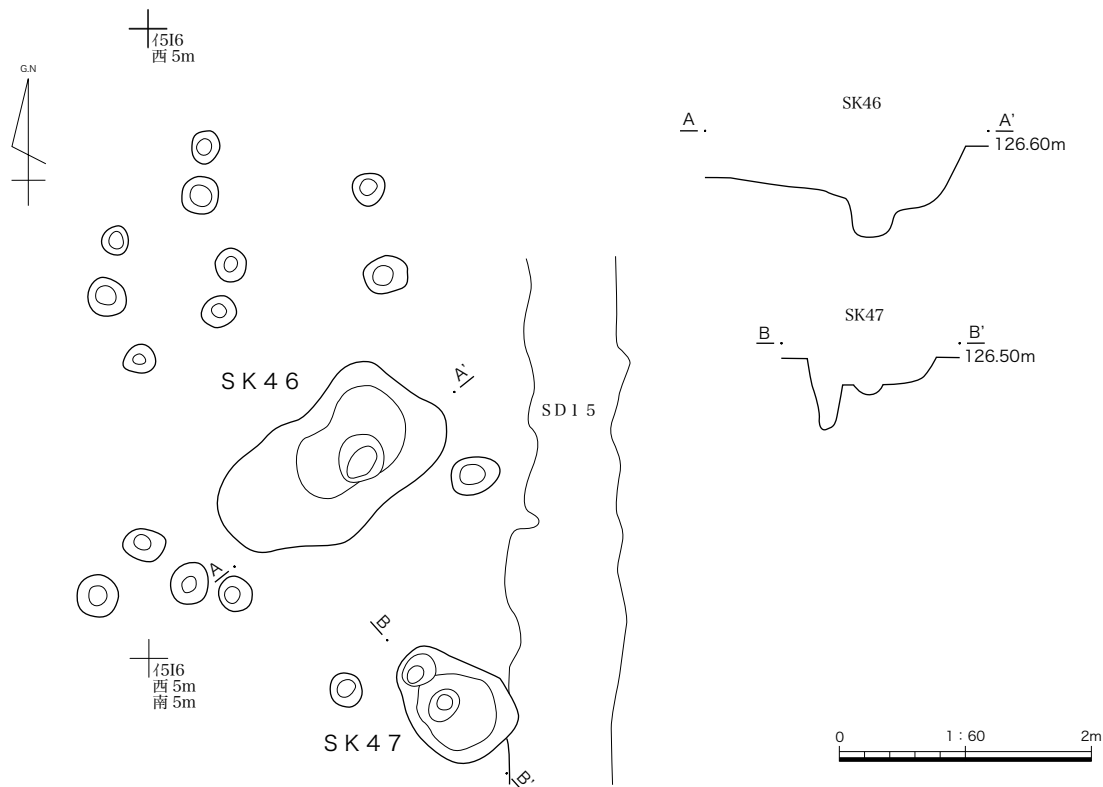
これらは比較的単独的に位置するもので、個別の遺構図を編集した。従って、相互に関連的な位置関係で



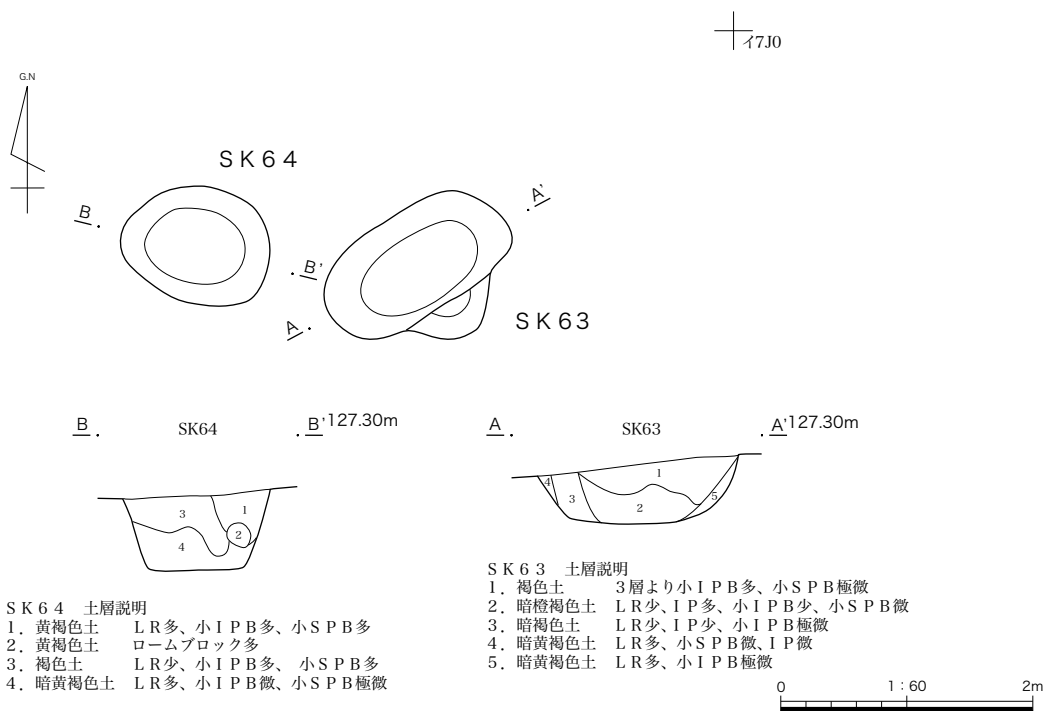
第221図 SK35A・36B



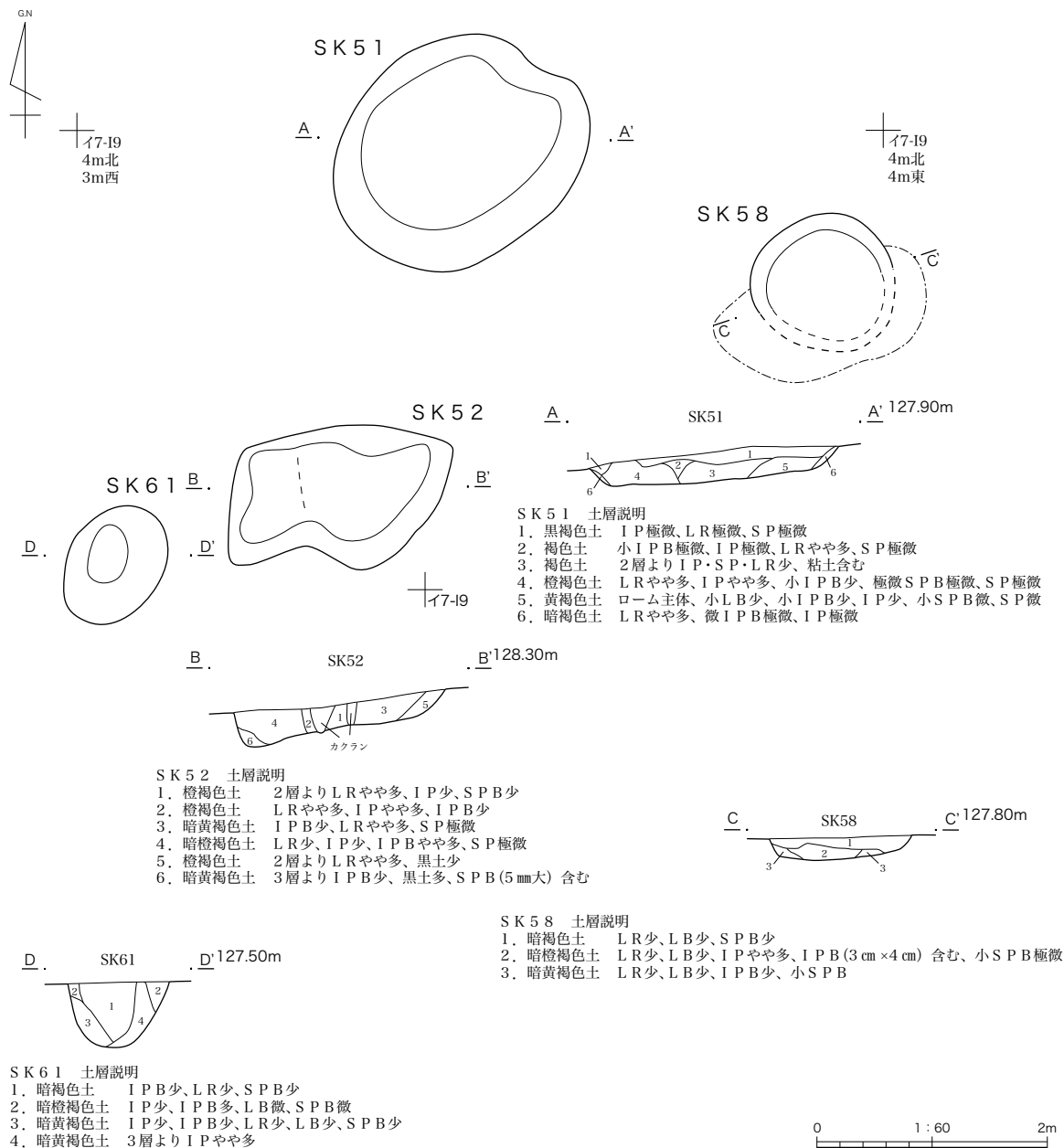
第222図 SK36A・37A



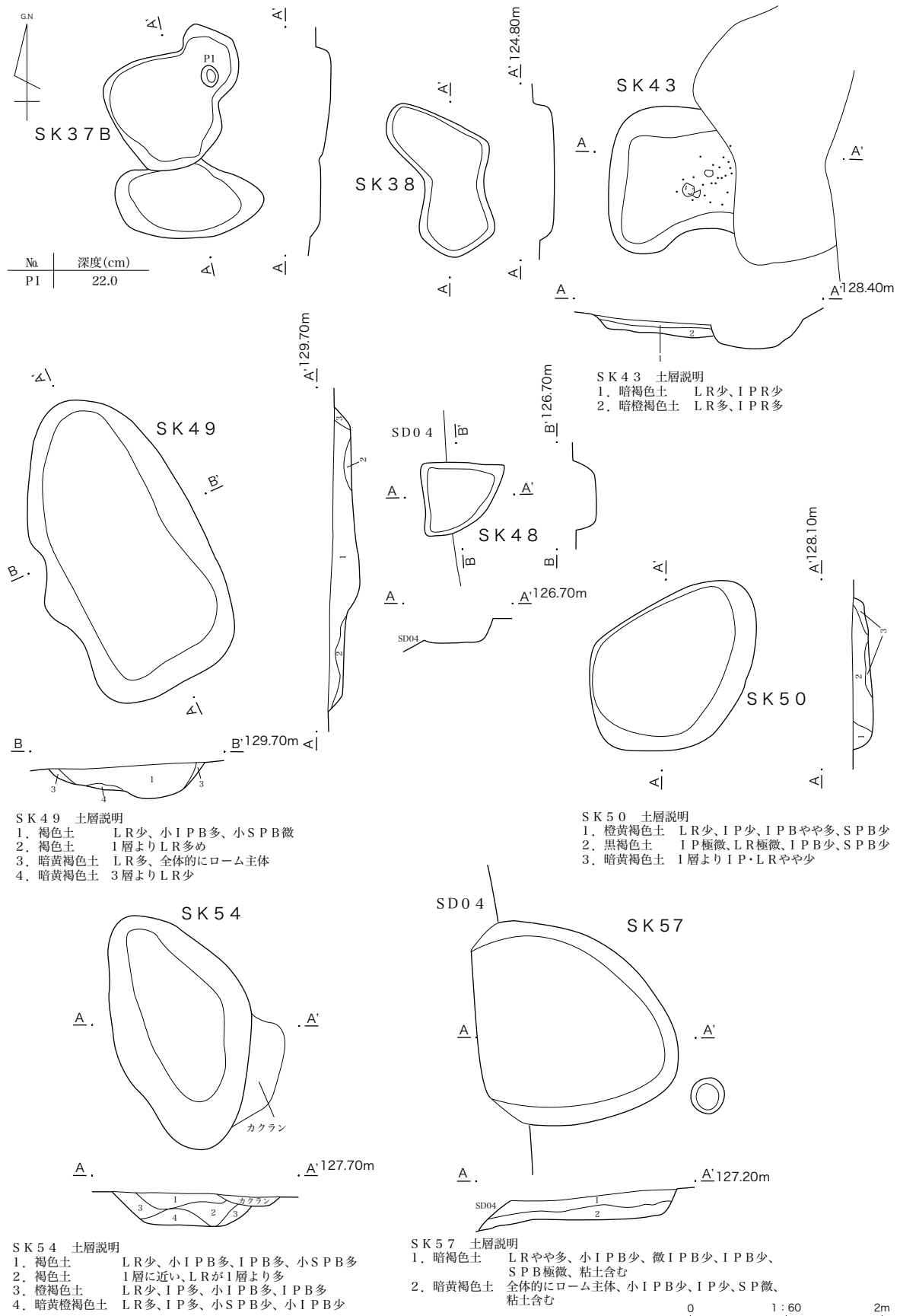
第223図 SK46・47



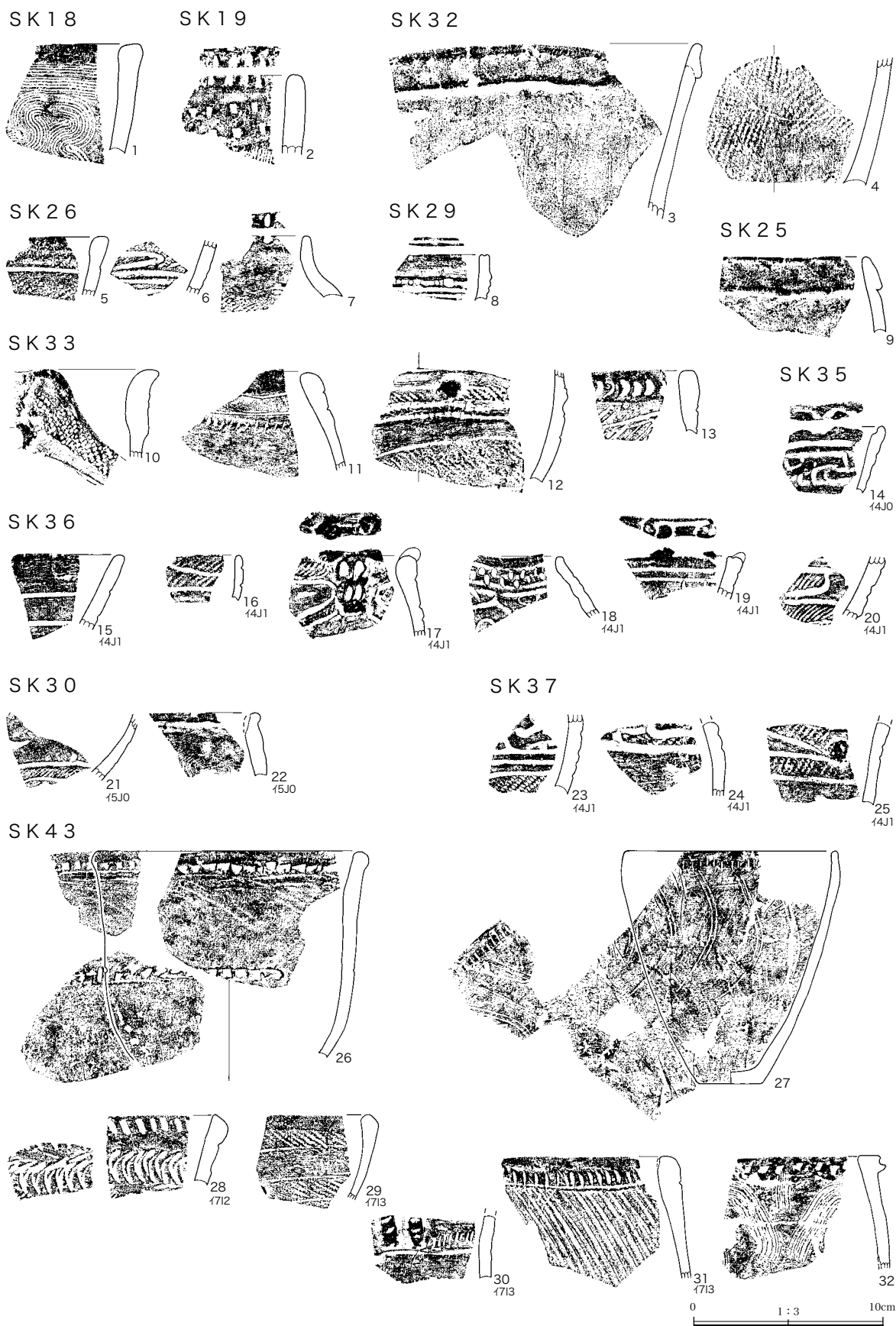
第224図 SK63・64



第 225 図 SK 5 1 ・ 5 2 ・ 5 8 ・ 6 1



第226図 SK 37B・38・43・48・49・50・54・57



第 227 圖 土坑出土土器 (1)



第 228 図 土坑出土土器 (2)

はない。SK37Bは複数土坑重複と推定されるもので、中央及び南側の掘り込みとの間には段差もあることから、2基の土坑重複はほぼ確実で、これに北端のピットが重なるという状況であろうか。位置としてはSK36Bの北、より中央窪地に近い位置となる。写真記録が無く判断が難しい。北端をピットとすれば深さ 22 cmのピットで、更に小ピットが内部にあるという状況である。中央の掘り込みから土器片及び石器（磨石）が出土している。SK38も不整な土坑でSK37Bの北 6 mに位置する。これも2基重複の可能性を窺わせるが、土層断面図や写真の記録がなく、検討・判断ができない。底面は平らなようである。SK43は縄紋集落範囲からかなり離れた調査区北東端に近い位置にある。東側がSD09と重なるが、ここでは攪乱が間に入っている。平面図中にドットで示したような遺物の出土状況があり、径復元の2個体をはじめ、やや多くの土器が出土している、第227図28は前期後半浮島式、残りは概ね後期後半の粗製土器系を主体としている。遺物出土のレベルは覆土上位～上位包含層中のように、小礫の出土も目立っていたようである。遺構の壁はローム漸移層中のように、掘り込みはやや不明瞭である。

SK49・50は調査区南東端近くで、SK49の東3mにはSD09がある。縄紋集落範囲からはかなり離れた位置にある。SK49は掘り込み明瞭だが底面かなり凹凸があり、定型的とは捉えがたい。覆土は1層メインで壁際に別の層が観察されている。SK50は浅い不整形土坑で、掘り上がり写真では中央に別の落ち込みがある。SK48は調査区南端近く、SD04と重なる位置にある。これも土層断面図など記録の不備があり良く分からない。覆土の上位は黒色土のようだが下位はロームが多く掘り過ぎている可能性がある。写真では底面平坦である。SK54は調査区南東で、北西にはSK55・56等がある。掘り上がり写真では小穴が幾つか見えるが記録はない。西側の壁は不明瞭で、地山・覆土の区別は難しい。一方図での3・4層はロームの特徴を示しており、地山掘り過ぎの可能性もある。底面凹凸あることなども含め、遺構との判断も疑問が残る。SK57はSI01の東側SD04にかかる位置にある。重複関係では溝の方が新しい。底面・壁ともロームで掘り込みは比較的明瞭なようである。覆土2層はローム基調の記載であり、やはり地山掘り過ぎの可能性もある。礫及び土器小片の出土がある。第228図には3片を示した。3は後期後半瘤付系である。

土坑出土として取り上げた資料を第227～228図にまとめて示す。出土状況について殆ど確認しておらず、遺構に確実に伴うとも言い得ないが、参考資料とはなろう。出土土器個別の説明・観察記録の提示は省略するが、総じて住居跡出土資料より後期後半が多い印象がある。住居跡・包含層区域より外側に位置しているものが多いことと関係するかもしれない。SK43(第227図26～32)は28の前期後半例を除けば、比較的時期的なまとまりを捉えることができよう。

第5節 溝

第1次調査区では16条の溝が検出されている。調査区内広く伸びる溝、北側の第2次調査区に伸びる溝もある。同一と推定される溝を別遺構で発番している例もあるが、原則として遺構名を変えずに報告する。溝の総数については、欠番と重複から16条となる。土層断面は比較的近い位置で記録がとられていても土層は番号の統一はもとより、対応関係の所見が無く、整理時においても対比を試みたものの困難であった。SD10については欠番だが、取り上げ遺物があり、どこかに付されていた可能性がある。

SD01（第229～231図）は南半調査区の西側で52mほど確認され、未調査区を挟んで北半調査区のほぼ南端から調査区中央近くまで43mほど確認されている溝である。南半での軸はN-6°-W、北半での軸はN-3°-Wである。I4I9グリッドで途切れるが、延長の同方向でSD15があり、形態などから同一の溝と捉えられる。SD15は22m程確認され、1回途切れるが、更に同方向延長上にSD14がある。これも同一の溝と捉えて良いだろう。SD14は第1次調査区内で北端まで43mほど確認され、更に第2次調査区へ続いている。第1次調査区の北側ではSD04と概ね直交に交差し、更に北側でSD09と直交に交差している。断面は上端幅70cm程度～140cm程度まであり、100～120cm程度の部分が多い。深さは概ね40cm程度で推移している。断面形は位置により多少の差異はあるが概ね逆台形状を呈している。

第1次調査区北半の調査区南側ではSD04及びSD05と8～9m程の間隔をもって併走している。また、丁度SI01が途切れるI5I8グリッド辺りでSD14が西側に寄るような形で若干ずれ、更にSD15の範囲ではまた東側にずれて間隔が8m程となっている。

また第1次調査区北半の南端近くではSD03・SD06と重複交差している。覆土相互の切り合い観察はし得ていないようだが、記録からはSD03→SD01と捉えられていたことが推測される。

平面図上、溝の上端近辺や壁の斜面で小ピットが幾つか記録されているが、これについては他に記録が殆ど無く不明である。深さも分からない。溝外側には確認されていないようであり、この点から伴う可能性も残るが、判断できない。

SD05はSD04の南側一部で併走する溝である（第229図）。23.5m程の長さが確認されている。上端幅38～55cm、深さ8～17cmでほぼ直線的、軸はSD04と概ね同じN-3°-Wである。特に南側で小ピットとの重複が多く確認されているが、関係については不明である。また北側ではSI01とも重複しており、溝の方が新しいことが推測されるが、土層相互の断面観察記録は残されていない。

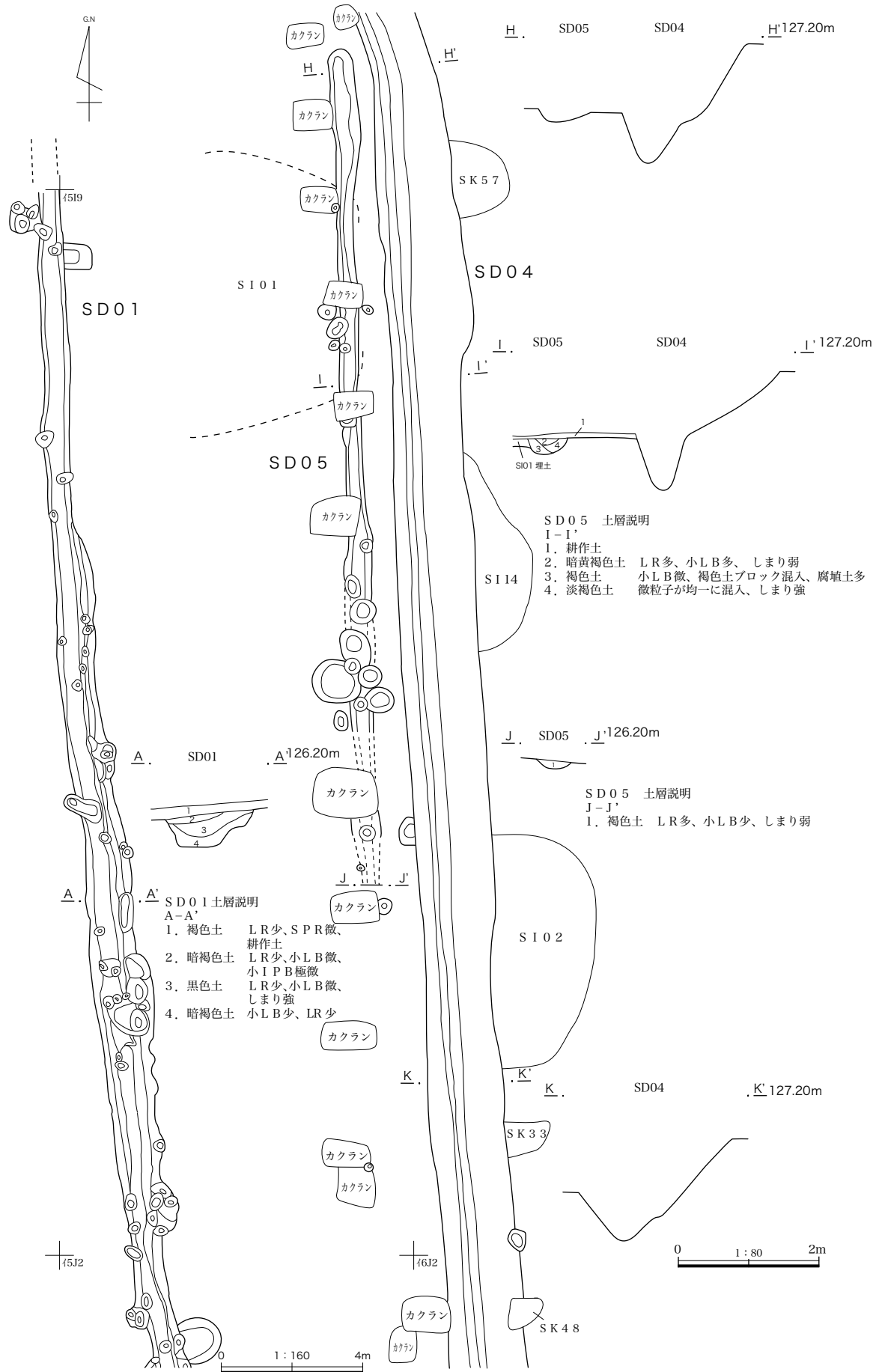
SD06（第230図）についてはSD01と交差重複するがその東側では検出されていない。調査区内14.2mの確認である。上端幅は85cm深さは20cm程度である。軸はN-82°-Wである。SD06はSD01と交差し、南側のSD03とは近い位置と認められている。主に北東-南西方向軸（N-82°-W）だが、西端はやや角度を変え細くなっている（N-45°-E）。

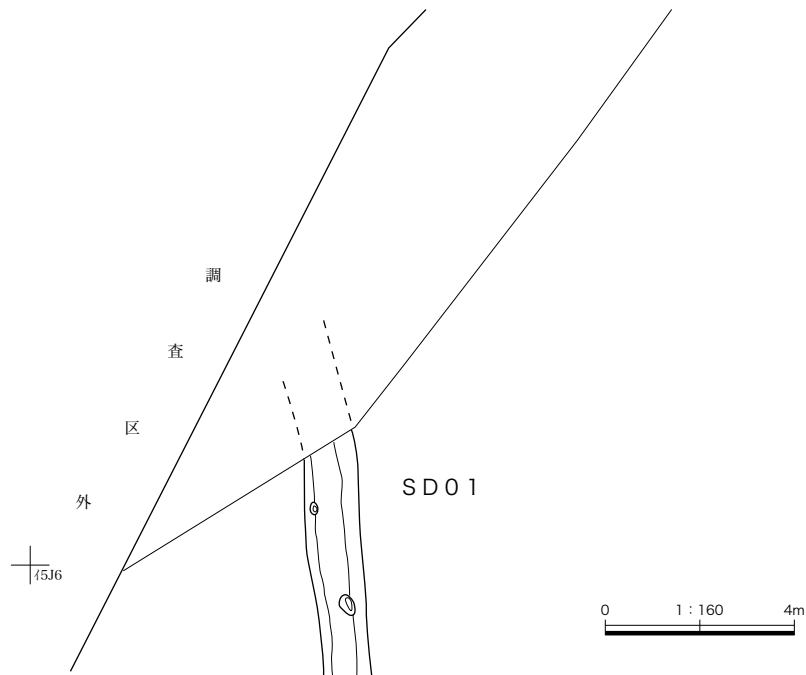
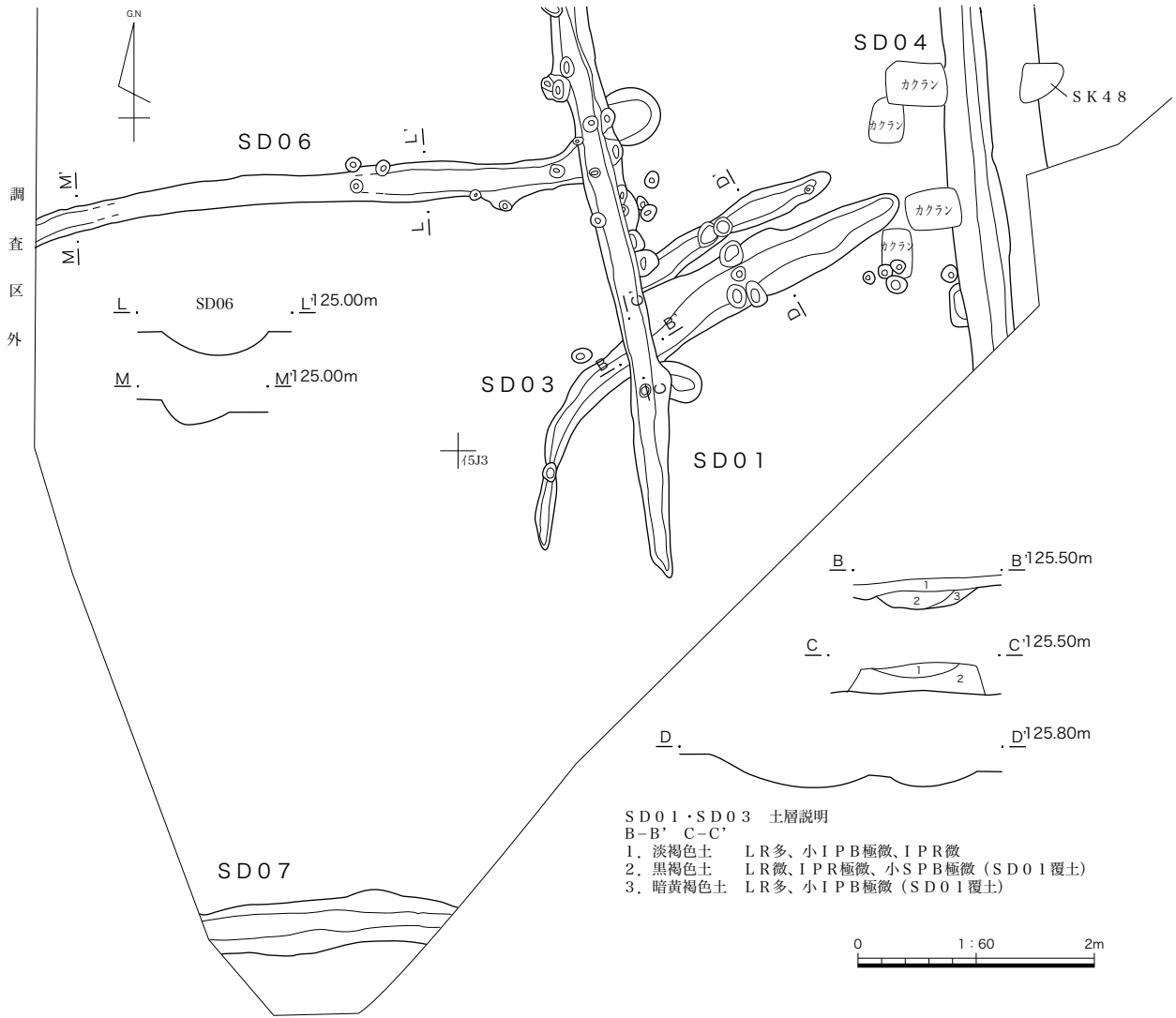
SD03（第230図）は、北東-南西方向（N-45°-E）に伸びる溝で、南端では上端幅40cm程度、北東側ではやや幅広く130cm程度の幅がある。12.4mほど確認されている。概ね平行する溝が近接しており、発番されていないがSD03bとしておく。こちらは5m程の確認で西端はSD01と重なりこれより西では確認されない。上端幅は70～80cm程度、深さは10cm程度である。

SD07（第230・233図）は第1次調査区北半調査区の南端で一部のみ（長さ6m程）確認された溝である。上端幅105cm、深さ57cm、覆土の記録は残されていない。

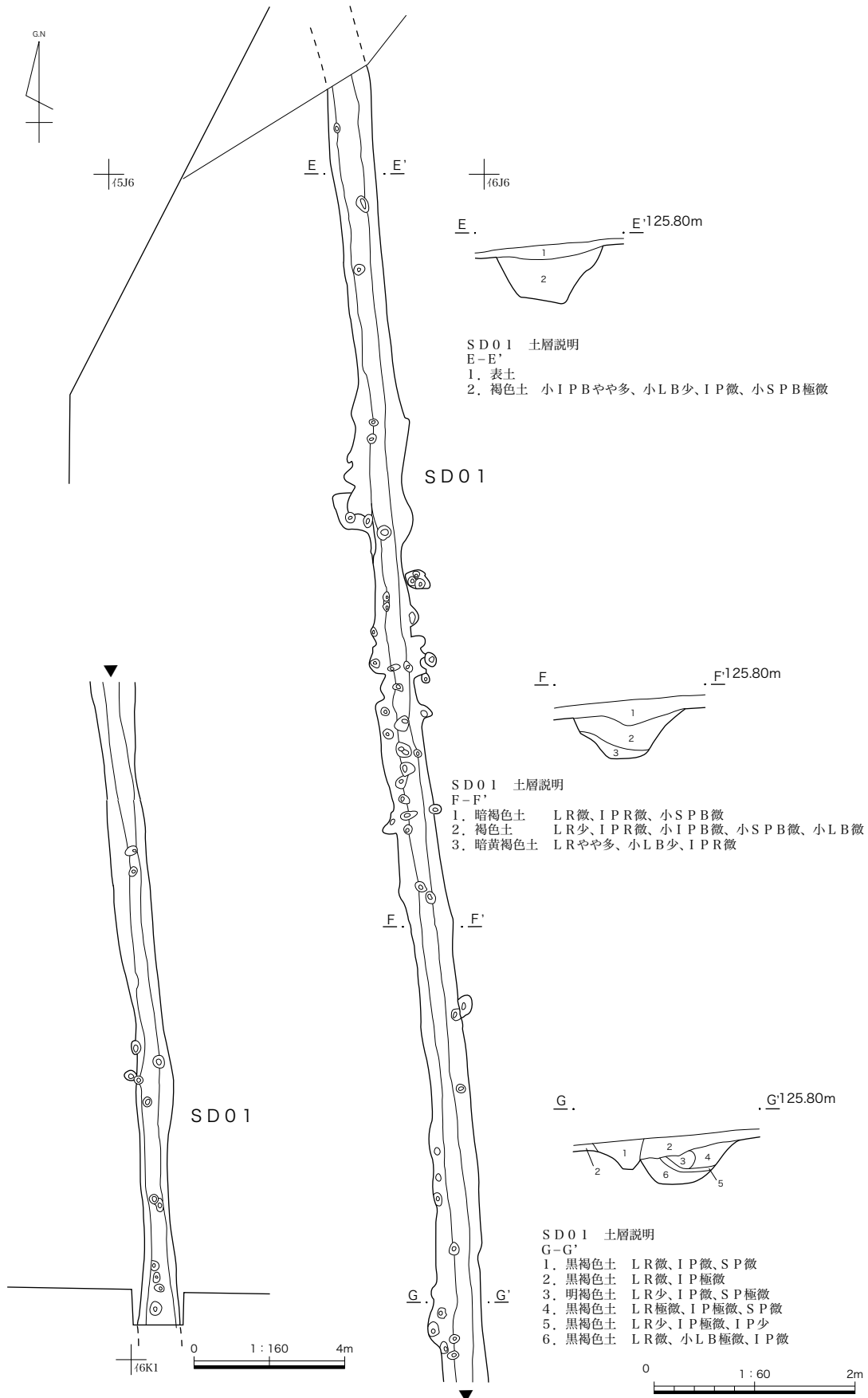
SD04（第229～230、234～236図）は前述のように調査区内で長く確認された溝である。南半調査区

第3章 刈沼遺跡第1次調査区の遺構と遺跡

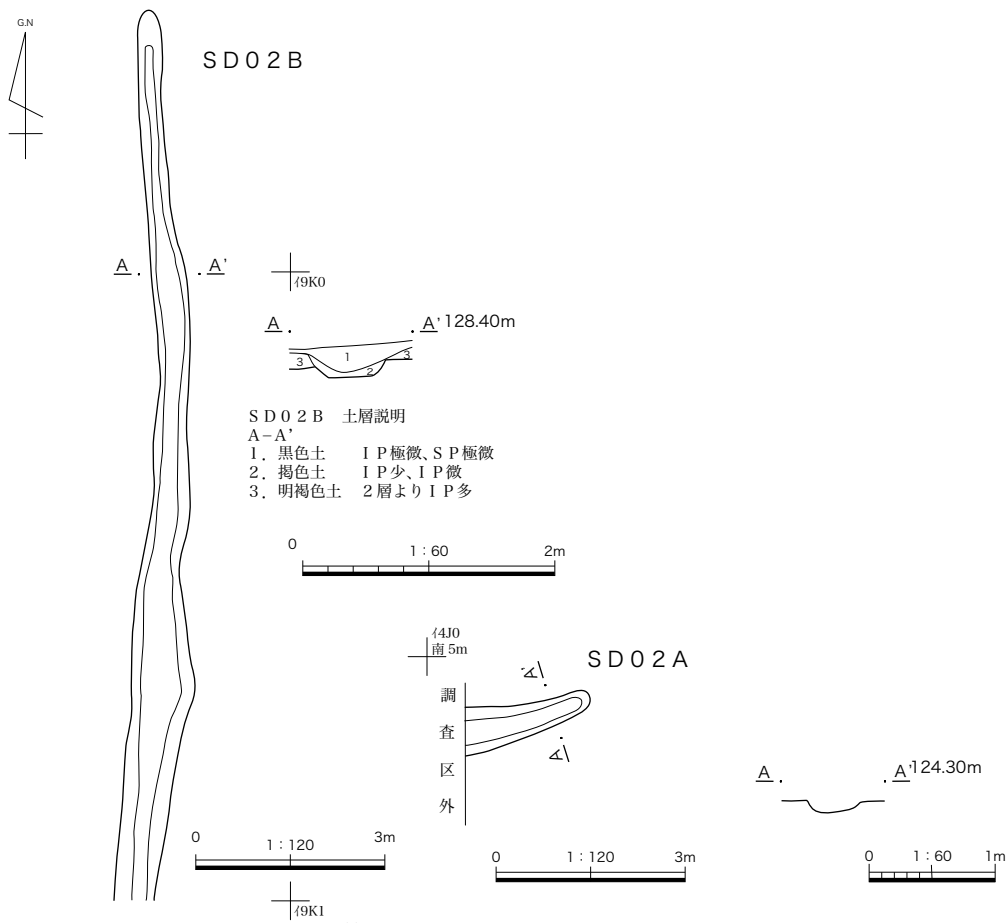




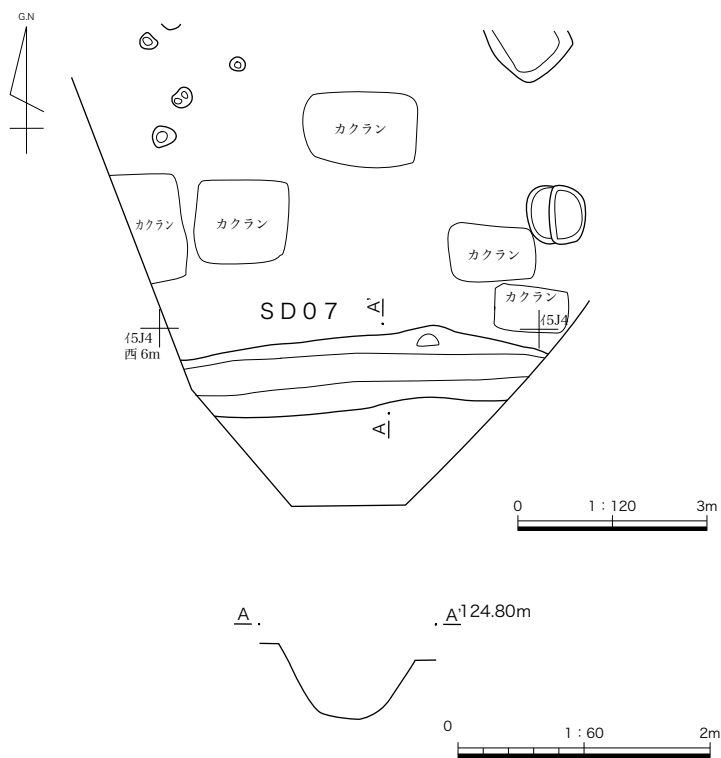
第230図 SD01・03・04・06・07



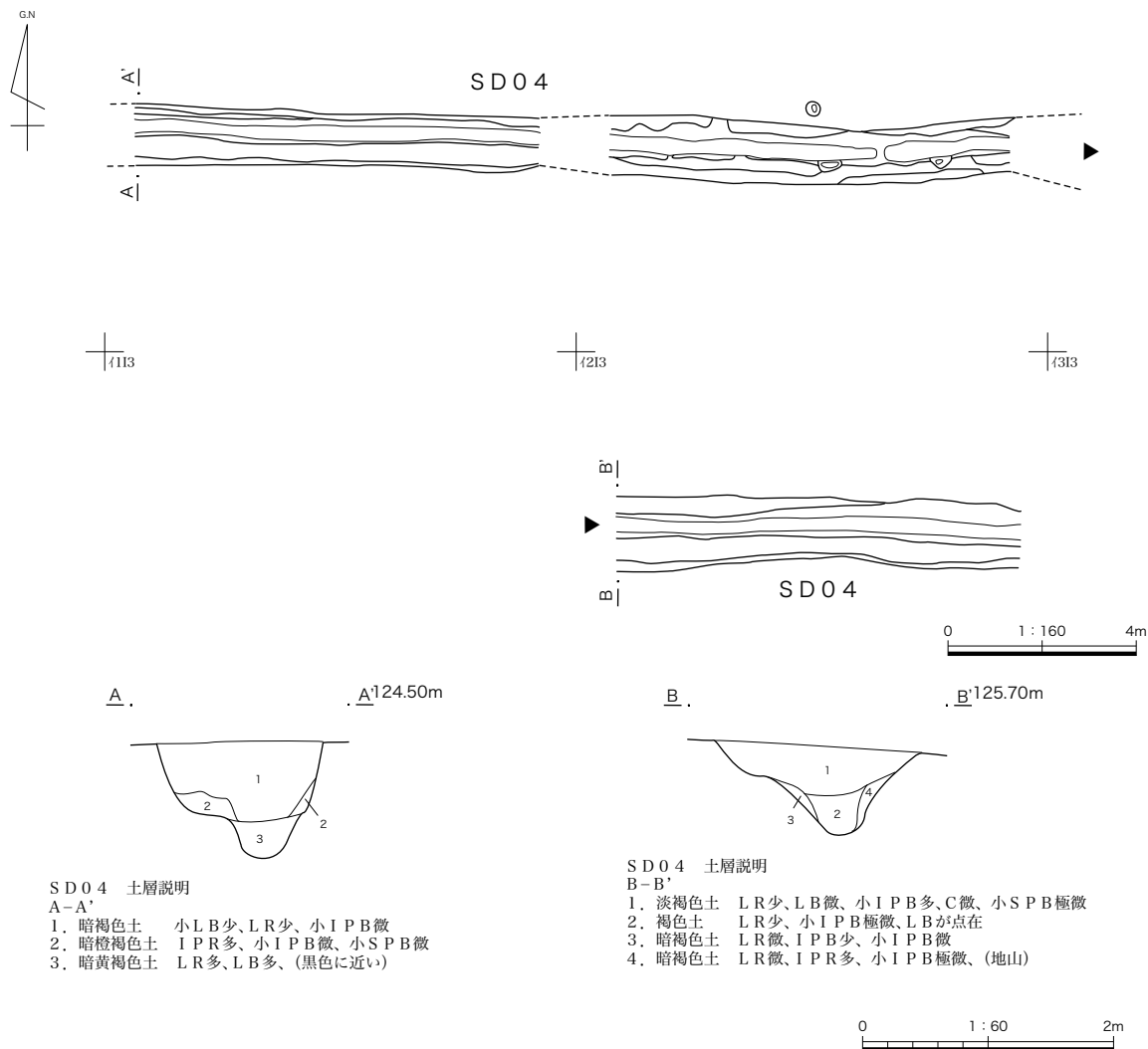
第231図 SD01



第232図 SD02A・02B



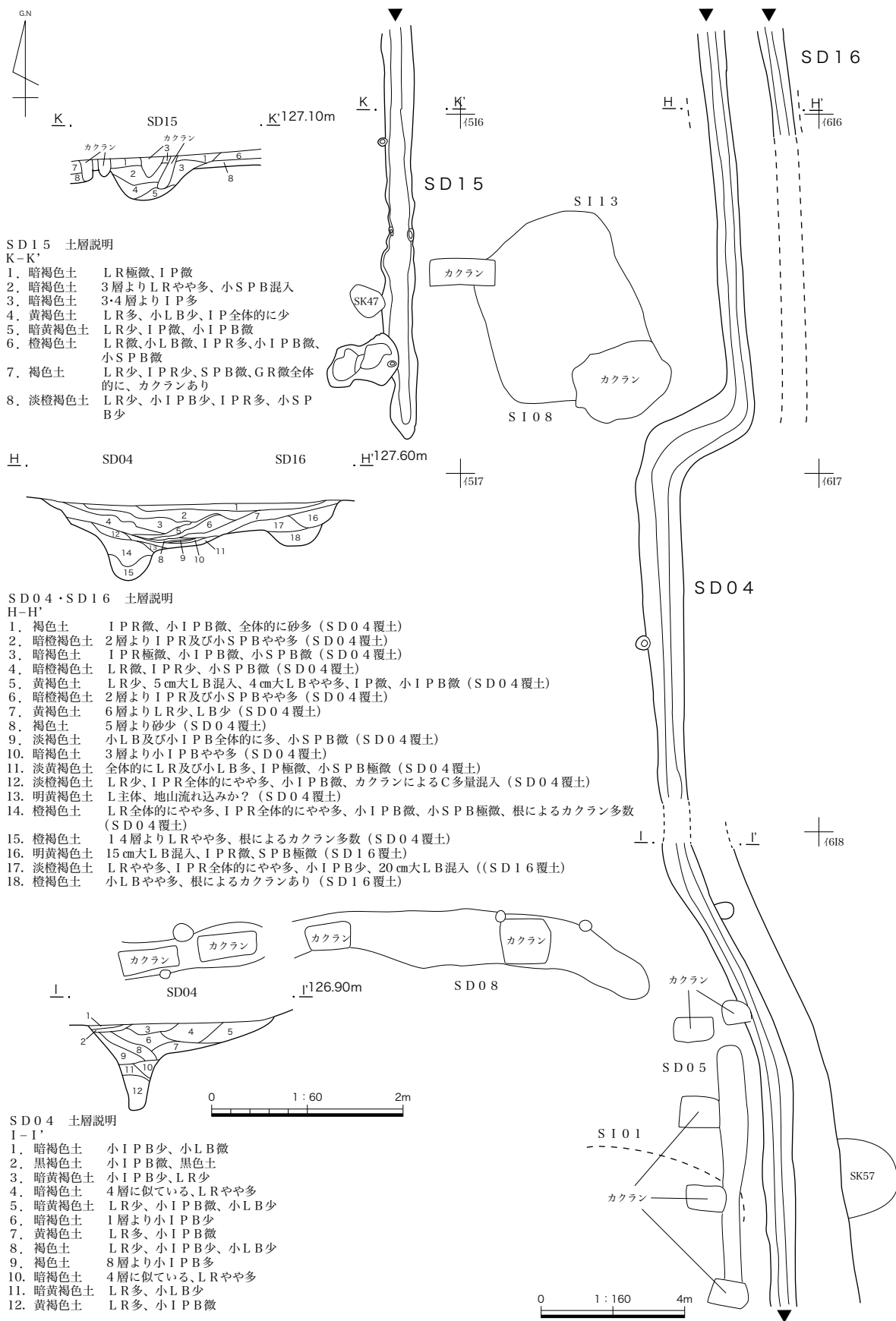
第233図 SD07



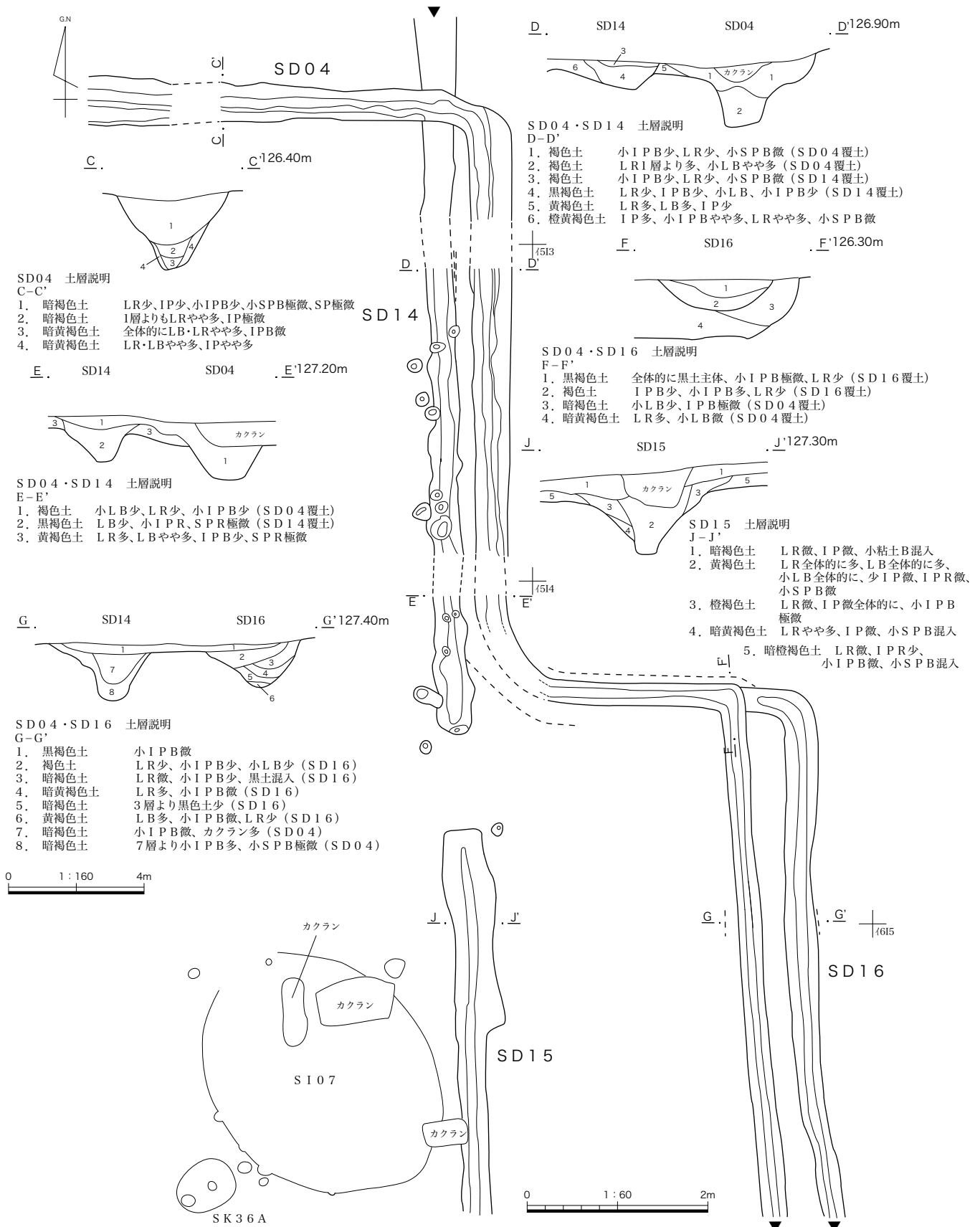
第234図 SD04

では確認されず、北半調査区の南端から概ね南北方向軸(N°-E)で42mほど直線的に伸び、途中イ618グリッド辺りで6mほど軸はほぼ変えないまま若干西側にずれ、更にまた東へずれた後、24mほど直線的に北へ延びている。イ514グリッドでクランク状に直角に折れ東西方向となるが、更にまた折れて17mほど南北方向、更に折れて第1次調査区北側では東西方向溝となる。調査区北半では、丁度傾斜変換点に縦走しており、東側上端が一段高く、西側上端がやや下がったレベルにある。但し概ねローム漸移層面でのレベルであり、本来的には黒色土中からの掘り込みが推定され、実際の機能時に段切りカット状になっていたかは分からない。上端幅220~240cm程度で概ね一定している。深さは160~180cm程度で推移している。

SD04北側については第234図に示した。ここでは上端幅130~163cm、深さ80~92cm程度である。地形の傾斜に概ね直交していることもあり、南側に比べやや上端幅が狭い。南北方向軸でSD14やSD16等と重なるところについては第236図に示した。D-D'ラインからすると、SD04→SD14の関係が示されるが、E-E'ラインセクションではSD14の上位覆土がSD04底面上の覆土と連続しており、SD14→SD04となる。直接的な切り合い部分での観察が為されておらず確定的な判断はできないが、Dラインセクションの微妙な分層ラインなども含め考え、SD04の方が新しいと考えておく。SD16との関係ではF-F'ラインで示されてい



第235図 SD04・15・16



SD04 土層説明
C-C'

1. 暗褐色土 LR少、IP少、小IPB少、小SPB極微、SP極微
2. 暗褐色土 1層よりもLRやや多、IP極微
3. 暗黄褐色土 全体的にLB・LRやや多、IPB微
4. 暗黄褐色土 LR・LBやや多、IPやや多

SD04・SD14 土層説明
E-E'

1. 褐色土 小LB少、LR少、小IPB少 (SD04覆土)
2. 黒褐色土 LB少、小IPR、SPR極微 (SD14覆土)
3. 黄褐色土 LR多、LBやや多、IPB少、SPR極微

SD04・SD16 土層説明
G-G'

1. 黒褐色土 小IPB微
2. 褐色土 LR少、小IPB少、小LB少 (SD16)
3. 暗褐色土 LR微、小IPB少、黒土混入 (SD16)
4. 暗黄褐色土 LR多、小IPB微 (SD16)
5. 暗褐色土 3層より黒土少 (SD16)
6. 黄褐色土 LB多、小IPB微、LR少 (SD16)
7. 暗褐色土 小IPB微、カクラン多 (SD04)
8. 暗褐色土 7層より小IPB多、小SPB極微 (SD04)

SD04・SD14 土層説明
D-D'

1. 褐色土 小IPB少、LR少、小SPB微 (SD04覆土)
2. 褐色土 LR1層より多、小LBやや多 (SD04覆土)
3. 褐色土 小IPB少、LR少、小SPB微 (SD14覆土)
4. 黒褐色土 LR少、IPB少、小LB、小IPB少 (SD14覆土)
5. 黄褐色土 LR多、LB多、IP少
6. 橙黄褐色土 IP多、小IPBやや多、LRやや多、小SPB微

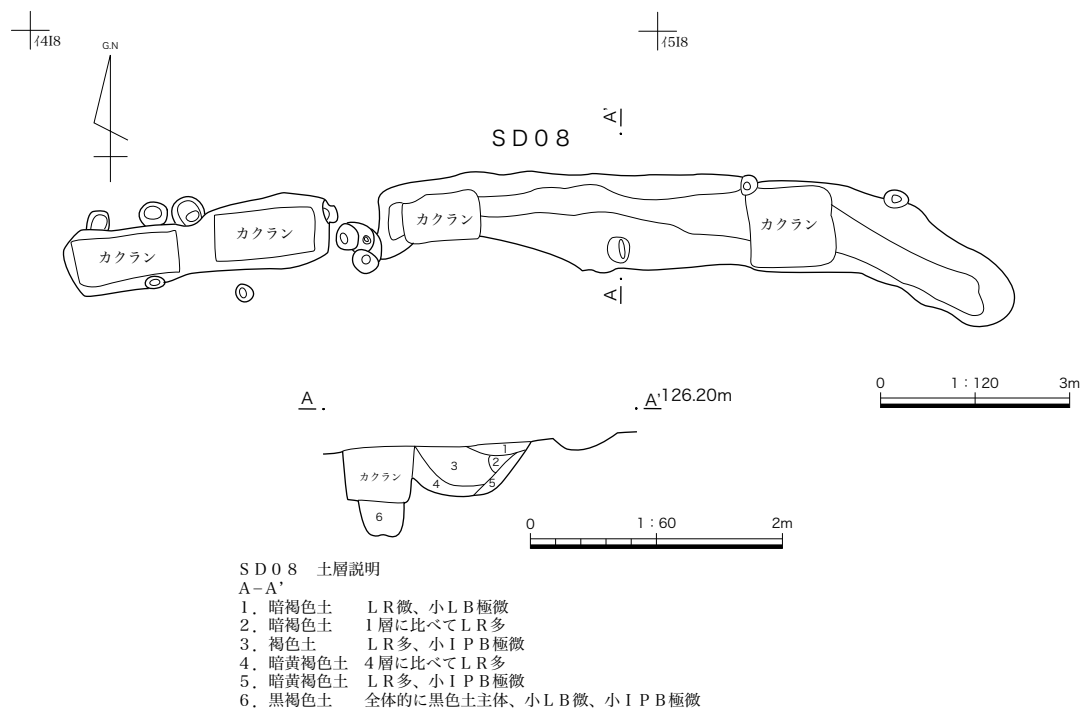
SD04・SD16 土層説明
F-F'

1. 黒褐色土 全体的に黒土主体、小IPB極微、LR少 (SD16覆土)
2. 褐色土 IPB少、小IPB多、LR少 (SD16覆土)
3. 暗褐色土 小LB少、IPB極微 (SD04覆土)
4. 暗黄褐色土 LR多、小LB微 (SD04覆土)

SD15 土層説明
J-J'

1. 暗褐色土 LR微、IP微、小粘土B混入
2. 黄褐色土 LR全体的に多、LB全体的に多、小LB全体的に、少IP微、IPR微、小SPB微
3. 橙褐色土 LR微、IP微全体的に、小IPB極微
4. 暗黄褐色土 LRやや多、IP微、小SPB混入
5. 暗橙褐色土 LR微、IPR少、小IPB微、小SPB混入

第236図 SD04・14・15・16



第237図 SD08

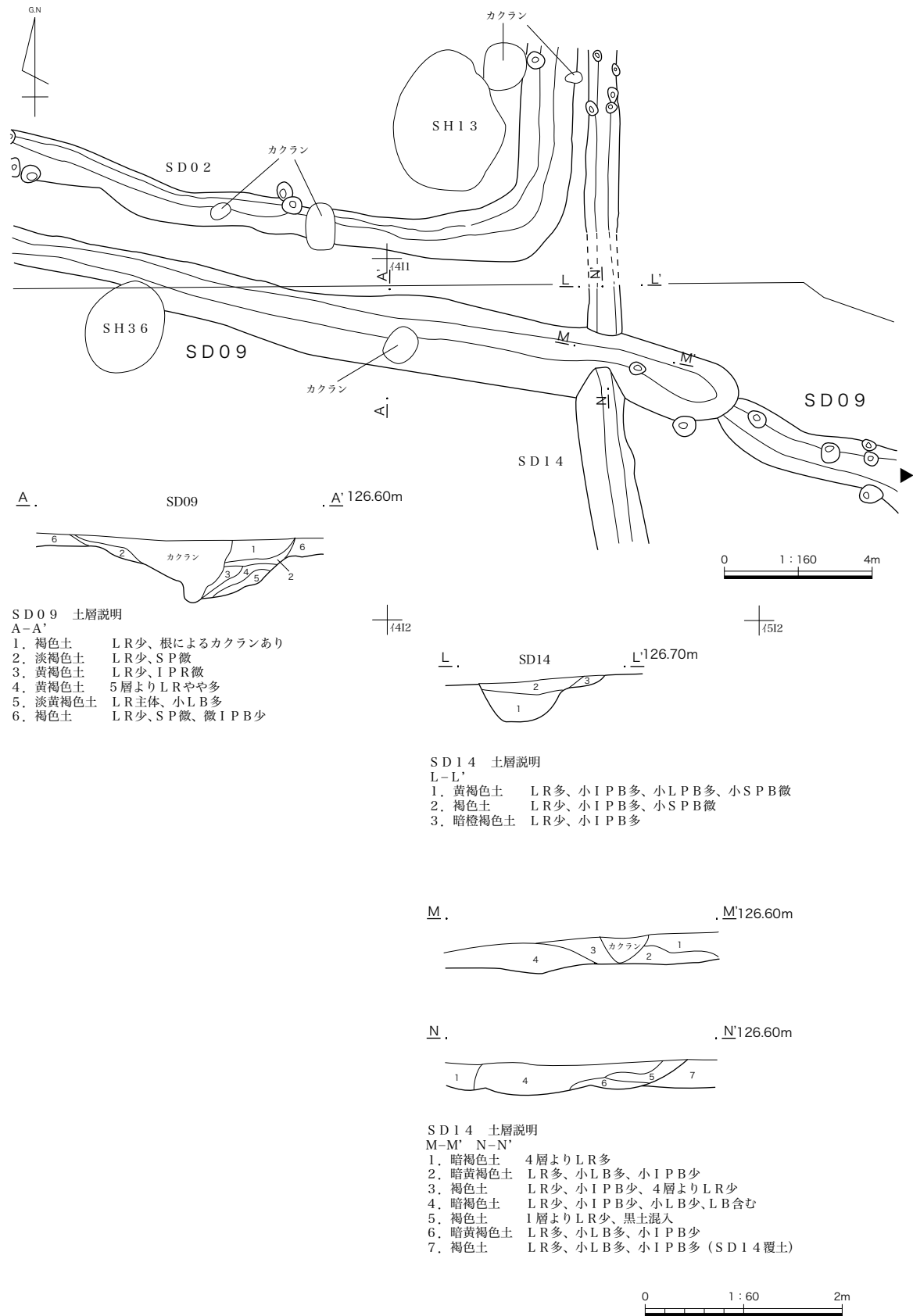
るように、SD04 → SD16 となる。SD16 (第235、236図) はほぼ同軸同方向でSD04と併走し、上端幅64～100cm、深さ33～43cmの形態を示すが、南北方向14mで南側は途切れている。

SD14 (第236、238図) はSD15の北側延長上で、北側第2次調査区側に伸びていく溝で、上端幅70～160cm、深さ30～50cm程度、断面逆台形状を呈する。南側では上端近辺や壁で小ピットが認められるが、深さなどの形態は不明で、伴うものか否かは不明である。北側でSD09と重複し、交差部の土層断面観察からSD14 → SD09が確認される。

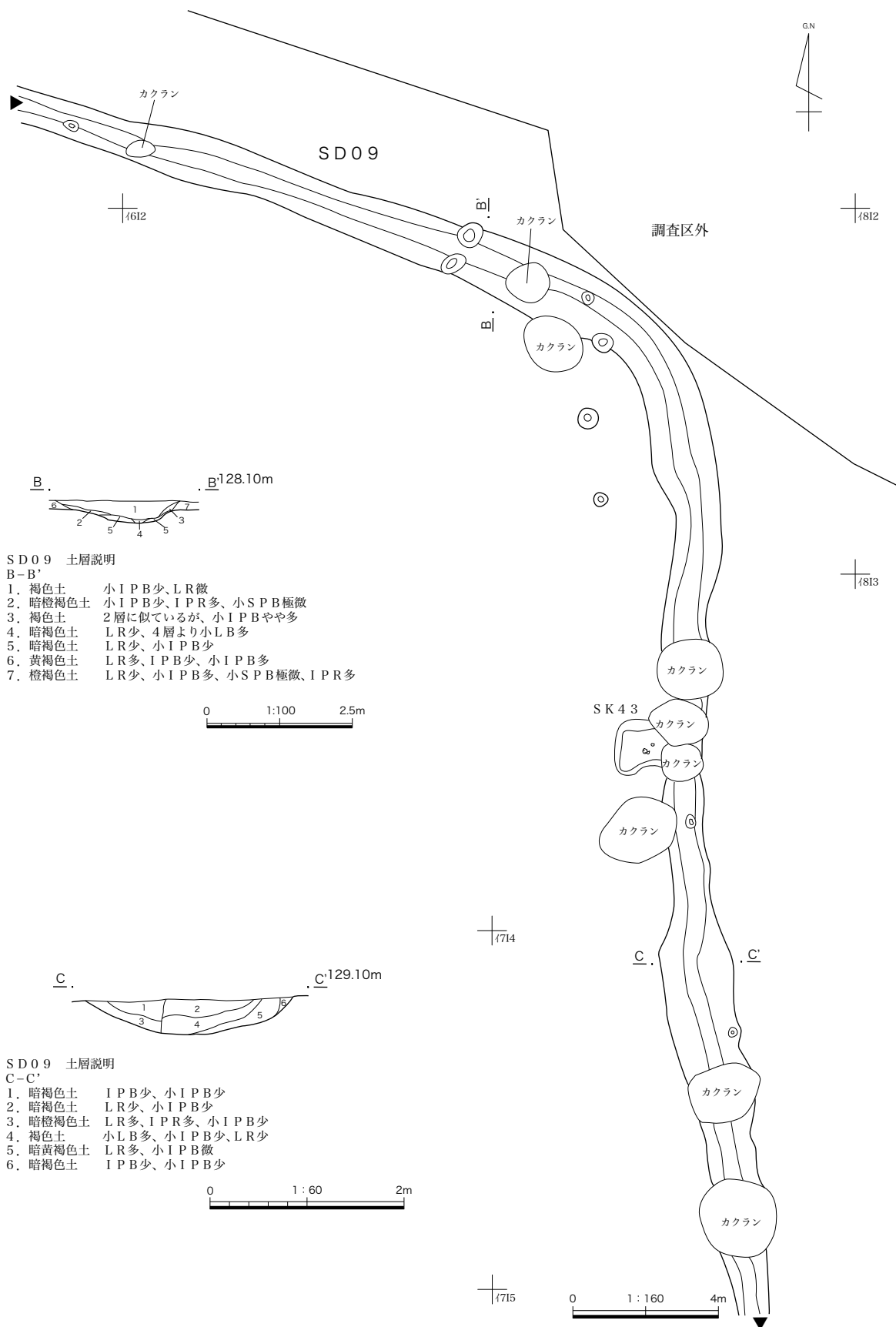
SD15 (第235、236図) はSD01の延長上に位置し、SD14とも同軸同方向である。SD01とは20mの距離があるが、SD14とは3.2m程の距離をあけるのみである。SD15は、第236図Jラインセクションによれば、上位包含層(表土?)には覆われるが、下位包含層(縄紋包含層)を掘りこんで作られている。ここでの上端幅を計測すれば173cmとなる。南のK-K'ラインでは壁・底面の傾斜が丸みを帯びているとともに、土層の堆積もやや複雑さを示している。南端近くで小ピットが重なっているが、関係性については不明である。また北端近辺ではやや上端幅が広がっているが、微妙な確認面のレベル差等によるようで、本来的な形態の差異はあまり無いとみられる。

SD09 (第238～240図) は、第1次調査区東側で北北西-南南東方向(N-5°-W)で67mほど確認され、調査区北東端近くで110°程度軸を変え、西北西-東南東方向(N-70°-W)で42mほど確認、更に第2次調査区に続く溝である。第1次調査区分は、3分割して示す。第2次調査区でも29m程検出され、調査区南西端近くで90°軸を変え、南北方向に近い軸の溝9mほどが確認されている。つまり、大きく見ればコの字～台形状に展開するとも言える。東西方向では第1・2次調査区分併せて71mほどとなる。SD14との関係は第238図M-M'ラインから、SD14 → SD09となるが、3・4層間の分層ラインを切り合い線と判断すれば

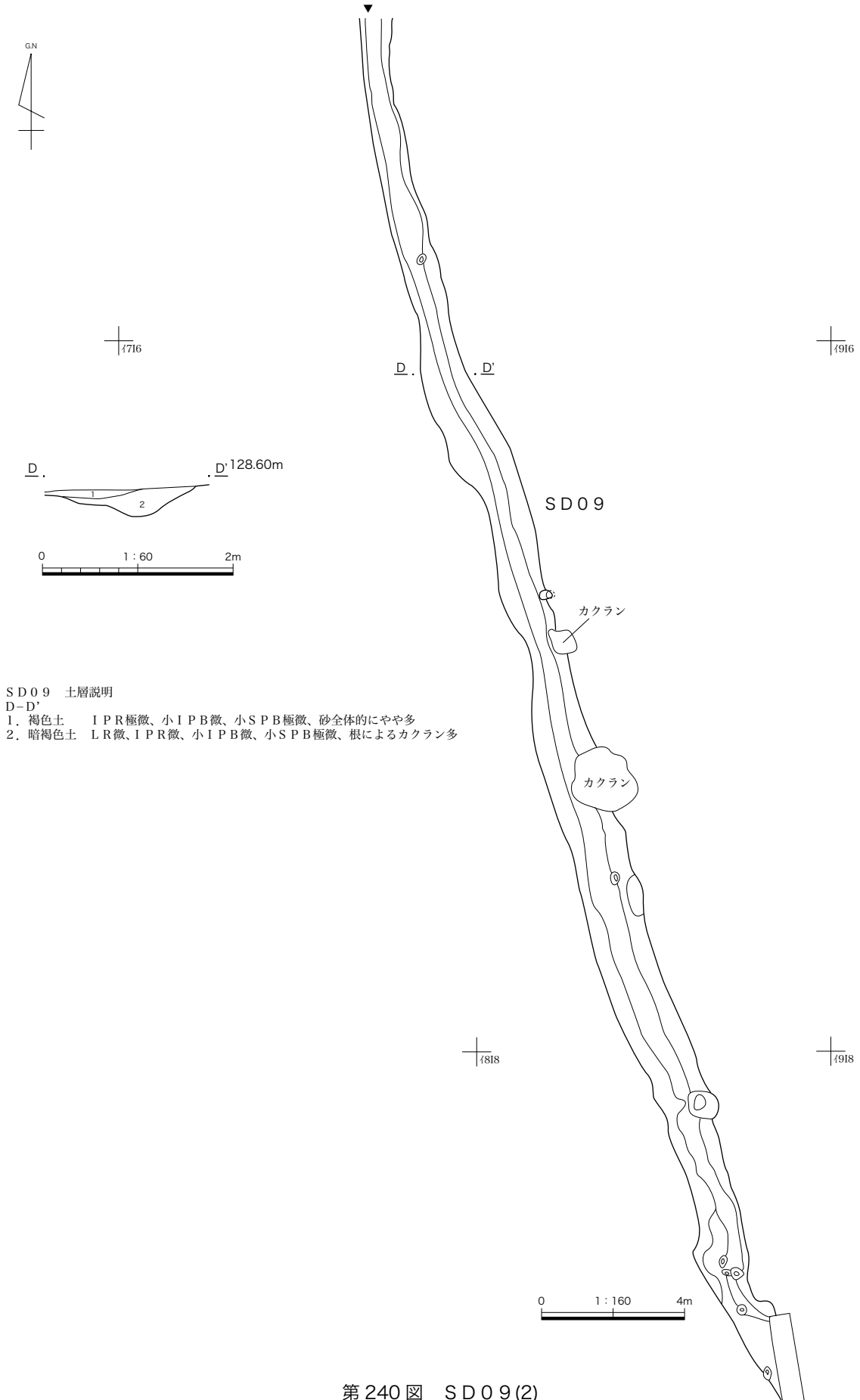
第3章 刈沼遺跡第1次調査区の遺構と遺跡



第238図 SD02・09・14



第239図 SD09(1)

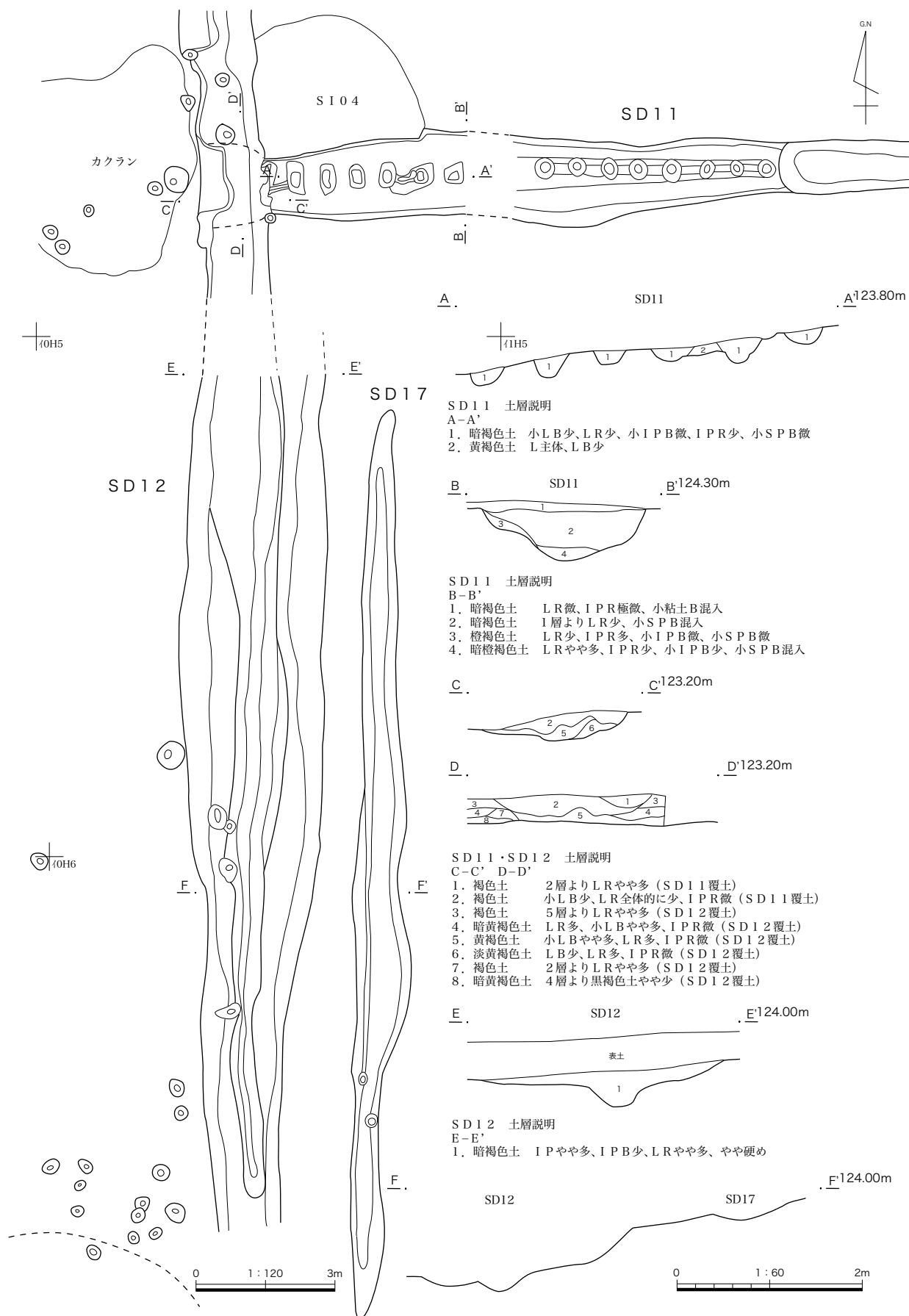


SD09 土層説明

D-D'

- 1. 褐色土 IPR極微、小IPB微、小SPB極微、砂全体的にやや多
- 2. 暗褐色土 LR微、IPR微、小IPB微、小SPB極微、根によるカクラン多

第240図 SD09(2)



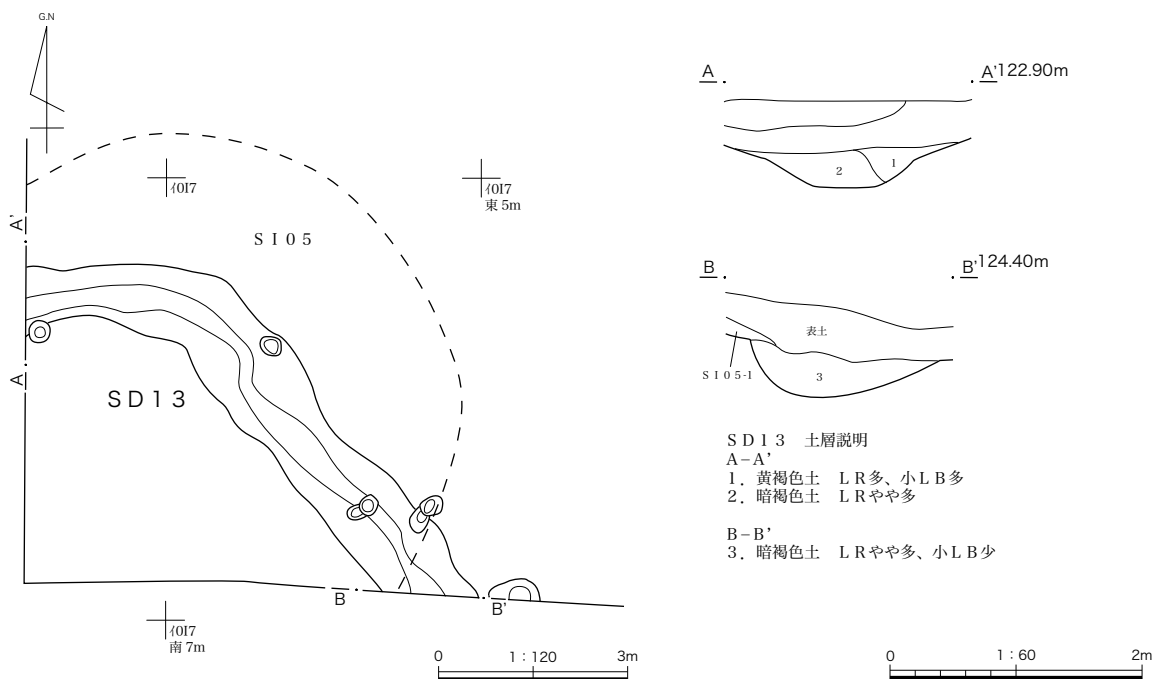
SD11 土層説明
A-A'
1. 暗褐色土 小LB少、LR少、小IPB微、IPR少、小SPB微
2. 黄褐色土 L主体、LB少

SD11 土層説明
B-B'
1. 暗褐色土 LR微、IPR極微、小粘土B混入
2. 暗褐色土 1層よりLR少、小SPB混入
3. 橙褐色土 LR少、IPR多、小IPB微、小SPB微
4. 暗橙褐色土 LRやや多、IPR少、小IPB少、小SPB混入

SD11・SD12 土層説明
C-C' D-D'
1. 褐色土 2層よりLRやや多 (SD11覆土)
2. 褐色土 小LB少、LR全体的に少、IPR微 (SD11覆土)
3. 褐色土 5層よりLRやや多 (SD12覆土)
4. 暗黄褐色土 LR多、小LBやや多、IPR微 (SD12覆土)
5. 黄褐色土 小LBやや多、LR多、IPR微 (SD12覆土)
6. 淡黄褐色土 LB少、LR多、IPR微 (SD12覆土)
7. 褐色土 2層よりLRやや多 (SD12覆土)
8. 暗黄褐色土 4層より黒褐色土やや少 (SD12覆土)

SD12 土層説明
E-E'
1. 暗褐色土 IPやや多、IPB少、LRやや多、やや硬め

第241図 SD11・12・17



第242図 SD13

逆の関係になる。広いところでは上端幅2mを超えるが、90cm程度のところもあり、主には160～180cm程度で推移する。深さも南側の南北方向部分では浅く28～35cmほどだが、東西方向部分では深さ54cmと深くなっている。SK43と重複があるほか、小ピット及び攪乱と重なっている。

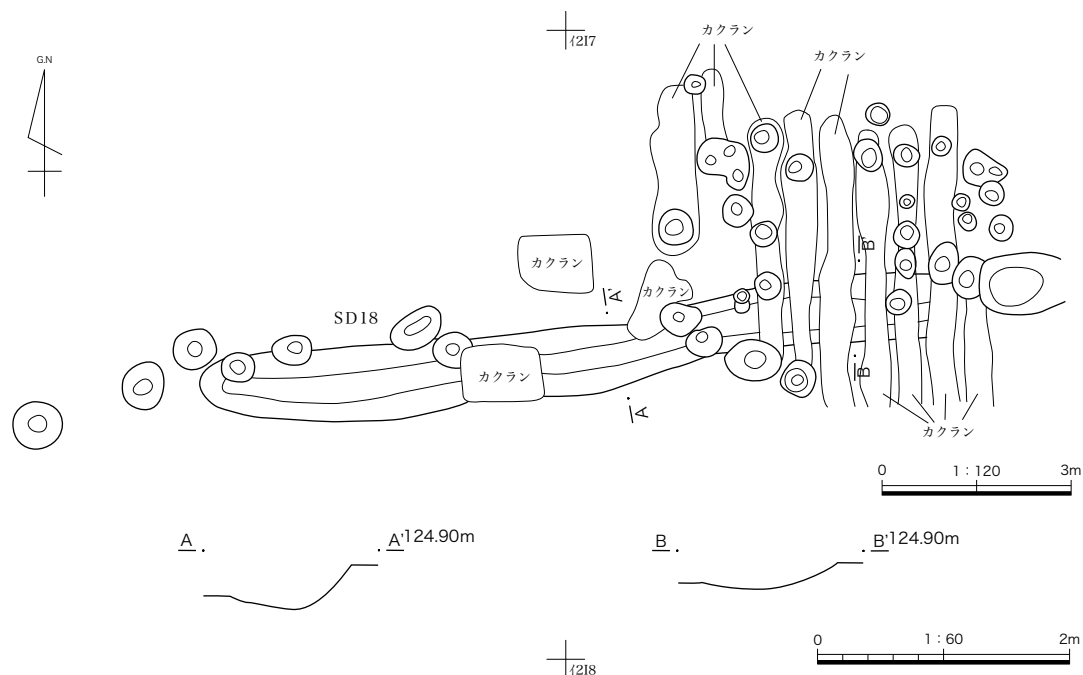
SD02A（第232図）は第1次北半調査区西側中央窪地で検出された遺構である。幅38cm、長さ2m程度の確認である。覆土の観察記録は残されていない。西側は調査区外となり、細長い土坑の可能性も残る。

SD02B（第232図）は第1次南半調査区の東側で確認された南北方向軸の溝である。SD02Aとは全く別の溝である。長さ14.1m程の確認、幅36～102cmで北側が狭く南側が広い傾向にある。確認面からの深さは10cm程度だが、包含層上面よりの掘り込みである。間隔はかなりあるが、SD01と同方向同軸である。

SD08（第237図）は第1次北半調査区の概ね中央で確認された東西方向溝で、南北方向溝SD01とSD15の間の途切れているところにある。縄紋集落範囲の東側ブロック内に位置する。西側で攪乱と重なり、或いは攪乱の重なりを溝と捉えているかもしれない。東端ではやや方向を変え、上端73～106cm、深さ40cm程である。上端近辺で小ピットがやや多く記録されているが、溝との関係は不明である。幾つかは縄紋期ピット群との関わりで考えた方が良いかもしれない。深さに比してやや幅広である点、他の溝との差異を示す。

SD11・12・17（第241図）は調査区北西に位置する。地形的には西側に傾斜する斜面となる。SD12・SD17いずれも南北方向に長く延びる溝で、南側は縄紋集落範囲にかかるが、それ以外は北側ゾーンとなる。

SD12は調査区北端まであり、そのまま第2次調査区側の溝と接続する。SD12（第241図）は第1次調査区範囲内で南北28m、第2次調査区分を併せ44mの確認である。上端幅70～160cm、深さは40cm程度である。SD11と重複し、SD12→SD11の関係が捉えられている。E-E'ラインを境界に上端幅が異なるが、ベルト？を挟んで確認面レベルが違っていることによるようである。中央が一段下がる底面となる所が多く、平面ラインもやや複雑な記録となっているが、段より上位の緩い傾斜部分の測点箇所によるようにも思われる。覆土はやや複雑な堆積記録を示しているところもあるが、基本は黒色土及び壁際のややロームを



第243図 SD18

多く含む土の堆積である。

SD17 (第241図) は、SD12の東側で概ね併走する方向の溝である。上端幅50～120cm、深さ8cmほどの断面皿状の浅い溝で、写真や覆土の観察記録等確認できず、不明な点が多い。

SD11 (第241図) は東西方向溝で、西端がSD12に接しこれより西には攪乱が入ることもあって不明となる。東はI2I4グリッドあたりまで、計15mの溝である。上端幅102～184cm、深さ25～54cmで、西端や東端に近くなるほど幅狭く深さも浅くなるようである。既述のように、SD12より新しいが、両者がほぼ直交し、SD12の西側に伸びないことは両者の関係性を示しているかもしれない。底面の凹凸・ピット状の落ち込みの並びが観察記録されている。20cm程度の概ね等間隔で並んでおり深さや覆土も比較的均質なようであり、その方向なども含め溝に伴うものとみられる。但し東側4m部分には見られず不明な点も残る。

SD13 (第242図) はL字状の調査区上位側の南西端、SI05と重なる位置にある。SI05の記述でも記したように、住居跡覆土に覆われる形で溝覆土堆積が確認されていることから、SD13→SI05となる。縄紋時代の住居跡周溝などの溝となる可能性があるだろうか。東側では北西-南東方向で推移し、西側では概ね東西方向となる。上端幅80～140cm、深さ28～35cmで断面は皿状に近い。

SD18 (第243図) は縄紋期集落範囲内北側ブロック内に位置する東西方向溝である。北側にはSI03、北東にはSI10があり、この溝の近辺にも多くのピットがある。24mほど確認されているが、東5m程は攪乱で多くが不明である。上端幅90～120cm、深さは10～25cm、壁の傾斜は緩やかで断面皿状に近い。上端近辺で多く見られるピットについては、縄紋期ピット群との関わりで考えた方が良さそうである。

その他の遺構

既述のように多くのピットが確認されており、調査時には一定数発番もされた。旧I4I8グリッドでP1～P108、旧I4I9グリッドでP1～P20、旧I4J0グリッドでP2～P15、旧I4J1グリッドでP1～P10、旧I

4J2 グリッドで P1～P29、旧イ4J3 グリッドで P1～P25、旧イ5J1 グリッドで P1～P40、旧イ5I8 グリッドで P1～P22、旧イ5J2 グリッドで P1～P27、以上 295 基のピットが発番されている。但し土層断面の図や写真の記録が残されているものは殆ど無く、上記発番で取り上げられた遺物も多少残されてはいるものの、対応関係に確実性が乏しく、個別の表示はし得なかった。幾つかは住居跡やピット群の番号に新たに振り替えたものもある。既に記したように、航空写真測量では更に多くのピットが記録として示されており、大きな問題とならないものについては、そのまま全体図などで平面のみ示している。

またやや大きな土坑状の落ち込み、土坑についても、写真測量などで認められるものがあり、全体図中のみ示したのものもある。1/20 等の詳細図の記録が無いものについては、個別の提示を断念している。

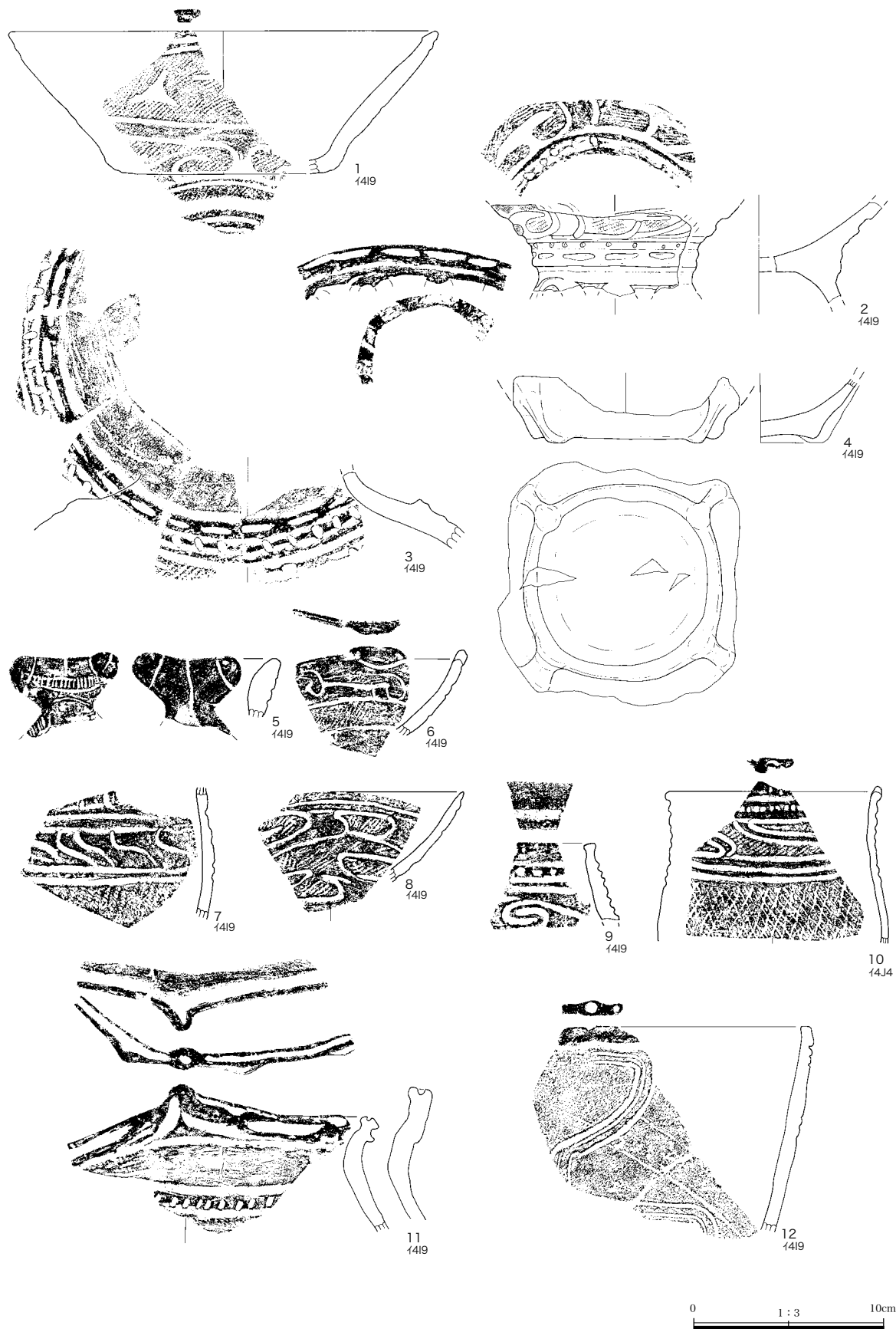
第6節 包含層出土土器

中央窪地

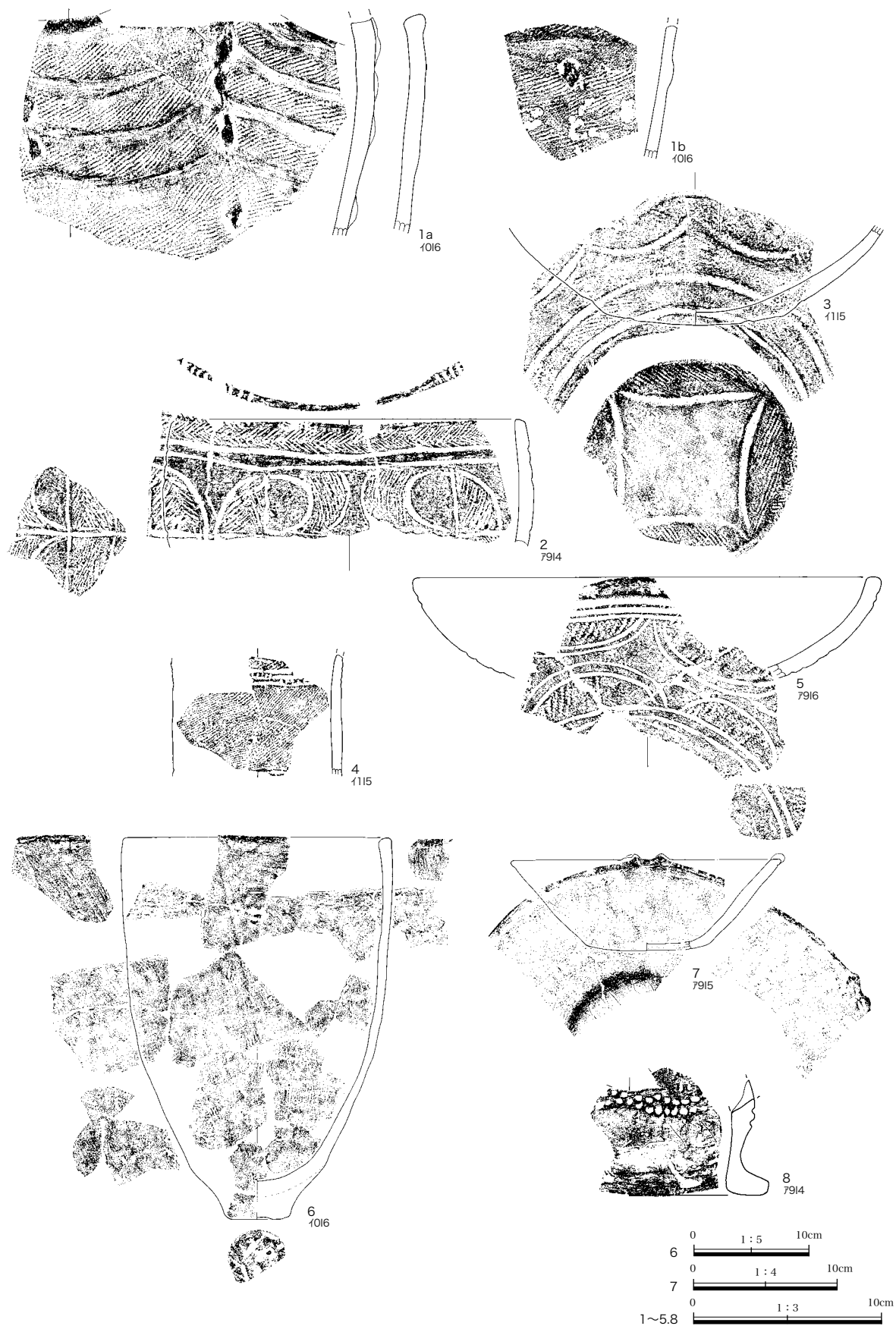
中央窪地として捉えたグリッド（イ4でI8～I9及びJ0～J3のグリッド）の内、ピット群等の項で示したイ4J0～J3等を除いた部分から出土したものから抽出選択して示すこととする。遺物は多量で、限定しての提示とせざるを得ない。

第244図1（イ4I9）は平底となる鉢で、沈線→縄紋LR→無文部ミガキの順で雲形文変化の文様が描かれる。胎土には白色粒・白色針状粒を少量含み、色調は外面黒褐色、内面褐灰色を呈する。内面は粗いミガキ調整が観察される。2（イ4I9）は台付土器で脚部の透かし孔、鉢部での雲形文が特徴である。後者は沈線→縄紋LR（L?）→ミガキの順で描かれる。脚部の透かし孔は円形や三角形が推定されるが、下方の遺存が無く確定的ではない。胎土には石英・白色粒を多く含み、色調は外面灰黄褐色、内面黒褐色を呈する。3（イ4I9）は壺肩部の破片で、この範囲では1/2周程度遺存している。隆線・沈線→刺突・縄紋LR→沈線ナゾリ・無文部ミガキの順で描かれる。刺突は楕円形に近く、若干斜めに施されている部分もある。胎土には石英を少量含み、色調は外面にぶい褐色、内面にぶい橙色を呈する。4（イ4I9）は無文底部資料だが底面観方形を呈するいわゆる「角底土器」である。ただし一般的な角底土器と比べると丸みがあり、体部に至ると横断面ではほぼ円形を為している。「底部に角底状の突起を有する土器」とも言い得るが、底部より若干上位まで角の表現が為されていることも注意される。内面のミガキは丁寧で、顔料の付着も見られる。そもそも浅い土器として顔料容器であった可能性と、破損後にパレットとして使われた可能性の両者が推定される。外面や底部もミガキ調整で、胎土には角閃石を多量、褐色粒を少量含み、色調は外面橙色、内面にぶい橙色を呈する。

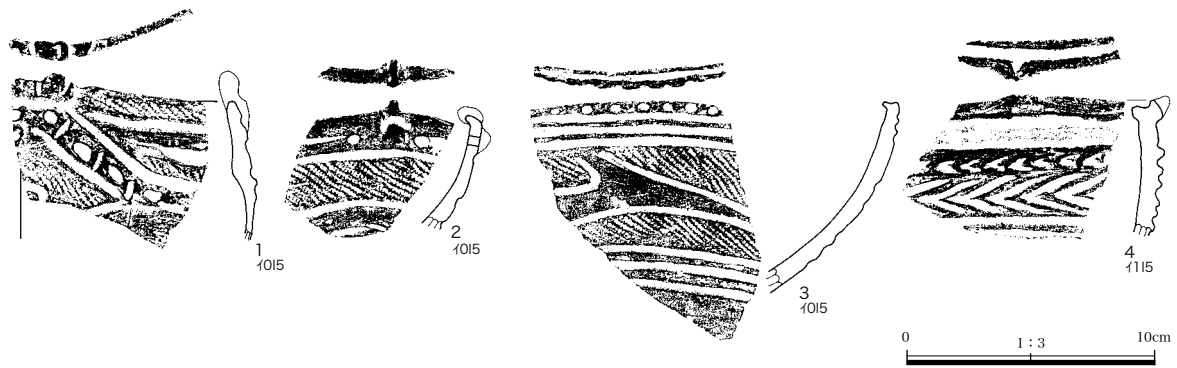
第244図5～12には破片資料の中から抽出して示す。5は波状縁波頂部突起で内面側まで沈線が巡るやや珍しい例、7は不整なクランク文が連続的に描かれている例である。10は大洞C2式の小形深鉢で、副文様などは無く、Z字状の文様のみ描かれる例である。11（イ4I9D）はA突起を有する口縁部破片で、突起と連続的に口縁直下に眼鏡状隆起帯が巡るものである。内面側にも明瞭な沈線が施される。胎土には雲母を多量、石英を少量含み、色調は外面橙色、内面にぶい橙色を呈している。12（イ4I9F）は多截竹管状工具による条線が曲線的かつ疎らに施文されるものである。外面調整は粗いケズリ～ミガキ、内面はナデ調整である。胎土には石英・灰色粒を少量含み、色調はにぶい橙色を呈する。口縁端部の刺突など、新しい様相を示している点は注意される。



第 244 圖 中央窪地出土土器 (1)



第245図 住居跡群北側ブロック出土土器(1)



第246図 住居跡群北側ブロック出土土器(2)

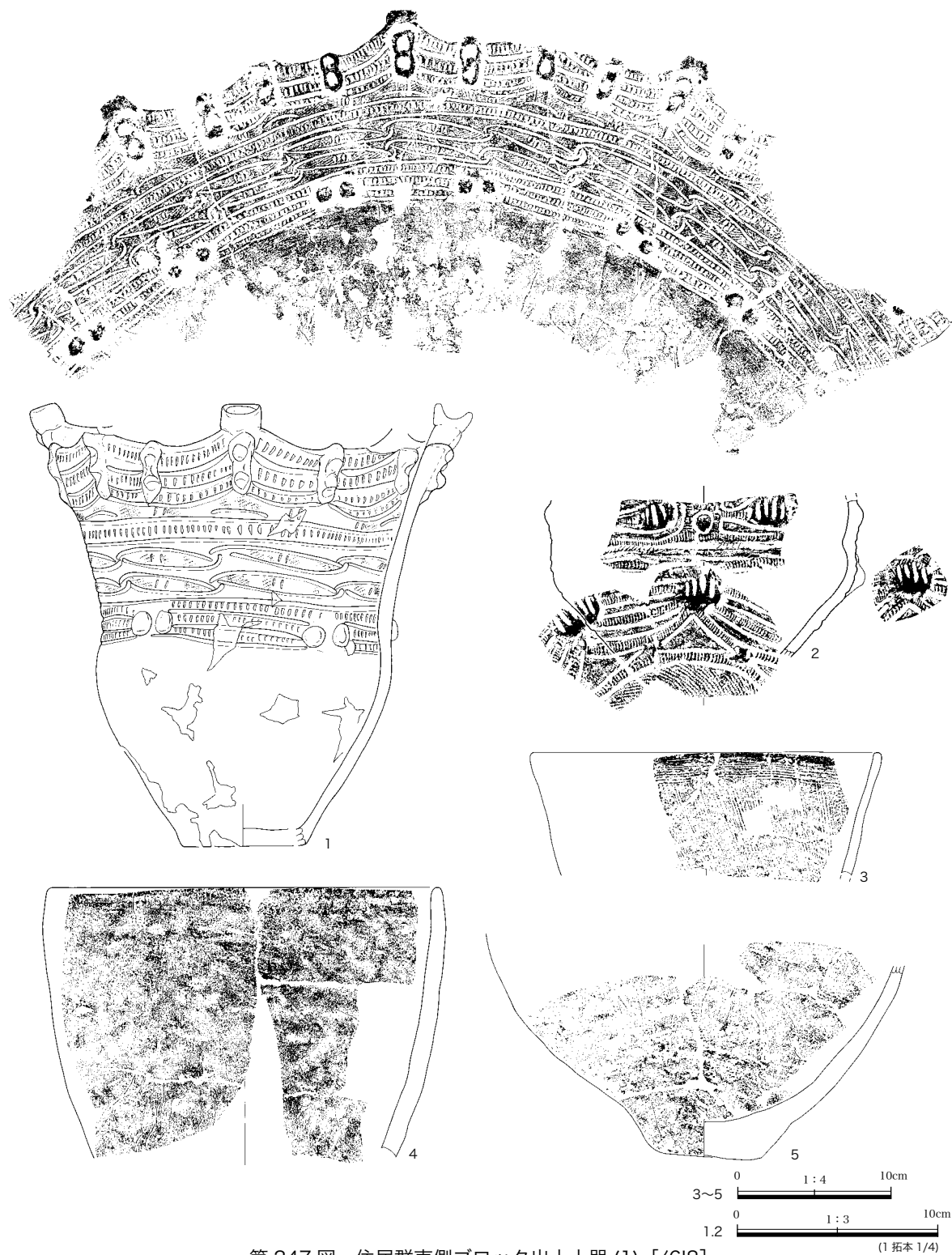
住居跡群北側ブロック

住居包含層範囲の内、北側部分内のグリッド（I0～I4でI5～I7のグリッド）から出土した資料を第245～246図に示す。遺物は多量であるが、住居跡やピット群扱いで提示した資料も多い。それ以外でも多量の遺物があり、抽出しての限定的な資料提示である。

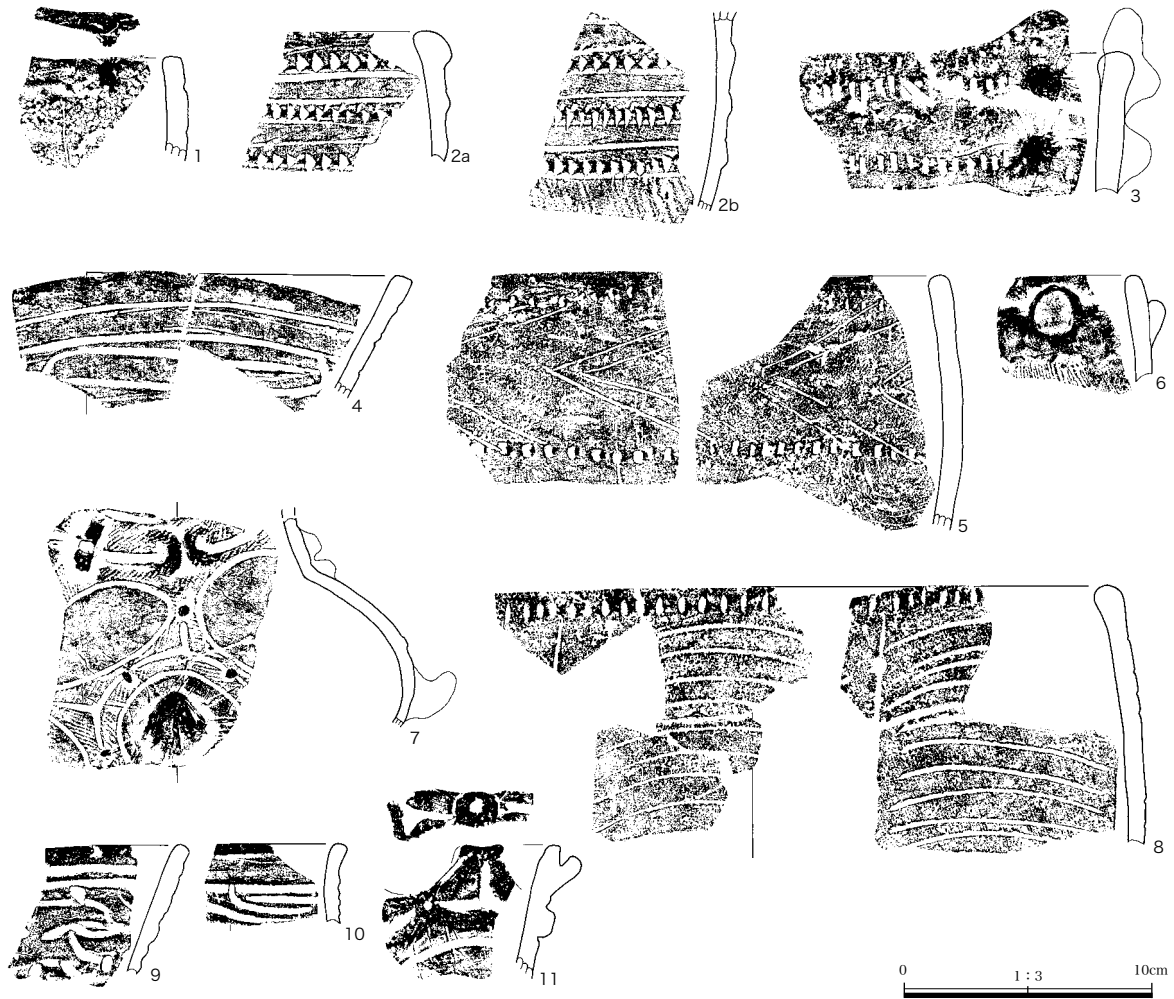
第245図1（I0J6）は波状縁深鉢口縁部破片で、瘤状突起→縄紋無節L→凹部ミガキが観察されるものである。瘤は低く、凹部も浅いことから、典型的な安行1式のような立体感はない。突起は瘤付系の瘤に近い。石英・白色粒を多く含み、色調は外面褐色、内面橙色を呈する。1bとして示した破片は頸部または体部破片で、同一個体は問題ないものの、1aとの位置関係は良く分からない。2（I7J4）は細密沈線土器の口縁部破片で、沈線→細密沈線→ミガキの順で表現される。細密沈線は1本描きのように見えるが判然としない。内面粗いミガキで一部焦げの付着が観察できる。外面の煤付着は目立っている。胎土には白色粒を多量に含み、色調は内外面黒褐色基調である。口縁端部には一定範囲毎に刻み列が配される。3（I1J5）は鉢の体部下半～底部資料で、底部に方形区画文様が描かれる。全体に煤が付着している。内面丁寧なミガキ調整で、胎土には白色粒を多く含み、色調は外面黒褐色、内面にぶい黄褐色を呈する。4（I1J5）は小形深鉢で二溝間の刺痕が上下段交互に描かれるもので、この表現は本遺跡では少ない。沈線→刺突・縄紋LR→ミガキが観察される。胎土は緻密で白色粒少量、色調は内外面灰黄褐色を呈する。5（I7J6）は皿状の鉢で、上下対向の弧線文が沈線→縄紋LR→ミガキの順で描かれる。ミガキはやや雑な感がある。内面もミガキ調整である。胎土には白色粒を極めて多く含み、色調は内外面黒褐色を呈する。6（I0J6）は外面ケズリ～ミガキ、内面粗いミガキ調整が観察される無文深鉢である。拓影でも示されるような線状調整痕が顕著に認められる。外面にぶい橙色、内面にぶい赤褐色を呈する。7（I7J5）は無文の鉢で、内外面丁寧なミガキ調整が観察されるものである。口縁直下に若干の凹部・段差がある。口縁端部で上位に突出するB突起状の突起2単位が確認される。白色粒を多量に含み、色調は外面にぶい褐色、内面灰黄褐色を呈する。8は台付脚部で三角形の透かし孔が細かい刺突列の上位に確認される。第246図1～4には晩期安行式系及び大洞C2式の破片資料をわずかが示す。1は安行3a式～同3b式の隆起帯がある鉢で屢々見られる文様や手法に類似しており、図示した傾きとは異なるかもしれない。

住居跡群東側ブロック

住居跡・包含層範囲の内、東側部分のグリッド（I5～I6でI8～I9及びJ0～J3のグリッド）から出土した資料を第247～248図に示す。このブロックでも、住居跡やピット群扱いで提示した資料も多いが、そ



第 247 図 住居群東側ブロック出土土器 (1) [1618]



第248図 住居跡群東側ブロック出土土器(2) [1618]

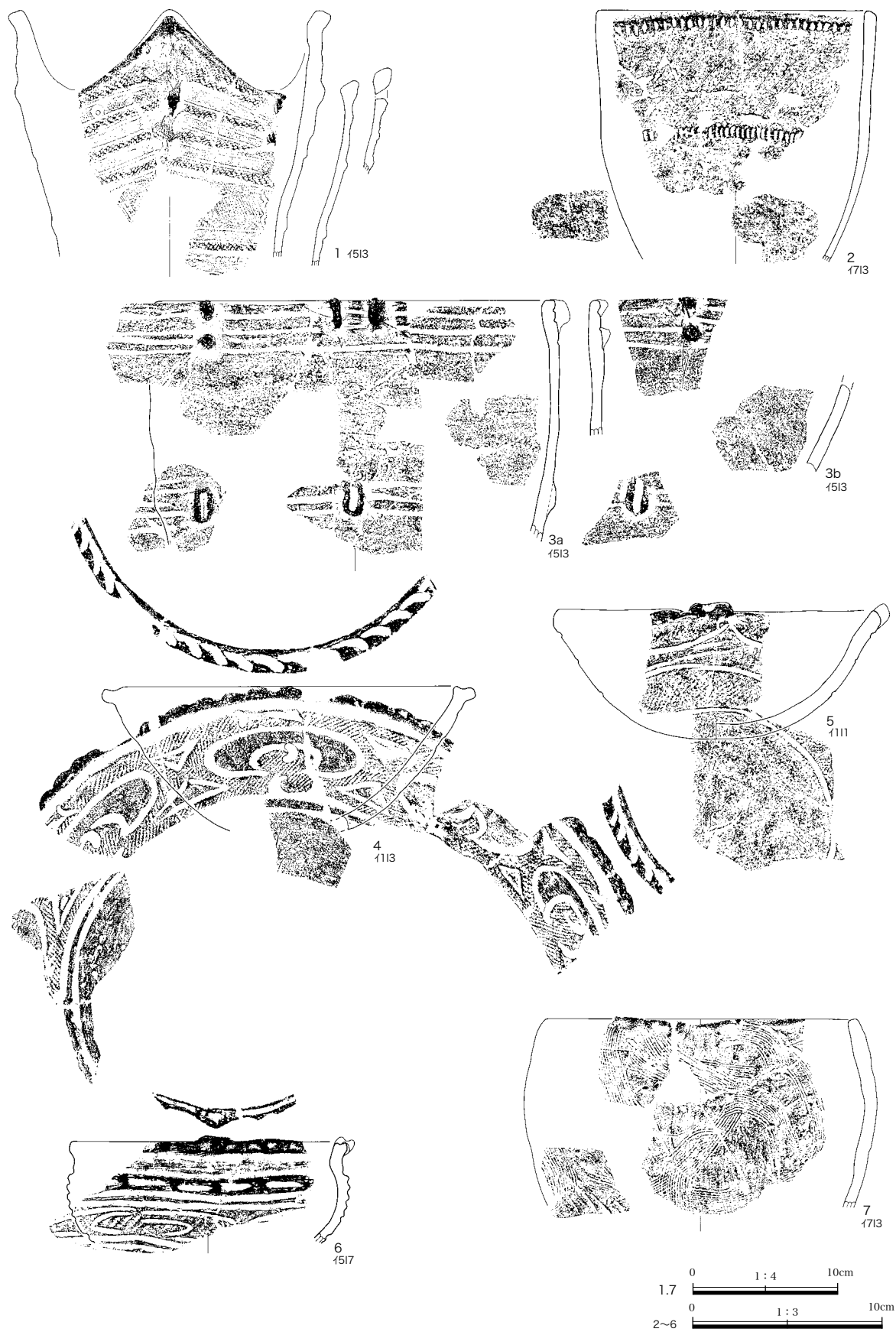
れ以外でも多量の遺物があり、抽出しての限定的な資料提示である。

第247図1は瘤付系の深鉢で、90%以上遺存している良好な資料である。沈線→刻み、沈線→縄紋LR→2個1対の刻みの順で描かれる。後者の刻みは右側に若干粘土のはみ出しが生じる手法だが、他の刻みと工具は同じかもしれない。下端の刻文帯に付される円形瘤は縁があまり磨かれないままである。体部下半は丁寧に磨かれている。内面の焦げ付着は顕著である。石英・白色粒・角閃石を少量含む。80～90%の遺存であるが、口縁部では欠失部があり、突起7単位と推定されるものの遺存は4単位のみである。遺存する4単位の突起も若干の違いがある。色調は内外面黒褐色を呈する。入組文は横繋がり、上下の区画線に接していない。口縁部の刻文帯は原則3段であるが一部4段のところがある。文様構成も多単位の波状口縁、頸部の横繋がり入組文など注目される資料である。2は恐らく瓢形となる小形の注口土器または台付鉢である。隆起帯上刻文によるやや幾何学的な構成は注口土器で多く見られるが、口縁部をはじめ欠損部分も多く確定し得ない。3は条線施文の土器で、条線は6条1単位で施される。内面には焦げが少し付着している。胎土には雲母をやや多く含み、色調はにぶい黄褐色、内面灰黄褐色を基本とする。4は外面粗いミガキ調整の無文土器である。5は内外面粗いナデ・研磨が確認され、やや歪みがある。

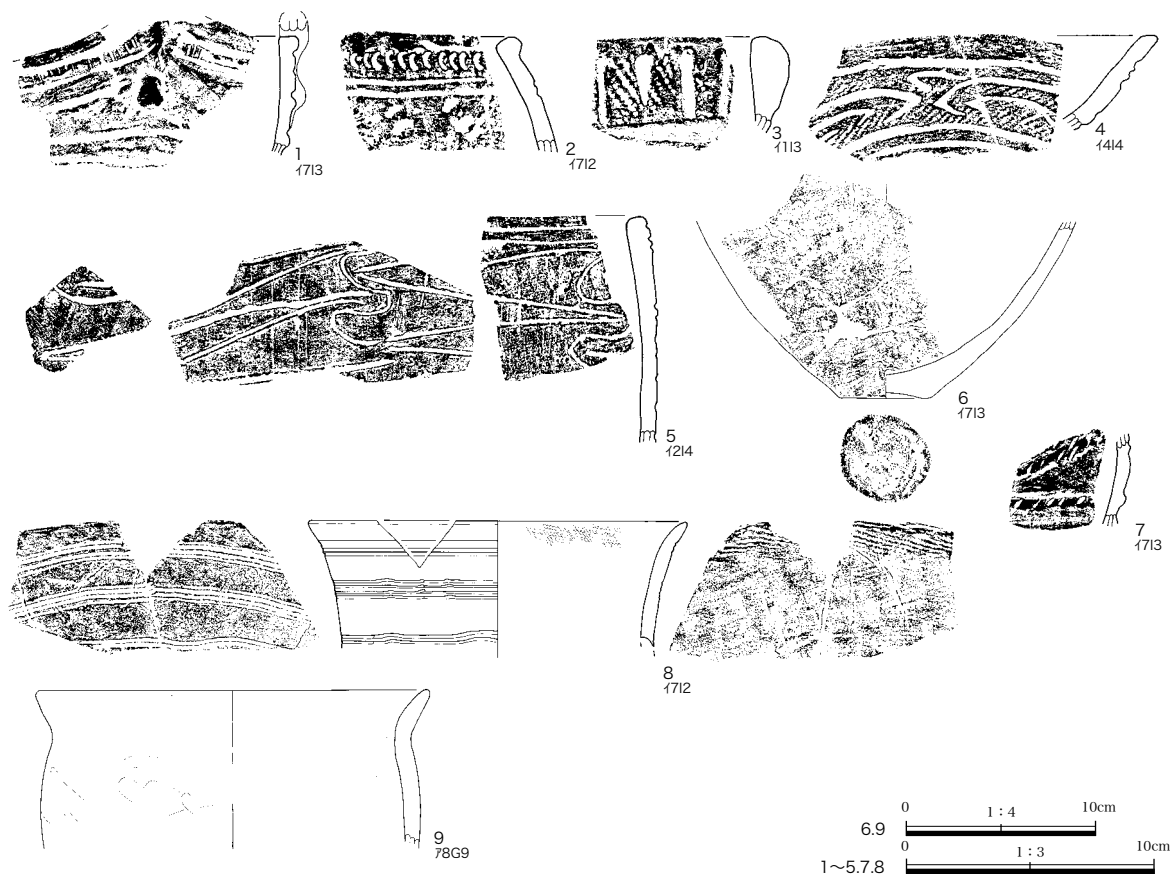
第248図も抽出選択した資料の一部を示す。2は若干隆起する帯状部に刻みを付すもの、一方3は安行1式～2式の構成に近いが平板な器面に刻みが帯状に連続するものである。4は瘤付系の構成や口縁形態ながら、



第249図 住居跡群東側ブロック出土土器(3) [15J0・15J2・16J2・16I9]



第 250 図 集落外縁北側ゾーン出土土器 (1)



第251図 集落外縁北側ゾーン出土土器(2)

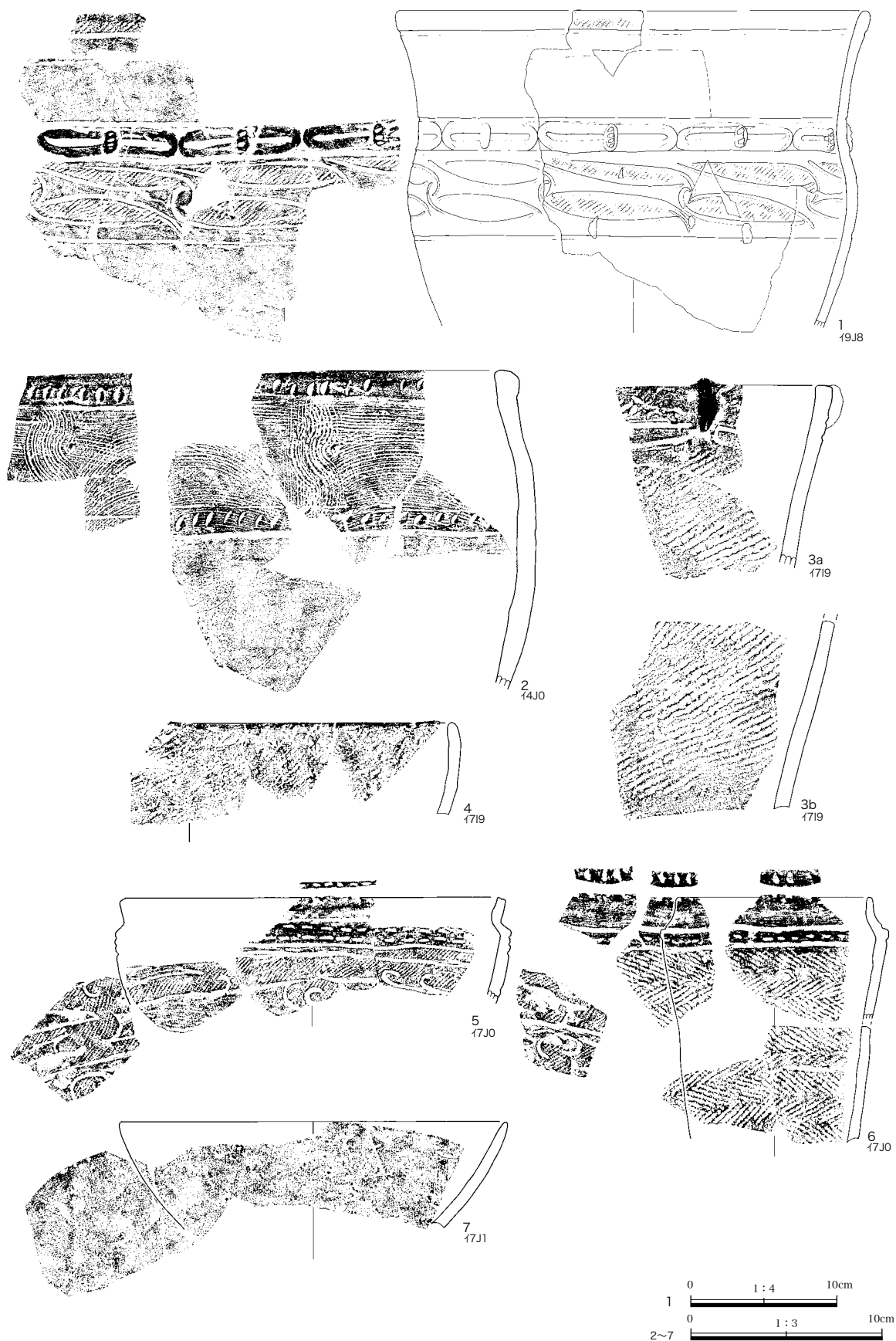
変化が窺えるもの、5.8は粗製紐線文系をベースとしつつ、頸部の沈線表現などに特徴がある。在地的な粗製土器6、高石野類型注口土器で瘤状突起周囲に三叉文が囲む特徴的な構成の7なども注目される。

第249図1(イ6K2)は幾つかの破片から口縁が直立し体部がやや膨らむ深鉢を推定復元したもので、結節の加わる縄紋LRが施される。口縁端部は摩滅しており擬口縁の可能性も残る。胎土には白色粒をやや多量に含み、色調は内外面黒褐色基調である。2(イ6K2)は高さ21.8cmとやや小形の無文深鉢で、外面ケズリ～ミガキ、内面粗いミガキ調整で、外面上位で砂粒移動痕がやや目立っている。底面もミガキ調整が観察される。外面にぶい赤褐色、内面黒褐色を呈する。3～15には破片資料中から注目されるものを抽出選択した。3～10には晩期初頭の資料や瘤付系のものを示す。8は縦長の磨消縄文区画部分があり、異質な感がある。9は瘤付系であろうが、かなり大きめで深い刺突が特徴となる。11以下は大洞式系であるが、14は頸部に刺突列を巡らす本遺跡特有の土器である。13の雲形文変容例なども注意される。

集落外縁北側ゾーン

住居跡・遺物集中包含層範囲外北側のグリッドイ0～イ8でI1～I4までの範囲から出土したものを示す。包含層は薄く遺物も少なくなる区域である。集落域隣接のI3～I4ラインからの出土が多いが、やや離れたJ1ラインなどでも縄紋土器の出土がある点は注意される。

第250図1(イ5I3)は4単位の波状口縁深鉢で、沈線→条線→縄紋RL→ミガキ、沈線→刻みが観察される。胎土には石英・白色粒を少量含み、色調は暗赤褐色を呈する。隆起帯縄紋の手法や質感など、南関東安行1



第 252 図 集落外縁東側ゾーン出土土器 (1)

式とかなり類似する。2 (I 7I3) は粗製土器紐線文系の土器だが、比較的小形でやや薄手である。外面ミガキ調整・刻み→沈線の順で描かれるが、沈線は細く浅い。内面はミガキ調整。胎土には白色粒を多量、褐色粒を少量含み、色調は内外面黒褐色を呈する。3 (I 5I3) は平縁深鉢で、口縁部・頸部それぞれに沈線+突起・瘤による文様が描かれる。接合しない同一個体破片があり、その幾つかも示した。外面全体に煤・炭化物の付着がある。外面ナデ～ミガキ、内面ミガキ調整。胎土には雲母を多量に含み、色調は外面暗褐色、内面にぶい黄褐色を呈する。4 (I 1I3) は厚手の大洞式系鉢で、太い沈線→縄紋 LR →無文部ミガキで、雲形文基調の文様が描かれる。内面もミガキ調整である。胎土には石英・白色粒・角閃石を多量に含み、色調は外面にぶい黄橙色、内面黒褐色を呈する。5 (I 1I1) は小形の浅鉢で、口頸部には弧線文が描かれるが、突起は大洞式 B 突起に近い。文様は沈線→縄紋 L →無文部ミガキで、内面はミガキ調整である。胎土には石英・白色粒を多量に含み、色調は内外面黒褐色を呈する。6 は大洞 C 2 式の鉢で、沈線→縄紋 LR により文様が描かれる。ミガキの無文部が殆ど見られない点注意される。7 (I 7I3) は粗いナデ調整後、条線が施文される土器である。条線は曲線的でかなりランダムに施されているように見える。胎土には石英・白色粒を多く含み、色調は内外面にぶい赤褐色を呈する。

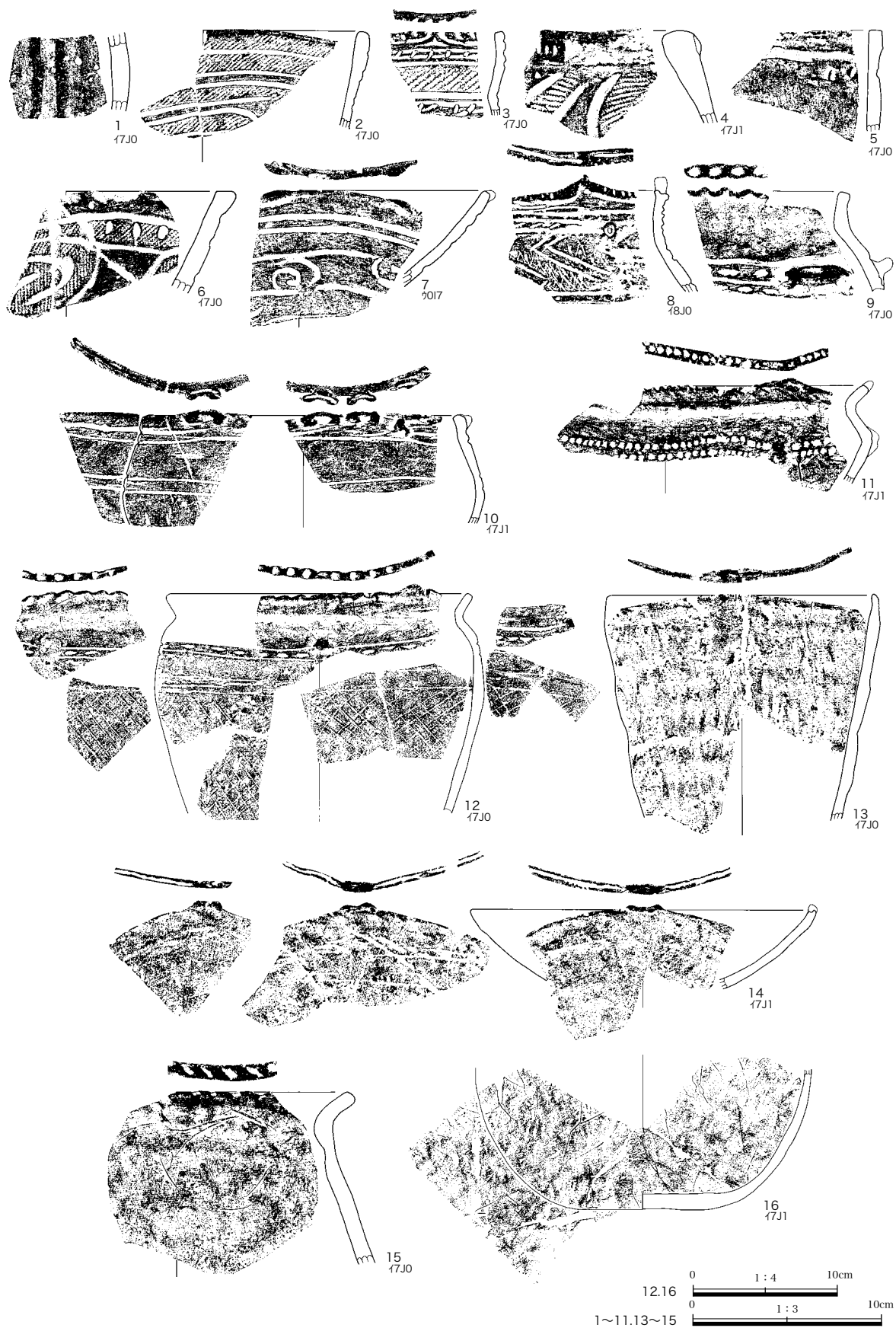
第 251 図 1～5 には注目される破片資料を示す。粗い調整の上に細い沈線で瘤付系入組文変化の文様が描かれる 5 を始め、いずれも注目される例や異質な例である。6 (I 7I3) は体部下半～底部の無文部分で、外面粗いケズリ～ミガキ、内面ナデ調整が観察される。7 は浮線文の前期諸磯 b 式と推定される資料である。

第 251 図 8 (I 7I2) は、ここに示したが弥生中期の土器である。3～4 条単位の櫛描文がミガキ調整後に描かれる。一部「とめ」の部分も観察される。口縁内面に縄紋がある。胎土中の鉱物は少なく緻密で、角閃石を少量含む程度、色調は外面橙色、内面明赤褐色を呈する。9 (I 7F9) も便宜的にここに示したもので、古墳時代の土師器甕である。外面ケズリ～ナデ、内面ナデ調整。胎土には石英・白色粒を少量含み、色調は内外面にぶい黄橙色を呈する。

集落外縁東側ゾーン

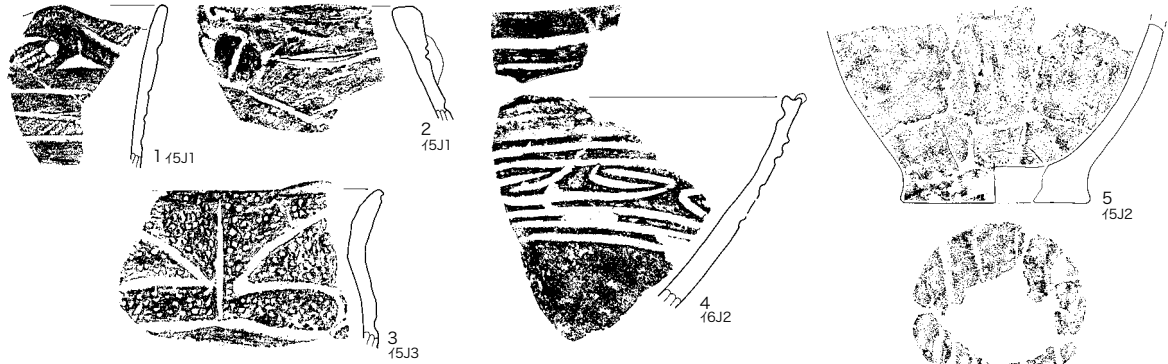
集落・遺物集中包含層範囲外東側のグリッド I 7～I 9.ウ 0 で I 5～J 3 までの範囲から出土したものを示す。包含層は薄く遺物も少なくなる区域である。集落域隣接の I 7 ラインからの出土が多い。

第 252 図 1 は大形破片から径・器形の復元を行った瘤付系の土器である。沈線→縄紋 LR →ミガキ、隆線貼付→沈線→瘤貼付→瘤上刻みの施文順が観察される。胎土には白色粒多量、石英及び白色針状粒やや多量、角閃石やや少量含み、色調は外面橙色、内面明褐色を呈する。内面はミガキ調整である。比較的丁寧な作りの土器で、胎土・質感はさほど違和感があるものではない。2 は紐線文系の構成だが、頸部を粗製系統で用いる櫛歯状工具条線で文様を描いているものである。横位線→横位の下向き弧線→縦位線→縦位波状曲線→口縁・頸部の刻み→頸部沈線付近ミガキの順で文様が描かれる。拓影でわかりづらいが、頸部区画線より下位にも浅い沈線による弧線文(互連弧文か)が描かれている。体部はミガキから研磨調整、内面粗いミガキ調整である。胎土には粒子状の雲母・角閃石を多量に含み、外面褐色、内面にぶい黄褐色を呈する。3 (I 7I9) は同一個体の口縁部破片と体部破片だが、接合せず位置関係も不明であり別途に示した。沈線→縄紋 LR の 0 段多条(または無節 L) →無文部ミガキの順が観察される。口縁部文様は平板な表現である。内面はミガキ調整。4 は縄紋 LR 施紋の口縁部破片で、内外面橙色を呈する。5 は大洞 C 2 式の鉢だが無文帯下に 2 列の刺突列を付していることや変容した体部文様など、やや他とは異なる例である。6 は小形の粗製の深鉢で、体部は羽状縄紋表現である。7 は内外面ミガキ調整の無文鉢である。

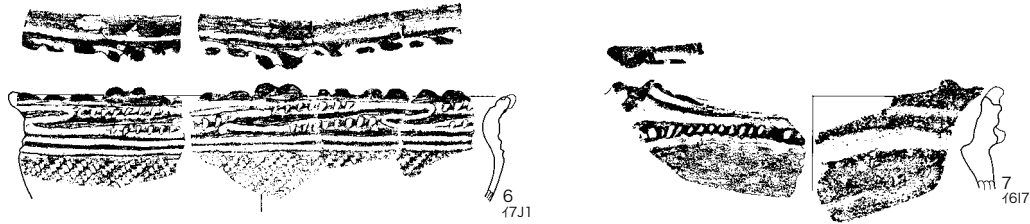


第 253 図 集落外縁東側ゾーン出土土器 (2)

東ブロック



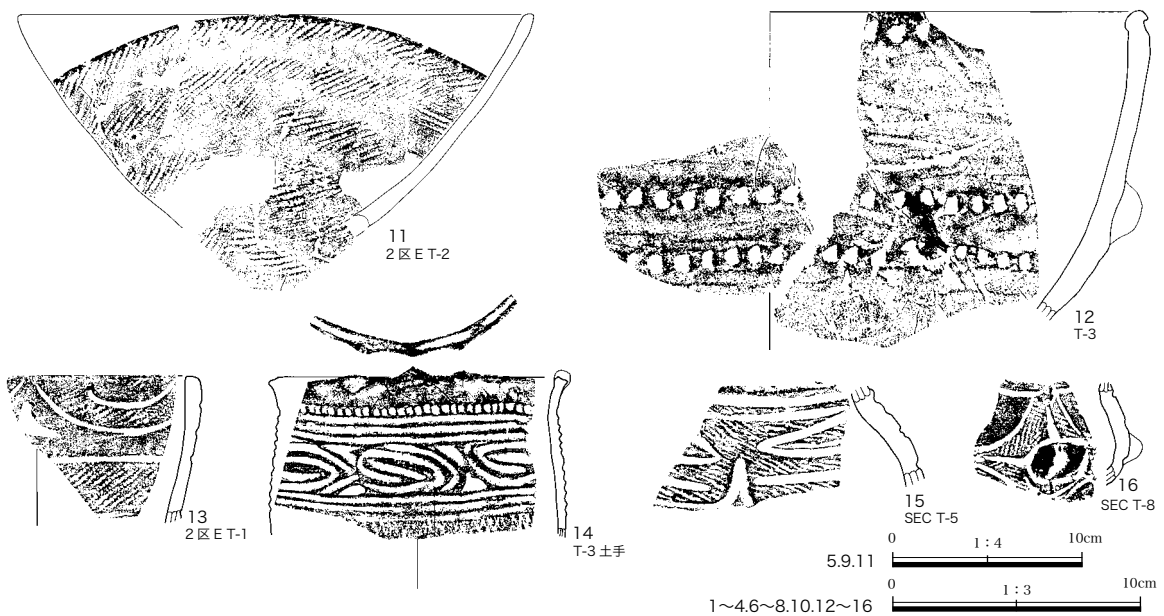
北東ブロック



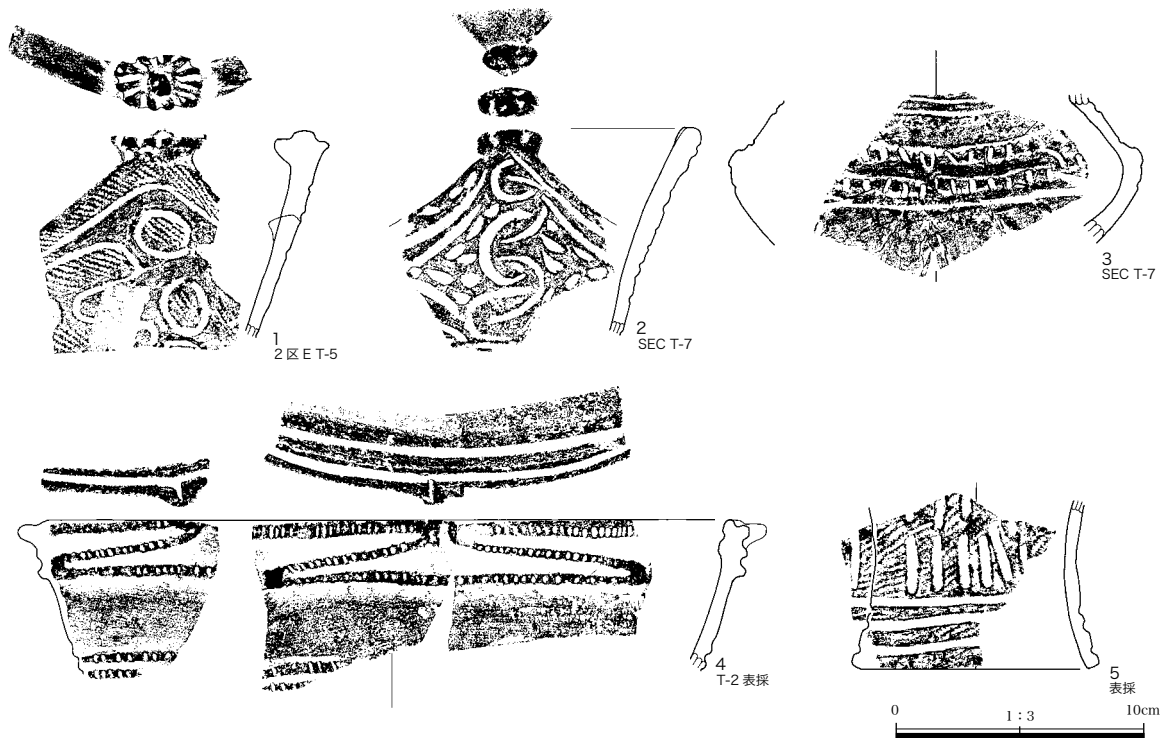
南ゾーン



トレンチ



第254図 各ブロック・グリッド出土土器(1)



第255図 各ブロック・グリッド出土土器 (2)

第253図には1～9に注目される破片資料、10以下に無文土器や径復元個体などを示す。1は中期加曾利EⅢ式またはⅣ式、2は瘤付系、4は副文様帯系の例である。6の大洞式系鉢では太めの沈線によりやや大柄な文様が描かれている。9.11.12は刺突列を特徴とする土器群、10は口縁部と頸部?に区画沈線を施し、口縁端部に突起を付すやや珍しい例である。12は刺突列帯の下位に無文部を挟んで格子目文様が描かれる注目される資料で、若干の観察記録を示す。先端細い工具による施文で、左下がり→右下がり沈線の順を基本とするようである。沈線施文後の調整はないようで、やや粗い一次調整痕が残る。口縁直下の内面では指頭圧痕状の凹凸も観察される。内面下方で厚く焦げが付着している。頸部の刺突はやや細長い施文で、体部格子目文や口縁端部の刻みとは別工具と推定される。1箇所確認されている頸部の瘤はその下方が剥落しており、やや縦長となるようである。色調は内外面黒褐色基調で、一部暗褐色、胎土には不透明白色粒をやや多く含む。13～16は無文でミガキ調整基調の土器であるが、口縁端部の装飾が13.14には認められる。

各ブロック・グリッド出土土器

包含層各ブロックやトレンチ、表面採集資料などを便宜的にまとめて示す。

第254図1～5は住居群東ブロック出土資料の追加分である。沈線と細かな刺突で文様が描かれる3や大洞C2式文様の変容例4等が注意される。5は体部下半～底部資料で底面に凹線状のナデが見られる。

第254図6.7は北東ブロック(15～16で15～17グリッド)出土資料から抽出選択した。南西側は環状の包含層区域範囲内となる。8の瘤付系は階段状入組文が横にシフトせず縦軸区域内で展開する例である。栃木県内の瘤付系では散見される。9は付帯口縁深鉢で、口縁端部近くまで遺存する大形破片からの復元である。外面ケズリ～研磨、内面ミガキ調整で、胎土には石英・白色粒を含み、色調は内外面橙色を呈する。

11～16がトレンチ出土資料である。全体の確認にかかるトレンチと、盛土遺構調査に係るトレンチなど

があるようだが、判然としない。11は縄紋施紋の浅鉢である。縄紋の帯状部と無文帯状部とがあり、瘤付系入組文表現かとも思われるが判然としない。内面ミガキ調整で、胎土には角閃石を多量に含み、色調は外面にぶい黄褐色、内面にぶい黄橙色を呈する。12は「T-3土手」から出土したもの(盛土遺構確認トレンチか?)で、器種は鉢または台付鉢となろうか。突起作出→刺突(四角～台形状の刺突)で文様を描く。胎土には白色粒を多く含み、色調は外面にぶい橙色、内面にぶい褐色を呈する。16は瘤付系の注口土器となろう。

第255図にもトレンチ出土資料と表面採集資料を示す。1.2は姥山Ⅱ式系の資料で、2は大きめの刺突が充填される。PG4イ4J0第185図23と同一個体である。3は大洞B-C式の注口土器、4は大洞A1式併行の土器でPG6-イ4J2-第204図16で示したものと接合したことから合成図とした。左に示した破片は接合せず、位置関係としては少し離れた位置への復元が妥当だが、便宜的な配置とした。比較的丁寧な作りで、隆線上の刻みは細かい。内面にも沈線が巡るが、その下位はミガキ調整。胎土には石英・白色粒を含み、色調は灰黄褐色を呈する。5は台付土器の脚部と推定したもので、縄紋LR→沈線の順で文様が描かれる。縦位線の連続施文による構成が類を見ず、高さがあることも含め、不明な部分が多い。

製塩土器

第256～258図に製塩土器を示す。確認されたものの総数は335点で、このうち口縁部破片を中心に可能な限り図化し101点を示した。住居跡(相当グリッドも含む)からの出土が155点と多く、ピット群やその他のグリッドからの出土がそれに次ぐ。住居跡の中ではSI03が76点と多く、残りは概ね10点程度である。なお遺構外の土器で、当初分類「無文土器」とされたもの約200箱分は分類・確認を行っておらず、実数はかなり増加することが見込まれる。感覚的な推定だが倍以上の点数になる可能性もあるだろう。

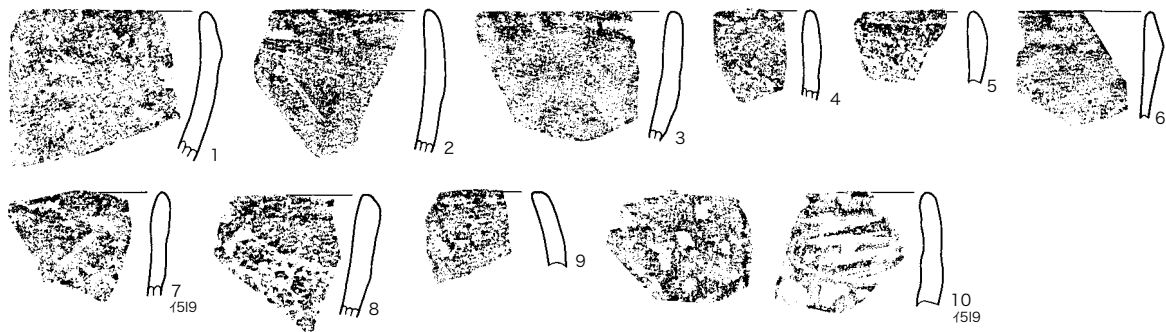
以下の図では、遺構毎に示すが、これまでの土器実測図の提示で示したように、一遺構から複数の時期・型式が混在して出土しており、製塩土器についてもいずれの型式に伴うものか不明である。またこれら製塩土器に関わる出土状況の記録や調査時の所見もない。製塩土器内部においても遺構毎の特徴を顕著には見出せず、技法や形態による徹底した分類の方が望ましいかとも考えたが、便宜的に遺構毎の図示とした。口縁端部の形態や調整技法からの分類も考慮したが、明確な視点を持ち得ていないこともあり、項目立てしての分類は示さない。以下観察結果について記すが、詳細な観察とその提示には至らず、不十分な部分が多い。

本遺跡出土製塩土器全体の特徴は、薄手で、外面ケズリ調整、内面ナデ調整を基本とする。色調は橙色、にぶい橙色が多く、暗赤褐色、にぶい褐色など、やや黒味が強い色や淡い色などが次ぐ量となる。胎土は鉱物の含有が少なく、白色粒や灰色粒、石英などを微量～少量含むものが多い。剥落も多くの資料で見られるが、他遺跡例と比べるとやや少ないかもしれない。付着物については、肉眼観察の限りでは目立ったものは確認できなかった。以下若干の観察結果を補足する。

第256図SI01では、3.4の口縁端部がオサエ～面取り状である。5.6は斜めに、内傾(外削ぎ状)にケズリが入る。8.9は端部がほぼ水平にカットされるもの。10は外面もナデ調整のようである。SI02では11の上端がケズリ状、13.14.15は上端未調整で粘土のはみ出し・塊が残る。16は上位からのオサエで前面側に粘土はみ出しが生じ、そのまま調整されない例である。SI03では18～20が上端オサエ状の例、23～26は軽くナデの例、28が内削ぎ状にナデられる例、30は尖唇状、31は端部水平カットの例である。28は外面ナデ調整。SI05では32～34が端部もナデのもの、35が水平カットの例である。SI07の36は尖唇状で軽くオサエの例である。SI06では39が端部カット、41が未調整の例、残りはナデの例である。

第257図SI08では1がカット～ナデ、3がカットの例、SI10の4～6例はいずれもナデの例、SI12では

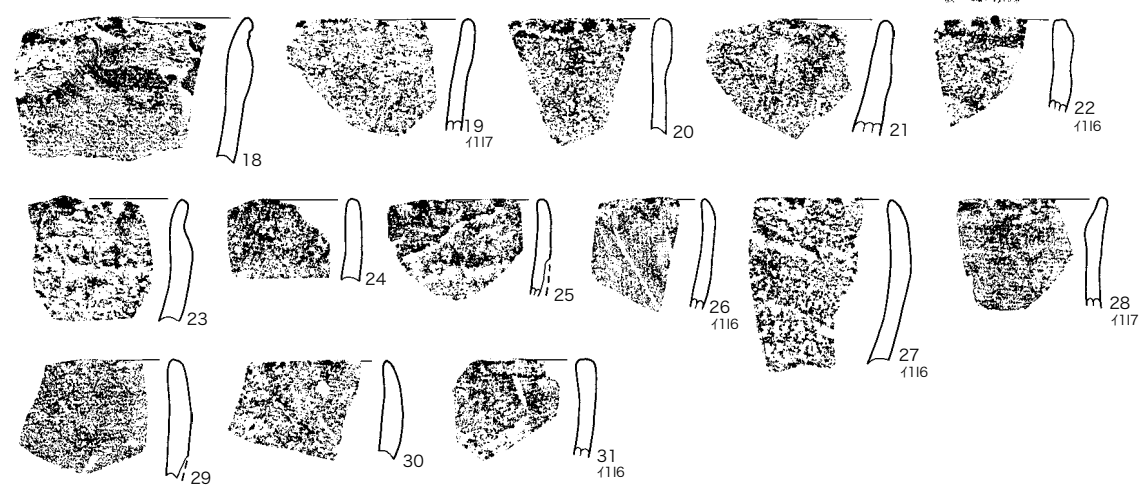
S I 0 1



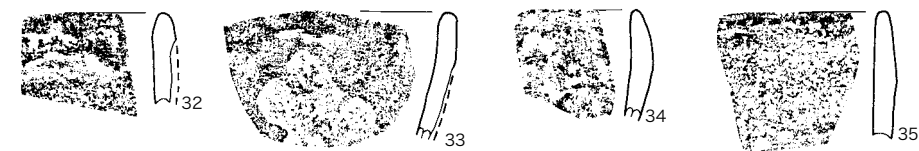
S I 0 2



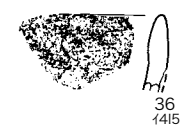
S I 0 3



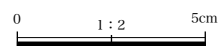
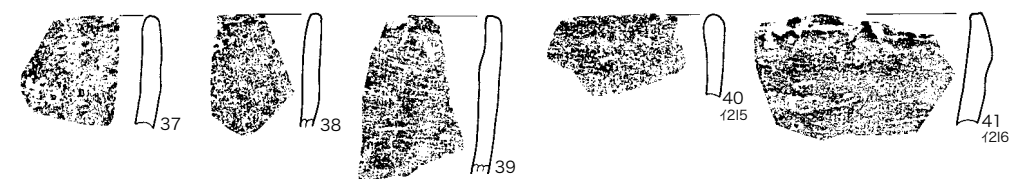
S I 0 5



S I 0 7



S I 0 6

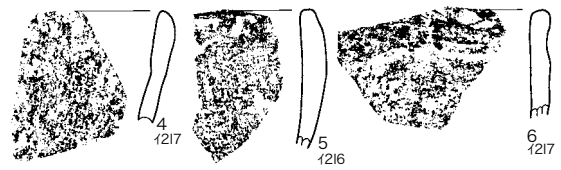


第256図 製塩土器(1)

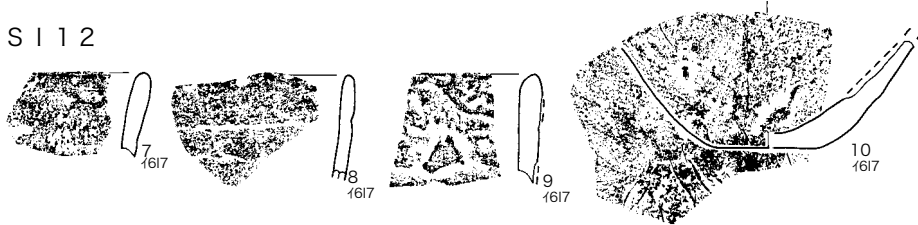
S108



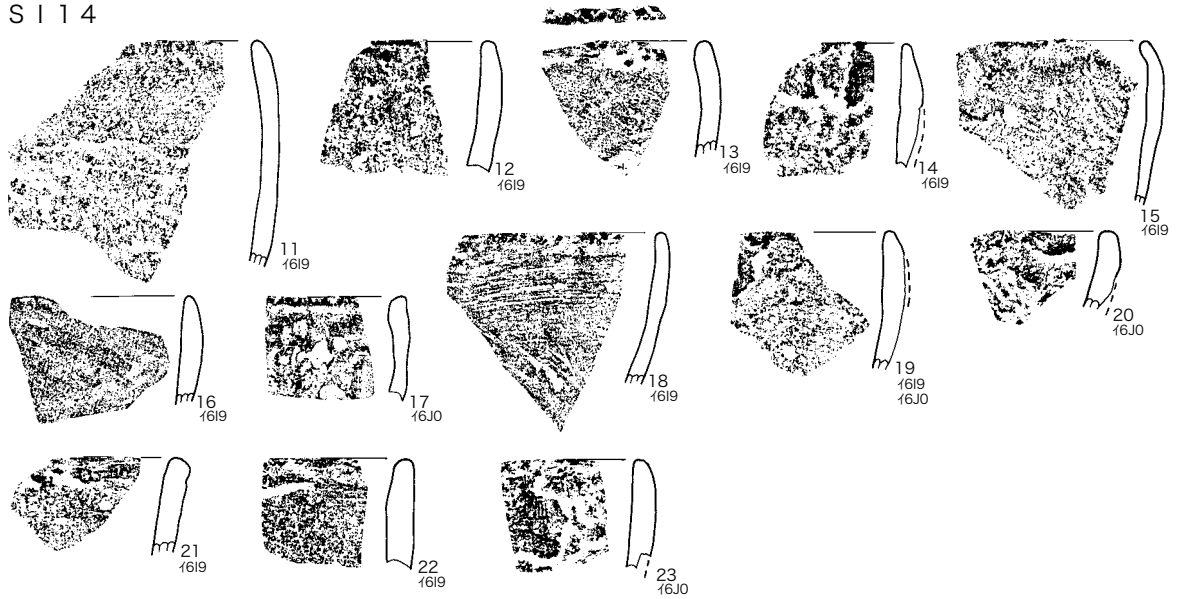
S110



S112



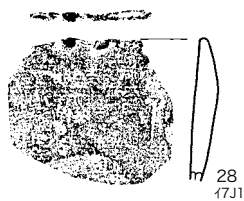
S114



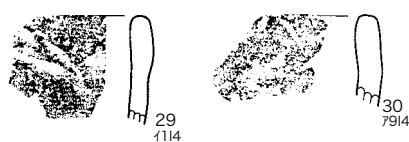
東ブロック (15J0・15J1・16J2)



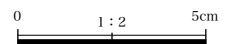
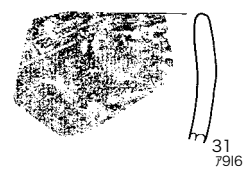
東ゾーン



北ゾーン



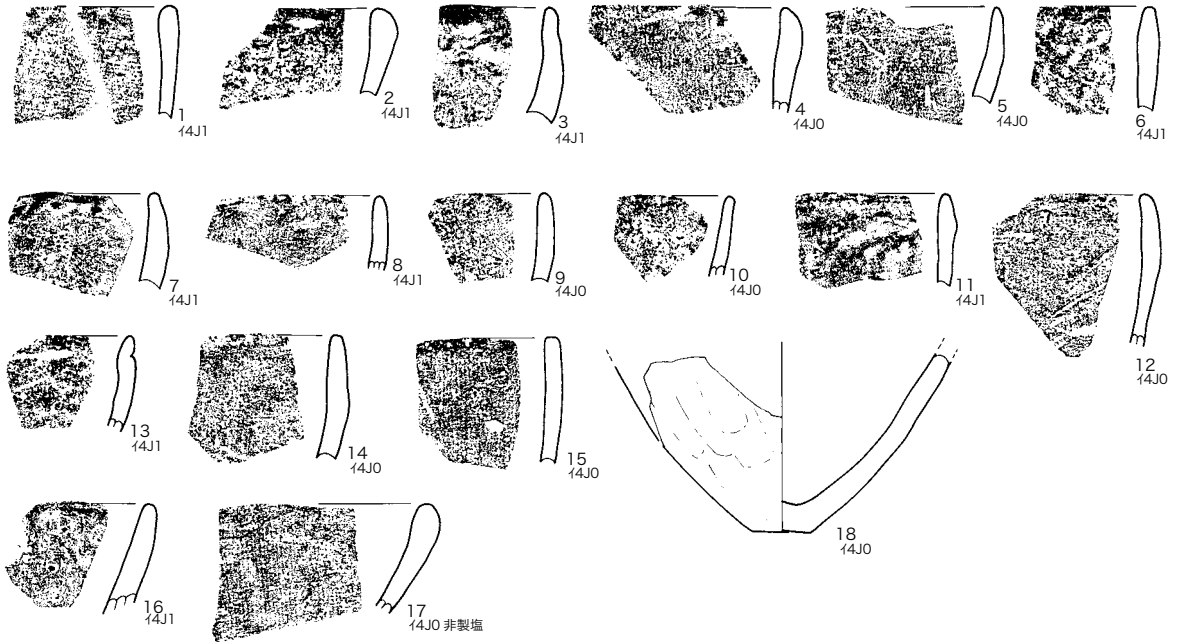
北ブロック



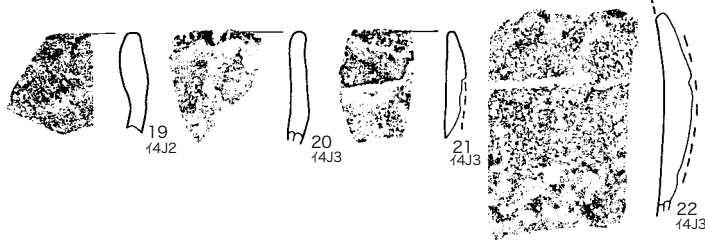
第257図 製塩土器(2)

凹地

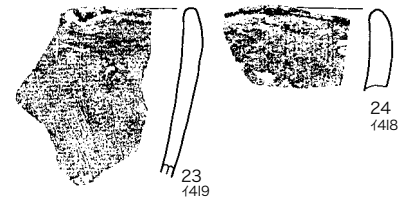
P G 6 (14J0・14J1)



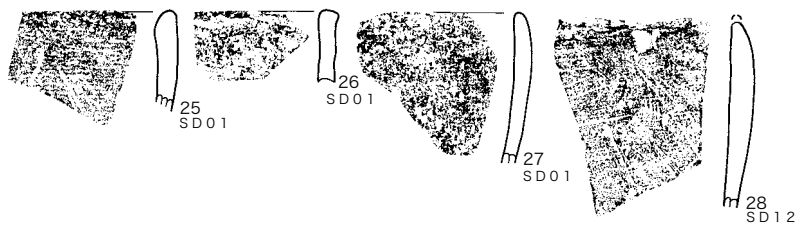
P G 8 (14J2・14J3)



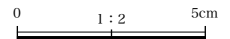
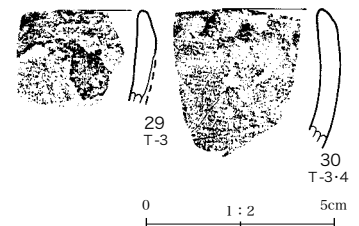
凹地 (14I8・14I9)



SD



トレンチ



第 258 図 製塩土器 (3)

7 がカット～ナデ、9 がカットの例である。10 の底部では外面顕著なケズリ調整痕が確認できる。SI14 では 13.15 が未調整例、尖唇の 16 も未調整のようである。17～23 はカットの例となるが、17 や 20 では直下の外面は指頭オサエ状の痕が観察される。住居跡群東ブロック出土の 24～27 では 26.27 が端部水平カットである。以下各ブロック・ゾーン例では 28 が未調整の例、30 がナデ～オサエの例となる。

第 258 図ピット群 6 では 3 が端部カット、直下オサエの例、4.5 が未調整例、11～16 が端部水平カットの例である。17 は端部ナデ内外面ミガキが見られるもので、非製塩土器の無文鉢と判断を訂正する。以下では 19～21.23.24 が水平カット例で、特に 23 は薄手の作りと顕著なケズリ調整が製塩土器の典型的な特徴を示す。28 は尖唇状で未調整例、29.30 は軽いナデ～オサエ状である。20～26 は外面もナデ調整である。

第7節 土製品

1. 土偶（第259～262図）

土偶は101点出土しておりそのうち55点を示した。住居跡SI03及びSK35・36、ピット群4相当のグリッドイ4J0・J1からの出土資料を第259図に、これ以外を第260～262図に示す。他にも疑いのある小片数点が出土しており、実数は10点近く増える可能性がある。全体に残りの良い資料は限られ、顔面、腕部、胴部、脚部のみなどの資料が大半を占める。数量的には腕・肩部の資料と脚部の資料が多いが、どの程度有意な比率かは判断が難しい。また特異な出土状況を示したものや、別種遺物と伴って出土した例は確認されていない。特定の遺構やグリッドへの集中も認めにくい、第259～260図に示した中央窪地範囲内でピット群4相当グリッドではかなり多く出土しており注目されようか。ここでの出土土器は大洞C2式が主体的といって良いほど多く出土しており、概ね整合するように思われる。

整理時に系統分類・時期分類など行っておらず、ここでも項目立てしての分類を示し得ないが、図版の配列には多少注意した。全体的な傾向では、典型的な山形土偶や木菟土偶は少なく、遮光器系土偶が多く見られる。また板状や中実の晩期土偶も比較的多く、本来詳細な検討・分類が必要であろう。第261図8.9等は木菟土偶の典型例に近い。個別の観察記録は省略するが、注目される資料について少し記述する。

第260図7の遮光器土偶は、顔面表現をはじめかなり忠実な作りであり、搬入あるいは丁寧な模倣との印象を受けるものである。沈線内など赤彩も一部残っている。但し胴部の沈線文様では、やや省略的変容を見ることができ、純粋な大洞遮光器系として良いかは検討が必要かもしれない。頭頂部は剥落欠損しており、十字状のブリッジが付されていたようである。なお本例は顔料分析を行っている（第9章第1節）。

第260図1の中空土偶脚部もかなり薄手で丁寧な作りの印象を受ける。表面はかなり入念に磨かれており、優品の可能性を窺わせる。遮光器系では第261図1.2の肩～腕部資料も典型例に近く注目される例である。第261図5は福島県の大洞A式期で見られる刺突文+沈線文様が特徴的な土偶肩部である。刺突は針状のかなり先端が尖った工具によっている。図の下位に腕部接合痕が剥落している。同図3は肩部の例で文様が描かれている図上位部分が上から見た図、その下位の部分が本来の正面からの図となる。復元するとかなり大きな例となる。左肩と推定したが、確実ではない。下に展開表現した部分は中空の内面となる。ここに腕部との接合痕跡があるほか、製作時の接合指痕跡が表れており興味深い。肩上面の文様は沈線による渦巻文主体で、遮光器系の文様変容或いは在地的な文様表現と見るか検討が必要である。

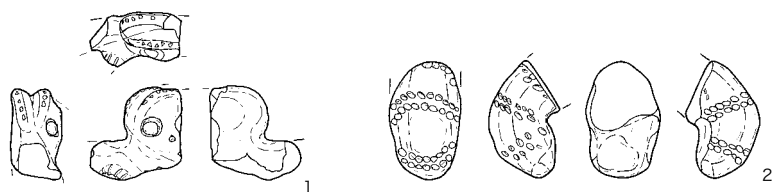
第262図1の土偶脚部は赤城遺跡などで顕著な関東的中空土偶の資料となろうか。以上の他に断面円形で中実、凸帯状の表現がある脚部資料第261図11.12、弧線文が密かつ連続的に描かれる中実脚部資料第259図17、断面楕円形で細身の胴部に文様表現が加えられる第259図9など、注目される資料も多く検討すべき部分が多くあることのみ明記しておく。

なお図示以外の土偶として、T-4表採例の腕部、イ4J1(8-22区)例（腕部）、イ4J1(17-1区)例（腰～脚部、沈線間若干の隆起で刺突加飾あり）、イ4J1(16-7区)例（腕部?）、イ2I7例等がある。

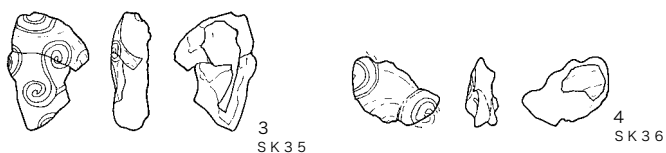
2. 土版・岩版（第263図）

岩版については石製品の項で扱うべきであろうが、便宜的にここで記す。確認されているのは土版6点、岩版5点である（5、8～10）。定型的なもの以外の例も含んでおり、或いは別種土製品を含んでいる可能性もある。具体的には第263図2は土製円盤とも分類できる形態・大きさであり少なくとも定型的な土版では

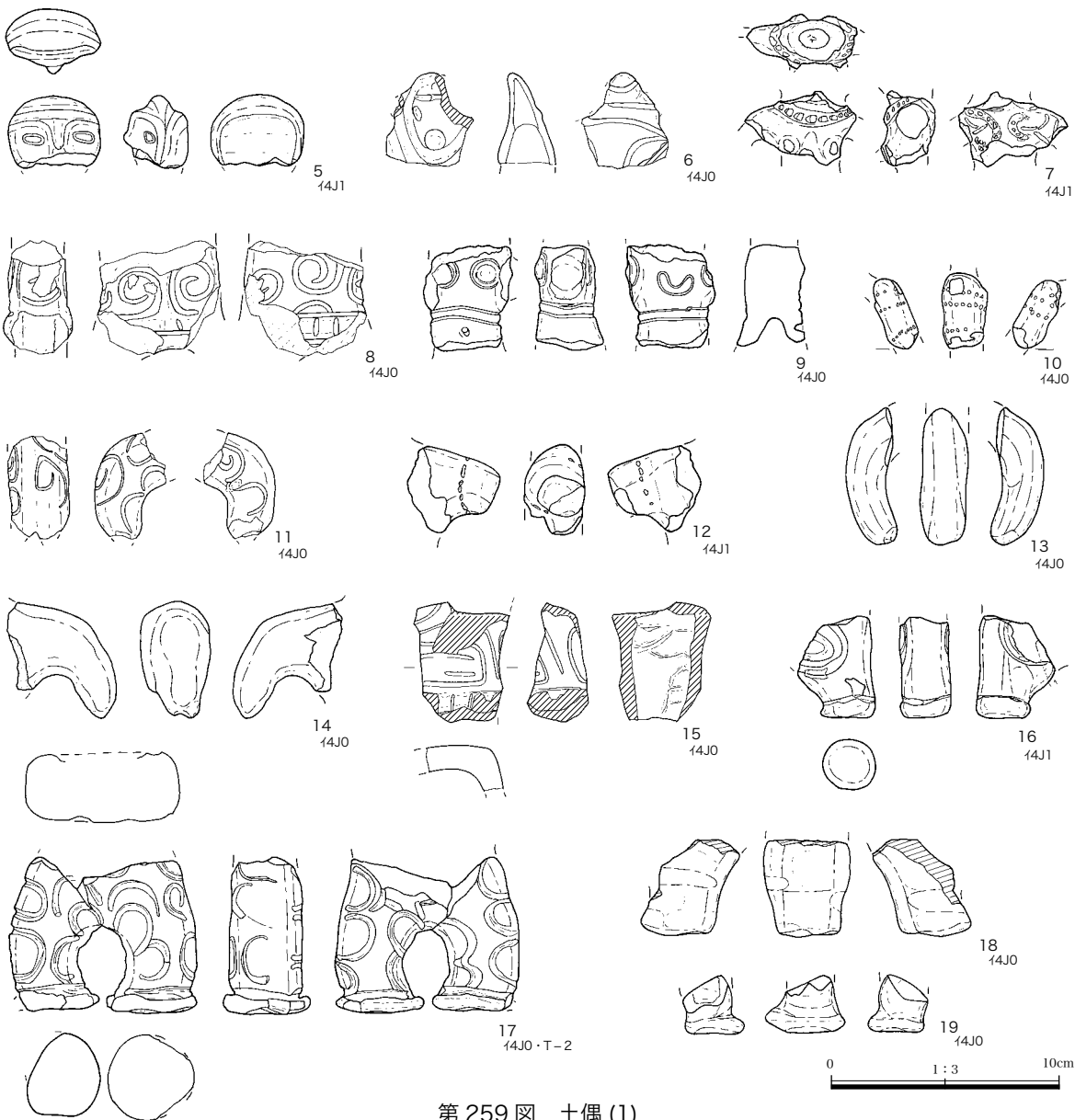
S103



SK35・36

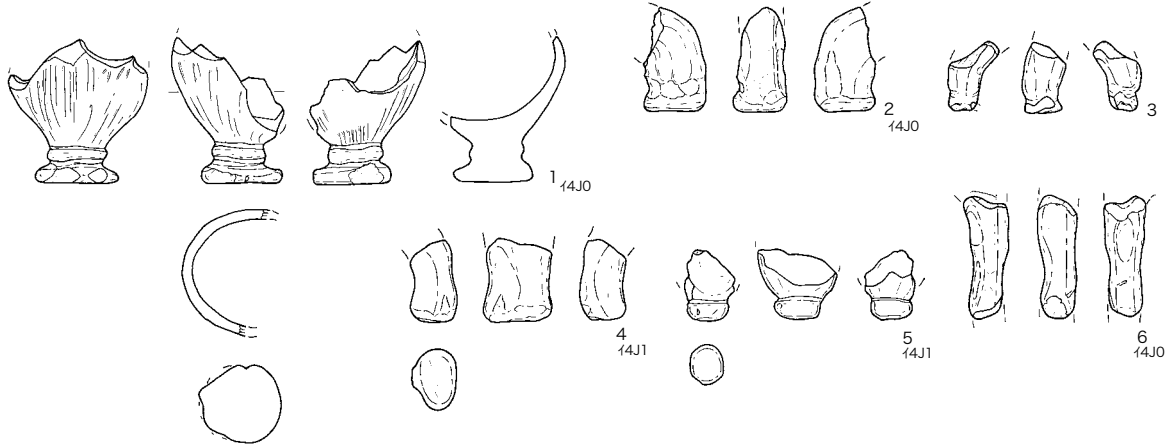


PG4 (14J0・14J1)



第259図 土偶(1)

PG 4 (14J0・14J1)



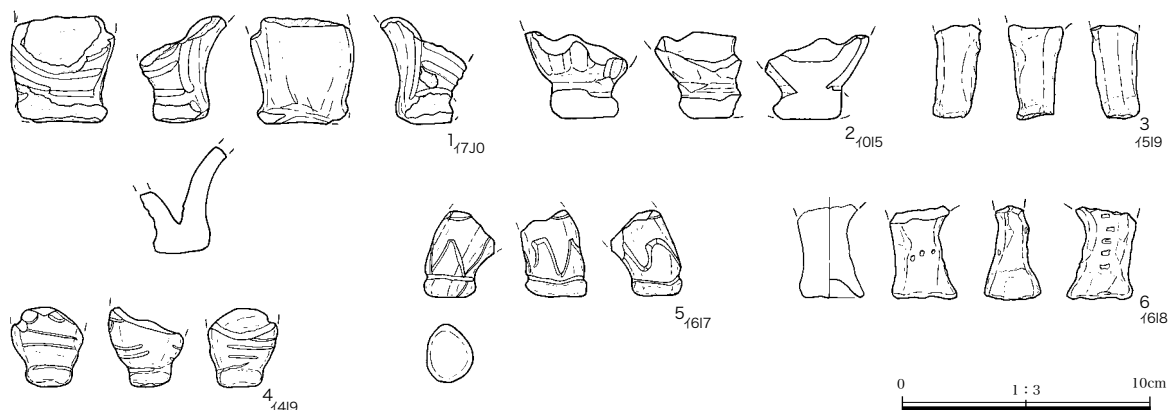
SD・PG・グリッド



第260図 土偶(2)



第261図 土偶(3)



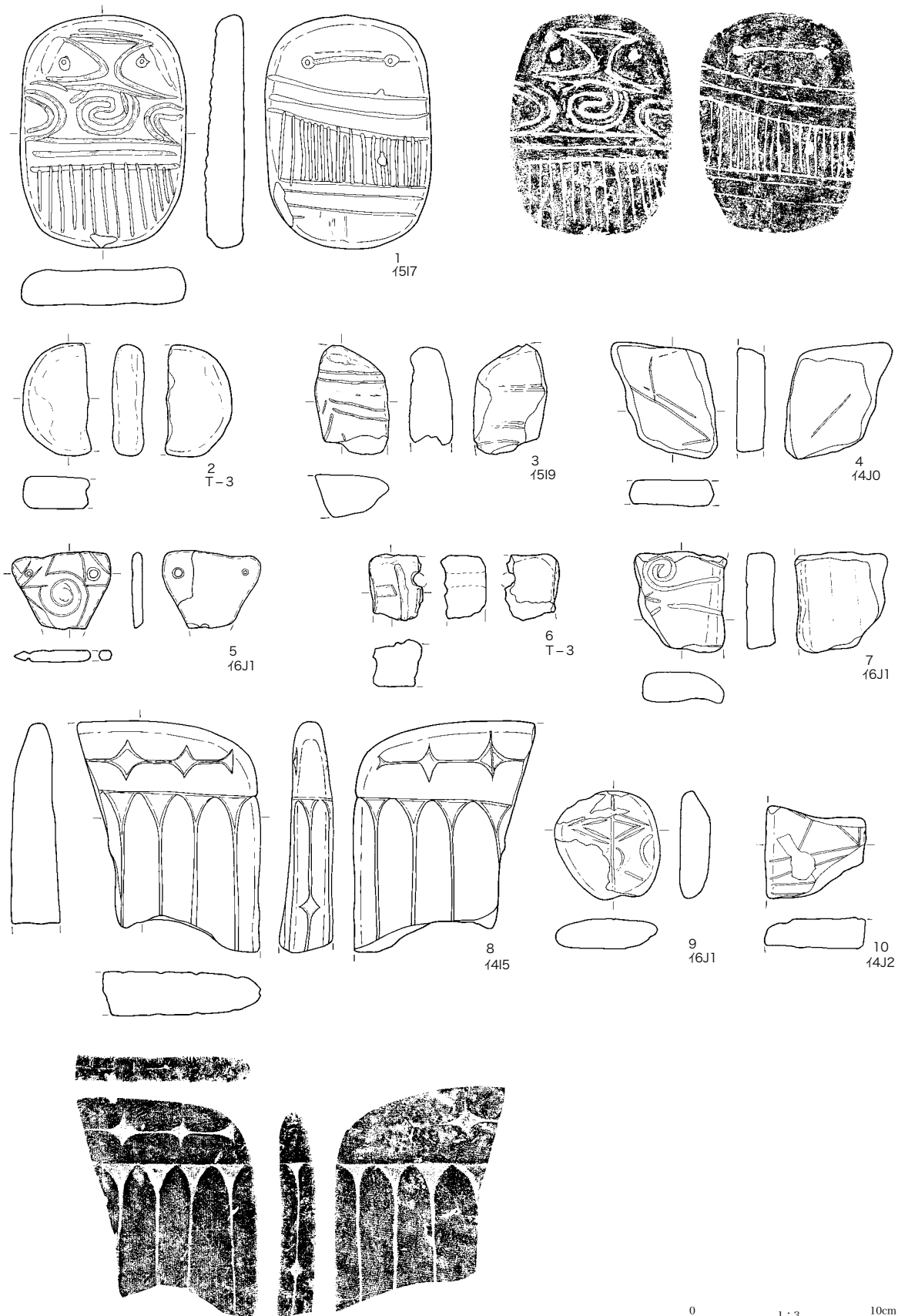
第262図 土偶(4)

ない。7については、右端部で不自然な断面・屈曲があること等から手燭形土製品と指摘されている。

第263図1は完形の土版で11.9 cm × 8.4 cm、厚さ1.8 cmである。本遺跡出土遺物を特徴づけるものでもあることから、やや詳細に観察記録を示す。色調はにぶい赤褐色～明赤褐色(5YR5/4～5YR5/6)、背面は橙色基調だが1次焼成黒変部分が広い範囲に亘っている(黒褐色～褐灰色)。全体平坦で概ね同じ厚さで作られているが、上位がやや薄く14 mm、下方に向かって厚く18 mmとなっている。表裏面ともやや粗いナデ調整の後に沈線で文様が描かれ、更にミガキが加えられる。但しミガキはやや粗く、殆ど磨かれなところもある。側面もナデ調整を基本としており、若干の凹凸を残している。施文順は横位沈線→左右側面にかかる弧状沈線・下方の縦位沈線列、やや上位にある横位沈線→渦巻文、が確認される。二重の弧線は側面にかかるように施される。沈線はやや浅め、太さや深さは不定でやや雑な印象を受ける。最上位の横位沈線直下には浅く細い沈線も認められ「引き直し」の可能性もあろう。裏面の二孔間を繋ぐ沈線の上位にも同種の線がある。裏面の施文順も概ね同じで、横位沈線→縦位沈線列と観察される。「眼」表現ともとれる二つの孔は表裏それぞれから穿たれているようで表裏中間部ではやや細くなっている。表裏の孔縁辺が若干擦れているようにも見えるが、「紐かけの痕跡」とまでは言えない。また表面左側の孔の左上が若干凹線状に低く凹んでいるが、意図的なものかは不明である。胎土には白色粒・石英・角閃石などをやや多く含むが、一般の土器胎土と大きく異なるようには見えない。とりわけ白色粒は多めで径2-3 mm程度のものも含む。

8の岩版は、1/3～1/4程度の遺存と推定され、本来かなりの大きさが見込まれる例である。破片の縦の割れ口近くが左右で見たときの中央部分と推定され、幅は13 cm程度と推定される。縦の長さはI字文が1段で長く延びる表現や2段例なども想定され、少なくとも20 cm以上、或いは30 cmを超える大きさとなるかもしれない。色調は石材(シルト岩)本来の色である浅黄橙色を基調とするが、熱により黒く変色している部分も図左側(正面)で広く認められる。沈線は細く浅めで、施文後にミガキが加えられている。風化もあって線が消えかかっているところもある。ミガキも図左側(正面)では一部光沢を確認できるが、裏面では風化摩滅で痕跡を認めにくい。三叉状～三角形の陰刻部(ネガ部分)もさほど深くはなく、特に図右側(裏面)は浅い。沈線及びこの三角形部分に赤彩が残っているが、部分的でさほど顕著ではない。側面上面にも沈線+三角形部分の「I字文」が施されているが、特に上面は浅く不鮮明である。

以上2例以外で注目されるものとして9の小形不整円形岩版がある。正中線・三角形の線、弧線等が描かれており、土版・土偶との類似を見出すことができる。



第263図 土版・岩版

2. 耳飾り（第264～266図）

第1次調査区で80点出土しているほか、第2次調査区でも方形周溝墓SZ05から1点出土している。ここでは66点（別に追加分4点あり）を示すが、遺存率1/3以下のものが大半であり、接合例もほぼ無いことは注意される。数量の評価は難しいが、拠点的な北関東縄紋後晩期集落跡としては少ない量であろう。少なくとも県南部・渡良瀬川流域の後晩期遺跡群とは大きな違いを認めて良い。また大形漏斗状透かし彫りのタイプがほぼ見られないことも注目される。確認の限りでは「削りかす」や未製品状のものは認められない。幾つかの形態・文様が確認でき分類が必要となろうが、1/2以上の遺存例が少ないこともあり、項目立てしての分類は行わない。但し図版の配列では形態・大きさ・文様などに注意して示した。なお特異な出土状況を示しているものや別種遺物との共伴を確認できたものは無い。詳細に検討していないが、特定の遺構やグリッドにまとまるような状況も見られないが、SI01から8点とやや多く、またI4J0～J1グリッドでやや多い傾向を捉えることができるかもしれない。作り・胎土・色調など個別の観察記録も示し得ないが、第264図1.8、第266図14のような丁寧な作りの例がある一方、やや雑な作りの例も見られる点は注意したい。総じて土器などの土製品と比べて丁寧な作り・調整で、胎土中の鉱物も少ない傾向はある。

第264図1～8は小形で鼓形～白形に近いものを示す。花弁状に整形された1や文様を有する7.8は良好な資料である。9.10は円筒状～ボタン状になるもので、表面側に弧線を巡らす文様がある。12～14は最大径と高さが1:1程度のものである。15～19が扁平な白形だが、18は中央に貫通孔を有する。20以下が環状・リング形、滑車形など呼称されているものである。文様を有するものの内、やや厚手で小形、上面に突起や瘤などが付されるものを27までに示した。

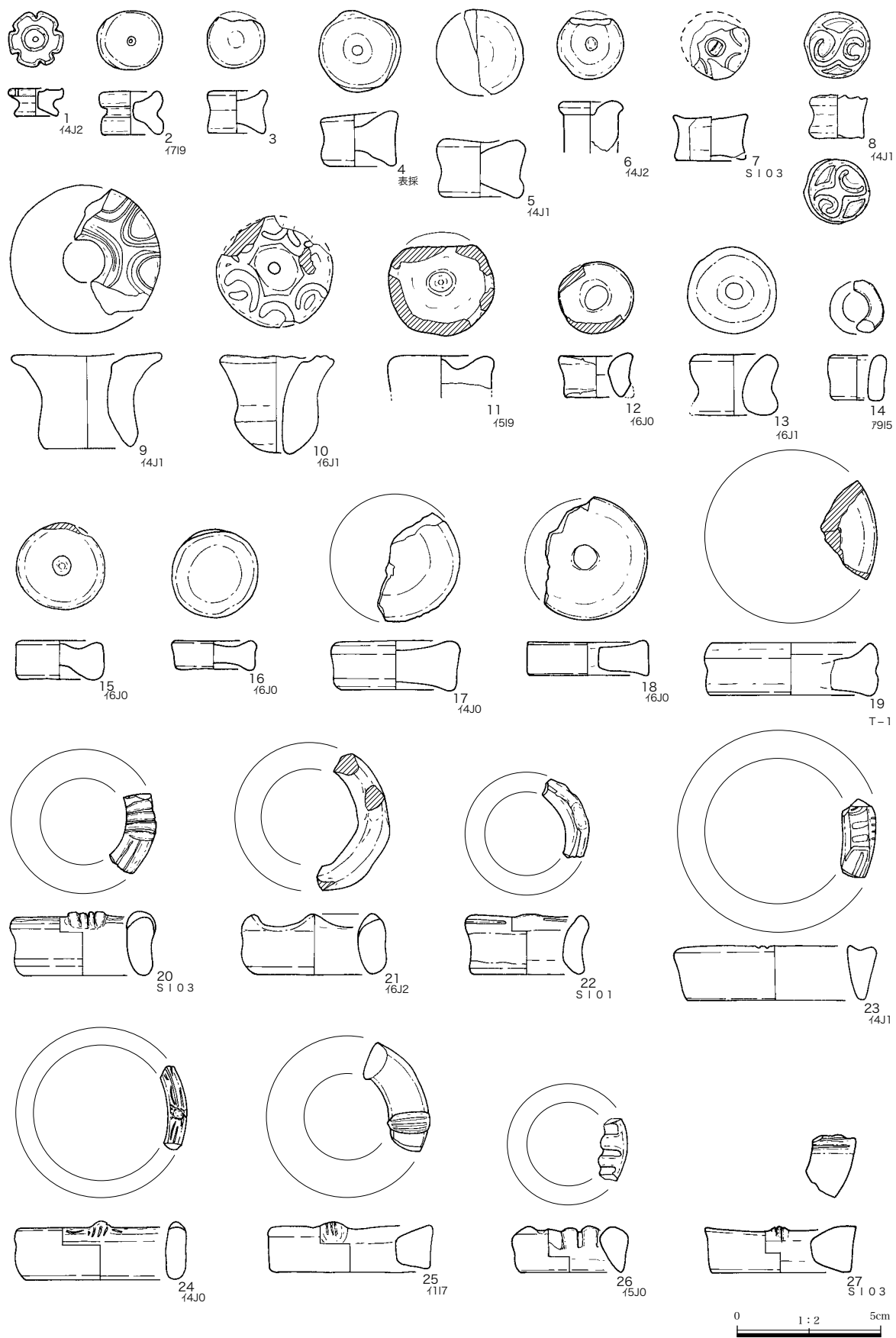
第265図1～10はやや薄手で狭い上端面に沈線を施すもの（1.2.5）、沈線が内面側に施されているもの（4.6.7）、断面（状で沈線と刺突で文様が構成されるもの（9）等がある。11～19は無文の例だが、無文部が全周するかは不明である。第266図11の網掛け部は赤彩の痕跡が比較的良く残っているものである。他の資料でも赤彩の可能性あるものが認められるが、明瞭に観察できないものは示していない。

第266図は環状で有文の例を主に示す。断面三角形でこの内側傾斜の面状に文様が展開する一群（1～8）と、面がやや広くかつ上位に移行し、断面逆トの字～T字状となる一群（9.10.13.14）とがある。13ではブリッジが確認できることから透かし彫りタイプにやや近いものかもしれない。14は外縁の6単位の瘤状突起と、内縁の刺突を擁する突起6単位が交互配置的に表現されているもので、一部突起の剥落はあるが、ほぼ完形の優品である。15.16は無文であるが、断面三角形でありここに示した。17.19.20は環状無文でかなり薄手な作りのものである。

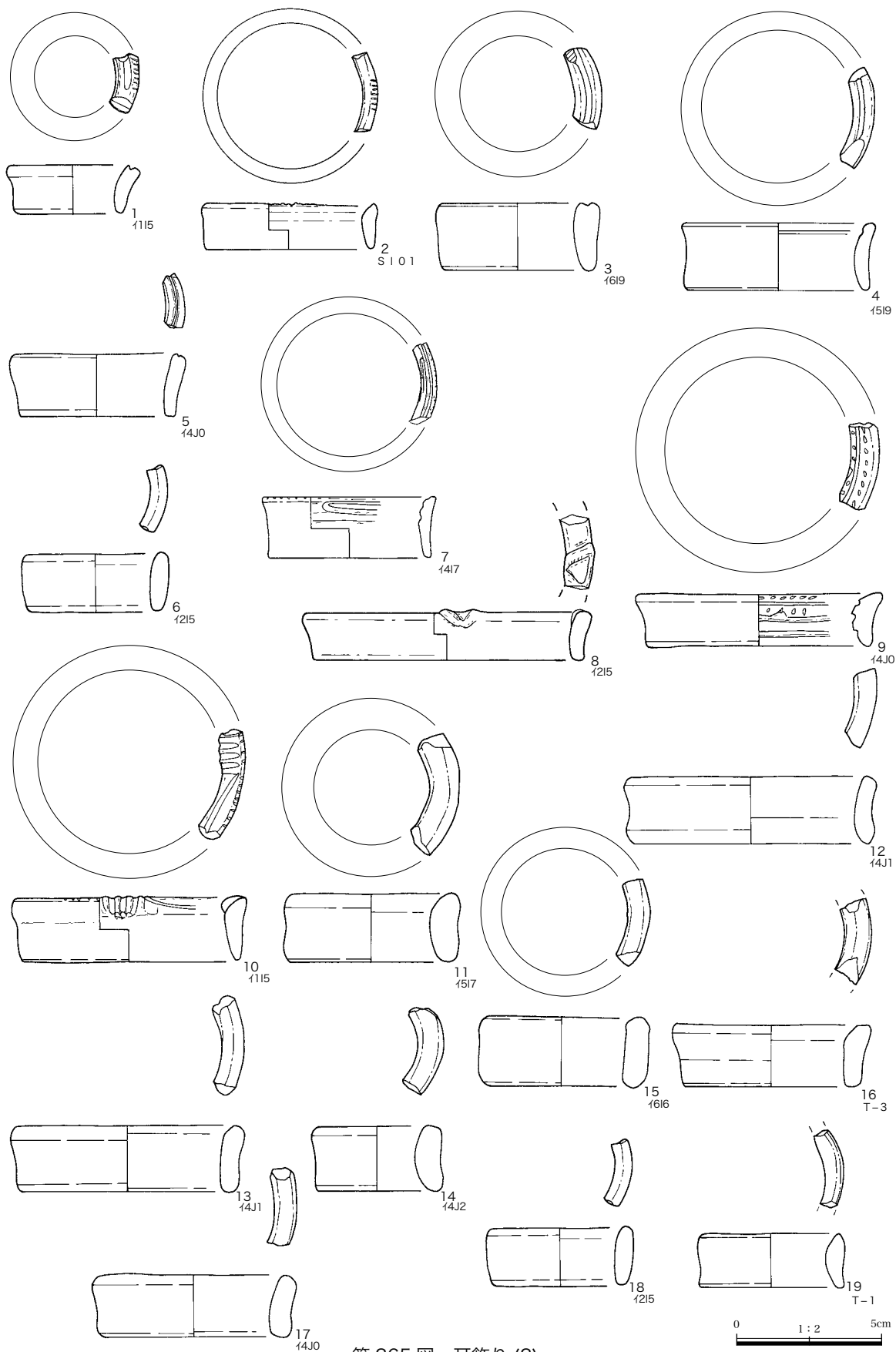
3. 土製垂飾品（第267図）

当初分類で29点確認され、うち24点を示した。他に可能性があるもの数点があり、総数を確定できない。但し他にも疑いがあるもの小片数点があり、実数は変わる可能性もある。後述の手燭形土製品と区別が難しいものもある。ここで示した6についても手燭形の可能性がある。また図の23.24にあるような土器片転用で孔があるものをこの種の土製品として良いかという判断も関わる。微細な小片では他の土製品との区別が難しいものもあろう。ここで示すものすべてを垂飾と考えている訳ではなく、便宜的な提示である点付記しておく。特異な出土状況や特定遺構・グリッドへの偏りなどは認められないが、中央窪地範囲内包含層となるI4J0～J2グリッドでやや多い傾向はあるかもしれない。

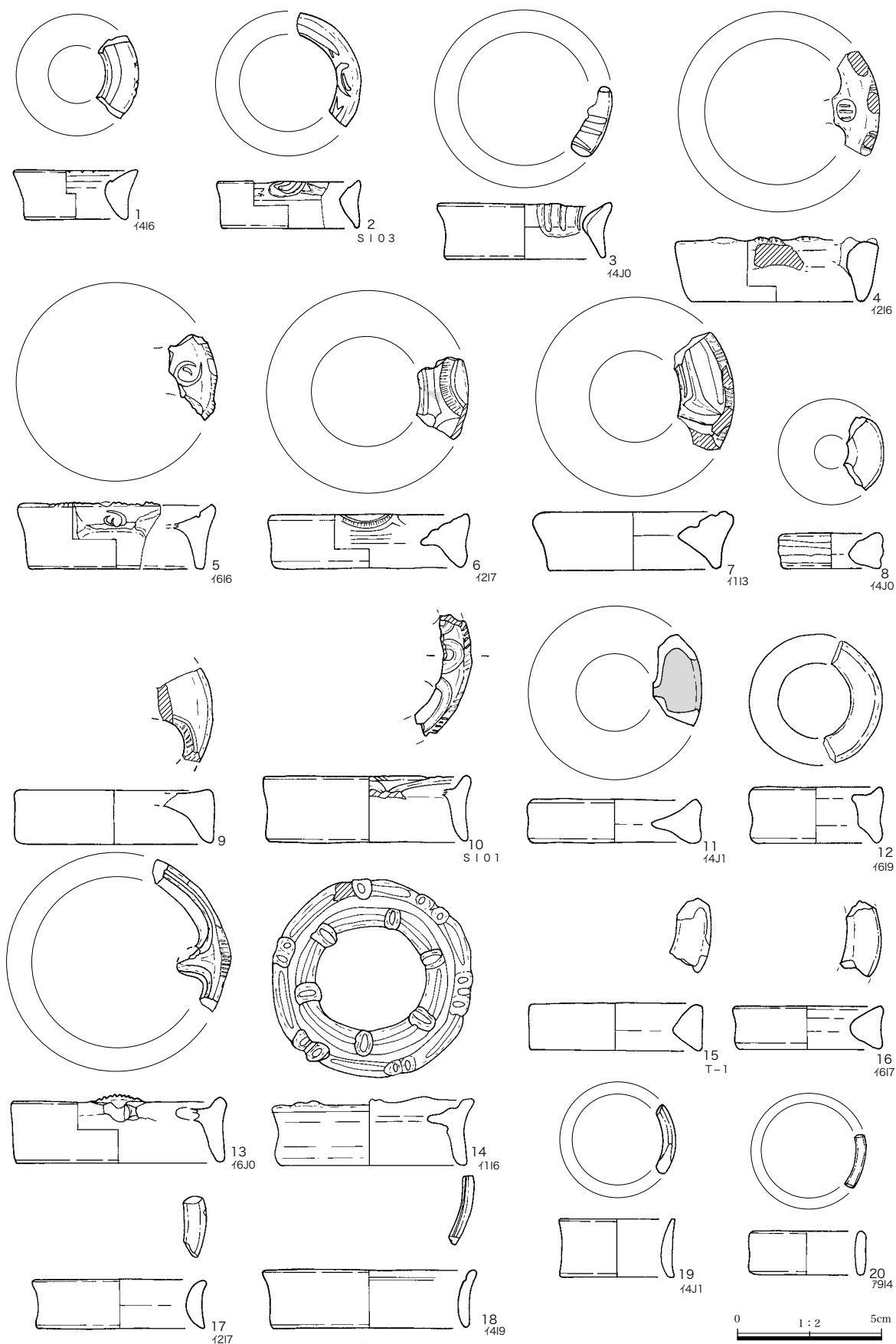
項目立てしての分類は行わないが、勾玉状（1～3）、白玉状のもの（4）、管玉状（5）、非定型のもの、棒



第264図 耳飾り(1)



第265図 耳飾り(2)



第266図 耳飾り(3)

状～板状で両端に二孔あるもの（7～21、腕輪の可能性もある）などの区別は確認することができる。全体的に他の土製品などと胎土や質感など大きく変わるところはない。下記に示す種別にもよるが、調整もさほど丁寧な感はなく、粗いナデ調整基調で一部にミガキ調整が認められる程度である。

1～4はこれまでも後晩期集落跡からの出土例が認められているものである。比較的丁寧な調整が窺える。5はかなり細い管玉状で、二次焼成か発泡状になっている。縄紋時代以外のものの可能性もあろうか。

6は表面側に主文様を有する板状に近いものである。9以下の土製品と比べて、やや丁寧な作りのようにも見える。図での下段上位の刺突は円形竹管状の垂直刺突が観察される。色調にぶい黄橙色を呈し、表面や側面凹部はやや丁寧なミガキ調整だが、裏面はナデ～一部ミガキで総じて粗い調整である。8はここで示したものの、形状や質感等からは土器把手の可能性が高い。孔は焼成前で装飾的な孔かと思われる。

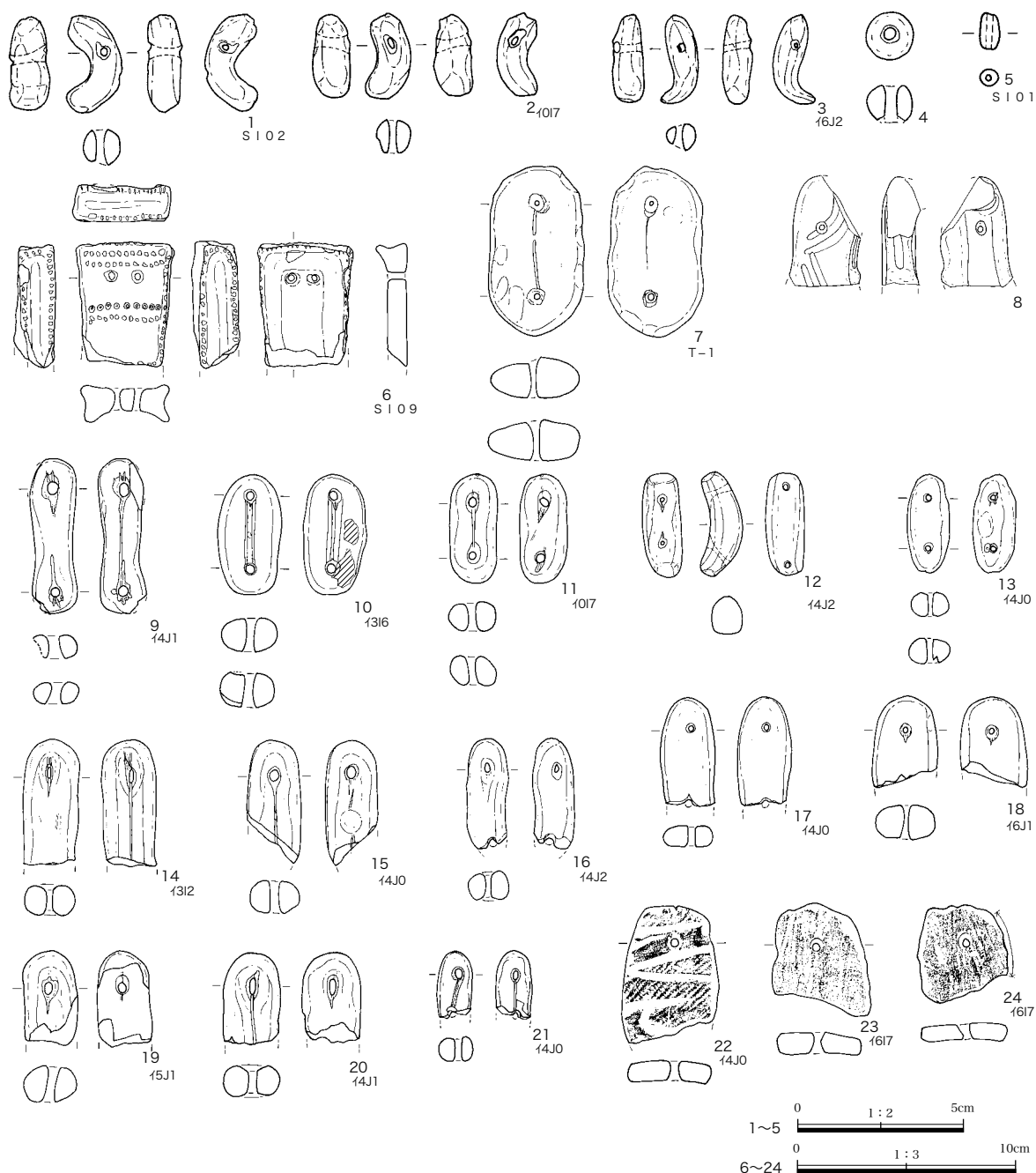
9～21が本遺跡に特徴的な棒状～板状で長軸両端に孔を有するものである。図示した以外にも数点の出土がある。14のように孔周囲で紐擦れのような痕を見ることができる例もある。このことから、二孔間を連繋し、或いは更に別個体とも連繋するような使われ方を想定し、組み合わせて腕輪状にしたものとも考えたが、同様に垂飾として用いることも可能で、検討を要する。色調はにぶい黄橙色・にぶい黄褐色・灰黄褐色の例が多い。9.10.14等は良く磨かれているが、やや粗い調整の例もある。12のみ側面観勾玉状であるが、他は棒状～板状で、厚さはやや不定なものが多いように見受けられる。

22～24は土器片に焼成後穿孔が認められるものである。22は周縁（側面）も磨いている（下端は割れ口のままとしている）が、上端では紐かけ状の沈線或いは紐擦れ痕跡を確認できる。よく見ると孔周囲も上方及び下方側に紐をかけた線状痕跡を確認できる。23は周縁側面の調整はないものの、裏面の孔周囲上下で若干の紐擦れ痕跡を確認できる。24は側面を一部磨き、形を作っている例で、本例も孔周囲に上下方向の切り込み状擦れ痕跡が認められる。これらの3例については土器片錘として捉える考えもあろう。9～21に示した両端穿孔土製品は、本遺跡でのまとまり・一定数出土の土製品として注目されよう。

4. 有孔土製円盤（第268図）

総数39点出土しており、うち25点を示す。図化し得なかったもの14点は小片であり、本遺跡の様相把握にはさほど問題ないと考え。小片では判断難しいものも多く、実点数はより増えることも予想される。南関東で縄紋晩期集落に伴うことが指摘されているものであるが、小山市寺野東遺跡をはじめ、北関東での分布も確認されている。

大きさは8～12cm、厚さ1.5～2cm程度を基本とする円盤状のものである。胎土・色調・質感は土器や他の土製品とさほど大きく変わらないが、やや灰色～やや白い色調を呈し、砂質の胎土が多い印象を受ける。丁寧にミガキ調整されるものもあるが、総じて粗いナデ調整のままの例が目立つ。沈線などの文様は描かれず、赤彩例も無いようである。原則としてやや径大きめの中心孔を有し、周囲にも孔を穿つものがある。中心孔を囲むように、或いは挟むように小さめの孔を持つものが多い。シンメトリーな1対(4)、2個1対2箇所(1.3)などの例と共に不定位置への偏在例(6.10等)などもある。遺存例の低いものでは判断難しいが、小孔を持たないものもある(12～15)。17以下は小片で小孔の構成・数が不明なものであるが、18については3のようにシンメトリーな2個1対構成の可能性が高い。9は厚さが4.2cmと他と比べて厚く断面形と併せ異質である。11は中心孔廻りが隆起・突出している。22.23は大きめの孔の位置が中心からずれた位置にあることが推定されるもので、土面など別種土製品の可能性もあるが、厚さや質感などは他と類似している。25は薄手の小片で、別種土製品や土器突起の一部と判断した方が良くかもしれない。

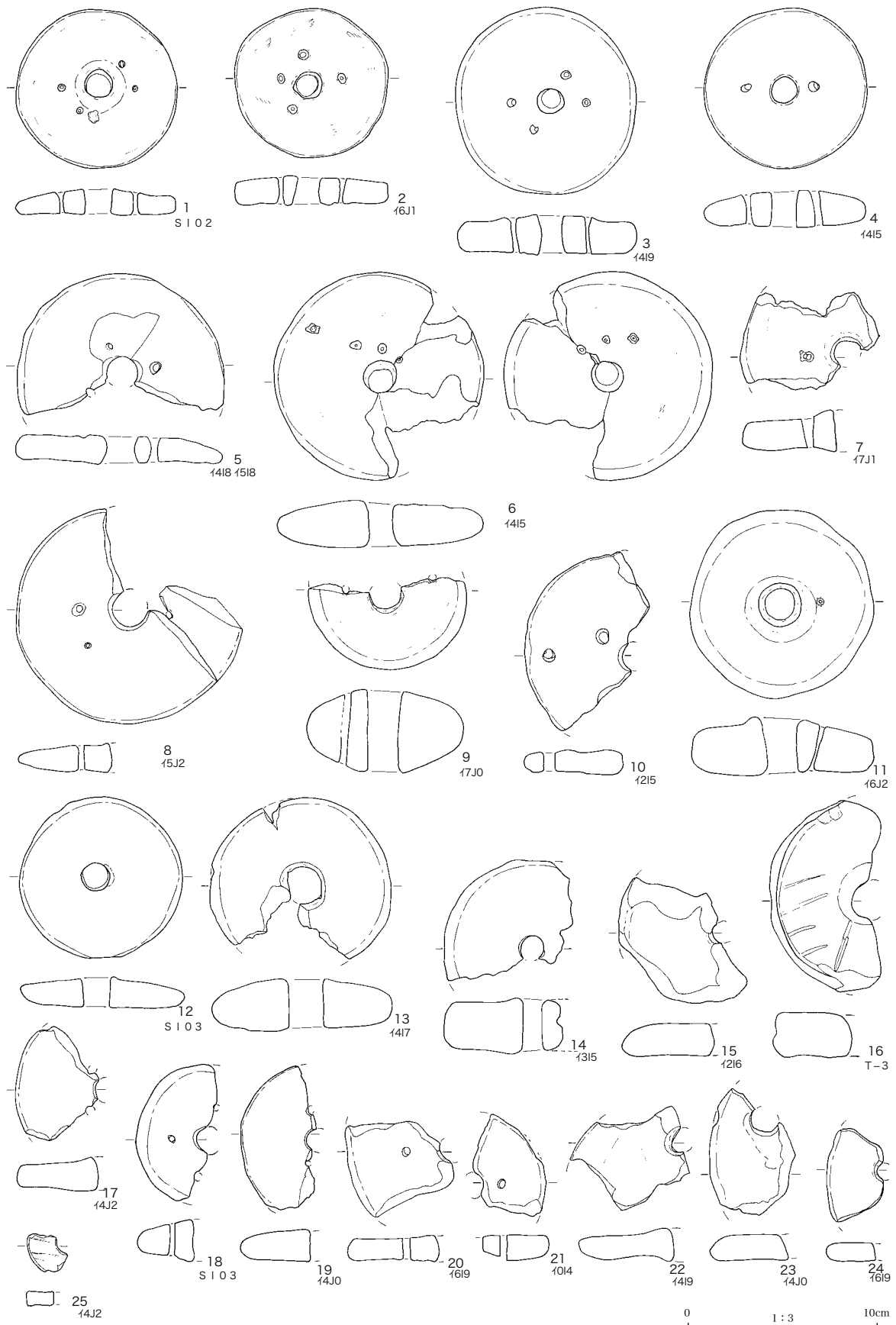


第 267 図 土製垂飾品

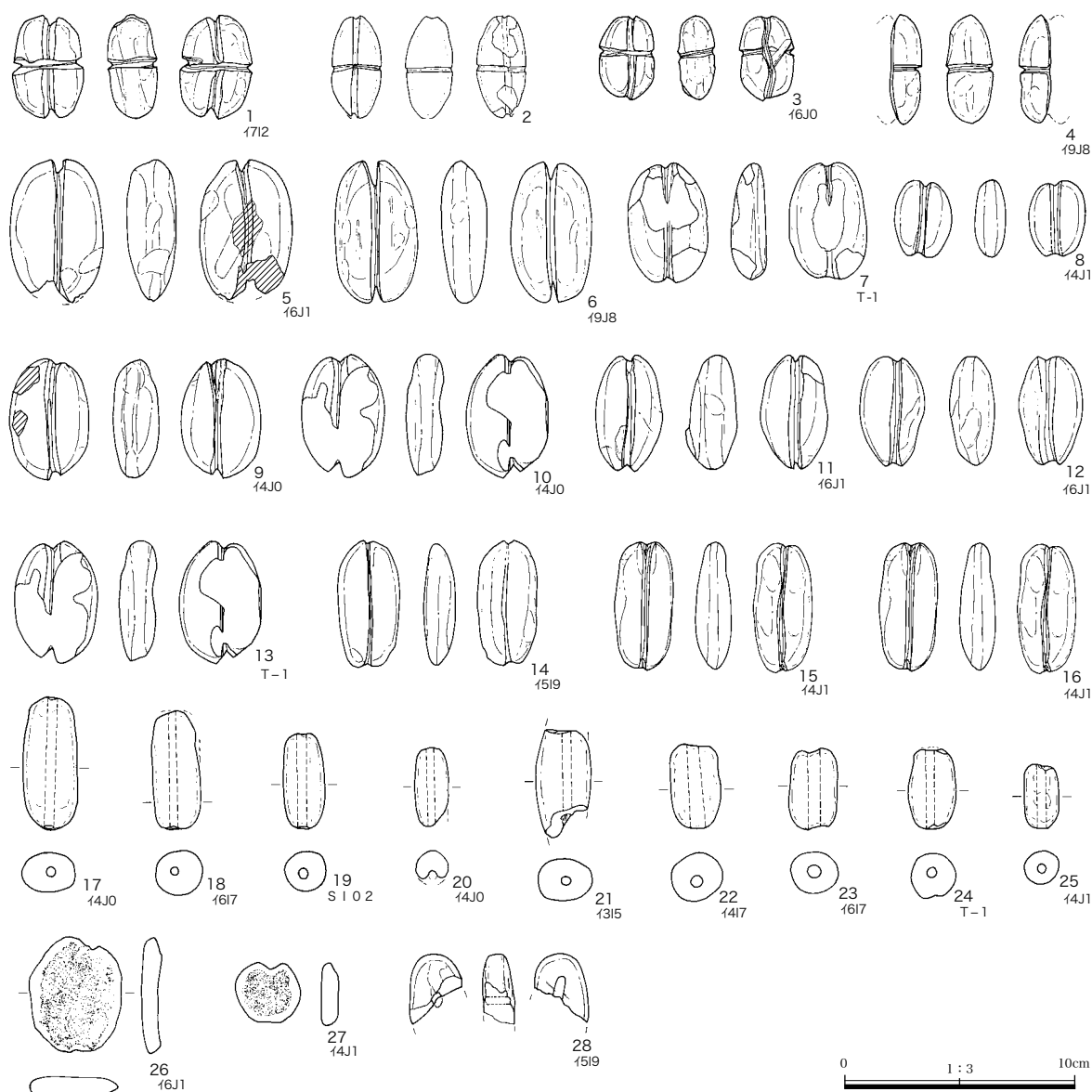
5. 土錘 (第 269 図)

総数 29 点確認され、その殆どを示した。特異な出土状況や他遺物との共伴を示したものはなく、特定遺構やグリッドへの集中なども確認されない。時期の判断は難しく、研究例も少ないが、関東後晩期集落の多くで一定数の出土が確認される。概観する限り、土器や他の土製品と胎土・色調・調整など大きく変わるところは無いようである。表面の多くはやや粗いナデ調整だが、ミガキに近い調整を加えるものもある。

項目立てしての分類は行わないが、溝を設ける「有溝土錘」1～16 と、管玉状で長軸中央を貫通する孔がある「有孔土錘」17～25 とに分けて考えることもできる。前者では溝の形態から、十字状に長軸・短軸各



第268図 有孔土製円盤



第 269 図 土錘

方向に 1 条の溝が施されるもの、長軸間に 1 条溝を設けるもの、の別がある。十字形のものもサイズのちがいでまとまる。長軸 1 条のものでも、大きさ・長幅比などから分類も可能かもしれない。有孔土錘もサイズ・形態で多少の変異がある。26.27 は土器片転用例で「土器片錘」とされるものである。通常の土器片でも周縁にやや凹む箇所を観察できる例もあり、この類の実点数はかなり増える可能性もある。28 は中央に表裏貫通の孔を設けるもので、表面の状態などからここで示すが、垂飾品の可能性もあり、検討が必要である。

6. 土製円盤 (第 270 図)

当初分類で確認されている 59 点の内 54 点を示した。通常の土器片で示したものの中でも割れ口・周縁の研磨・磨痕が認められるものもあり、これらのチェックに及んでいないことから、確実な総点数の把握・提示は難しい。感覚的な所見ではあるが、土製円盤・割れ口周縁研磨の土器片は比率としてさほど高くないようにも思えるが、無文土器のチェックを行い得ていないこともあり、数値比率や所見を示せない。なお特異な出土状況や他の遺物との共伴、特定の遺構やグリッドへの集中等を確認することはできない。

周縁研磨の程度や形態、大きさ、土器片の型式等から分類・検討を行うべきであろうが、行い得ていない。安行1式平縁・波状縁深鉢口縁部片が目立つようにも見えるが、有意性を見出して良いか判断難しい。中には明瞭に研磨し円形への整形を思わせるものもあるが(21.30等)、他の要素との相関は見出しにくい。図示にあたっては遺構→グリッドの順で、さらにグリッド内は北→南、西→東(番号の若い順)という便宜的な配列(仮番号順のまま)にとどめた。

7. 小型土器・ミニチュア土器(第271～277図)

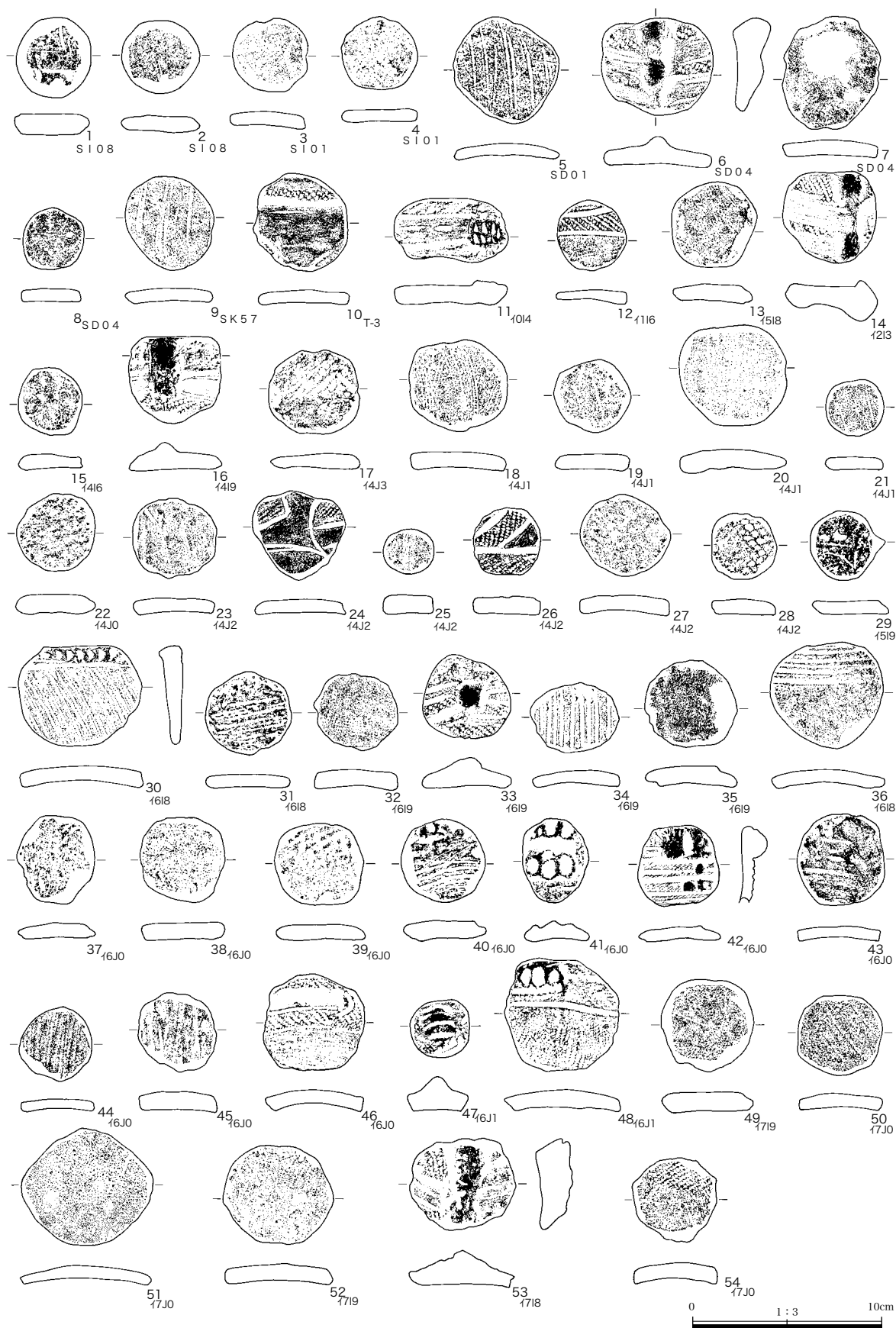
当初分類で小型土器・ミニチュア土器とされたもの113点を示す。後述するように定義・概念提示が難しいが、通常サイズの土器組成・系統・器種に含めがたいもので、相対的に「小形」のものである。その意味では後述のように第271図1.8や第272図8のような例は本来除外すべきと考えるが、便宜的にここで扱う。また第275図に示した台付脚部でも、通常一般に近い大きさの鉢部分、深鉢部分が付される可能性があるものを多く含む。一方逆に、これまで土器図版中で示したのものの中にも小型土器で扱った方が良いものも多く、相互の区別が困難な例も多い。通常サイズの土器文様や調整手法を観察できるものもあるが、異なる独自の文様や形態を示しているものもある。第273図1～3.5に見られる口縁端部の突起は、B突起(状)や通常サイズの土器突起形態・装飾と近く、作りの共通性或いは模倣関係を思わせる。器形の面では第273図8.9や第274図8、第275図5等が通常サイズの土器ではほぼ見られない形である。胎土や色調は通常の土器とさほど変わらないような印象を受ける。若干胎土中の鉍物が少なめかもしれない。第277図に示したものは当初「ミニチュア」として分類された。明らかに通常の土器とは異なる系統群や位置を占めることが予想され、用途の違いも想定されるが、「小型土器」との区別が困難なものも多く、これについても検討を必要とする。以下図示したものについて、本来個別に詳細な観察記録を示すべきであろうが、概略的に挿図に沿って記すに留める(表についても未掲載)。なお未掲載資料も100点程度はあるが、多くが小片であり、刈沼遺跡の様相を示すのに大きな支障はないものと考えている。また特異な出土状況を示しているものや、別種遺物との共伴関係が認められた例は現時点では確認していない。

第271図1は瘤付系の注口土器で、小型とするには問題が残る。通常サイズの注口土器と判断される。2は台付土器の脚から接続部と考えたものだが、上下逆かもしれない。3は安行系或いは瘤付系で見られる遮光器文様が施されるもので、異形台付との関わりがあろうか。4は丁寧な作りの小形壺で、底面近くまで縄紋施紋がある。5は「やや小形」の壺形で大洞式文化圏ではこのサイズの壺は安定してあるようにも思える。7は羊歯状文変化の文様が描かれるもので、小サイズの壺・注口などであろうか。8はここに示したが一般サイズの土器深鉢脚部と捉えて良いだろう。やや太めの沈線で描かれるなど文様も含め興味深い。第272図8の台付脚部もサイズ的には一般の土器として良いが、計3単位見られる円形透かし孔及び三角形の挟り込みが連続的に描かれており、玉抱三叉状の表現とも捉えられる。

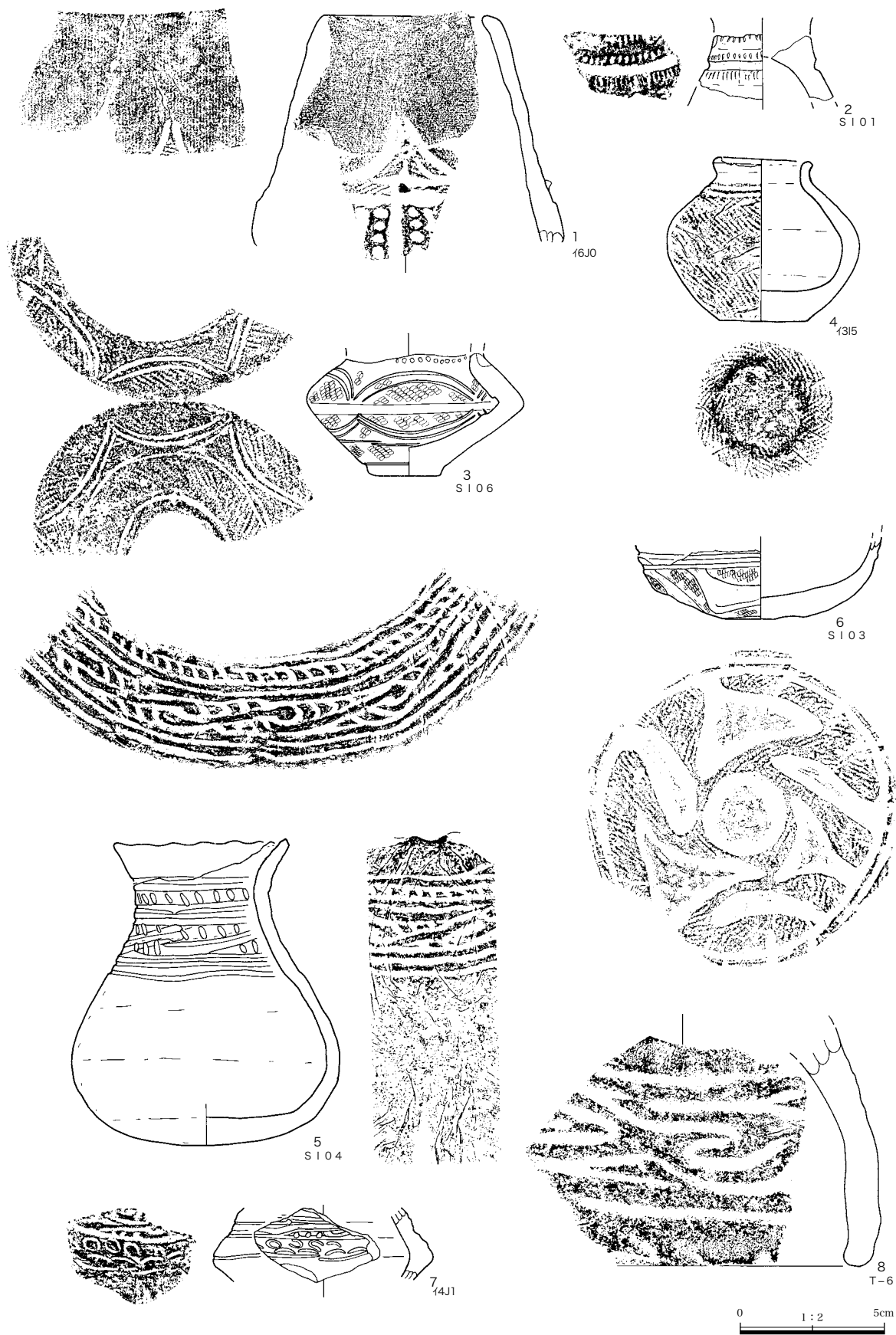
第272図1や第273図1～8が本遺跡で特徴的な小型の壺形土器である。内面への顔料付着が目立っており(第273図3.5.8等)、顔料入れ容器としての機能を考えることができよう。掲載し得なかった小型壺破片の中にも、かなり厚く顔料付着が確認できるものがある。

第274図に示したものは、広口壺状に頸部屈曲するものが多い。通常サイズの土器と形態上の対比も為されているのであろう。ミガキ調整顕著なものも多い(1.8.11等)。11は外面中央に炭化物タール(もしくは漆)が付着しているものである。

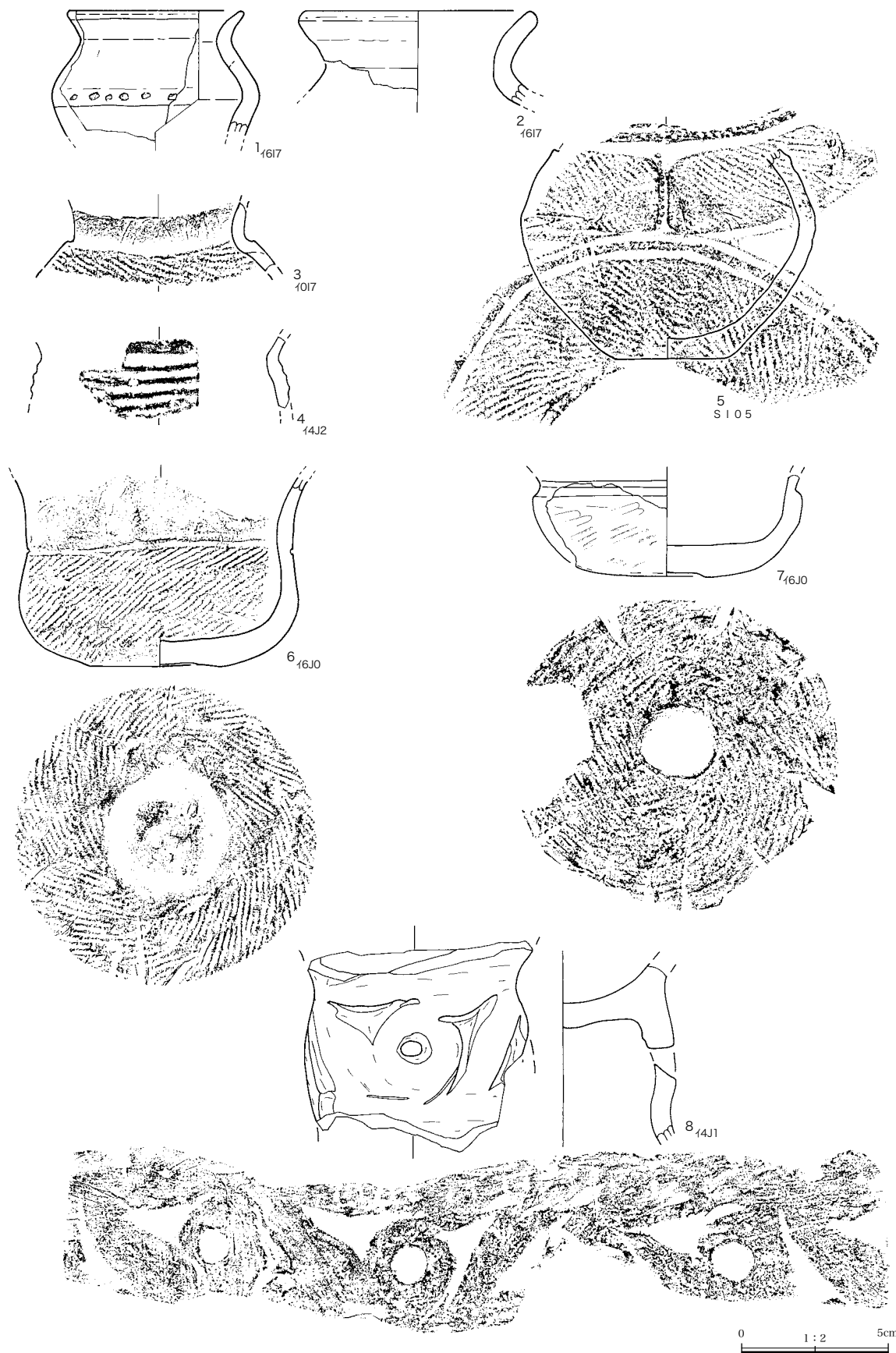
第275・276図には浅い皿状のもの、台付脚部などを示す。第275図1～3では指頭押捺・オサエ状の粗



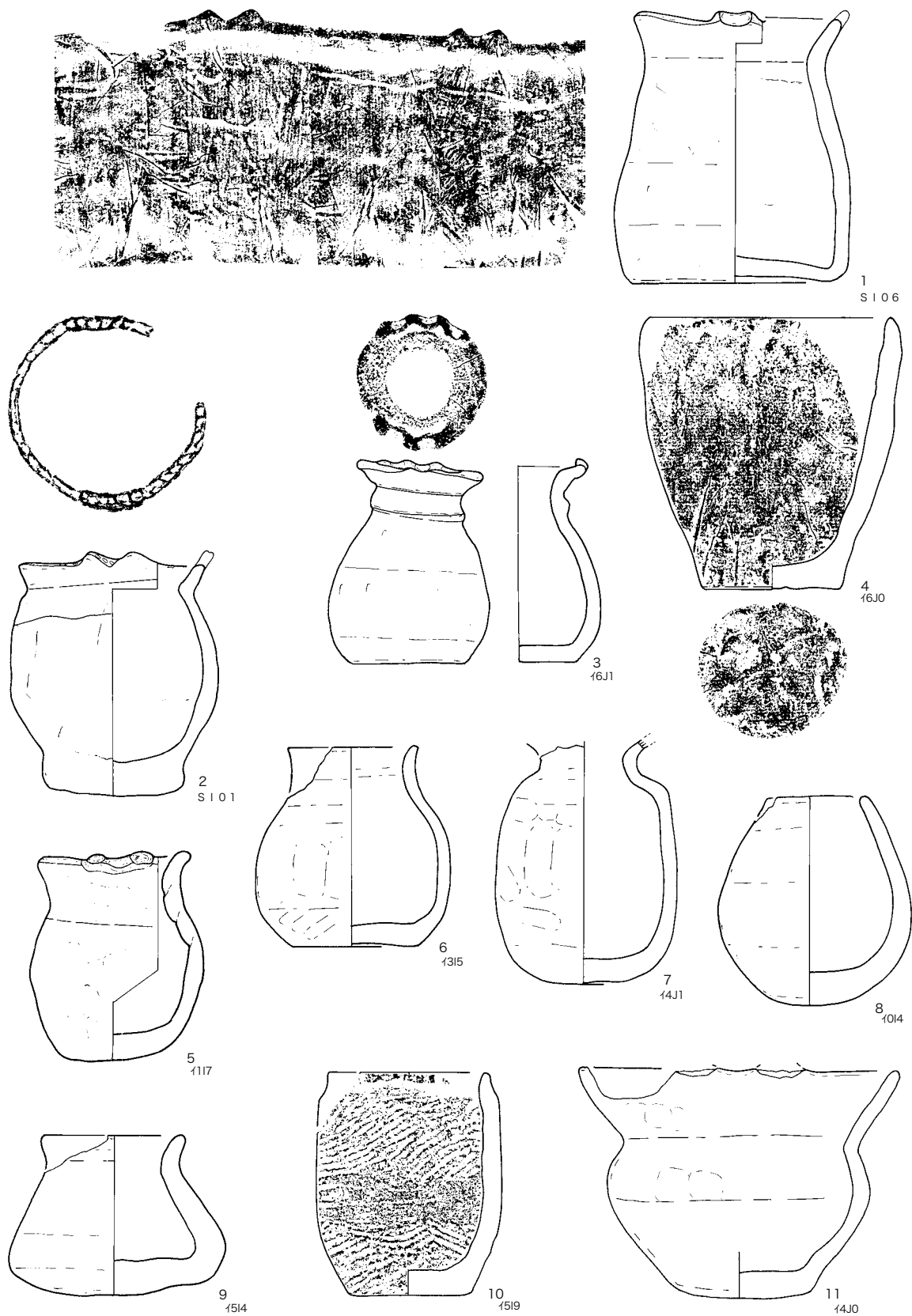
第270図 土製円盤



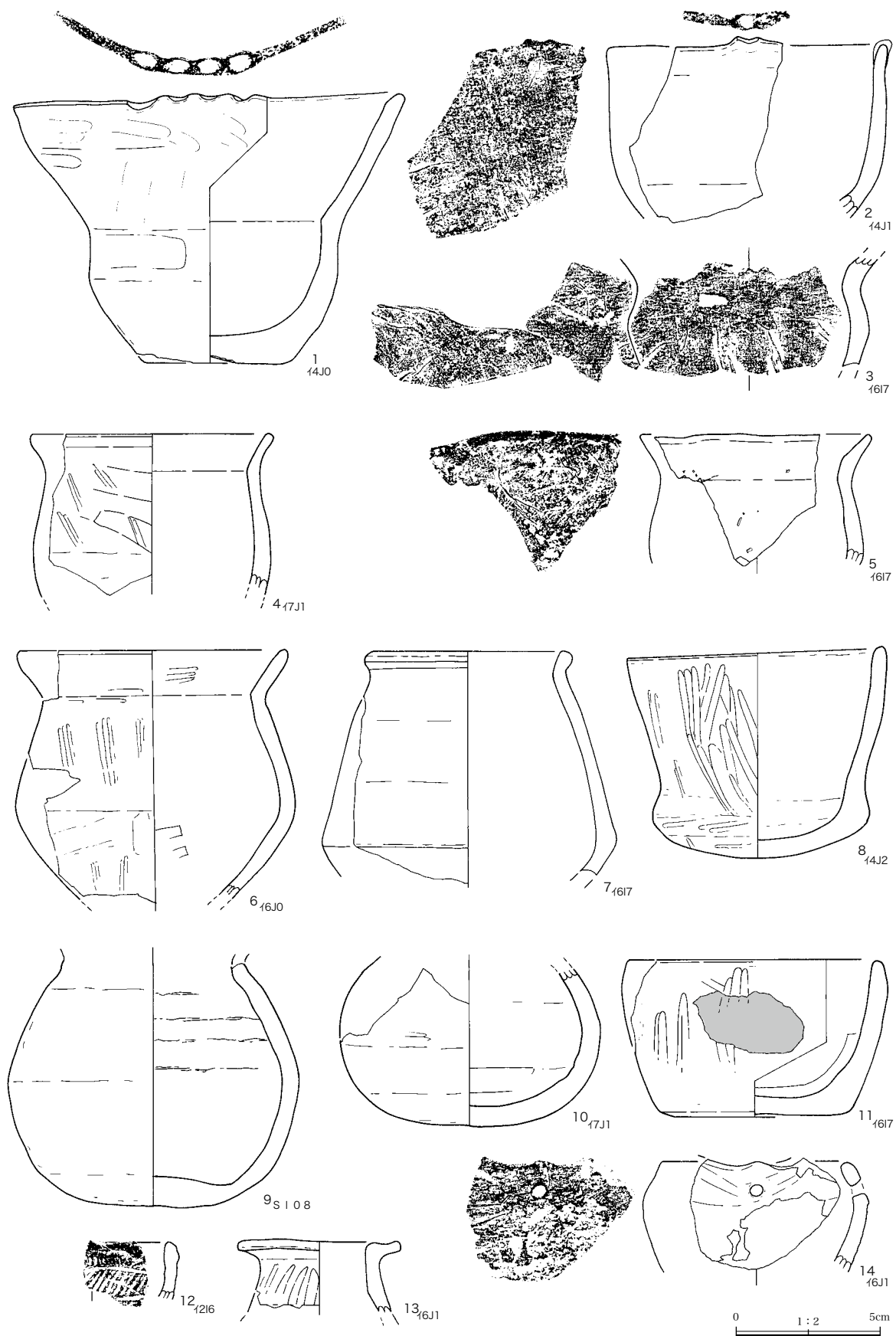
第271図 小型土器(1)



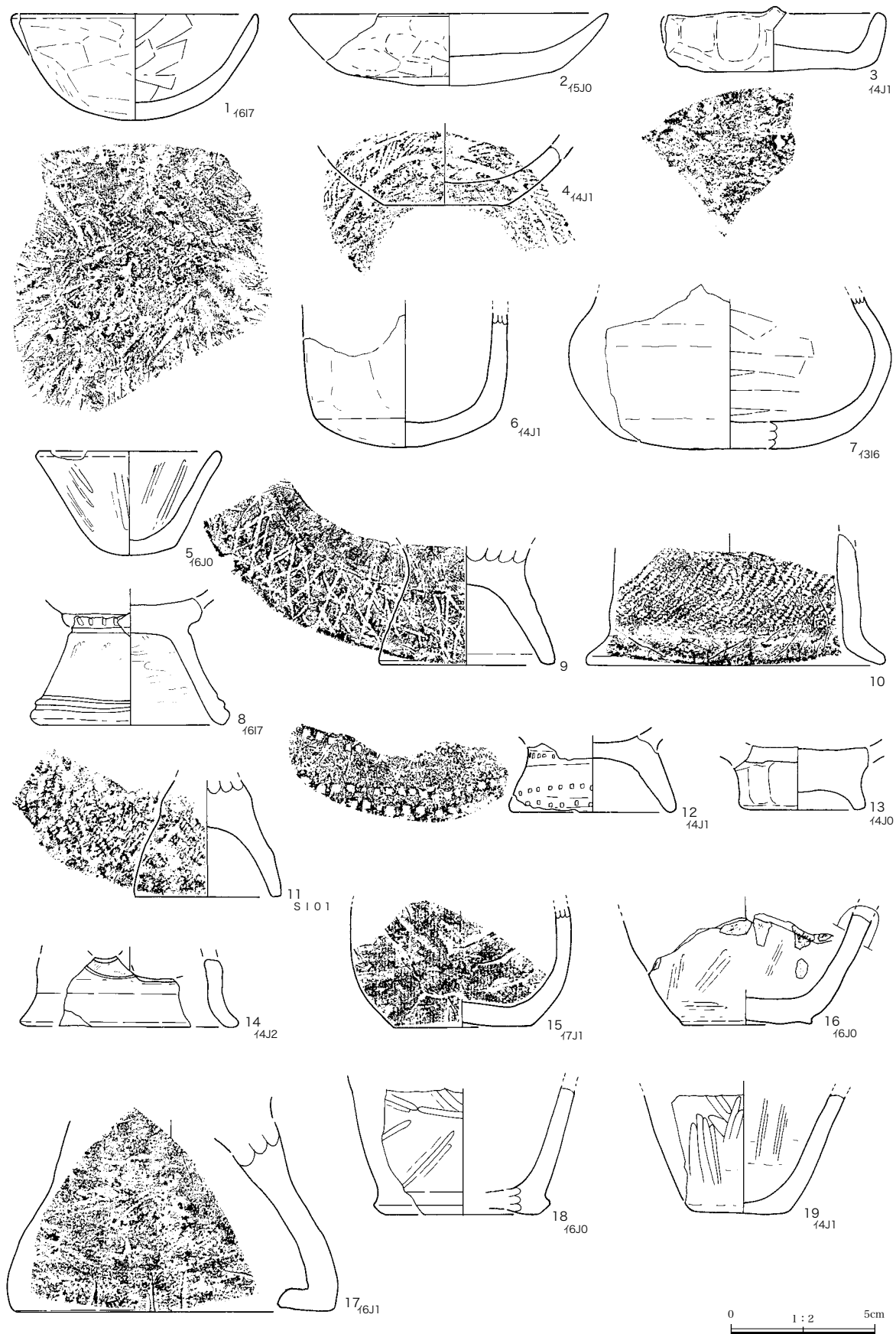
第272図 小型土器(2)



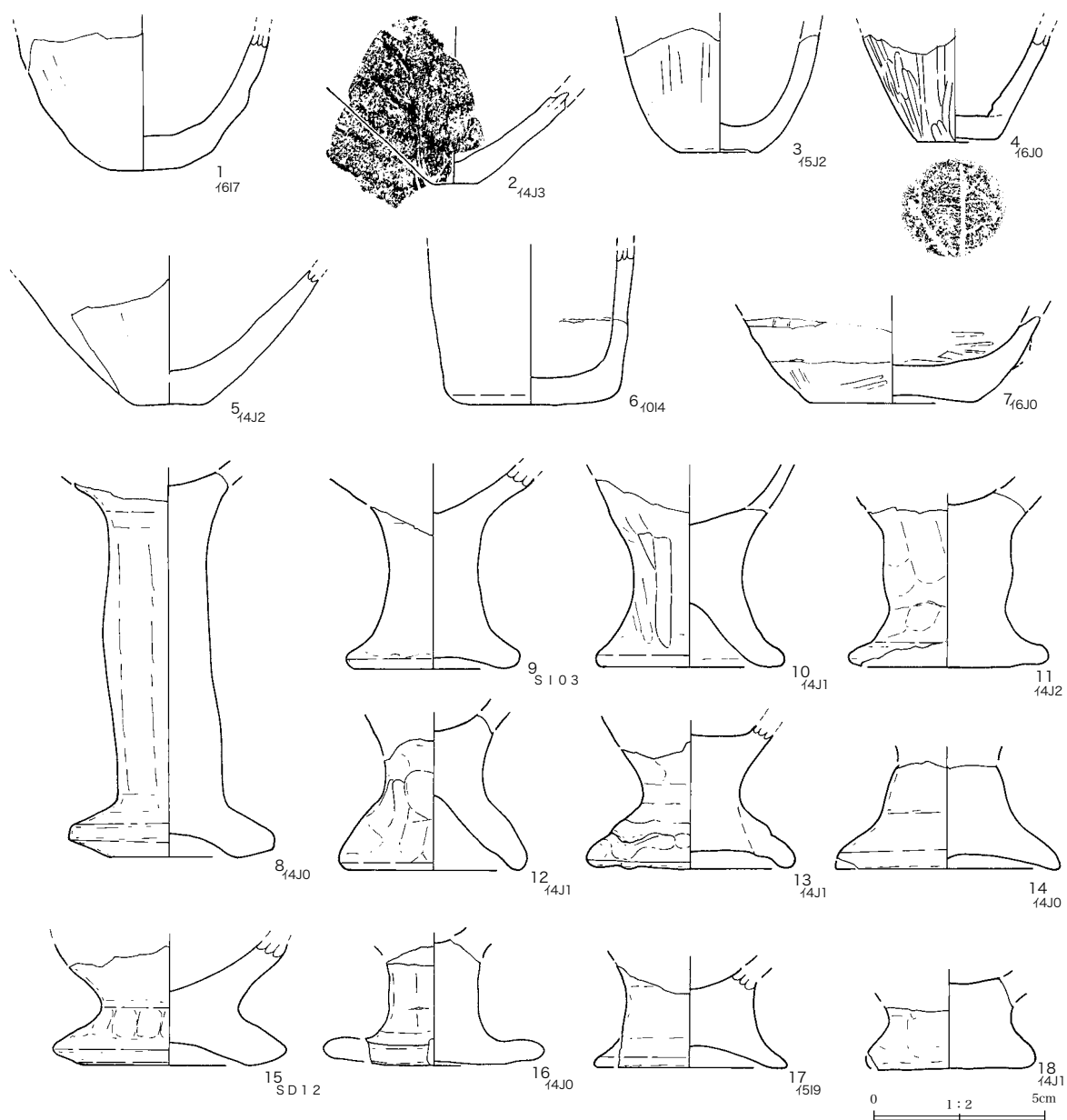
第273図 小型土器(3)



第274図 小型土器(4)



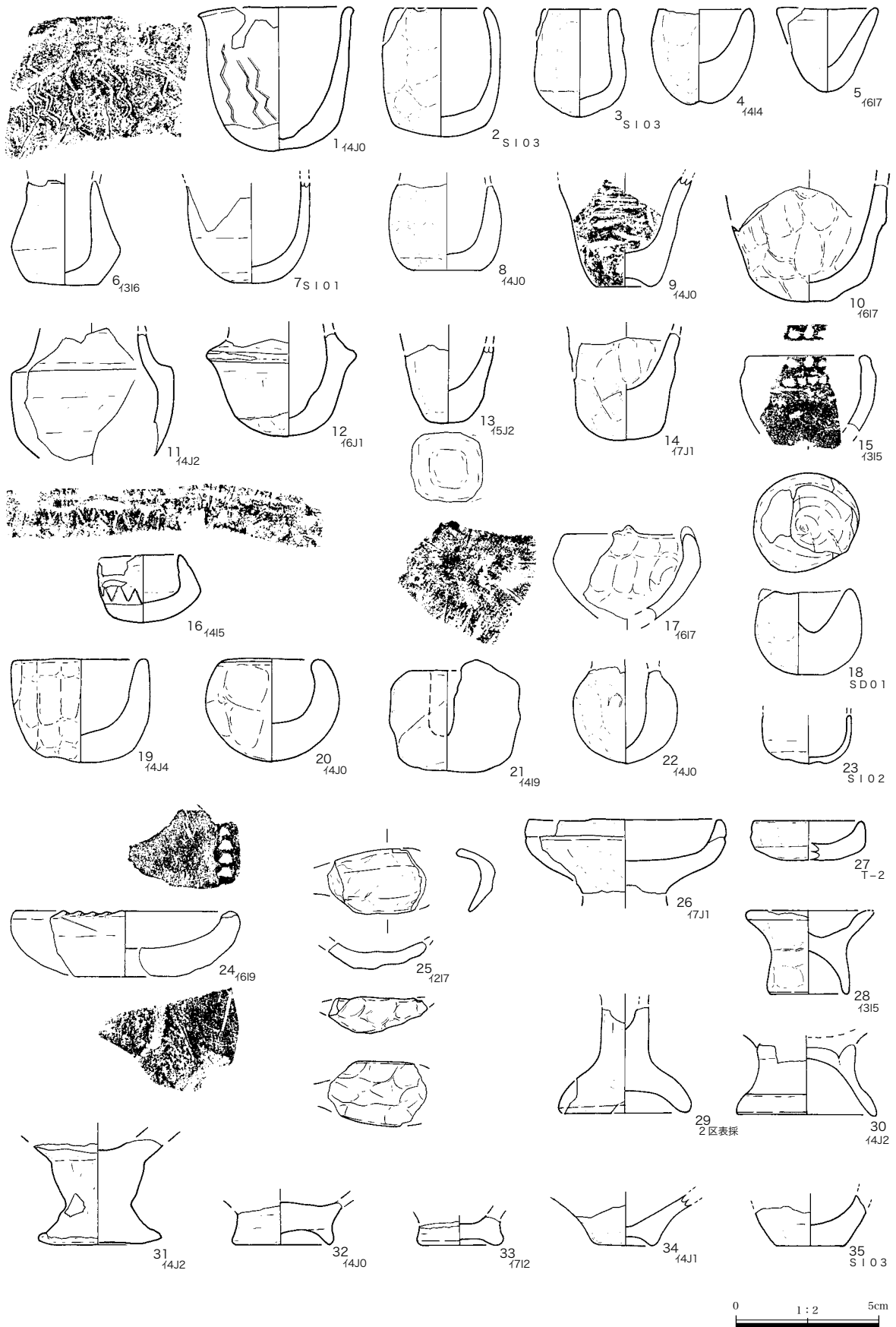
第275図 小型土器(5)



第276図 小型土器 (6)

い調整痕が残る。8～10等は通常サイズの土器としても良いだろう。17はかなり厚手で異質なものである。第276図8は上位が不明で、別種土製品の可能性もある。長さは異なるが、11や16等も類似する作りの特徴を有している。未掲載の土製品でもこの種の小型土器が想定される破片が数点確認されている。

第277図はミニチュアと分類できる土製品を示す。1.2や31は器としての機能を有しているが、内容物を入れる容器として用いることが難しいものも多い(18.28等)。作りは概ね手づくね状で、調整も粗いナデ調整や指頭押捺状のオサエ調整に留まるものが多い。1.15.16は文様を加えられるやや珍しい例。26.29.31等のように高坏状となる例も多い。25のような上面観円形とならず「舟形」状に近い例もある。



第277図 小型土器 [ミニチュア土器] (7)

第8節 石器

概要 石器の整理については、基礎整理の段階で機種分類が行われ、その後実測以降の整理が進められた。第1次調査区からの総点数は7,867点である。これには加工痕の無い礫・搬入礫は除いているが、二次加工や使用痕の無い剥片石器剥片・残核、石剣類の小片などは含めている。内訳は第6表のとおりである。検討により当初分類より機種変更となったものも多く、できるだけ数量の変更も反映させたが、完全ではない部分がある。非定型的なものでは判断が難しいものも多く、今後の検討によっては変動する可能性がある。とはいえ、大きな傾向を見る上では充分参考的なデータではあろう。なお石剣類・独鈷石については第9節で扱う。

出土状況は、他の遺物と大きく変わるところは無いようだが、各遺物の詳細な出土位置については土器等の他種遺物同様、提示できない。各グリッド毎の出土点数集計も行い得なかったが、土器と同様、住居跡内及び中央窪地を取り囲むように分布する環状の包含層部分からの出土が多いようである。特異な出土状況を示した遺物の記録も残されていない。

各遺物の挿図中及び表中に出土遺構・グリッドを示すようにした。グリッドについては新グリッドでの表示であり、注記の旧グリッドとは異なっている点、注意が必要である。表では両者を併記した。出土遺構毎の石器の内容、組み合わせを示すことも考えたが、原則機種毎の提示までとせざるを得なかった。数が多い機種については一部遺構毎の版組配置を考慮しているが、遺物種別によっては分類を優先している。

今回の石器整理は極めて不十分な整理報告であることを記しておく。実測図の提示は極めて限定的で、とりわけ機種によっては殆ど示し得なかったものもある。具体的には本来できるだけ図の提示を試みるべきチャートや玉髓・鉄石英等による剥片石器類の提示比率が低い。石鏃、とりわけ石鏃未製品については185点出土しているにもかかわらず、全く提示し得なかった。他の剥片石器類についても、楔形石器、スクレイパー類を始め二次加工痕のある剥片・使用痕のある剥片について、表の提示に留まっている。大形のスクレイパー、礫器類についても殆ど提示できなかった。石錘や磨石・石皿類については実測まで進めたものの図示できなかった遺物も多く、表の提示さえできなかった部分がある。後述するように、未製品が多く出土している打製石斧や磨石石斧についても、本来丁寧に図化分析を行えば遺跡内での製作過程等注目すべき分析データの提示を行い得ると思われるが、これについても一部の図の提示と感覚的な所見の提示に留まらざるを得ない。また図や写真・表で示した遺物においても詳細な観察を示し得ない。機種によってはできるだけ観察記録を示すよう試みたが、不十分なものや殆ど示し得なかったものもある点は、明記しておく。また石材についても可能な限り肉眼鑑定による委託を行い、表中に示すよう試みたが、もとより全点の確認は行い得ておらず、石器製作全体を考える上では支障とならざるを得ない。

整理当初に行われた各機種内の図化遺物選定や分類は明確ではないところがあるが、遺存率や特徴なものを優先しているようであり、報告に際して注意したもの、選択の偏りは否めない。

石器の時期については住居跡内出土遺物でさえ、判断が難しい。出土土器の住居跡覆土内での混在・時期幅の広さが著しいことがその大きな要因である。概ね後期後半～晩期中葉の範囲内とまでは捉えることができよう。但し少量早期～中期、後期前半の遺物も認められることから、スタンプ形石器の出土があるように、少数これらの時期に伴うものもあろう。とはいえ、土器の比率に大きく対比できるように、石器についても95%以上が後期後半～晩期の範囲内と考えている。詳細な検討が必要であるが、一見早期的な形態と見られる礫器等についても、概ねこの時期となる蓋然性が高い。なおイ4J0、J1、J2グリッドあたりは中央窪地で出土土器では晩期中葉のものが目立ち、また大洞A1式も一定量出土するグリッドであり、ここからの出土石

器についてもこれらの時期となる可能性が比較的高い点は指摘できよう。また環状の遺構集中帯外側では後期の遺物がやや多い傾向が認められ、石器についても一定程度の対応が考えられよう。

上記のような広い時期幅があることを承知で機種組成を見れば、打製石斧、磨石・石皿類の比率の高さが窺える。石鏃や剥片石器類についても比較的多いが、後晩期遺跡では、極めて多量に石鏃を出土する例などもあり、それらに比べれば突出的とまでは言い得ない。砥石 287 点も他の縄紋集落と比べると突出的である。他で殆ど確認できない擦切具や特殊敲打具についても注目される。石錘の多さについては、鬼怒川に近い位置に立地している点に関わるものと推測される。

1. 石鏃 (第 278・279 図)

総点数 545 点出土している内、極めて限定的ではあるが選択された代表例 70 点を示す。実測製図については関東インフォメーションマイクロ株式会社 (株式会社アルカ) に委託した成果を編集して示す。実測図化された石鏃の押圧剥離分析を第 9 章第 2 節に示しているので参照されたい。遺構毎の提示も考えたが、住居跡から広い時期幅の土器が出土していることもあり、分類を優先しての配列とする。

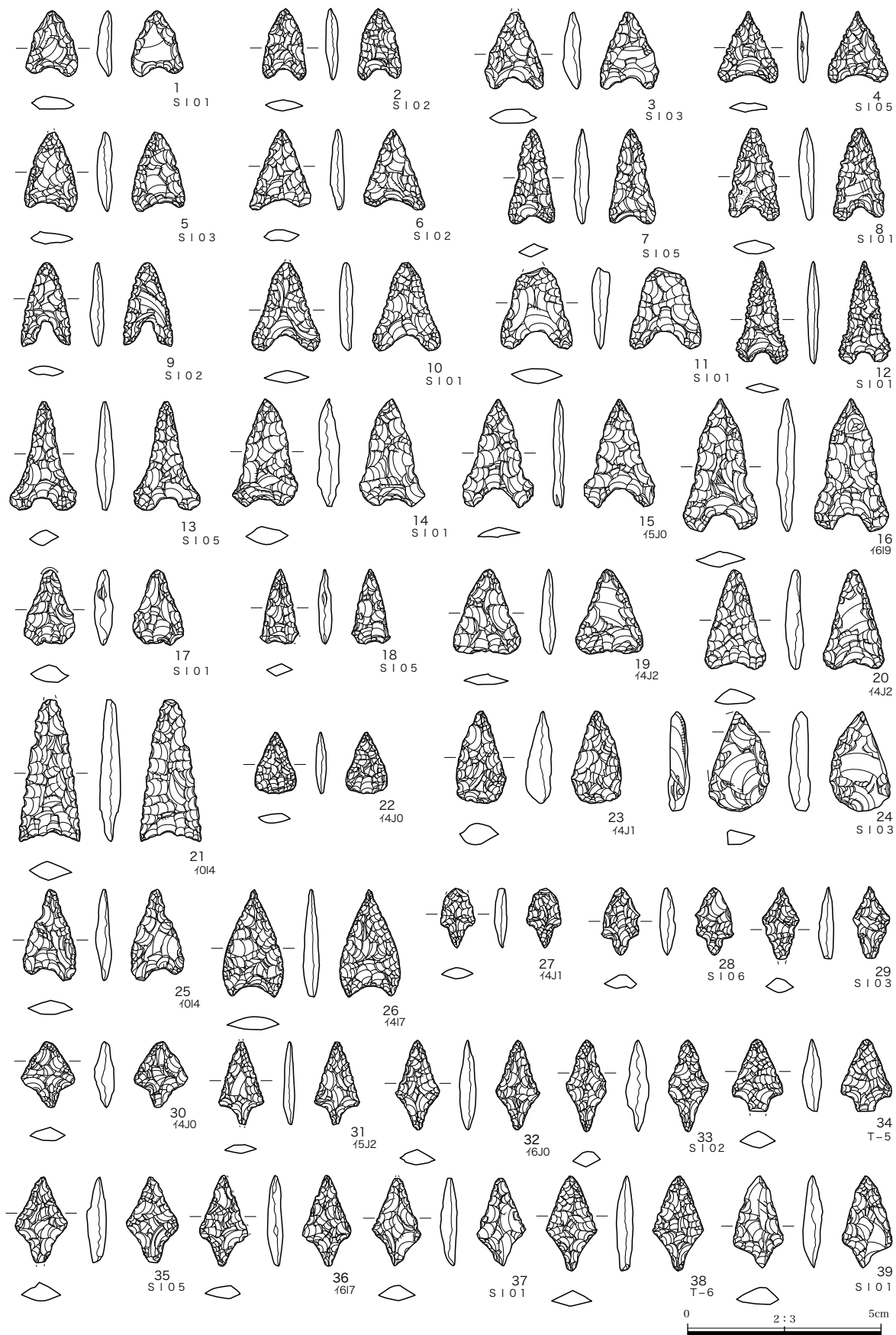
石鏃の分類については、壬生町八剣遺跡報告での分類を踏襲した整理時の当初分類をそのまま示す。凹基無茎鏃の A 1 類・A 2 類と凸基有茎鏃の B 1 類、平基有茎鏃の B 2 類、凹基有茎鏃の B 3 類が主体を為す。分類点数は 360 点で、未製品が 185 点である。石材ではチャート、頁岩、玉髓、鉄石英、流紋岩などがある。岩石石材鑑定の結果からは、チャート・玉髓が多いという結果が得られている。未製品については、本来詳細な検討が必要であるが、一部の写真図版の提示と表の提示に留めざるを得ない。検討によっては製品とすべき例があるかもしれない。また剥片石器 R.F.・U.F. 類の中にも石鏃未製品と推定できるものもあり、剥片石器類側の表では変更しないままの例がある。以上、製品・未製品の確実な点数さえ流動的という極めて不十分な整理・報告で、また下記分類と石材との相関など、詳細な検討が必要であるが、為し得ておらず、今後検討の機会を得たいと考えている。なお被熱しているものが比較的多いと指摘があり、製作時に熱を加える可能性も考えられたが、十分な観察・検討は行っておらず、観察結果やデータの提示に至らない。

A 1 類 (第 278 図 1～16)：基部の挟りが深い凹基無茎鏃で、逆刺が外に開くものである。未掲載も含めると 85 点出土している。長幅比の点では 1～6 と 7 以降で差異がある。12～16 は逆刺がやや外側に丸く開くもので、A 1' と分類される。12 は左右側縁が鋸歯縁となるもので、明らかに異質な例である。

A 2 類 (第 278 図 17～24)：基部の挟りが浅い凹基無茎鏃・平基無形鏃で、逆刺が外に開くものである。未掲載も含めると 16 点出土している。22～24 は基部が丸く弧状をなす円基と言えるもので、A 2' としておく。21 は鋸歯縁で大きさもやや大きい点注意される。17 は当初分類のまま石鏃として掲載するが、先端部の摩滅が観察され、石錐または石錐転用とすべき例であろう。

A 3 類 (第 278 図 25)：基部の挟りが深い凹基無茎鏃で、逆刺が内湾するものである。未掲載も含めても 17 点と出土数は少ない。A 1 類と区別が難しいものも多い。A 4 類 (第 278 図 26) は基部の挟りが浅い凹基無茎鏃で、逆刺が内湾するものである。点数は少なく (2 点)、A 2 類との区別が判断難しい例も多い。

B 1 類 (第 278 図 27～35、第 279 図 1～7)：凸基有茎鏃である。数は多く、未掲載を含めると 95 点である。最大幅部分から基部に向かって鈍角に推移するもの (第 278 図 30.31 等)、茎端部に向かって弧状に挟れるもの (第 278 図 34、第 279 図 3.4 等)、ほぼ直線的に推移し全体で菱形に近いもの (第 278 図 33) などの形態別がある。C 類との区別が難しいが、第 278 図 33 例でも若干の挟り部分があり、区別し得る。統計を示し得ないが、やや大きなものは長幅比でも長さの比が高い傾向にある。第 279 図 7 は全体で十字形に近く、



第278図 石鏃(1)

身の先端や茎部先端が細くなる特徴的な形態でB1'類としておく。

B2類(第279図8～10.14):平基有茎鏃である。数はやや多く、未掲載を含めると25点である。ほぼ平らで直線的な基部から茎部が突出する形である。14は身の下方が弧状に膨らむ「飛行機鏃」でB2'類としておく。数は少ない。

B3類(第279図11～13):凹基有茎鏃である。数は少なく、未掲載を含めて10点である。作りの丁寧なものが多い印象がある。13は側縁が鋸歯状となるもので、丁寧な作りという印象を受ける。

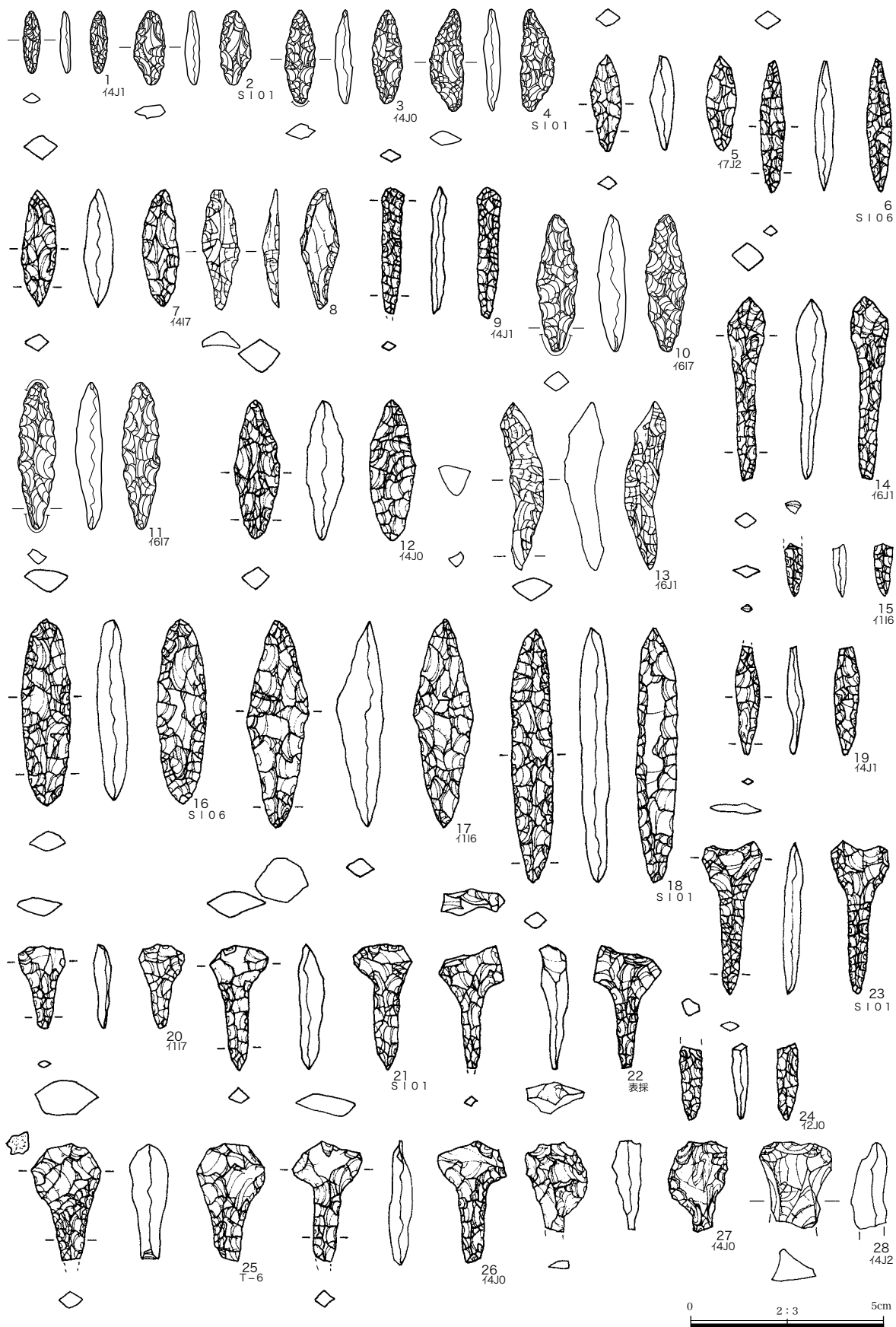
C類(第279図15～19.21):全体で菱形または木葉形となる石鏃である。数はやや多く、未掲載を含めて54点である。B1類との区別が難しいものも多いが、下端茎部に向かって直線的となり決り或いは湾曲しないものである。21は尖頭器状のもので、他とは明らかに異なるが、当初分類を踏襲しC'類としておく。また当初分類のD類及びD'類とされたものでも形態的にはこの類に近いものがある。C'類に近いもので側縁が直線的に推移するものを当初D類またはD'類とされていたようである。整理時の分類の混乱を解消すべく検討が必要であったが、課題として残されたままとされている。

このD類或いはD'類としたもの(22点)の中には石錐とすべきもの、また区別の困難なものがあり、石錐で示した第280図1～4.10.11は当初石鏃D類またはD'類とされていた。断面円形や方形に近いもの、また端部の摩滅が見られるものは石錐と判断すべきであろう。一方平面木葉形で断面形が扁平に近い菱形のものもあり、それらはこのC'類に含めるべきものとなろう。可能な限り未掲載資料についても分類の修正を行ったが、一部旧分類のままとなっているので注意が必要であると共に、更なる検討を要する。

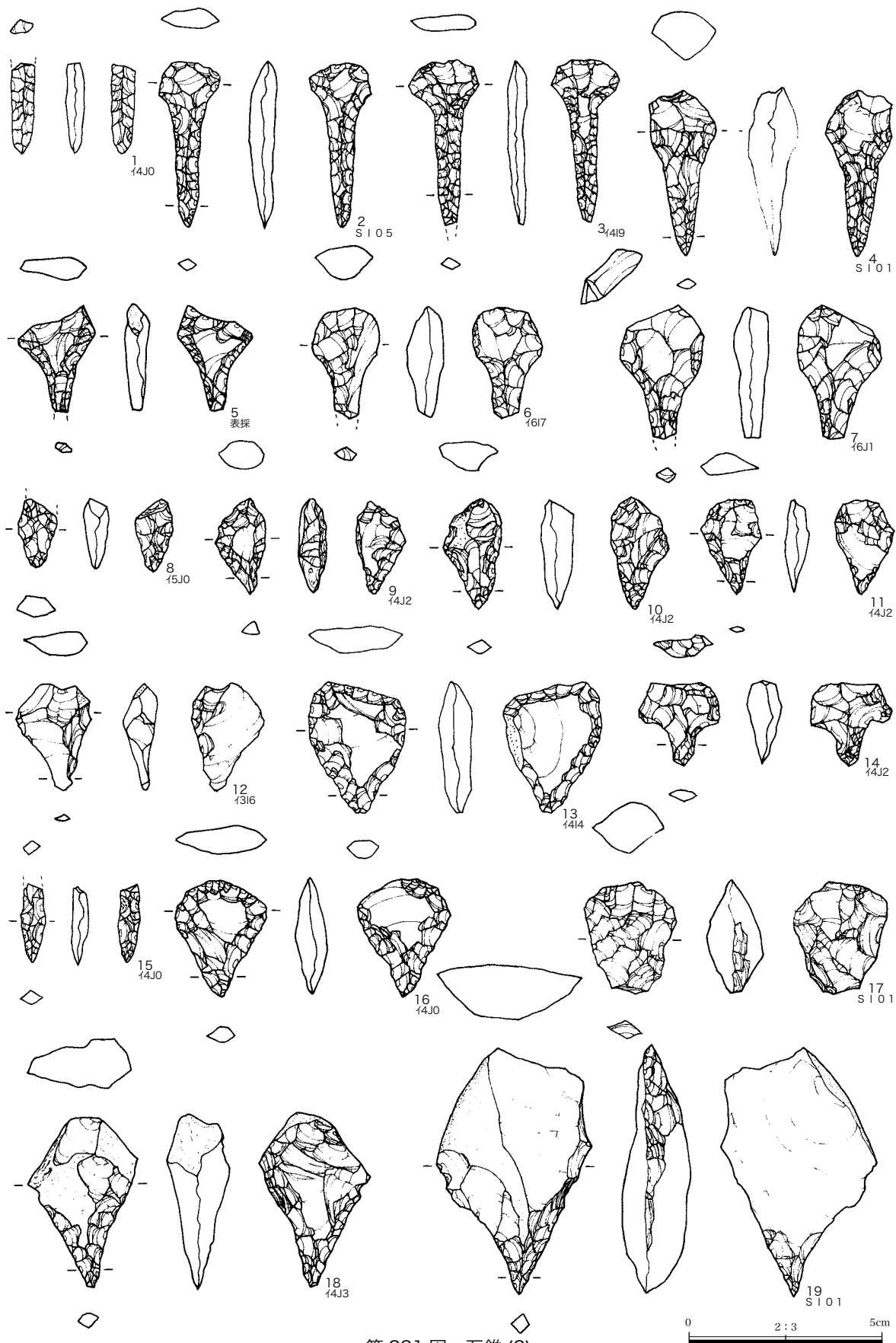
その他(第279図22～27):上記の分類に含み得ないもので、当初分類では「特殊」や「異形石器」とされていたものである。実際25はX状の「異形石器」となるが、便宜的にここに含めておく。22は有茎鏃未製品とも考えられる。23は平面形が異質ではあるが、大きくは有茎鏃B1類に類するものとも言える。24は上下対称で中央に括れ部がある異形のものだが、作りは他の石鏃と共通しているように見える。なお未製品例を2点のみ示す(26.27)。

2. 石錐(第280図、281図)

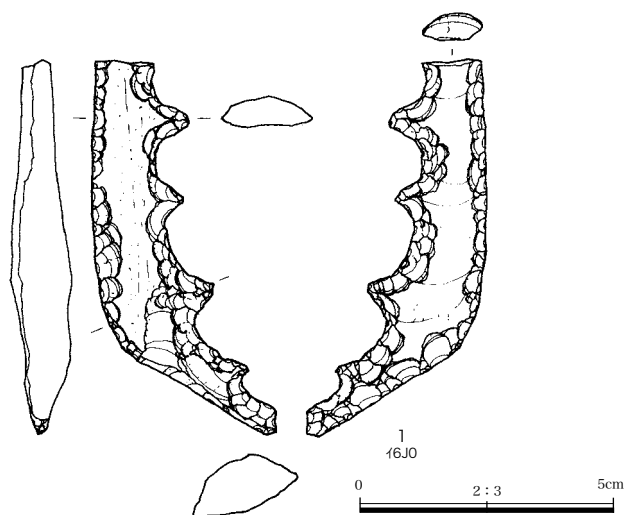
総点数50点がある。項目を設定しての分類はしないが、棒状の錐と、摘み部を有するものがあり、後者の方が多い。石材はチャート、頁岩、玉髓、鉄石英等がある。既述のように一部の石鏃とは区別が難しいものもあり、また剥片石器類の中に石錐とすべき例もあることから、確定的な点数とはし得ない。項目を掲げての分類はしないが、形態から幾つかの種別を確認でき、その点に注意して挿図中の配列を行った。第280図の1～19は全体形状が柳葉または棒状を呈するものである。15.19は上位が欠損しており、後述の摘み部を有するものの可能性もある。1～4は長さが短いもの=長幅比が低いもので、当初石鏃のD類またはC'類に分類していたものである。3は先端部摩滅が確認でき、あきらかに石錐と言える。8や13は形態がやや不整であり未製品の可能性もあろうか。第280図20～28、第281図の1～7は明瞭な摘み部を有するものである。第280図24、第281図1は上位欠損で棒状の項に入るものかもしれない。錐部先端が欠けているものも多いが、遺存例では比較的長さのある例が目立つ。摘み部はやや加工が粗いもの(第281図6)、非対称となるもの(第281図7)が確認される。第281図8以下には、長い棒状の錐部を持たないもの、基部と錐部の区別が不明瞭なものなどを示す。上位が欠けている15や錐部欠損の17は第1または第2の分類項となるかもしれない。9～11等石鏃との区別が難しいものもあるが、非対称の形態や先端部の観察などから石錐としている。14はやや幅広の摘み部と短い錐部が特徴となるもので、他遺跡でも少数例が認められるもの



第280図 石錐(1)



第 281 図 石錐 (2)



第282図 異形石器

である。18.19は突出して大きいもので礫面を残すつくり等も特徴的である。なおこれらの石錐についても被熱例の指摘がされているが、石鏃同様この点に関わる十分な観察・検討・分析は行っていない。

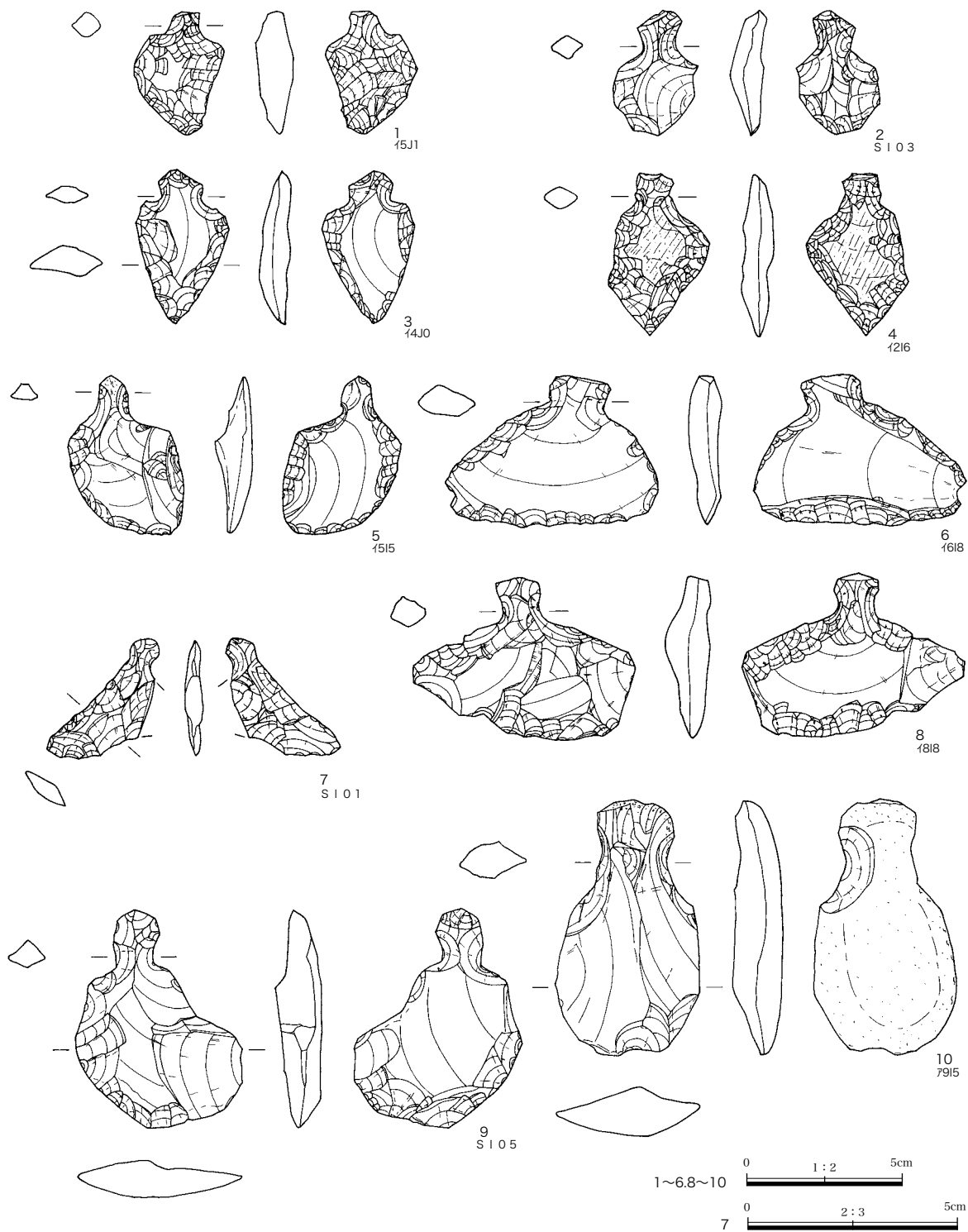
3. その他の剥片石器類<二次加工痕ある剥片 R.F.・使用痕ある剥片 U.F.・スクレイパー Sc・楔形石器・異形石器>

既述のように剥片石器類は多量に出土しているにもかかわらず、殆ど図化掲載できなかった。石材はチャート、頁岩、玉髓、泥岩、流紋岩など、整理時当初分類として「緻密な石材」として扱われたものである。基本的に

不定型な剥片で、長さ・幅2～4cm程度、厚さ1～1.5cm程度のもが多い。縦長剥片・横長剥片・両極剥片があり、縁辺1～2片に二次加工痕や使用痕が認められるものが623点中約8割程度ある。多くが1次的な剥離によって薄く鋭角な縁辺が形成されているところに、二次加工痕や使用痕が認められる。礫面や節理面を片面に残している例も多い。二次加工は多くが片面で、縁辺でも一部の加工に留まるものが多い。細かな押圧剥離加工が認められるものがあるが、それらは形態などからも石鏃または石錐未製品となる例が多いようである。一方やや厚みがあって顕著な両面加工のものはスクレイパーと判断したものが多いが、これらの中にも石鏃や石錐の未製品が含まれている。詳細な判断ができないものは両者を併記しており、本来詳細な観察と分析が必要であろう。台形状の両極剥片で加工があるものについて、楔形石器ピエスエスキューと判断したものがあり、本来図示すべき機種であるが、行い得なかった。可能性があるものの点数としては24点がある。使用痕は刃こぼれ状の微小剥離や摩擦痕跡等から判断したもので、1～数辺の縁辺に及ぶものまで多様性がある。中にはかなり摩擦で擦れているものもある。二次加工痕がある辺に使用痕が認められるものもあるが、別の縁辺に認められる例も比較的多い。石鏃未製品は少なくとも15点程度はあり、石錐、或いは石錐未製品の可能性がある例も20点を超える。チェック時の感覚的な所見ではあるが、二次加工痕1辺+使用痕2辺、使用痕1～2辺というパターンが目立つ。以上の他、石核コア、加工の無い剥片、剥離のある礫などに分類できるものも比較的多い。

なお遺跡からの取り上げ資料では、原石・礫も多く認められる。テンバコにして393箱がおおよそこれに相当する。遺憾ながら実物の確認や分類、石材確認に至っておらず、分析は今後の課題である。磨痕ある礫なども含まれるかもしれない。後述する礫石器のスクレイパーとの区別も一部に困難な例がある。

異形石器は1点確認された(第282図1)。出土状況は不明である。一端部(図上位側)は折れ・欠損しているが、他は比較的遺存しており全体では80%程度であろうか。重さ12.72gである。鋭角な左右の側縁に細かい剥離加工を加え突起状の突出部は現存部で5単位が作られている。石材本来の特徴なのであろうが、光沢を帯びている。またスクレイパー類第284図1で示した例も当初異形石器と分類されたが、上記1の異形石器とは異なる。石鏃未製品の可能性もあろうか。



第 283 図 石匙

4. 石匙 (第 283 図)

確実に石匙と確認できたものの内 10 点を示した。明らかに石匙と判断できながら図示できなかったものが 2 点あり、総数は 12 点となる。石材は頁岩、泥質チャート、玉髓、珪質頁岩等がある。8 は良質な頁岩のように観察される。縦型 1～4 と横型 6.8 があり 5.9 は中間的或いは「斜刃型」とも言える。10 はやや異質で、片面に礫面を残すホルンフェルス製の剥片（剥離は左右方向から）を素材としているもので、端部も粗い片

面加工のみであり未製品或いは別種石器の可能性もあろう。

5. 礫器・スクレイパー類等 (第284～285図)

礫器は多数出土しているにも関わらず、3点のみの図示に留まった。打製石斧の挿図中で示した2点(第305図5.6)は礫器またはスクレイパーとすべき例となる。打製石斧未製品や打製石斧破片として当初に分類した中にも礫器やスクレイパーとすべき例があるかもしれない。

第285図2に示したものは、円形の剥片縁辺全周に主に片面二次加工で比較的鋭角となる刃部を作出している礫器である。当初分類で礫器として分類されたものを見ると、礫器またはスクレイパーとして区別の難しいものが多い。長さ6～10cm前後、厚さ3～5cm程度のもが多いが、長さ15cmを超える例も少数ある。礫面を残す例も多い。粗い剥離加工が1～2辺加えられるものが多いが、中には3辺、全周近く加工があるものもある。多くは主に片面加工だが両面加工例も少数ある。剥離加工の辺には刃こぼれや擦れ等使用痕を伴うもの、敲打痕に近い痕跡の例もある。頂部から一面が礫面、残りが剥離面で、丸みの残る円礫の頂部と反対側の横断面鋭角となる縁辺に加工が加えられる、というのが多くみられるパターンである。V字状に鋭角となる部分二辺に加工が加えられる例、やや縦長長方形に近い礫で敲石に類する例等もある。

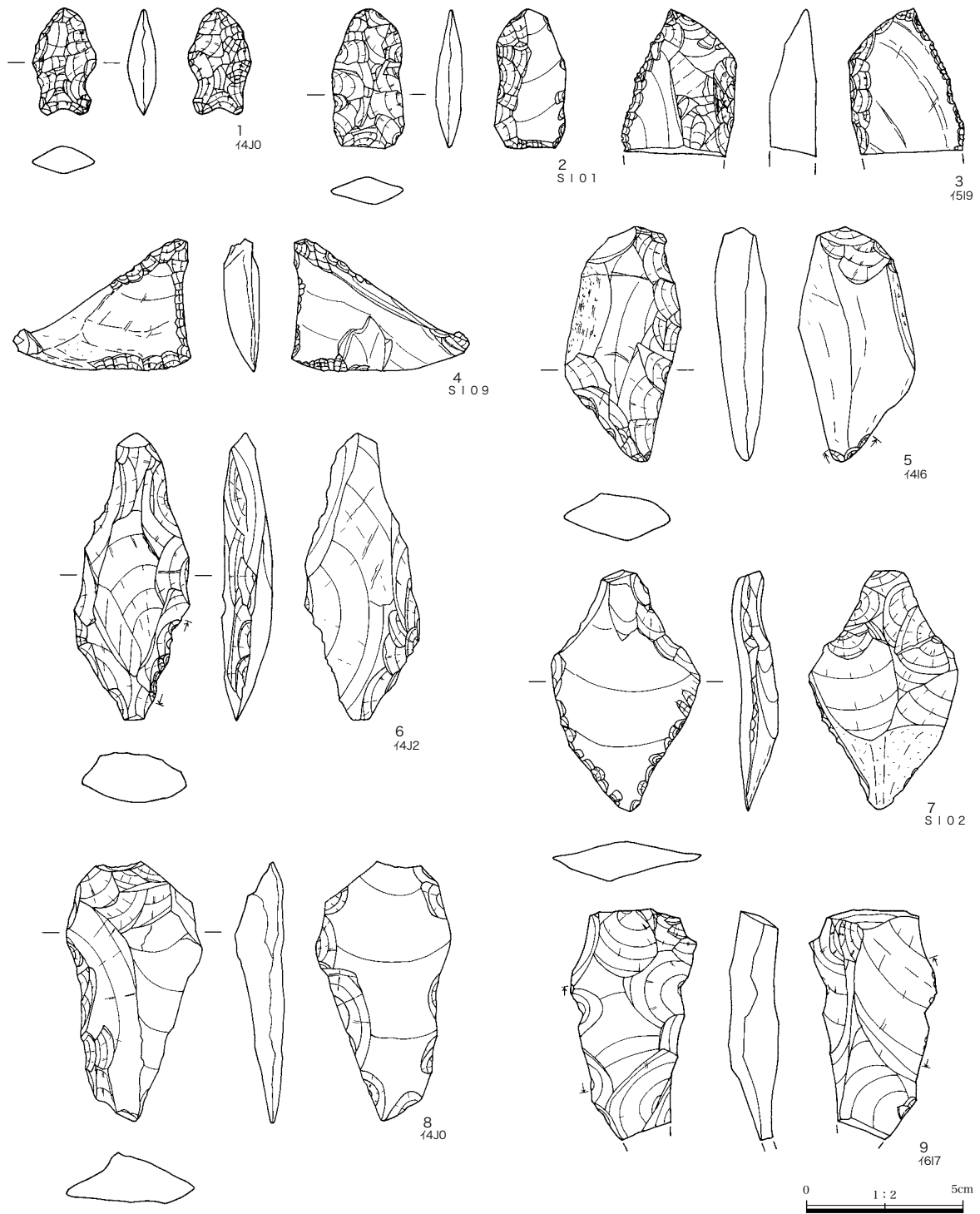
第284図2～9は一応スクレイパーとして扱う。当初分類では「その他」とされていた2～4は、やや薄手で比較的緻密な石材を用いているものである。1～3辺に明瞭な二次加工を加え刃部としているもので、両面加工を主とする。当初分類で「石槍」とされていた5～9はホルンフェルス等の石材を用いているもので、槍先状の先端鋭角な部分が作られているものである。形状等からは当初分類のように刺突具とする意見もあろうが、むしろ錐や石匙に近い部分もあり、後者を考えての図示とした。

当初分類でスクレイパーとしていたものが102点程あり、他にも礫石器扱いのスクレイパーが21点ある。長さ5～10cm、厚さ1.5～3cm程度のもが多い。「礫器」としたものに比べ薄い傾向があり、礫面は一部または残されていないものが多い(一面礫面の例もある)。縦断面～側面でみて細長いV字状～二等辺三角形状となり、V字端部側を刃部としてスクレイパー刃部として作っている、或いは加工を加え使用しているのが目立つ。横長剥片が多い傾向があるかもしれない。なお第285図1に示したものはスタンプ形石器で、草創期燃糸紋期に伴うことが明らかとされているものである。確認した限りではこの1点のみである。

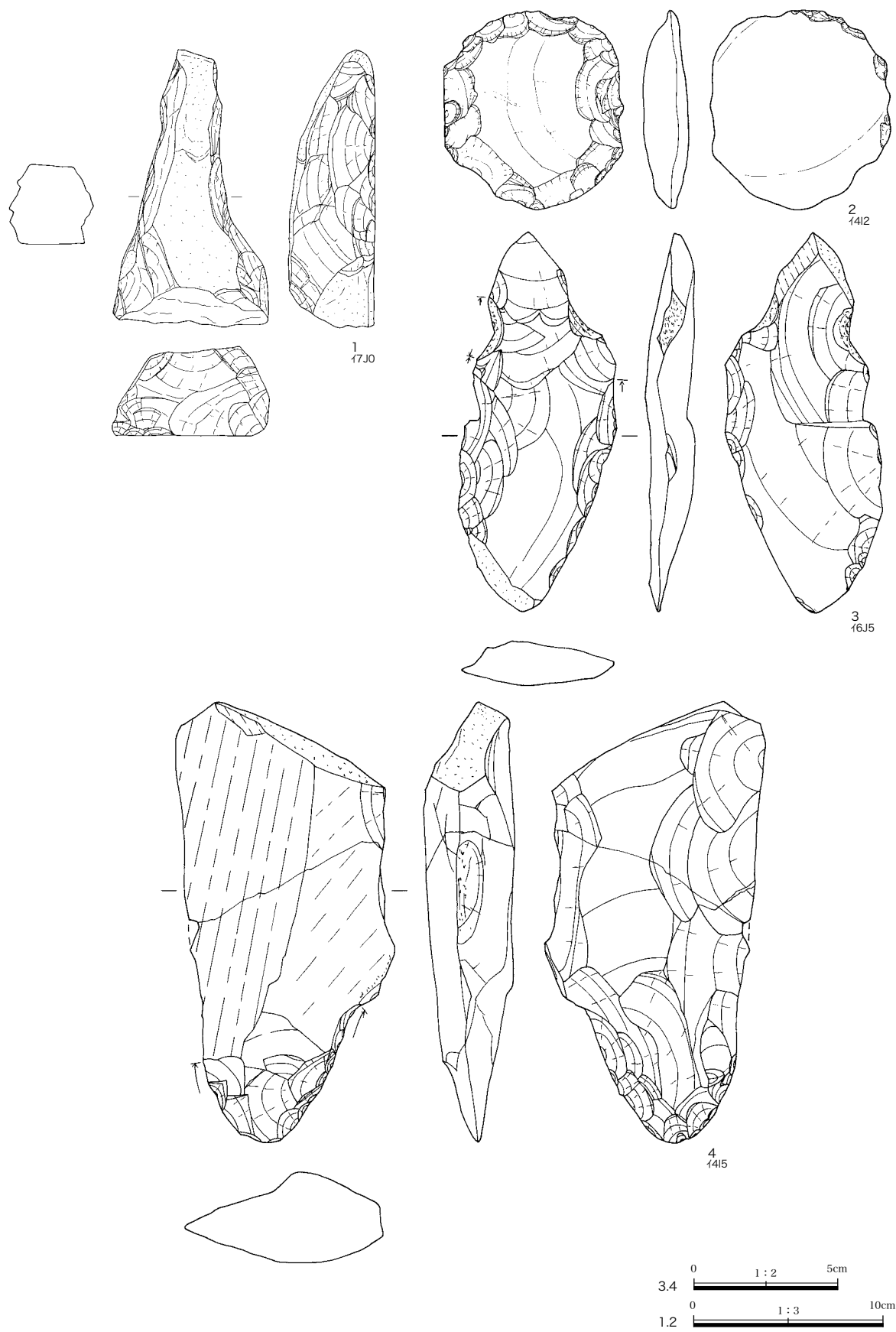
第285図3.4は礫器またはスクレイパーである。3は括れ部に敲打痕があり、打製石斧(未成品)の可能性もある。4はやや広い縁辺に二次加工で刃部を作出しているものである。

8. 石錘 (第286～292図)

石錘は総数で450点出土している。楕円形の礫両端を連繋するように溝が設けられるもの=有溝石錘と、紐かけ用の打ち欠き窪みが設けられるもの=礫石錘がある。特に後者で加工・剥離痕跡が殆ど無いものは自然礫との区別が難しいものも一部あるが、形態などから区別している。第286図1～第287図13までに住居跡出土資料を示し、以下で包含層・グリッド出土資料を示す。有溝石錘A類は両端を連繋する長軸間の溝が明確なものをA1類、短軸側にも溝が設けられるもの=十字形に溝が設けられるものをA2類とする。後者は第287図12.14～17までと数は限定される。更に短軸のみ溝が設けられるA3類の第290図7がある。A1類の中では大きさ・長幅比などに注意して配列している。第290図15以下はB類で溝が連繋されず切り込み状となっているものである。使用痕として連繋されているように見えるものもある。片面のみ連繋される例もあるが多く、それらはA1類側で扱っている。切り込みの深さや上下でややずれた位置に設けられ
(→P337)

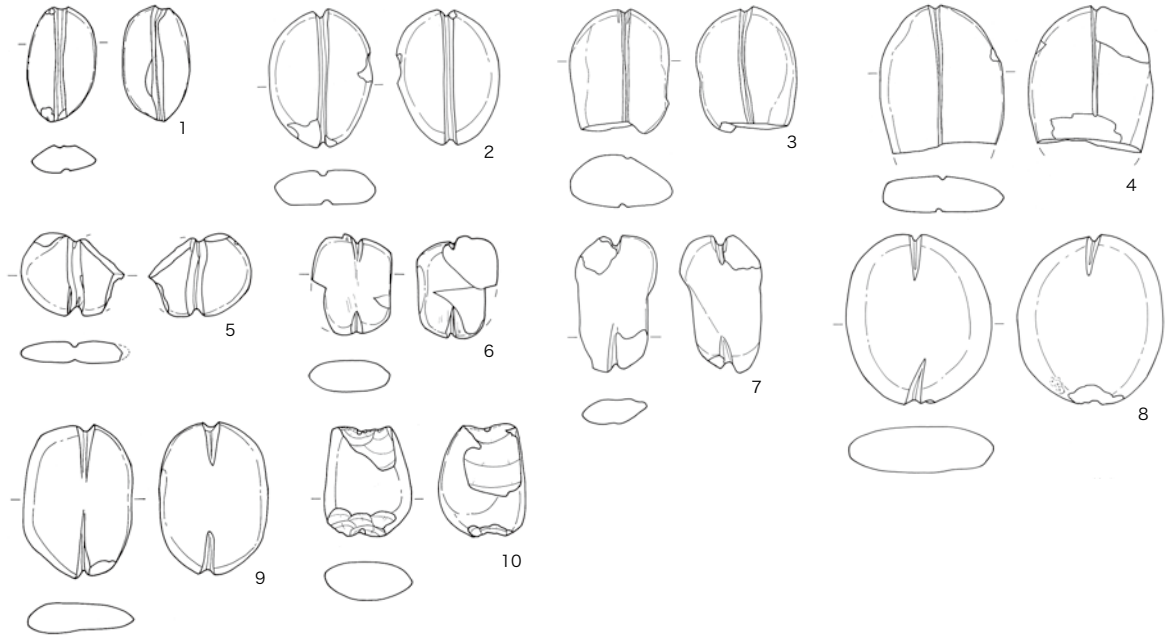


第284図 スクレイパー類

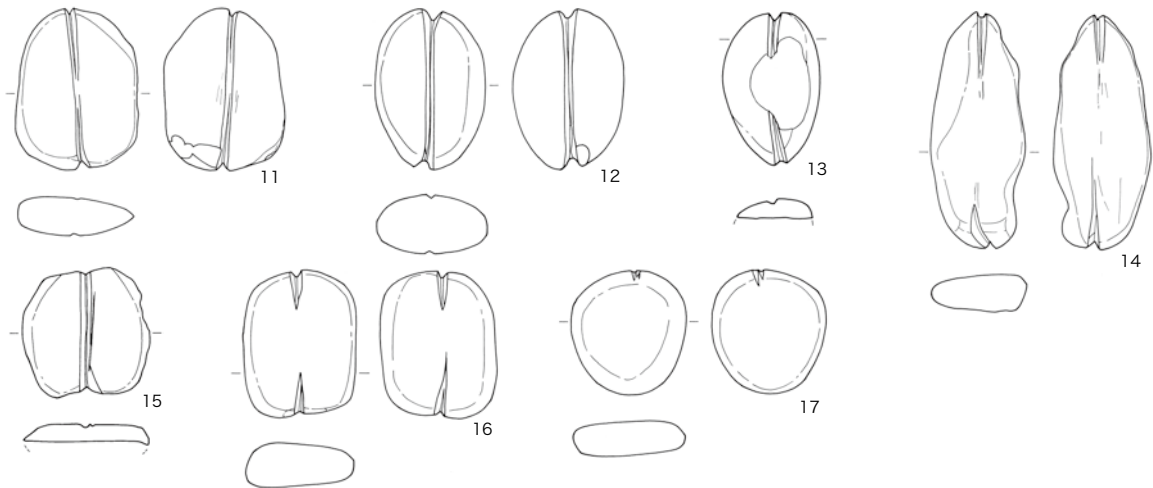


第285図 その他の石器

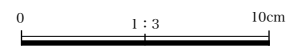
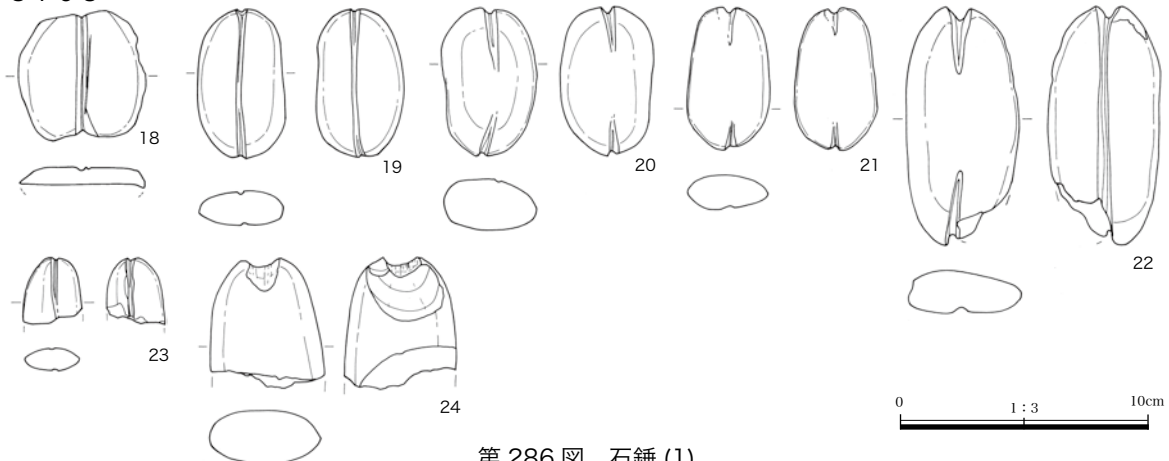
S 1 0 1



S 1 0 2

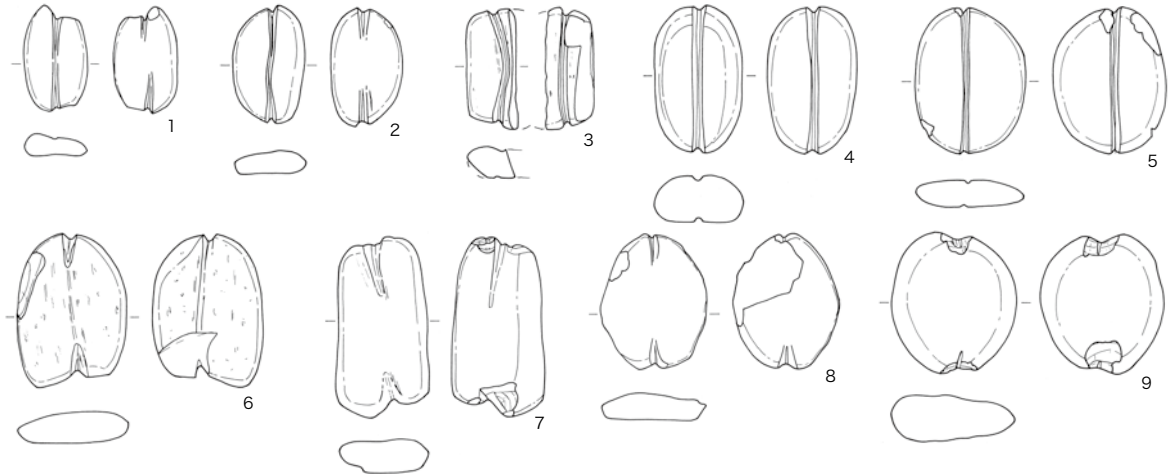


S 1 0 3

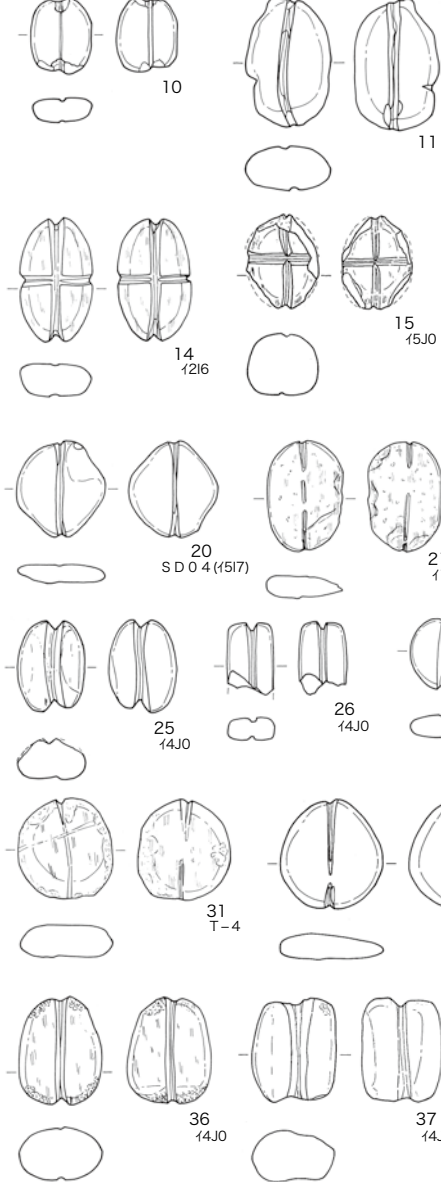


第 286 図 石錘 (1)

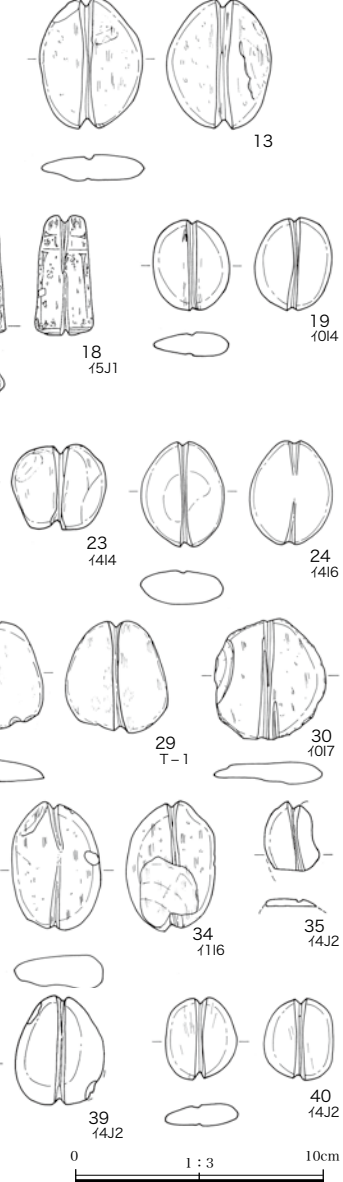
S I 0 5



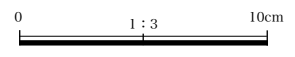
S I 0 6

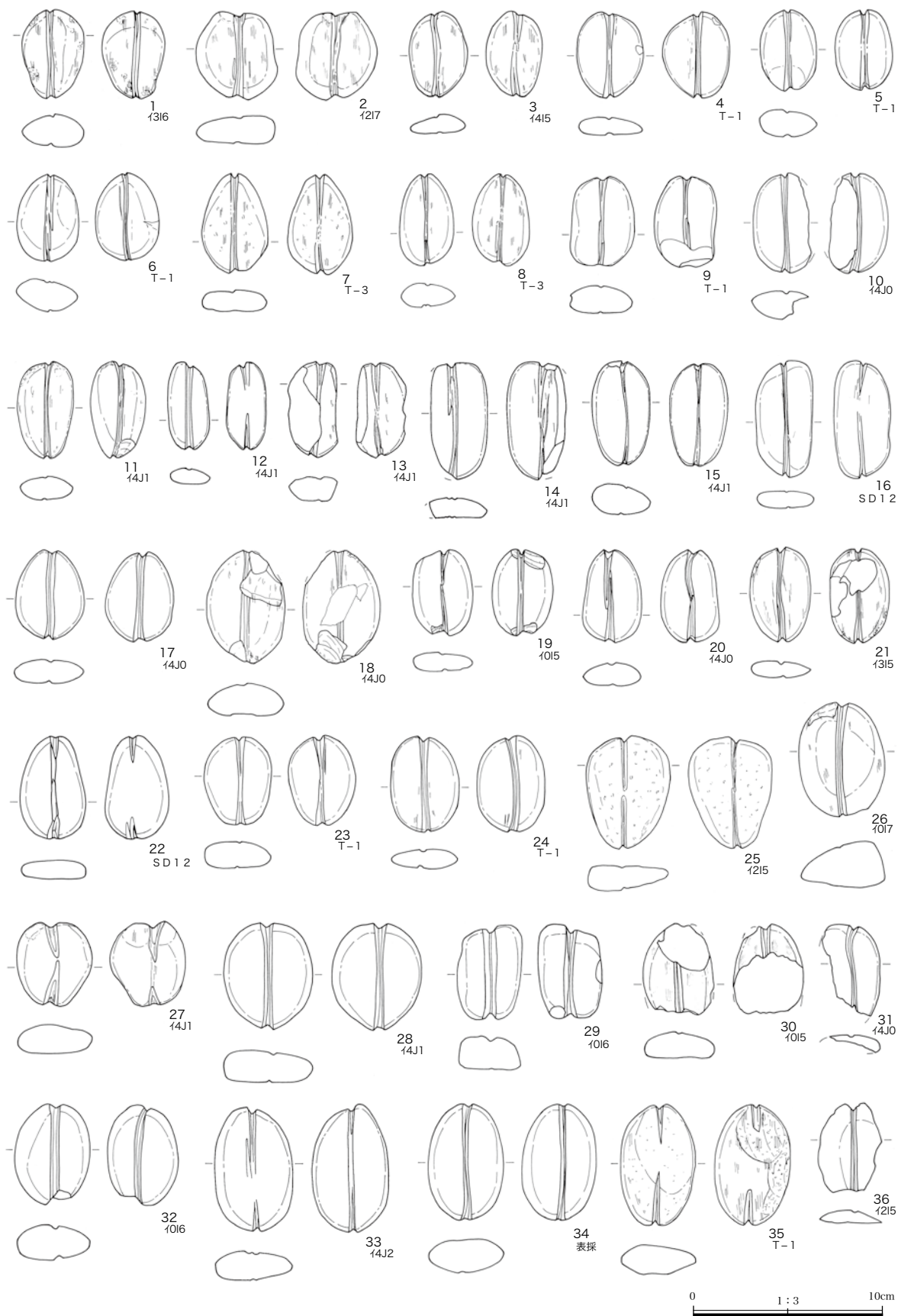


S I 0 7

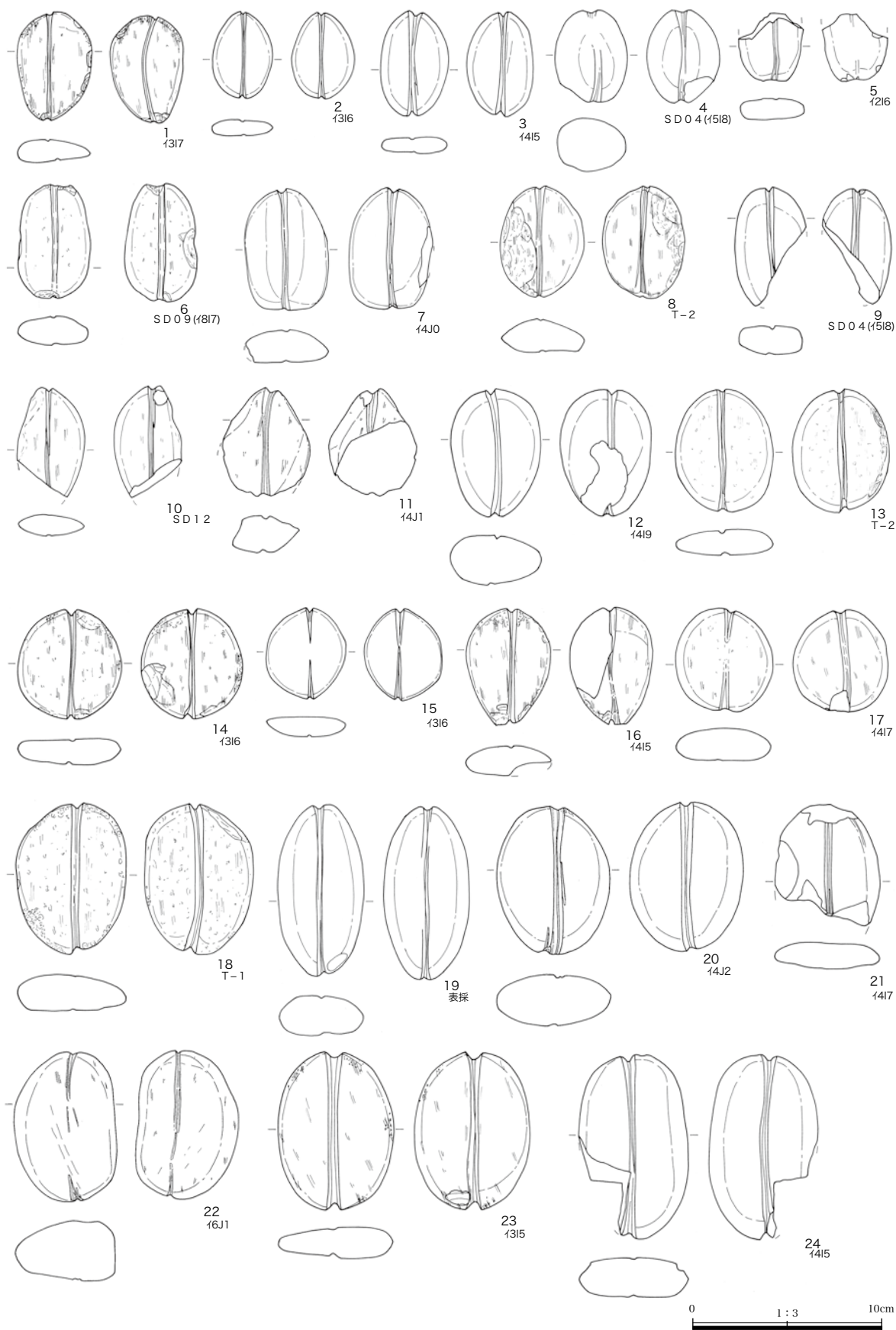


第287図 石錘(2)

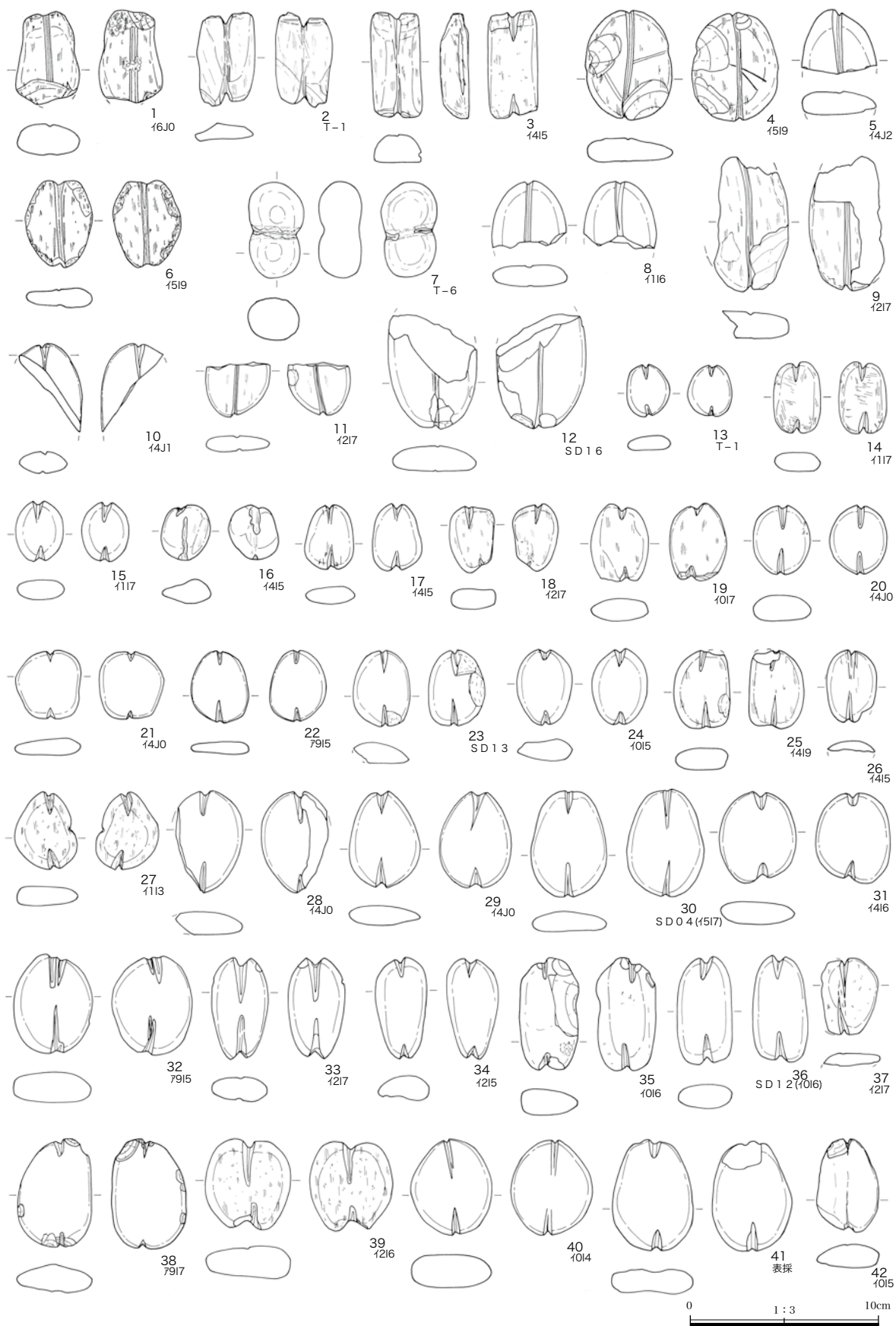




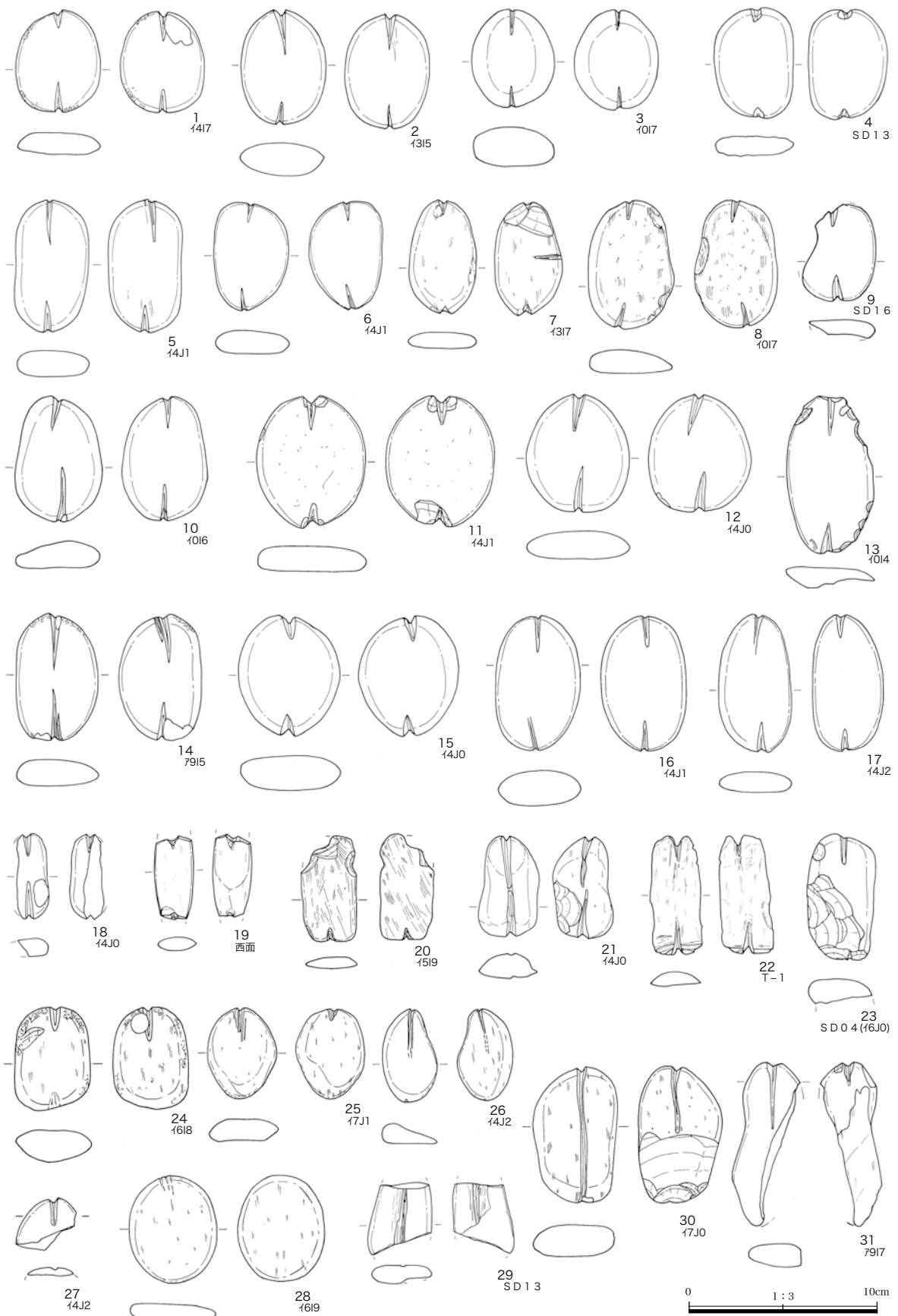
第288図 石錘(3)



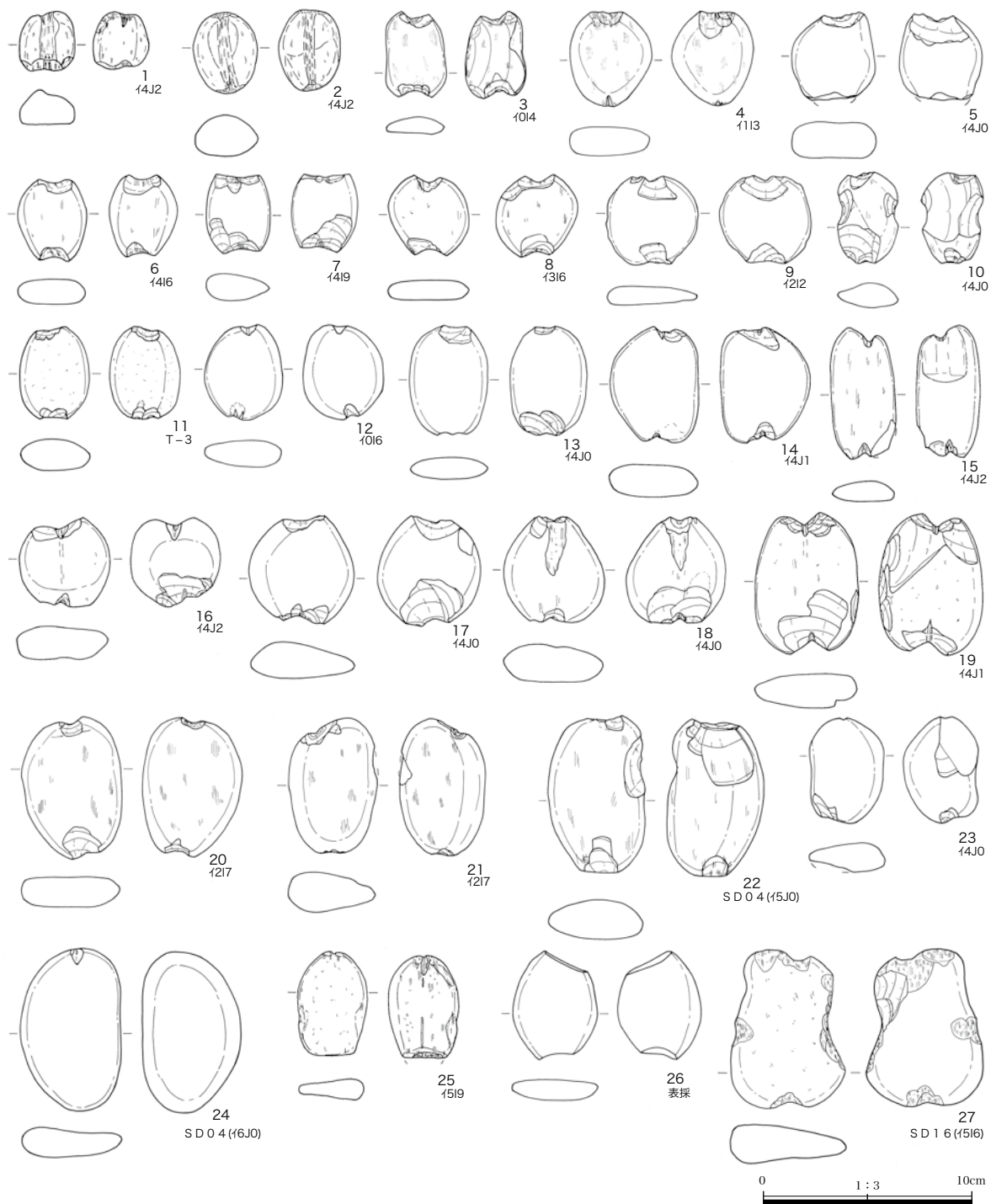
第289図 石錘(4)



第290図 石錘(5)



第291図 石錘(6)



第 292 図 石錘 (7)

るものなど、幾つの変異がある。第 292 図 1.2 はやや異質なもので、明瞭な溝や剥離は無いが、長軸間を結ぶ帯状部分がやや擦れているものである。第 292 図 3 以下は C 類とした打ち欠き・剥離加工の所謂礫石錘である。片側のみ打ち欠き剥離の 23.24 や短軸側にも剥離がある 27 など変異があり、後者は C 2 類としていた。1～数回の浅い剥離加工が殆どである。なお石剣類転用例が幾つかある（第 287 図 18 等）。

7. 打製石斧（第293～305図）

総数353点確認し、うち109点を示した。本来未製品の分析を始め、丁寧な整理と分類が必要であろうが、残りの良さなど当初図化用に選択された資料を主に示した。当初分類で「打製石斧ブランク」や「破片」とされた資料の観察は未了であり、これら未製品の検討・扱いによって点数も大きく変わる。少なくとも「ブランク」の点数は297点確認され、箱数を考慮すると500点を超える可能性がある。「破片」についても70箱程度の未チェック遺物があり、3000点位増える可能性もあろう。

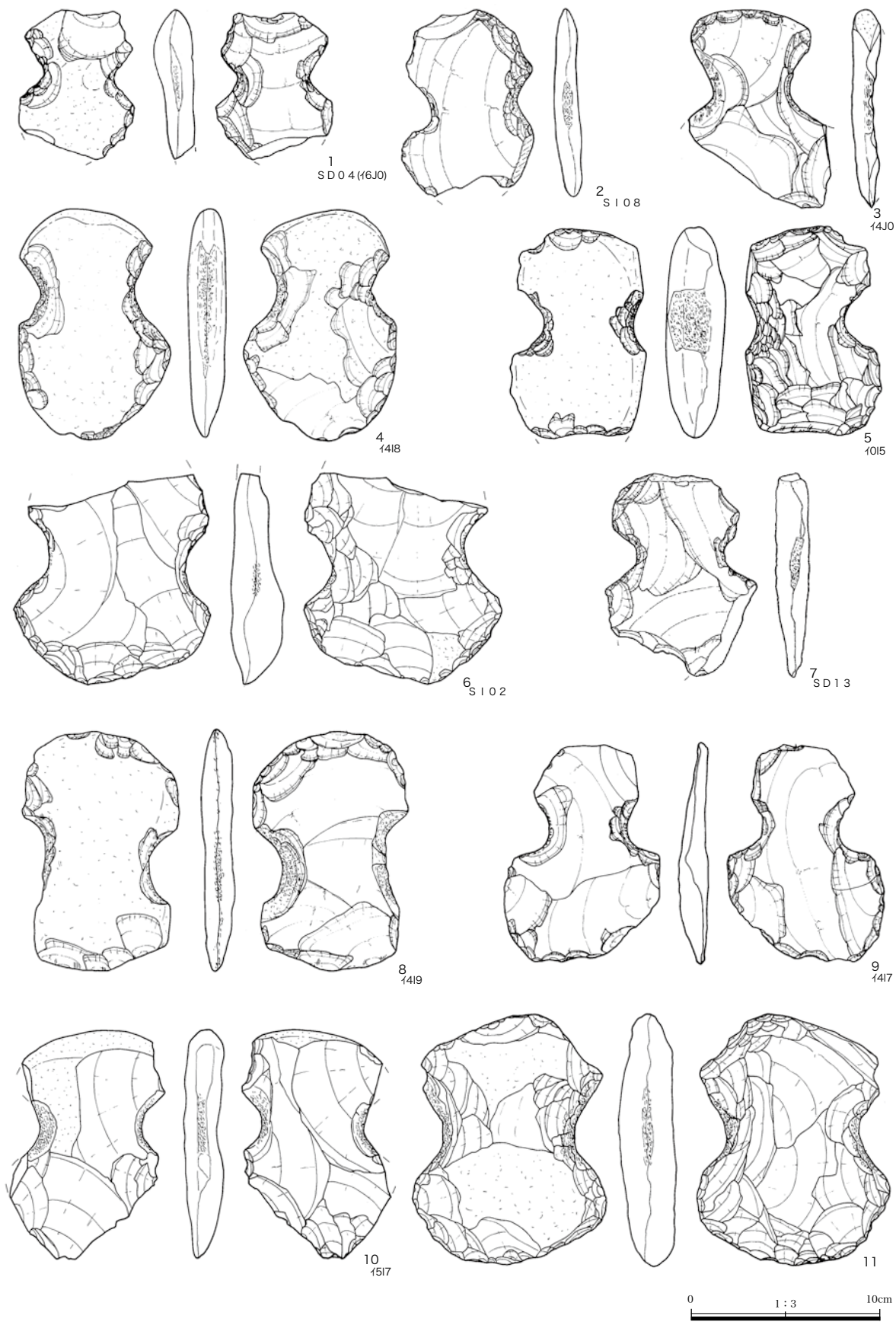
項目立てしての分類はしないが、全体形状、刃部の形態、括れ部敲打の形態、礫面の残り具合など、比較的注意すべき観察項目がある。全体形状は、原則分銅形であるが、刃部側がかなり幅広くなるもの、全体で細長いものなどの形態差を確認できる。また左右非対称となるものが多いが、中には比較的整った形態となっている例もある。本来技法に注目しての有意義な分類を行うべきであろうが、基本的に上記の形態差に注意しつつ配列するに留まった。石材ではホルンフェルス、安山岩、頁岩、流紋岩が主なものであり、基本的に鬼怒川流域で採集可能なものようである（第9章第4節参照）。

第293図は括れ部の握りが強いもの、第294～295図は括れが弱く直刃・円刃の例、第296図は片刃で非対称のもの、第297図には側縁が直線的になるものなど、第298図は撥形に近く下方が広がるもの、第299図は撥形～分銅形の間mediateなもの、刃部が大きく広がるもの、第300図も同種で大きめのものなど、第301図は縦長のものや側縁直線的なものなど、第302図には刃部欠損で不明なもの、刃部の敲打痕顕著なもの、以上を原則として示した。第303図は全体に剥離加工少なく、括れ部敲打以外加工の少ないもので、未製品の可能性もある。第304図、第305図1～4は未製品である（途中で放棄の例も多）。ここでは礫器やスクレイパーの可能性もあるものも含み、括れ部敲打がある例や縁辺使用痕あるものも含む。第305図5.6は当初分類で打製石斧になっていたこともあり便宜的にここに示したが、打製石斧とは考えにくく、礫器またはスクレーパーとする。6は独鈷石未製品の可能性もあろうか。

第300図2.5や第303図5のように、刃部作出の二次加工をあまり行わないままの例が幾つかある。第303図1.3、第305図3.4などのように打製石斧として良いか問題を残すものもあるが、これらにおいても括れ部の剥離加工・作出及び敲打痕は比較的明瞭であり、この部分の工程を先行的とする例があることを示唆している。未掲載の「未製品」の中にも刃部不明瞭ながら敲打痕が明瞭なものも多く、また括れ部近辺での折れ欠損により製作を放棄していることを窺わせる例も比較的多く存している。また左右側縁から先端に至る角度が急で、刃部がU字状～V字状となる例＝円刃や直刃からは程遠い例が幾例か観察される。

未製品ブランクの形態では、第304図5、第305図1.2のように一端部が鋭角な例が幾つか見られる。礫器やスクレイパーとの区別・判断を迷う例もあるが、第300図や第301図中に示したようなやや縦長の平面形状で、刃部平面が鋭角的に尖る例もあること等から多くを打製石斧未製品として扱った。ここで示した中にも、完成品を目標としたものと、形が整わず、或いは折れて放棄している例とがあるように見える。

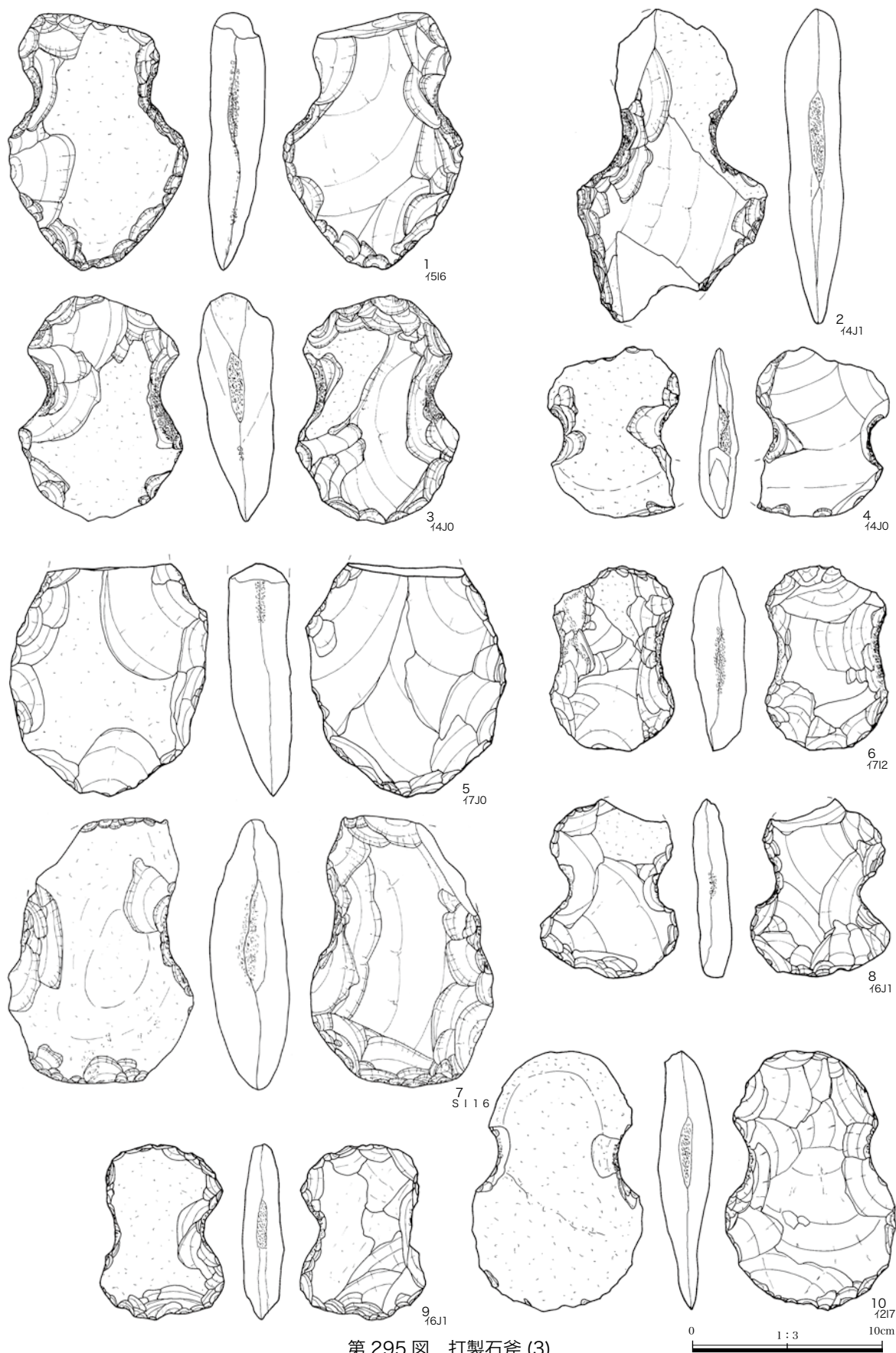
表に掲載し確認した限りの未製品類の観察では、括れ部から横方向での折れ欠損例が多く認められる。括れ部を打点とした折れ欠損のように見える。それらの多くが敲打は入念に為されているが刃部の作出が不十分なものが多い。つまり折れる可能性を考慮してか、一定の形態作出が為された時点で、括れ部の作出＝剥離加工及びその部分への敲打が先行的に行われ、その後刃部の二次加工など刃部作出に至っている例があることを示唆している（第305図3等）。図の提示もなく感覚的な所見であることから、今後の詳細な観察と検討を必要としよう。



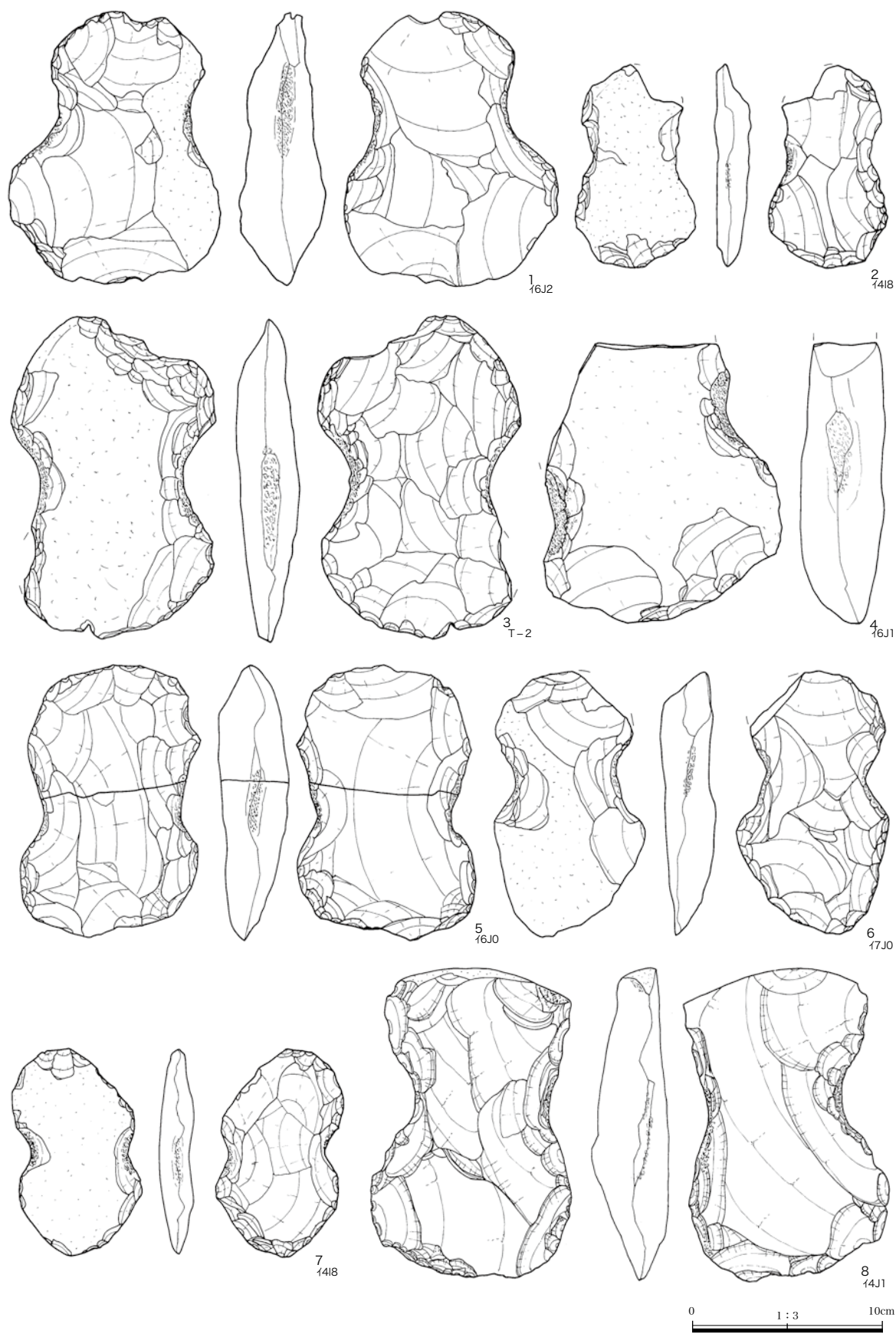
第 293 図 打製石斧 (1)



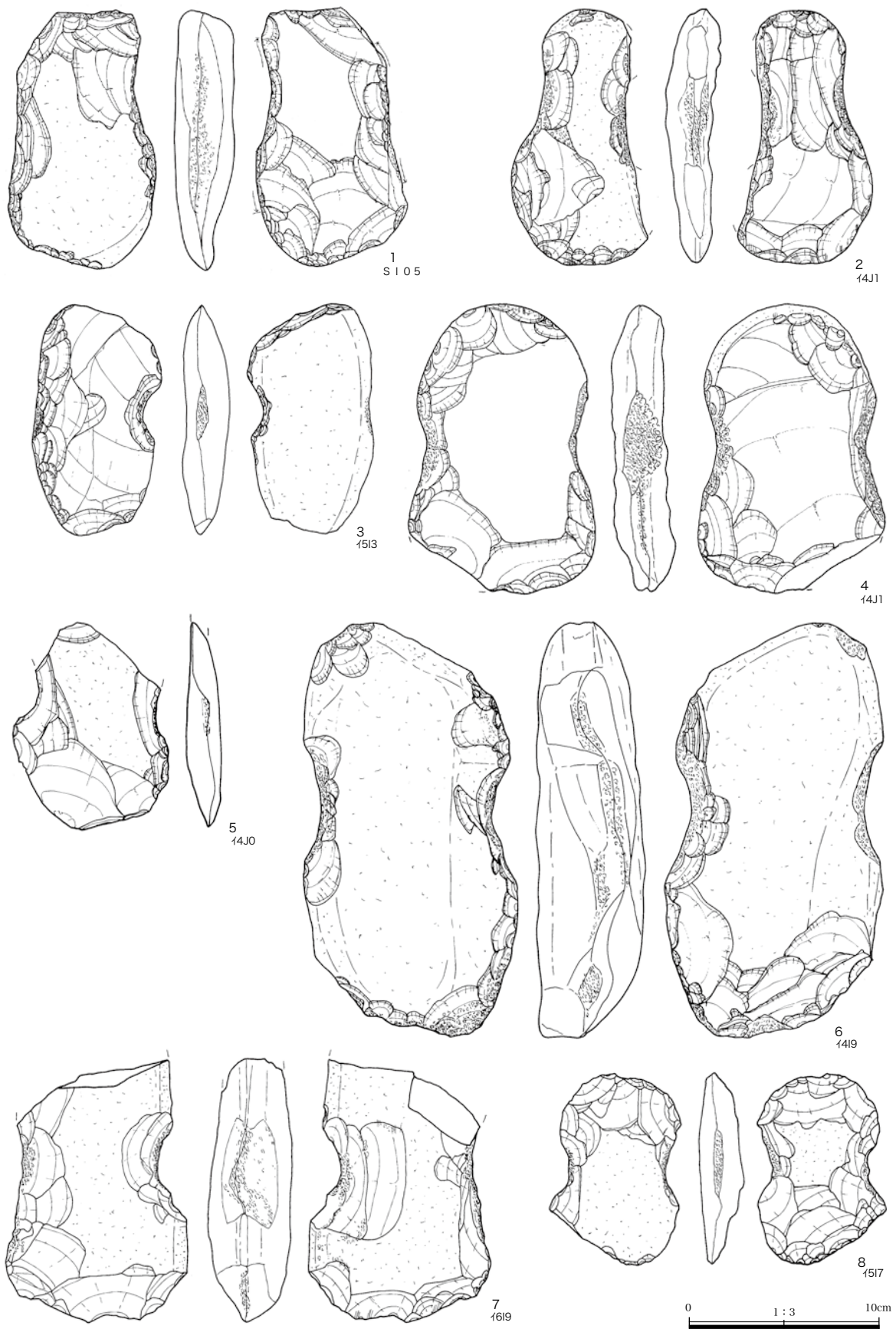
第294図 打製石斧(2)



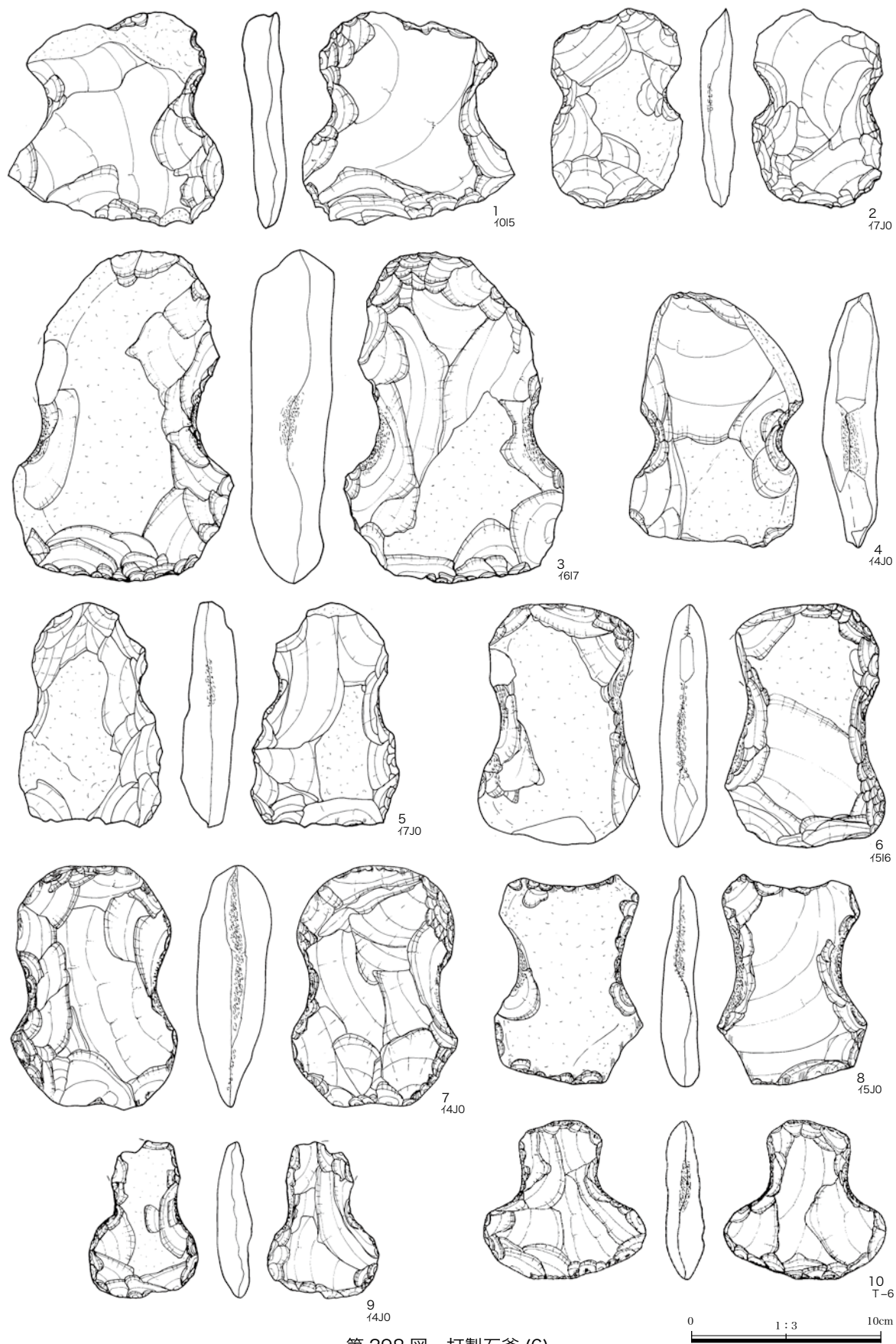
第295圖 打製石斧(3)



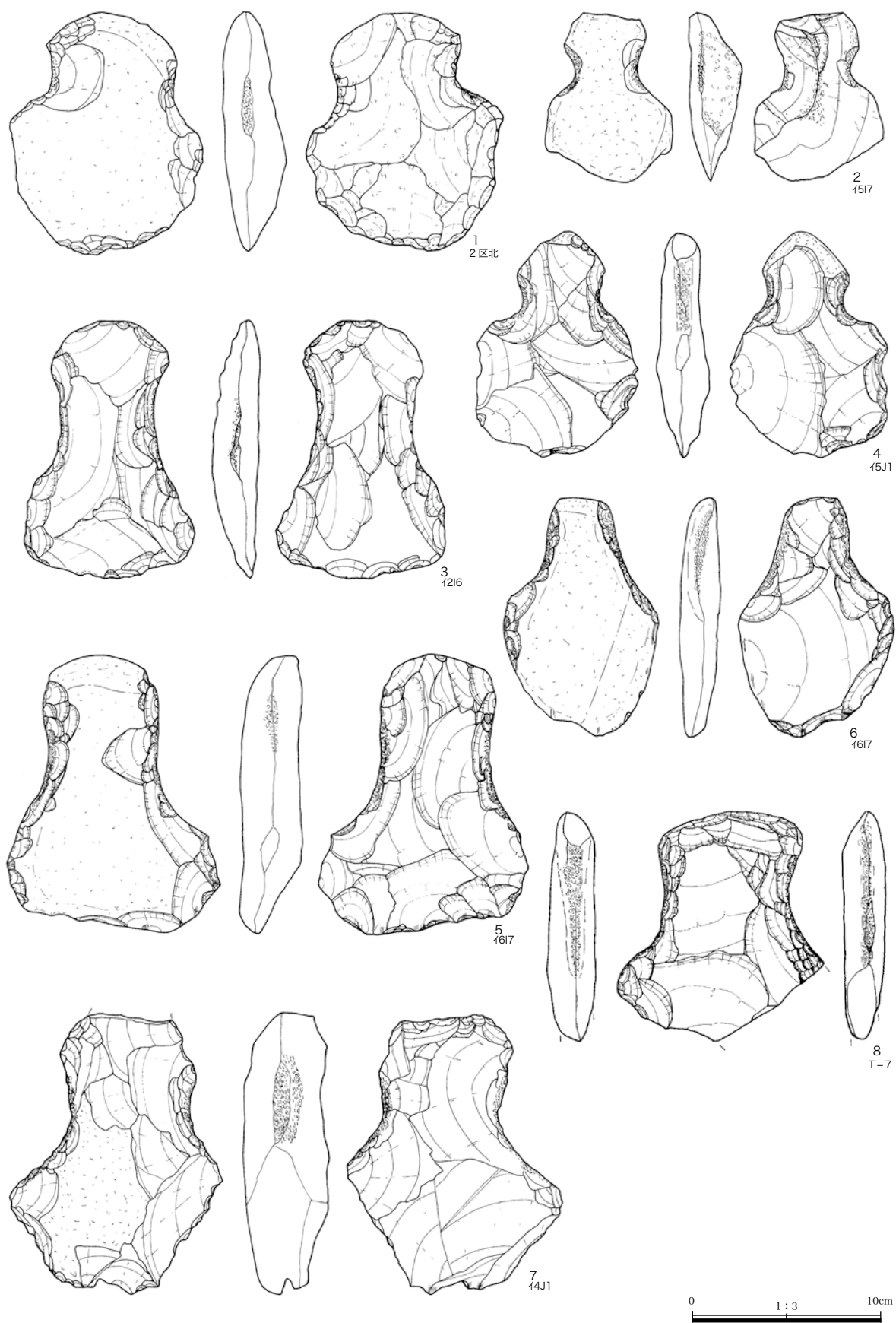
第296図 打製石斧(4)



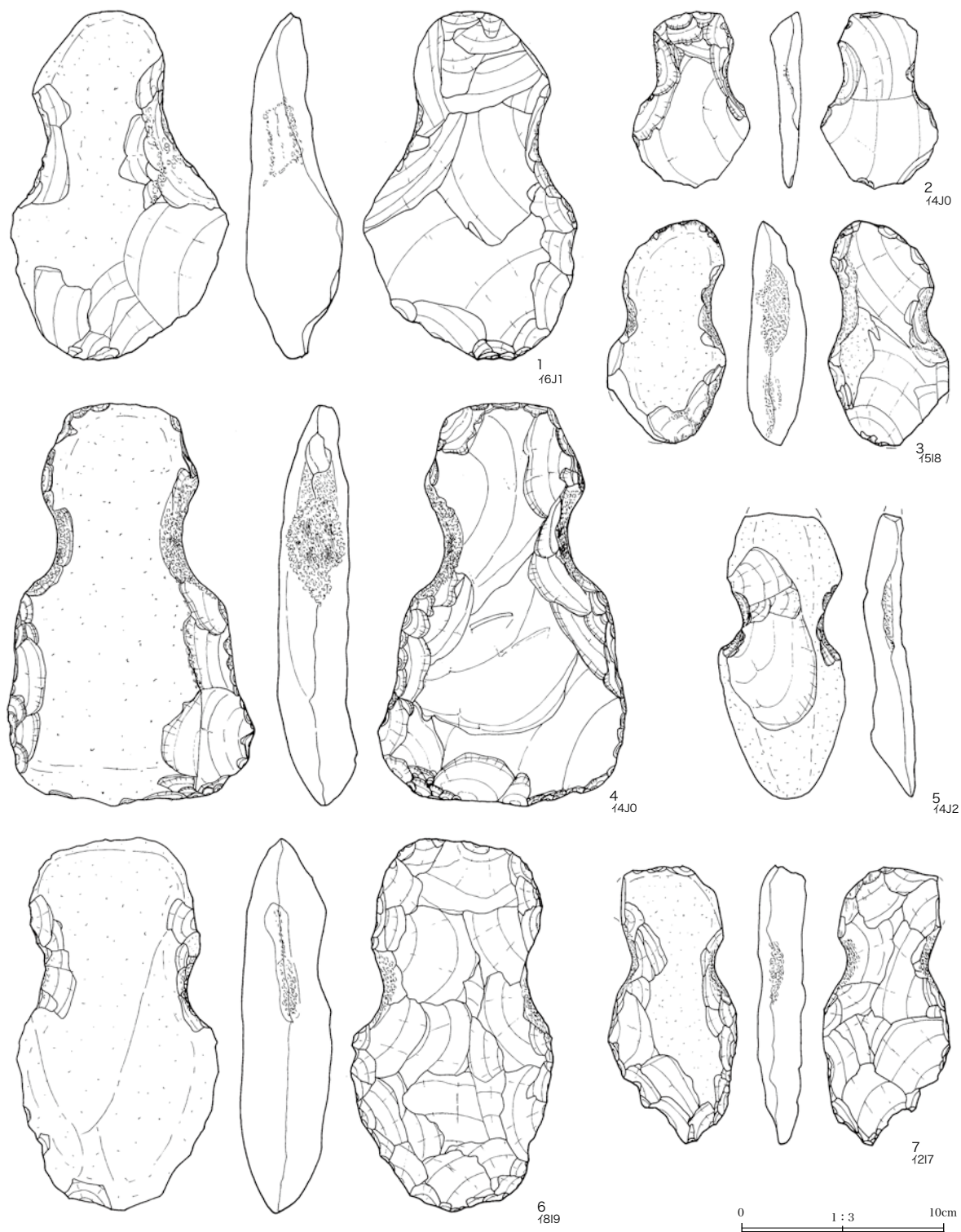
第297図 打製石斧(5)



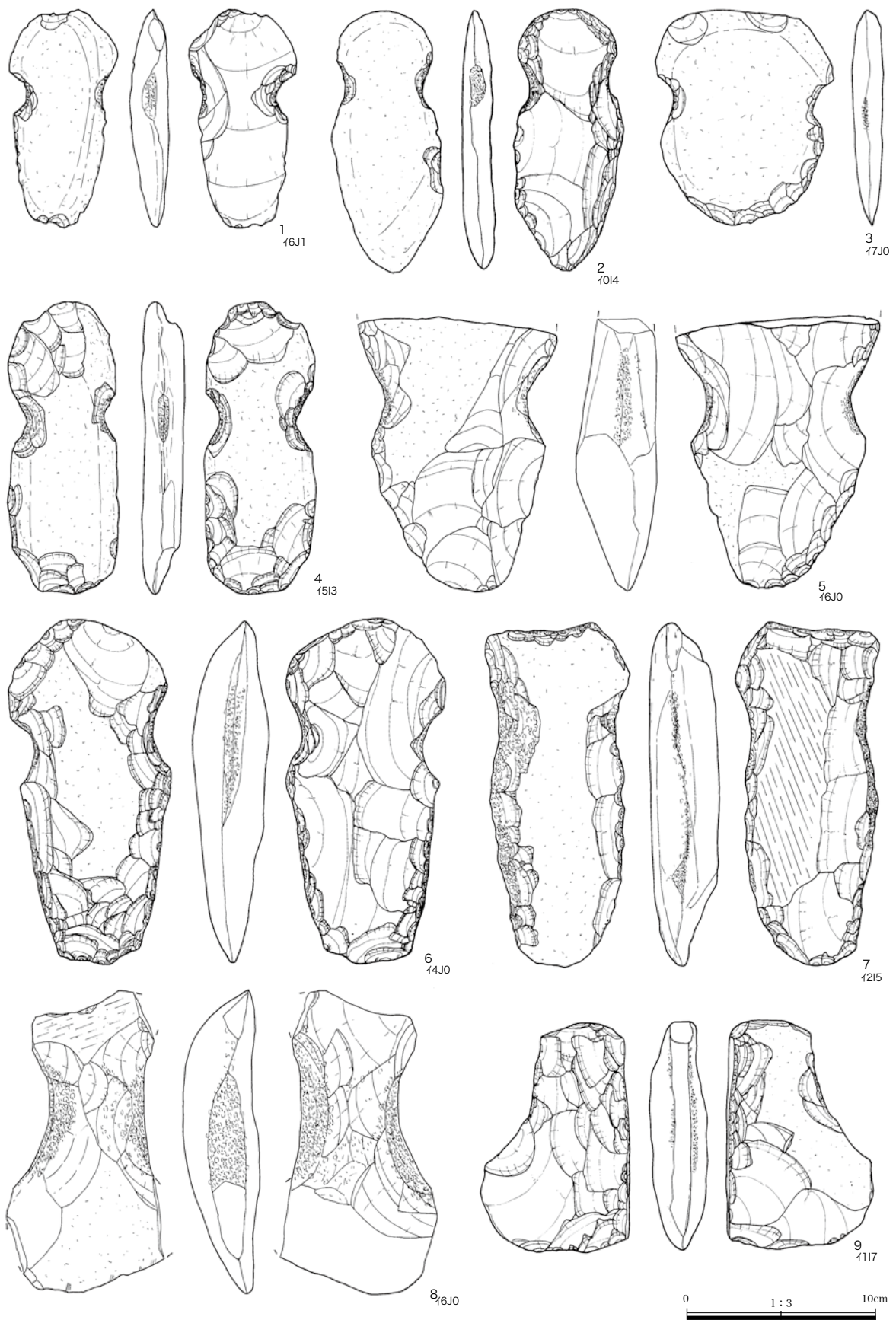
第298図 打製石斧(6)



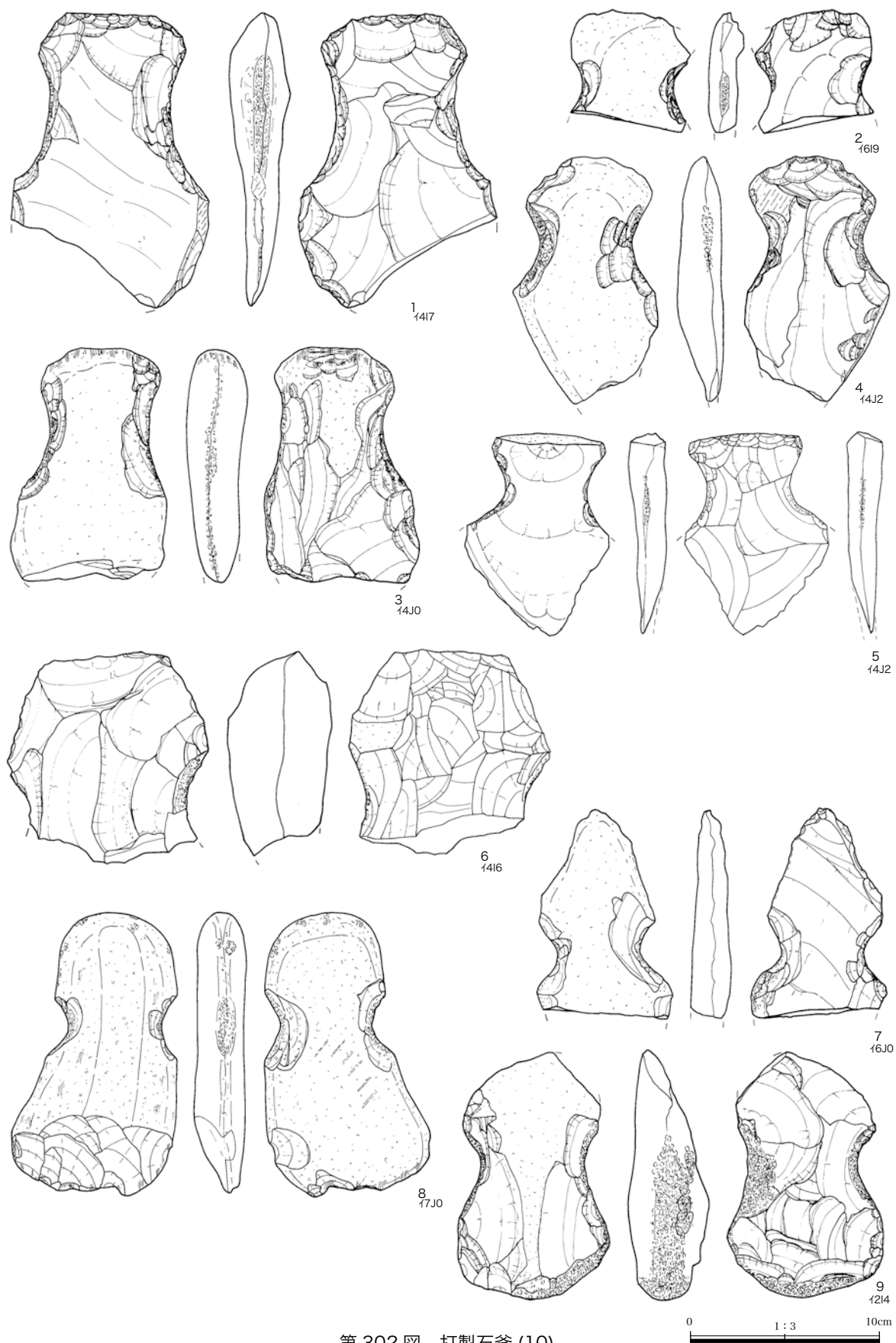
第299図 打製石斧(7)



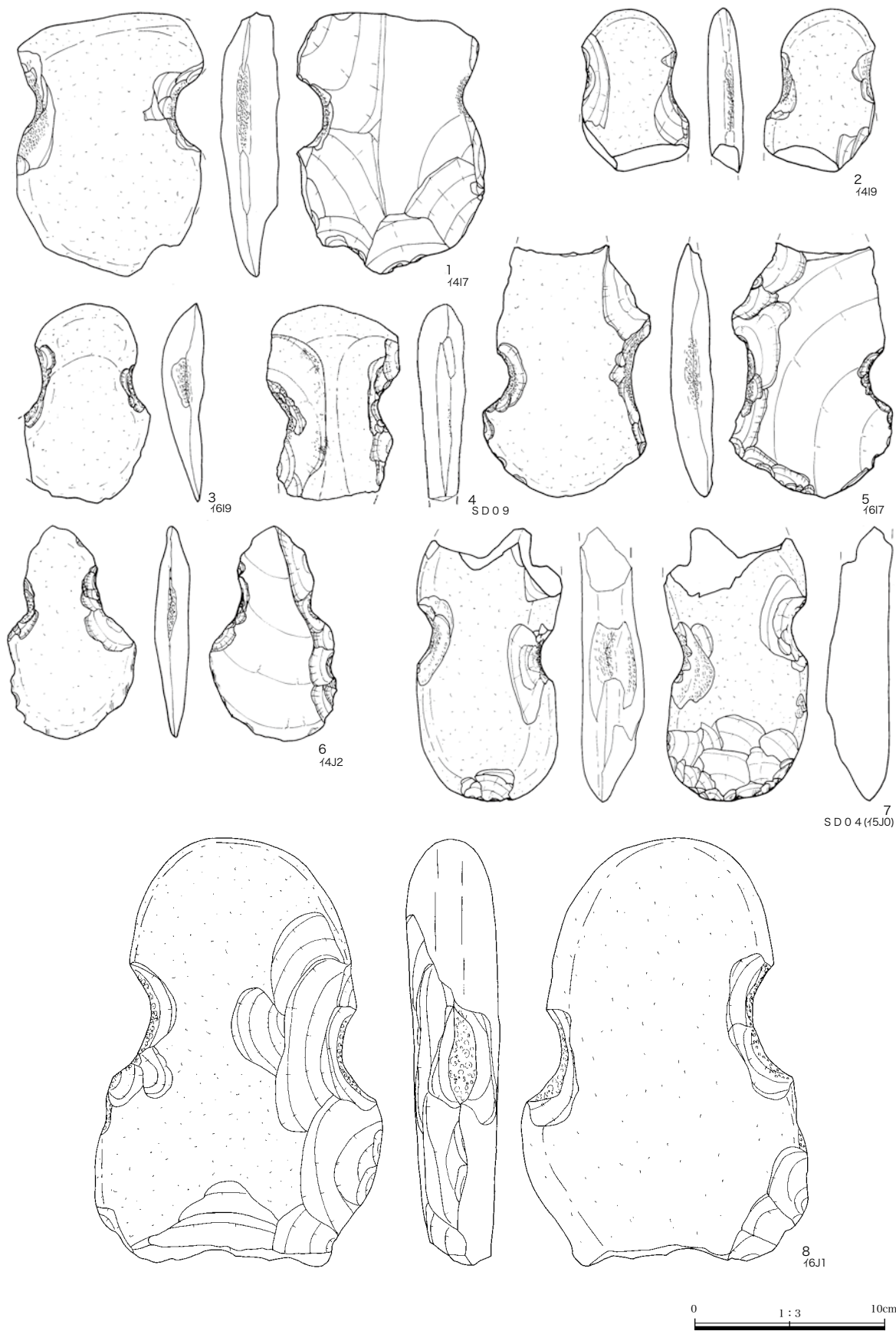
第300図 打製石斧(8)



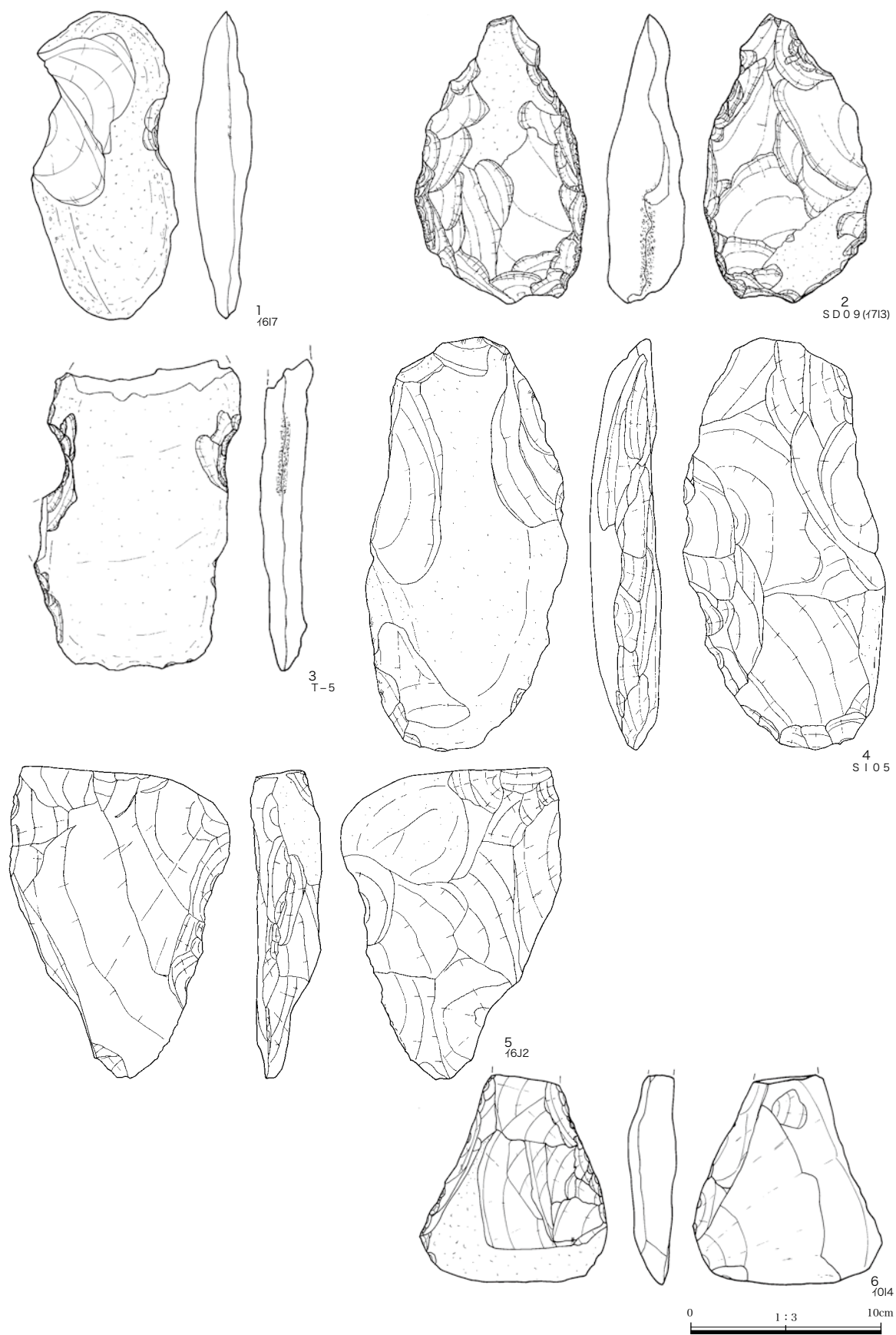
第301図 打製石斧(9)



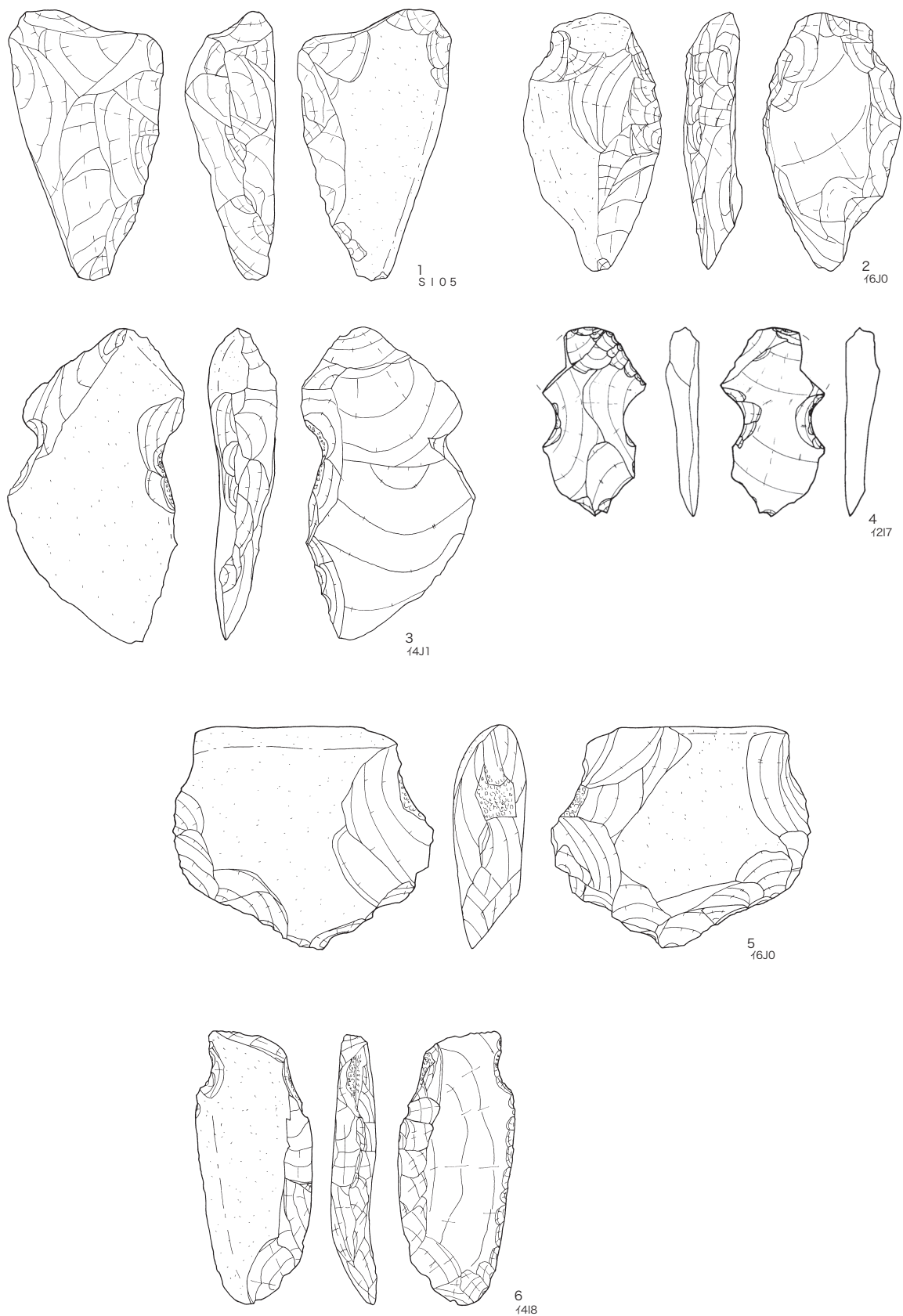
第302図 打製石斧(10)



第303図 打製石斧(11)



第304図 打製石斧(12)



第 305 図 打製石斧 (13)

8. 磨製石斧（第306～316図）

刈沼遺跡第1次調査区から総数204点が出土している。うち59点を未製品とした。未製品では打製石斧未製品でカウントされているものもあり、確定的な数ではない。破損欠損例も多く、完存例はさほど多くはない。石材は緑色岩・閃緑岩などとされているものが多いようである。小・中サイズの例は蛇紋岩類似のものなど、緻密質の遠隔地石材が多いように観察される。なお全体に被熱例が多いことも注目されよう。

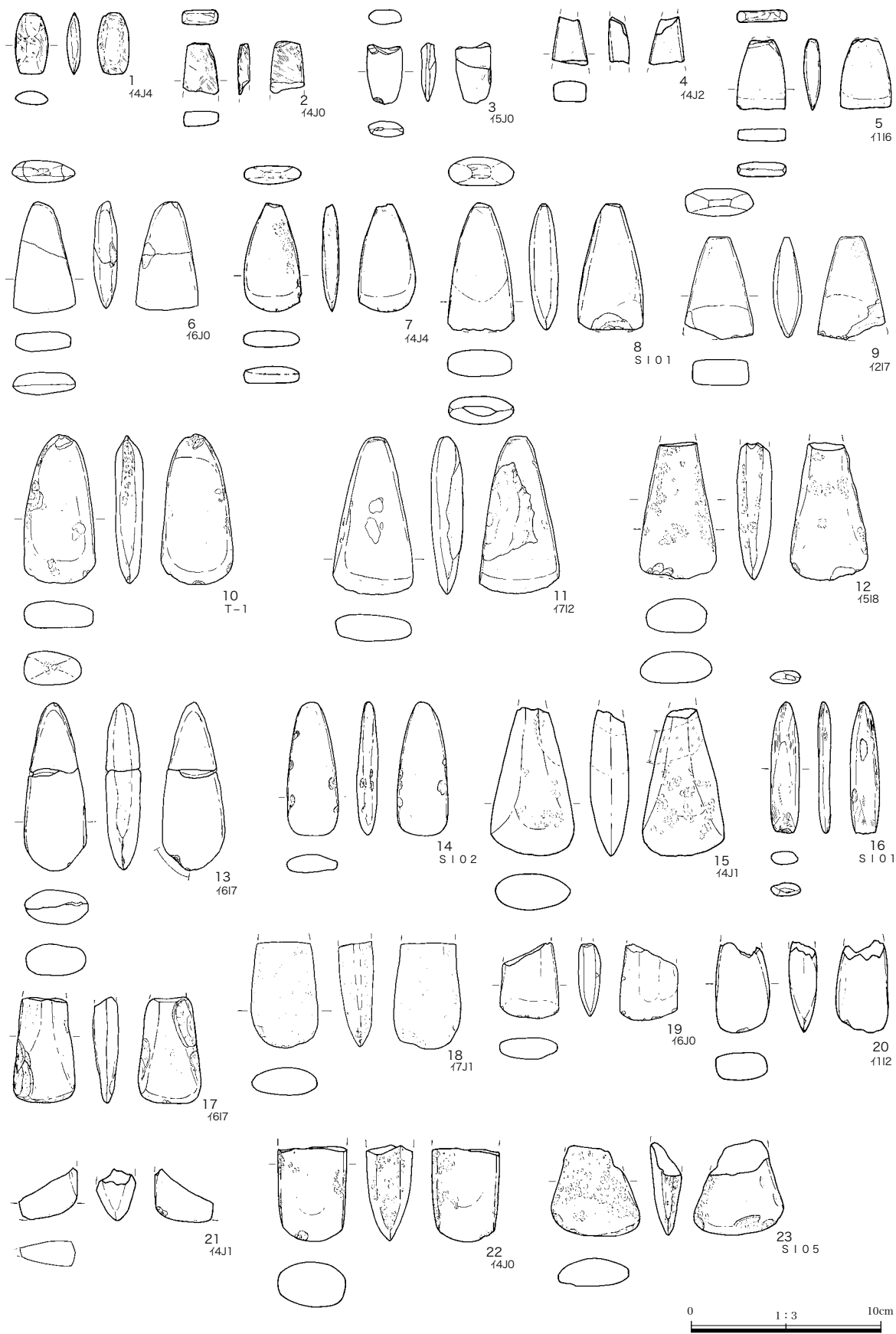
磨製石斧についても、本来形態・製作技術などからの分類と分析をすべきであるが、現段階では行い得なかった。平面形状は基本定角式だが、断面円形～楕円形の乳棒状に近いものもある。感覚的な比較・印象だが、定角式でも厚みのあるものが多いように思われる。整理当初ではサイズの違いで小中大での分類が行われた。第306図に示したものが小・中サイズのもので、非在地石材を素材とし丁寧に研磨されたものが基本である。第307図1～4もこれに加えて良いかもしれない。厚みも少なく扁平で頂部はかなり狭い面、或いは面を持たないものが多い。石材とも関わるであろうが、研磨線状痕が明瞭に残るものもある。刃部での摩滅・微小剥離も比較的多く観察することができ、小サイズながらも基本的に使用していることが分かる。整形時の敲打痕を少し残すものも多い。

第307図5以降がサイズ大の例となるが、中でも第308図4.6などは本来の推定長20cmを超える大きさであり、区別した方が良いかもしれない。第309図までの刃部などで比較的遺存部分あるものから、本遺跡に於ける一定の形態の特徴や多様性が窺えよう。第308図3のように上位では敲打痕跡を残す例も、刃部で刃こぼれ・使用痕を観察できる。第311図5は割れ口の上端や剥離がある側面抉り部で顕著な敲打痕を認めることができるもので、欠損後再生の可能性がある。同図12.13についても同じく割れ口上端や割れ面で顕著な敲打痕があり、再生若しくは転用と言える。12は側面や刃部部分でも敲打痕顕著で、折れた端部の敲打再生、或いは敲き石への転用と考えた方が良いかもしれない。第311図11も異質で独鈷石転用との指摘がある一方、独鈷石の先駆的な形態としてこのような形態例の存在を指摘する教示もあった。

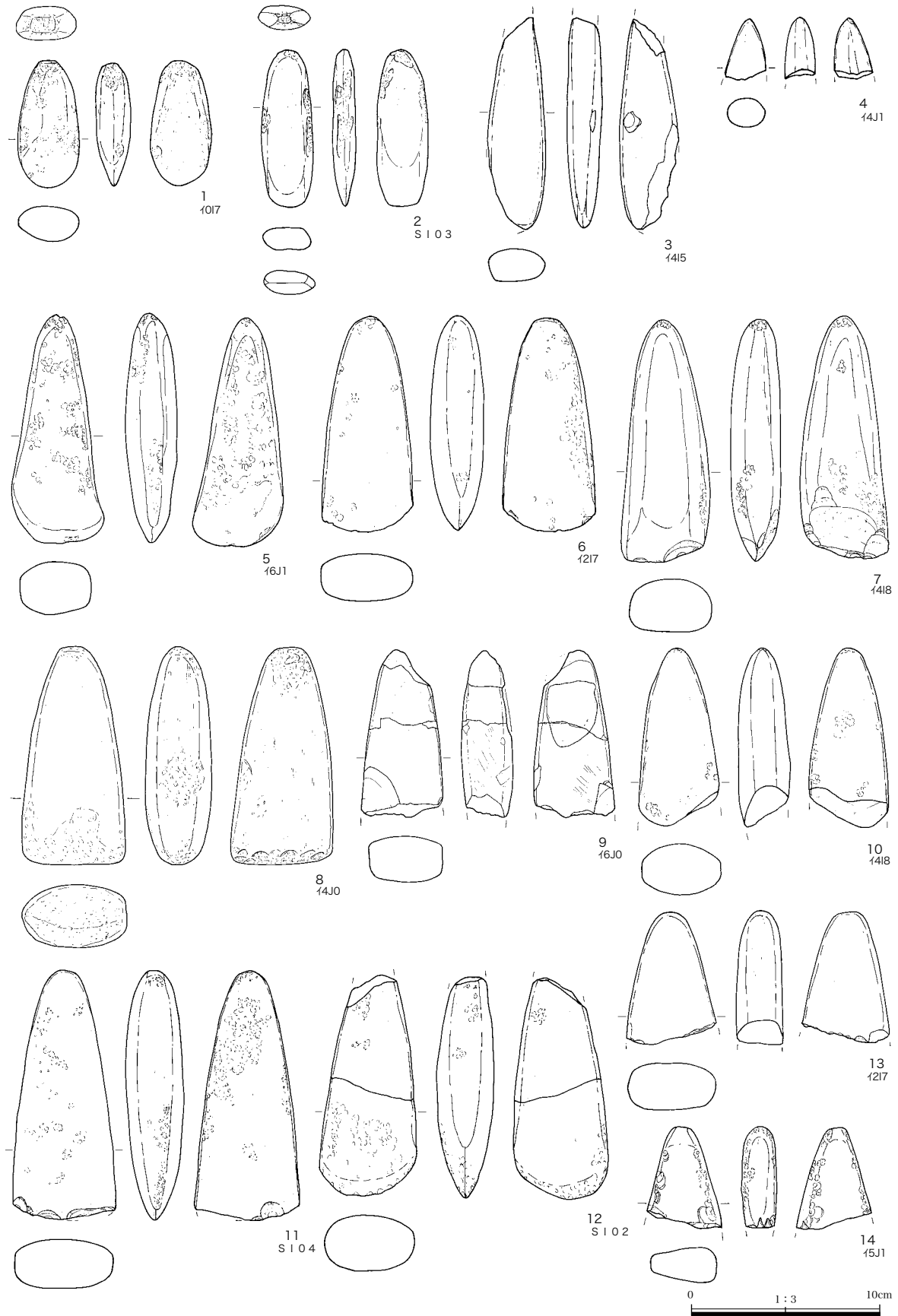
検討が必要であるが、第312～316図に「未製品」を示す。総じて大形の例が目立ち、第306～307図のような小中サイズの成品製作に関わる未製品はほぼ見ることができない。剥離→敲打→研磨を基本とするが、各段階が製作工程の際に独立的ではなく、剥離未了ながら敲打や研磨を行うものや、あまり剥離工程を経ず原石礫面を活かす形で敲打整形をおこなっていく第312図5や第314図1.3のような例もある。便宜的な区分ではあるが、第312図1～5、第315図1が剥離～敲打段階と推定される未製品、第313図4～6、8.10.11、第314図1～5は中位～最終段階に近いものである。一部研磨工程が捉えられるものもある。第312図4のような接合例や第312図2、第313図4.5.7のような欠損例からは、敲打製作時に折れて放棄している例が一定数あることを推測させる。

なお敲打痕を残すものでも刃部の微小剥離など使用痕を観察できるものがあり（第308図3、第309図4.5.6等）、全面丁寧に研磨を経なくても製品として使用していることが明らかである。第311図4.7等も同様に製品と判断される。また、当初打製石斧未製品で扱った中でも、同種の形態や痕跡が確認されるもの＝敲打痕が広く及んでいるものがあり、石材の問題も含め、よりいっそうの検討が必要となろう。

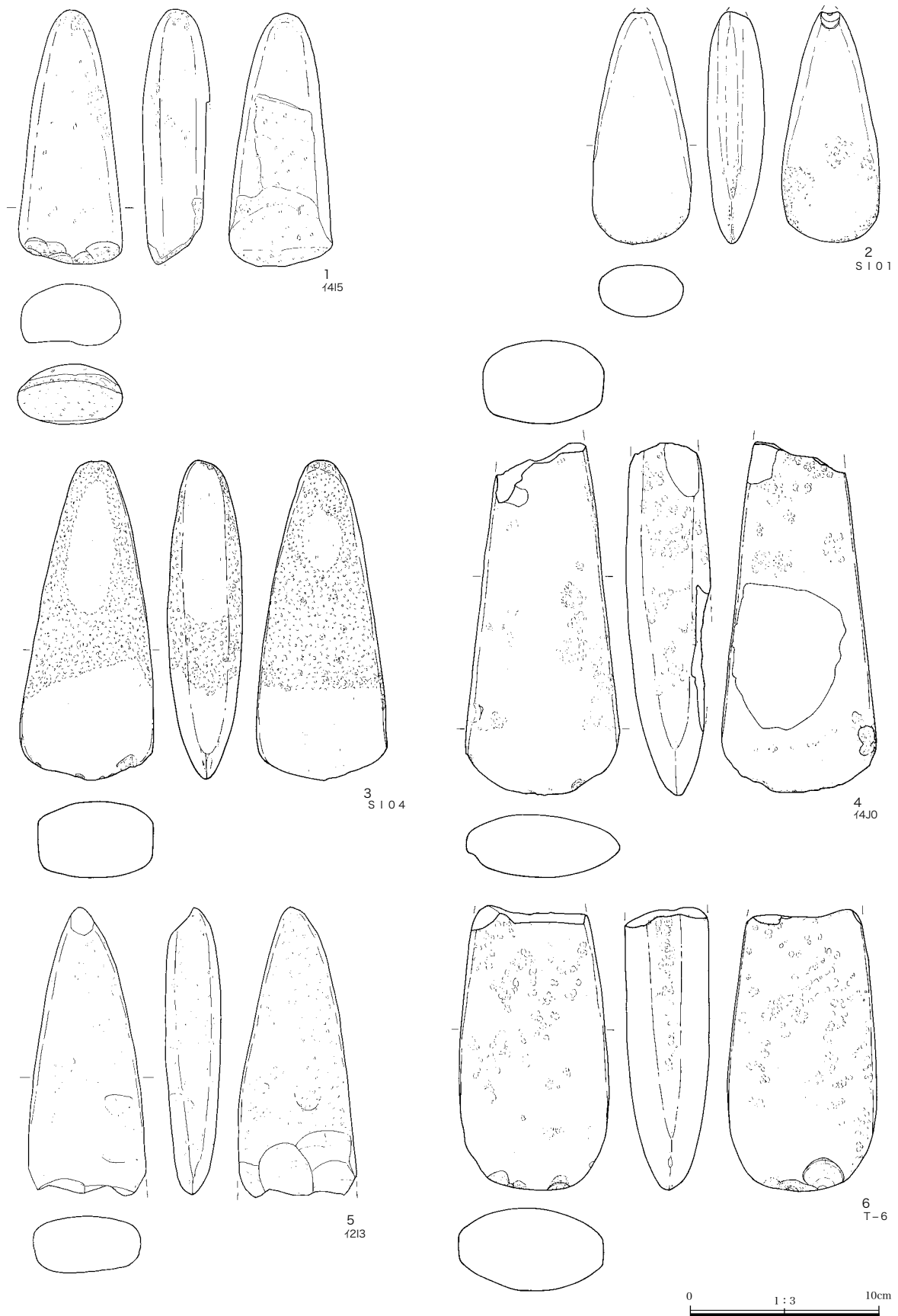
なお第314図6は下端刃部状の形態等から磨製石斧と判断したが、石剣類の可能性も残る。第316図4は当初使用痕ある剥片として分類していたものだが、石材の共通性からここに含めた。これを素材としてさらに剥離することを目的としたものか、分割された剥片の縁辺を若干加工し使用を目途としたものか、良く分からない。



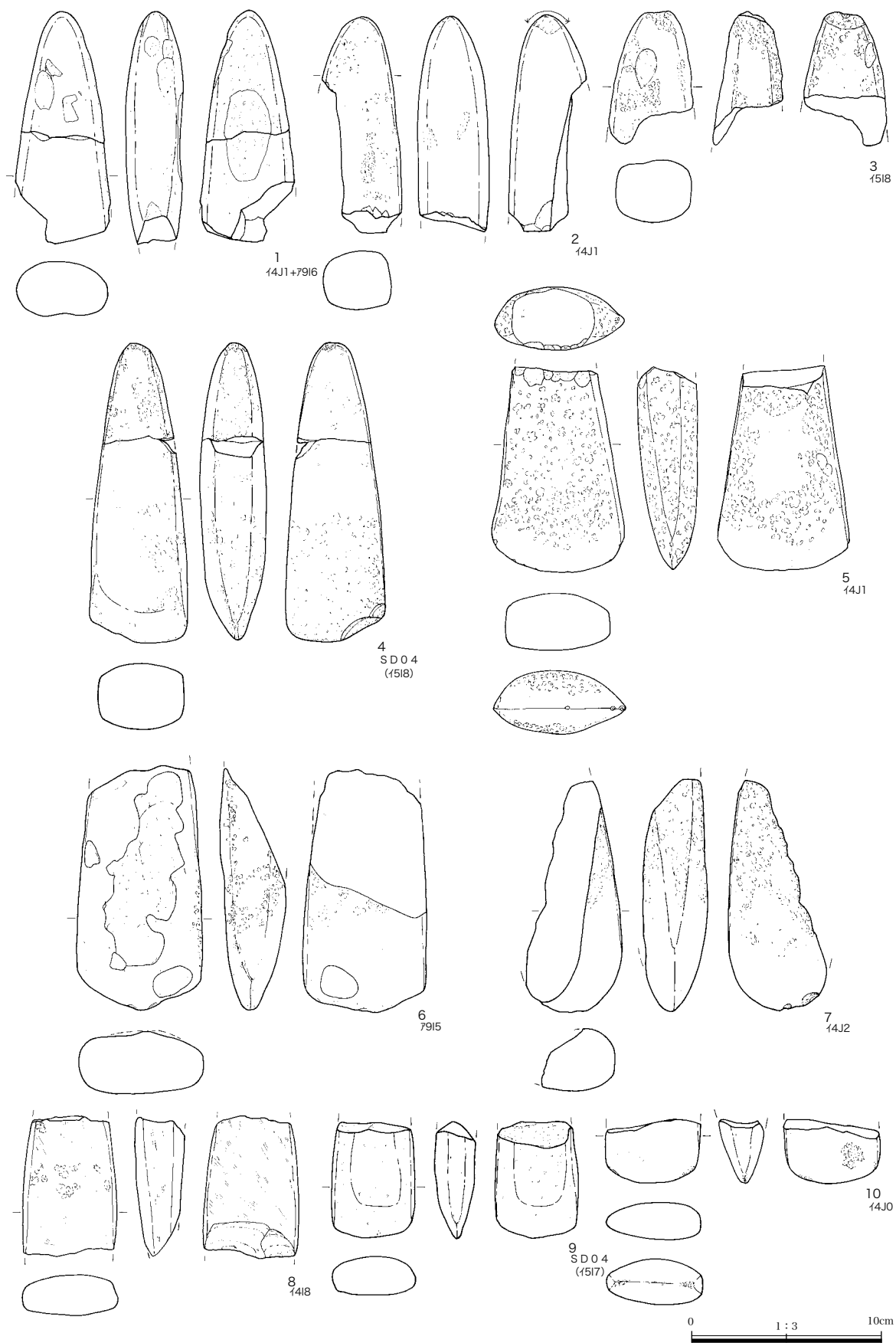
第306図 磨製石斧(1)



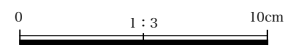
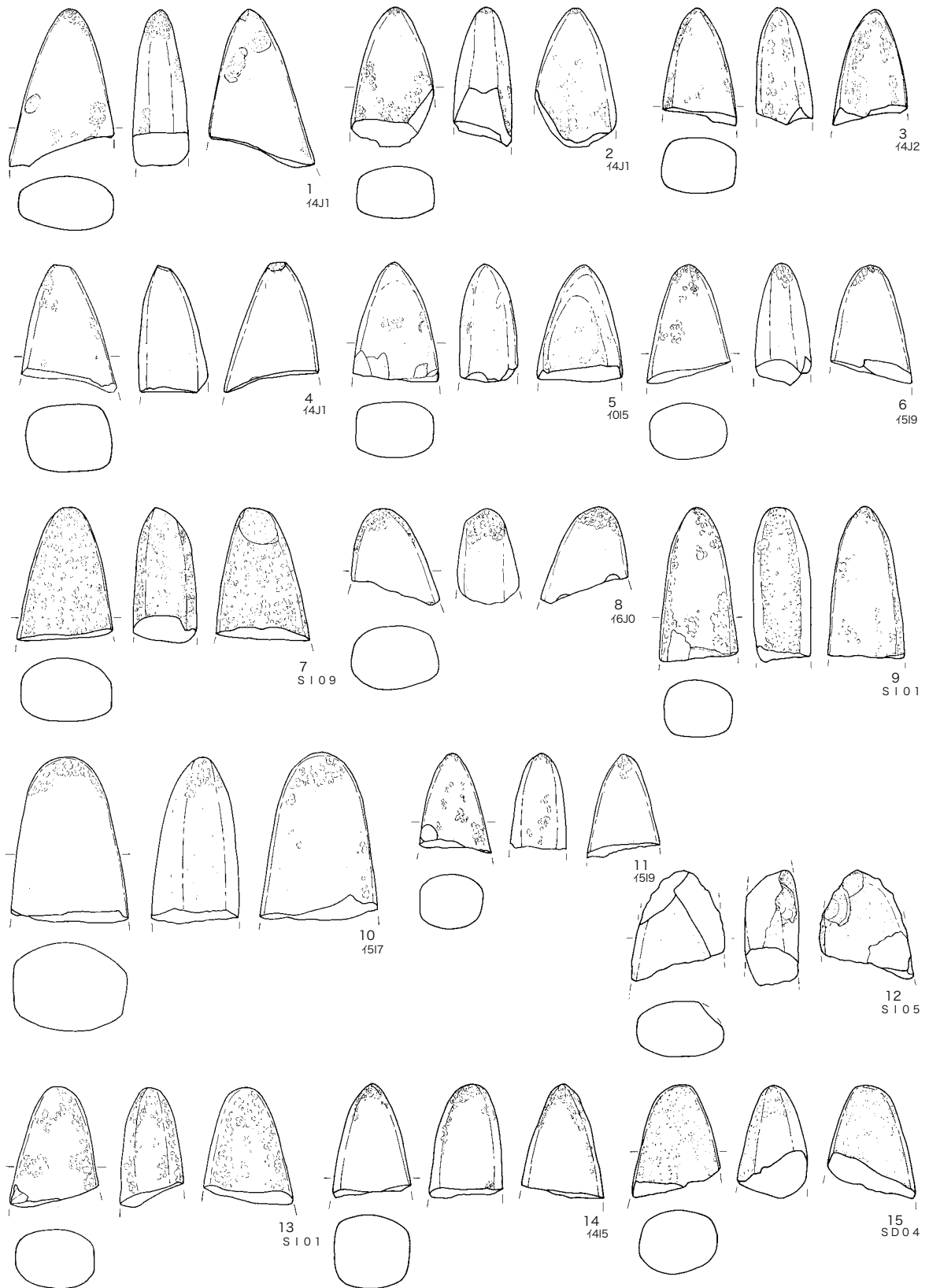
第307図 磨製石斧(2)



第 308 図 磨製石斧 (3)



第309図 磨製石斧(4)



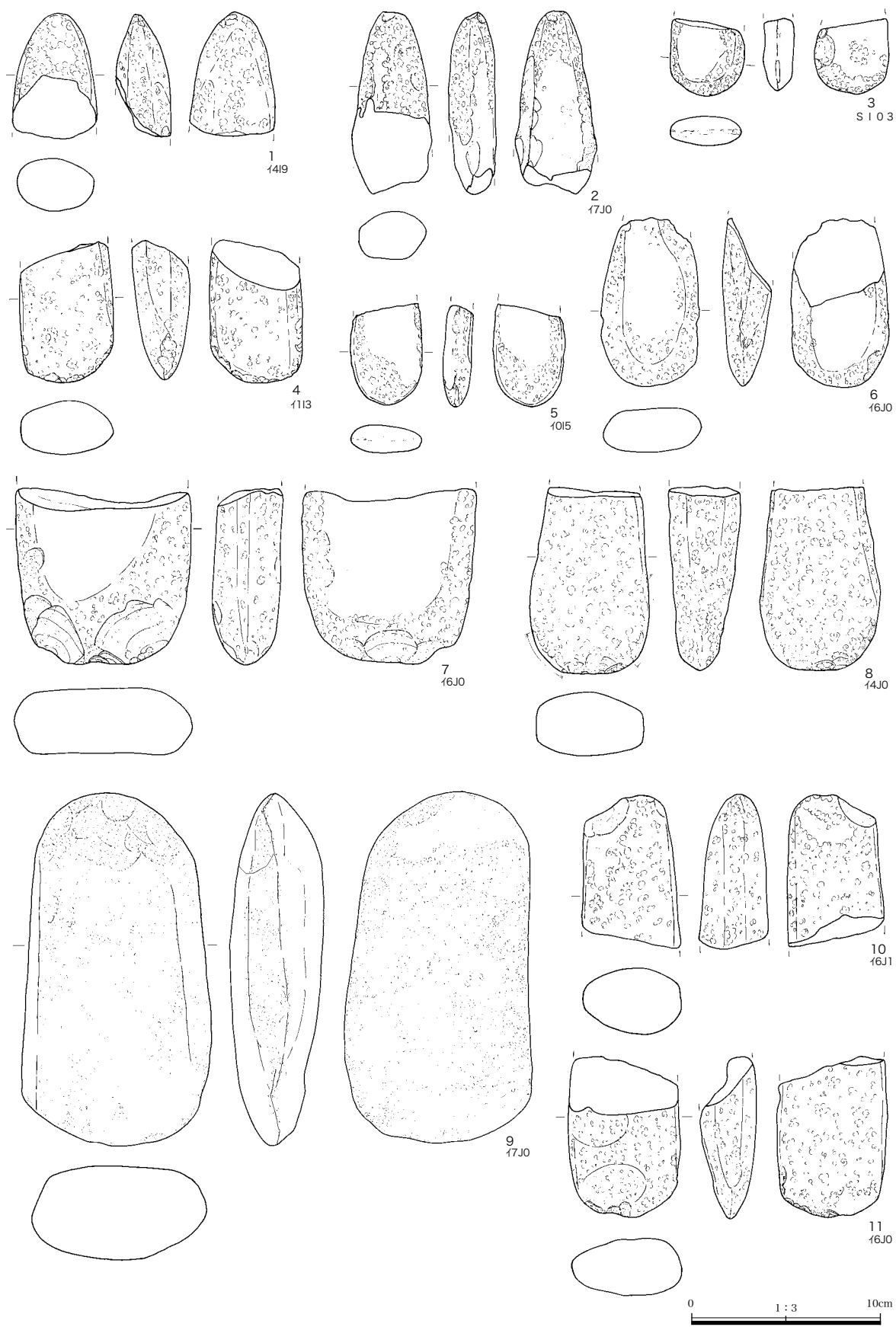
第310図 磨製石斧 (5)



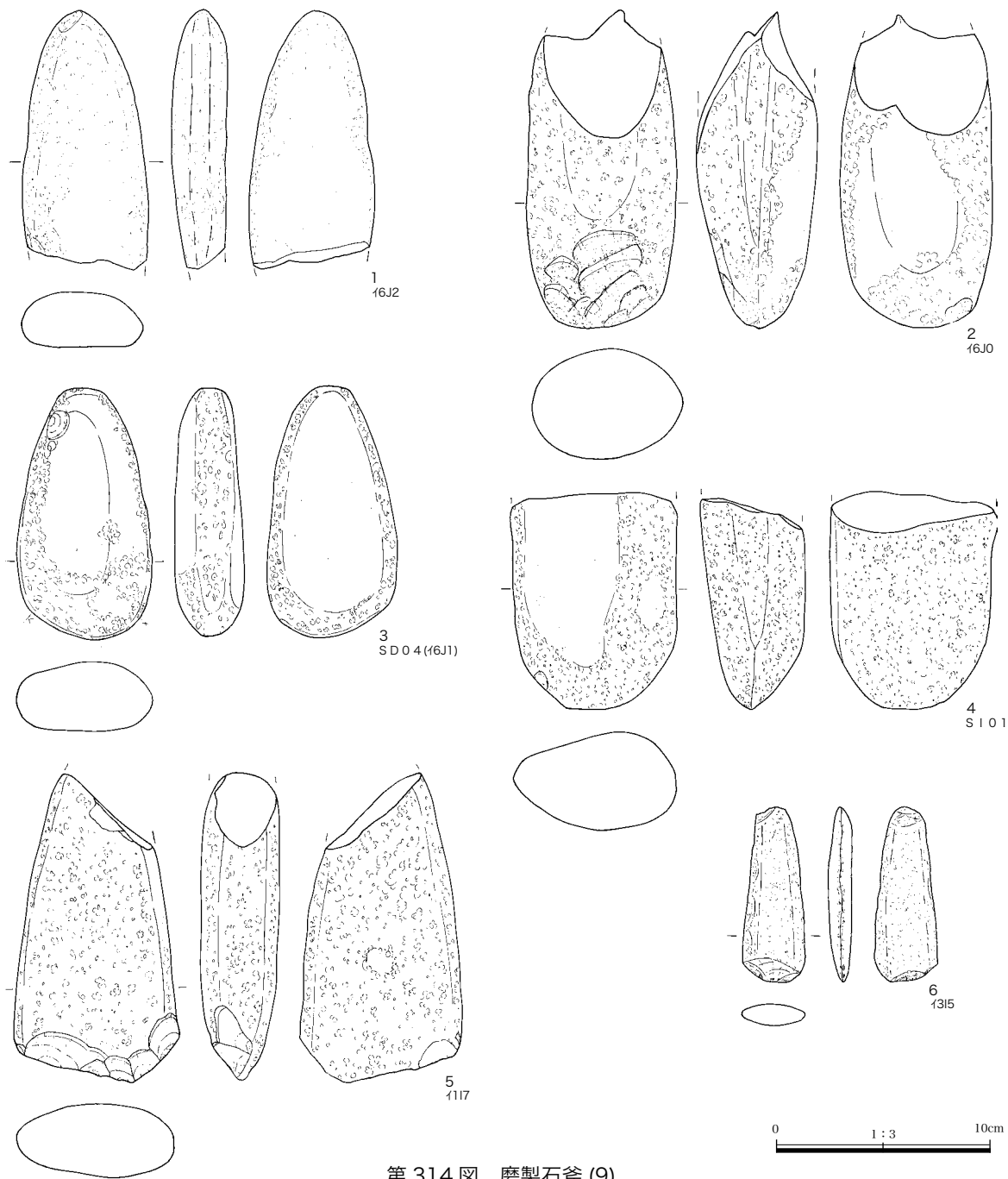
第311図 磨製石斧(6)



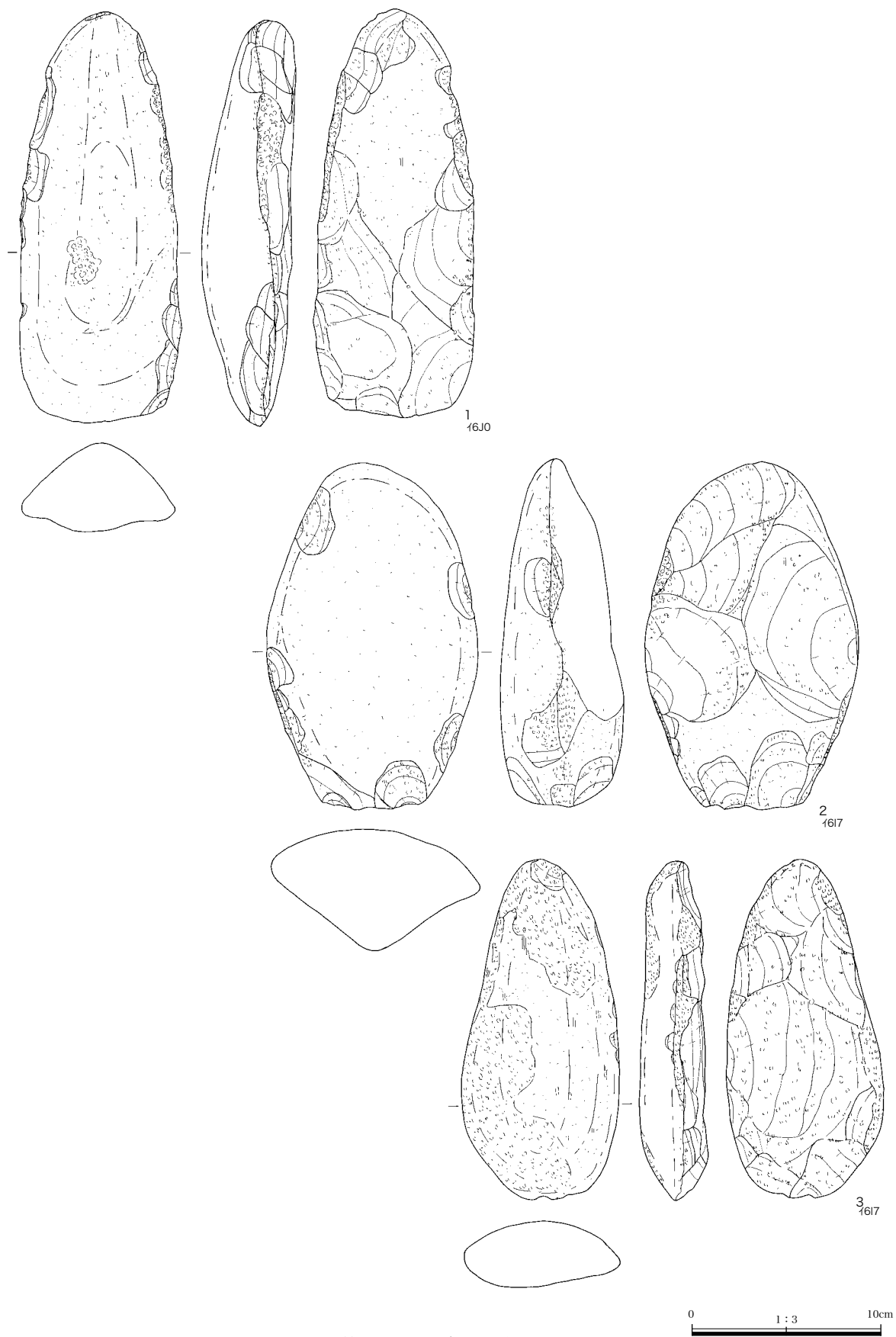
第312図 磨製石斧(7)



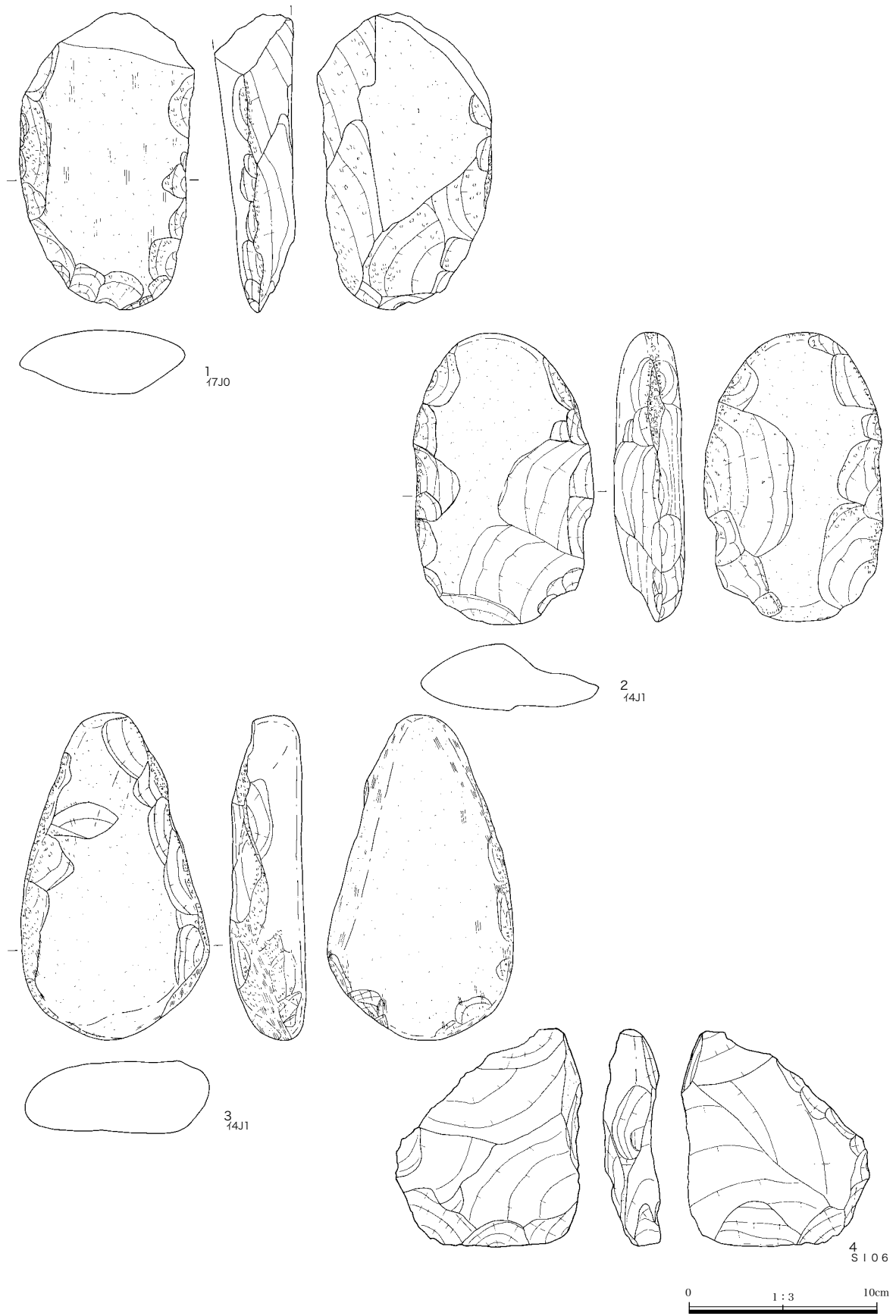
第313図 磨製石斧(8)



第314図 磨製石斧(9)



第315図 磨製石斧(10)



第 316 図 磨製石斧 (11)

9. 磨石・敲石類（第317～324図）

磨石類は3,045点の出土がある。但し搬入礫の確認は行っておらず、これらの再検討によっては大きく増える可能性もある。また本報告時点でも「磨石類」とされたもの全点の詳細な観察に至らなかった。

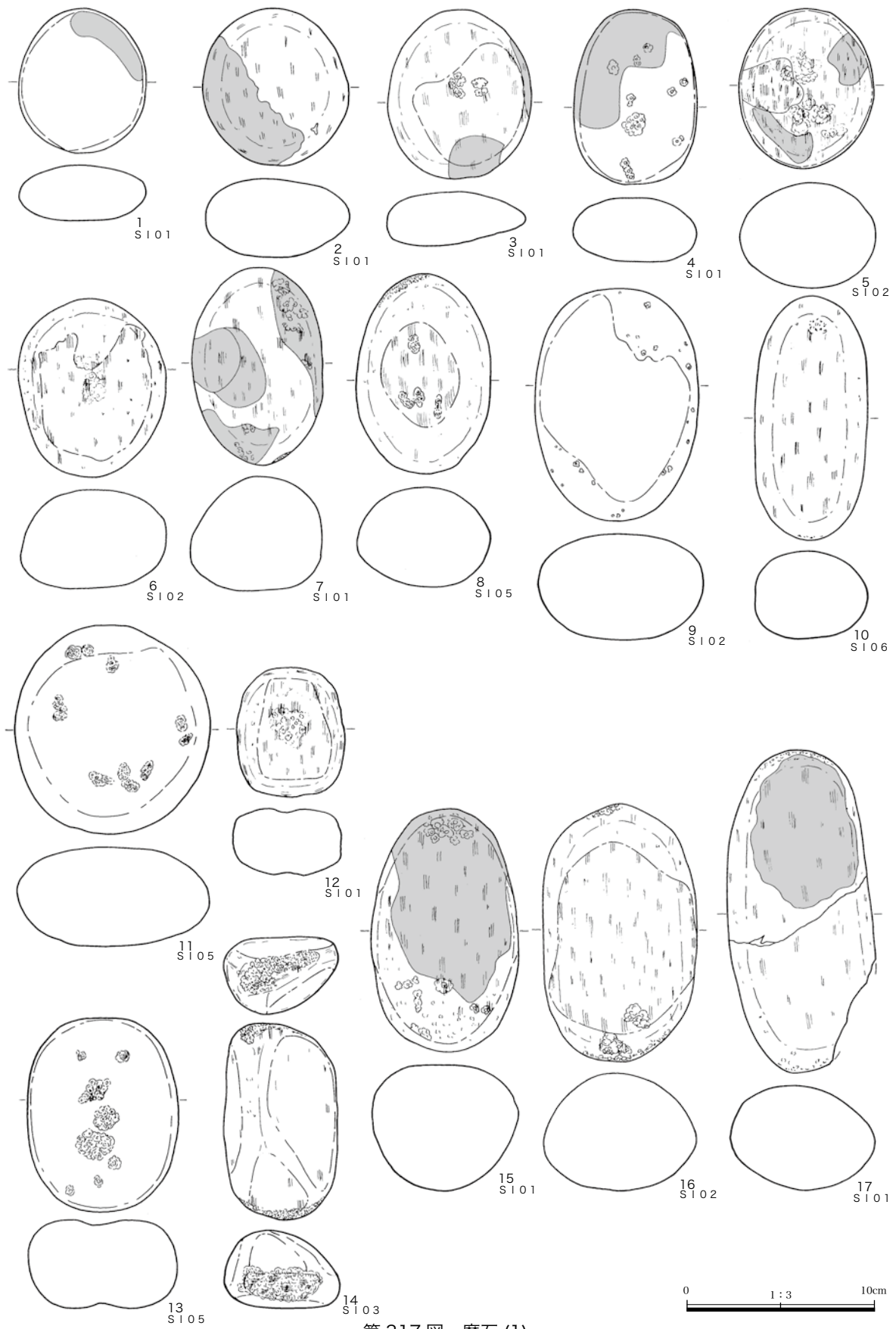
ここでは代表例の提示と図示分を含む表掲載の500点のみ観察結果を示す。整理に於いては「Ⅰ型磨石」「Ⅱ型磨石兼敲石」「Ⅲ型敲石」「Ⅴ型凹み石」「不明」に分けられ、更に摩耗痕・敲打痕等の位置（A：表面に摩耗痕周縁に敲打痕、B表面に摩耗痕と敲打痕、周縁に敲打痕、C：摩耗痕と敲打痕）と形状による分類（楕円古、楕円新、丸古、丸新、長方形、角、その他）を組み合わせた分類が試みられ、その上で図化分について選択された。表中の分類はそのままこの分類を示しているが、整然と区別し得ないものも多く、或いはやや恣意的な判断や誤認などもあり、この分類への準拠が有意味かも判断難しいところがある。「古」と「新」の区別は稜形成の差によるようで、確かに後期後半以降明瞭な稜を形成するものが増加するとはいえ、厳密な型式分類は難しいように思われる。磨痕や敲打痕の位置や面数など、担当者による再度の観察結果をあわせて示すことで、ここでの報告としたい。確認した2,351点中では、Ⅰ類51点、ⅡA類149点、ⅡB類1,425点、ⅡC類53点、Ⅲ類322点、Ⅴ類132点、不明219点である。

図での表現についても統一をとれていない。磨痕や敲打痕の範囲を示したものもある一方、殆どそれをしていないものもある。敲石についてはできる限り敲打痕・敲打部分を示すように努めたが、まだ不十分なところがある点了解されたい。凹み石の「凹み」についても判断難しく、人為性の希薄な小凹みについて示しているものと、やや限定させて図示したもの両者があることも付記しておく。実際には通覧する限り、第321図6～13のような顕著な凹みを有するものはさほど多くはないように思える。磨痕については、基本表裏面に磨面があり、これに側面での磨痕が加わるものと加わらないものがあることは他遺跡例とさほど変わらない。石材にもよるが、極めて著しい磨痕の平滑で光沢を帯びているものが幾つかある。第318図1～10、第320図1～11のような定型性があるものは、関東地方における縄紋後晩期集落遺跡出土例の特徴で、側面の研磨痕は、整った方形・円形に整形していることによると推定される。以下で図示したものについて若干の補足を行うが、注目される敲石についてやや多めに示している点記しておく。なお第317図2.4など、顔料付着例が一定数確認できることも明記しておく。顔料付着例と形態例との相関は検討していないが、小形扁平例もあるものの、やや大きめで厚手のものの方が多い傾向があるかもしれない。

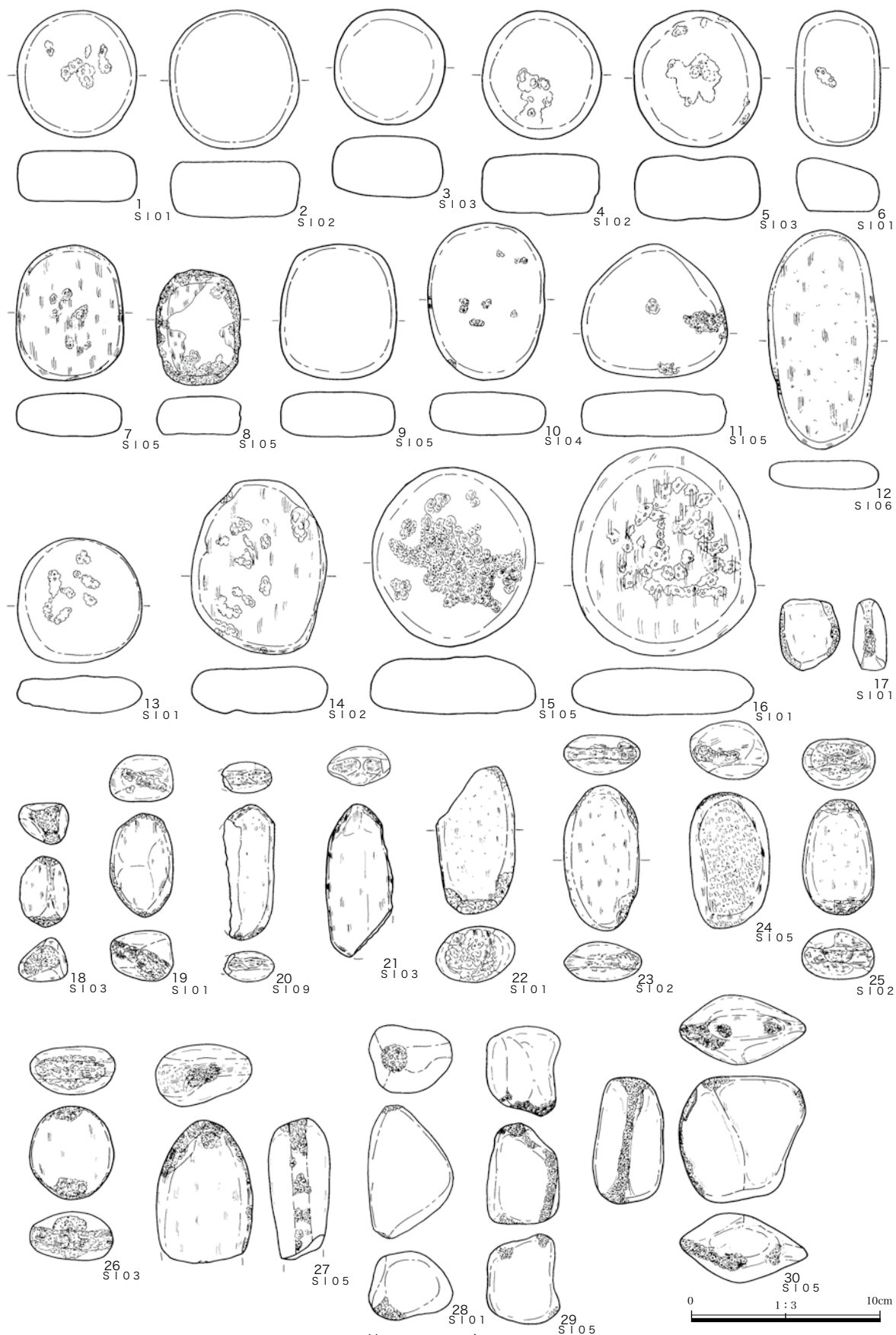
第317.318図に遺構出土例を、第319図以下に包含層出土例を示す。第317図は円形～楕円形でやや厚みを有しているものである。表裏での磨痕に一部敲打痕が加わるような例が多い、14は上下端部に顕著な敲打痕がある「磨石兼敲石」である。第318図1～16は断面長方形、または扁平なものを示す。17～30は敲石ハンマー類である。

第319図は円～楕円形で厚みのあるものである、第320図が1～23が断面長方形または扁平な例である。とりわけ14～18はやや大きめ薄手で、「石皿」として用いられた可能性がある。24.25は長方形で重量があり、端部敲打が確認できる。第321図1～5は磨石兼敲石で厚みがある平面楕円形の例である。6～13は「凹み石」で表裏面の中央に設けられるものが基本である。11は立方体に近い形状でその6面それぞれの中央が凹んでいるやや珍しい例である。14～17はハンマーで、原則上下端部に敲打痕が多く見られる。18～20は異質なもので、縦長でやや扁平な礫の側面に敲打痕が観察されるものである。

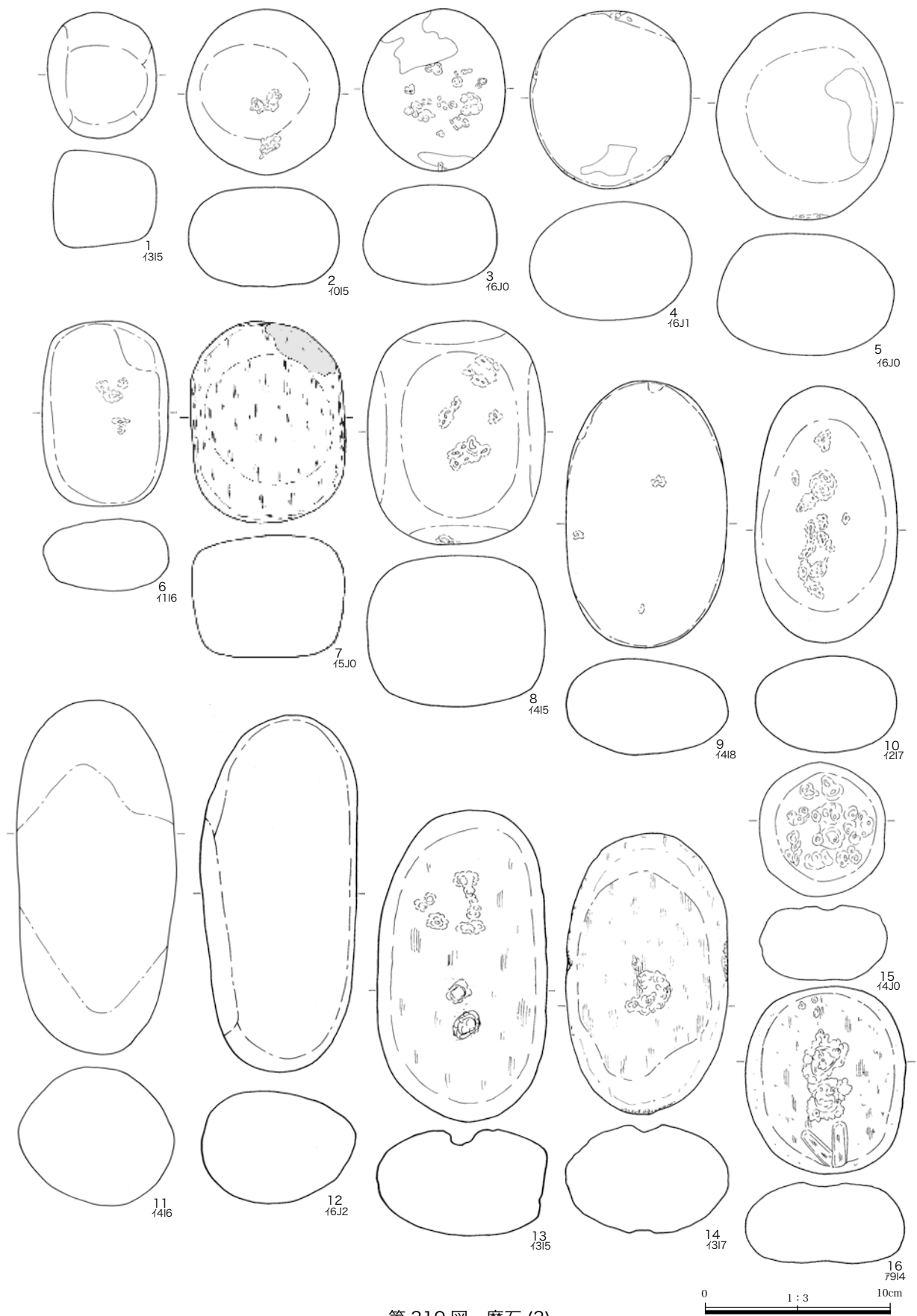
第322図は小形～やや小形の敲石ハンマー類である。棒状の形態例が多いが、1～6のように円盤状の形態例も認められる。第323図はやや大きめ（拳大程度）のもので、端部のみならず側面など広い範囲に及ぶ例が多い。いずれも顕著な敲打痕を見ることができ、「ハンマー」としての機能を認めることができる。1や



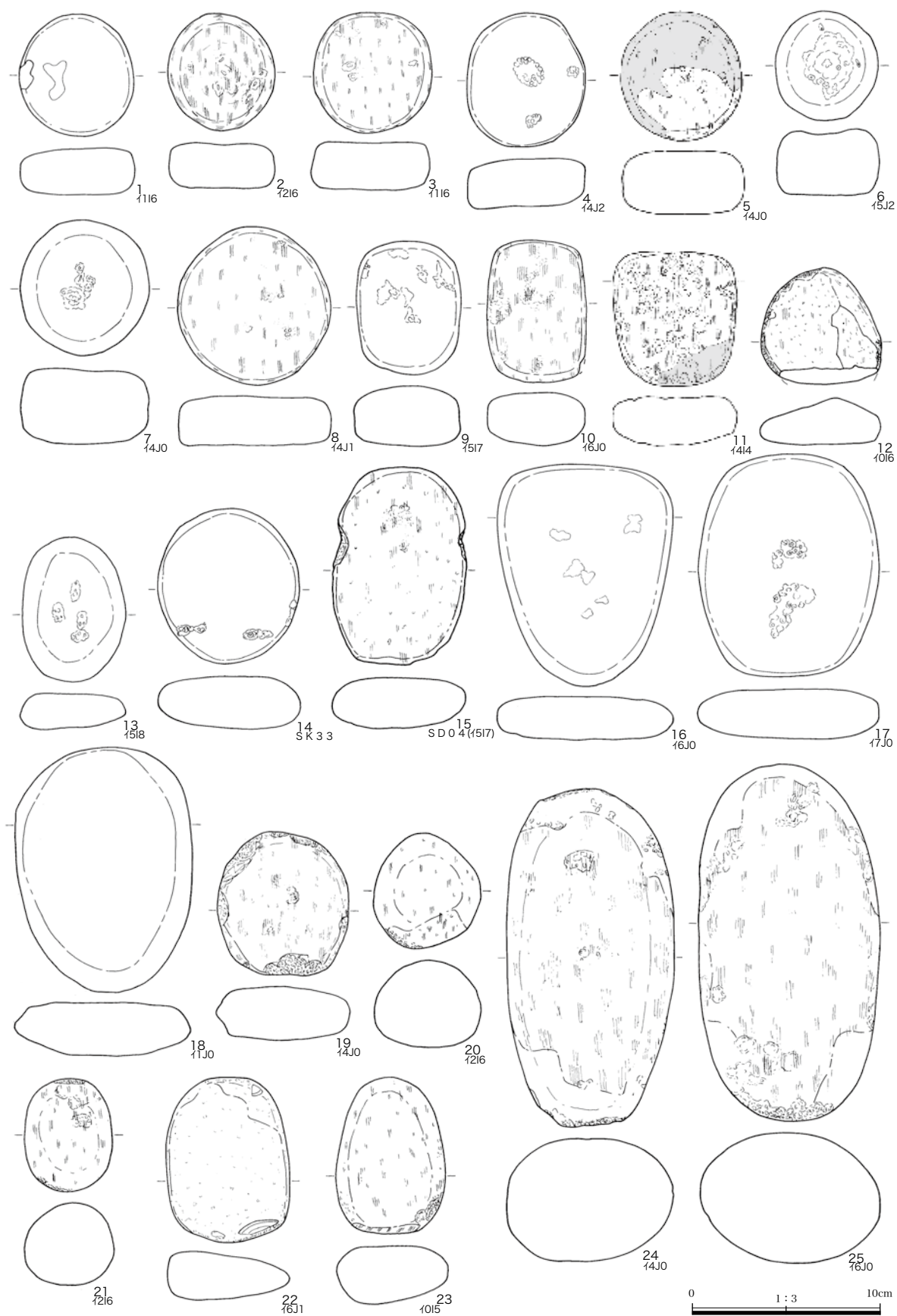
第317図 磨石(1)



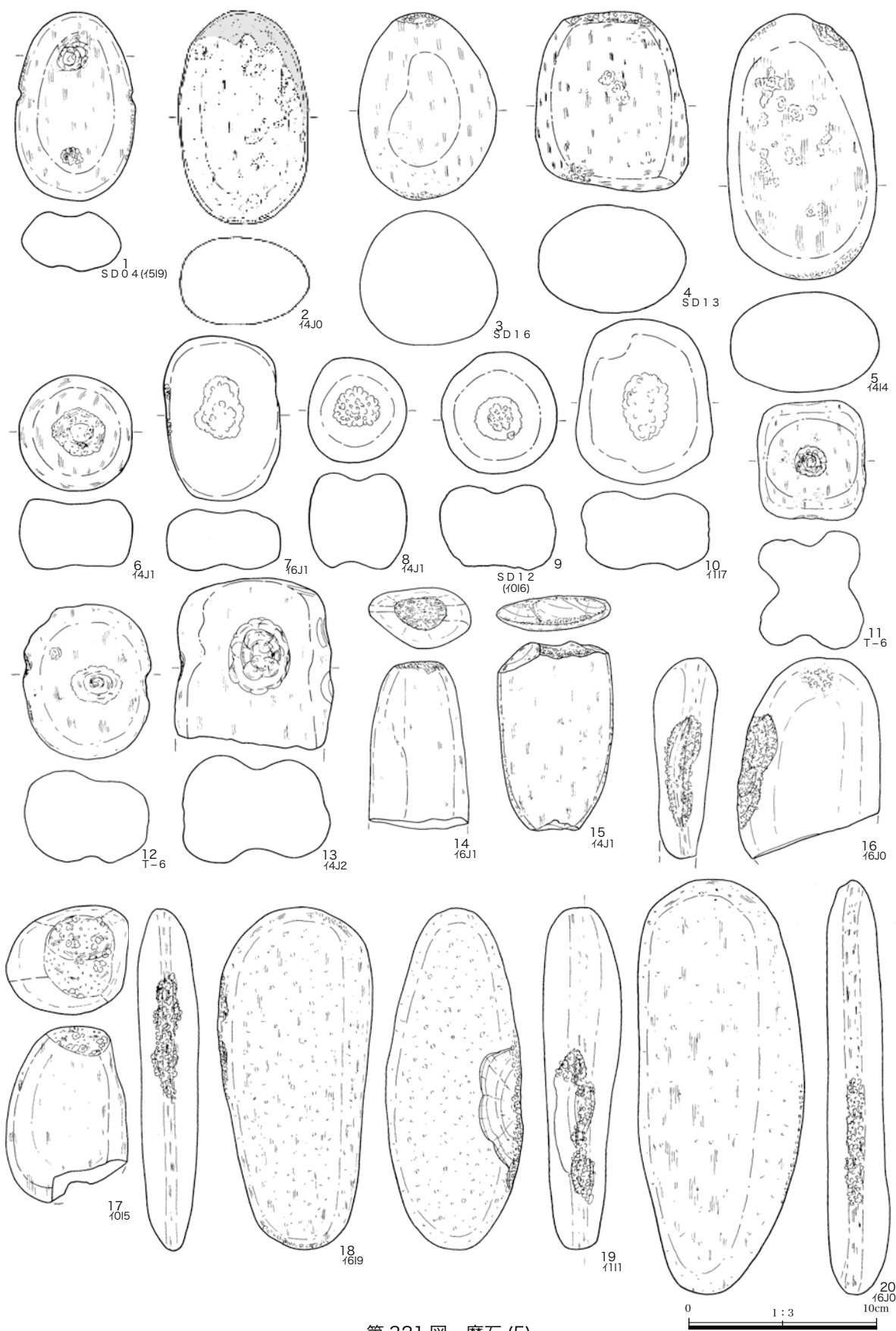
第318図 磨石(2)



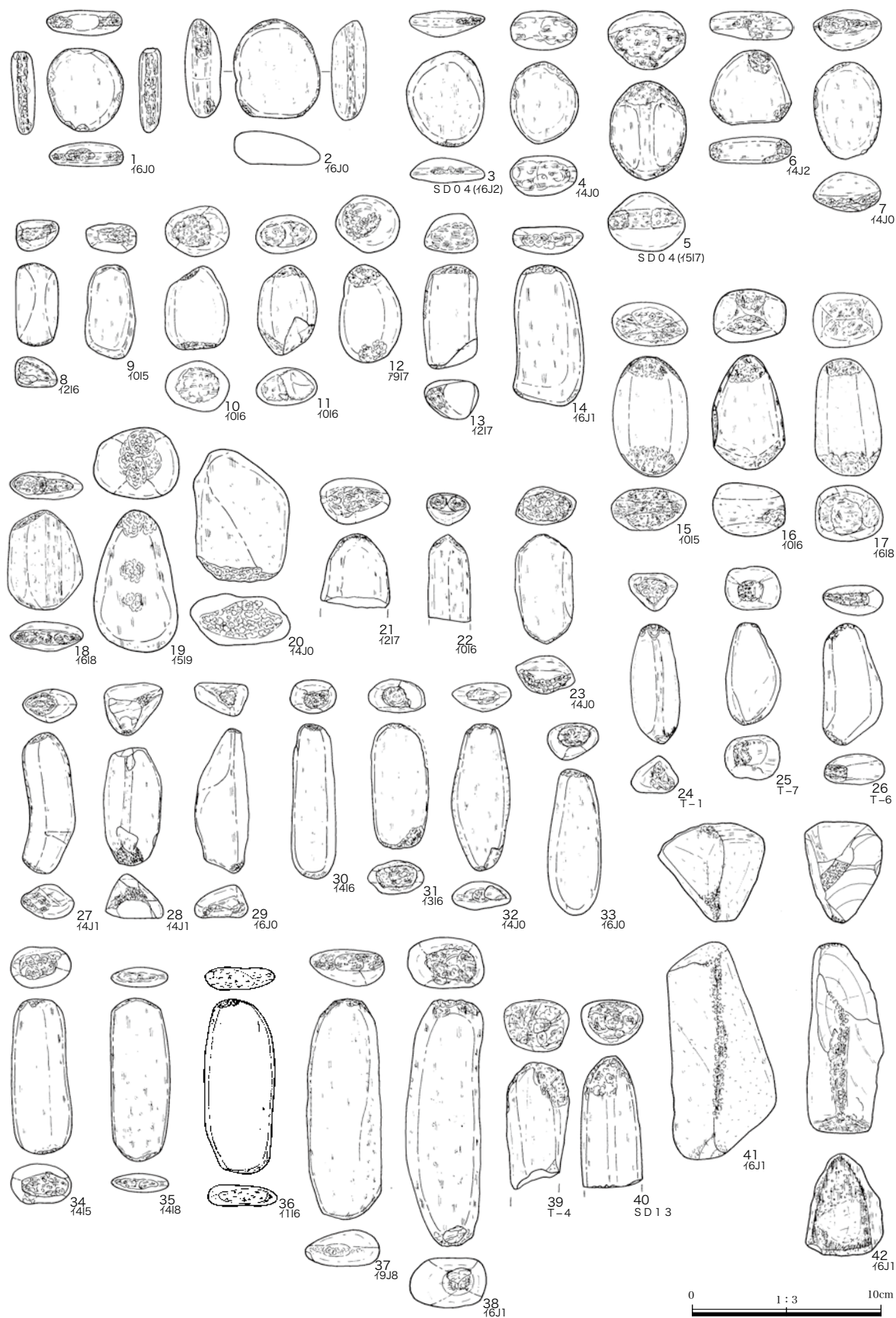
第 319 図 磨石 (3)



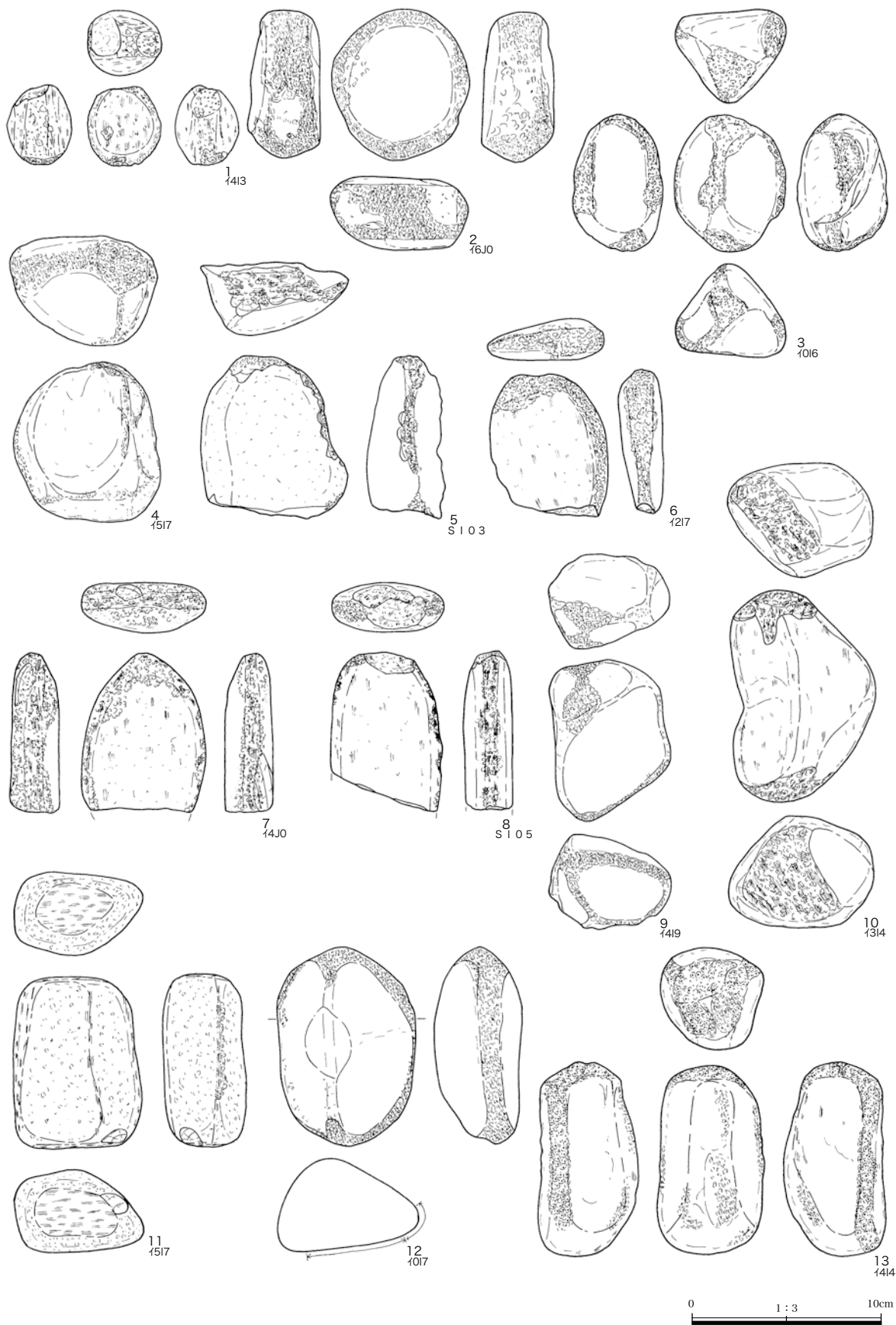
第320図 磨石(4)



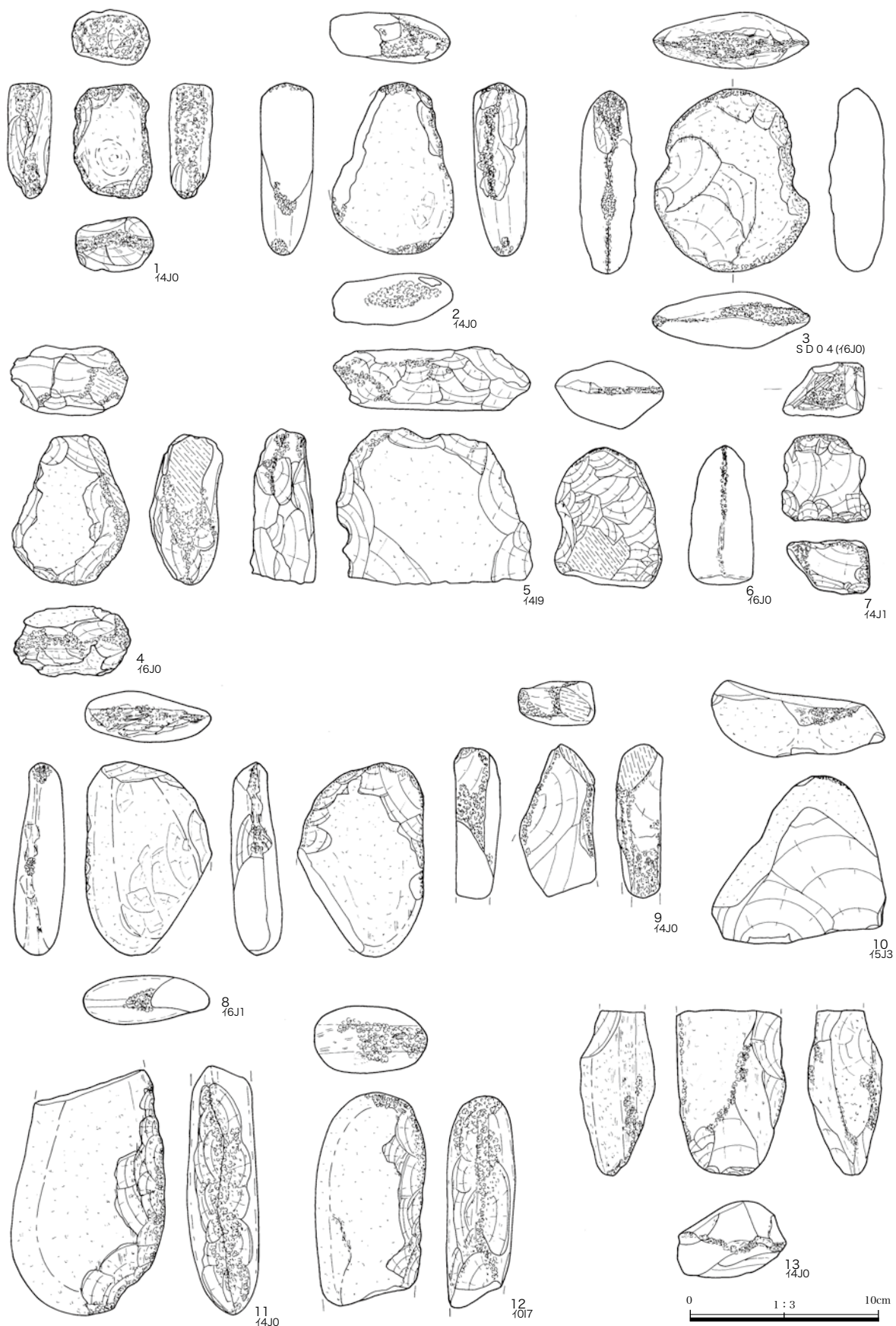
第 321 図 磨石 (5)



第322図 磨石(6)



第 323 図 磨石 (7)



第324図 磨石(8)

3等は中期集落跡でも屢々みられる「凸多面体状」に近いが、むしろ側面+端部など一定箇所への集中的な敲打痕を観察できる例が目立つ。11はやや異質で、上下端部での磨痕が顕著である。但し他でも「敲き磨り」のような複合的な痕跡例があり、検討が必要であろう。第324図には打製石斧に近い形状の例、剥離痕跡がある例などをまとめる。5のように打製石斧、或いは転用の可能性を推測させるものもあるが、1～4のような顕著な敲打痕が観察できるものは、明らかに敲石としての使用を推定させる。一方側面に顕著な敲打痕のある11.12等は、通常例とは別種の使用法を考えた方が良いのかもしれない。ハンマー類について、石器製作との関わりを想定するのであれば、よりいっそうの詳細な検討が必要であり、今後の課題としておく。

10. 石皿類 (第325～332図)

当初分類で集計された点数は約800点だが、すべての確認に及んでおらず、確実な実点数を示すことができない。磨石同様、当初分類では、大きさ、全体形状、磨面・多孔面の位置、断面形状に注目しての分類が行われたが、整然と区別し得ないものも多く、多少の混乱が生じ、或いは誤認などもあり、この分類を活用することが適わなかった。磨痕の状態や位置などの確認にかかる再観察結果を表中に示すことで、ここでの様相報告としたい。図示については、多量に出土していること、完形例が少ないことなどもあり、代表例を示すに留まる。また図示の表現について、磨石同様統一がとれていないことも付記しておく。項目立てしての分類は示さないが、完形例を中心に形態種別が確認でき、それらに注意しながら挿図中の配列を行った。

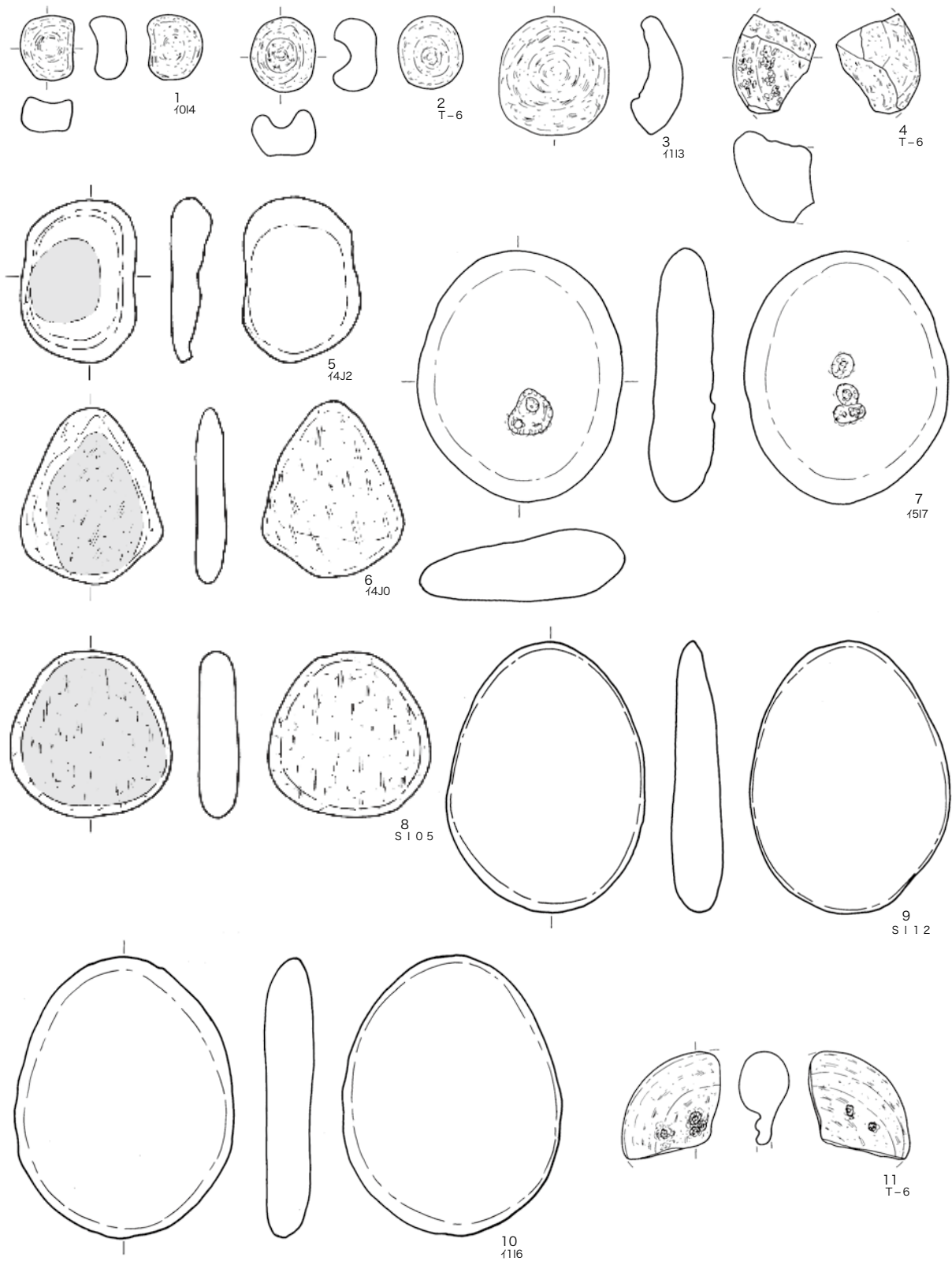
第325図1～6.8.11は小形の例で、大きく凹む2.3.11の例と薄手扁平な6.8等がある。5.6.8は顔料付着が顕著に残るもので、大きさ・形態との相関を示しているかもしれない。第325図7.9.10はやや大きくなるが、薄手扁平の例で、平滑な面形成が特徴的である。第326図2はやや異質な石材で注意される。第326図3.4は縦長楕円形で両端部に敲打痕があり、敲石兼用例となる。

第327図も小形扁平な例だが、やや厚手であったり均一な平滑面とは少し異なる感を受けるものである。第327図3は中央がやや窪み有縁に近い形態となる。第328図1～3はややサイズが大きいものである。磨痕が全面には及ばず、部分的、或いは狭い範囲で数箇所というパターンが窺える。第329図は有縁石皿と呼べるものである。特に1～3は側縁での磨痕跡が顕著で、恐らく整形により縁を作出していると推定される。4は1辺側のみ縁状となるもので、石材も含め1～3とはやや異なっている。第330図1.2は大形のものだが、扁平で磨痕顕著なものである。2は長さ54cmと類をあまり見ない大きさである。第331～332図にはいわゆる「多孔石」を示すが、石皿磨痕との複合例であり、未掲載例を含めみても単独的な「多孔石」は殆ど見られない。第332図3は本来の石皿面だけではなく、割れ面を含めてのほぼ全面に磨痕が見られ、割れてからの転用と言い得る。第332図1もやや異質な例で、中央の窪み・孔が端部に抜けているものである。第331図1は厚さ15cmと大きなものだが、表裏よりの使用により中央では1.5cmの厚さにまで薄くなっている。厚いところの一部にある多孔面の存在と併せ、注目される例となろうか。

11. 砥石・線状痕ある礫 (第333～336図)

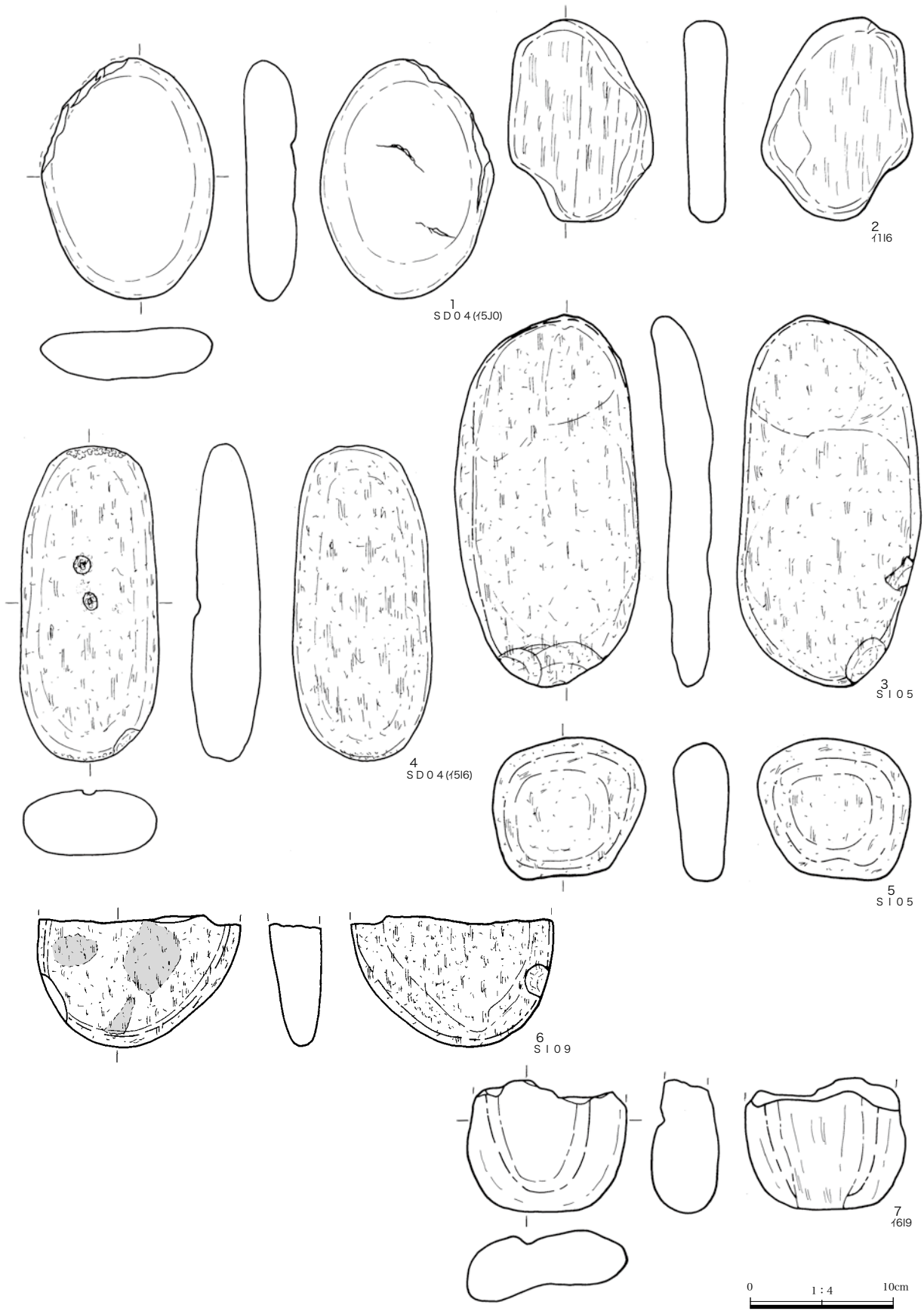
砂岩や凝灰岩系の石材を用いて砥石としているもので、一応321点が集計されている。「同一個体の可能性ある破片」や、砥石の磨痕が確認できない部分の小片などもあることから、実点数の把握は難しい。形態的な特徴の種別の確認を行うのも難しく、従って分類や形態の代表例抽出も困難であり、ここで示すものもかなり恣意的・便宜的な選択である。当初分類で「線状痕ある礫」とされていたものも多くは同種或いは近い用途によることが推定されることから、ここに統合して示す。

(→P385)

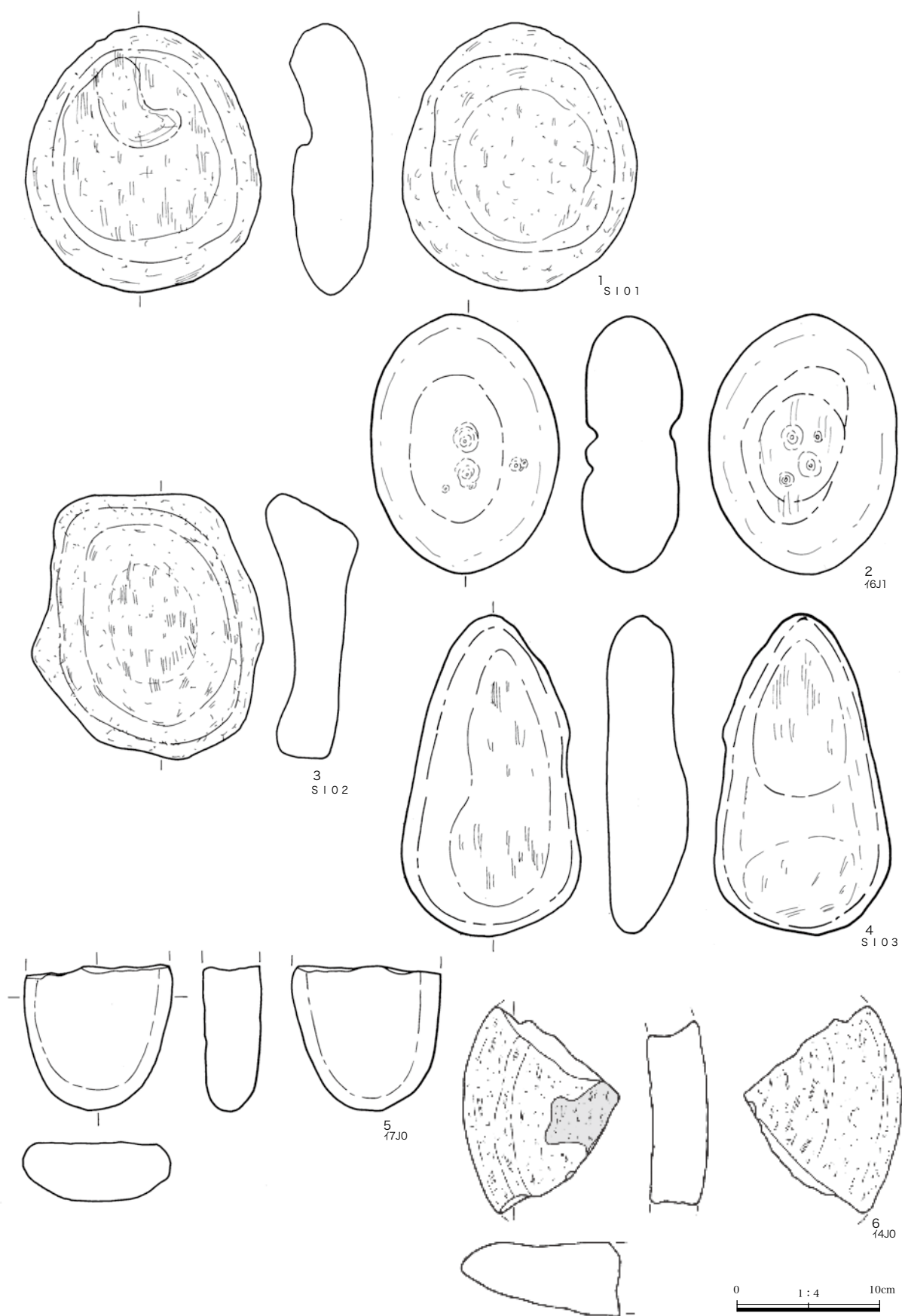


0 1:4 10cm

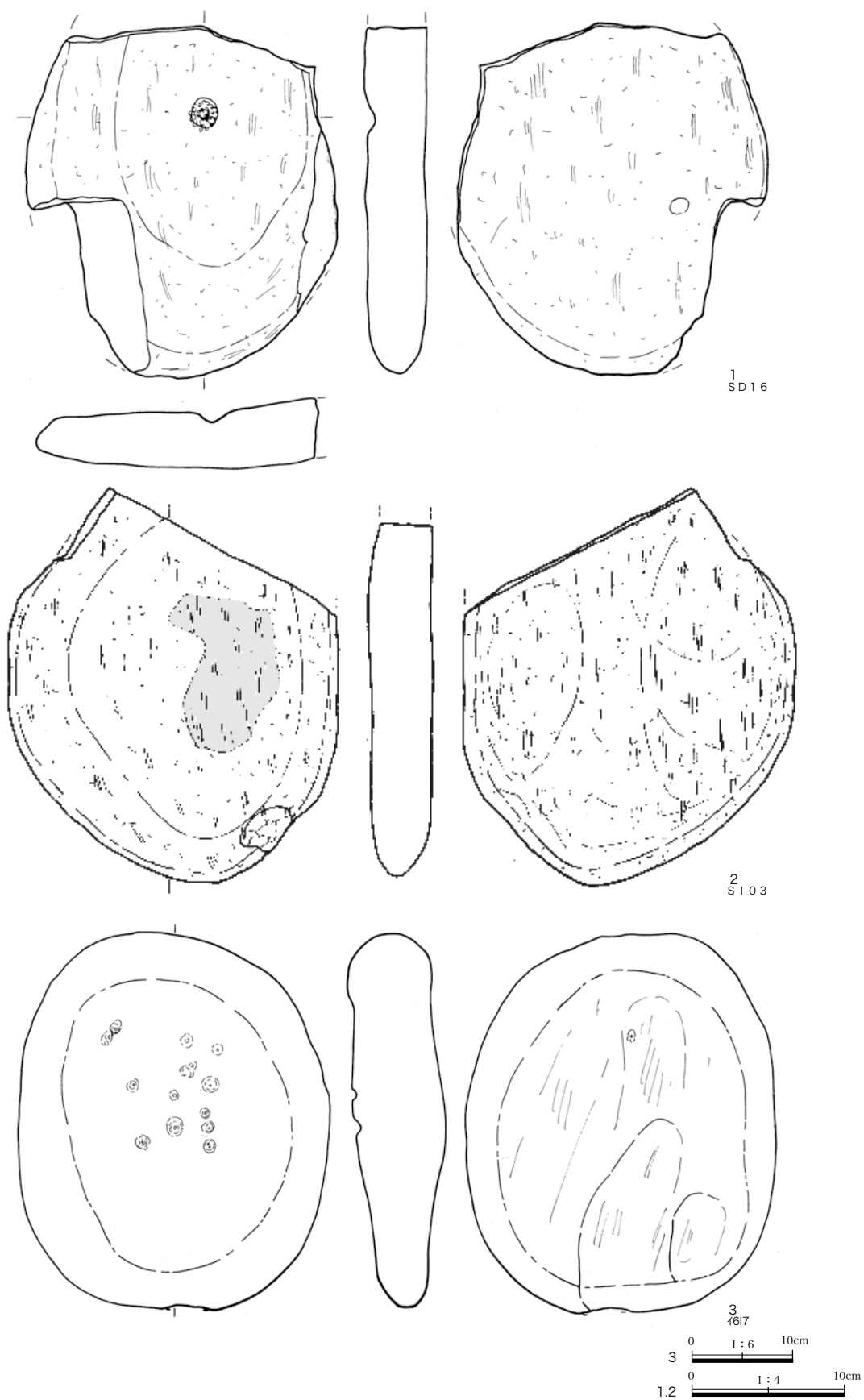
第325図 石皿(1)



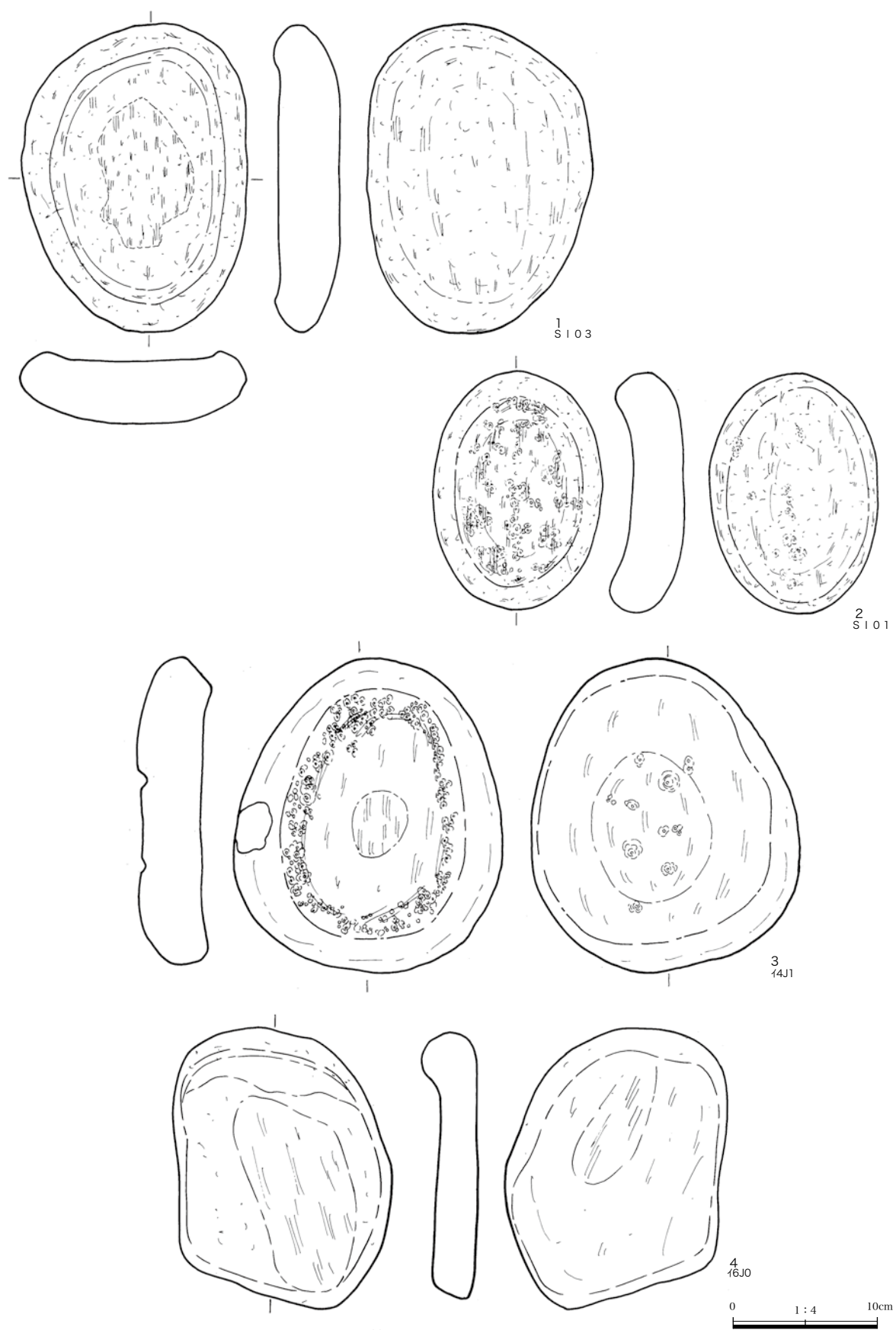
第326図 石皿(2)



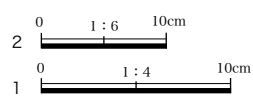
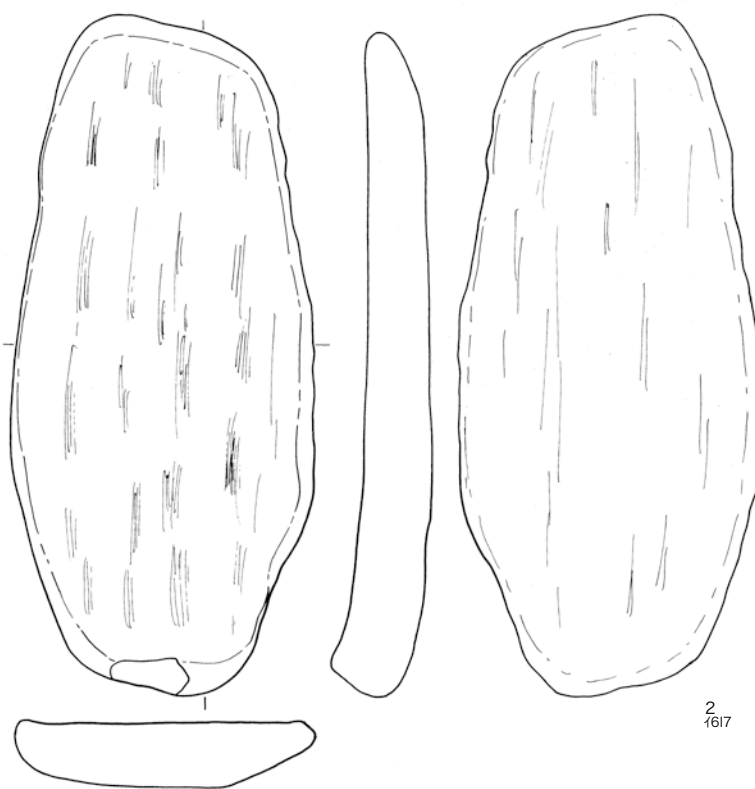
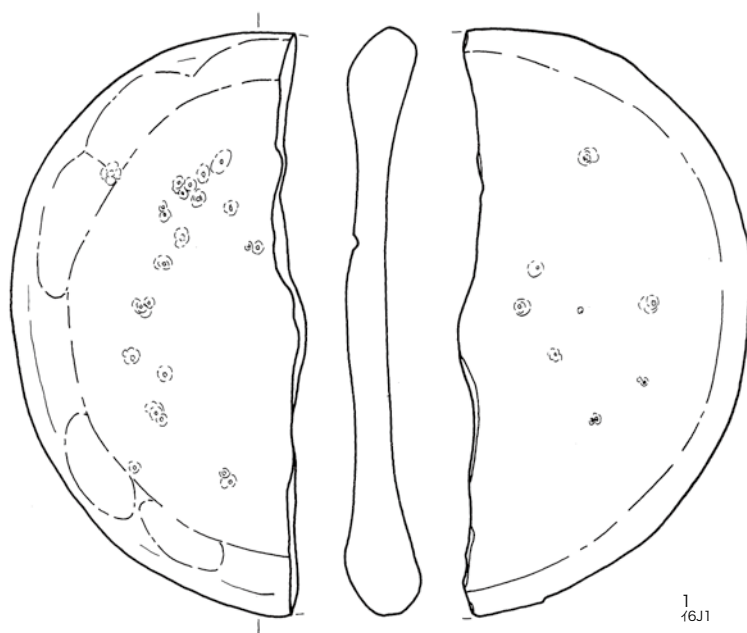
第327図 石皿(3)



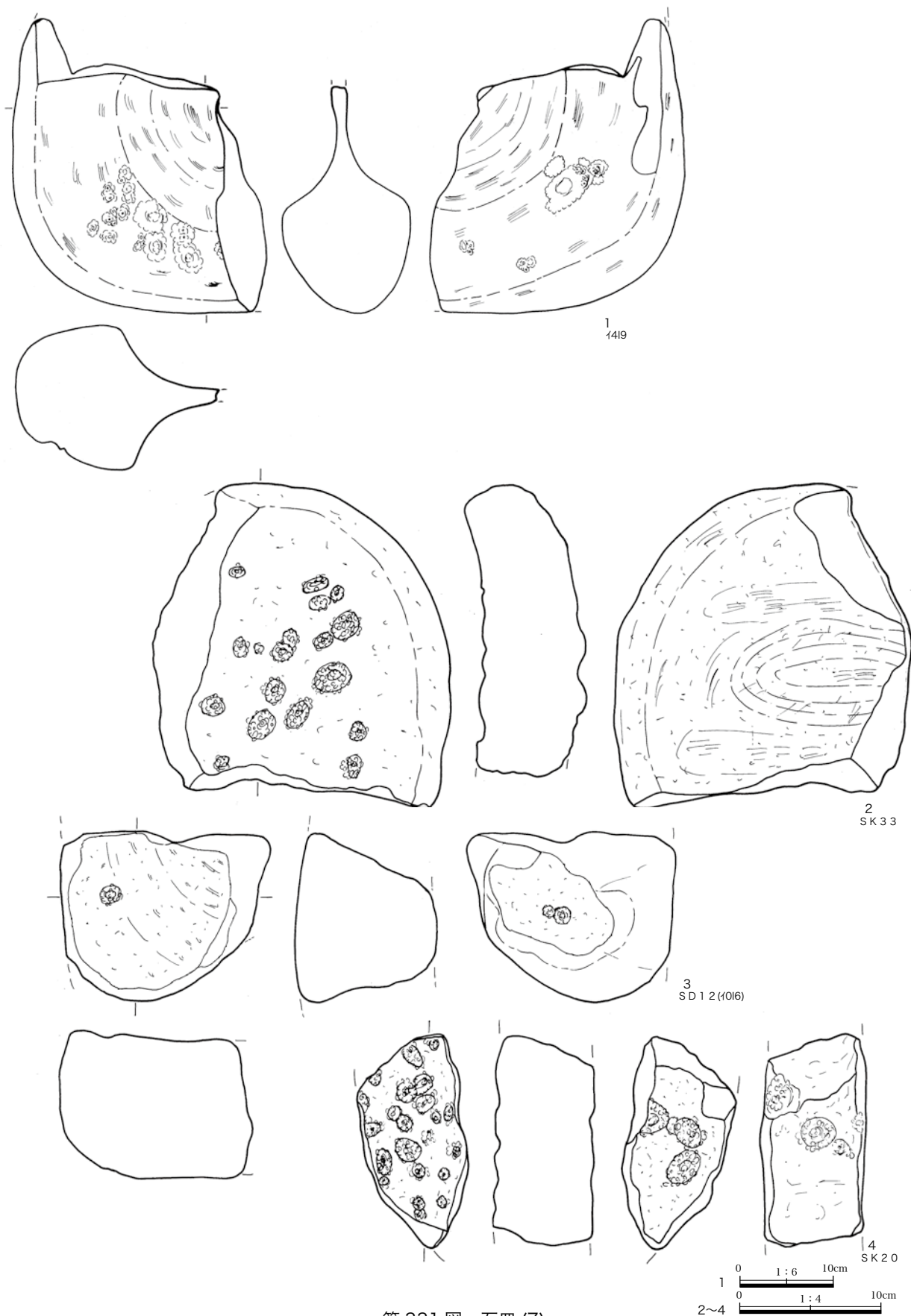
第328図 石皿(4)



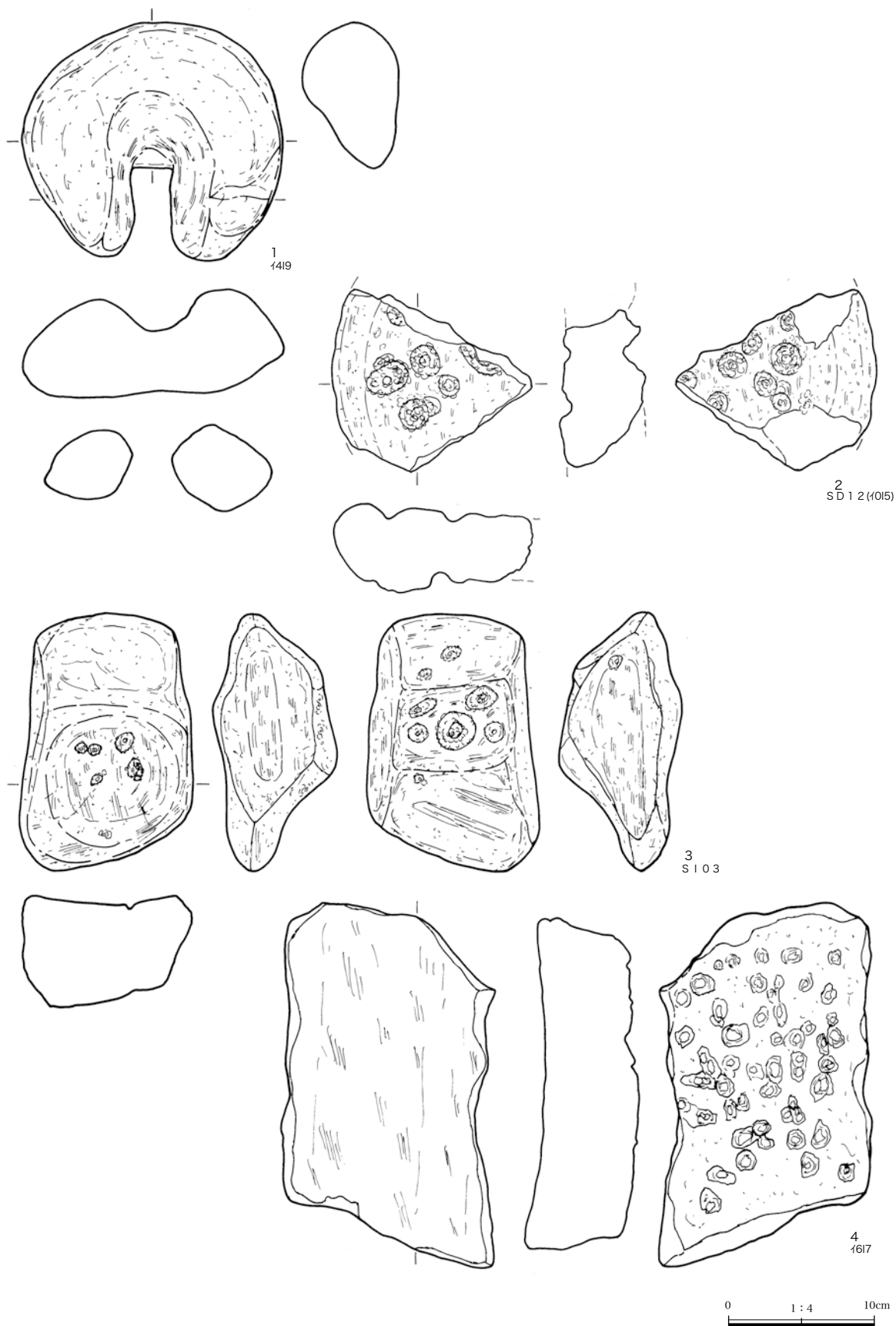
第329図 石皿(5)



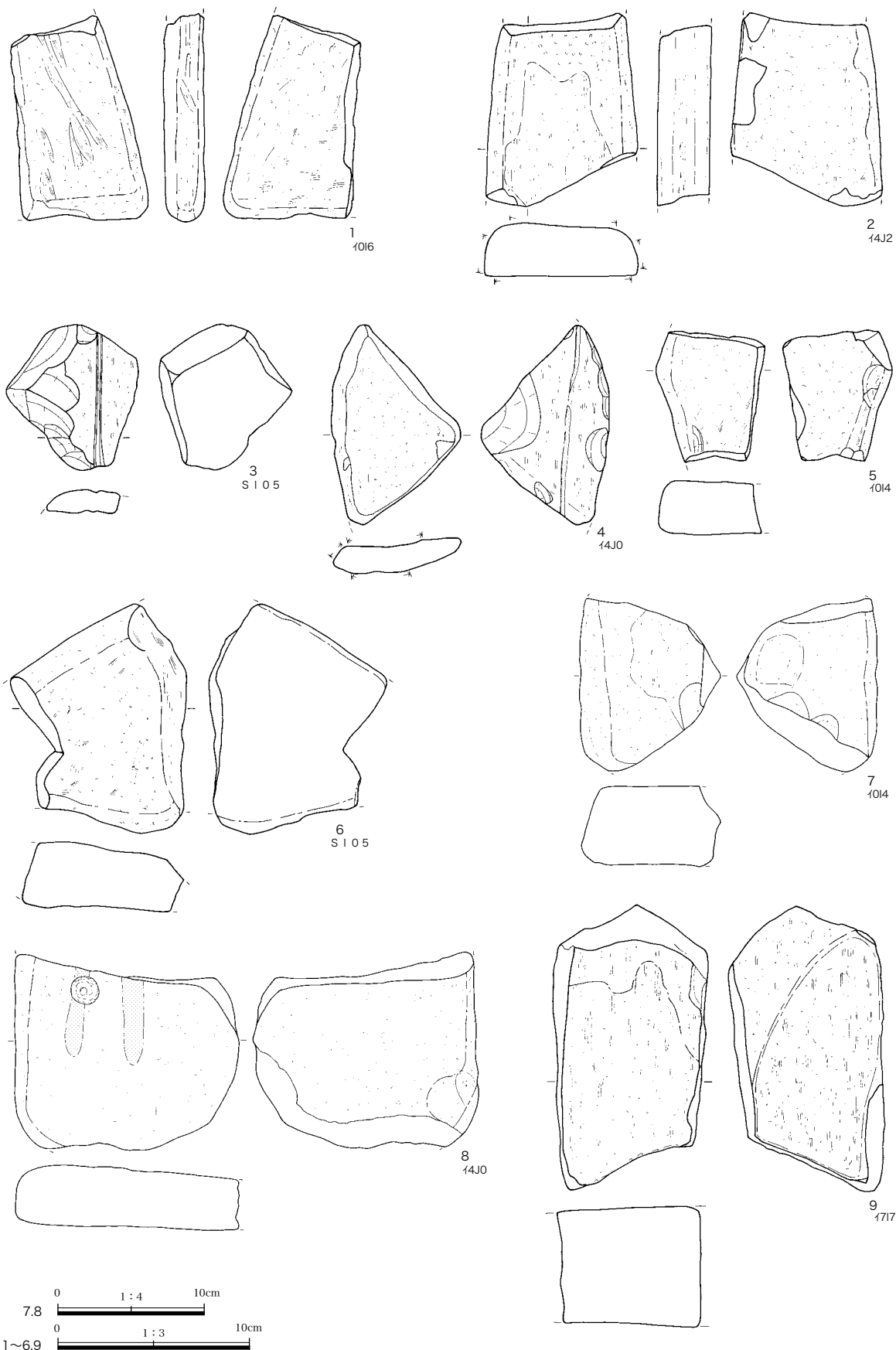
第330図 石皿(6)



第331図 石皿(7)



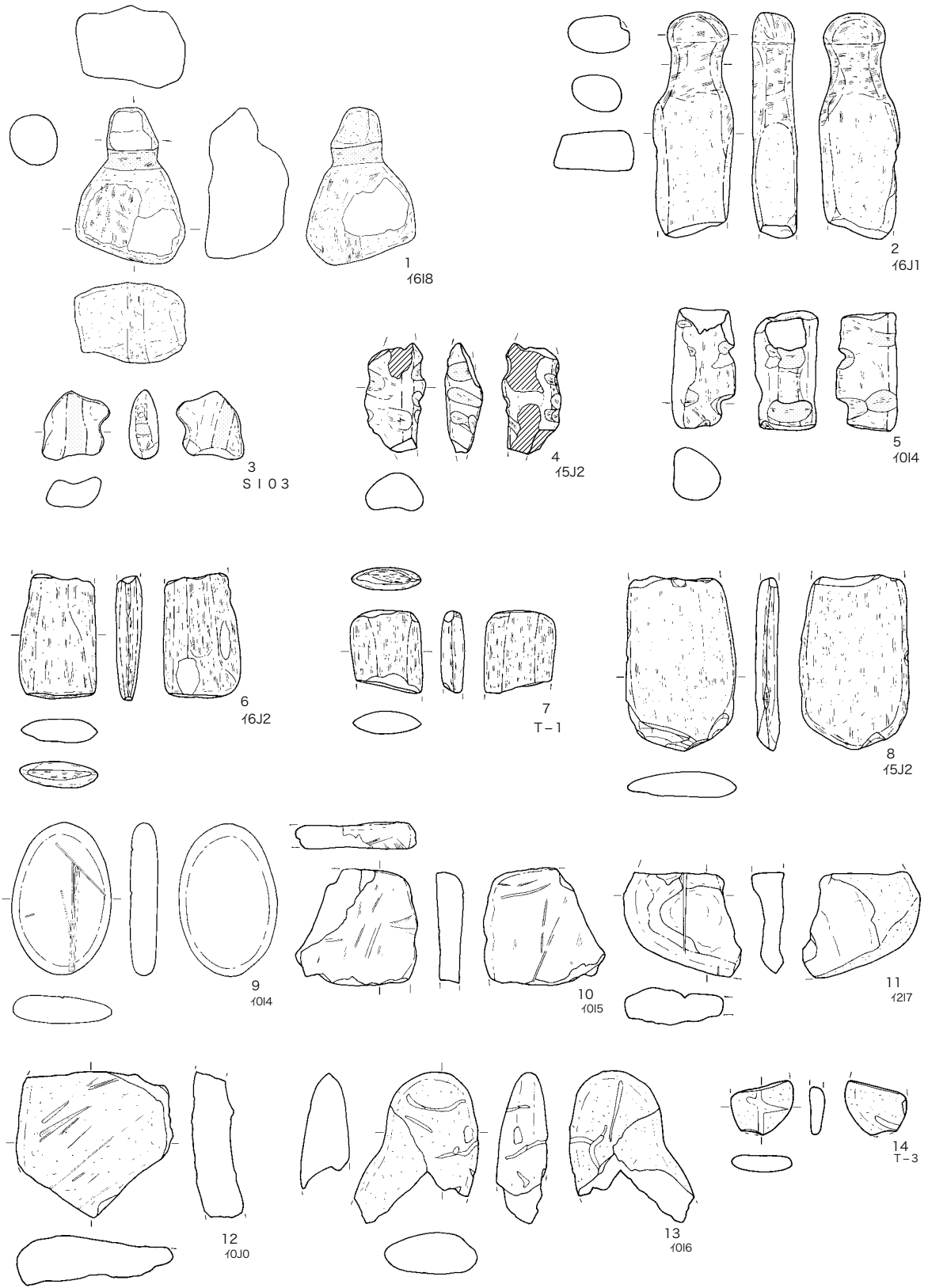
第 332 図 石皿 (8)



第333図 砥石(1)

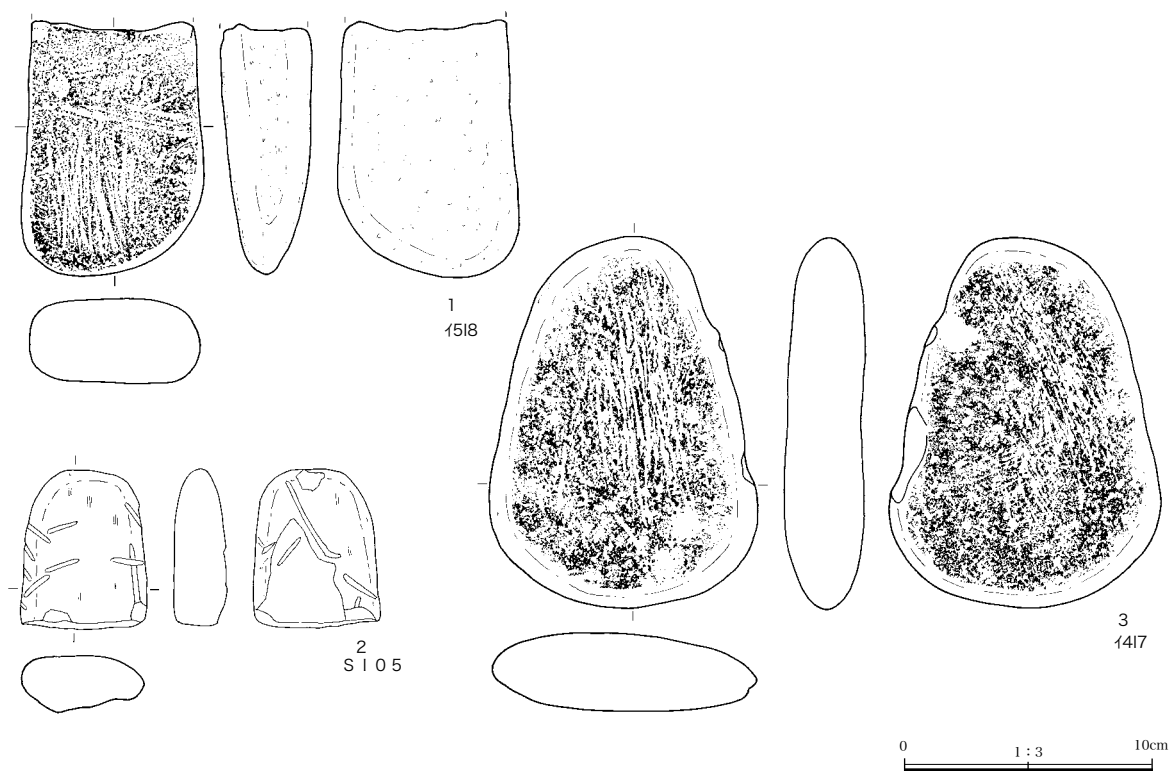


第334図 砥石(2)



0 1:3 10cm

第335図 砥石(3)



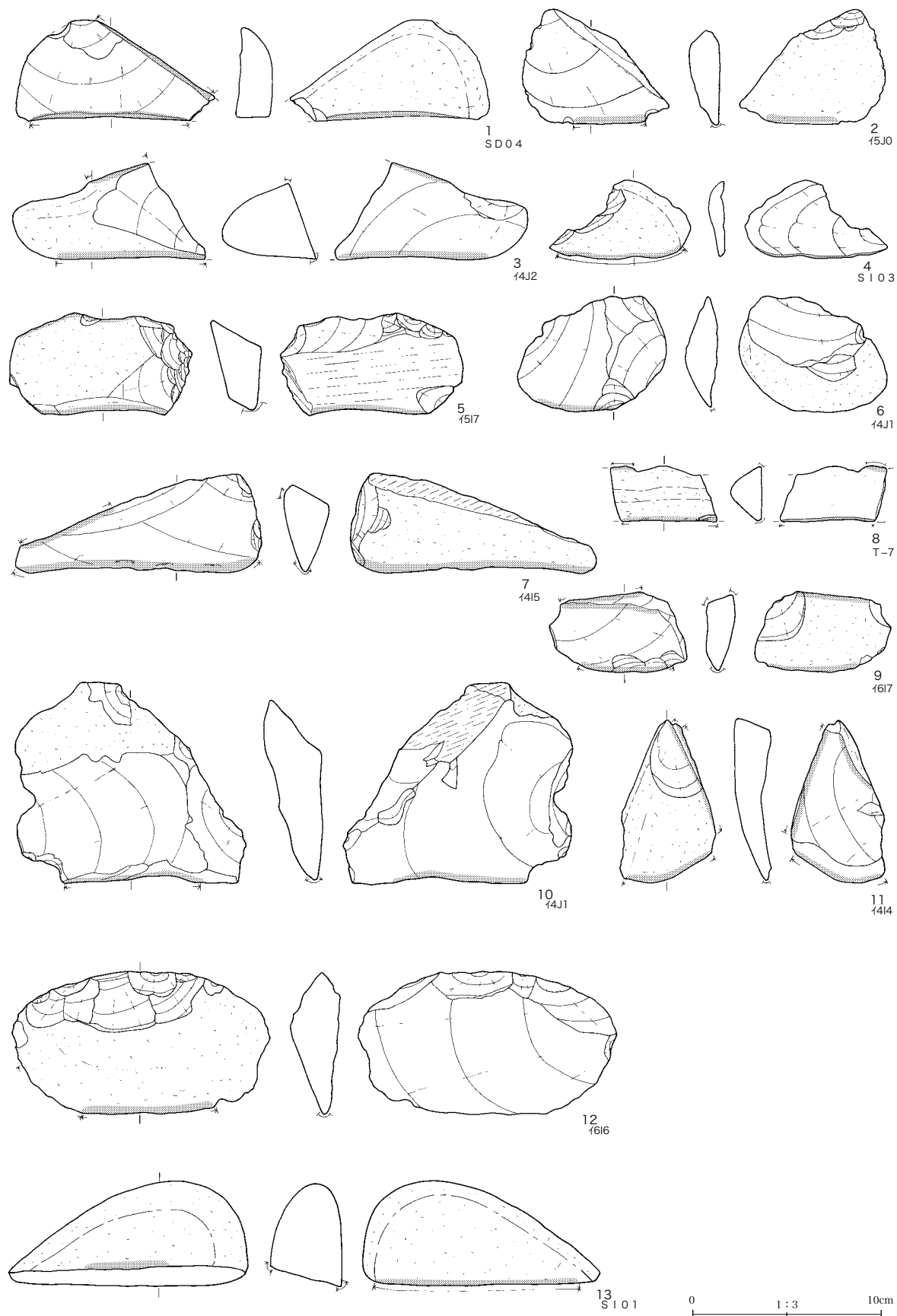
第 336 図 線状痕のある石製品

分類困難としたが、大きく「置き砥石」の第 333.334 図例と手持ち砥石の可能性のある第 335 図例とは概ね区別が可能である。置き砥石の中で明確な筋痕跡がある第 334 図 1～3 については「筋砥石」或いは「溝砥石」とされるものである。第 334 図 4～6 のように面の中央が緩く皿状に凹むものと、第 333 図の大半の例のように平坦で平滑な面が維持されるものがあり、石材や「使い方」、また対象の違いとの相関があるかもしれない。第 333 図に示した扁平例では側面も磨り研磨痕が見られるものがあり、「整形」や側面での使用を窺わせる。第 333 図 9 はかなり硬質の石材ということもあろうが、平滑で光沢を帯びている。

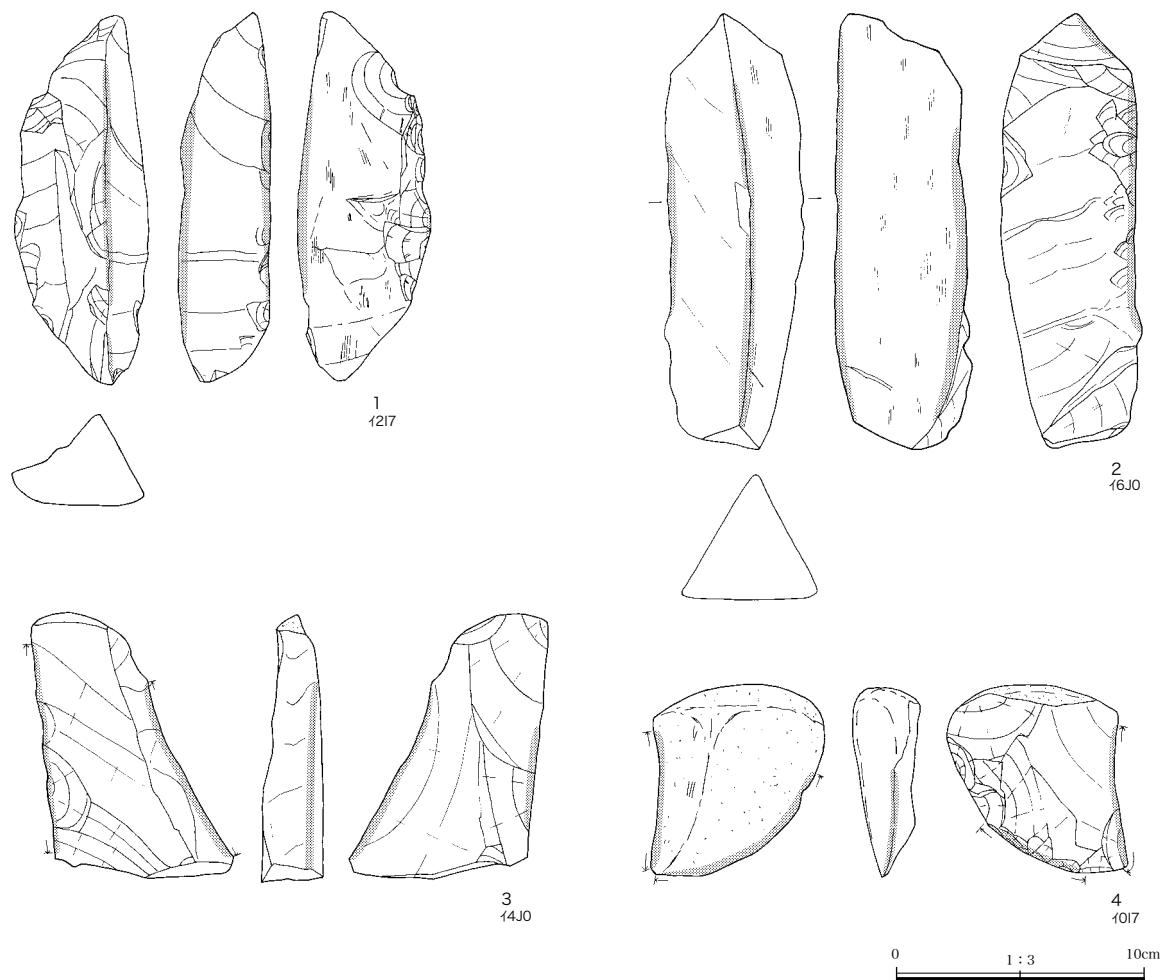
第 335 図 1～5 は注目されるもので、溝状の窪みが帯状不定方向に巡るものである。凹んだ溝内での磨痕・研磨痕が顕著であるが（網点トーン部分）、他の面・部分も使われることが多いようである。近年類似する形態の砥石が南関東沿岸部で貝輪製作に関わるものとの指摘が為されているが、刈沼遺跡の位置を考えると、検討が必要ではあるが、骨角器製作との関わりを想定できる。第 335 図 6～8 は手持ち砥石の代表例である。9 以下は線状痕ある礫として当初分類されたものである。9 は整った楕円形～円盤状の形態で、シンボリックに捉える意見もあろうか。10.11.13 はかなり不整形な形態で機種判断を迷うものである。12 は第 333 図に示したような砥石例に近い。第 336 図 1.3 は複数状の深めの線状痕が認められるものである。線刻タブレットとの考えもあろうが、線の痕跡からは「ミガキ」や「擦り」の結果のように見た方が良いように思える。

12. 擦切具 (第 337 図)

やや大形の剥片縁辺に顕著な摩滅・擦痕・研磨痕跡があるもので、当初分類のまま擦切具としておく。総数 58 点出土しており、うち 17 点を示す。未掲載例についても詳細な観察・検討が必要であろうが為し得ておらず課題としておく。この機種についても実点数の把握は難しいが、当初分類での抽出・分類に大きな問題は無いようにも推定できることから、ここで把握した点数を大きく上回ることはいないと想定する。他機種



第337図 擦切具(1)



第338図 擦切具(2)

で当初分類したものがこの機種へと変更になったものは少数に留まる。

縁辺の稜を挟んだ面の1～2mm程度の範囲でこの擦痕跡を確認でき、その長さは5cm程度のものから10cmを超える痕跡のものまでである。縁辺の摩滅顕著なスクレイパー類とも言い得る。1辺のみの例もあるが、複数辺に及んでいる例も多い。平面形状は多様であり定型性を窺えない。石材はホルンフェルスが基本のようである。礫面をとどめるものも比較的多い。薄い板状・扁平状の剥片素材例もあるが、厚手の板状、断面三角形形状、円礫に近い形態例などもある。第338図1.2のような三角柱状の剥片(礫)縁辺を用いる例もあるが、やや少数かもしれない。縦断面二等辺三角形に近くその角となる3辺とも擦痕跡が認められる第337図9のような例がやや多い。第337図13のような、かなり鈍角となる辺でも研磨擦痕が加えられる例があることも注目される。また同図5や7のように、使用によりすり減って湾曲している例もある。近年、石剣類の製作に関わる道具と指摘されている例と類似しているように見えるが、本遺跡出土例を同種の(同機能の)石器として良いかは判断できない。今のところ関東地方では後期後半以降の遺跡で出土例がいくつか認められるようであり、今後の検討が必要となろう。

13. 特殊敲打具(第339図1～10)

小形礫の1面に敲打痕を有するものである。総数は28点出土している。この機種は比較的形状に特徴があり定型的とも言い得るが、敲打痕跡はさほど明瞭ではなく、「礫」のまま扱ってしまうものも多いことが予想



第339図 特殊敲打具・その他の石製品

される。従って実数の把握は難しいが、比較的丁寧に当初の機種分類で抽出されていることを考えれば、ここでの点数を極めて多く上回ることはないと思込んでいる。

平面形状は楕円形～三角形を呈するものが目立つ。3 cm～5 cm程度のもが多く、6.7 はやや大きい例と言える。縁辺での敲打痕跡もあるが、面上での敲打～磨痕跡が特徴的である。断面形状で示されるように平坦面の反対面は丸みを帯びて凸レンズ状となる場合が比較的多い。敲打痕や平面形状に注目すれば1～4.8と5～7.9.10 とでは異なるもの或いは分類すべきものとした方が良いかもしれない。側面や端部での敲打という意味では、磨石類中の敲石・ハンマー類とも共通し、また共通する機能があると言えるが、平坦面での敲打・磨痕という点から、別の機種と一応捉えておく。但し数が少ないこと、「自然礫」との区別が難しいものも多いことなど、更なる検討が必要であろう。

14. その他の石器 (第 339 図 11～14)

11 は石製円盤と分類したものである。表裏面側面とも丁寧に研磨されている。13 は特徴的な形から当初分類で注目されたようだが、平断面形状にうかがえる突起状部分は意図的な作出とは言い難いもので、端部1箇所の敲打痕のみ「石器」との判断を示し得る。14 の孔も人為的な穿孔として良いか確実性は低いが、比較的整っているようにも見え、意図不明で検討が必要ながら、一応人為が加わっている石器とした。

第9節 石製品

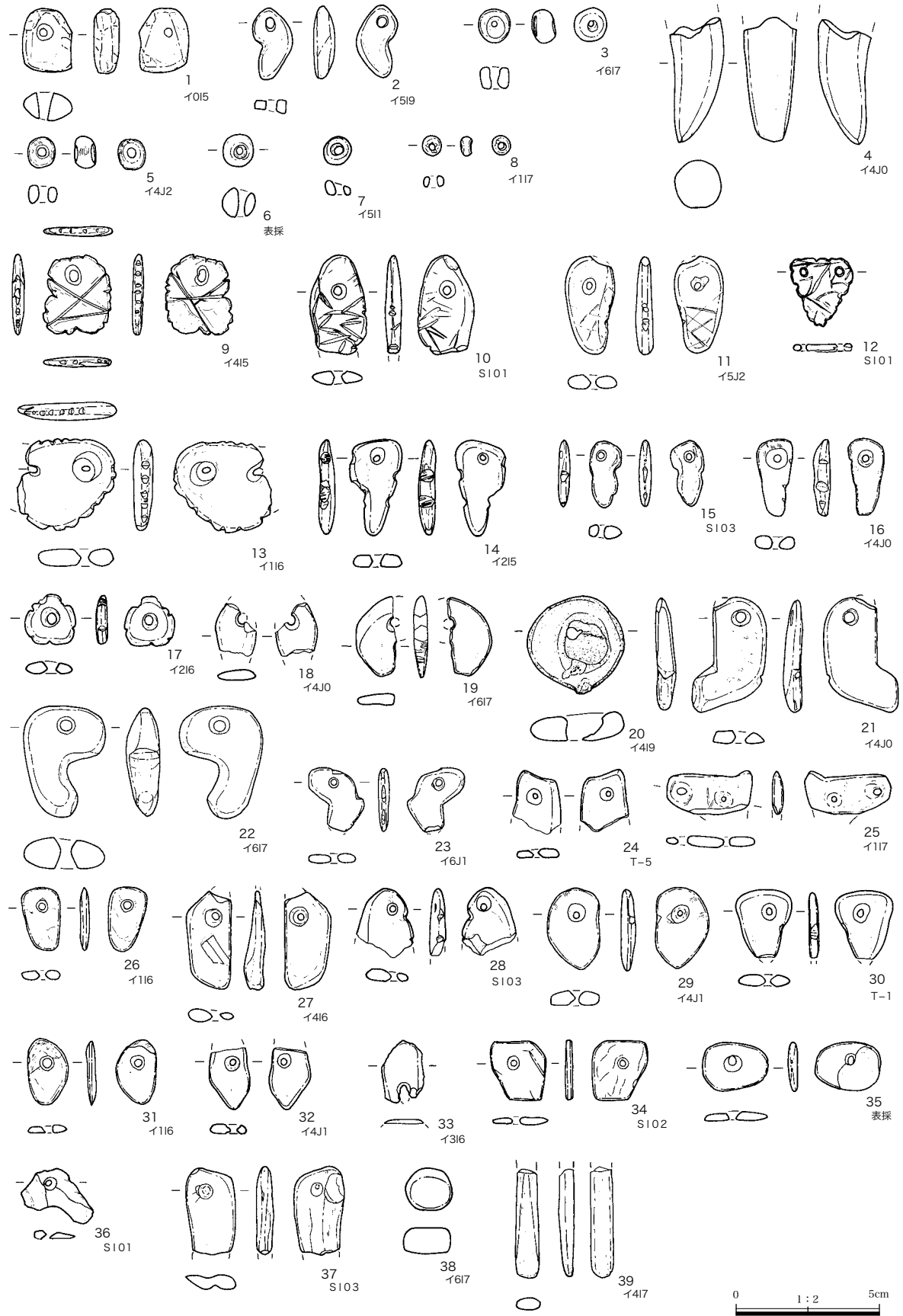
石製品として垂飾玉類、石剣・石棒類、独鈷石、石冠が出土している。

1. 垂飾玉類 (第 340 図)

垂飾玉類は総数 39 点出土しており、すべて示した。整理時に確認したものはすべて図示しており、調査時のサンプリングエラーの可能性は残るものの、概ね実数に近い数量と評価できよう。ここでは、第 340 図 20.38.39 のように、イレギュラーなものも含めている。定型的な垂飾に限定すべきとの考えもあるが、当初分類を活かしつつ、可能性があるものはすべて示すこととした。項目立てしての分類は行わないが、いくつかの種別があり、それらに注意し配列した。特異な出土状況や共伴、特定遺構・グリッドに集中するような状況は確認されていない。いくつかは住居跡出土であるが、住居跡出土遺物は複数時期混在状況であり、時期推定には至らない。

整形は基本的に研磨整形によっているが、痕跡を顕著に残すものは見られない。非在地石材の1～8では光沢を帯びるような平滑面が作られるが、それ以外ではあまり研磨しない、或いはほとんど研磨しないような例も認められる。また穿孔については、両面穿孔を基本とする。穿孔面及び周囲の調整については若干の違いがあるようだが、検討し得ていない。以下では文様の有無や整形の程度などに注目し配列したものを順に概略的に示す。全体を形態で分類する方法もあるが、上記の視点によった。

第 340 図 1～8 は非在地石材によるもので、概ね丁寧な研磨整形が見られるものである。厚手の1、勾玉状の2、白玉状の3.5～8、大きめで牙状の4という形態差が確認される。9以下が在地石材によるもので、総じて薄手の板状である。12までは表裏に文様を施しているものを示す。穿孔と共に細かい線刻状に文様を施しているが、文様意匠に統一性はなく、また土器や別種製品文様との相関も良く分からない。9のようなX字状の構成は石剣類等で見られる文様であるが(石剣第 341 図 1 など)、関係性は不明である。12は逆三角



第340図 石製垂飾品

形状（サメの歯状）で、上端二か所に穿孔を設ける点でも特徴的である。

12～17は縁辺に刻みや切り込みの装飾を施しているものである。12や17等は連続的な刻み、14.15.16は特定範囲への刻みと観察される。14は2個1対の刻みを左右に配しているようにも見える。3例ではあるが14～16の形態・刻みの共通性は注目しても良いかもしれない。

18～20は少しイレギュラーなものである。20は穿孔があるものの、大きく窪む面での孔でどの程度人為的なものか疑問なところもある。21以下28までは整形痕跡が比較的明瞭なものである。29～35、36.37は平面形状の整形はやや不明瞭ながら、あるいは部分的な整形だが穿孔が認められるものである。上位に幅がある楕円形～鯉節形に近い例が多いが、36.37のようにかなり形の違うものも認められる。25は横長形状で図示したが、90度回転させて縦長形態で考えた方が良いかと思われる。38は白形に近いもので、穿孔もなく垂飾として良いかの判断も難しい。穿孔前未製品の可能性もあろうか。39は小形棒状のもので、これも垂飾として確定しがたい。穿孔は無い可能性高いが、棒状の各面は丁寧に研磨されている。

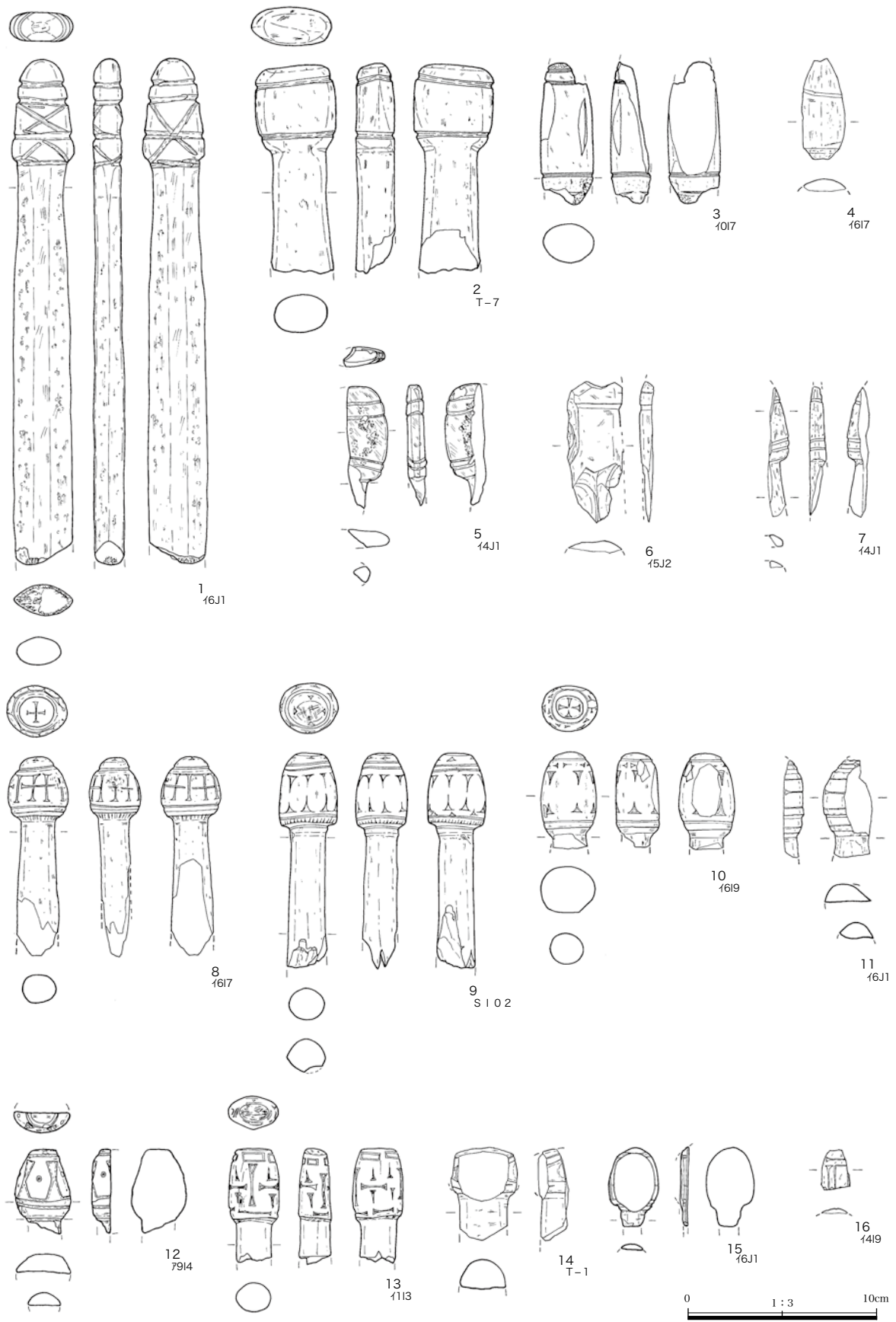
2. 石剣・石棒類（第341～346図）

石剣・石棒類は総数507点出土している。定型的な製品はすべて破片で完存例は無い。総数にはかなり小さな小片（1～5cm程度）も含んでいるが、詳細な接合や個別別分析は行っておらず、同一個体片も多く存在している可能性がある。このこと自体も、つまり破片化の事象も、多くの被熱例の存在と共に注意すべき点であろう。一方、この機種種の判断は石材などからさほど困難ではないものの、やはり磨痕ある礫や破碎礫などに分類したものがこの機種種となる可能性は残り、実数の把握は難しい。

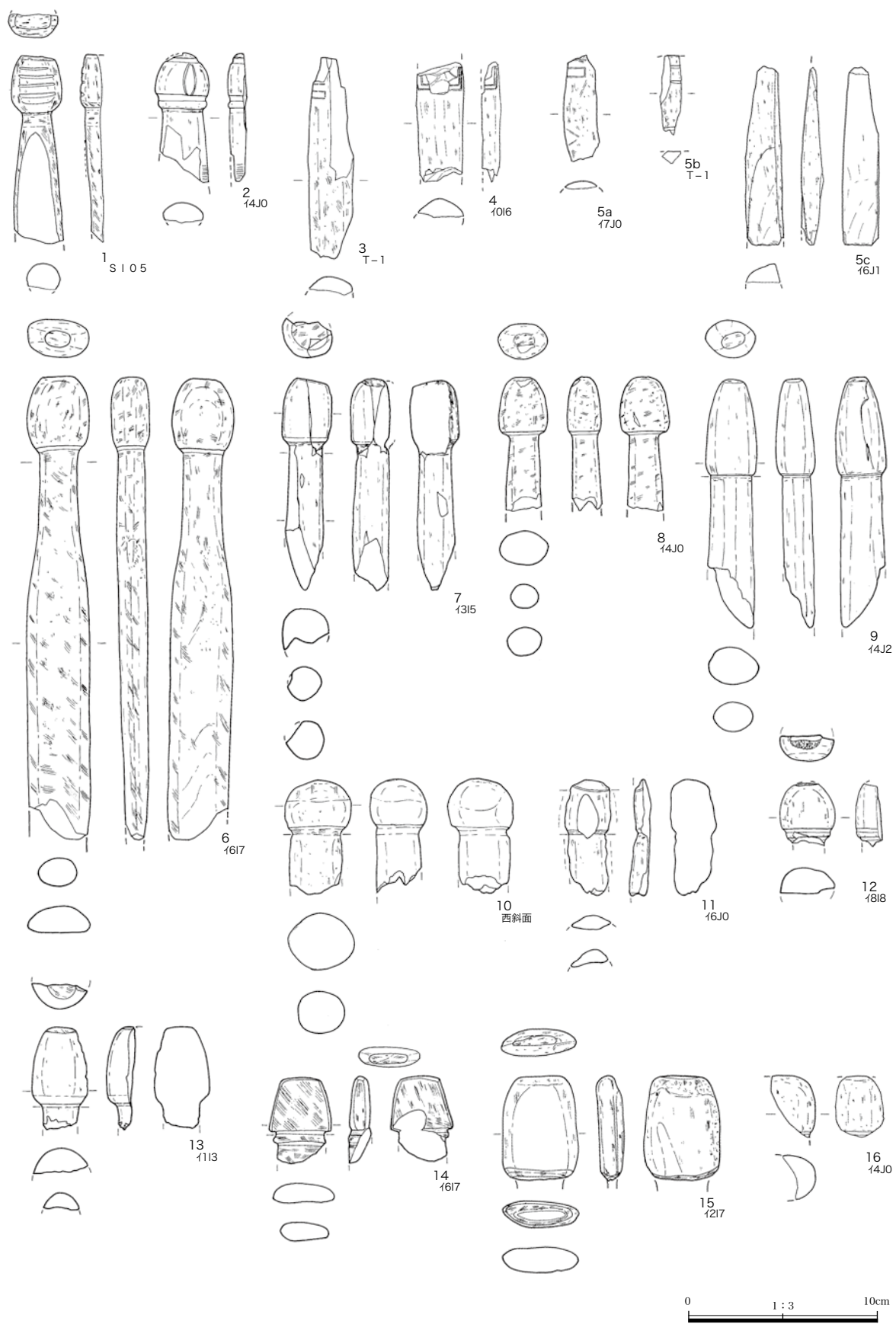
文様がある破片や特徴的な破片は可能な限り示すよう努めたが、特徴的な部分があり見られない頭部・基部以外の破片はかなり限定しての図化とせざるを得なかった。また定型性に欠けるもの、未製品の可能性があるものについても便宜的に含めており、この点も注意が必要である。

本遺跡出土の石剣・石棒類は、かなり多くの種別が確認されており、近年の系統論・型式論・編年研究などを踏まえた詳細な分類を行うべきかと思われるが行い得なかった。但し部位や文様の有無、断面形などに注目して挿図中の配列は行っている。なお特異な出土状況や共伴、特定遺構・グリッドに集中するような状況は確認されていない。いくつかは住居跡出土であるが、住居跡出土遺物は複数時期混在状況であり、時期推定には至らない。なお、第344図3.12はやや離れて出土したものが接合したもののようであり注目されるが、現時点で出土位置の記録を確認できていない。

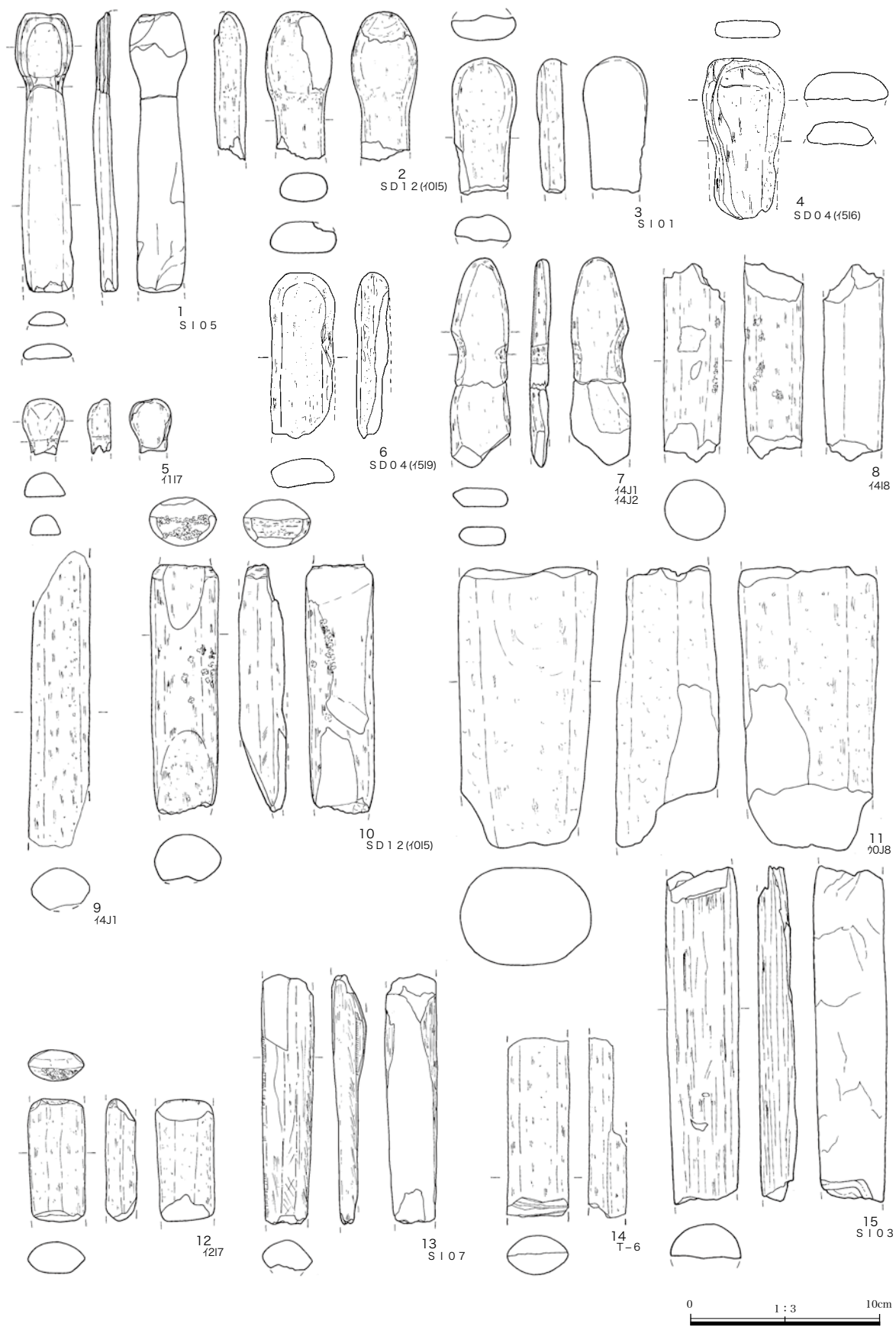
第341図1～16は文様のある頭部破片である。横位線のみ2.4.5や、緑泥片岩製でX字状文様の1などもあるが、I字文表現例が目立つ。8～10は、頂部の文様も含め、頭部文様・形態・大きさともかなり類似している。12はI字部分がやや広い面的な表現となっているものである。第342図1～5にも有文例を示す。5a～5cの3片は同一個体と推定されるものだが、接合せず、位置関係は判然としない。3・4も括れ部分が確認できず、不明な部分がある。基部の可能性もあろうか。6以下は頭部無文の例である。無文とはいえ丁寧に作出・研磨されており、或いは14.15のような明瞭な段の作出は文様に近い表現とも言える。一方第343図2～6は頭部と以下の体部との境界がなだらかなもので、上記の例に比べやや粗い作りの感がうかがえる。第343図8～15、第344図1～9は中位部分の破片である。第343図10.12、第344図5は割れ口断面・剥離面に敲打痕が観察され、再生あるいは転用例と推定される。第344図1はI字文表現があるもので、頭部近い頸部での装飾であろうか。344図7.10.11は無文の基部と推定される破片で、断面円形のものである。いずれも側面で見ると先端やや鋭角な刃部に近くなる例もある。12は横断面レンズ状の「石剣」で複数破



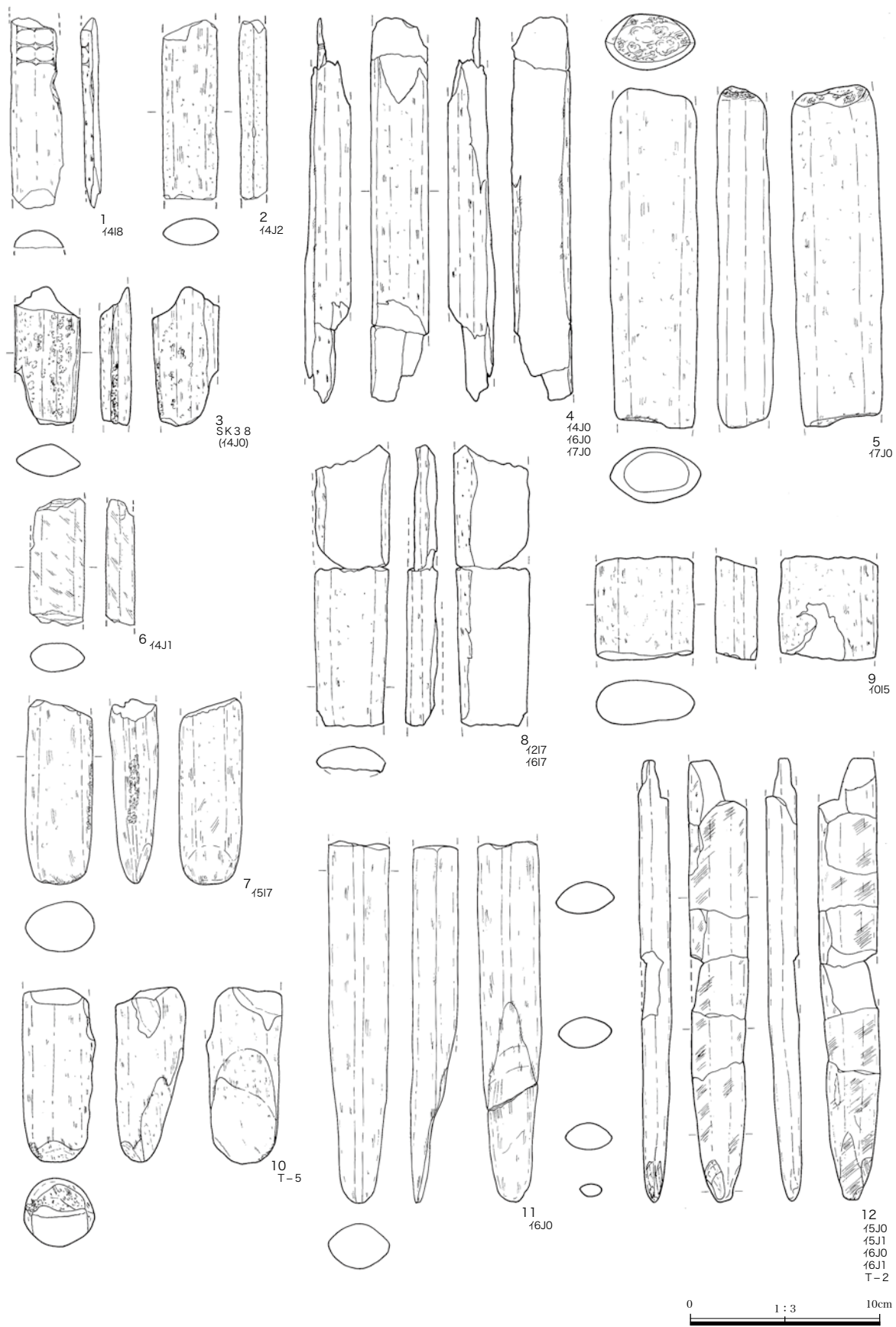
第341図 石剣・石棒類(1)



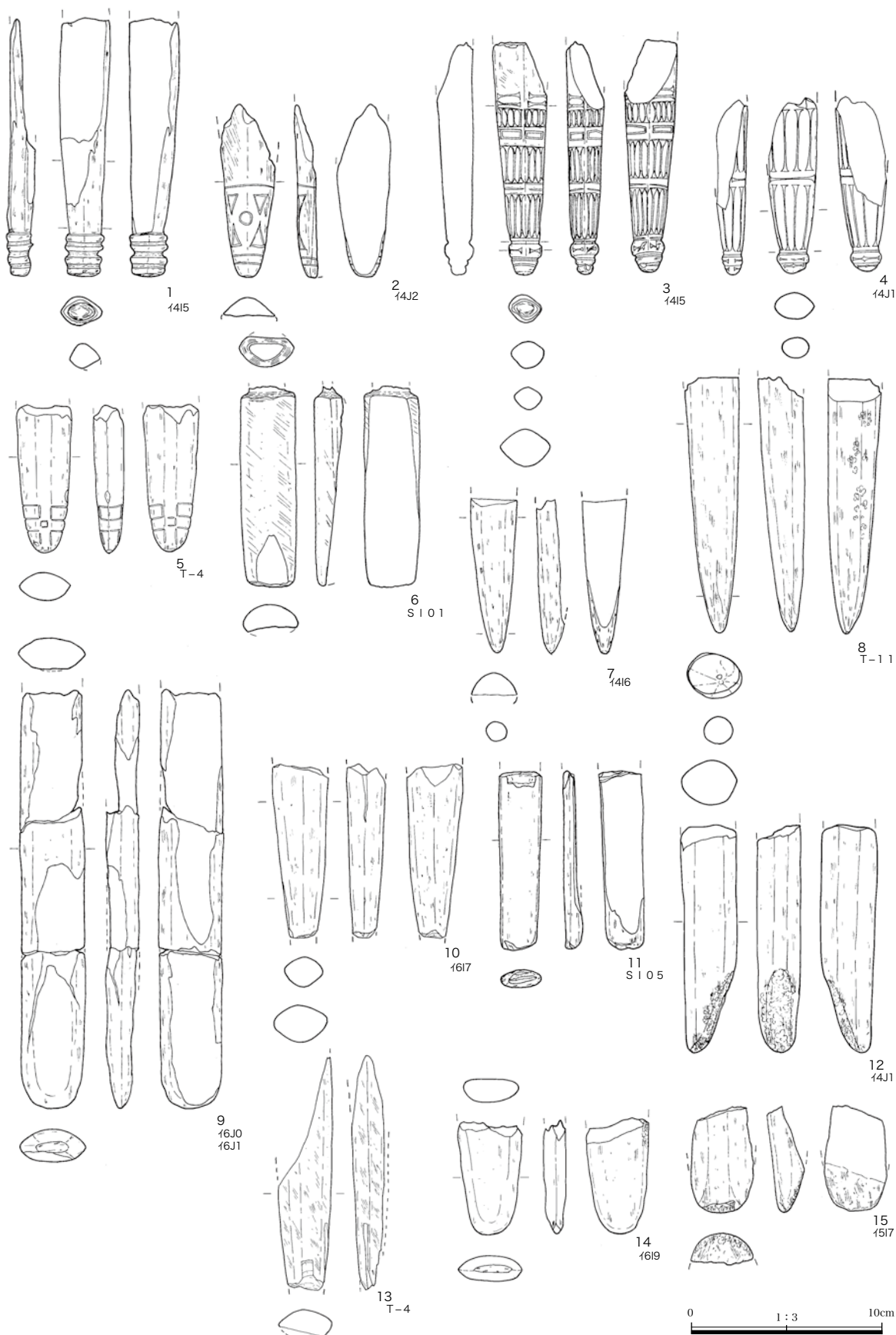
第342図 石剣・石棒類(2)



第343図 石剣・石棒類(3)



第344図 石剣・石棒類(4)



第345図 石剣・石棒類(5)



第 346 図 石剣・石棒類 (6)

片が接合した例である。研磨線状痕が良く残されている。

第345図1～5は基部有文例である。凸帯表現の1、三角形対向文様の2、I字文表現の3.4、長方形文様の5と多様である。3.4は入念な研磨調整・繊細な線表現で、丁寧な質感がある。6以下は基部破片で、先端細くなるもの(7.8)、鋭角な刃部状となるもの(11.14)丸みを残すもの(15)などの種別がある。

第346図1～9には剥離痕や敲打痕を残すものなどをまとめた。1.2.5は側縁での顕著な敲打痕が確認できるものの、表裏面では剥離痕が残るものである。4は裏面の礫面に若干の敲打、剥離面に敲打という痕跡を確認できるもので、完存とすればかなり短い石剣類となる。3もかなり短いもので、剥離面への敲打はあまりないものの、側面や端部に敲打を加えている。6～8は敲打痕跡がかなり多く認められる破片である。敲打部分で割れ・欠損・剥離しているようにも見え、敲打時欠損の可能性もあるが、良く分からない。9は基部の破片で剥離→敲打痕跡が確認できるものである。表裏面への研磨は顕著ではなく、礫面を活かしているようにも見える。10は不整形板状の礫に敲打・研磨痕跡が確認できるものである。定型的な石剣・石棒ではないが、一応ここで示す。11も不整形棒状(円柱状)のもので、敲打及び若干の研磨痕跡が確認できるものである。上下とも割れ欠損だが、端部に近いことが想定される。上位が若干細くなっており「無頭石棒」となる可能性もあるが、やや全体で短いこともあり、判然としない。

3. 独鈷石(第347～352図)

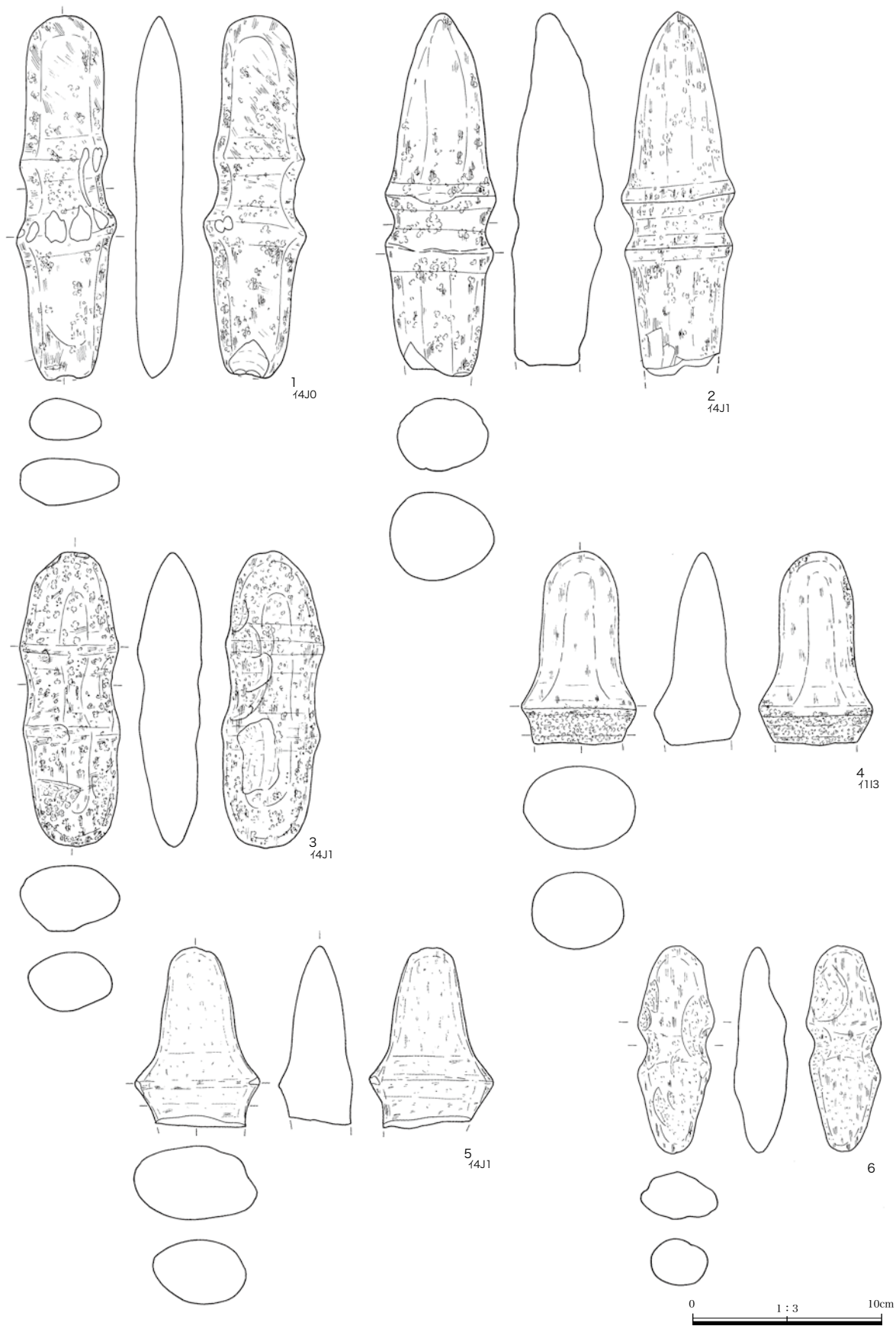
総数57点出土しており、このうち37点を示す。ここでも項目立てしての分類は行わないが、形態などからいくつかの種別確認が可能で、これに注意して配列図示した。特異な出土状況や共伴、特定遺構・グリッドに集中するような状況は確認されていない。但し数点は晩期中葉が主体を占める中央窪地のI4J0.J1グリッド出土であり、時期推定の参考になるかもしれない。なお製品、未製品の区別は難しく、両者を整然と区別し得ない。未製品の可能性があるものについては、以下に示す個別の記述の中でも適宜触れる。

第347図1～5は縦長・細長い形状で凸帯が明瞭なものである。断面円形～楕円形で先端が細くなる或いは磨製石斧刃部状になる傾向がある。総じて入念な研磨で、石材もやや硬い質感のものが目立つ。4は凹部の敲打整形が顕著に残るものである

第348図は第347図例に近いものだが、変異形や破片を示す。1のような扁平な例も特徴的である。4.5.6は括れ部凹部の敲打整形が残る例である。7は剥離痕を残すもので、敲打も不十分な感がある。一般的な見方をすれば「未製品」という扱いになろう。

第349,350図は幅・厚さに対する長さの比が低くなるものである。また凸帯の形状も若干異なるものが多い。扁平な第349図1～5、第350図2と、断面円形の第349図6、第350図1.3.4等とは分けて考えた方が良いかもしれない。後者は安山岩系を用いるのが多く、石材との相関も推定できる。第349図2は上下左右非対称の例、4は下方欠損例で比較的細長くなることが推定されるものである。第347図で示したグループとの中間的な様相を示すとも言えよう。第350図4はより扁平な板状の礫を素材としているもので、剥離による整形初期段階が想定されるなど、これも別に考えた方が良いかもしれない。下方欠損のように見えるが、刃こぼれ状もしくは敲打痕状の痕跡を確認でき、欠損後の再生あるいは意図的な剥離工程として考えるべきかもしれない。第350図2や同図6も含め、表裏中央の面はほぼ礫面で、顕著な研磨整形は見られずあまり手を加えていないように思われる。素材選択の問題や製作時の効率化や工程上の問題など示唆を与える。第350図7はやや細長い形状となるようで、第347.348図例や第349図4例に近い部分がある。

第351.352図は、形が非定型的で不整なもの、未製品、小片などを示す。独鈷石として良いか判断が難し



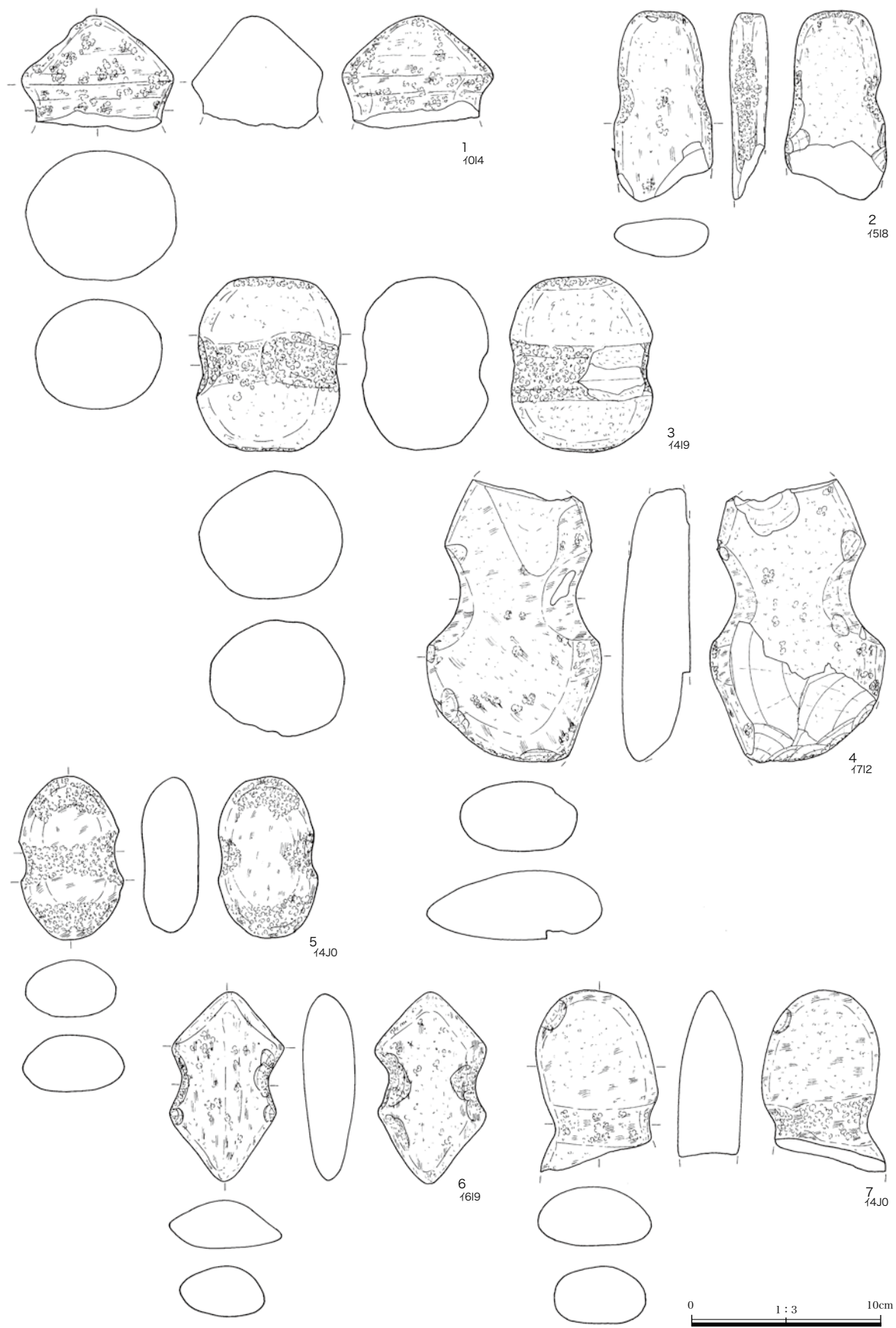
第 347 図 独鈷石 (1)



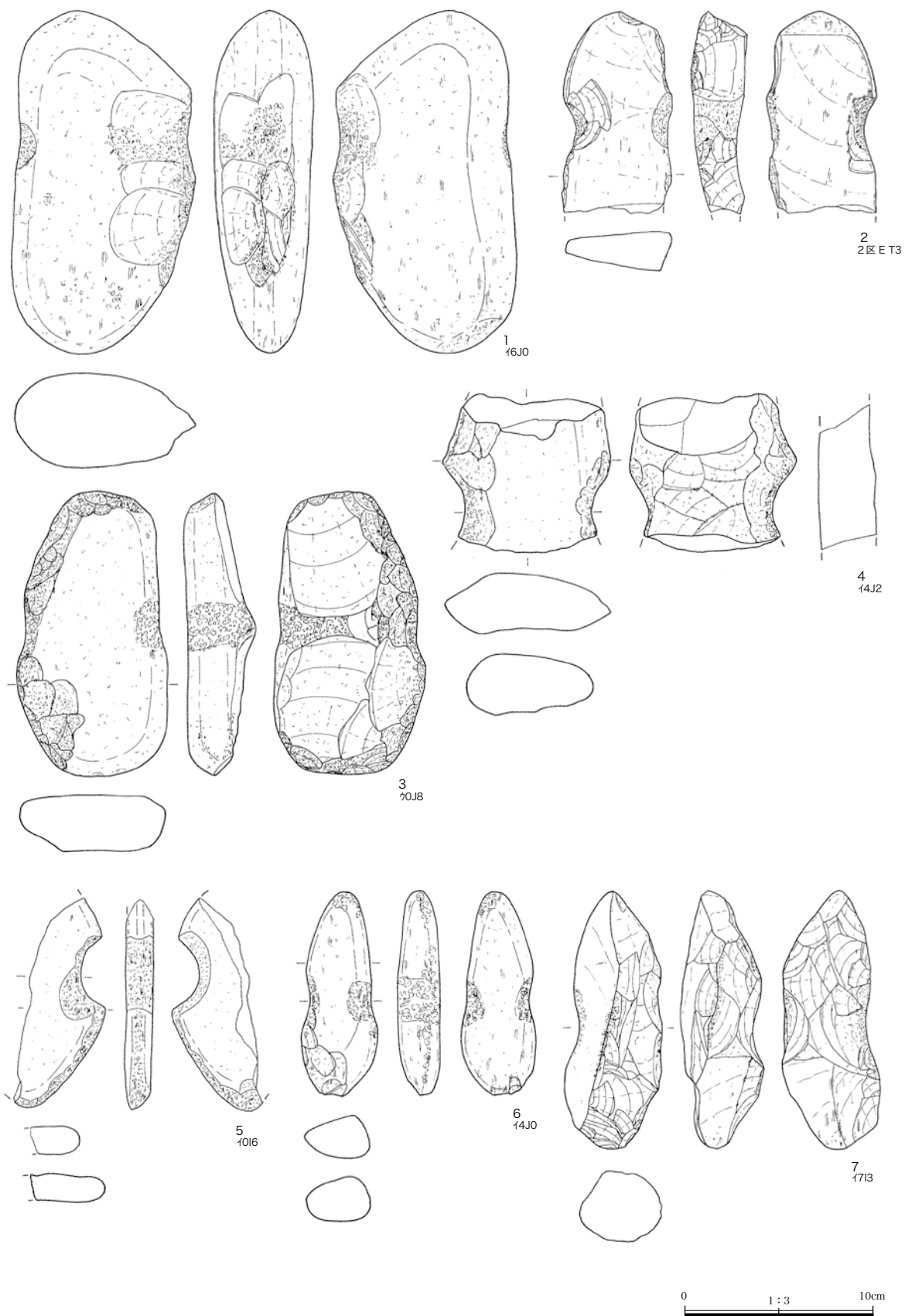
第348図 独钻石(2)



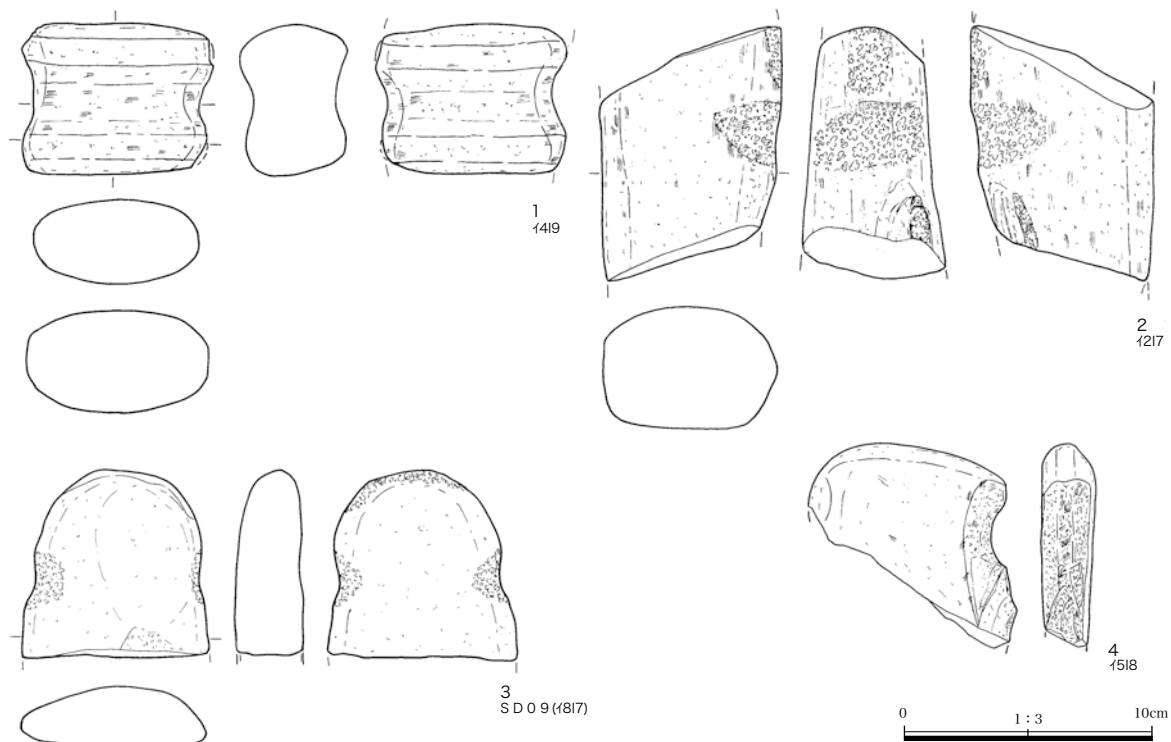
第 349 図 独鈷石 (3)



第350図 独結石(4)



第351図 独鈷石(5)



第 352 図 独鈷石 (6)

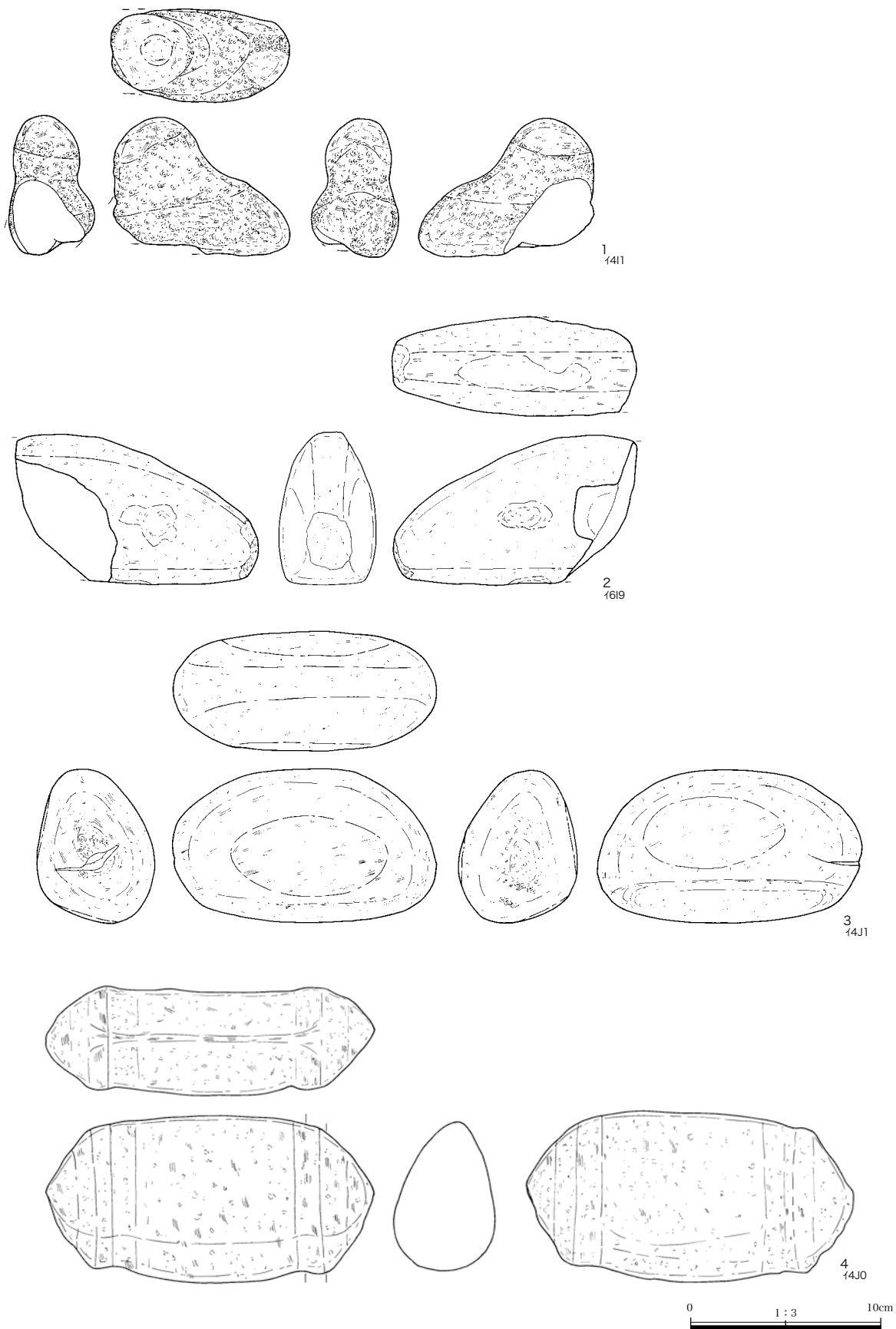
い例も含んでいる。1 はやや厚手の礫の側縁に剥離→敲打が見られるものである。凹部も作られておらず、独鈷石とするには問題が多いが便宜的に含めておく。2.4 も側縁中央に剥離→敲打が見られるもので、打製石斧への分類も考慮したが、敲打が下方まで広く及んでおり、ここに含める。3 も同様に端部及び側面への敲打が著しいもので、独鈷石未製品の可能性を考えたが、検討を要する。敲打は表裏面には加えられず全周しない。5.6 は礫面を多く残し、括れ部を主として敲打がやや広い範囲に及ぶ。7 は断面円形に近いもので、第 347.348 図に示した細長い形態の未製品として良いように思われる。

第 352 図 1 は上下欠損とも考えたが、端部はいずれも比較的滑らかな面を為しており、この状態での使用を考えて良いようである。表裏側面は粗い研磨整形がされている。2 は上下欠損で側面に敲打痕が見られるものである。欠損の割れ部分は、敲打痕打点範囲の部分であり、敲打時欠損の可能性もあろう。3 は扁平な礫の側縁中央及び端部に敲打痕が見られるものである。打製石斧や敲石の一種とする考えもあるかもしれない。4 も機種判断が難しいものだが、側面への著しい敲打痕が特徴的である。

4. 石冠 (第 353 図)

石冠に分類したもの 4 点を示す。基本的に敲打→研磨整形が確認できるものである。4 は当初分類では独鈷石とされていたが、形状などから変更した。確認した限りではこの 4 点以外に石冠と判断したものは無いが、小片等では磨石類の破片などに分類されたものもあるかもしれない。

第 353 図 1 は研磨整形が顕著ではなく、敲打痕が多く残る。典型的な頭部作出の石冠と比べると括れ・凹部の作出が不十分な感があり、未製品とする考えもあるかもしれない。2.3 は比較的丁寧に研磨されているが、3 は端部に敲打痕を少し残している。4 は安山岩製のもので、両端部近くに若干突出の凸帯を作出している。横断面三角形で、上端比較的整った稜が形成されている。



第 353 図 石冠

第10節 弥生時代以降の遺物及び補足分

手燭形土製品（第354～355図）

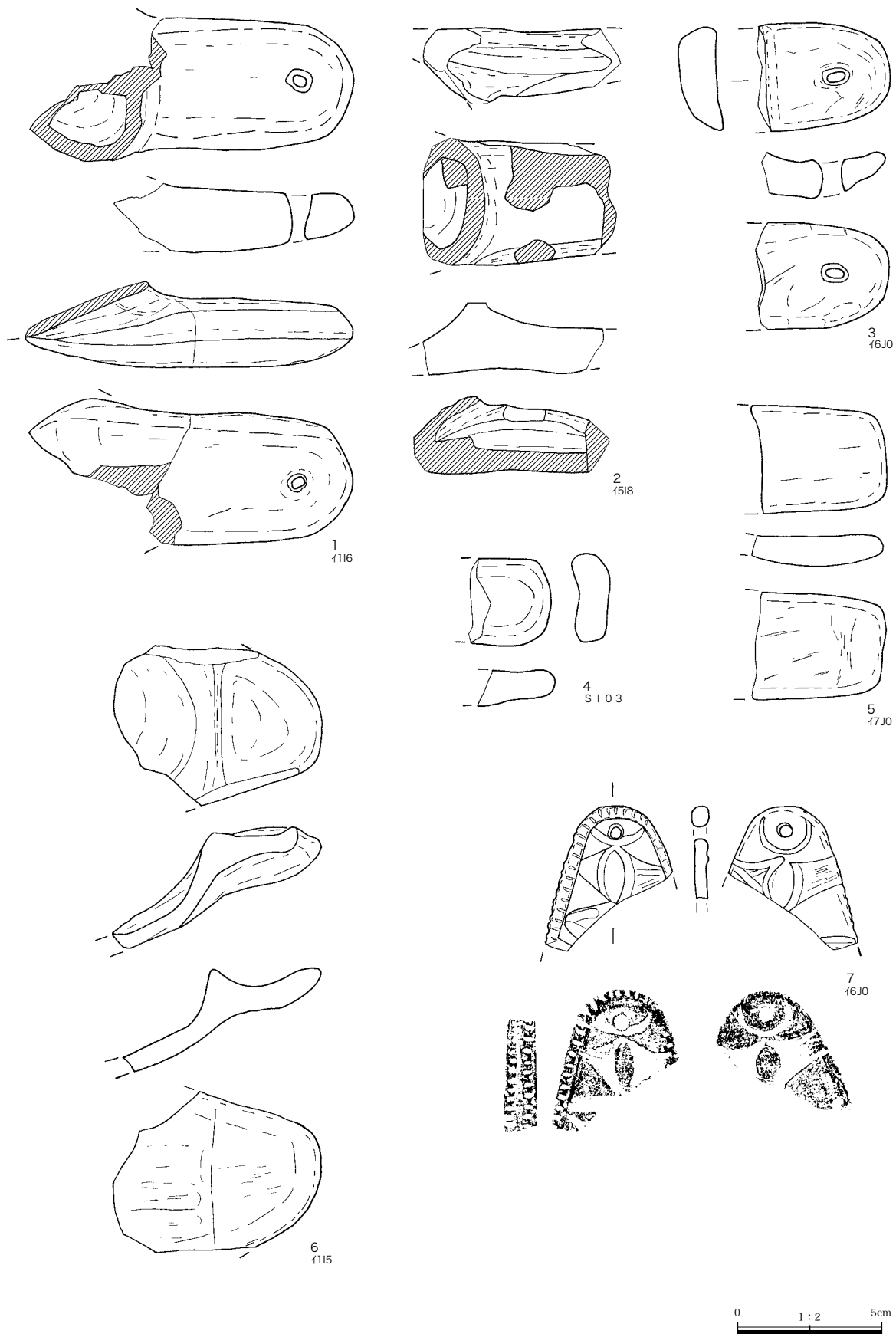
手燭形土製品は7点が確認されている。第354図7は垂飾の可能性もあるので、除外すべきかもしれない。一方土版で示したもの（第263図7）や、垂飾品で示したもの（第267図6）も手燭形土製品となる可能性がある。特異な出土状況を示しているものや特定の遺構・グリッドへの偏りは認められない。以下ここで示すものについて、簡単に観察記録を示す。第354図3は手燭形の柄部分である。表裏とも粗いナデ調整で、凹凸を残している。にぶい黄褐色を呈し、胎土には白色粒・石英をやや多く含む。表裏に抜ける貫通孔は楕円形でやや大きめである。第355図3は皿状部分で右端は柄接合部に近いと推定する。匙形土製品かもしれない。全体ナデ調整後縁辺に刻みが施され、その後ナデ～一部ミガキ調整が加えられるようである。皿部分がやや丁寧な調整である。裏面側も磨かれている。一部沈線状に見えるところもあるが、調整痕かもしれない。色調は表裏とも灰黄褐色を呈する。第354図4は柄の部分で表裏ナデ調整、中央が若干凹む。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には白色粒を少量含む。第354図2は柄～接合部の破片で、かなり厚手で幅があるものである。全体を推定すると長さ15cm程度となろうか。にぶい黄褐色を呈し、胎土には白色粒を多量に含む。表裏ともやや粗いナデ調整だが、皿部内面はやや丁寧に調整される。第354図5は手燭形土製品の柄部で長方形板状の形態である。やや粗いミガキ～ケズリ調整で、表裏面平滑になっている。胎土には白色粒をやや多く含み、色調は表裏とも褐色を呈している。

第354図7は表裏に浮彫的な文様表現のあるもので、手燭形土製品もしくは垂飾品或いは土版である。手燭形であれば貫通孔を右側に据えての図示になる。縁が厚く中央は薄い。縁辺～側面に付される刻みは、左側面では二列、上端では一列、右側面では浅く一列である。表裏の沈線は縁辺にまで及ぶが施文順ははっきり確認できない。表裏面で沈線施文後にミガキが加わり、側面も一部磨かれる。胎土には不透明白色粒をやや多く含み、色調は黒褐色を呈する。第354図1は比較的遺存が良く、推定では14cm程度の長さとなる。最大幅5cm、厚さ3cmを測る。かなり厚く作られているが、上下で異なり図上位側が特に厚くなっている。大きくは板状の柄部と言えるが、ナデ調整基調（一部ミガキ）でやや凹凸も残る粗い作りという感がある。皿状受け部分はやや丁寧な調整が観察される。表面にぶい橙色、裏面にぶい黄褐色を呈し、胎土には白色粒やや多量、石英・灰色粒少量を含む。胎土・質感は土器胎土に近い。

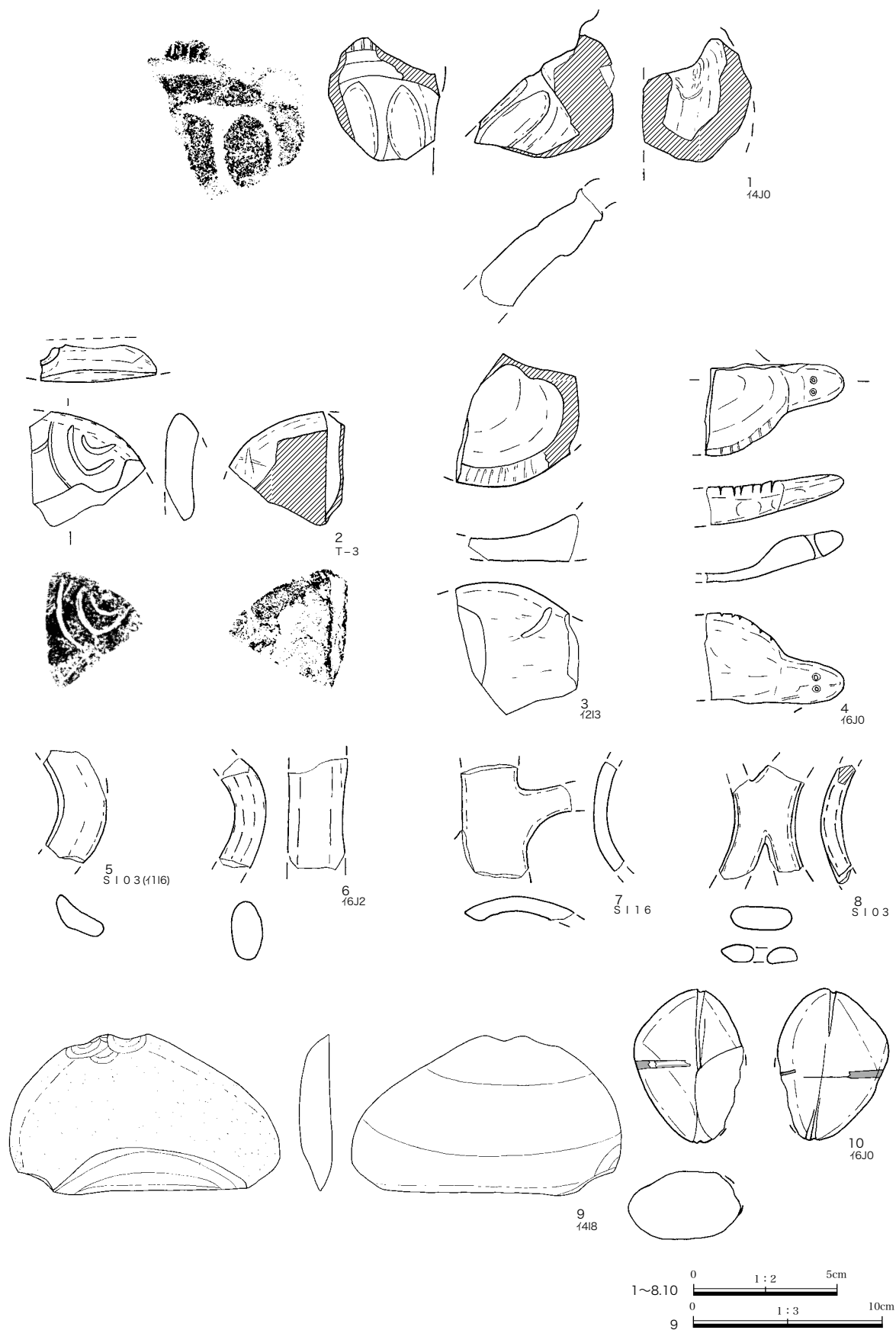
匙形土製品（第354～355図）

2点確認されている。匙形土製品を小片で確定するのは難しく、土器や別種土製品に分類しているものもある。以下の2点はほぼ匙形として良いと考えるが、手燭形土製品との区別は厳密なものではない。

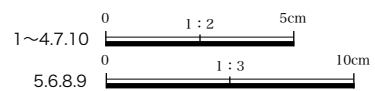
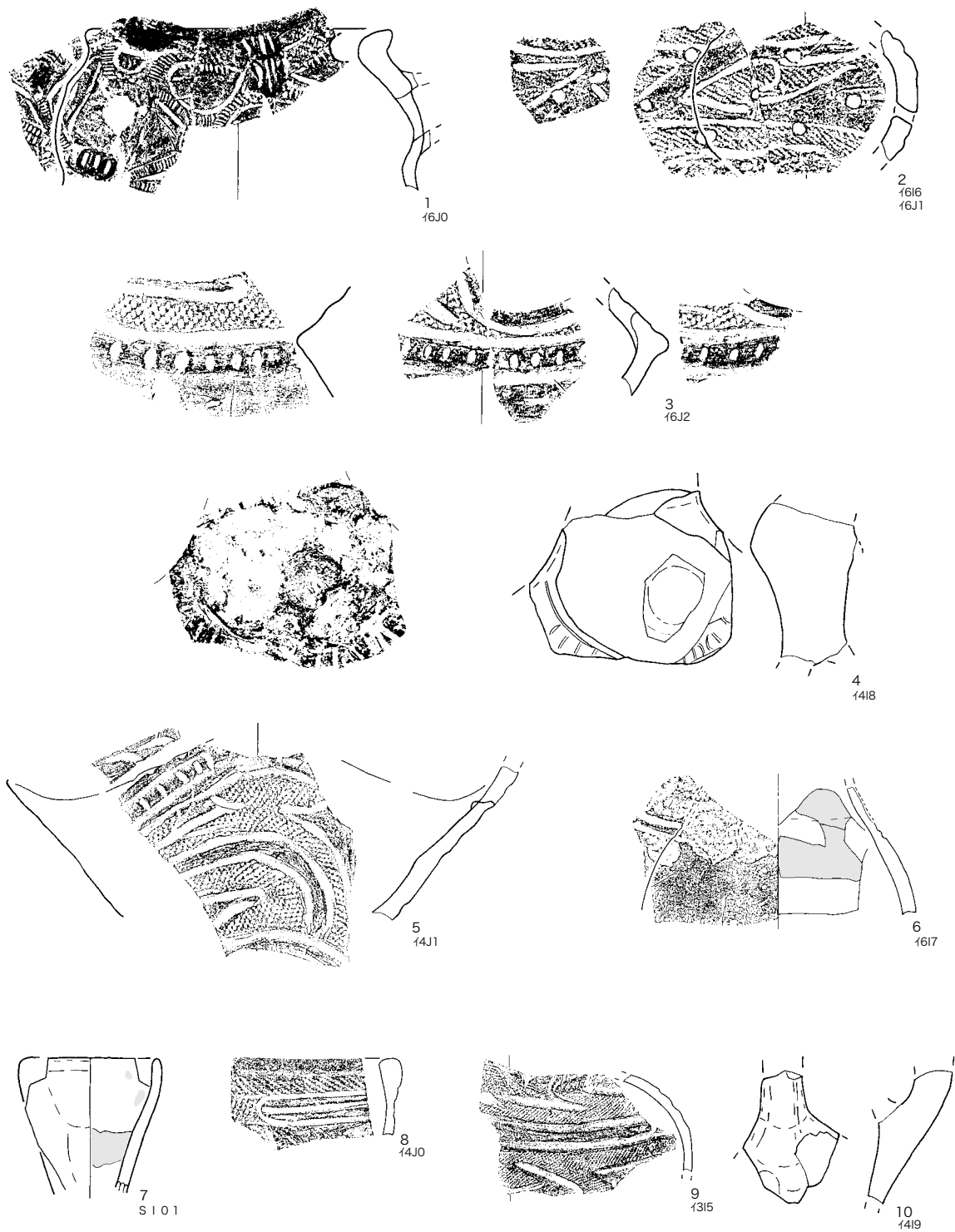
第354図6は匙形土製品と推定したが、手燭形土製品や別種土製品とする意見もあるかもしれない。柄部と皿部分は明瞭な稜線（壁）で分けられ、柄部側も皿状に中央が凹んでいる。皿部は緩い角度で拡がり、推定長11cm程度となろうか。表面（図上面）はミガキ調整、裏側（図下側）はケズリ～ミガキ調整が観察される。胎土には石英・白色粒を多量に含み、色調は表面褐灰色、内面灰黄褐色を呈する。土器胎土と大きく変わるようには見られない。第355図4の匙形土製品は、全体推定で長さ8cm程度、恐らく1/2程度は遺存していると考えられる。縁辺に刻みを施しているが、細くやや浅めの施文である。柄部で見られる2個の貫通孔もかなり細い。内外面にぶい黄褐色を呈し、緻密な胎土で鉱物はあまり含まない。調整はナデ～ミガキで、皿部分が丁寧なミガキ調整である。



第 354 図 手燭形土製品



第 355 図 土製品・石器補足分



第356図 土器補足分

その他の遺物（補足追加分、第355～356図）

第355図1はI4J0グリッドから出土した土偶破片で、肩～腕部分と推定する。腰～脚部の可能性もあるが、内面の接合部に見られる著しい捻れなどから肩部分の方が整合する。上位に刻みの付される隆起帯部分が一部認められ、無文帯を挟んだ下方で所謂I字文が表現される。外面にぶい黄褐色、内面灰黄褐色を呈し、胎土には石英をやや少量、白色粒少量を含む。2は土版の破片で1/6程度の遺存と推定する。破片裏側は欠損部が大きくあるが、縁辺に貫通孔と推定されるイキの部分があり、上部右側若しくは下部左側となろう。長軸の中央で上下に抜ける貫通孔を設ける例は寺野東遺跡出土の土版などでも認められている。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中の鉱物は少ない。文様の沈線はやや細めで、やや粗いナデ調整の後に施されている。

第355図5.6は貝輪状土製品である。5はにぶい黄褐色、6はにぶい赤褐色を呈し、いずれも全体ナデ調整である。小片で別種土製品の可能性も残る。特に6は直立する傾きから、耳飾りなどの可能性も示しておく。県内出土例の大半が後期初頭～前半に伴う可能性が高いことも気がかりな点である。

第356図10はI4I9グリッドから出土したもので、土器の橋状突起部分と推定する。匙形土製品などの可能性もあるが、内面の調整は土器的である。質感はかなり堅緻で良好な焼成感があり、古墳時代以降の可能性もあろう。色調はにぶい褐色、胎土中の鉱物は少なく、灰色粒を少量含む程度である。

第355図7.8は薄い板状で、土器の可能性もあるが、土製品の可能性も残るものである。表面側は良く磨かれ（特に7）、内面はナデ調整である。8はにぶい褐色、7は灰黄褐色を呈する。8の胎土には石英・雲母・白色粒を少量含む。8も含め胎土や質感は土器と大きく変わらない。8はX字状、7は十字に近い4方向にブリッジ（帯状部）が伸びており、異形台付、吊手土器や香炉形土器の頂部等の可能性を考えたい。

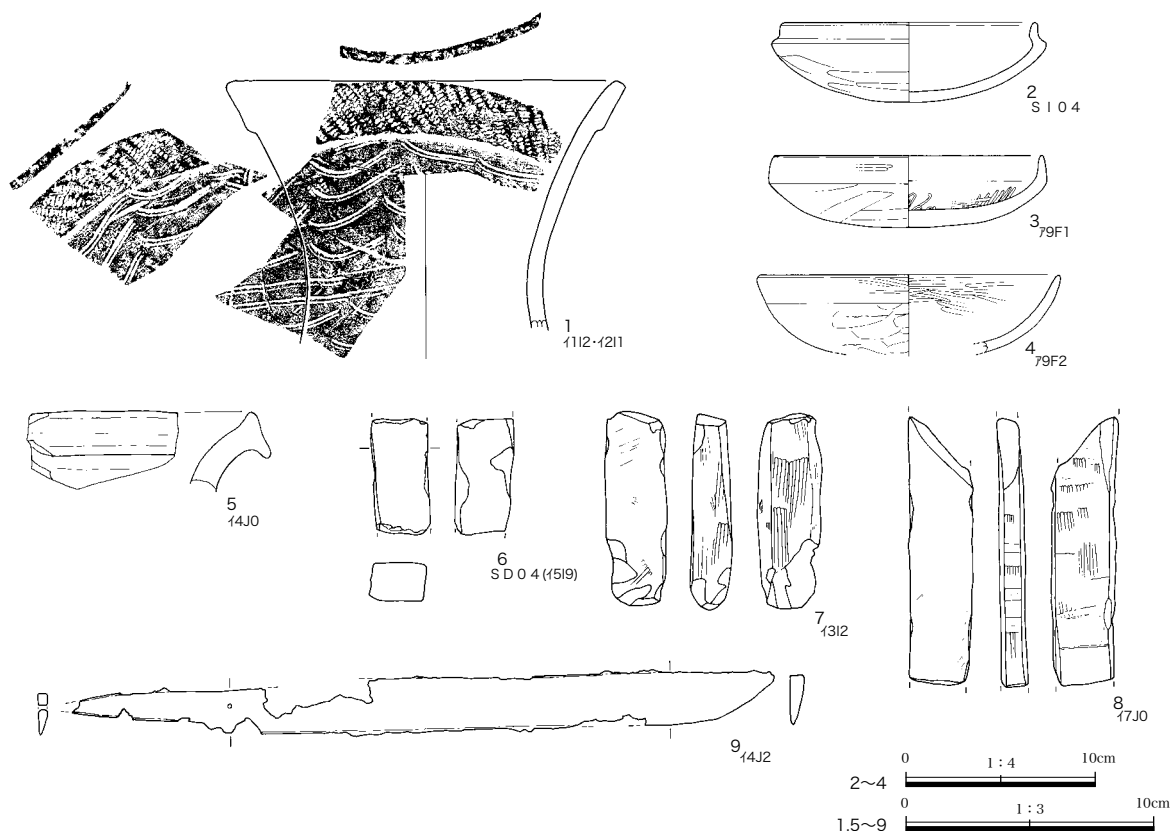
第356図4は顔面付土器と推定されるもので、便宜的にここに示す。顔面は剥落しており、かなり厚手の破片であること、内面調整も粗い点など疑問な部分も残るが、遺存部の形態から単体の土偶と考えにくい。比較的大きな土器の波状縁頂部に付されたものと考えておく。第356図1は異形台付土器の口縁部破片で、当初の図化から漏れたことから、ここに示す。色調は褐色を呈し、胎土には石英を少量含む。質感や施文手法は安行式的である。2は異形台付きの中間部または脚部、3は香炉形と推定されるものである。

第355図10は石錘で紐かけの痕跡が確認できるものである。長軸ラインで紐かけ溝部は確認されるが、これに直交するところに黒色部分の痕跡が認められる。長軸のラインを覆っているようにも見えるが判然としない。また一部二重～三重線のように見える。剥離割れ口部分にも若干認められることから、この部分の破損後に紐かけがされたことが考えられる。付着はアスファルトや漆の可能性があり、本来分析の必要があろう。接着剤系と推定した場合、紐かけ後の塗布の可能性と、含浸の紐かけいずれかとなろうか。この黒色部分では溝や打ち欠きの紐かけ痕跡は他になく、それにも関わらず紐掛けがされたこととなれば、この点も大きな問題提起となる。今後の分析や類例の確認が必要なものであり注意しておきたい。

第355図9は剥片の一縁辺に白色の付着物が確認されるものである。使用痕跡とは関わらないかもしれないが、一応示しておく。石器として顕著な二次加工は無く、剥片或いは使用痕ある剥片と分類される。擦切具のような顕著な摩滅痕跡も見られない。片面は礫面で、件の縁辺の反対側に若干の剥離がある。

なお図示していないが、焼成粘土塊が数点確認されている。I6J1グリッドから出土の1点は2～3cm程度の小さいものである。また蓋の可能性のあるもの1点がI4J1グリッドから1点出土しているが小片で確実性に欠ける。また土製品ではなく、資料の提示もできないが、強く熱を受けて変色・変質著しい破片が数点確認されている。灰色などへの色の变化や歪みなどで、発泡状態に近いものも認められている。

以上の他、不明な土製品が幾つかある。I1I6-0例は刻み隆線、太めの沈線による渦巻文など土器若しくは



第 357 図 弥生時代以降出土遺物

土偶の一部となる可能性がある。I4J0-16-13 区例は 3～5 cm 四方の平板な資料で、土版・手燭形などの可能性がある。I4K1S^ハ 5 例はやや扁平な棒状を呈するもので、吊り手或いは棒状の土製品と思われる。

尚第 356 図 7～10 には分析資料で用いた遺物を補足的に図示する。7～10 は赤色顔料が厚く付着しているものである。顔料付着例はかなり多く、整理当初で抽出されたものは 100 点以上にのぼる。中にはかなり厚く付着しているものや発色のやや良い顔料と見られるもの等もあり、より多くの分析が必要と思われたものの、限定しての委託分析とせざるを得なかった。結果については第 9 章第 3 節を参照されたい。また炭化物付着例もかなり多く、数点に限定せざるを得なかったが年代測定分析を依頼した。この結果については第 9 章第 1 節を参照されたい。他にも漆付着の可能性のあるもの等も見られたが、分析や図の提示には至らない。

他にも不明土製品が 15 点ほどあるが、小片・微細片が殆どであり、図化等を行わなかった。当初分類で土製品とされたもので土器と考えるべき例もやや多く見られた。現時点で見た限りでは大きな遺漏は無いと考えるが、見直しや再整理によっては追加報告・訂正の必要が生じる可能性もあろう。

弥生時代以降の遺物（第 357 図）

第 1 次調査区からは、弥生時代以降の遺物も一定数出土した。ここではそれらの内代表的なものを示す。またこれまでの挿図中にも幾つかは示している（第 190 図 6、第 251 図 8.9）ので、併せて参照されたい。

第 357 図 1 は弥生土器で頸部に連続する弧線文を描くものである。口縁端部にも縄紋が施される。2～4 は古墳時代の土師器杯・埴類、5 は中世陶器口縁部破片、6～8 は砥石、9 は鉄製品刀子である。以上はいずれも遺構に伴うものではないが、溝出土の 6 については多少の伴う可能性を残しているかもしれない。これ以外にも陶磁器片や古銭（寛永通寶）などの出土があるが示していない。

第3章 刈沼遺跡1次調査区の遺構と遺跡

第2表 刈沼遺跡第1次出土土器集計表

遺構・ゲリット	～加B	安1,2	瘤付	大洞	安3a,3b	A.沈刺	網撚	撚糸	縄紋のみ	無文	無文B	条線	製塩	付帯口	有文小片	計	その他
SI01 覆土		67	78	523	48	222	535	290	239	539	57	198	6	235	96	3,133	
SI01(イ5I9)		50	73	264	33	110	9		3	10	5			14		571	
SI02	3	14	28	128	26	125	55	23	46	170	31	20	2	64	27	762	
SI02(イ6J1)		95	165	398	80	292	12	2	15	30	43	23		30		1,185	
SI03	2	137	138	662	111	434	716	416	290	832	107	174	14	279	154	4,466	内耳1
SI03(イ1I6)		25	81	230	58	152	81		3	8	4		3	9		654	
SI03(イ1I7)		22	46	140	28	49	31		2	4	1		1	2		326	
SI04			3	2	6	3	1		4	14	2					35	
SI04(イ0I4)		5	31	53	33	43			2	10	10	3		5		195	中世1
SI05	1	9	38	113	22	34	96	133	42	80	12	17	4	35	22	658	
SI05(イ9I7)	1	4		36	8	11			3		1					64	
SI05(イ0I7)	3	15	38	109	26	42	4	1	2	4	6	2	6	6		264	
SI06		40	43	277	23	86	187	306	59	185	25	57	3	80	52	1,423	
SI07		1	2	31	6	18	6	1	7	25		4		8	4	113	
SI07(イ4I5)		11	53	90	19	42		2	5	9	13		1	17		262	
SI08		21	24	6		29	4	1	42	73	4	48	1	9	6	268	
SI08・13 (イ5I6 含)		13	17	10	3	26			5	4	1	2	2	2		85	
SI09 (イ5I7 含)	3	15	24	48	5	25			3	3	1	4		2		133	
SI09		3	9	10	6	14		2	1	11	2	2		2		62	
SI09Pit1					2	2	1	1				1				7	
SI09Pit6			1		1	1	1	1	1	4		2				11	
SI09Pit10					1											1	
SI09Pit13			1						1							2	
SI09Pit15		1														1	
SI09pit		1	4	3	9	1	1	1		3	2					25	
SI10(イ2I6)		10	36	52	14	31			3	3	5		4			158	
SI10(イ2I7)		28	98	120	31	105			8	3	6		7	3		409	
SI10(イ3I6)		6	13	50	8	9	1		3	4	1			1		96	
SI10(イ3I7)		15	73	51	16	64					2			1		222	
SI11(イ3I6)			14	23	2	19	2			1	1		3	1		66	
SI11(イ4I6)		30	74	58	21	57			6	4	9			3		262	
SI11(イ4I7)																	
PG1		20	60	45	24	55	1	3	2	4	5			2		221	
SI11								2								2	
SI12(イ6I7)	4	72	73	284	30	141	1	1		76	58	17	10	49	8	824	
SI14		1	4			1		2	2	1		2				13	
SI14(イ6I9)	8	119	224	218	30	162	7	2	15	50	31	27	14	17		924	早期2
SI14(イ6J0)	8	231	354	425	104	304	8	1	38	35	26	31	17	38		1,620	早期1
SI14 斜面					4						1			1		6	
SI15(イ2I5)		15	39	99	14	35		1	3	2	4		1	5		218	
SI15(イ3I5)	1	7	23	108	9	41			3	6	13			9		220	
SI16Pit1			2	3	2		3	5	2	3		1		1		22	
SI16Pit5			2													2	
SI16Pit8			2	3	3	1	5	5	2	12	2	2		2		39	
SI16Pit17		1	2			1	1	1	2		6			2		16	
SI 計	34	1,104	1,990	4,672	865	2,787	1,769	1,203	864	2,222	497	637	99	934	369	20,046	
PG2(イ4I8)	3	23	57	59	6	47			2	3	5		1			206	
PG3(イ5I8)		22	31	23	9	31						2				118	
PG3 (イ5I8 斜面)		2	5	2	1	4						1		2		17	
PG6(イ4J0)	9	144	540	768	190	397	6	11	33	41	61	5	27	57		2,289	
PG6(イ4J1)	10	191	589	1,671	163	484	12	4	46	24	50	5	21	60		3,330	土師1
PG6 (pit)		2	3	11	1	7	2	4	4	9		2		2		47	
PG7 (pit)		2	7	1	1	5	1	2	3	2	2	5	4	8		43	
PG7(イ5J1)		24	36	98	11	66		1			2		4	7		249	
PG8(イ4J2)	31	230	406	1,260	85	309	17	14	55	24	31	17	8	54		2,541	
PG8(P24,25)												2				2	
PG8(イ4J3)	19	22	29	52	5	38			9		2	4	3	1		184	
P G 計	72	662	1,703	3,945	472	1,388	38	36	152	103	155	41	68	191		9,026	
SK1						1										1	
SK7		1														1	
SK17				2						3						5	
SK18												2				2	
SK19						5				2		7				14	
SK25														1		1	
SK26				1	1			2	1	1		1				7	
SK27						1						2				3	

第 10 節 縄紋時代以降の遺物及び補足分

SK28								1		1							2
SK29				1		1	1	2		2		1					8
SK30(イ5J0)				2	1							3					6
SK32						1		2			1		1				5
SK33		8	7			6				4		2					27
SK35		1		5		4		3	3	4		2					22
SK36					1					1							2
SK36B		5	7	20	3	9		8	14	11	1	3		6			87
SK37		1	7	10	3		2		6	3		1		4			37
SK38			1	2			1	1	10	11		1					27
SK42			1													2	3
SK43		1	1			3				1		2					8
SK43			4			1				1							6前期2
SK49		1								1							2
SK57		4	2			4	1		2	3	3	3					22
SK62									1			2					3
SK63									1								1
SK計		22	30	42	9	37	5	17	40	49	5	32	0	12	2		302
SD01		33	38	93	31	61	54	100	33	91	4	57	18	40	30		683
SD02		2	2	3				2	3	14		2	2	5	3		38
SD03		2	2	13	7	2	7	9	6	5		3		6	2		64
SD04	2	48	60	132	24	86	70	64	65	110	6	82	1	41	14		805
SD05		1	6	5		2	4	5	8	13		4		4			52
SD06		13	2	44	8	4	19	36	16	17		7	1	2	3		172
SD07			2		4	4	1	2		3		4		1			21
SD09	2	2		10	1	3		1	2	5		1		1			28
SD10		1	3	8	1		2	7	3			9	8		5		47
SD11		1		1		2								1			5
SD12		9	7	10	16	19	7	11	20	48	2	10	4	11	4		178
SD13		1	5	15	6		8	7	4	1					1		48
SD14				4	1			1	1			1	3				11
SD15A							2					2	1				5
SD15		2	2	3	1		4	1	5	7		3	5		7		40
SD16	1	5	12	16	8	11	12	7	8	17	3	9		3			112
SD計	5	120	141	357	108	194	190	253	174	331	30	196	26	127	57		2,309
78E9																	土師1
79I4		6	17	43	17	42	18	13	14	39	3	13	4	8	5		242
79I5		13	19	55	22	42	16	21	26	80	12	33	3	19	5		366 中近世1, 不明1
79I6		13	29	43	19	19	20	20	18	40	4	21	1	9	3		259 土師1
79I7	2	8	5	85	15	25	25	26	15	38	6	10		13	1		274
イ0I4		11	43	66	37	51	38	24	41	83	10	34		27	4		469 中近世1, 土師1
イ0I5	6	22	40	62	19	52	39	15	58	106	9	31	2	21	7		489
イ0I6		17	32	48	19	55	35	31	29	85	7	34		7	5		404 土師9
イ0I7	3	23	65	153	29	72	137	115	43	198	15	41	6	62	22		984
イ1I1		3	4	11	1	8	4	3	15	8		10		11			78
イ1I2		8		13	1	11	6	4	15	17	2	16		6			99 土師2
イ1I3		10	9	42	5	42	41	8	24	38	6	32		17			274 土師8, 中近世1
イ1I4		14	22	63	25	62	49	31	41	84	4	19	1	31	14		460 土師6
イ1I5		20	34	56	14	49	23	31	47	135	7	43	1	10	20		490 土師6
イ1I6		42	108	300	66	203	306	199	122	389	38	84	4	139	67		2,067 発泡1
イ1I7		26	54	176	28	56	162	122	52	211	12	62	6	65	37		1,069 土師2
イ2I1			1		1	2	1		2	5		2		1			15 中近世1
イ2I2		2		3	2		5	3	2	5		2		3			27
イ2I3		3	12	5	2	5	25	4	6	5	1	6		6	4		84 土師1, 中近世2
イ2I4		5	15	22	4	13	11	15	13	22		5		12	3		140
イ2I5		22	50	148	14	45	118	102	52	114	13	23	1	50	21		773 バレット?
イ2I6		10	55	75	14	42	49	89	50	132	19	37	3	30	34		639 土師1
イ2I7		38	117	194	34	138	94	121	104	229	21	86	7	49	38		1,270
イ3I1		1						1		3							5
イ3I2				3			3		2	1	1	2					12
イ3I3	2		1	2			11	1		5		1		3			26
イ3I4	1	1	2	12	2	14	12	6	5	11				9			75 土師2
イ3I5	1	8	28	132	9	59	76	51	60	152	22	22		53	13		686
イ3I6	1	8	40	67	16	43	65	39	28	115	11	31	3	30	27		524
イ3I7		22	99	55	27	94	66	50	41	69	7	51		29	15		625 土師1
イ3F上層		1															1

第3章 刈沼遺跡1次調査区の遺構と遺跡

f 411			1						1								2	
f 412										2	1	1		1			5	
f 413			3	1		1	1	1		2				1		10	中近世1	
f 414		3	15	38	2	16	36	20	10	27	5	10		16	3	201	中近世2	
f 415		11	71	107	20	47	90	30	64	163	22	26	1	62	13	727		
f 416		41	87	78	22	80	112	38	96	154	22	75		59	14	878		
f 417	2	29	78	69	24	83	66	53	77	117	15	48		26	20	707		
f 418	3	29	71	77	6	69	58	104	51	89	9	55	1	18	37	677	中近世1	
f 419	4	38	175	423	51	141	266	531	175	348	37	89	5	157	63	2,503		
f 4J0	7	195	705	1,915	209	638	988	1,854	943	1,827	251	279	24	819	209	10,863	中土師5	
f 4J0(Pit計)		1	4	5	1	4	5	4	5	8		4		6	1	48		
f 4J1	8	245	753	2,080	176	693	1,347	3,178	970	1,376	240	332	21	895	163	12,477	古墳~中世9	
f 4J1(Pit)		1	2	6		3	2	8	7	120				3		155		
f 4J2	19	311	579	1,648	99	581	1,037	2,379	786	1,250	122	351	3	669	130	9,964	中近世2	
f 4J3		27	39	70	5	46	24	59	68	67	7	58	3	31	11	515		
f 4J4		3	10	17	2	6	12	5	8	11	4	3		5		86		
f 5I2							1	1	1	3	1	3				10		
f 5I3		2	1	3		4			1	6		7				24		
f 5I4				1			3		1	2						7	中近世2	
f 5I5	1		2	6	2	3	7		3	1	1	2		5		33		
f 5I6		14	21	17	5	29	11	10	19	29	4	30		2		191		
f 5I7	3	19	28	58	7	33	51	23	29	30	2	28		13	1	325		
f 5I8		31	44	28	10	44	28	29	45	48	2	40	0	12	5	366	弥~土師3	
f 5I9	1	56	117	317	33	152	430	318	126	242	52	46	11	129	19	2,049	土師1	
f 5J0	3	40	50	104	18	104	71	93	68	171	4	47	4	43	18	838		
f 5JPit		1				1		1	2	4		2		1	2	14	中近世3	
f 5J1		29	52	135	11	84	93	116	44	187	9	35	4	69	18	886		
f 5J1Pit		2	6	1	1	5	1	1	3	2		5		1	2	30		
f 5J2		27	48	127	9	46	68	85	49	139	7	43		37	15	700		
f 5J3		1		1						1						3		
f 5J5			1						1							2		
f 5J6				1								1				2		
f 5J7						2								1		3		
f 6I2								1	1			1				3		
f 6I4									1							1		
f 6I5			2			3	3					2				10		
f 6I6	1	4	9	13		12	14	15	17	17		14		7		123		
f 6I7	4	76	188	449	36	195	140	117	213	514	132	174	10	205	30	2,483	土師1, 中近世8	
f 6I8	4	70	92	117	15	73	32	45	96	120	14	114	1	32	2	827	中近世1	
f 6I9	3	141	302	299	33	242	117	101	290	427	63	275	13	117	14	2,437	早期2, 土師3, 中近世2	
f 6J0	8	287	464	543	111	418	283	213	675	770	102	509	12	295	15	4,705	早期1	
f 6J1	3	130	231	514	87	404	304	86	325	469	112	335	7	203	26	3,236	中近世1, 漆付き1点はバレット	
f 6J2	1	20	52	153	20	72	153	92	81	83	21	58	3	43	5	857		
f 6J4				4		1	3	5	1	4		2		1		21		
f 6J5			4	3	2	4	8	11	3	9		4		2		50	中近世1	
f 6J6				2	1	2	1	1		1		1		2		11		
f 6J7				1				2	1							4		
f 6J8								2	3			2				7		
f 6J9								1	1							2		
f 6KO						3										3		
f 7I2		3	6			7		2	2	3	3					26	前期3, 土師1	
f 7I3		2	10		1	4		2	4					1		24	前期1	
f 7I6						1	1		1	2						5		
f 7I7		3	2	5		1	5	4	4	10		4		1		39		
f 7I8	5	14	5	6	1	5	6	4	6	7		6		2	5	72	前期1	
f 7I9	3	27	30	66	9	44	20	41	61	99	8	67		37	8	520		
f 7J0	2	47	70	194	22	148	198	67	156	261	75	84	1	94	6	1,425	中近世1	
f 7J1		18	30	106	12	56	57	17	45	146	21	38	1	46	7	600		
f 7J4			1				3	4	1	6						15		
f 7J6			1			2		3		5		1				12		
f 7J7							2		1			1		1		5		
f 7J8		1		1		1		1		2						6		
f 7J9		1	1			2			1	1						6		
f 7KO			2													2		
f 8I5				1										1		2		
f 8I6				7	1	1	2	14	5	16	1	3		4		54		
f 8I7			1					4								5		
f 8I8		2		8	1	2	2	4	2	2		1				24		

第 10 節 縄紋時代以降の遺物及び補足分

イ8I9		4	5	2	1	6	24	17	3	13		4		2	4	85	中近世 1	
イ8J0	3	3	4	19		9	16	7	4	10		1		5		81		
イ8J6									1							1		
イ8J7					1	1										2		
イ8J8		1		1		2					1	1				6		
イ8J9						1						2				3		
イ8K0			2									1				3		
イ9I4				1				4	1							6		
イ9I5				1				1								2		
イ9I6			2	2		5	1	8	2	5		4				29		
イ9I7			1	2		1			1	3				3		11		
イ9I8		2	1	1		2	1	3	2	2		3		1		18		
イ9I9		4	1			2	3			2				1		13		
イ9J7		2	4	1		7				2		2				18		
イ9J8		2	16		1	7			1	2		2				31		
イ9J9			2													2		
イ9K0		2	5			2	1		1			1				12		
ウ0I6				3			1	2								6		
ウ0I7				1			1	1								3		
ウ0I8	1						1									2		
ウ0J8		1	1													2		
ウ0K0			1			1										2		
ウ1I7							1	2	1				3			7		
グリップ計	105	2,380	5,412	11,793	1,510	5,908	7,667	10,977	6,592	11,868	1,600	4,098	167	4,906	1,211	76,194		
T1		35	37	146	20	64	82	126	70	146	5	37		48	24	840	中近世 3	
T2	6	51	93	178	23	101	110	200	76	134	16	55		64	28	1,135		
T3	3	27	60	106	18	86	62	84	51	222	13	60	4	39	29	864	中近世 2	
T3(土手)	2	17	4	12	2	9	4	2	2	6	1	9		1		71		
T4		14	22	35	5	40	13	51	15	71	5	18		11	9	309	弥生?1	
T6	2															2		
T7				1		2										3		
T8													1			1		
T9						1		1								2		
T12													1			1		
T203				1												1		
SecT1		2	6	13	13	7	2	7	12			8		1		71		
SecT2		6	8	30	12	11	16	40	7	32		8		6	5	181		
SecT3		2	17	78	18	12	26	128	32	17		13	2	3	10	358		
SecT3,T4-T3		6	2	9	20	8	1	3	3		7	2	4	39	5	109		
SecT4		10	6	45	11	15	30	86	22	19	1	10		4		259		
SecT5		16	15	131	9	31	71	205	39	73	11	21	6	35	24	687		
SecT6	2	17	20	118	22	20	63	169	26	64	1	16	4	40	10	592	中近世 1. かわらけ 1 土師 1.	
SecT7		7	12	90	24	19	21	34	52	67	4	16		32	15	393	古墳前期 1	
2区 E,T1	3	32	93	216	11	96	128	62	89	173	34	66		90	4	1,097	中近世 1	
2区 E,T2	3	16	18	22	5	42	18	6	33	55	4	25		9	1	257		
2区 E,T3	11	17	23	34	3	26	10	11	39	28	3	29		14		248	土師中近世 2	
2区 E,T4			4	10	3	5	1	2	8	10		1		2	3	49		
2区 E,T5				2	3	1		1	1	1						9		
窪地	4	12	33	122	30	30	2	1	5	13	8	12	5	11		288		
北ブロック	14	33	47	93	44	48	2		4	15	5	3	9	9		326	内耳 1	
北東ブロック	1	1	3	7	1	9						1		2		25		
東ブロック	11	59	55	117	34	86	3		13	7	6	11	8	9		419		
東ブロック																		
イ5J0 ピット		1				1			1					1		4		
北ゾーン	9	22	36	77	23	65	4	2	4	29	54	2	1	8		336	前期 4, 中世 2, 土師 3	
東ゾーン	9	44	42	156	29	79	2		14	13	14	9	2	24		437		
南ゾーン		3	16	6	1	9								2		37		
1区表採		1	10	9	3	3	9	15	3	21	1	9		1		85		
2区 E, 最終層		2	1				1	2	1							7		
2区 N, 表採		2	1	3		2	3	2	3	1		3		1		21		
2区, 表採		1	4	7	2	4		8	2	4	2	3		1		38	中近世 1	
南西 2区			2	7	1	2	2	10	4	9		4		5		46		
3区表採			1	3				1		1					1	7		
表採		3	8	49	3	15	23	32	18	19	2	12		15	1	200		
トレンチ等計	80	459	699	1,933	393	949	709	1,291	649	1,250	197	465	45	527	169	9,815		

第3章 刈沼遺跡 1次調査区の遺構と遺跡

第3表 刈沼遺跡第1次遺構一覧表

遺構No.	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	軸	遺物の有無	備考	遺構図 版	遺物土器図 版	写真 図版
SI01	イ5I9.1I0	10.2	7.8	0.22	N-26° -W	石鏃 剥片石器 スクレーパー 石錘 打製石斧 磨製石斧 礫器 石棒 磨石 石皿 石製垂飾 骨	SI01 → SD01	16.17	18 ~ 36	3
SI02	イ5I0.1I, イ6I0.1I	6.46	3.2	0.36	N-0°	石鏃 剥片石器 打製石斧 磨製 石斧 石錘 礫器 石棒 石製垂 飾 磨石 石皿	SI02 → SD04	37.38	39 ~ 60	
SI03a	イ1I6.17	6.45	5.9	0.48	N-25° -E	石鏃 剥片石器 スクレーパー 石錘 打製石斧 磨製石斧 礫器 石棒 石製垂飾 磨石 石皿 砥 石	炉跡 2基	61 ~ 63	85 ~ 80	3
SI03b	イ1I6.17	9.95	8.92	0.56	N-25° -E					3
SI04	イ0I4.15	(3.57)	(2.78)	0.23	N-66° -E	剥片石器 磨製石斧 磨石 石皿	TSなし	81	83 ~ 85	3
SI05	イ0I7	7.1	6.9	0.38	—	石鏃 剥片石器 スクレーパー 石錘 打製石斧 磨製石斧 礫器 石棒 磨石 石皿 砥石 岩版	SD13 → SI05?	86.87	89 ~ 93	
SI06	イ2I5.16, イ3I5.16	8.21	7.42	0.25	N-36° -E	磨製石斧 石皿 石錘 磨製石斧 石鏃 石棒	ピット多数	94.95	97 ~ 105	
SI07	イ4I4.15	7.94	6.36	0.16	N-39° -E	石鏃 スクレーパー 石錘 打製 石斧 磨製石斧 石棒 磨石 石 皿	SK36 入口?	106.107	109 ~ 112	3
SI08	イ5I6	(4.4)	3.52	0.42	N-54° -E	打製石斧 石鏃 礫器 磨石 石 皿	SI13と重複、 08 → 13	113.114	115 ~ 117	3.4
SI09	イ5I7	2.78	(2.68)	0.1	N-11° -W	剥片石器 スクレーパー 打製石 斧 磨製石斧 磨石 石皿		118	119 ~ 121	4
SI10	イ2I6, イ3I6	10.9	9.9	—	N-3° -W	グリッドからは打製石斧、石錘、 石剣類、磨石類など	計測値は推定第一 案、南側カクラン 多数	122.123	124 ~ 126	
SI11	イ4I6.17	7.83	6.65	0.42	N-16° -W	グリッドからは打製石斧、石錘、 石剣類、磨石類など	掘り込みは一部の み	127.128	129 ~ 131	4
SI12	イ5I7, イ6I7	5.52	5.35			グリッドからは打製石斧 1+4, 磨 製石斧 4, 石錘、磨石類など	掘り込み・覆土不 明	132	133 ~ 144	4
SI13	イ5I6	5.25	4.39	0.42	N-21° -W		SI08と重複 08 → 13	113.114	115 ~ 117	3.4
SI14	イ5J9, イ6I9, Ⅰ 5J0, Ⅰ6J0	11.18	8.2	0.42	N-2° -E	グリッドからは打製石斧 1+4, 磨 製石斧 4, 石錘、磨石類など	プランA推定を計 測	145.146	147 ~ 174	
SI15	イ2I5, イ3I5	6.6	5.65		N-45° -E	グリッドからは打製石斧 1+4, 磨 製石斧 4, 石錘、磨石類など	ピット多数、深さ 不明	175	100 ~ 103	
SI16						土器片・打製石斧	遺構図なし、遺物 のみ、欠番			
ピット群 1	イ4I7, イ5I7	8	6.9		N-16° -E		第一案の計測値	176.177		
ピット群 2	イ4I7.18	9.1	8.9		N-27° -E		第一案の計測値	178	179	
ピット群 3	イ4I8.19, イ5I8.19	11	7.4		N-39° -E		第一案の計測値	180	181	
ピット群 4	イ4J0.J1, イ5J0.J1	15	13.5		N-19° -E		第一案の計測値	182.183	184 ~ 198	
ピット群 5	イ5J1.J2	8.0	8.0		N-6° -W			199.2	198	
ピット群 6	イ4J2.J3	5.3	3.1		N-70° -E		掘立柱建物跡 1×3間の復元案	201	202 ~ 205	
ピット群 7	イ6J1, イ7J1	7.4	2.8		N-90°		掘立柱建物跡 1×3間の復元案	206		
SK01	Ⅰ6J4	1.13	0.96	0.23		土器片、礫		209		
SK02	Ⅰ6J4	0.43	0.42	0.15				209		
SK03	Ⅰ6J4	0.81	0.54	0.24				209		
SK04	Ⅰ7J4	2.64	1.72	0.19				209		
SK05	Ⅰ7J4	(0.95)	0.78	0.17				209		
SK06	Ⅰ7J4	0.9	0.73	0.22				209		
SK07	Ⅰ9J8	3.72	(3.4)	0.57		土器片、礫		211		
SK08	Ⅰ0J8	3.21	2.31	0.38				211		
SK09	Ⅰ8J9	1.6	1.38	0.19				212		
SK10	Ⅰ7J9	1.03	0.99	0.22				212		
SK11	Ⅰ7J9	2.28	1.94	0.44				212		
SK12	Ⅰ8J6	1.5	1.3	0.28				211		
SK13a	Ⅰ8J6	2.06	1.62	0.21		磨石		211		
SK13b	Ⅰ8J6	2.63	1.76	0.34				211		
SK14	Ⅰ9J9	3.32	2.49	0.75				214		
SK15	Ⅰ7J6	2.39	2.38	0.39				215		
SK16	Ⅰ7J6	3.46	2.69	0.65				215		
SK17	Ⅰ6J6	5.32	4.9	0.38		土器片、礫		217		
SK18	Ⅰ9J8	3.4	3.16	0.28		土器片、礫		214	227	
SK19	Ⅰ8J9	2.94	2.75	0.38		土器片、礫		212	227	
SK20	Ⅰ6J7	1.4	1.51	0.36		石皿		217		

第 10 節 縄紋時代以降の遺物及び補足分

SK21	イ 6J7	5.92	4.16	0.16				217		
SK22	イ 6J6	3.65	2.11	0.54				217		
SK23	イ 6J6	2.46	2.0	0.37				217		
SK24	イ 5J6	3.15	1.36	0.26				218		
SK25	イ 5J6	2.46	1.8	0.27		土器片		218	227	
SK26a	イ 6J5	(6.67)	5.62	0.26		土器片、礫	a ~ c3 基重複	220	227	
SK27	イ 5J0	0.94	0.88	0.48		土器片、礫		213		
SK28	イ 5J0	0.58	0.47	0.34		土器片、礫		213		
SK29	イ 5J0	0.78	0.72	0.56		土器片、礫		213	227	
SK30 a	イ 5J0	(0.44)	(0.3)	0.14		土器片、礫		213		
SK31		—	—	—			欠番			
SK32	イ 5J0	2.26	2.22	0.38		磨石	遺物平面図のみ	210	227	4
SK33	イ 6J1	1.37	0.94	0.29		磨石 石皿		214	227	
SK34	イ 2I1	(2.84)	0.92	0.39				214		
SK35	イ 4J1	2.18	1.26	0.56		土器片、礫		221	227	
SK35A 東の土坑	イ 4J1	0.89	(0.78)	0.38				221		
SK35B	イ 6J4	1.88	1.86				深さ不明	209		
SK36A	イ 4I5	1.78	1.4	0.05			セクション図なし	222	227	
SK36B	イ 4J1	3.2	2.7	0.23		磨石		221		
SK37A	イ 3J5	2.09	1.84	0.29		礫		222	227	
SK37B 北	イ 4J1	1.2	1.07	0.17		磨石		226		
SK37B 南	イ 4J1	1.48	(0.78)	0.1				226		
SK38	イ 4J1	1.44	1.16	0.21		石棒		226		
SK43	イ 1J3	(1.25)	1.21	0.31		土器片、礫		226	227	4
SK46	イ 4I6	1.87	1.07	0.5				223		
SK47	イ 4I6	1.02	0.78	0.21				223		
SK48	イ 6J0	0.87	0.75	0.24		石鏃		226		4
SK49	イ 8I8	3.18	1.84	0.35		土器片、礫		226	228	4
SK50	イ 8I9	2.16	1.54	0.2				226		4
SK51	イ 7I8	2.34	1.88	0.23				225		4
SK52	イ 6I8	1.84	1.26	0.32				225		
SK53	イ 7I9	1.63	1.46	0.24				219		4
SK54	イ 7J0	2.53	1.47	0.34				226		4
SK55	イ 7I9	1.68	1.2	0.38				219		4
SK56	イ 7I9	1.32	0.99	0.32				219		4
SK57	イ 6I8	2.11	(1.78)	0.28		礫		228	228	
SK58	イ 7I8	1.23	(1.22)	0.2				225		4
SK59	イ 6I9	1.46	1.44	0.39				216		4
SK60	イ 6I9	1.86	1.64	0.23				216		4
SK61	イ 6I8	1.1	0.82	0.57				225		4
SK62	イ 7J1	5.37	3.03	0.74		磨石		210		
SK63	イ 6J0	1.59	1.12	0.48				224		
SK64	イ 6J0	1.18	0.94	0.59				224		4

SDNo.	グリッド	長さ (m)	上幅 (m)	深さ (m)	軸	備考	遺構図版	遺物土器図版	写真図版
SD-01	イ 4I9、イ 5J0 ~ J3	94	0.76 ~ 1.68	0.35 ~ 0.60	N-4° -W	43 + 51 m	229,230, 231		
SD-02A	イ 4J0	2.16	0.78	0.08	N-75° -E		232		
SD-02B	イ 8K0	14.1	0.36 ~ 1.02	0.24	N-2° -W		232		
SD-03	イ 5J2	12.4	0.40 ~ 1.44	0.16	N-59° -E		230		
SD-03 b	イ 5J2	5	0.7 ~ 0.8	0.1	N-62° -E		230		
SD-04	イ 1 ~ イ 6I2 ~ J2	146	0.62 ~ 1.48	0.43 ~ 0.92	N-3° -W		229,230, 234,235,236		6
SD-05	イ 5I8 ~ J0	23.5	0.38 ~ 0.55	0.17			229,235		
SD-06	イ 4J2	14.2	0.56 ~ 0.88	0.2	N-82° -E		230,237		
SD-07	イ 4J4	6	1.05 ~ 1.18	0.57			230,233		
SD-08	イ 4I8、 イ 5I8	15	0.73 ~ 1.06	0.4	N-90°		237		
SD-09	イ 3 ~ 5I11 ~ I8	109	0.88 ~ 2.28	0.24 ~ 0.54	N-70° -W N-5° -W		238,239,240		6
SD-11	イ 0I4、イ 1I4	15.5	1.02 ~ 1.84	0.25 ~ 0.54	N-89° -W		241		
SD-12	イ 0I4 ~ I6	28	0.7 ~ 1.60	0.30 ~ 0.75	N-0°		241		
SD-13	イ 4I7	9	0.8 ~ 1.40	0.28 ~ 0.35	N-40° -W		242		
SD-14	イ 0I1 ~ I4	43	0.70 ~ 1.40	0.30 ~ 0.48	N-89° -W N-3° -W		236,238		
SD-15	イ 4I4 ~ I6	22	1.73 ~ 2.10	0.43 ~ 0.90	N-1° -W		235,236		
SD-16	イ 5I4 ~ I6	14	0.64 ~ 1.00	0.33 ~ 0.43	N-4° -W		236		6
SD-17	イ 0H5.H6	19.6	0.52 ~ 1.20	0.1	N-1° -E		241		
SD-18	イ 1I7、イ 2I7	24	0.90 ~ 1.22	0.10 ~ 0.25	N-82° -E		243		

栃木県埋蔵文化財調査報告第 388 集

刈沼遺跡・刈沼向原遺跡

—宇都宮テクノポリスセンター地区開発に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発 行 栃木県教育委員会

宇都宮市塙田 1-1-20

T E L 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町 1-8

T E L 028 (643) 1011

編 集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

T E L 0285 (44) 8441

発行日 平成 29 年 3 月 31 日発行

印 刷 下野印刷株式会社
